

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 調査の概要と基本土層

調査の概要

峰高前遺跡は北関東自動車道建設に伴う所在調査により発見された新発見の遺跡である。今回の調査や二宮町教育委員会の調査（安永 2006）、二宮町史編さん室による遺跡分布調査の成果から、遺跡は第2図に示した範囲で、面積は約10万m²と推定される。ただし、遺跡範囲内のほとんどは水田であるため、地表面から旧地形を想定することは困難である。今回の調査範囲は遺跡範囲の約1/6にあたる1万5千m²程度だが、遺跡のほぼ中心を調査したものと考えられる。今回の調査では、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴住居群が、埋没谷を挟んだ南北2カ所で確認されている。この竪穴住居群は遺跡の中心をなす遺構群であると考えられるが、調査区南側で確認された低地の中でも竪穴住居跡1軒（SI-1305）が確認されていることから、今回見つかった遺構群とは別に、調査区の南東にも同じような遺構群が存在する可能性がある。

発見された遺構のうち、古墳時代から平安時代にかけてのものは竪穴住居跡104軒、掘立柱建物跡16棟、円形周溝遺構1基、井戸状遺構55基、土坑9基、ピット状遺構2基などである。竪穴住居跡は、古墳時代前期6軒・古墳時代後期49軒・奈良・平安時代30軒、時期不明19軒で、古墳時代後期の住居跡群が圧倒的に多い。時期によって、住居群がどちらかの台地に完全に集約されるといった様相は見られない。しかし、掘立柱建物跡や井戸状遺構など、遺構によっては南側の遺構群にしか見られないものもある。

中世・近世の遺構は、溝状遺構27条、井戸・円筒形土坑7基、土坑4基などが確認された。また、時期不明とした土坑やピット状遺構の多くが、この時期に作られたものである可能性が高い。しかし、それらの遺構からは遺物がほとんど出土しなかつたため、積極的な時期比定は行わず、第4節時期不明の遺構で扱った。遺跡の北東には、中世城館として知られる峰高城の推定地があることから、調査前にはこれに関わる遺構が発見されることが期待された。実際に、調査では峰高城推定範囲に向かってのびる溝状遺構（SD-101・600）が発見され、出土遺物から峰高城が存在したとされる天正年間まで遡ると考えられる。しかし、峰高城自体がすでに湮滅し詳細が明らかでないため、今回の調査で発見された同時代の遺構群が城に関わるものか否かは、今回の調査成果のみでは判断できない。

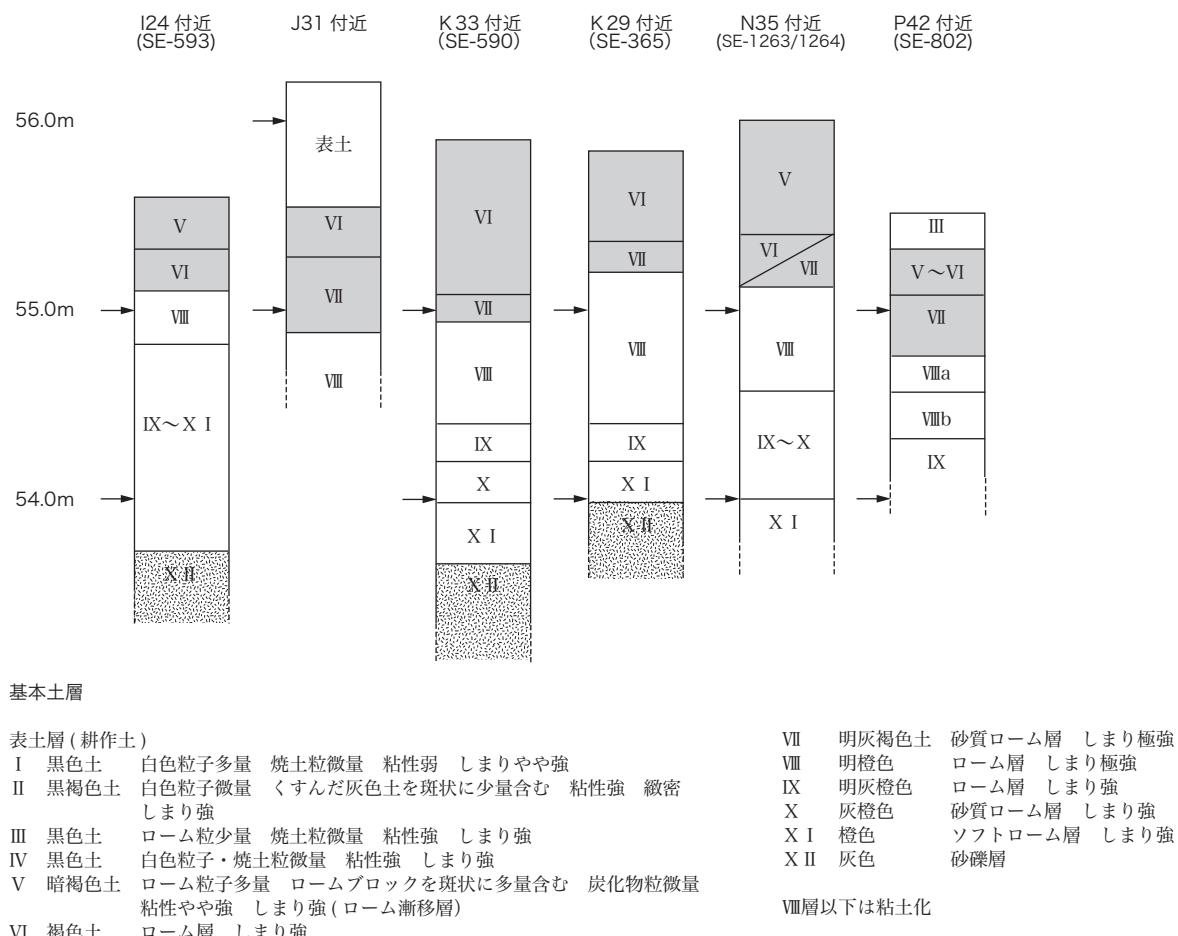
遺物は遺構内外から、遺物収納中箱に換算して約150箱分出土した。古墳時代から平安時代の土師器・須恵器がそのほとんどを占めており、その他の時期の遺物は極めて少ない。土器以外の出土遺物としては金属製品や石製品・土製品がある。金属製品は竪穴住居跡から出土しているものが大半で、その中でも鎌が多いが、低地の中に遺存していたためか錆化が著しい。他に、SI-1018竪穴住居跡の覆土中からは耳環が出土している。石製品の大半は砥石だが、竪穴住居跡からは白玉や双孔円盤が出土している。土製品は数が少なく、土玉、匙状土製品などが出土している。また、土器製作時の副産物である焼成粘土塊が多く出土しているのが特徴である。

基本土層

峰高前遺跡の基本土層は、井戸状遺構の断ち割り調査により確認した。台地部分では、耕作土直下に黒ボク土の底面（IV層）またはロームとの漸移層（V層）が認められた。遺構の存在は黒ボク土中でも確認で

きるが、プランははつきりしない。ローム漸移層中ではかなりはつきりと確認できるが、この時点で堅穴住居の床面までは平均20cm程度しか残っていなかった。よって、当時の生活面はより上面に築かれており、耕作に伴って削平されたと考えられる。V層から下位には褐色のローム層（VI層）が堆積している。VI層は遺跡の地点ごとに堆積の厚さが大幅に異なっている。平成13年度調査区の中心となるK33グリッド付近で約80cmと最も厚く堆積し、平成14年度調査区のP42グリッド付近では約20cmと薄くなっている。VI層の下には明灰褐色の砂質ローム層（VII層）が堆積している。厚さは10～30cm程度で著しく硬いため、堅穴住居跡の床面はこの層よりも上に構築されている。VIII層は非常に硬くしまった明橙色のローム層である。おそらくVI層がソフトローム層、VII層・VIII層がハードローム層に対応すると考えられるが、近辺に位置する市ノ塚遺跡と比較して、その差ははつきりとしない。また、暗色帯に相当する土層も確認できなかった。IX層以下は粘土化が進んだローム層が堆積している。基本的には明橙色を呈するが、部分的に明灰橙色の部分が帶状に確認されている。IX層以下は一部で層序の逆転や、はつきりと層が分かれない部分があることから、土壤の由来の差による変化というよりは水被による色調の変化であろう。X II層は段丘礫層である。礫層の標高は53.8m～54.0mで、市ノ塚遺跡と比較して約1mほど低い。

調査区内の埋没谷（低地A）と調査区北西の低地（低地B）でも基本土層を確認した。低地Aの下部にはローム漸移層およびローム層が堆積していたが、低地Bでは黒色土の下にX層以下の粘土化したローム層が堆積していた（第5節低地の調査参照）。



第8図 台地部分の基本土層 (S=1/40)

第3章 発見された遺構と遺物



第9図 古墳～平安時代の遺構 (S=1/1,000)

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

(1) 穴居跡

今回の調査で発見された穴居跡 104 軒は、調査区中央の埋没谷（低地 A）を挟んで大きく北側の住居群と南側の住居群に分けられる。どちらも低地内に島状に残された低台地上に構築されており、台地中央部では住居跡同士の切り合いが著しい。重複する住居跡は概ね南側が古く、北側が新しい。また、同一住区内での建て替えや拡張が行われている住居も多い。

古墳時代後期から平安時代では、時期別に大きく分布が異なるという様相は見られないが、6世紀代の住居跡は北側、7世紀以降の住居跡は南側の遺構群に多く含まれる。また、古墳時代前期の住居跡は北側低台地の縁辺部にまとまって構築されている。確認された掘立柱建物跡および井戸状遺構はいずれも南側の低台地に構築されている。

SI-01 (第 10・11 図・図版五・四二)

位置 K22 グリッド内で確認した。

規模・形状 東西 4 m、南北 4.1 m のほぼ正方形である。各隅はほぼ直角方向に掘り込まれている。東西辺は中央でやや膨らんでいる。南北の主軸方向は N-7°-E である。

覆土 焼土・炭化物を多く含む黒褐色土を主体とする。

壁 確認面より約 30cm の深さで、なだらかに立ち上がる。黒色土中から掘り込まれているため上面でのプラン確認は困難で、特に南西隅は不明瞭であった。北西隅は大きな倒木痕が確認され、断面観察の結果住居よりも古いものと判断した。壁溝はない。

床面・貼床 黒色土とローム土の漸移層中に構築される。黒色土で貼床を施しているが、全体的に硬化はしていない。床面は凹凸が目立ち、平坦ではない。

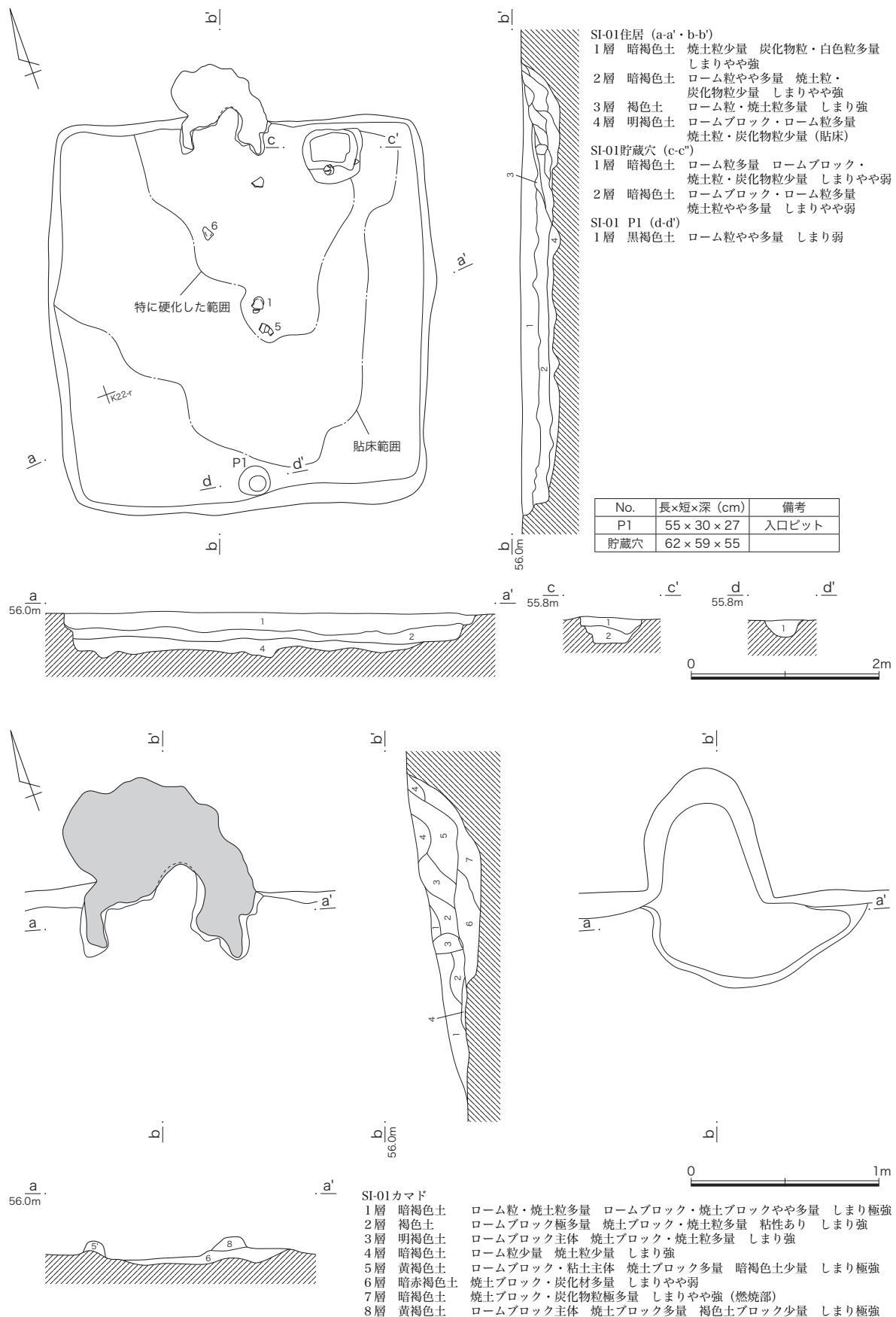
掘方 床面からの深さは 5 ~ 10cm で、全体的に凹凸が目立つ。

入り口ピット 南壁中央寄りに直径 30cm、深さ 15cm の小ピット (P1) が確認された。覆土は黒褐色土を主体とし、しまりは弱い。

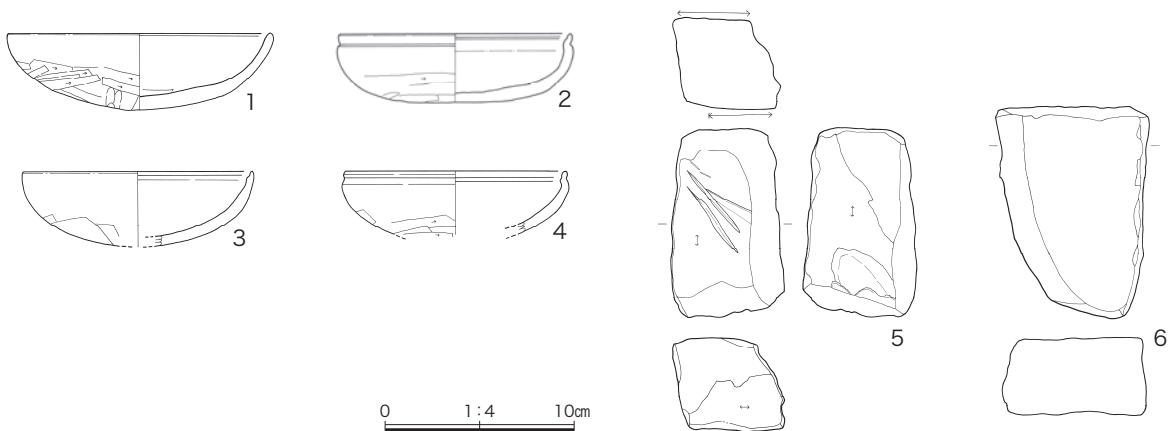
火処 北壁中央にカマドが構築されている。両側の袖と煙道が残っているが、袖部分は非常に残りが悪い。袖は地山を馬の背状に掘り残した上に、ローム土に近い黄褐色粘土を貼り付けて構築している。袖心として地山を掘り残す構築方法は、峰高前遺跡で多く見られる手法である。カマド周辺には構築材と考えられる粘土が多く堆積している。カマド内部にも粘土が堆積しており、その下には焼土ブロックや炭化材を多く含む暗褐色土が堆積している。カマド 7 層上面で焼けた硬化面が確認されていることから、7 層及び 6 層が燃焼部であると考えられる。カマド焚き口には浅い掘り込みがあるが、その底面 (6・7 層下) では明確な火床面は確認できなかった。煙道の立ち上がりは急で、奥壁部分はよく焼けて硬化している。

貯蔵穴 上面では南側がなだらかに立ち上がる不整の長楕円形を呈するが、底面の形状から隅丸長方形であったと考えられる。上面での規模は長辺 60cm、短辺 55cm である。覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土を主体とする。上面で土器片が数点確認されたが、復元できるものではなかった。

遺物 覆土中から土器片が少量出土している。床面に伴う遺物はなく、復元できる遺物も少ない。



第10図 SI-01 積穴住居跡



第11図 SI-01出土遺物

第5表 SI-01 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 13.8 高 4.0 (残) 7/8	(内) ヨコナデ 底近くケズリ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ	白色粒子・砂粒やや多 二次被熱 2.5YR4/6 赤褐	下層 No.1
2 土師器 壺	口 (12.2) 高 3.6 (残) 6/8	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面漆仕上げ？(口縁部外面に残存) (残) 6/8	微細白色粒子・雲母少 良 7.5YR4/3	覆土
3 土師器 壺	口 12.0 高 (3.9) (残) 3/8	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 摩滅強 (残) 3/8	白色粒子やや多・雲母少 二次被熱 5YR6/8 橙	覆土
4 土師器 壺	口 (11.4) 高 (3.3) (残) 3/8	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 (残) 3/8	微細白色粒多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土
5 石製品 砥石	長 [10.0] 幅 [5.1] 厚 4.8 重 422.27	3面使用 表面上に断面三角状の刃潰し痕 使用痕やや弱い	5GY6/1 オリーブ灰	下層 No.6
6 礫	長 [11.1] 幅 [8.1] 厚 4.2 重 641.20	断面方形の盤状 3面に擦痕有り	2.5Y5/2 暗灰黄 砂岩	下層 No.5

SI-02 (第12～14図・図版五・四二)

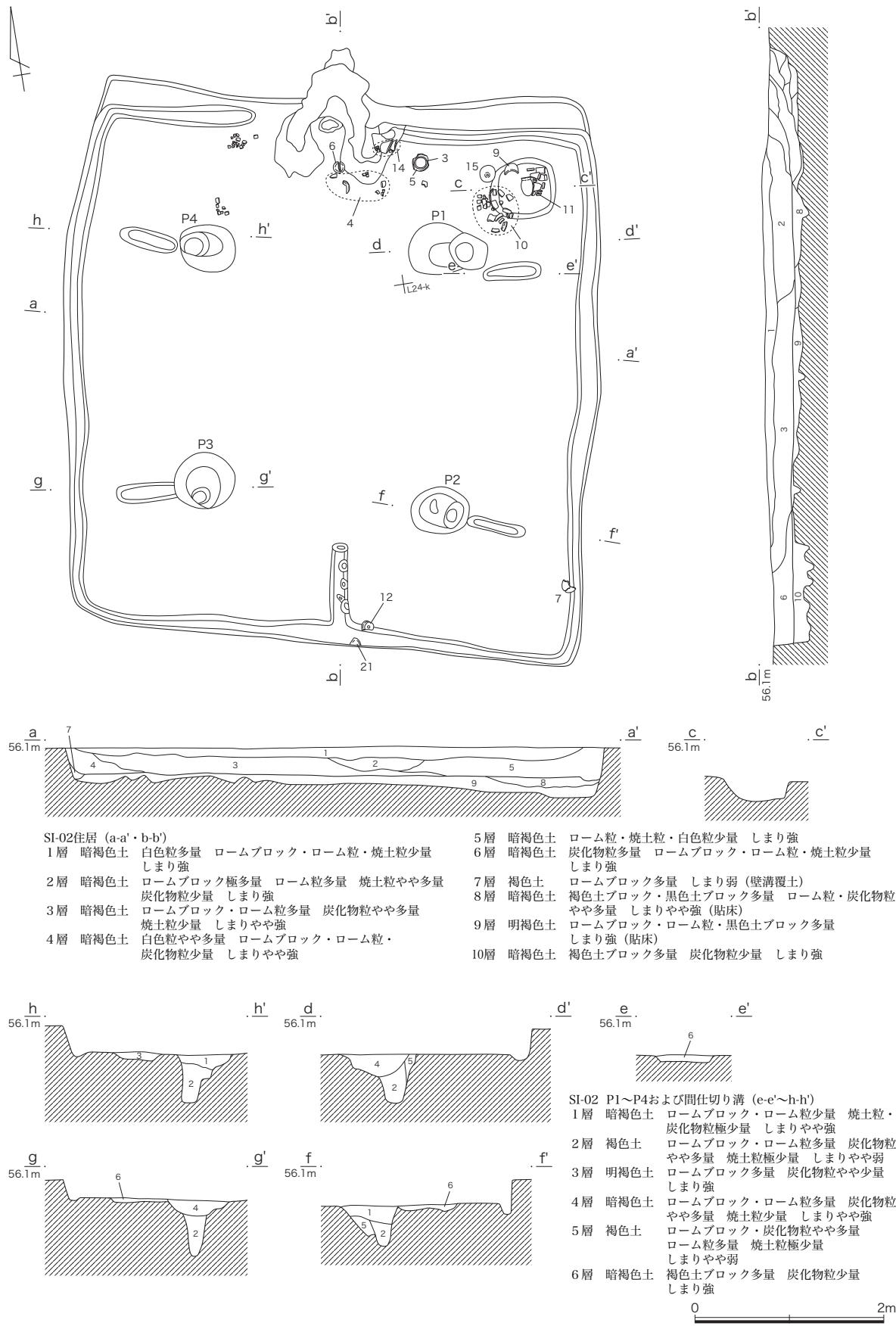
位置 K24 グリッドに位置する。住居東側は低地 A の落ち際となる。

重複関係 SI-03・SI-44 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-44（旧）→ SI-03 → SI-02（新）である。

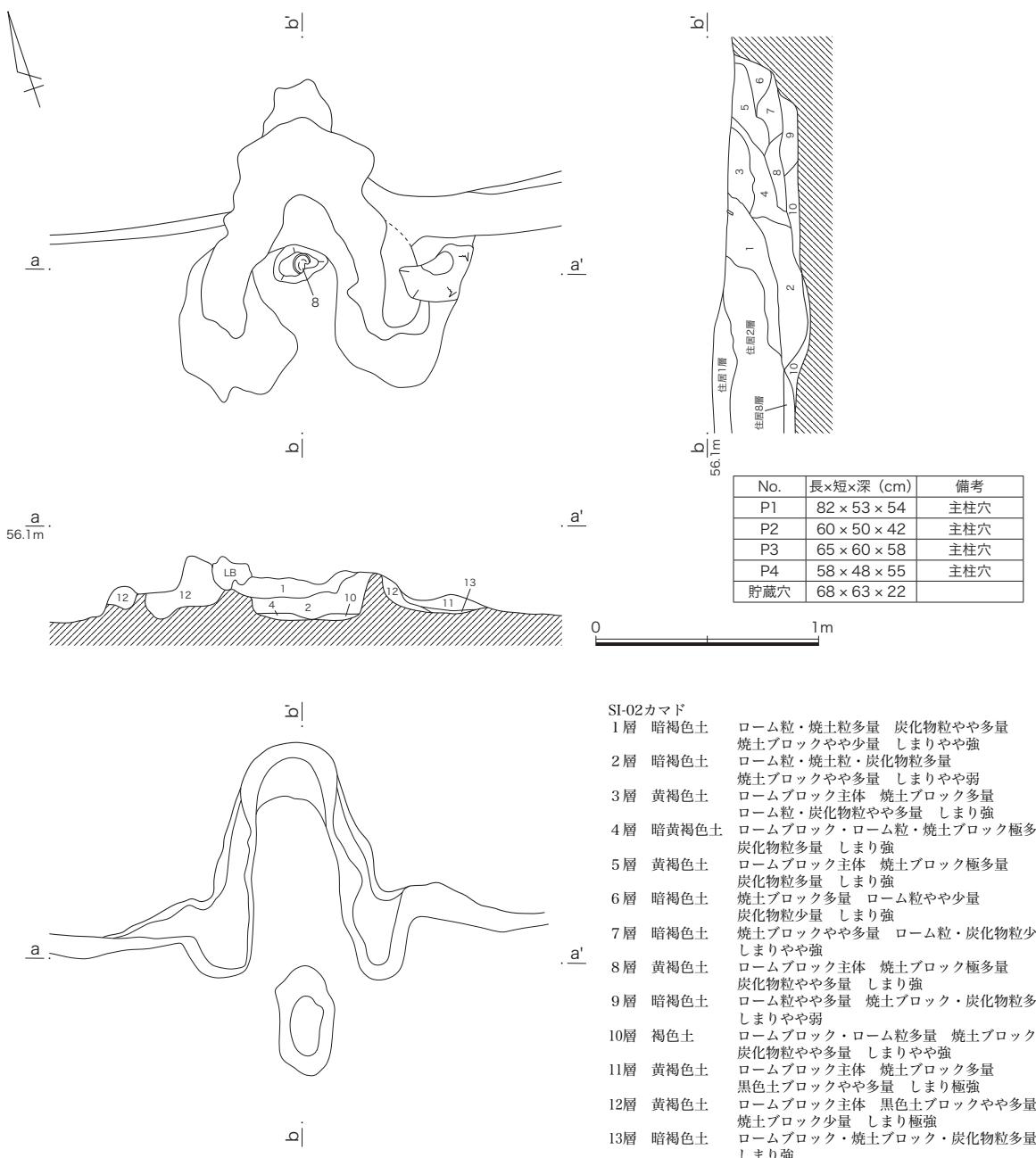
規模・形状 東西 5.6m、南北 5.8 m のほぼ正方形である。各隅はほぼ直角に掘り込まれるが、北西隅がやや鋭角になる。東西壁は中央でやや膨らんでいる。主軸方向は N - 9° - E である。

覆土 ロームブロック・ローム粒を多く含む暗褐色土が主体だが、低地の落ち際となる東側では地山が黒色土となるためか、ローム粒が少ない覆土が堆積している。覆土上層には微細な白色粒子が多く含まれている。

壁・壁溝 確認面より約 45cm の深さで、ほぼ垂直に掘り込まれる。壁溝はカマド以外の部分で全周する。幅は約 20cm だが一定しない。深さは最も深い南西側で約 15cm、浅い東側で 5cm 程度と一定しない。覆



第12図 SI-02 竪穴住跡 (1)

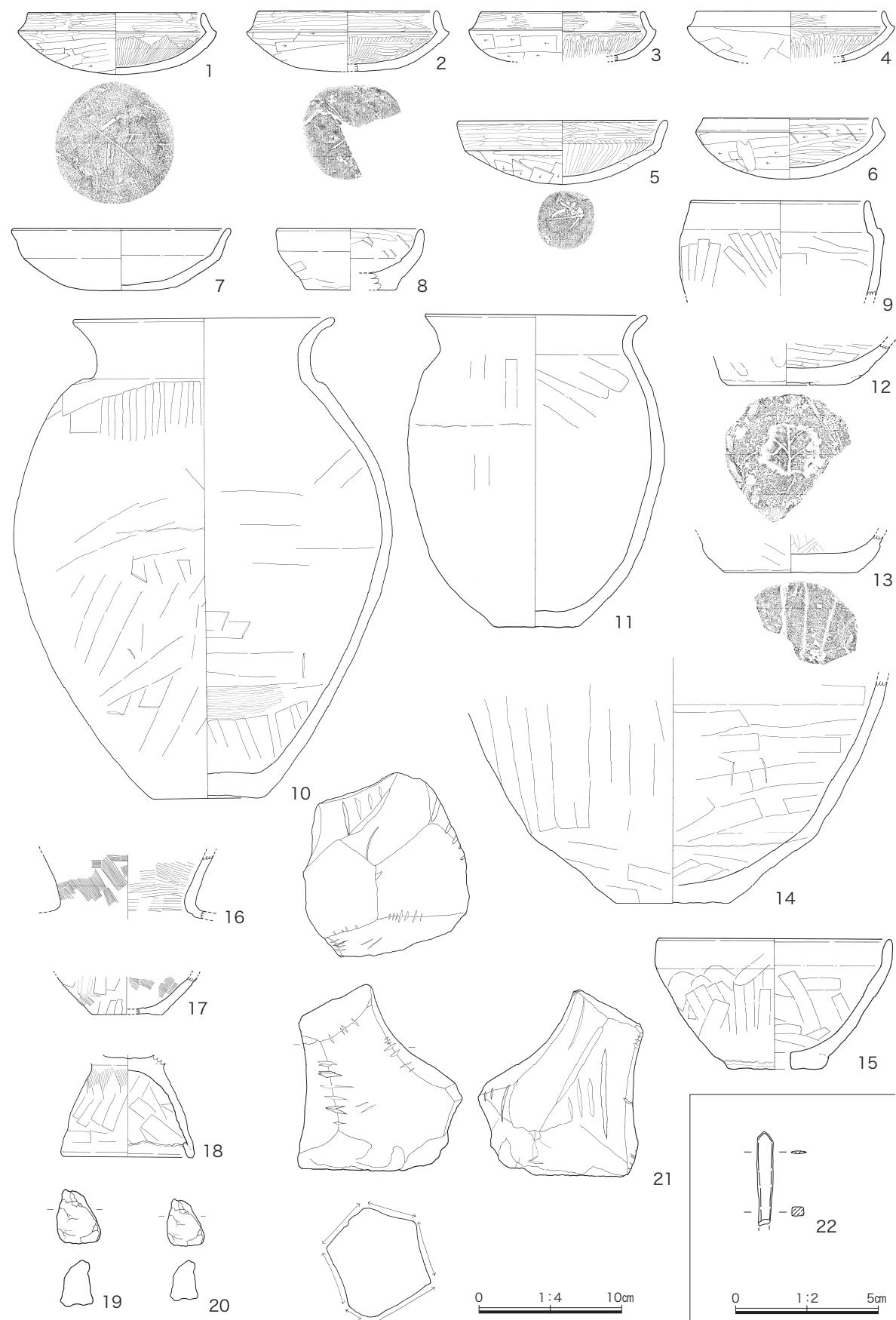


第13図 SI-02 穫穴住居跡（2）

土は住居覆土とは異なり、ロームブロックを多く含む褐色土を主体とする。しまりは弱い。北壁では住居壁と壁溝が広いところで約20cmずれている。壁と壁溝の間や壁溝上面に貼床はないことから、住居の拡張に伴うものとは考えられない。また、この部分には住居覆土と同じ土層が堆積していることからも、住居が使用されていた段階から、壁と壁溝がずれていたものと考えた。

床面・貼床 全面にロームブロックと黒色土ブロックによる貼床（9層）が施され、硬化が著しい。南東隅部分では地山が傾斜しているため、さらに暗褐色土による貼床（8層）が施されている。

掘方 床面から約10cmの深さだが、南東から東にかけて地山が傾斜しているため、この部分では約20cmと深くなっている。



第14図 SI-02出土遺物

第6表 SI-02 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴・残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 12.2 大 13.8 高 4.3	(内) 口ミガキ体密なミガキ (外) 口ミガキ体ヘラケズリ+ミガキ 口外面・内面漆仕上げ (残) 8/8	砂礫少・雲母・白色粒子微 良 7.5YR4/6 褐	床直 No.1
2 土師器 壺	口 (12.4) 高 (4.2)	(内) 口ミガキ→体ミガキ (外) 口ミガキ体丁寧なヘラケズリ 底部ヘラ記号有り 内面漆仕上げ (残) 7/8	砂礫・白色粒子少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.4+6
3 土師器 壺	口 (11.2) 高 (3.4)	(内) 口ミガキ体ミガキ (外) 口ミガキ体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR4/3 褐	覆土 b
4 土師器 壺	口 (12.8) 高 (3.5)	(内) 口ミガキ体ミガキ (外) 口ミガキ体ヘラケズリ 口外面・内面漆仕上げ 割れ面にタール状付着物 (残) 1/8	白色粒子多 良 7.5YR4/4 褐	覆土 b
5 土師器 壺	口 14.4 高 4.4	(内) 口～体密なミガキ (外) 口ミガキ体ヘラケズリ + ナデ 体部輪積痕 底部ヘラ記号有り (残) 8/8	砂礫・白色粒子多量 良 2.5YR5/6 明赤褐	床直 No.2
6 土師器 壺	口 11.8 高 4.2	(内) 口ケズリ→体ミガキ (外) ヨコナデ体ケズリ 口外面・内面漆仕上げ (残) 8/8	砂礫多・白色粒子少 良 7.5YR5/6 明褐	床上 +10cm No.3
7 土師器 壺	口 (15.0) 高 4.3	調整不明 (外) ヨコナデ? 底部極薄い (残) 5/8	砂礫多・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床直 No.12
8 土師器 壺	口 (10.0) 高 (4.3)	(内) 口ケズリ→ナデ体摩滅 (外) ヨコナデ体粗いケズリ 外面粘土付着 (残) 3/8	微細白色粒子多 砂 礫やや少 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	カマド内 No.16
9 土師器 甕	口 (12.0) 高 (6.6)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ (一部ナデ) 内面漆仕上げ (残) 3/8	砂礫多・白色粒子少 やや不良 7.5YR3/4 暗褐	貯蔵穴内 No.9
10 土師器 甕	口 (18.0) 底 8.0 高 33.3	(内) ヨコナデ胴丁寧なナデ底ヘラケズリ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 口 8/8 胴 7/8 底 8/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 5YR3/4 暗赤褐	貯蔵穴内 No.11
11 土師器 甕	口 15.2/16.2 底 6.0/5.2 高 21.8	(内) ヨコナデ胴ナデ (外) ヨコナデ胴ケズリ 胴上半に輪積痕 胴下半スス付着 (残) 口～底 8/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 7.5YR5/4 にぶい褐	貯蔵穴内 No.15
12 土師器 甕	底 (8.6) 高 (2.9)	(内) 粗いケズリ (外) 粗いナデ? 底部ドーナツ状に粘土貼り付け 木葉痕 (残) 底 4/8	砂礫多 良 7.5YR3/1 黒褐	床直 No.13
13 土師器 甕	底 (9.0) 高 (2.6)	(内) ナデ (外) 弱いケズリ 底部木葉痕 タール状の付着物 (割れ面にも付着) (残) 3/8	白色粒子やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土 d
14 土師器 甕	底 7.6 高 16.8	(内) 胴ナデつけ底ヘラケズリ (外) 胴～底ヘラケズリ (残) 底 8/8 胴 5/8	砂礫・白色粒子多 5YR5/6 明褐	床上 +10cm No.5
15 土師器 甕	口 (16.0) 高 9.1 高 (4.5)	(内) ヨコナデ胴弱いヘラケズリ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 6/8	白色粒子微 やや不良 7.5YR2/2 黒褐	貯蔵穴内 No.10
16 土師器 壺?	頸 (9.4) 高 (4.5)	(内) ハケメ (外) 弱いハケメ (残) 1/8	微細黒色・赤色粒子多 良 7.5YR6/6 橙	覆土 b
17 土師器 甕	底 (4.8) 高 (2.6)	(内) 弱いハケメ (外) ケズリ・底部近くハケメ	白色粒子極多 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴・残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
18 土師器 台付甕	底 (8.8) 高 (7.1)	(内) ヘラケズリ→ハケメ (外) ヘラケズリ 脚部ハの字に開き褶部折り返し (残) 脚 4/8	小砂礫多・白色粒子やや多 良 10YR4/2 灰黄褐	覆土
19 焼成 粘土塊	長 3.5 幅 2.5 厚 3.3 重 15.36	塊状 表面は滑らかで、葉脈状の筋がつく 実測図裏面はちぎり取ったまま表面がざらついている	微細な白色粒子やや多 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	カマド
20 焼成 粘土塊	長 3.9 幅 2.8 厚 2.8 重 15.42	塊状 表面に草本植物の筋及び細かいキズがつく 実測図裏面に刺突痕多数	赤色粒子多 良 5YR6/6 橙	覆土 d
21 石製品 砥石	幅 10.9 高 12.9 重 1899.02	底面が平らな多面体。上面は研ぎ減りによって細くなる。側面 6 面を使用し、いずれの砥面もすり減って湾曲している。上面・底面にも弱い砥面が見られる。側面の角には細かい刃漬し痕が残る。	砂岩 5Y6/2 灰オリーブ	床上 + 6cm No.14
22 鉄製品 鎌？	長 3.2 幅 0.7 厚 0.6 重 1.01	断面方形で、実測図上端が薄くなる。土砂が付着しているが、両丸造りと見られる。鎌箭式の鎌か。		覆土 b

柱穴 4 本主柱。上面のプランは不整で、柱の当たりも底面の片側に偏っているため、住居廃絶時に柱を引き倒したものと考えられる。東側の P1・P2 は西側に、西側の P4 は東側に向かって引き倒されているが、P3 のみ北側に向かって引き倒されている。覆土はロームブロックを多く含む褐色土が主体である。

入り口ピット 南壁中央から北側に向かってのびる間仕切り溝状のピットである。底面に小さいピットが連続する布掘り状となっている。覆土は、貼床に似る褐色土を主体とする。

間仕切り溝 柱穴の脇に 4 条掘られている。いずれも浅い溝状で、柱穴の中心の延長上から壁に向かって掘られているが、北東の間仕切り溝のみ P1 の中心からずれている。覆土は褐色土やローム土のブロックを多く含む。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と煙道部分が残っている。袖は黒色土の地山を馬の背状に掘り残した上に黄褐色土粘土を貼り付けて作られている。内部には焼土・ロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、右袖周辺がよく焼けている。カマド内部中央に、ロームブロックが山状に堆積しており、この上から土師器坏（第 14 図 8）が出土した。火床面は明確ではないが、カマド覆土 2 層が燃焼部にあたると考えられる。焚き口には浅い楕円状の掘り込みが認められる。煙道は急角度で立ち上がる。

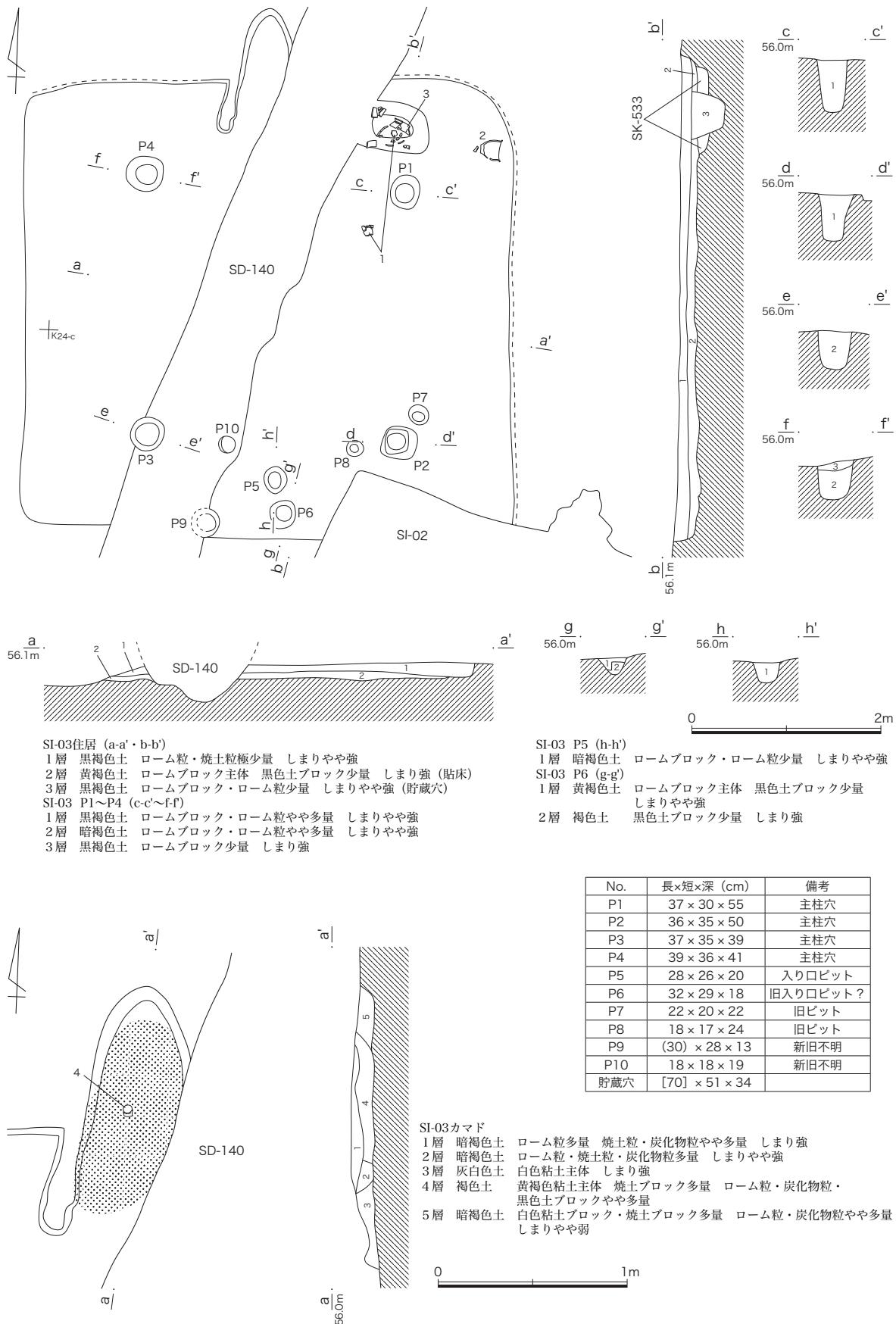
貯蔵穴 上面のプランは隅丸方形に近い楕円状で、深さは 25cm である。壁は西側がなだらかに立ち上がるが、他の部分はほぼ直に立ち上がる。内部からは復元可能な個体が多く出土した（第 14 図 9～11・15）。

遺物 カマド及び貯蔵穴周辺から復元可能な個体が多量に出土している。このうち、床面に伴うものは第 14 図 1・5・7・12 である。覆土中からは少量の土器片が出土している。また、住居の時期とは異なる古墳時代前期の土器（第 14 図 16～18）が覆土中に含まれるが、これらは重複する SI-44 竪穴住居跡から流入したものと考えられる。

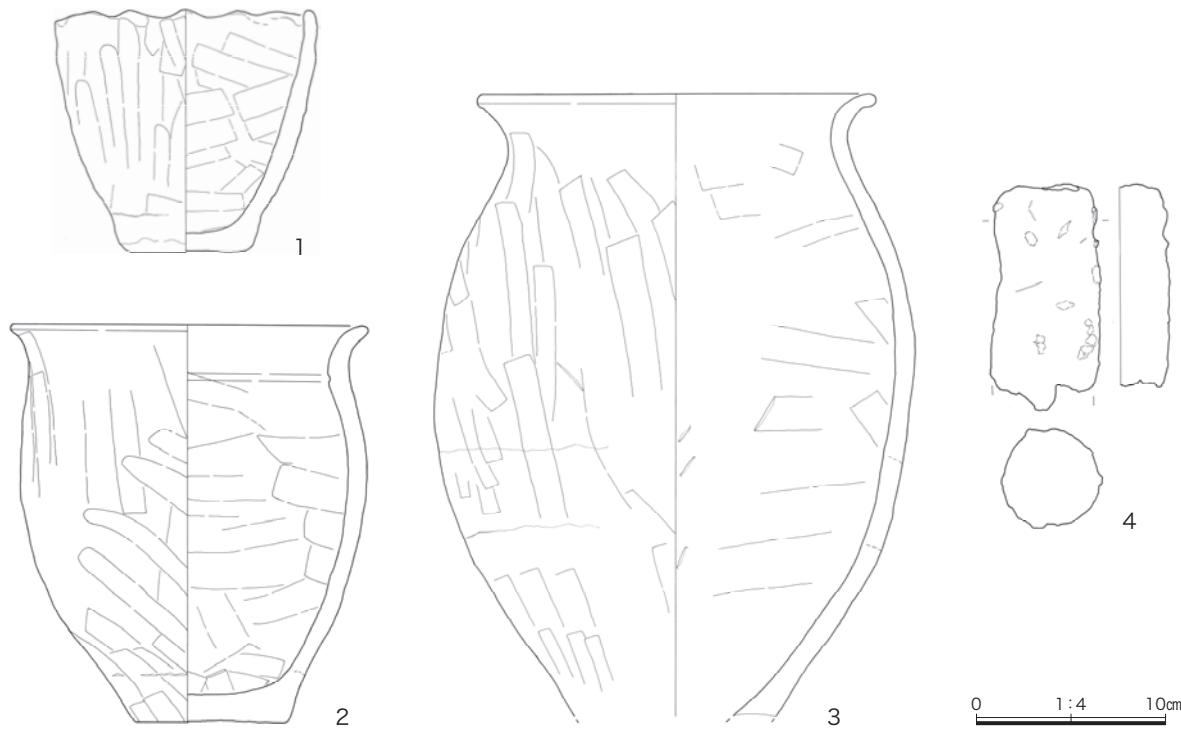
SI-03 (第 15・16 図・図版五・四二)

位置 K23・K24 グリッドに存在する。

重複関係 南東隅で SI-02 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-03 (旧) → SI-02 (新) である。また、住居中央を中近世の溝 SD-140 に切られる。



第15図 SI-03 竪穴住居跡



第16図 SI-03出土遺物

第7表 SI-03遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (13.2) 底 (6.6) 高 12.8	(内) 横方向へラナデ (外) ナデ、一部へラケズリ 成形痕を残す (残) 3/8	白色粒子やや多・砂礫少 良 7.5YR3/1 黒褐	床上 +10cm No.1+No.3
2 土師器 甕	口 (18.8) 底 (8.3) 高 21.0	(内) 口ヨコナデ、胴上半へラナデ、底部近くへラケズ リ (外) 口ヨコナデ、胴上半へラケズリ→へラナデ→底 部近くへラケズリ 底部近く輪積痕 くびれ部内面に凹線 (残) 6/8	砂礫・白色粒子多・ 雲母少 二次被熱 2.5YR5/8 明赤褐	床上 +5cm No.2+ 覆土 a・ b・c
3 土師器 甕	口 21.0/20.0 大 26.0 高 32.7	(内) 口ヨコナデ胴へラナデ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ 外面に粘土付着 外面に輪積痕 (残) 8/8	砂礫極多・白色粒子多 二次被熱 5YR5/3 にぶい赤褐	貯蔵穴内 No.3
4 土製品 支脚	長 (11.9) 胴径 5.7 重 259.59	手捏ね成形 表面の調整なし、部分的に粘土貼り付け 摩滅強	砂粒少 二次被熱 5YR5/4 にぶい赤褐	カマド No.1

規模・形状 全体的に削平を受けており、遺存状態が極めて悪い。規模は推定で東西 5.15 m、南北 4.8 m であると考えられる。各隅、壁ともプランは不明瞭である。主軸方向は推定で N - 2° - W である。

覆土 黒褐色土を主体とするが、ほとんど残っていない。

壁 確認面より約 15cm と浅いため、壁の形状等は不明瞭である。壁溝は確認されなかった。

床面・貼床 全面にロームブロックによる貼床（2層）が施される。住居周縁部分で硬化が著しく、中央部分は柔らかい。

掘方 床面から 5cm～10cm の深さで、平坦である。P6・7・8 が床下に伴うピットである。

柱穴 4 本主柱。P2 のみ上面が矩形で、他の柱は円形のプランである。覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土を主体とする。柱痕や柱の当たりはいずれも確認できなかった。

入り口ピット 住居南壁寄り中央にピットが 2 基確認された。いずれも深さ 20cm の浅いピットである。

P5 の覆土は暗褐色土を主体とする。P6 は上面に貼床が施され、ロームブロック主体の覆土が堆積していたことから、古い入り口ピットであると考えられる。

火処 北壁中央にカマドを構築している。上面が大きく削平され、遺存状況は悪い。カマド内には黄褐色粘土及び白色粘土（3・4 層）が多量に堆積している。粘土堆積層の下には焼土層（4 層）が堆積しており、この面が燃焼部であったと考えられる。4 層下面に支脚が据えられた状態で 1 点出土している（第 16 図 4）。

貯蔵穴 西側を SD-140 に切られる。上面は隅丸方形形状のプランを呈し、黒褐色土を主体とする覆土が堆積していた。内部からは土師器甕の破片が多く出土した（第 16 図 1・3）。

遺物 貯蔵穴とその周辺を中心に復元可能な固体が出土しているが、覆土中からの遺物の出土は少ない。また、床面に伴う遺物もない。

SI-04（第 17・18 図・図版六・四三）

位置 L24 グリッドに位置する。西壁に隣接して SI-02 竪穴住居跡が位置するが、重複関係はない。

規模・形状 南北が 4.6 m、東西は東側約 1/3 が調査区外となるため不明である。

覆土 黒褐色土を主体とする。覆土下層中（2 層）には炭化物・焼土粒がブロック状となって大量に含まれている。住居中央及び西側の床面近くからは炭化材や草本植物が炭化したものが出土している。炭化材は板状、垂木状のものが確認された。炭化材の下には焼土（6 層）が堆積しているが、両者はほぼ同レベルで出土している。6 層の焼土は 2 層中やカマド内部の焼土とは異なり、粒子が細かく粘性が強い。また、これらの焼土が床面に接して薄く広がることから、おそらく貼床が焼けたものと考えられる。床面から出土した炭化材については、樹種同定を行った（付章参照）。

壁 確認面から約 35cm の深さで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はない。

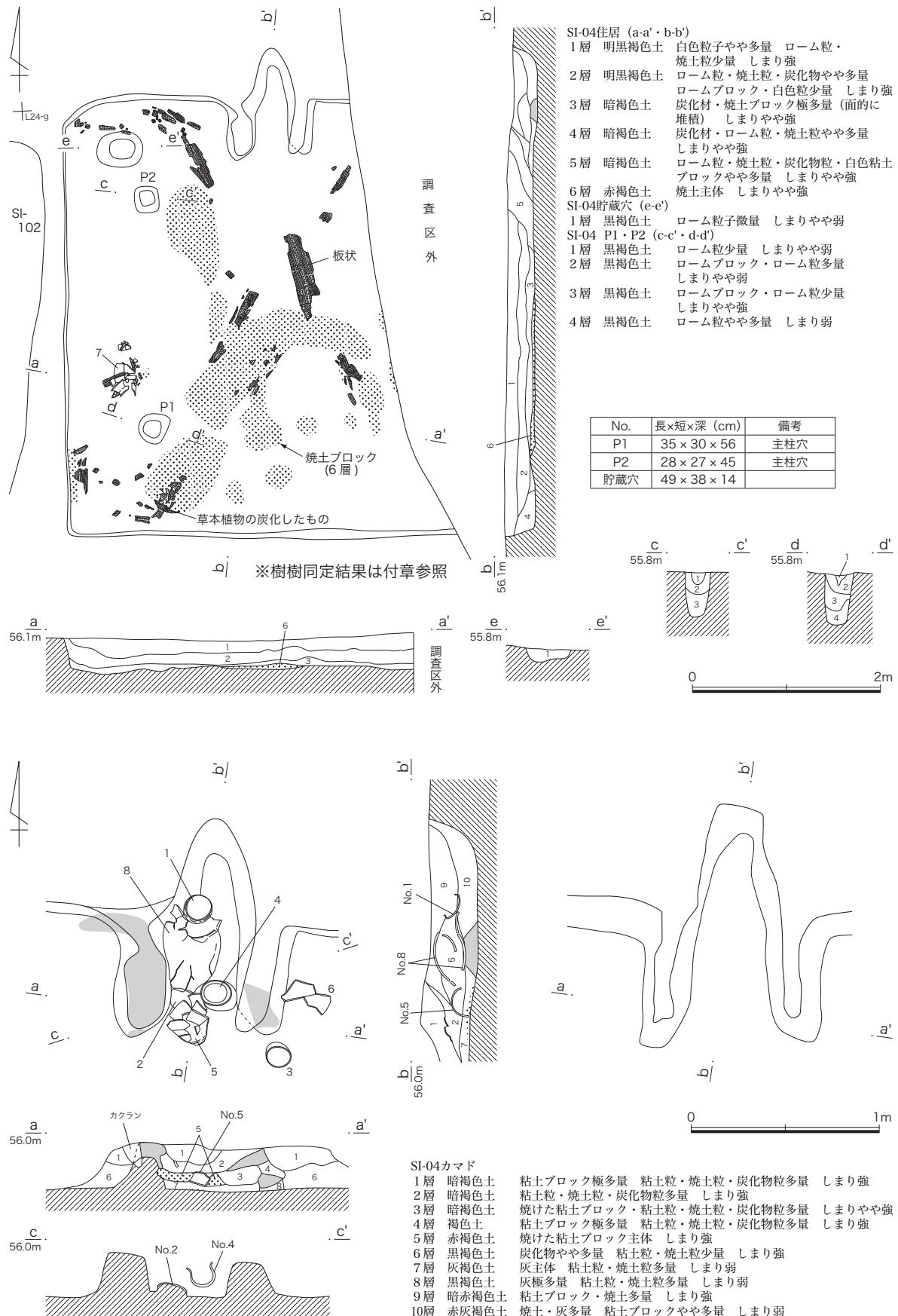
床面・貼床 床面は黒色土中に構築され、ロームブロックによる貼床が部分的に施される。床面の硬化は弱い。住居中央部分は貼床が被熱により赤化している（6 層）。貼床下に掘方は確認されなかった。

柱穴 4 本主柱と考えられるが、調査区内では西側の 2 本のみ確認された。北側の P2 は上面が矩形を呈している。覆土はいずれも黒褐色土を主体としており、柱痕は確認できなかった。

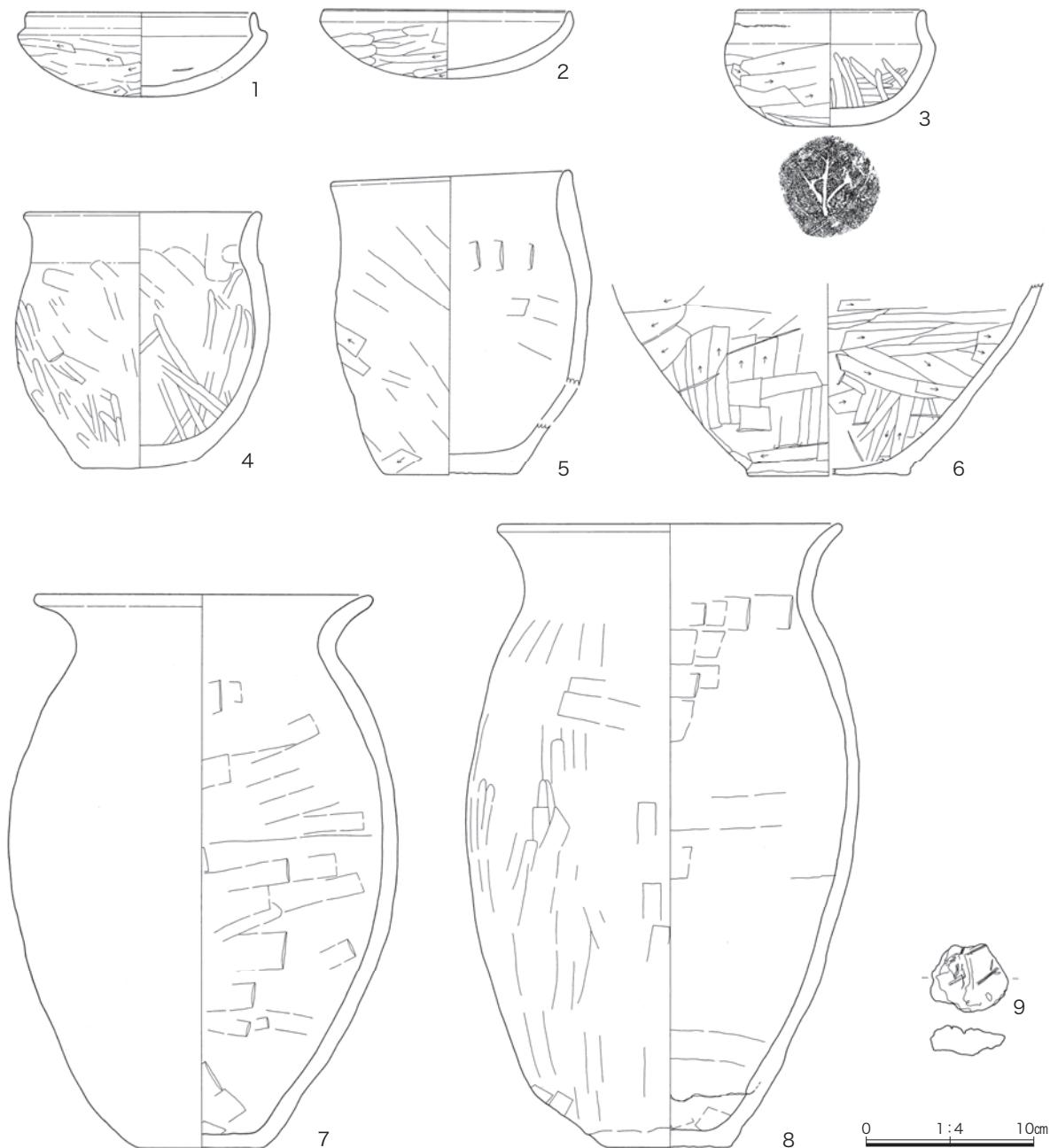
火処 北壁中央にカマドを構築している。カマド内部には粘土ブロックと共に復元可能な土師器甕・壺が多く出土した（第 18 図 1～5・8）。粘土ブロックは住居中央付近までブロック状に堆積している。カマド内部はよく焼けて硬化しており、底面には燃焼部と考えられる焼土が厚く堆積している（10 層）。袖は黒色土の地山を馬の背状に掘り残した上に粘土を貼り付けて構築している。右袖は貼り付けた粘土がほとんど流失しており、残存状況は悪い。奥壁は急激に立ち上がる。10 層は奥壁部にも貼り付くようにして堆積している。

貯蔵穴 住居北西隅に 1 基確認された。楕円状を呈し、深さは約 10cm と浅い。

遺物 カマド内部から出土した個体の他に、住居西側中央付近の覆土中から土師器甕が 1 点出土している（第 18 図 7）。覆土中から出土した遺物は小破片で、出土量も少ない。



第17図 SI-04 竪穴住居跡



第18図 SI-04出土遺物

第8表 SI-04 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 13.6 高 5.0	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 内面ヘラ当て具痕残る (残) 8/8	微細白色粒子少・雲母微 良 7.5YR6/4 にぶい橙	カマド No.4
2 土師器 壺	口 (14.6) 高 4.1	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半ヘラナデ・下半ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 6/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母少 良 7.5YR4/2 灰褐	カマド No.6

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
3 土師器 壺	口 11.0 高 6.9	(内) 口ヨコナデ→横方向ミガキ→放射状ミガキ (外) 体ヘラケズリ→口ヨコナデ 内面～口縁部外面赤彩後漆仕上げ (残) 8/8	白色粒子多・白色粒子少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	カマド No.5
4 土師器 甕	口 13.8 底 7.0 高 15.3	(内) 口ヨコナデ体上半ナデ、下半ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ 内外面とも著しく被熱、剥落 (残) 8/8	砂礫・白色粒子多・ 雲母少 二次被熱 2.5YR4/6 赤褐	カマド No.3
5 土師器 甕	口 14.0 底 8.0 高 18.1	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内外面とも著しく被熱、剥落 (残) 7/8	砂礫・砂粒極多 (胎土粗い) 二次被熱 2.5YR4/6 赤褐	カマド No.2
6 土師器 甕	底 (9.6) 高 (11.4)	(内) ヘラケズリ (外) ヘラケズリ、一部ヘラナデ 底部薄い (残) 3/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母微 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.7
7 土師器 甕	口 19.6 底 (7.6) 高 32.7	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴不明 胴部表面に黄褐色粘土を薄く 塗布 (残) 口 8/8 脳～底 4/8	白色粒子多・砂礫やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上 +10cm No.8
8 土師器 甕	口 20.0 底 7.4 高 36.9	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ・ヘラケズリ 底部近くやや歪む (残) 口 5/8 脳～底 8/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	カマド No.1
9 焼成 粘土塊	長 3.9 幅 4.4 厚 1.5 重 17.83	扁平 表面草本植物の跡及びヘラ状工具の痕跡あり 裏面ユビナデ	砂粒・赤色粒子やや多 やや良 5YR6/4 にぶい橙	カマド

SI-05 (第 19 ~ 21 図・図版六・四三)

位置・重複関係 J24 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SK-147 に切られる。

規模・形状 規模は南北・東西とも 5.2 m であるが、東壁が 4.8 m で短くなっているため、やや歪んだ方形となっている。主軸方向は N - 22° - E である。各隅は丸みをおびている。

覆土 ロームブロック・ローム粒を多く含む暗褐色土を主体とする。北東部分では焼土粒を多く含む (2 層)。

壁・壁溝 確認面から約 15cm の深さで、壁はなだらかに立ち上がる。壁溝は全周する。壁溝内の覆土には、ロームブロックが多量に含まれている。

床面・貼床 全面にロームブロックによる貼床を施しており、概ね平坦である。床面は硬化が著しい。

掘方 床面から約 10cm の深さで、平坦である。

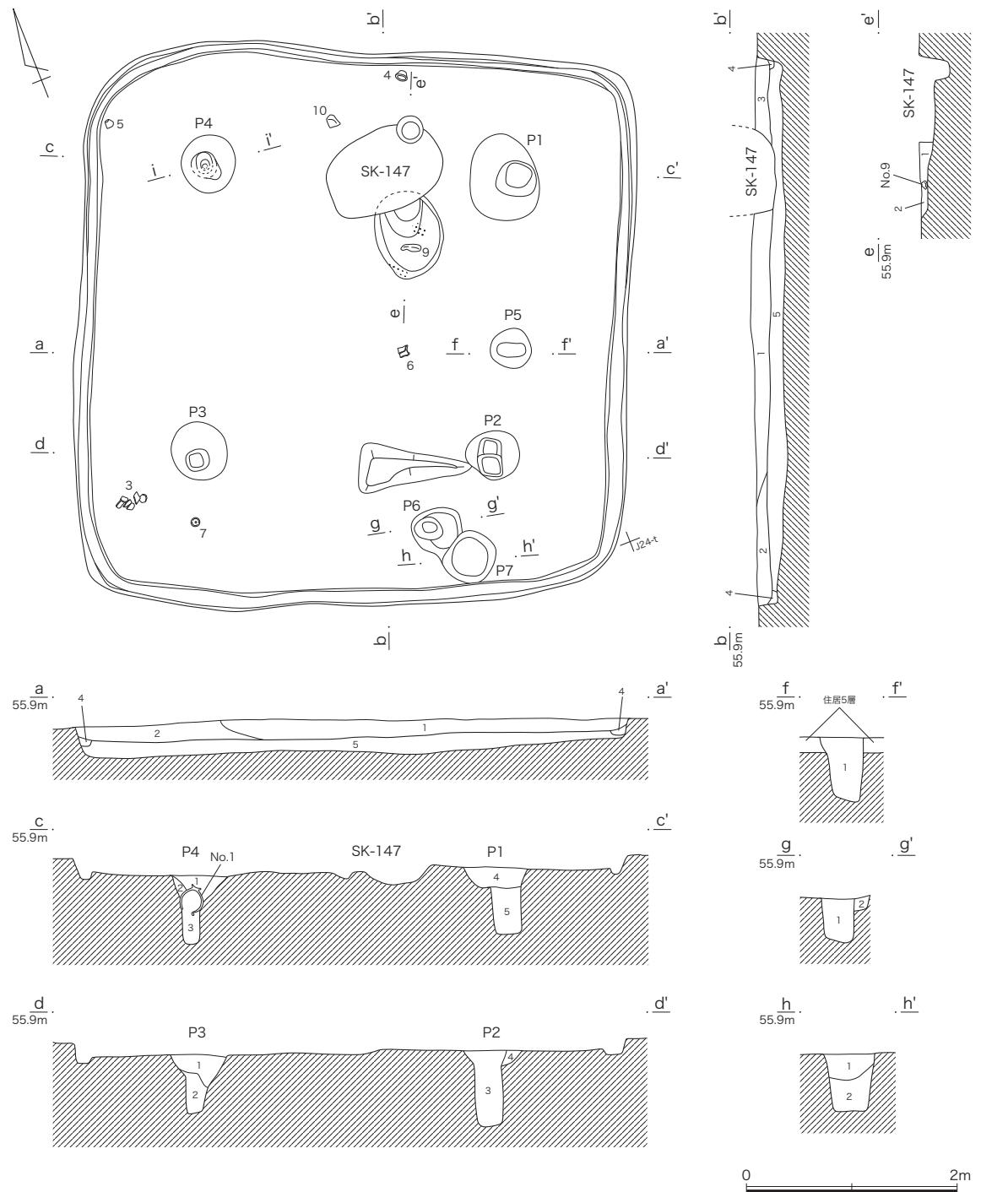
柱穴 4 本主柱。いずれも上面は円形、底面は矩形の掘り方を呈する。峰高前遺跡で確認された古墳時代前期の住居柱穴は、他の時期のものよりも比較的大きく、底面が矩形となっている。覆土は P1・P3 が暗褐色土主体、P2・P4 が褐色土主体となる。柱痕はいずれの柱穴でも確認されなかった。P4 内部からは、ほぼ完形の台付甕が出土した (第 21 図 1)。掘り方が狭まる部分に逆位ではまつた状態で出土しており、甕の内部は空洞だった。また、P1 の底面近くからは壺型土器の底部が出土している (図化不能)。P2 の底面は段状になっているが、覆土に切り合は見られなかった。

火処 住居中央から北壁寄りに炉を構築している。南北に長い楕円形を呈する。南側に焼土、北側に炭化物が堆積している。底面から 2 cm ほど浮いた状態で礫が出土している (第 21 図 9)。

貯蔵穴 住居南東隅に 2 基確認された。どちらも矩形の掘り方を呈する。覆土は暗褐色土を主体としており、住居覆土に比べロームブロック・ローム粒が少ない。P6 の北側には島状の高まりがあり、硬化が著しい。

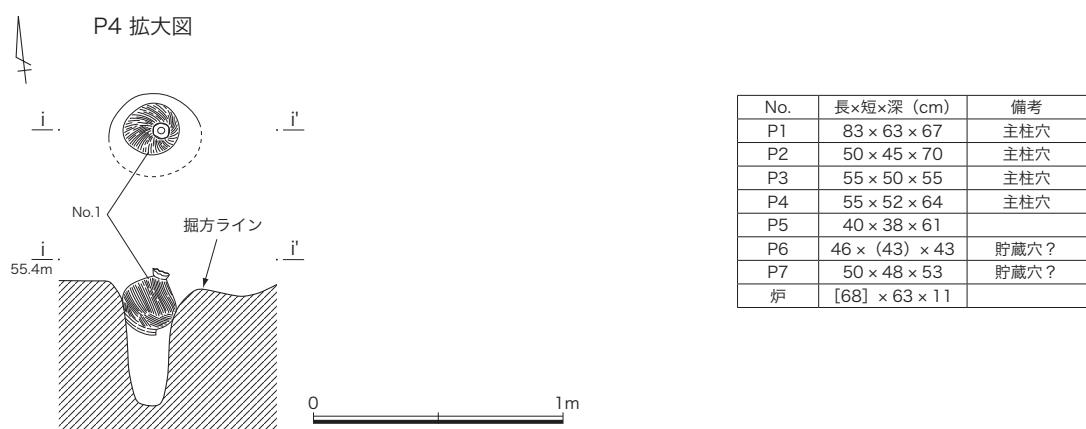
その他の付帯施設 柱穴以外に、P1 と P2 の間にピットが 1 基確認されている (P5)。

遺物 P4 出土の台付甕の他は、覆土中から出土している。いずれも破片で、出土量は少ない。

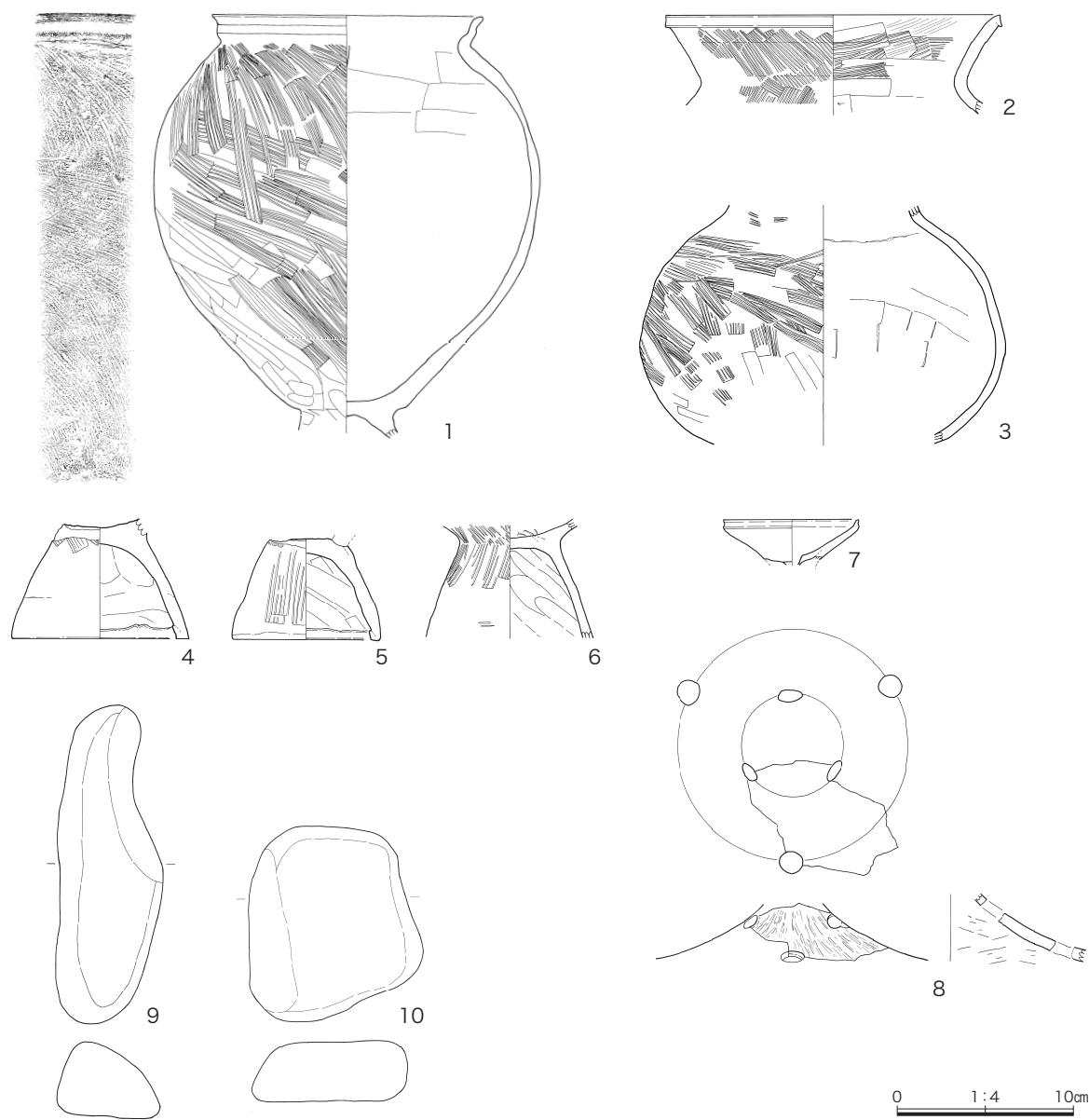


SI-05住居 (a-a'・b-b')	SI-05 P2・P3 (d-d')
1層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒・炭化物粒多量 焼土粒少量 しまりやや強	1層 暗褐色土 ローム粒少量 しまりやや弱
2層 暗褐色土 ローム粒やや多量 焼土粒・炭化物粒少量 しまり強	2層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 しまりやや強
3層 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒・炭化物粒多量 ロームブロック・ローム粒少量 しまり強	3層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒やや少量 しまり弱
4層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 しまりやや弱	4層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 しまりやや強
5層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 しまり強 (貼床)	SI-05 P5 (f-f') 1層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 しまり弱
SI-05炉 (e-e')	SI-05 P6 (g-g') 1層 暗褐色土 ローム粒少量 しまりやや強
1層 暗褐色土 炭化物ブロック極多量 ローム粒・焼土粒やや多量 しまりやや弱	2層 暗褐色土 ローム粒多量 しまりやや強
2層 暗褐色土 烧土ブロック極多量 炭化物粒多量 しまりやや弱	SI-05 P7 (h-h') 1層 暗褐色土 ローム粒少量 しまりやや弱
SI-05 P1・P4 (c-c')	2層 暗褐色土 ローム粒やや少量 ロームブロック極少量 しまり弱
1層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒やや多量 しまりやや弱	
2層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 しまりやや強	
3層 褐色土 ローム粒やや多量 しまり極弱	
4層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒やや多量 しまりやや強	
5層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 しまりやや強	

第19図 SI-05 竪穴住居跡 (1)



第20図 SI-05 竪穴住居跡（2）



第21図 SI-05 出土遺物

第9表 SI-05 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 台付甕	口 15.4 大 21.8 高 23.7	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ (外) 口ヨコナデ胴ハケメ (胴下→胴上) S字状口縁 口縁部光沢あり 台部接合部 に指頭圧痕 (残) 8/8 (台部のみ欠損)	砂粒多 やや良 10YR3/1 黒褐	P4 内 No.1
2 土師器 甕	口 (19.1) 高 (5.6)	(内) 横方向ハケメ、一部ケズリ (外) 斜め方向ハケメ 口縁部くの字状に屈曲 口唇部折り返し (残) 1/8	砂礫少・白色粒子多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土 a
3 土師器 甕	破片	(内) 丁寧なナデ (外) ハケメ、一部ヘラケズリ 胴部大きく膨らむ	砂礫・白色粒子多 良 2.5Y6/2 灰黄	床直 No.6
4 土師器 台付甕	台部端 径 10.0 高 (6.8)	(内) 粗いユビナデ (外) ハケメ、ナデ 台部端折り返し (残) 台部 8/8	砂礫・白色粒子少・雲母微 良 10YR6/3 にぶい黄褐	床直 No.3
5 土師器 台付甕	台部端径 8.4 高 (5.7)	(内) 粗いユビナデ+ヘラケズリ (外) ハケメ+ナデ 台部端折り返し (残) 台部完存	砂礫・白色粒子やや多・ 雲母微 良 7.5YR2/1 黒	床直 No.2
6 土師器 台付甕	高 (6.3)	(甕部内) 底部近くヘラケズリ (甕部外) ハケメ、端部ナデ (台部内外) 指ナデ (残) 台部 3/8	砂礫やや多・白色粒 子少・雲母微 良 10YR6/8 明黄褐	床上 +10cm No.4
7 土師器 器台	口 7.8 高 2.5	内外面とも丁寧なナデ 脚部接合部で破損 (残) 受部 8/8	砂礫・白色粒子・雲母少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.5
8 土師器 器台	破片	(内) 縦方向ミガキ (外) ヘラケズリ・ヘラナデ 脚部約 1/8 残存 脚孔 2段 3孔か	白色粒子多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	南東柱穴 +覆土 d
9 礫	長 18.1 幅 6.0 厚 4.4 重 636.0	断面三角形、縦長の礫 全体的に弱い赤化、部分的にスス状の付着物	10YR6/1 褐灰 安山岩	炉内 No.8
10 礫	長 11.0 幅 9.8 厚 3.8 重 549.9	扁平な台形の礫 上端部赤化	2.5Y6/3 にぶい黄 礫岩	床直 No.7

SI-06 (第 22 ~ 24 図・図版七・四三)

位置 J25 グリッドに位置する。

重複関係 南東隅で SI-07 穫穴住居跡と切り合う。新旧関係は SI-07 (旧) → SI-06 (新) である。

規模・形状 東西 4.35 m、南北 5.1 m であるが、東壁が 4.4 m と短くなっているため、歪んだ方形を呈する。

主軸方向は N - 1° - E で、ほぼ真北を向いている。各隅は丸みをおび、南東隅は鈍角になっている。西側は黒色土中に掘り込まれているため壁のラインは不明瞭だったが、壁溝のプランから壁のラインを復元した。

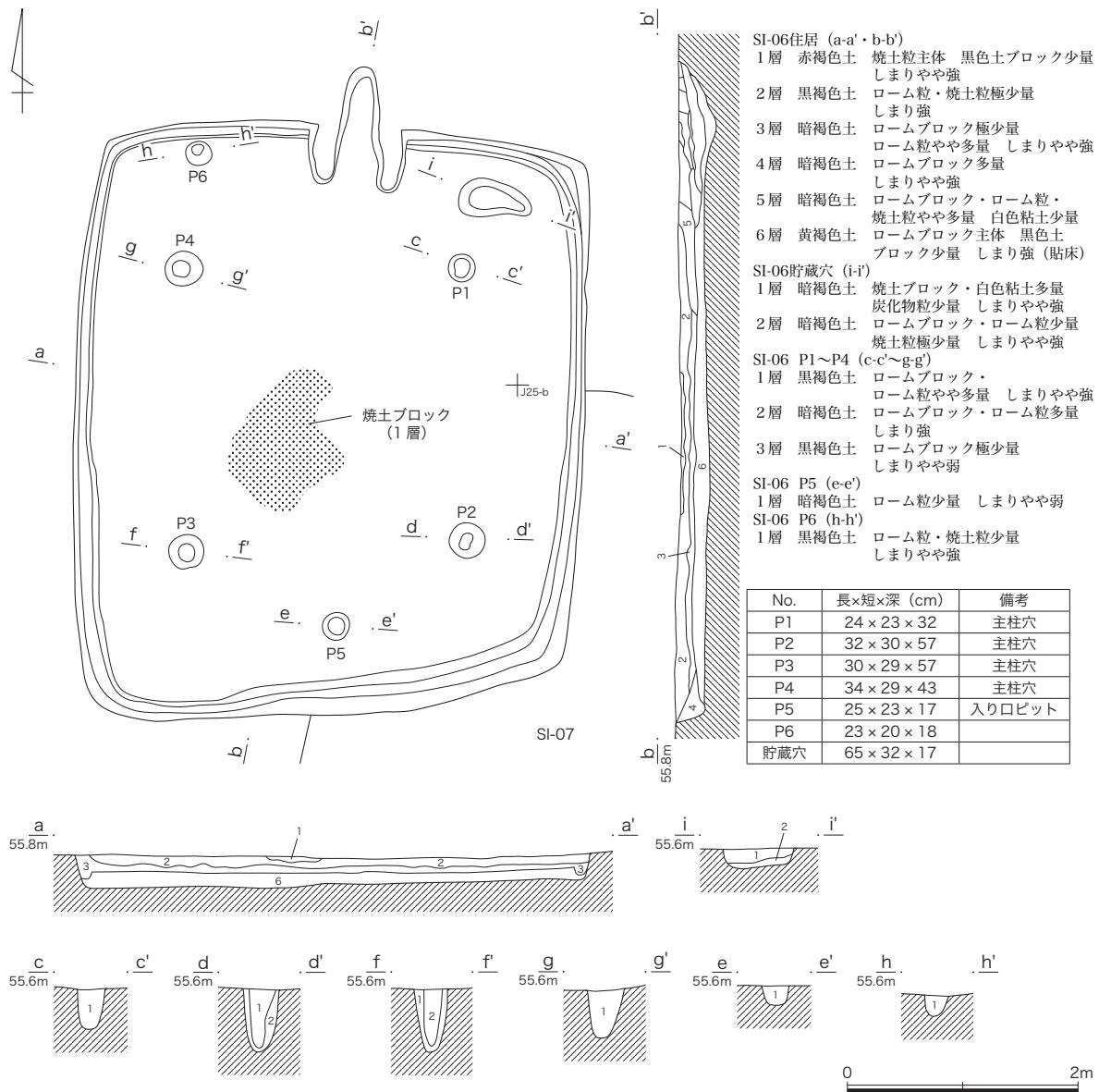
覆土 覆土上層は黒褐色土を主体とする。上面に焼土粒がブロック状に堆積している (1 層) が、別遺構の重複は確認されなかった。おそらく、覆土堆積中に焼土が投げ込まれたものと考えられる。覆土下層は暗褐色土を主体とする。上層、下層ともローム粒などの内容物はほとんど含まれない。

壁・壁溝 確認面から約 15cm の深さで、壁はなだらかに立ち上がる。壁溝は全周する。壁溝には覆土下層が堆積しているが、南側部分にのみロームブロックが多量に含まれている。

床面・貼床 全面にロームブロックを多く含む黒色土による貼床が施される。

掘方 床面から約 10cm 程度で、平坦である。

柱穴 4 本主柱。掘り方は円形を呈し、覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土を主体とする。P3 のみ



第22図 SI-06 竪穴住居跡 (1)

柱痕が認められた。

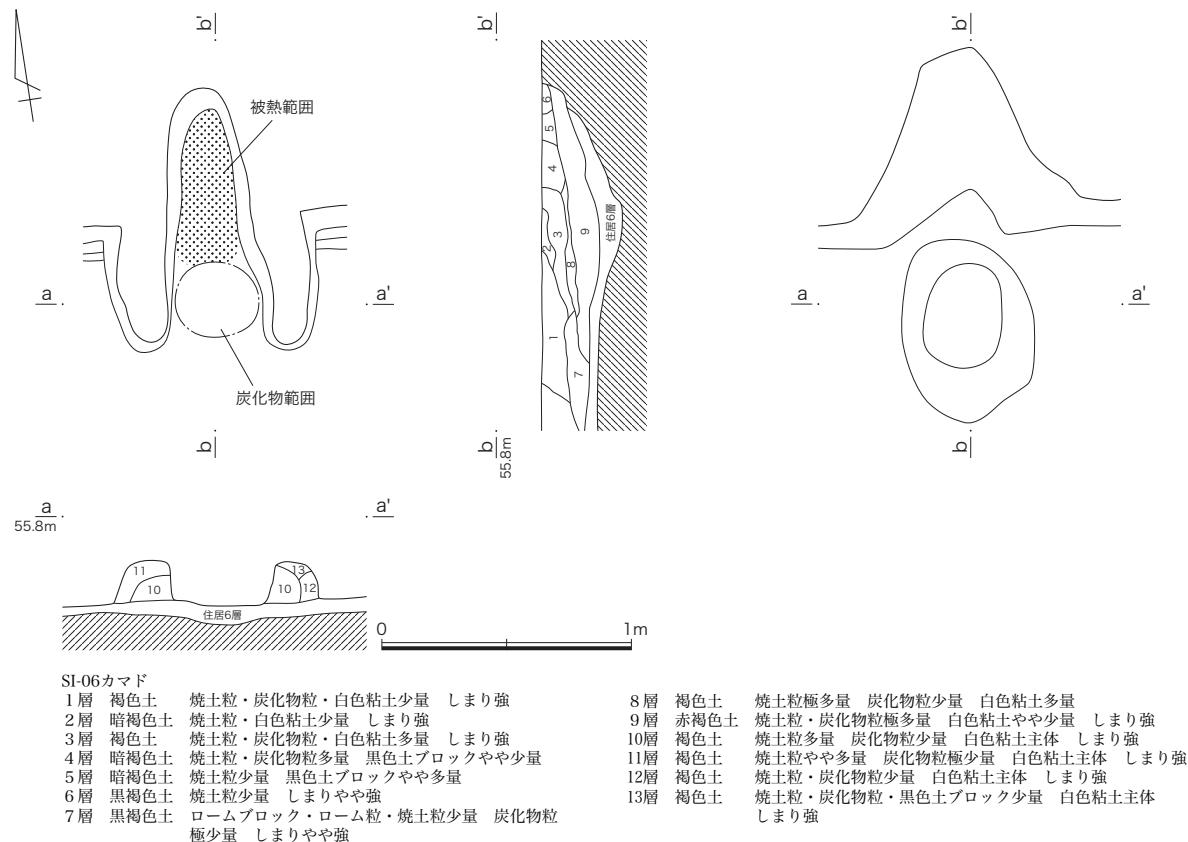
入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P5)。掘り方は円形を呈し、深さは約15cmで浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両側の袖と煙道が残っている。袖は白色粘土で構築されており、地山の掘り残しはない。カマド周辺にも、カマド構築土と考えられる粘土が多く堆積している。カマド内部には天井崩落土(3層)下に焼土粒・炭化物粒が厚く堆積しており(8層・9層)、底面は非常に良く焼けて硬化している。カマド焚き口部分には炭化物が多く残っており、その下には浅い掘り込みが確認されている。煙道の立ち上がりは急である。

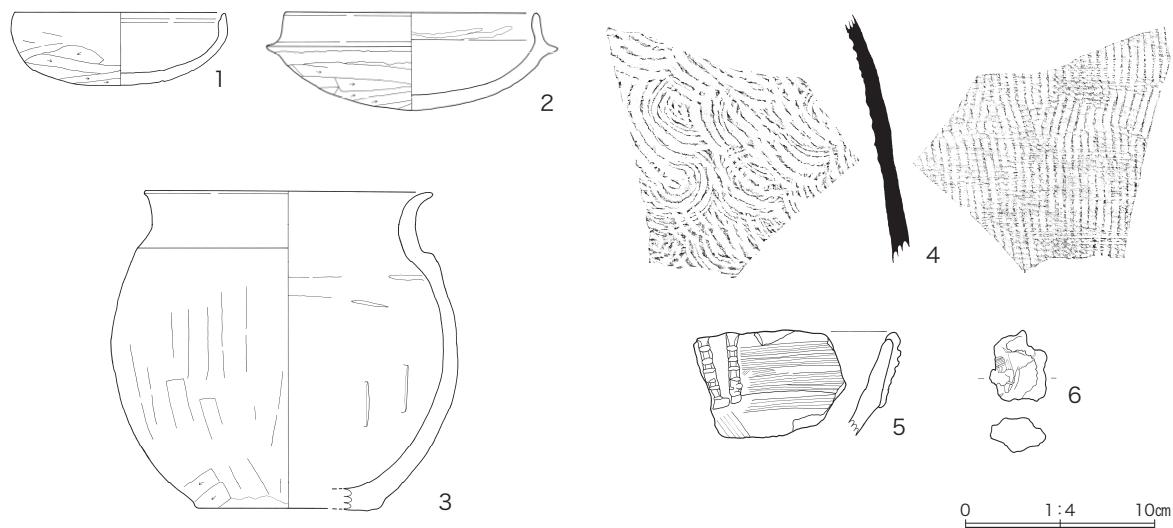
貯蔵穴 住居北東隅で確認された。歪んだ楕円状を呈する。覆土は暗褐色土を主体とし、カマドから流れ込んだと考えられる焼土や白色粘土が多く堆積している。深さは15cm程度である。

その他の付帯施設 住居北西隅でピットが1基確認されている(P6)。

遺物 覆土中からの出土が中心で、床面に伴うものはない。出土量も少ない。



第23図 SI-06 穫穴住居跡（2）



第24図 SI-06出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第10表 SI-06 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (11.0) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ→ナデ 口縁部内面に沈線(残) 5/8	白色粒子やや多・ 砂礫少・雲母微 良 2.5YR4/8 褐	覆土 d
2 土師器 壺	口 (13.0) 高 5.2	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ 体上半に強いナデ下半ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 4/8	白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	確認面
3 土師器 甕	口 15.0 底 (9.6) 高 16.8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部下に強い稜 (残) 口縁部 7/8 胴部 7/8	砂粒・白色粒子極多・ 砂礫多 やや良 10YR6/6 明黄褐	覆土 a + d
4 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状当て具痕 (外) 平行タタキ+カキメ 産地不明	白色粒子多・黒色融 解粒やや多 良 5PB4/1 暗紫灰	覆土 d・カマド
5 土師器 壺	破片	(内) ナデ (外) ハケメ、口縁部に粘土紐貼付→粘土紐上にキザミ	砂粒多・砂礫やや多・ 雲母少 良 10YR7/6 暗黄褐	覆土 c SI-07 からの 混入か?
6 焼成 粘土塊	長 3.6 幅 3.0 厚 1.9 重 12.23	塊状 いくつかの粘土塊をまとめて握った状態 表面に草本植物の痕跡及びひび割れが多く残る	白色粒子微 良 7.5YR6/6 橙	覆土 c

SI-07 (第25・26図・図版七)

位置 J25 グリッドに位置する。

重複関係 北西隅でSI-06と重複する。新旧関係はSI-07(旧)→SI-06(新)である。また、南東隅でSI-49堅穴住居跡と重複するが、いずれも著しく削平されているため、新旧関係は不明である。

規模・形状 東西が5.85m、南北が5.75mだが、東壁が5.2mと短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-3°-Wである。

覆土 暗褐色土を主体とし、ロームブロック・ローム粒が多量に含まれている。

壁・壁溝 削平により、壁の状態は不明である。壁溝は北東隅と南東隅で確認されており、全周はしていない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施され、硬化が著しい。

掘方 深さ約10cm程度で、平坦である。西側が若干深くなっているが、低地に向かって自然に傾斜している部分を掘り方として掘ってしまっているため、本来は平坦であったと考えられる。

柱穴 4本主柱。上面は円形、底面はP1～P3が矩形、P4が円形の掘り方を呈する。覆土はP1のみ黄褐色土、残りの3本は暗褐色土を主体とする。P4はSI-06の床下で確認されており、覆土はSI-06貼床の土層と似ている。P3では柱痕が確認された。

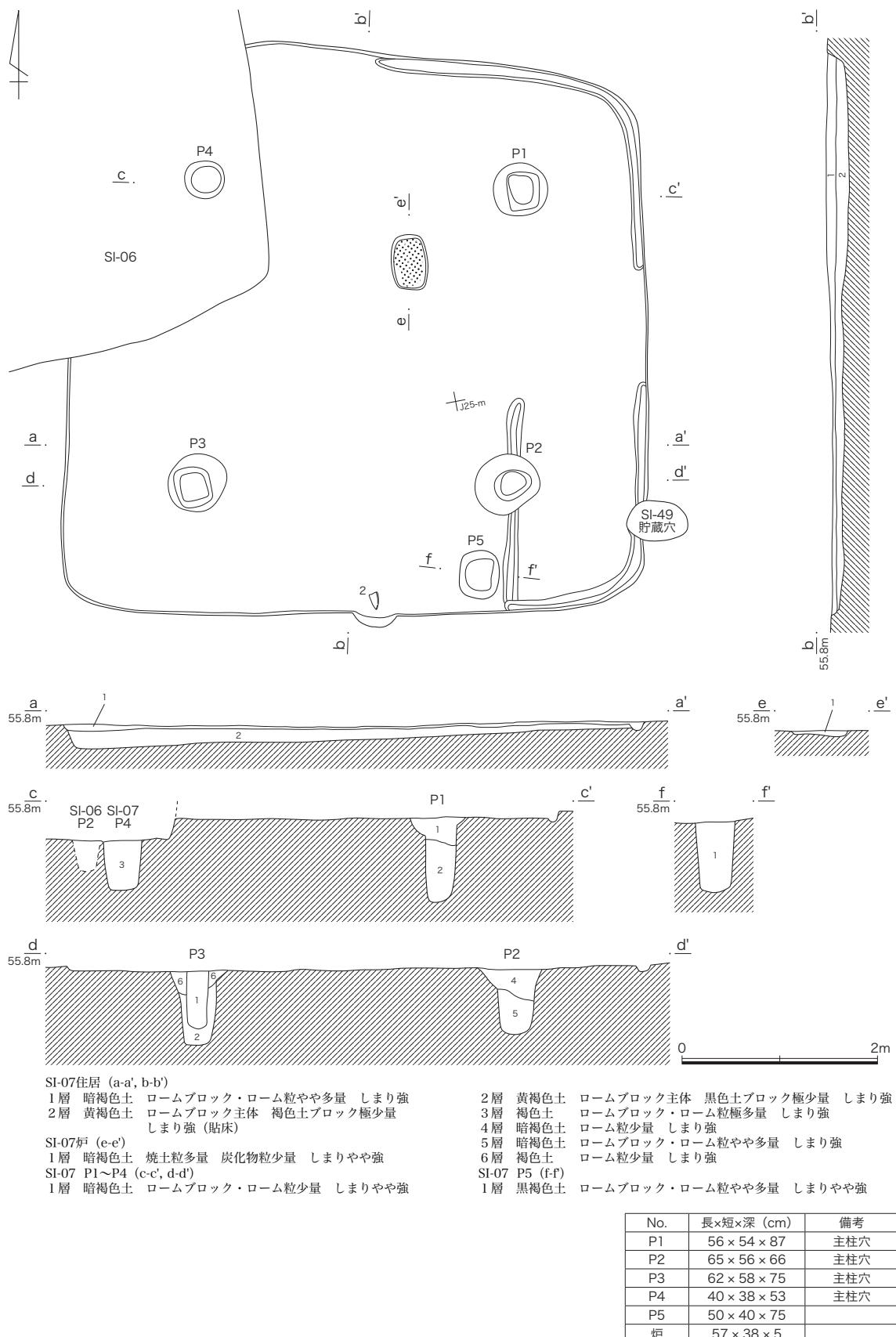
間仕切り溝 P2の両側で1条のみ確認されている。深さ約5cmの浅い溝状である。

火処 住居中央北壁寄りに炉が構築されている。南北に長い楕円形を呈し、焼土が多く堆積していた。底面はよく焼けて硬化している。

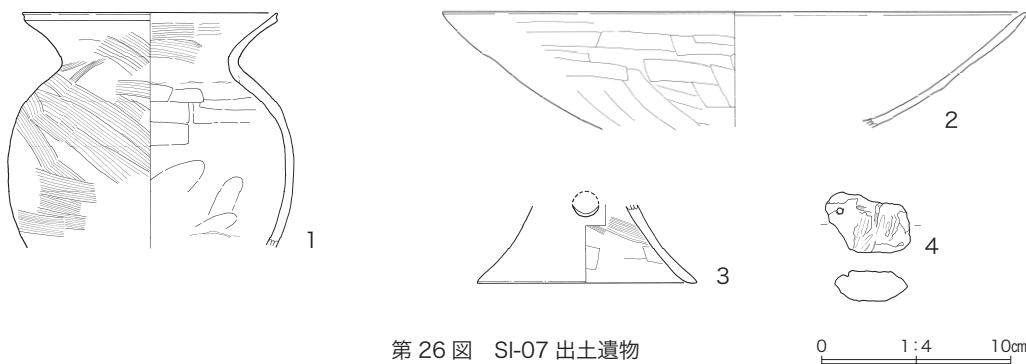
貯蔵穴 南東隅で確認されたP5が貯蔵穴と考えられる。上面、底面とも矩形を呈し、柱穴とほぼ同じ深さまで掘り込まれている。覆土は黒褐色土を主体とし、ロームブロック・ローム粒がやや多く含まれる。

その他の付帯施設 南壁中央がわずかに外に張り出しているが、その上面を後世の浅い溝状遺構によって切られているため、住居に伴うものかは不明である。

遺物 出土遺物はわずかで、いずれも小破片である。第26図2の土師器皿は床面上から出土している。また、P3覆土中から、土師器甕の破片が出土している(第26図1)。



第25図 SI-07 竪穴住跡



第26図 SI-07出土遺物

0 1:4 10cm

第11表 SI-07遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (13.4) 大 (15.0) 高 (12.0)	(内) 口横方向ハケメ胴指ナデ・ヘラナデ (外) 斜め方向ハケメ 内面頸部に輪積痕 外面全体にスス付着 (残) 2/8	砂粒・白色粒子多 良 10YR3/2 黒褐	覆土 c + d + 南西柱穴
2 土師器 皿?	口 (30.8) 高 (6.1)	(内) 丁寧なナデ (方向不明) (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面に鉄分付着 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR6/6 明黄褐	床直 No.1
3 土師器 器台	台部端径 (11.4) 高 (4.1)	(内) ハケメ・ヘラケズリ (外) ナデ・一部ハケメ 孔 1カ所 (単位不明) (残) 1/8	砂礫・砂粒多 良 10YR6/6 明黄褐	覆土 d
4 焼成 粘土塊	長 3.0 幅 4.1 厚 1.5 重 14.51	扁平 実測図表面はヘラ状工具による筋状のキズが同 方向に多数残る 裏面は握った際の指頭圧痕の上から ヘラ状工具によるナデ	砂粒少 良 7.5YR6/4 にぶい橙	覆土

SI-08 (第27~30図・図版七・四三)

位置 L25 グリッドに位置する。

重複関係 西側約 1/2 が SI-09 と重複する。新旧関係は SI-08 (旧) → SI-09 (新) である。また、中央を SD-518 に切られる。

規模・形状 東西 5.4 m、南北 5.7 m の方形を呈する。主軸方向は N-12°-E である。

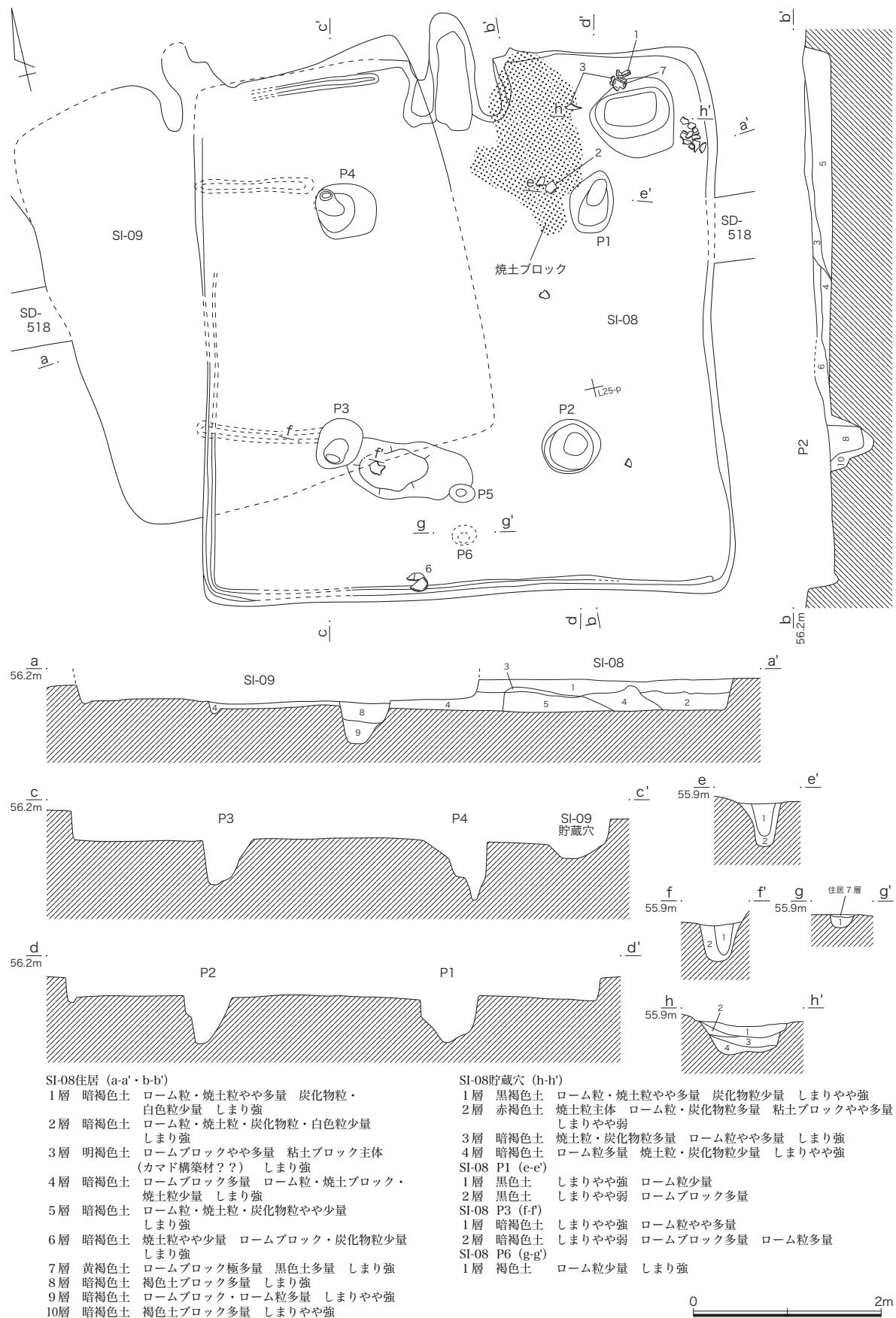
覆土 暗褐色土を主体とする。住居中央の覆土中に、黄褐色粘土がブロック状に堆積していた (3 層)。また、床面近くでは焼土がブロック状に点在しており、カマド東側のブロックが最も広範囲である (第27図網かけ部分)。覆土自体も、各層がブロック状に堆積している。

壁・壁溝 確認面から約 30cm の深さで、東壁は黒色土中に掘り込まれている。壁溝は北壁西側から南壁を取り囲むように確認されているが、床面が黒色土中となる東側では確認できなかった。

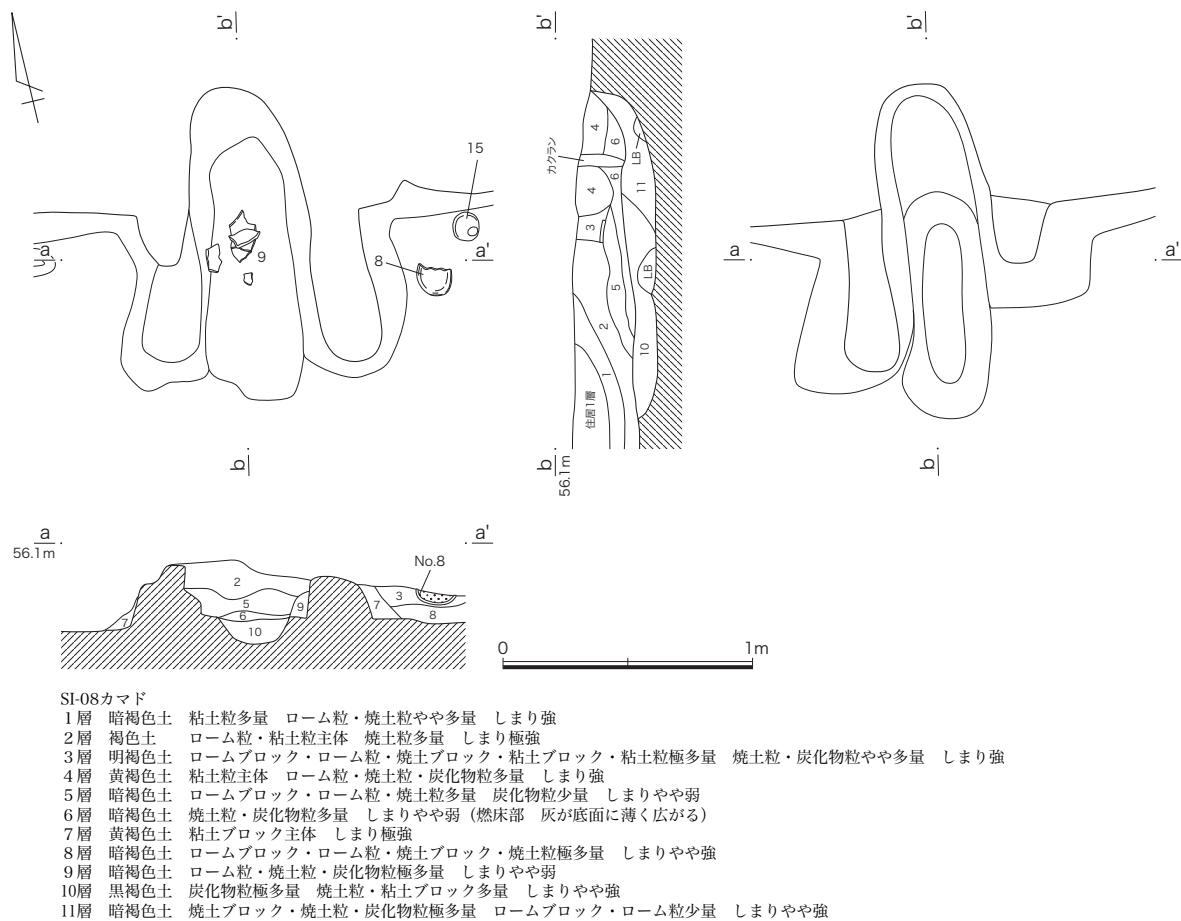
床面・貼床 住居西側ではロームブロックによる貼床が施され、床面は硬化している。東側部分では褐色土及びロームブロックを突き固めて貼床を施している。P3 の東側に、貼床が島状に厚く施される部分が確認された。掘方はない。

柱穴 4 本主柱。上面は大きく崩れ不整形を呈するが、P1 以外は矩形の掘り方を持つものと考えられる。いずれの柱穴も底面に柱痕の当たりがあり、P4 以外では柱痕状の土層も確認されている。P4 は底面北側が

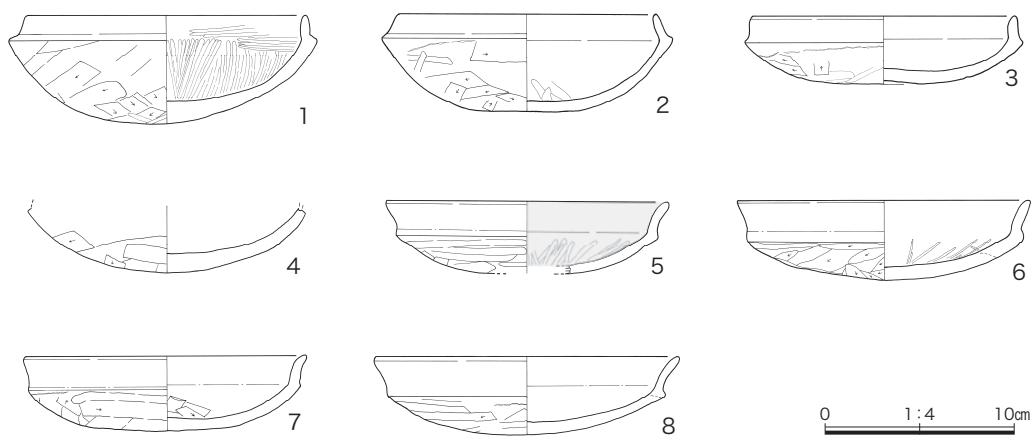
No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)
P1	65 × 45 × 47	主柱穴	P4	69 × 60 × 67	主柱穴	貯蔵穴	90 × 85 × 39
P2	65 × 55 × 49	主柱穴	P5	27 × 19 × 21	入り口ピット		
P3	57 × 43 × 49	主柱穴	P6	25 × 20 × 14	入り口ピット		



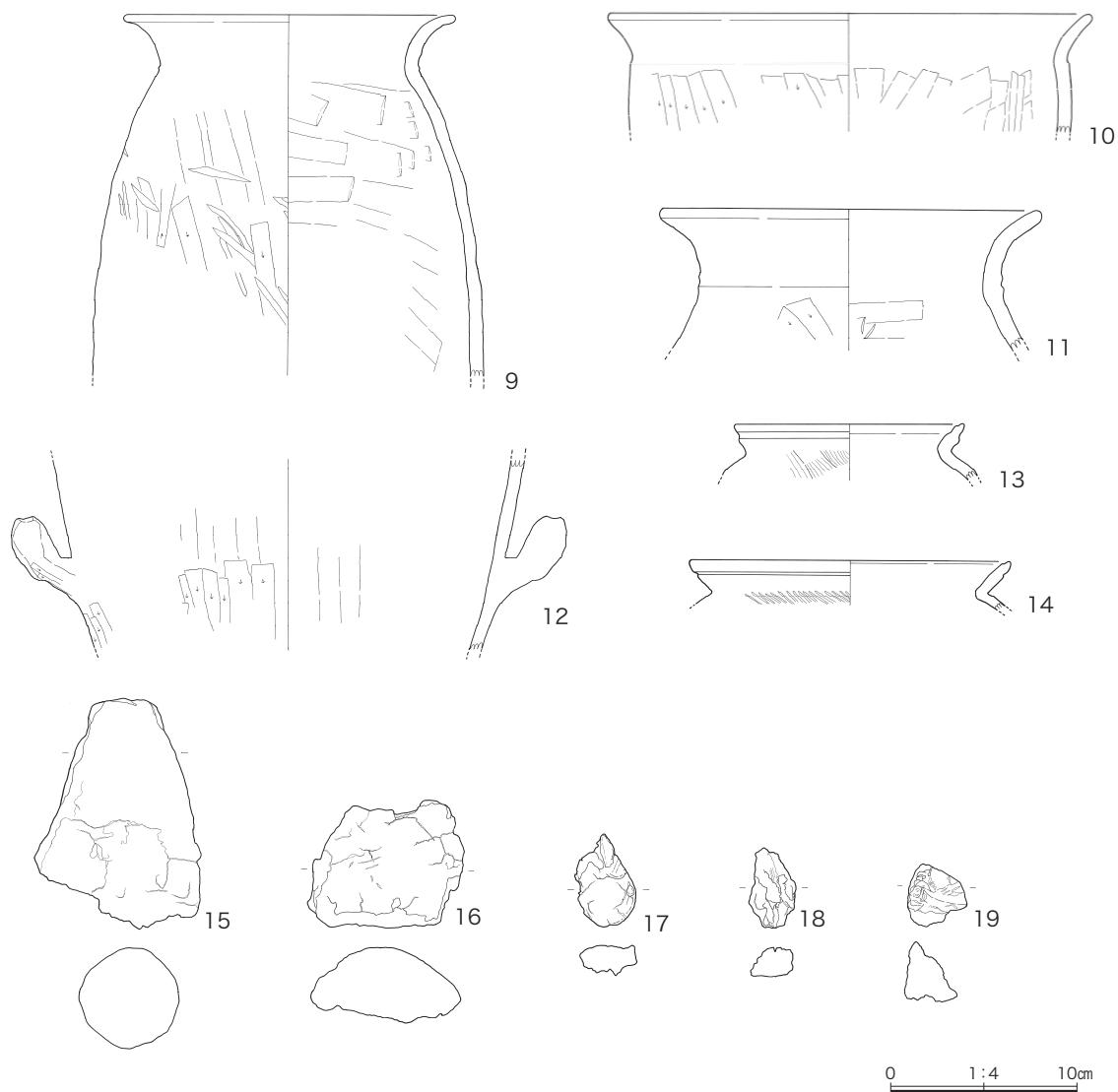
第27図 SI-08 竪穴住居跡 (1)



第28図 SI-08 壇穴住居跡（2）



第29図 SI-08 出土遺物（1）



第30図 SI-08出土遺物（2）

第12表 SI-08遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 坏	口 14.6 高 5.7	(内) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ底部近くナデ 内面あばた状の剥離 (残) 7/8	砂粒・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直・壁溝内 No.6
2 土師器 坏	口 (13.4) 高 (5.1)	(内) 口～体上半ヨコナデ、下半ナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 外面に輪積痕 (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 やや良 5YR4/4 にぶい赤褐	床直 No.9
3 土師器 坏	口 (13.8) 高 3.6	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 底部が凹む (残) 3/8	砂礫・白色粒子やや 多・雲母微 良 10YR4/2 灰黄褐	貯蔵穴上面 No.1 + No.2 +貯蔵穴
4 土師器 坏	高 (3.5)	(内) ヨコナデ (外) 体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ (残) 5/8	白色粒子やや多・砂礫少 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土 a・b

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
5 土師器 壺	口 (14.8) 高 (3.8)	(内) 口～体上半ヨコナデ→体放射状のミガキ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面黒色処理 口縁部直下に強いナデ (残) 4/8	白色粒子多・砂礫少 良 5YR3/4 暗赤褐	カマド周り
6 土師器 壺	口 15.4 高 4.2	(内) 口～体上半ヨコナデ→体放射状ミガキ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ→ヘラナデ (一部ミガキ) 完存	白色粒子少・雲母微 良 5YR5/4 にぶい赤褐	床直 No.2
7 土師器 壺	口 14.6 高 3.9	(内) 口～体上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部直下に輪積痕 (残) 6/8	砂礫多・白色粒子少・ 雲母微 良 10YR5/2 灰黄褐	床直 No.1
8 土師器 壺	口 (15.8) 高 4.1	(内) ヨコナデ体摩滅により不明 (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 胴部摩滅 (残) 6/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 良 7.5YR4/4 褐	焼土内床直 カマド No.10
9 土師器 甕	口 (17.6) 高 (19.2)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ+ヘラケズリ (残) 口～胴 2/8	砂礫・白色粒子多・ 雲母やや多 良 5YR4/3 にぶい赤褐	カマド内 カマド No.11
10 土師器 甕	口 (25.4) 高 (6.3)	(内) ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 被熱により赤化 (残) 1/8	砂礫・白色粒子・雲母多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	焼土
11 土師器 甕	口 (19.6) 高 (7.5)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 被熱により赤化 (残) 1/8	砂礫多・白色粒子やや多・ 雲母微 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土 c + d
12 土師器 甕	高 (10.2)	(内) 丁寧なナデ (外) ヘラケズリ 把手あり (2 単位?) (残) 1/8	砂粒多・砂礫やや多 良 5YR4/8 赤褐	覆土 b + d + 焼土
13 土師器 甕	口 (12.0) 高 (3.0)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ハケメ 口縁部 S 字状 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 やや良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直 No.3 SI-44 から の混入か?
14 土師器 甕	口 (17.0) 高 (2.0)	(内) ヨコナデ (外) 胴ハケメ (残) 1/8	白色粒子・黒色粒子多・ 雲母微 やや良 10YR5/2 灰黄褐	覆土 d
15 土製品 支脚?	長 (12.4) 幅 8.9 厚 7.2	手捏ね成形 表面に粗いナデ 上端部に狭い 平坦面 下端に粘土付着 被熱により赤化	白色粒子多 二次被熱 5YR5/6 橙	焼土内床直 No.12
16 焼成 粘土塊	長 6.8 幅 8.0 厚 4.4 重 154.09	塊状 実測図表面は全体的にナデ 裏面はユビナデ (指 紋・掌紋が残る) 一部溶けたように滑らかになっている 実測図上面は弱い被熱 支脚の破片か?	白色粒子微 二次被熱 10YR6/6 明黄褐	焼土内
17 焼成 粘土塊	長 5.0 幅 3.0 厚 1.8 重 14.6	塊状 実測図表面、裏面の一部にヘラ状工具によるナデ 裏面はちぎり取った痕跡有り	赤色融解粒多 二次被熱 5YR6/8 橙	カマド
18 焼成 粘土塊	長 4.3 幅 2.4 厚 1.5 重 9.0	塊状 実測図表面はちぎり取った痕跡 裏面はナデにより平滑化	赤色融解粒多・白色粒子少 二次被熱 5YR6/8 橙	焼土内
19 焼成 粘土塊	長 3.3 幅 3.1 厚 3.1 重 13.63	塊状 実測図表面にヘラ状工具によるキズ有り 全体的にナデではなく、凹凸が著しい	白色粒子微 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土

一段深く掘り込まれており、その部分には砂質ロームが堆積していた。覆土はP1のみ黒色土を主体としており、その他の柱穴は暗褐色土を主体とする。

入り口ピット 住居南壁寄りに2基確認されている。P5は約20cmの浅いピットで、住居覆土と同じ土層が堆積していた。P6は上面に貼床が施されており、古い入り口ピットと考えられる。深さは約15cmで、ロームブロックを主体とする褐色土が堆積していた。

間仕切り溝 P3・P4の西側で、貼床除去後に2条確認された。いずれも5cmほどの浅い溝である。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両側の袖と煙道が残っている。袖は黒色土の地山を掘り残した上に黄褐色粘土を貼り付けて構築している。右袖の外側には焼土混じりの粘土ブロックが大量に堆積しており（第27図網かけ部分）、その内部から土師器壺が出土している（第29図8）。カマド内部には天井崩落土と考えられる粘土ブロックが厚く堆積しており（2層・4層）、その下には焼土と炭化物が堆積していた（5・6層）。さらに6層の下には灰が薄く堆積していた。焚き口から中央にかけて浅い掘り込みがあり、その内部には焼土、炭化物、粘土が混ざり合って多く堆積していた。奥壁はややなだらかに立ち上がる。

カマド右袖外側の粘土ブロックを外した後、壁際で焼土や炭化物をほとんど含まない袖のような形の粘土が確認され、その中央から土製支脚が出土した。また、粘土周辺の床面に被熱痕が認められたため、別のカマドが存在する可能性を考えて調査を進めたが、粘土ブロックが住居壁面ラインに沿って堆積していること、奥壁にあたる掘り込みが認められないことから、カマドではないと判断した。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。上面は大きく崩れているが、長方形の掘り方であったと考えられる。覆土は、上層に黒褐色土と粘土を含む焼土、下層に暗褐色土が堆積している。焼土（2層）はカマド右袖外側に堆積していた粘土ブロックと同じ土層である。

遺物 カマドの他は北東隅から多く出土している。床面上からは第29図1・2・6～8、第30図15が出土している。

SI-09（第31・32図・図版七・四四）

位置 K25グリッドに位置する。

重複関係 東側約1/3がSI-08竪穴住居跡と重複している。新旧関係はSI-08（旧）→SI-09（新）である。また、上面をSD-518・SD-148・SK-519に切られている。

規模・形状 東西4.4m、南北4.3mのほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-2°-Wである。

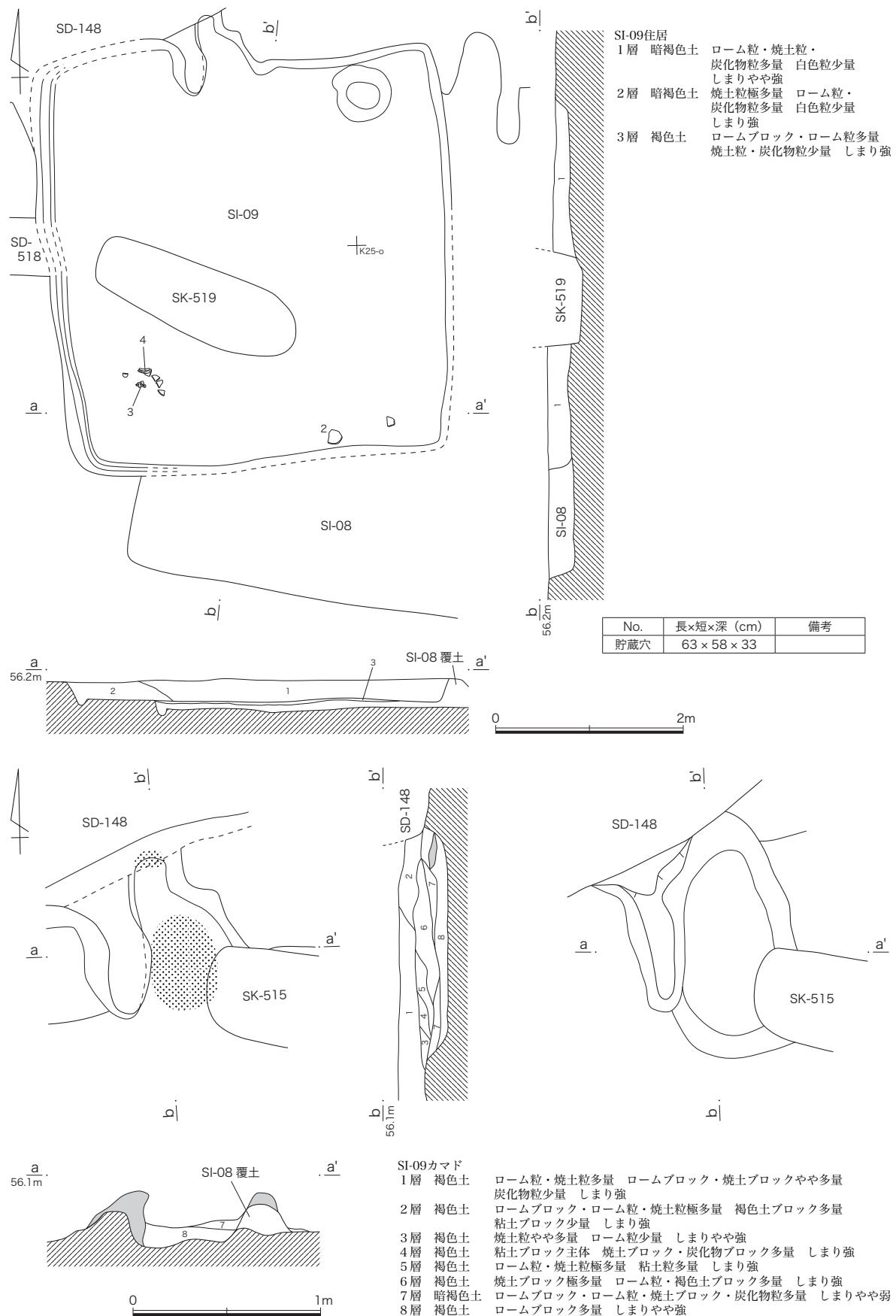
覆土 暗褐色土を主体とする。

壁・壁溝 確認面より約20cmの深さで、なだらかに立ち上がる。壁溝は住居西壁のみ確認されており、SI-08竪穴住居跡と切り合う部分では確認できなかった。覆土はロームブロックを多く含む褐色土で、しまりはやや弱い。

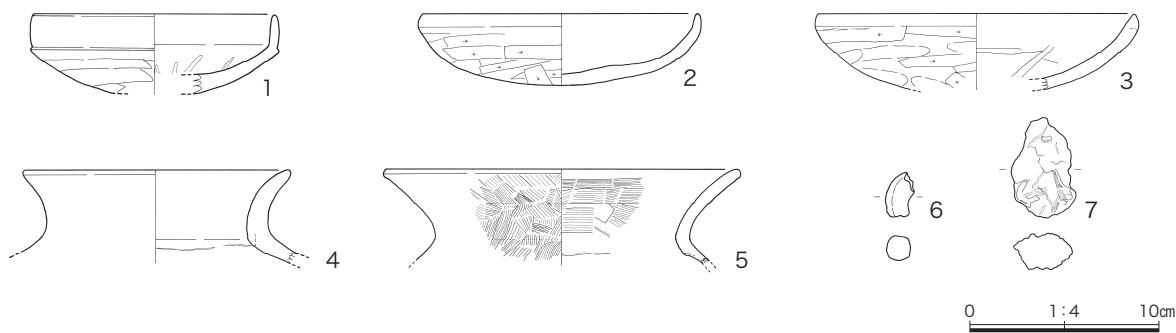
床面・貼床 ほぼ平坦で、全面にロームブロックによる貼床を施しているが。貼床は特にSI-08竪穴住居跡と切り合う部分で厚くなっている。掘方はない。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。左側の袖と煙道が残っているが、右袖はSK-515に切られてわずかにしか残っておらず、残存状況は極めて悪い。袖はSI-08竪穴住居跡と同じく、地山を掘り残した上に粘土を貼り付けて構築している。カマド内部には天井崩落土と考えられる粘土ブロックが多く堆積していた。底面はよく焼けている。奥壁はなだらかに立ち上がるが、先端がSD-148に切られている。煙道に焼けた粘土ブロックが貼り付くように堆積しており、煙道にも粘土が貼り付けられていたものと考えられる。

第3章 発見された遺構と遺物



第31図 SI-09 穫穴住居跡



第32図 SI-09出土遺物

第13表 SI-09遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (12.6) 高 (4.2) (残) 2/8	(内) 口～体上半ヨコナデ→放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ	砂礫・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	カマド・ カマド周辺・ 覆土
2 土師器 壺	口 (14.4) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 5/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.2
3 土師器 壺	口 (16.6) 高 (4.0) (残) 5/8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR4/1 褐灰	床上 +5cm No.6
4 土師器 壺	口 (13.6) 高 (4.9) (残) 1/8	内外面ともヨコナデ 頸部に輪積痕残る	白色粒子・砂礫やや多 雲母微 良 5YR6/6 橙	床上 +10cm No.4
5 土師器 甕	口 (18.4) 高 (5.0) (残) 1/8	内外面ともハケメ (外面は特に密) 頸部に輪積痕残る	砂礫・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土
6 焼成 粘土塊	長 2.3 幅 1.4 厚 1.3 重 3.93	棒状 ややカーブしている 表面はユビナデにより平滑化 実測図上端にヘラ状工具によるキズ残る	白色粒子やや多 良 10YR4/2 灰黃褐	覆土
7 焼成 粘土塊	長 5.3 幅 3.2 厚 2.1 重 16.85	塊状 実測図表面はユビナデ、草本植物の痕跡残る ひび割れ多い 裏面はちぎり取った状態	赤色融解粒・砂粒やや多 二次被熱 5YR5/6 赤褐色	カマド周辺

SI-10 (第33・34図・図版八・四四)

位置 M24 グリッドに位置する。

重複関係 住居北東隅で SI-02 壓穴住居跡、北西隅で SI-44 壓穴住居跡と切り合う。また、住居南側が SI-09 壓穴住居跡とわずかに切り合う。新旧関係は、SI-44 (旧) → SI-10 → SI-09・SI-02 (新) である。

規模・形状 東西 4.0 m、南北 4.1 m だが、東壁が推定値で 3.8 m と短くなっているため、歪んだ方形を呈する。各隅は丸みをおびている。主軸方向は N - 39° - W である。

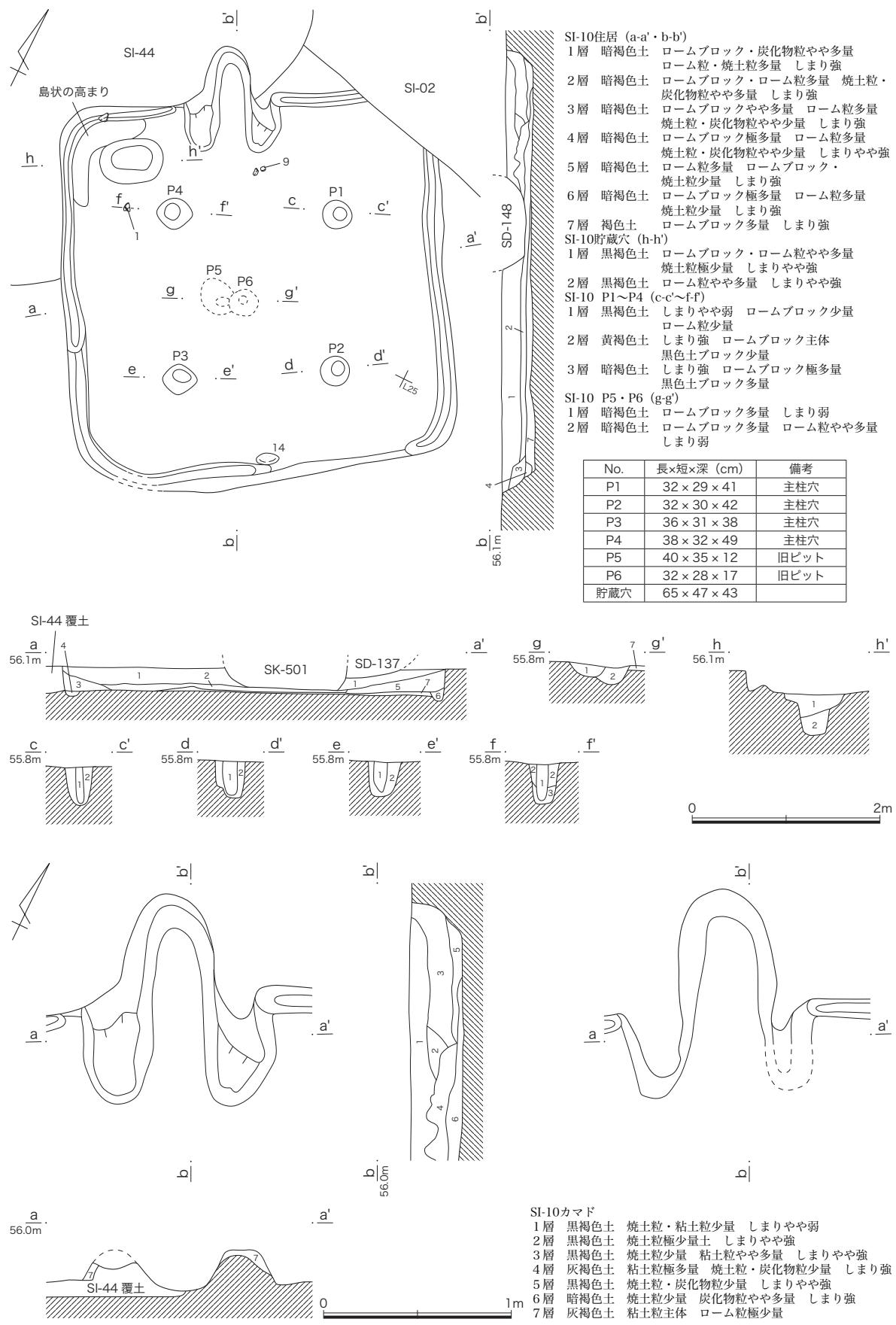
覆土 暗褐色土を主体とする。上下 2 層に分層され、下層 (2 層) はロームブロック・ローム粒を多く含む。

壁・壁溝 確認面から約 25cm の深さで、なだらかに立ち上がる。壁溝は南壁東側を除いてほぼ全周する。

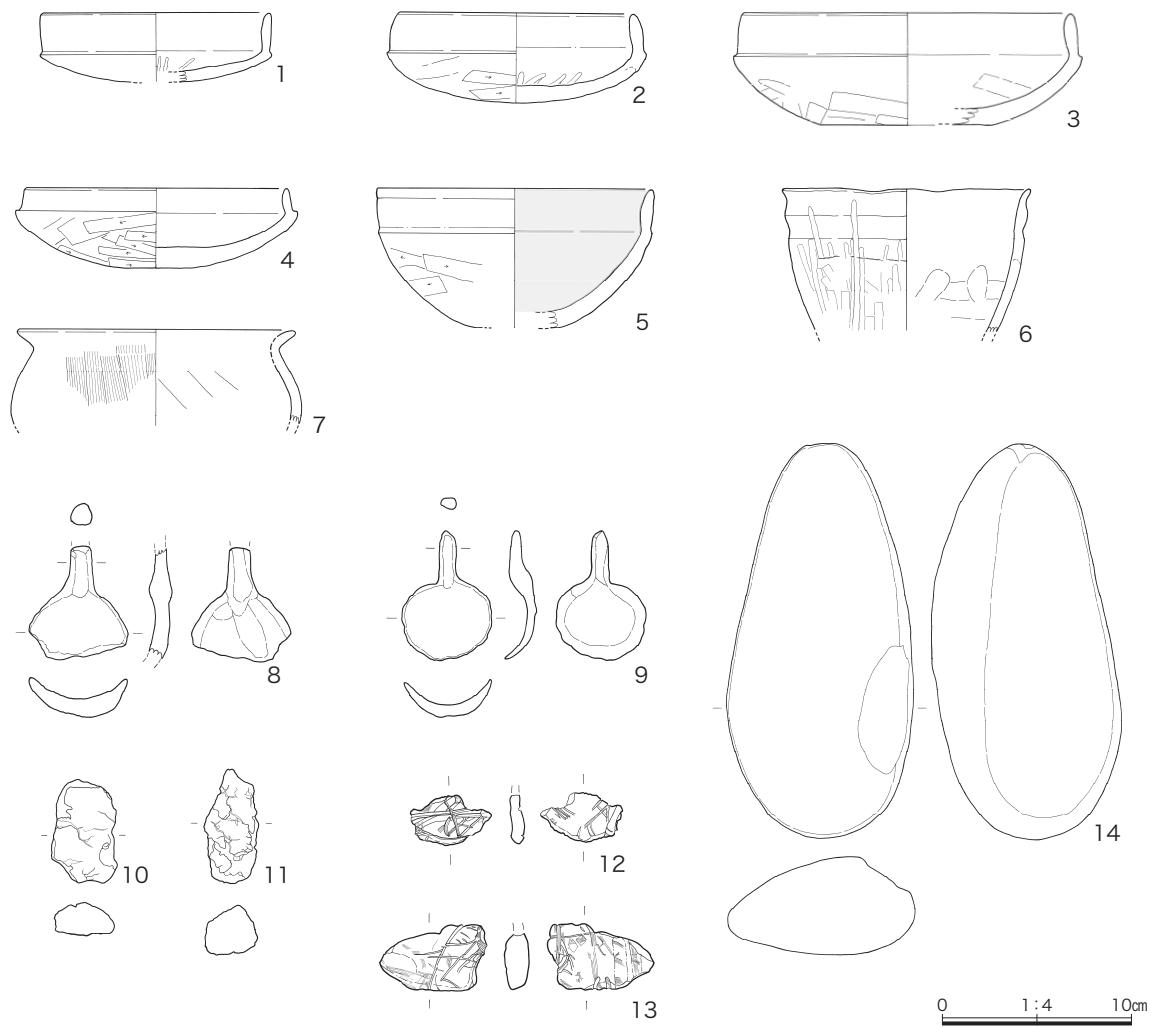
床面・貼床 全面にロームブロックによる貼床が施される。

掘方 南側が浅く窪むのみで、その他の部分に掘り方はない。貼床を除去した後、住居中央で浅いピットが 2 基確認された (P5・P6)。

第3章 発見された遺構と遺物



第33図 SI-10 竪穴住居跡



第34図 SI-10出土遺物

柱穴 4本主柱。P1・P2は円形、P3・P4は矩形の掘り方を呈する。全ての柱穴で柱痕状の土層が確認でき、その周りはロームブロックを主体とする褐色土で埋められている。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。両側の袖と奥壁が残っている。袖は地山（左袖はSI-44豎穴住居跡覆土）を掘り残した後に、灰褐色粘土を薄く貼り付けて構築している。カマド内部には粘土粒を多く含む層（3層）が堆積しているが、他のカマドに比べて焼土、炭化物粒は少ない。また、カマド内部もあまり焼けていない。煙道はやや長めに張り出し、急な角度で立ち上がる。

貯蔵穴 住居北西隅で確認された。上面は東西に長い楕円状を呈する。床面から10cmほどのところで段状に掘り込まれており、断面は凸型を呈する。覆土は黒褐色土を主体とする。貯蔵穴と住居北西隅の間では、地山を5cmほど島状に掘り残している。

遺物 出土量は少なく、床面に伴う遺物もない。カマド前と住居南西の覆土中から匙状土製品（第34図8・9）が出土している。

第3章 発見された遺構と遺物

第14表 SI-10 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (11.8) 高 (3.6) (残) 2/8	(内) 口ヨコナデ体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体摩滅	白色粒子多・砂礫少 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床上 +10cm No.3
2 土師器 壺	口 (12.2) 高 4.7	(内) 口～体上半ヨコナデ→下半放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 4/8	白色粒子多 良 10YR3/1 黒褐	覆土 b
3 土師器 壺	口 (17.2) 底 (9.2) 高 (5.9)	(内) ヨコナデ→一部ナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 平底 内面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	カマド
4 土師器 壺	口 (13.6) 高 4.2	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 6/8	白色粒子・砂礫や多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 a・d・ 覆土
5 土師器 碗	口 (14.4) 高 (7.3)	(内) 口～体上半ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面黒色処理 底部木葉痕 (残) 3/8	砂粒・白色粒子多 二次被熱 7.5YR4/2 褐灰	覆土 b・c
6 土師器 碗？	口 (13.0) 高 (7.4)	(内) 口～体上半ヨコナデ体下半ナデ (外) 口ヨコナデ体ナデ 口縁部有段 脊上半に輪積痕 (残) 1/8	白色粒子多・砂礫や多・ 雲母微 良 7.5YR4/3 褐	覆土 b
7 土師器 甕	口 (14.4) 高 (5.0)	(内) 口ヨコナデ脣ヘラナデ (外) 口ヨコナデ脣ハケメ 頸部内面剥落 口縁部外面に煤状の付着物 (残) 1/8	白色粒子多・砂礫や多・ 雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 d
8 匙状 土製品	長 6.0 匙部厚 0.8 匙部径 (5.2)	手捏ね成形。匙部外面指ナデ、裏面は調整なし。 匙部 1/2、柄部の先端が欠損。	白色粒子多・砂礫や多 良 10YR6/6 明黄褐	覆土 c
9 匙状 土製品	長 6.9 匙部厚 0.5 匙部径 4.7	手捏ね成形。匙部内面指ナデ、裏面は調整なし。 完存。	砂礫や多・雲母微 良 10YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.1
10 焼成 粘土塊	長 5.5 幅 3.2 厚 1.6 重 25.91	塊状 実測図表面はユビナデ 裏面は接合部がはがれた状態で、タール状の付着物が見られる 支脚の破片か？	白色粒子多・赤色融解粒微 二次被熱 5YR5/6 赤褐色	カマド一括
11 焼成 粘土塊	長 6.0 幅 2.8 厚 2.5 重 24.71	塊状 実測図表面はちぎり取った状態でヘラ状工具によるキズが残る 裏面はナデにより平滑化	赤色融解粒極多 二次被熱 5YR6/6 橙	カマド一括
12 焼成 粘土塊	長 2.6 幅 5.3 厚 0.7 重 5.88	扁平 実測図左面は木葉痕の上に草本植物の痕跡残る 右面は草本植物の痕跡と棒状工具による凹線 よく焼けて硬化している	砂礫少 二次被熱 5YR6/6 橙	カマド一括
13 焼成 粘土塊	長 3.5 幅 5.6 厚 1.3 重 212.5	扁平 実測図左面はヘラ状工具と草本植物の痕跡が残る 右面はヘラ状工具と草本植物の痕跡の上から棒状工具による凹線 12 とよく似る	砂礫少 二次被熱 5YR6/6 橙	カマド一括
14 礫	長 21.1 幅 10.0 厚 5.5 重 1457.7	断面三角状 右側面一部欠け、その周辺にタール状の付着物	2.5Y6/1 黄灰 安山岩	床上 +10cm No.5

SI-11 (第35～37図・図版八・四四)

位置 J26 グリッドに位置する。

重複関係 北東部分でSI-45 竪穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-11（旧）→SI-45（新）である。また、カマドと柱穴の作り替えを伴う住居の建て替えが1回行われており、SI-11a（新段階）、SI-11b（旧段階）にわけられる。

規模・形状 推定値で東西が6.1m、南北が6.3mである。西側約1/3は床面まで削平されており、全体の形状は不明である。

SI-11a (第35～37図)

覆土 暗褐色土を主体とする。上下2層に分層され、下層は堅くしまっている。

壁・壁溝 残存部分は確認面から約30cmで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝は南壁西側でのみ確認された。深さは約5cmと浅い。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が全面に施される。

柱穴 4本主柱。P1は円形、それ以外は矩形の掘り方を呈する。P1以外では柱痕が認められ、その周囲はロームブロックを主体とする黄褐色土で埋められている。P1はロームブロックと黒色土ブロックを多く含む土層が堆積しているが、SI-45 竪穴住居跡の床下に位置しており、SI-45構築時に埋め戻された可能性が高い。

張り出しピット 南壁中央に構築されている。壁の張り出し部分から約15cm内側に、一回り小さい長方形の土坑を掘り込んでいる。覆土は住居覆土と比べ黒みが強い。土坑の北壁に接した状態で、土師器甕が出士している（第37図9）。甕の下半は打ち欠かれている。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。西側が大きく削平されているため、残っているのは右袖のみである。袖は黄褐色粘土で構築されている。カマド内部には焼土と炭化物が厚く堆積している（4層）。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。上面はSI-45 竪穴住居跡の貼床が施されており、覆土上層はP1と同じようにロームブロックが多く含まれる土層が堆積している。長方形の掘り方を呈し、深さは約45cmである。

遺物 カマド周辺と張り出しピット周辺から出土している。大きく削平されているにも関わらず出土量は比較的多いが、床面に伴う遺物は第37図6の土師器壺のみである。

SI-11b (第36図)

壁・床面 壁はSI-11aと共通である。貼床は確認できなかった。

柱穴 SI-11aの貼床除去後、床面での柱穴とは別に、柱穴状のピット（P5～P7）と浅いピット（P8）が確認された。P5～P7はロームブロックを多量に含む土層が堆積しており、埋め戻されたものと考えられる。

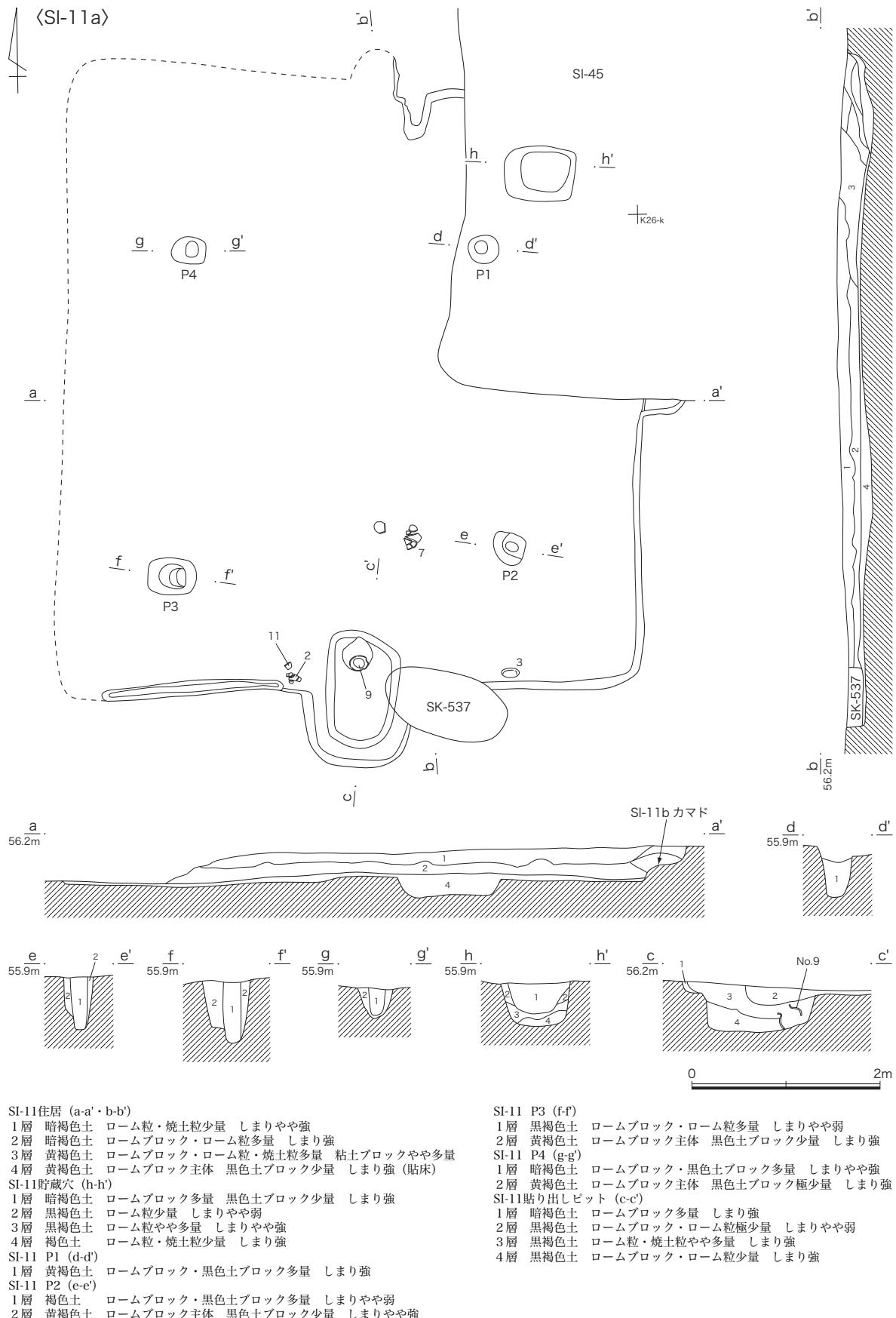
掘方 住居中央に楕円状で深さ約20cmの浅い掘り込み、住居南東で深さ5cm程度の間仕切り状の溝が確認された。

火廻 住居東壁中央には掘方に伴うと考えられるカマドが確認された。右袖がわずかに残るのみで、他の部分は残存していない。また、北側半分はSI-45 竪穴住居跡に切られている。覆土は暗褐色土を主体とし、下層に焼土が多く含まれる。煙道は床面よりも1段高くなっている。

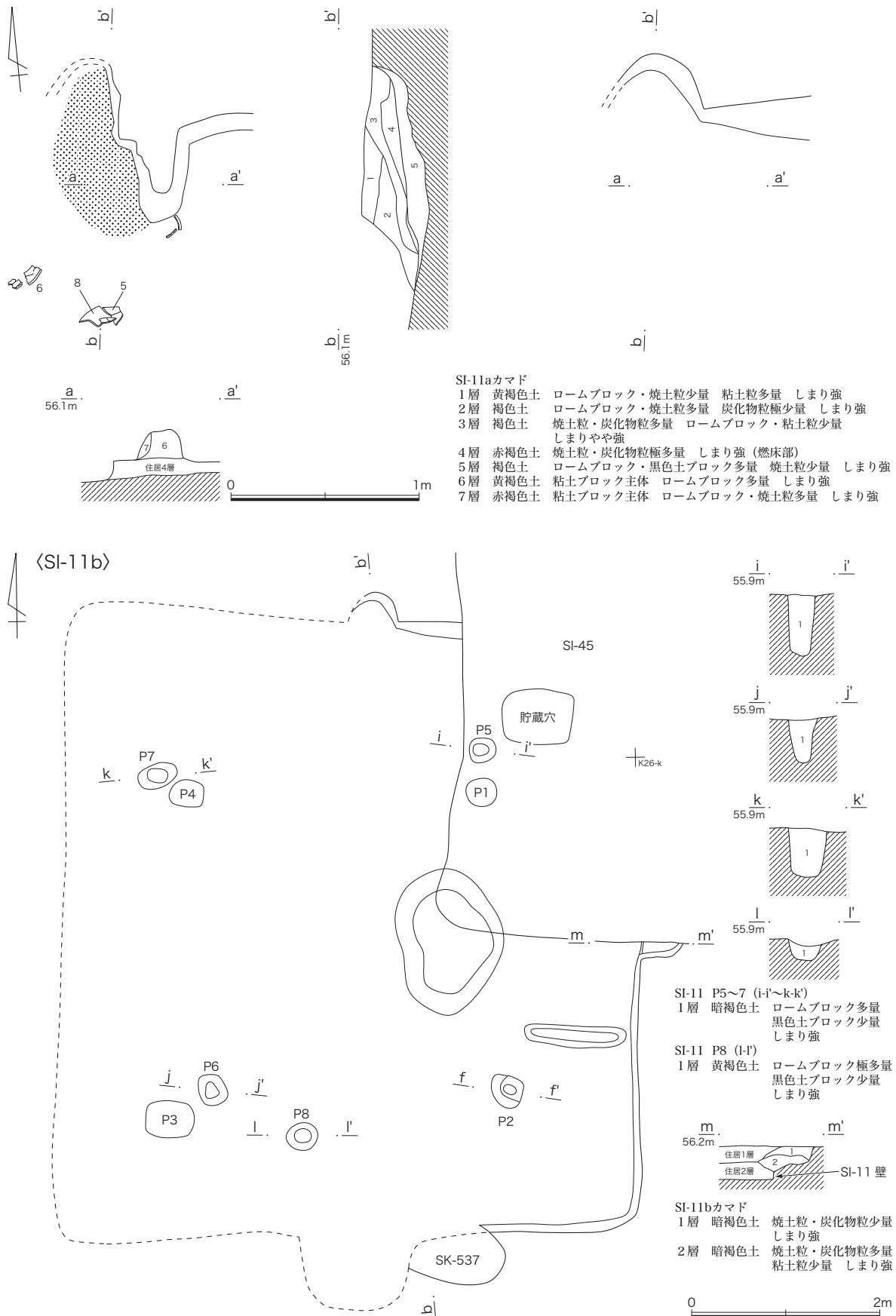
遺物 SI-11bに伴う遺物は出土しなかった。

No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)
P1	33×30×42	a 主柱穴	P5	29×26×65	b 主柱穴	a 貯蔵穴	75×60×51
P2	42×33×70	a・b 主柱穴	P6	35×30×48	b 主柱穴	a 張り出しピット	127×75×39
P3	52×40×67	a 主柱穴	P7	42×25×85	b 主柱穴		
P4	36×29×43	a 主柱穴	P8	34×29×16	b 入口ピット		

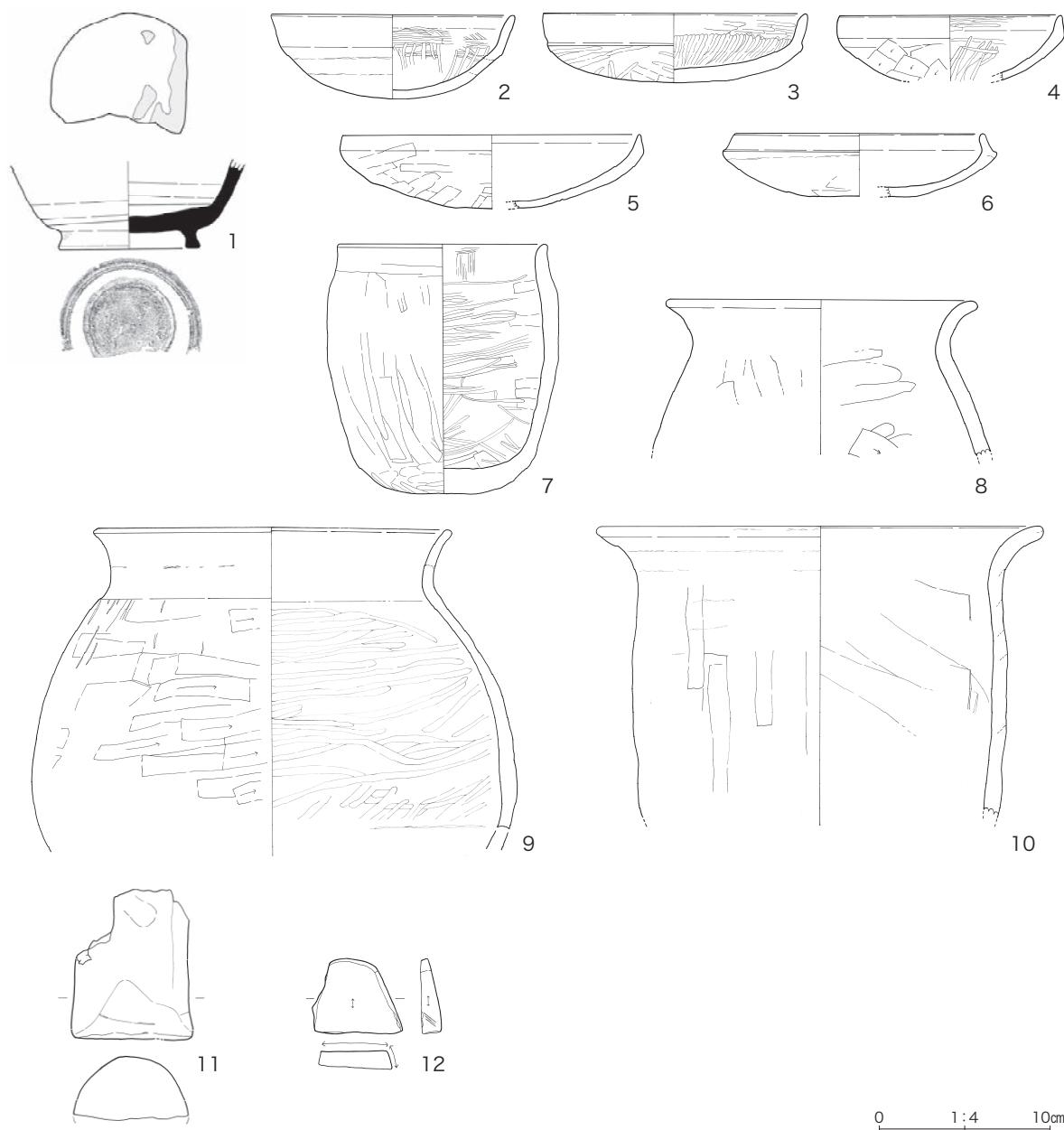
第3章 発見された遺構と遺物



第35図 SI-11 竪穴住跡 (1)



第36図 SI-11 竪穴住居跡（2）



第37図 SI-11出土遺物

第15表 SI-11遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 瓶か？	高台部径 (8.2) 高 (5.1)	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 内面に煤状の付着物 高台付 (残) 4/8 益子産	砂礫・白色粒子多 やや不良 10YR5/1 灰	覆土 b
2 土師器 坏	口 14.0 高 4.9	(内) 口ヨコナデ→口横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ミガキ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 4/8	白色粒子・砂粒や多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +5cm No.2
3 土師器 坏	口 15.2 高 4.0	(内) 口ヨコナデ→口横方向ミガキ体放射状ミガキ (密) (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ→ミガキ (残) 6/8	雲母多・砂粒少 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床上 +10cm No.6

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
4 土師器 壺	口 (13.0) 高 (3.8)	(内) ヨコナデ→口横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫多 二次被熱 2.5YR5/8 明赤褐	覆土 c
5 土師器 壺	口 (17.2) 高 (4.3)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	砂粒やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上 +15cm No.7
6 土師器 壺	口 (14.2) 高 (3.7)	(内) 剥落により不明 (外) ヨコナデ底部近くヘラケズリ (残) 2/8	砂礫やや多 二次被熱 2.5YR5/6 明赤褐	床直 No.9
7 土師器 甕	口 (12.2) 大 (13.6) 高 14.5	(内) ヨコナデ胴横方向粗いヘラケズリ→粗いミガキ 底粗いケズリ (外) 脊継方向ケズリ底ミガキ 丸底 (残) 4/8	微細な白色粒子・砂礫少 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.5
8 土師器 甕	口 (18.2) 高 (9.1)	(内) ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) ヨコナデ胴継方向ヘラケズリ 摩滅強 (残) 2/8	砂礫多 二次被熱 10YR6/4 にぶい橙	床上 +5cm No.8 + c +カマド
9 土師器 甕	口 21.4/21.0 高 (17.9)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ (外) ヨコナデ胴継方向ヘラケズリ→横方向ヘラケズリ 口縁部梢円形に歪む (残) 口～胴 8/8	砂礫やや多・砂粒少 良 7.5YR6/6 明黄褐	張出ピット内 No.1
10 土師器 甕	口 26.0 高 (16.9)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部に輪積痕残る 脊部中位に焼けた粘土が貼り付いている (残) 口～胴 4/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +5cm No.6 + 覆土 b + d
11 土製品 支脚	長 (8.8) 幅 6.7 重 189.48	手捏ね成形 下端粗いケズリ	砂礫やや多 二次被熱 7.5YR6/6 橙	床上 +5cm No.3
12 石製品 砥石	長 (4.35) 幅 (5.0) 厚 1.0	表面と右側面の2面使用。右側面に刃潰し痕あり。 表面は著しく平滑化している。	2.5Y5/3 黄褐	覆土 a

SI-12 (第38・39図・図版八・四四)

位置 K27 グリッドに位置する。

重複関係 住居東側 1/2 が SI-13 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-13(旧) → SI-12(新)である。また、SK-387・561・562・SD-361 に切られる。

規模・形状 東西 3.6 m、南北 3.0 mだが、西壁が推定値で 2.8 m と短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 10° - E である。

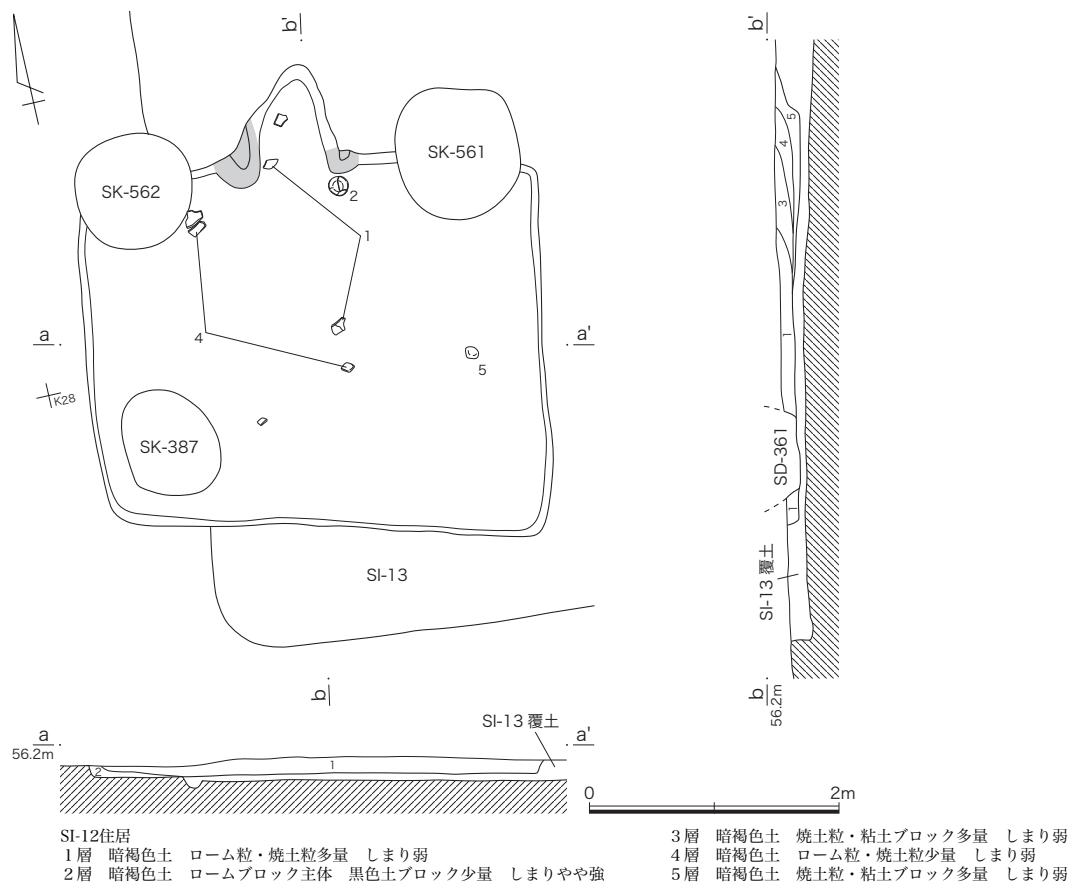
覆土 暗褐色土を主体とし、ローム粒・焼土粒が多量に含まれている。

壁 確認面から約 15cm の深さで、なだらかに立ち上がる。上面を大きく削平されているため、残存状況は悪い。壁溝はない。

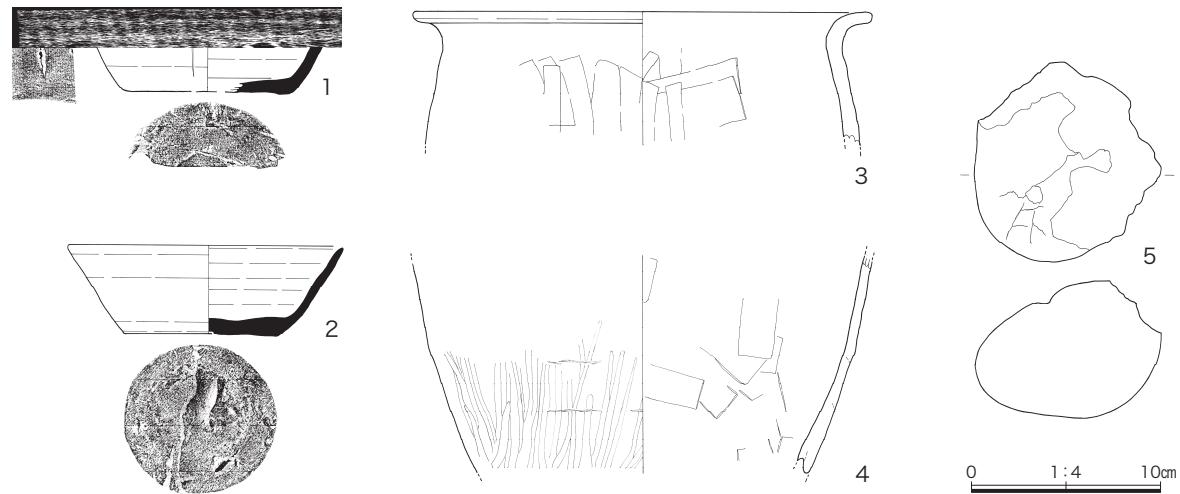
床面・貼床 SI-13 と切り合っている部分には貼床が認められず、床がローム層の部分にのみ貼床が施される。掘り方はない。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。上面の削平により、両袖と奥壁がわずかに残存するのみである。両袖は黒みを帯びた白色粘土で構築されている。内部はあまり焼けていないが、焼土と粘土ブロックが多く堆積していた（5層）。煙道は段状に立ち上がる。

遺物 カマド周辺と覆土中から出土しているが、出土量は少ない。床面に伴う遺物は、第39図1・2の須恵器壺、5の礫である。



第38図 SI-12 壇穴住居跡



第39図 SI-12 出土遺物

SI-13 (第40～42図・図版九)

位置 K27・28 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側で SI-12 壇穴住居跡、住居東側で SI-14 壇穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-14 (旧)
 → SI-13 → SI-12 (新) である。

第16表 SI-12 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (13.3/13.6) 底 (6.6/8.8) 高 3.5	内外面クロナデ 底部ヘラ切り離し後調整なし 外面ヘラ記号有り 歪み大 (残) 4/8 益子産	白色粒子・砂礫多 良 2.5YR4/2 灰赤	床直 No.2 + No.5
2 須恵器 壺	口 14.4 底 8.4 高 4.7	内外面クロナデ 底部ヘラ切り離し後調整なし (残) 7/8 益子産	砂粒・白色粒子微 良 5Y4/1 灰	床直 No.3
3 土師器 甕	口 (24.2) 高 (7.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヨコナデつけ・ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫極多 良 7.5YR4/3 褐	覆土 b + d
4 土師器 甕	高 (11.4)	(内) ヘラナデつけ (外) 胴下半部縦方向密なミガキ (残) 5/8	砂礫・白色粒子・雲母多 良 7.5YR5/6 明褐	床上 +5cm No.4 + No.6 + 覆土一括
5 礫	長 10.5 幅 9.8 厚 7.2 重 815.6	破碎した円礫 内部に雲母片が見られる 一部磨面あり	2.5Y6/3 にぶい黄	床直 No.8

規模・形状 東西が 6.1 m、南北が 6.8 m だが、西壁が 6.0 m と短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 6° - E である。

覆土 暗褐色土を主体とする。覆土断面の観察から、住居西側から埋没が始まり、東側に向かって斜面状に堆積している様子が確認できる。3 層はカマド前面から住居中央に向かって堆積する土層で、黄褐色粘土ブロックや焼土粒、ローム粒が多量に含まれている。カマド構築材が廃棄されたものと考えられる。

壁・壁溝 確認面から約 20cm の深さで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分を除き全周しており、5 ~ 10cm 程度の深さである。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が全面に施され、特に中央部分の硬化が著しい。

掘方 ほぼ平坦で浅い。P1 周辺の床下でピットが 3 基確認されている (P6 ~ P8)。

柱穴 4 本主柱。いずれも上面が崩れた楕円状の掘り方を持つが、P3 は周辺の床まで大きく崩れている。掘り方の傾きから、P1・P2 は西、P3 は東、P4 は南へ柱を引き倒したと考えられる。

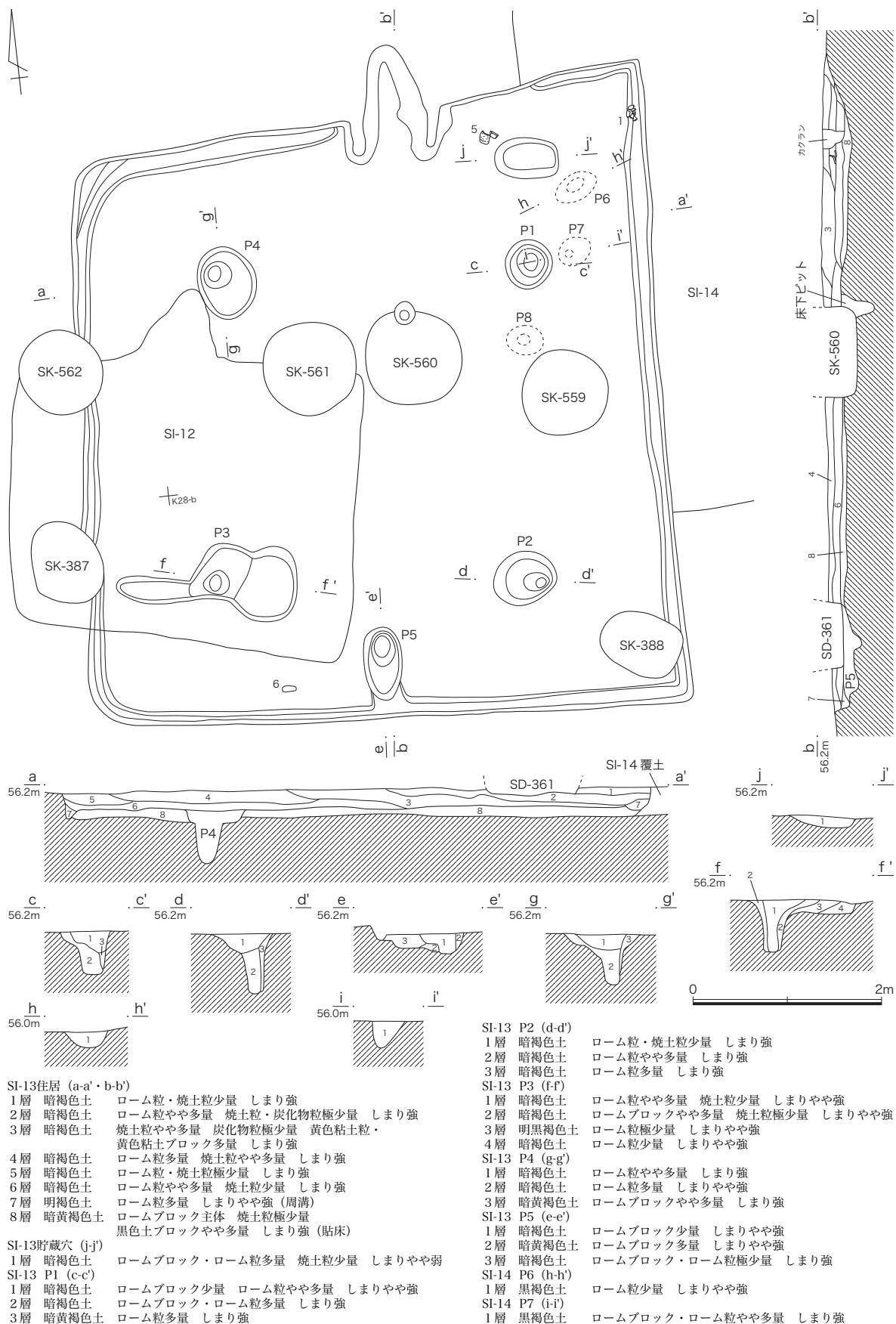
入り口ピット 南壁中央で確認された。楕円状の掘り方で、北側が一段下がる。深さは約 20cm である。周溝からピットに向かって間仕切り状の溝がのびている。

間仕切り溝 P3 西側に間仕切り状の溝が確認されているが、柱穴抜き取りに伴う穴とも考えられるが、判然としない。深さは約 20cm である。

火廻 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。両袖は地山の掘り残しではないロームブロックと黒褐色土が混ざり合った土を芯材とし、その上に灰褐色粘土を貼り付けて構築している。また、奥壁にも粘土を貼り付けている。内部はよく焼けており、焼土・炭化物が多量に堆積している。煙道は緩やかに立ち上がるが、貼り付けた粘土除去後の掘り方は急に立ち上がっている。焚き口や底面に掘り込みはなく、底面は平坦である。カマド前面から土師器甕の破片が多く出土している。

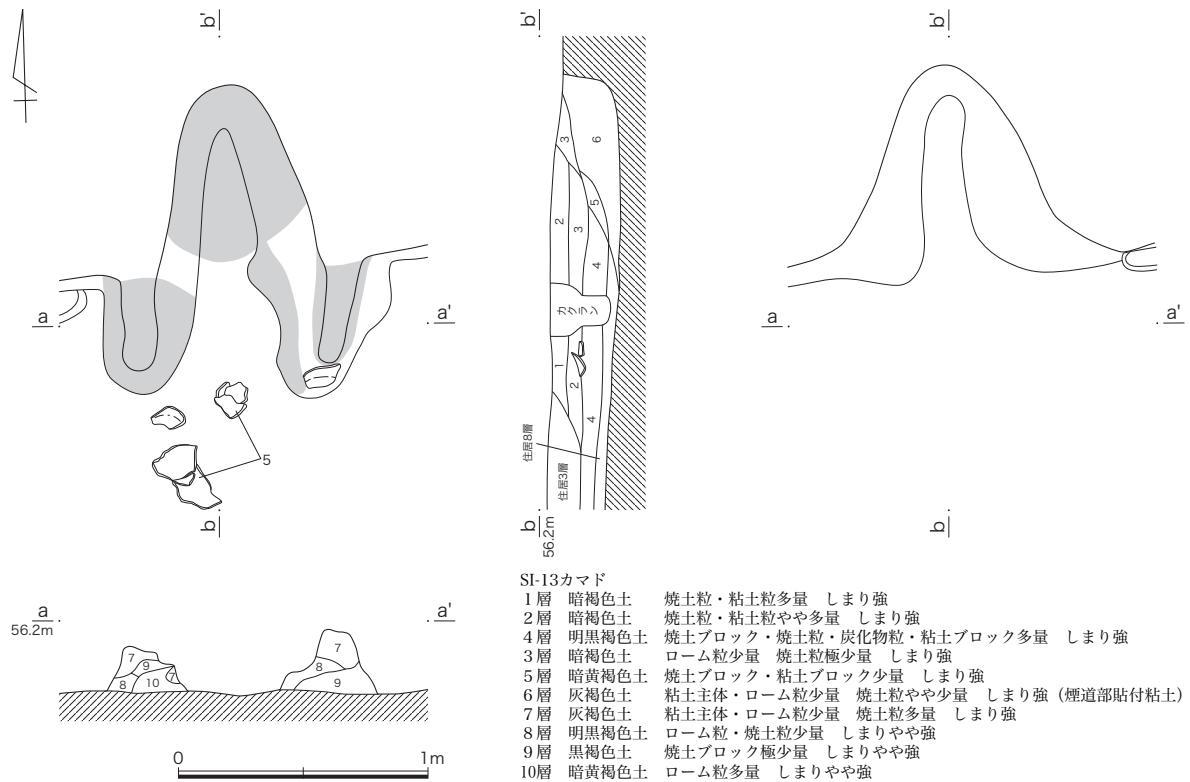
貯蔵穴 住居北東隅で確認された。長方形に近い楕円状の掘り方で、約 10cm と浅い。

遺物 カマド周辺からまとまって出土しているが、出土量は少ない。床面に伴う遺物は、第 42 図 1 の土師器壺、6 の礫のみである。覆土中からは、剣形の石製模造品が出土している (第 42 図 7)。

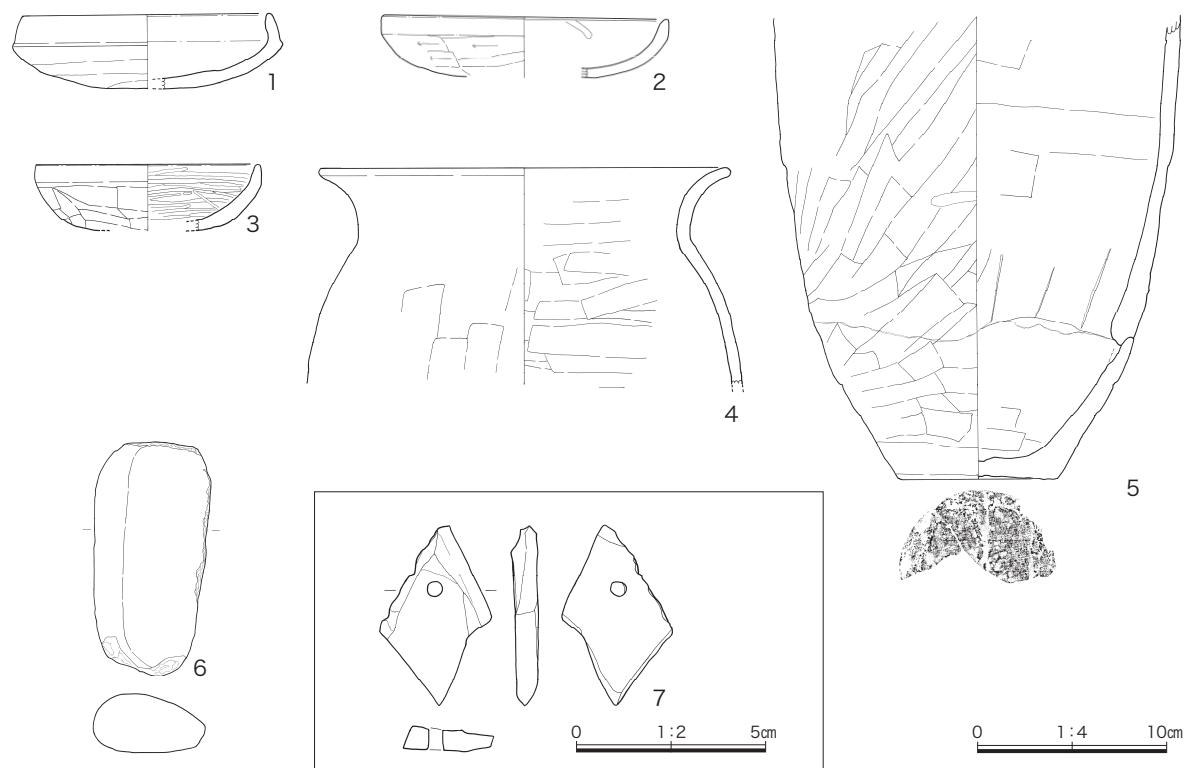


第40図 SI-13 竪穴住跡 (1)

No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	53 × 50 × 51	主柱穴	P4	76 × 62 × 55	主柱穴	P7	37 × 29 × 30	旧主柱穴?
P2	67 × 57 × 62	主柱穴	P5	83 × 40 × 21	入り口ピット	P8	40 × 32 × 11	床下ピット
P3	110 × 60 × 55	主柱穴	P6	49 × 28 × 17	床下ピット	貯藏穴	68 × 42 × 13	



第41図 SI-13 穫穴住居跡（2）



第42図 SI-13 出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第17表 SI-13 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (13.0) 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 3/8	白色粒子極多 良 7.5YR3/3 黒褐	床直 No.9
2 土師器 壺	口 (15.2) 高 3.2	(内) ヨコナデ、一部ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多・雲母微 良 10YR3/2 黒褐	床下
3 土師器 壺	口 (11.8) 高 3.4	(内) ヨコナデ→横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR6/6 明黄褐	覆土 b
4 土師器 甕	口 (21.8) 高 11.4	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 3/8	砂礫極多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	覆土 d+ カマド
5 土師器 甕	底 (8.4) 高 (24.3)	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕 胴部下半に輪積痕残る (残) 4/8	砂礫・白色粒子極多 二次被熱 5YR5/4 にぶい赤褐	床上 +10cm No.3+6+7 + 覆土 a+ カマド
6 礫	長 13.3 幅 6.6 厚 3.4 重 455.2	断面三角状 上下端及び左側面に敲打痕	10YR6/3 にぶい黄橙 安山岩	床直 No.10
7 石製模 造品？	長 4.4 幅 2.6 厚 0.6 重 5.64 孔径 0.4	菱形に粗割し、整形・調整は行っていない。表裏面と右 下側面以外は自然面が残る。実測図左側の面左上に丸み をおびる溝あり。穿孔は実測図左側から行われている。 剣形模造品か？	10Y4/1 灰 粘板岩	覆土 a

SI-14 (第43～47図・図版九・四四)

位置 K27 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側でSI-13と重複する。新旧関係は、SI-14(旧)→SI-13(新)である。

規模・形状 東西が推定値で5.8m、南北が5.9mだが、西壁が推定値で5.5mと短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-7°-Wである。

覆土 暗褐色土を主体とし、ローム粒・焼土粒・白色粒が多く含まれている。覆土下層にはロームブロックが多く含まれる。

壁・壁溝 確認面から約20cmの深さで、ややなだらかに立ち上がる。壁溝はない。

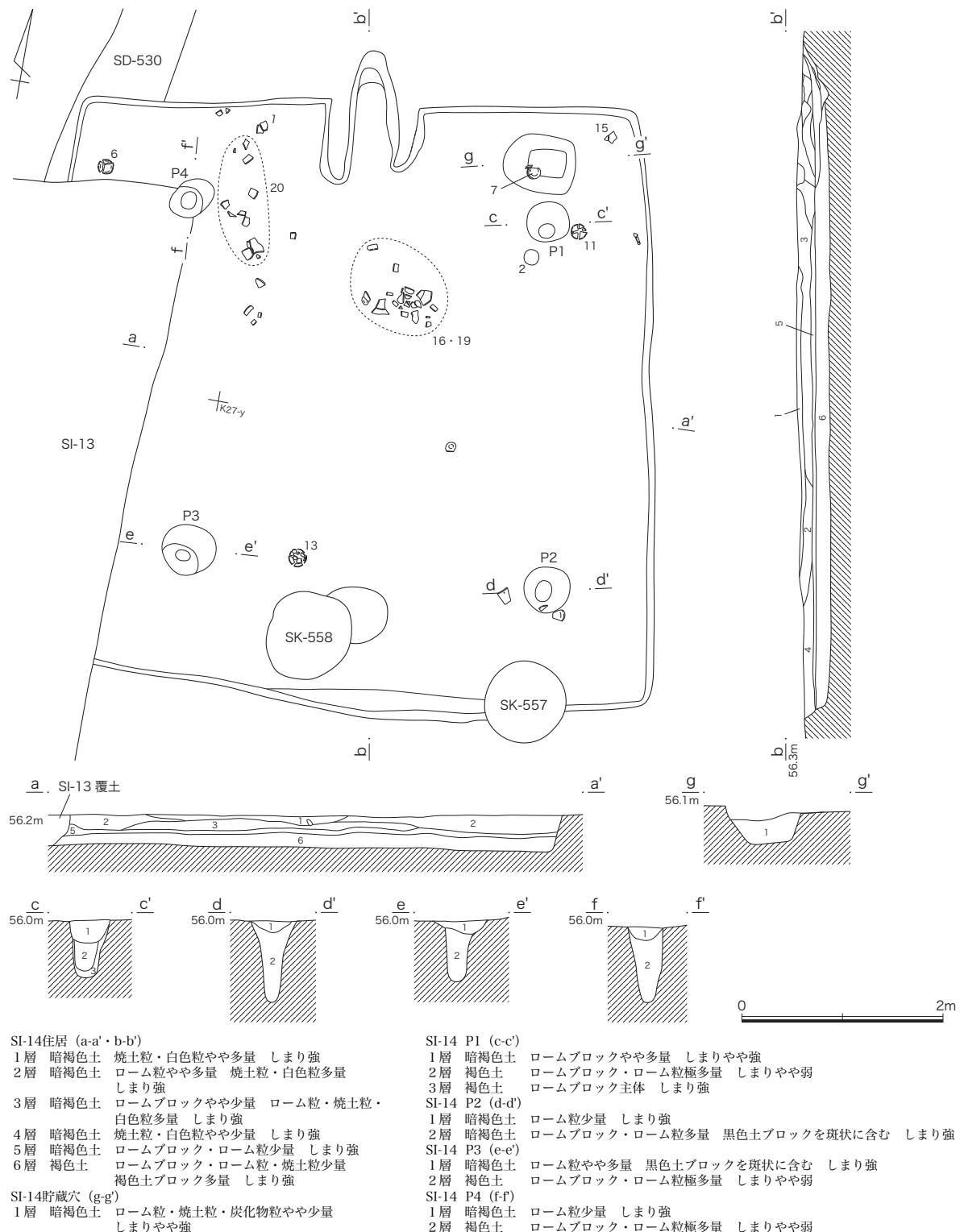
床面・貼床 住居中央にロームブロックによる貼床が施されているが、住居周縁部分では明確ではない。

掘方 床面から約15cmの深さで、ほぼ平坦である。床下のピット等はない。

柱穴 4本主柱。いずれも円形の掘り方で、柱痕は確認できなかった。覆土は暗褐色土を主体とし、ロームブロックが多く含まれる。

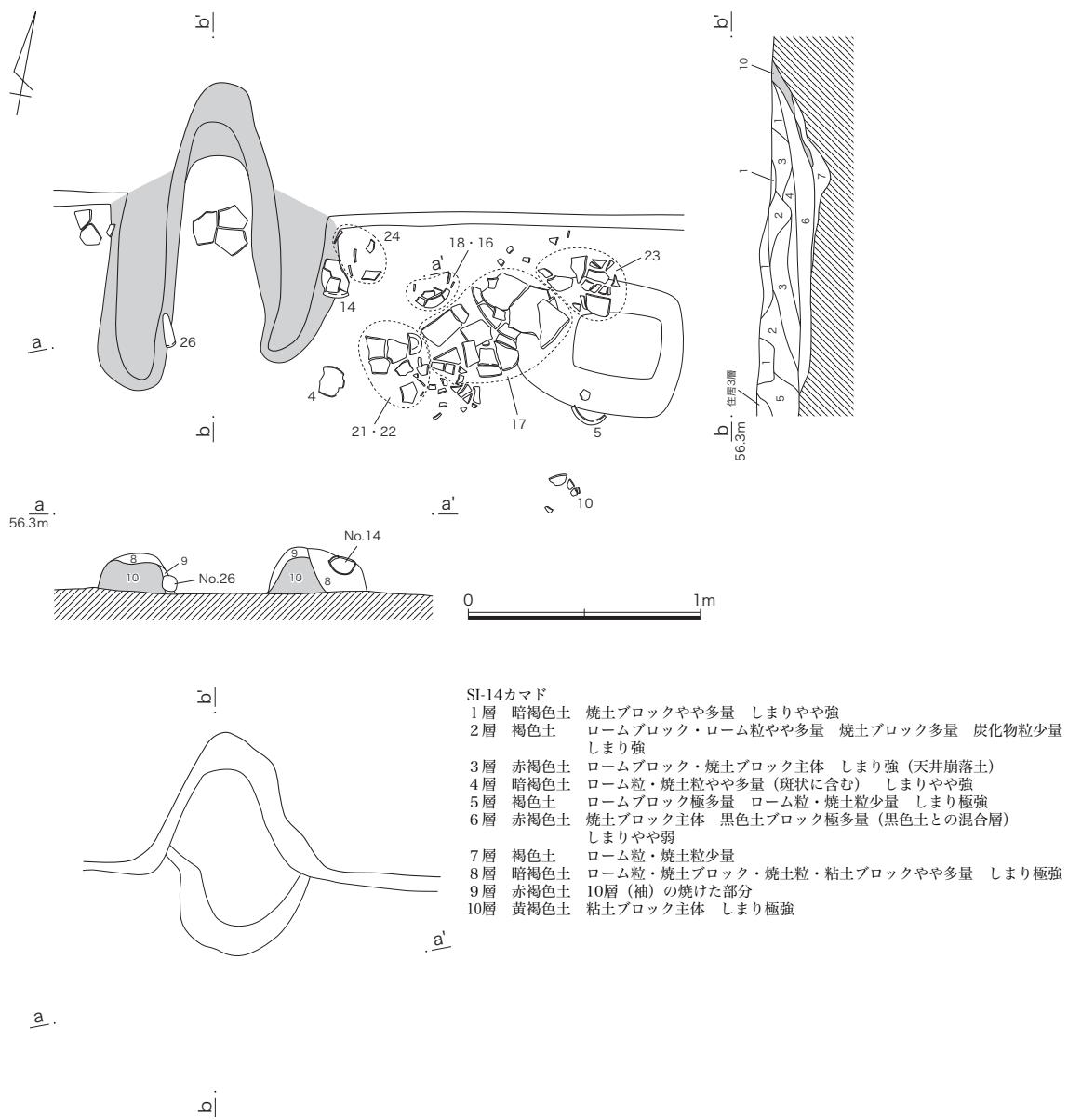
火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。袖は黄褐色粘土で構築され、奥壁にも粘土を薄く貼り付けている。袖の内面と奥壁の粘土はよく焼けて赤化している。内部には天井崩落土と考えられる粘土化したロームブロックが堆積しており、その下には焼土ブロックが厚く堆積していた。また、内部底面には黒色土と焼土ブロックが混ざり合った土層があり、それを除去した跡に浅い掘り込みが確認された。奥壁は緩やかに立ち上がる。カマド内部からは、土師器甕の破片と土製支脚(第47図26)が出土している。また、右袖の外側には小型の土師器甕(第46図14)が横倒しの状態で置かれていた。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。長方形の掘り方で、深さは約35cmである。覆土は暗褐色土を主体とする。内部から、土師器壺が出土している(第45図7)。

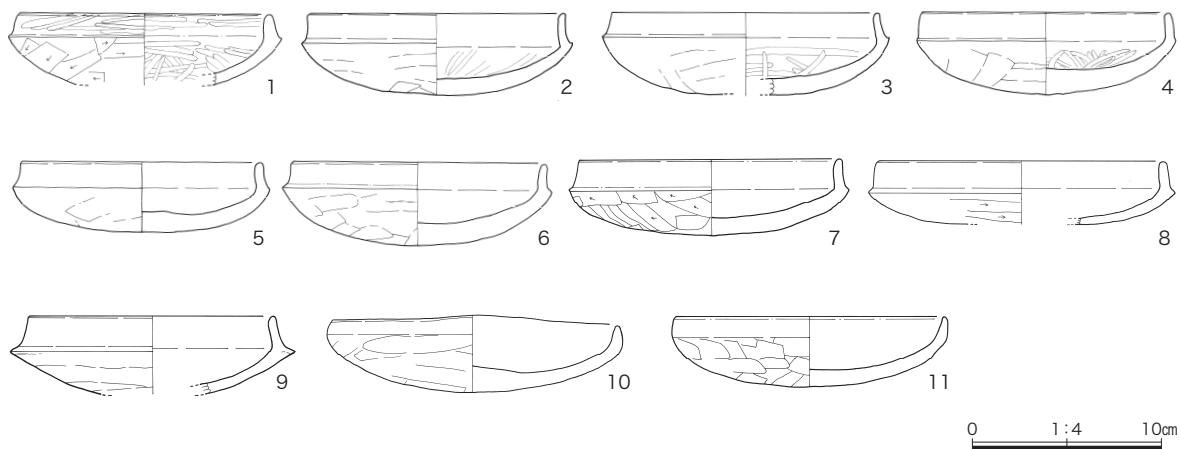


第43図 SI-14 竪穴住居跡 (1)

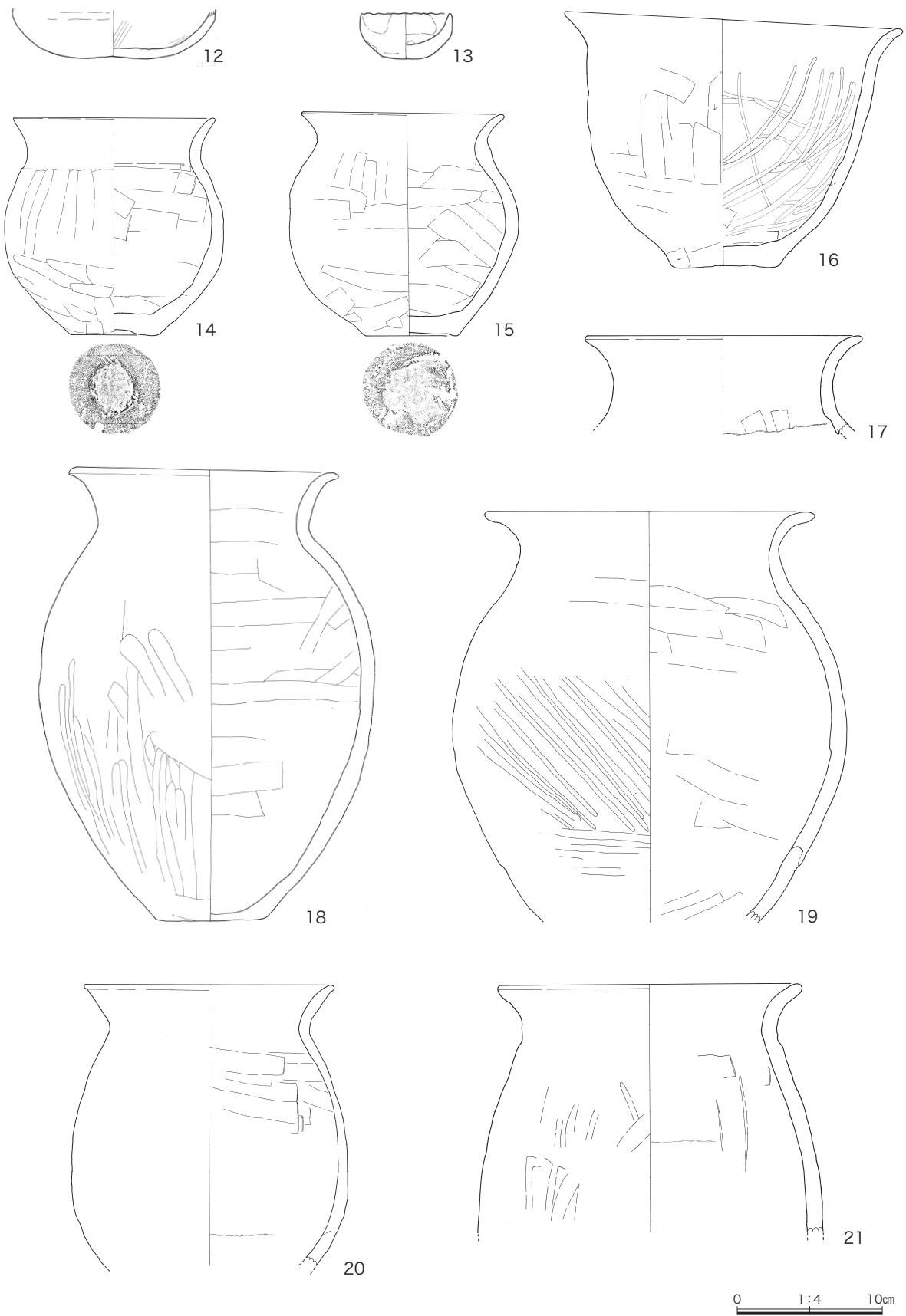
No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	42×40×55	主柱穴	P4	48×35×75	主柱穴
P2	48×46×75	主柱穴	貯蔵穴	72×57×31	入り口ビット
P3	54×50×61	主柱穴			



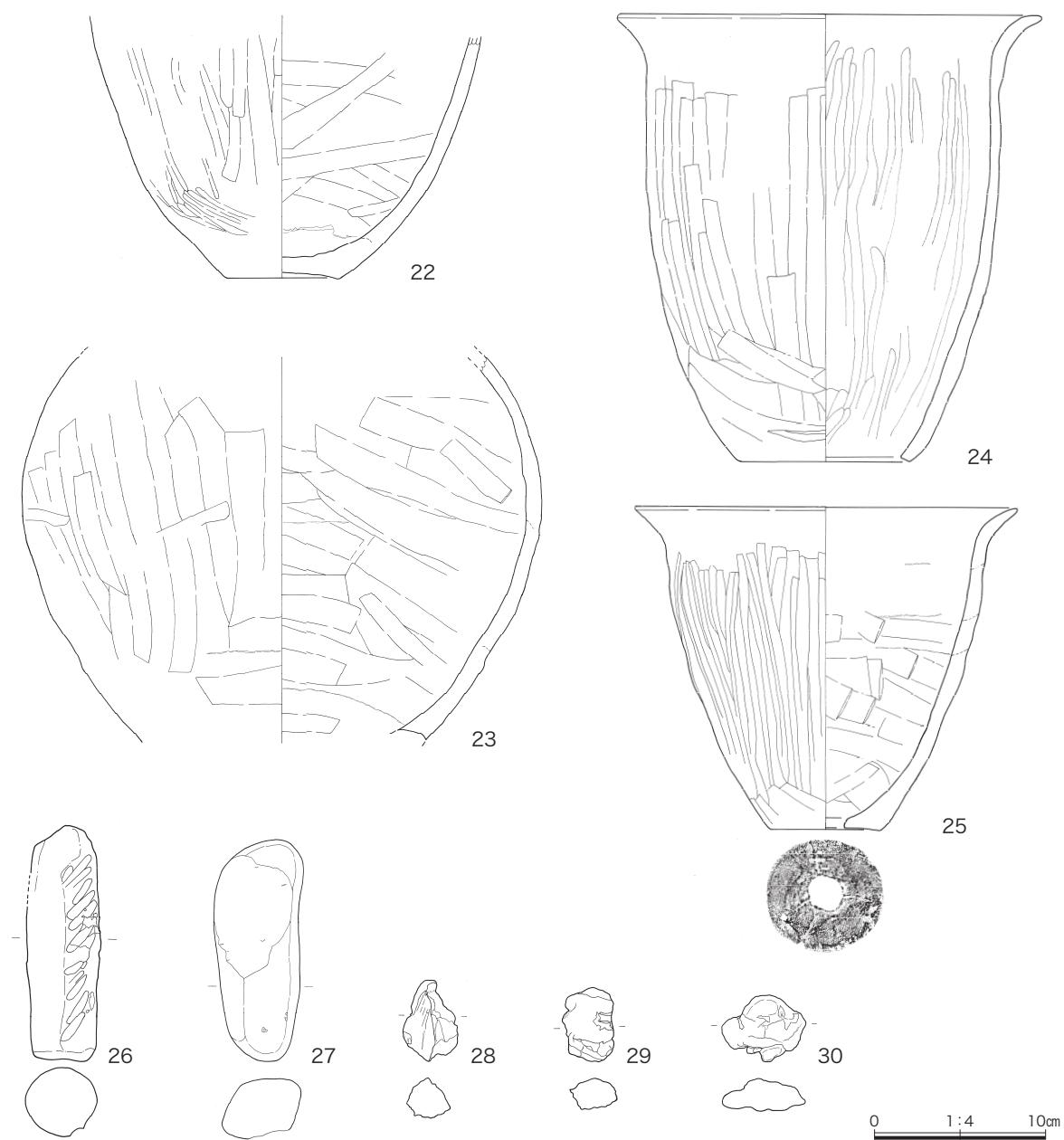
第44図 SI-14 竪穴住居跡（2）



第45図 SI-14 出土遺物（1）



第46図 SI-14出土遺物（2）



第47図 SI-14出土遺物(3)

第18表 SI-14遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 环	口(13.0) 高(3.7)	(内) 口～体横方向ミガキ体下半放射状ミガキ (外) 口横方向ミガキ体ヘラケズリ 内面漆仕上げか？(残)3/8	砂礫多・白色粒子やや多 良 10YR4/3にぶい黄褐	床上+15cm No.12+ 覆土d
2 土師器 环	口13.6 高4.3	(内) ヨコナデ→体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内～口縁部外面漆仕上げ 摩耗により剥落多(残)8/8	白色粒子・砂粒多・砂礫 やや多 二次被熱 2.5YR5/6 明赤褐	床上+5cm No.4
3 土師器 环	口14.0 高4.4	(内) 口～体上半ヨコナデ→体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ミガキ? 外面摩耗 内面一部漆残る(残)6/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母微 良 7.5YR5/6 明褐	覆土b

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
4 土師器 壺	口 13.0 高 (4.4)	(内) ヨコナデ体斜め方向ミガキ→放射状ミガキ 底部外面に少量の粘土付着 (残) 6/8	砂礫多・白色粒子少・雲母微 やや良 7.5YR3/2 黒褐	床上 +10cm No.23
5 土師器 壺	口 12.6 高 3.7	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部外面漆残る 外面一部タール状の付着物 (残) 7/8	白色粒子やや多・砂礫少 雲母微 良 5YR6/6 橙	床直 No.19
6 土師器 壺	口 13.3 高 4.5	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ 外面部分的にタール状の付着物 (残) 7/8	雲母少・白色粒子微 良 7.5YR6/6 橙	床上 +5cm No.14
7 土師器 壺	口 13.3 高 4.0	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 7/8	白色粒子・砂粒多 良 7.5YR5/6 明褐	貯蔵穴内 No.28
8 土師器 壺	口 (14.8) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ 内面にタール状の付着物 (残) 1/8	白色粒子・細砂粒多 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土 d
9 土師器 壺	口 (12.8) 高 (4.1)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子極多 良 7.5YR2/1 黒	覆土 c
10 土師器 壺	口 15.1 高 4.0	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラナデ 内面漆仕上げ (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 7.5YR2/2 黒褐	床直 No.18
11 土師器 壺	口 14.2 高 3.4	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 8/8	白色粒子多・砂礫・砂粒少 良 7.5YR4/6 褐	床直 No.3
12 土師器 壺	口 (14.0) 高 3.4	(内) 放射状ミガキ? (外) ヘラケズリ? 全体的に摩滅強 内面漆仕上げ (残) 4/8	白色粒子少 良 7.5YR4/3 褐	床直 No.6
13 土師器 ミニチュア 土器	口 (6.2) 高 3.1	手捏ね成形 内外面に指頭圧痕 外面一部にヘラケズリ	砂礫多・白色粒子やや多 やや良 7.5YR3/1 黒褐	覆土 a・c
14 土師器 甕	口 13.8 底 6.0 高 14.9	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴上半ヘラケズリ下半ヘラナデ 底部近くに輪積痕 (残) 8/8	微細白色粒子やや多・ 砂礫少・雲母微 良 7.5YR5/6 明褐	床上 +5cm No.8
15 土師器 甕	口 13.8 底 6.3 高 15.4	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴上半ヘラケズリ下半ヘラナデ 梢円形に歪む (実測団は長径正面) (残) 口 8/8 胴 6/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 良 7.5YR5/6 明褐	床上 +5cm No.27
16 土師器 甕	口 23.2 高 17.5	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ・ヘラケズリ→ミガキ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 口 6/8 胴下～底 8/8	砂礫・白色粒子多 やや良 7.5YR2/2 黒褐	床直 No.26 + 1 + 覆土一括
17 土師器 甕	口 (19.0) 高 6.8	(内) ヨコナデ体ヘラケズリ? (外) ヨコナデ (残) 6/8	砂礫極多・白色粒子・雲 母やや多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.15 + 覆 土 b + 確認面
18 土師器 甕	口 18.5 大 23.0 高 31.2	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ 外面部分的に薄く粘土を貼り付け (残) 6/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	床直 No.20 +21+ カド' + 覆土 b+ 覆土
19 土師器 甕	口 (22.6) 大 (27.0) 高 (28.1)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ底部近くヘラケズリ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ 底部近くに輪積痕残る (残) 2/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 良 7.5YR3/6 暗赤褐	床上 +5cm No.15 + 覆土
20 土師器 甕	口 (17.2) 大 (19.0) 高 (19.3)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 摩滅により不明 底部近くに輪積痕残る (残) 3/8	砂礫多・白色粒子やや多 二次被熱 2.5YR4/4 にぶい赤褐	床直 No.26 + 27

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
21 土師器 甕	口 20.8 高 (17.0)	(内) 口ヨコナデ胴へラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴上半へラナデ下半へラケズリ 口縁部煤状の付着物 外面薄い粘土貼付 (残) 口 7/8 胴 2/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR3/3 暗赤褐	床上 +5cm No.11+ 覆土 d
22 土師器 甕	底 6.8 高 (15.3)	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ→縦方向ミガキ 内面底部近くに輪積痕残る 外面一部粘土付着 (残) 底 8/8 胴 6/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR3/4 暗赤褐	床直 No.21
23 土師器 甕	高 (22.3)	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ 脊部中位に横方向の短いナデ 内外面に輪積痕残る (残) 3/8	砂礫多・白色粒子やや多 良 10YR3/3 暗褐	床直 No.21 + 26
24 土師器 甕	口 24.5 底 9.8 高 26.1	(内) 口ヨコナデ胴縦方向ミガキ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ 無底式 (残) 7/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 良 7.5YR5/6 明褐	床直 + 貯蔵穴 No.17+20+29 + 貯穴 + 覆土 b + 覆土
25 土師器 甕	口 22.2 底 6.4 底孔径 1.9 高 18.8	(内) 口ヨコナデ胴へラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ 胴部上半に輪積痕 (残) 8/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母やや多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.22
26 土製品 支脚	長 13.8 径 5.5 重 254.95	手捏ね成形 側面に棒状工具による連続のキザミ キザミのある面がやや平坦 表面に一部粘土が貼り付いている	砂礫・白色粒子少 二次被熱 5YR5/3 にぶい赤褐	カマド内 No.30
27 礫	長 12.9 幅 5.1 厚 3.5 重 303.5	左上端にタール状の付着物 両面に欠あり	2.5Y6/1 黄灰	覆土 a
28 焼成 粘土塊	長 4.2 幅 3.2 厚 2.6 重 18.62	塊状 実測図表面左側はナデにより平滑化 それ以外 の部分はちぎり取った跡に握った状態 ヘラ状工具、草 本植物の痕跡残る	赤色融解粒多 やや良 10YR7/4 にぶい黄橙	覆土 b
29 焼成 粘土塊	長 4.3 幅 2.8 厚 1.7 重 14.45	塊状 全体的にナデにより平滑化 左側面はちぎり取った状態 下端にヘラ状工具を挟み込んだような凹線あり	白色粒子・赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	カマド
30 不明 遺物	長 3.9 幅 4.8 厚 2.0 重 19.10	砂岩が風化して摩滅したものとも考えられるが、表面に 刺突のような痕跡あり 土器胎土の混和材か?	砂岩? 2.5Y7/1 灰白	覆土 b

遺物 貯蔵穴とカマドの間から大量の土器が出土した。床面に伴うものは、第45図5・10・11・第46図12の土師器壺、16・18・20・第47図22・23の土師器甕、24の土師器甕である。

SI-15 (第48・49図・図版九・四五)

位置 K28 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側でSI-59と重複する。新旧関係はSI-59(旧)→SI-15(新)である。

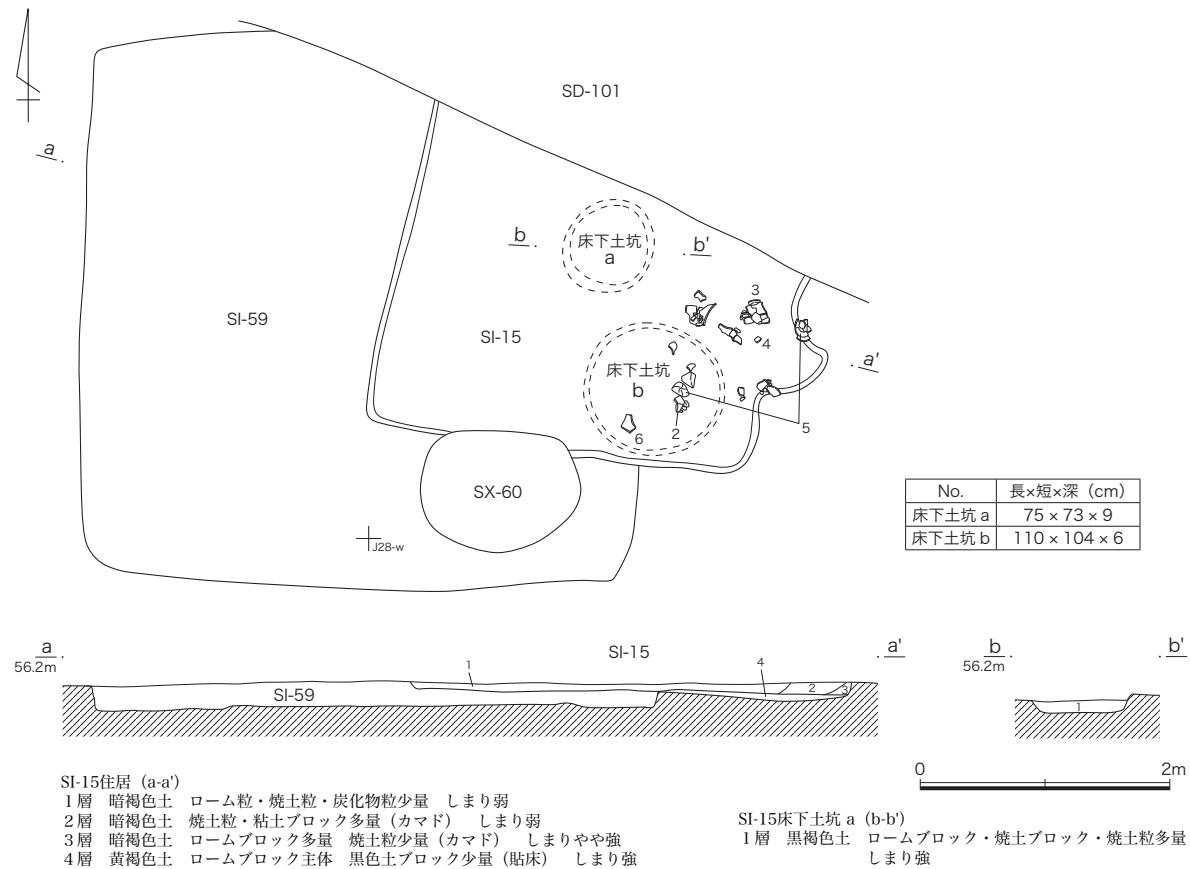
規模・形状 残存値で東西3.2m、南北2.6mである。方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN-102°-Eである。

覆土 暗褐色土を主体とする。削平により、覆土はほとんど残っていない。

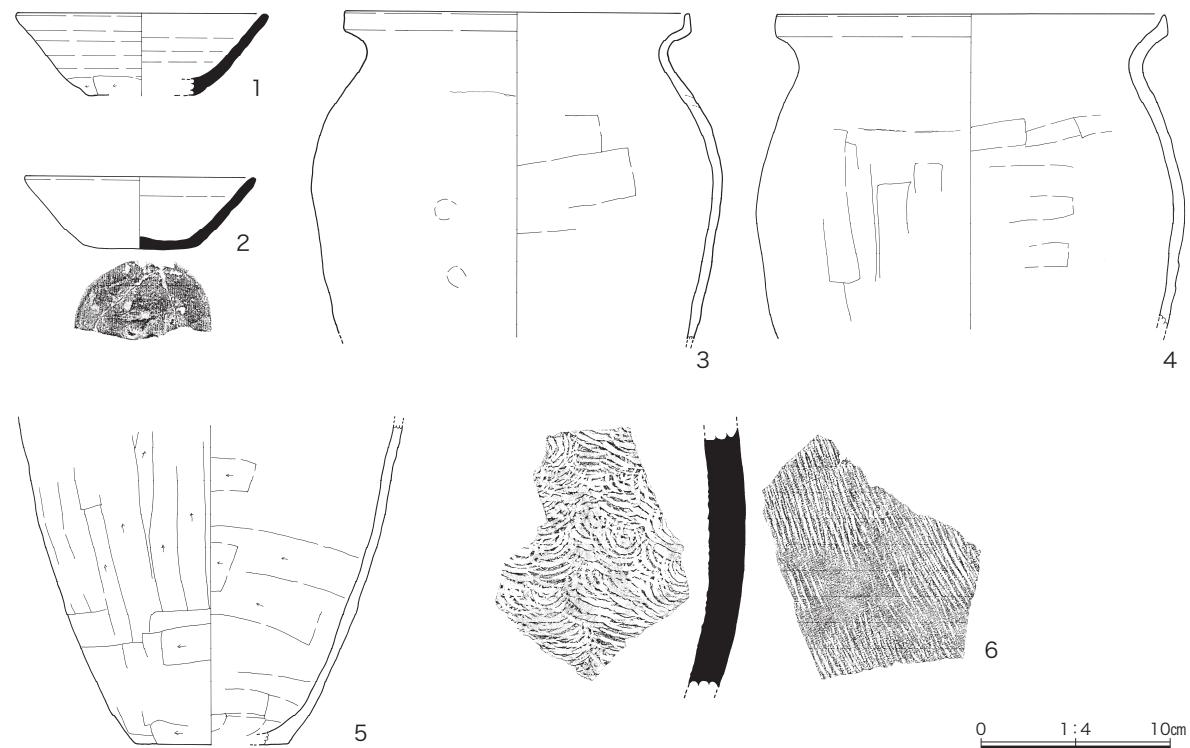
壁 上面が削平されているため、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はない。

床面・貼床 SI-59と切り合う部分は地床、その他の部分にはロームブロックによる貼床が施されるが、いずれも柔らかい。

掘方 床下から円形の浅い土坑が2基確認された。床下土坑aは、焼土ブロックを多く含む暗褐色土が堆積していた。当初SI-59堅穴住居跡のカマドと考えて調査したが、プランが円形ではっきりしていること、



第48図 SI-15 壇穴住居跡



第49図 SI-15 出土遺物

第19表 SI-15 遺物観察表

NO 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (13.2) 高 (5.6)	内外面ともロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ (残) 1/8 堀ノ内産	白色粒子多・砂礫少 良 N6/ 灰	床下土坑
2 須恵器 壺	口 (12.2) 底 (6.0) 高 3.9	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 内面にスヌ状の付着物 (残) 3/8 益子産?	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR6/6 橙	床直 No.7
3 土師器 甕	口 (18.0) 高 (17.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴斜め方向の丁寧なナデ 外面に指頭圧痕 (残) 4/8	砂粒・白色粒子極多・ 雲母やや多 二次被熱 2.5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.2
4 土師器 甕	口 (20.4) 高 (16.5)	(内) 口ヨコナデ胴横方向ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴縦方向ヘラケズリ 胴部上位に輪積痕 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.2
5 土師器 甕	高 (16.9)	(内) 胴横方向ヘラケズリ (外) 胴縦方向ヘラケズリ、底部近く 横方向ヘラケズリ (残) 4/8	砂礫・白色粒子多 良 5Y5/6 明赤褐	カマド + 床直 No.3 + No.7
6 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状當て具痕 (外) 繩目タタキ 産地不明	白色粒子多・砂礫やや多 良 N4/1 灰	床直 No.6

土坑内から出土した須恵器壺（第49図1）がSI-59豊穴住居跡出土遺物と時期的に大きく異なることから、SI-15豊穴住居跡の床下に伴う土坑と考えた。

火処 東壁中央にカマドが構築されている。掘り方がわずかに残るのみで、あまり焼けていない。両袖があつたと考えられる位置から土師器甕の破片が出土している（第49図5）。

遺物 カマド跡周辺と住居南東部分から出土している。出土量は少ないが、第49図2の須恵器壺、5の土師器甕、6の須恵器甕の破片が床面に伴う遺物である。

SI-16（第50・51図・図版九・四五）

位置 J29 グリッドに位置する。

重複関係 全体がSI-17豊穴住居跡・SI-58豊穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-58（旧）→SI-17→SI-16（新）である。

規模・形状 東西3.4m、南北3.1mで、東西に長い方形を呈する。主軸方向はN-9°-Wである。

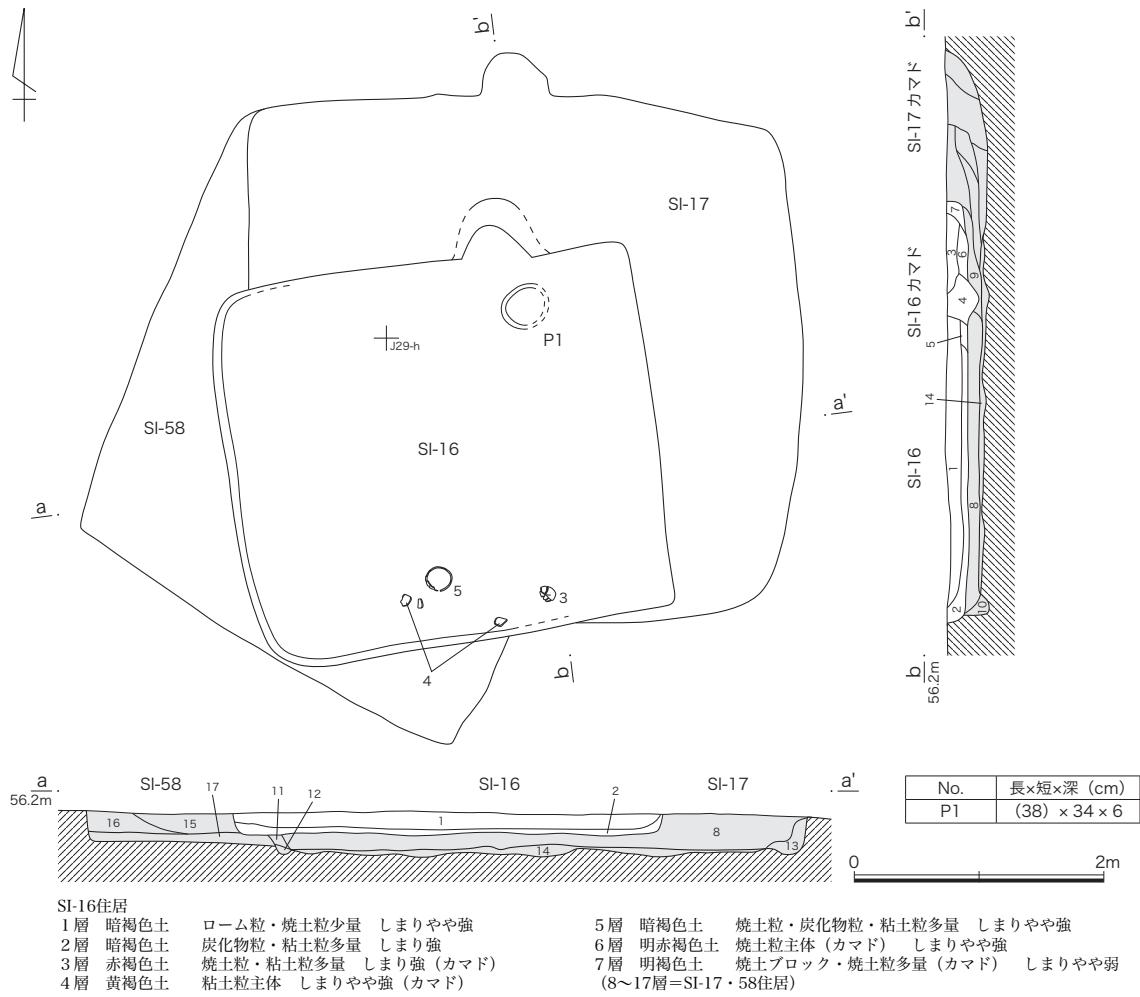
覆土 暗褐色土を主体とする。床面上に炭化物・粘土粒が薄く堆積している。

壁 確認面から約20cmの深さで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

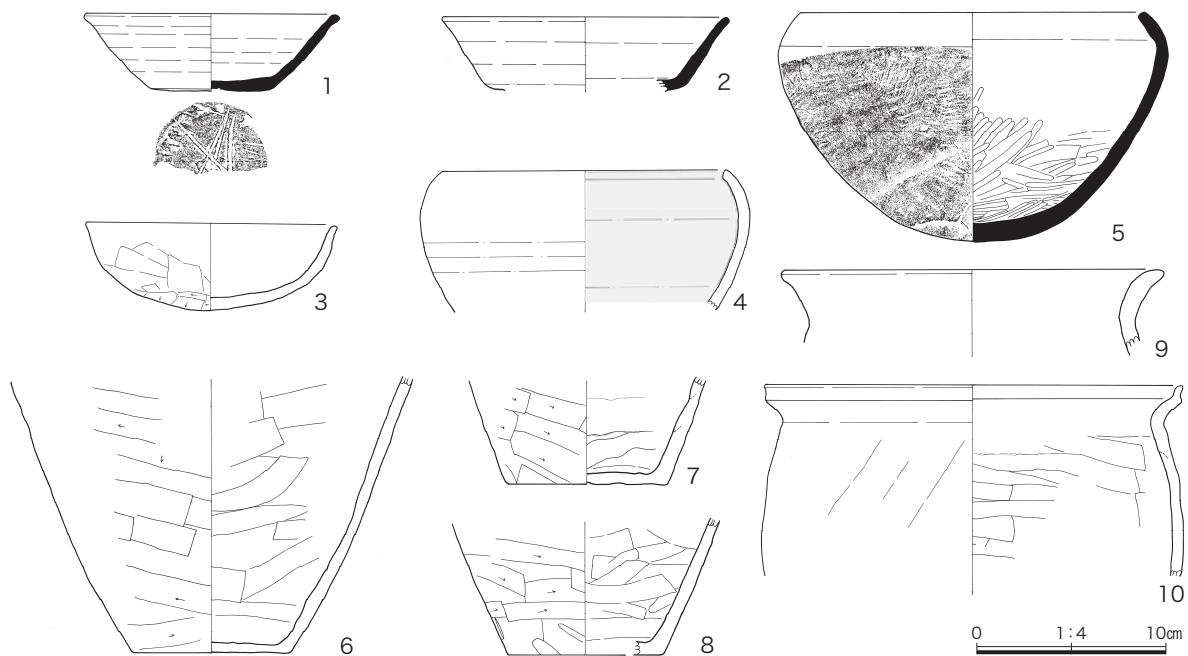
床面・貼床 床面はSI-17豊穴住居跡の覆土中に構築されており、堅くしまっている。貼床・掘り方ではない。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。奥壁が残存するのみで、袖は構築材と考えられる粘土ブロックがわずかに残っている。底面の掘り込みは確認できなかった。内面はよく焼けており、粘土ブロックや焼土が厚く堆積していた（3層）。煙道は緩やかに立ち上がる。カマド前面に浅い土坑（P1）を掘り、その中へ天井部分と考えられる粘土ブロック（4層）を落とし込んでいる。土坑内には焼土や炭化材が堆積していないことから、カマド廃絶時に伴う行為と考えられる。

遺物 住居南側の床面上から須恵器鉢（第51図5）と土師器鉢（第51図4）が出土している。覆土中の遺物出土量は比較的多い。



第50図 SI-16 壇穴住居跡



第51図 SI-16出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第20表 SI-16 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (13.4) 高 4.1	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 底部ヘラ記号有り (残) 1/8 益子産	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母微 良 5Y5/1 灰	覆土 d
2 須恵器 壺	口 15.0 底 (9.6) 高 16.8	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 口縁部歪む 高台貼付の跡あり (残) 2/8 産地不明	白色粒子多・砂礫やや多 良 N5/ 灰	覆土 a + c
3 土師器 壺	口 (13.2) 高 4.6	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半ヘラナデ下半ヘラケズリ 内面へ口縁部外面漆仕上げ (残) 5/8	白色粒子・砂礫多・ 雲母微 良 2.5YR3/6 暗赤褐	床直 No.5
4 土師器 鉢	口 (14.8) 大 (17.4) 高 7.4	内外面ともロクロナデ 内面黒色処理 (残) 3/8	砂礫やや多・白色粒子・ 雲母少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.2 + No.4
5 須恵器 鉢	口 18.2 高 12.1	(内) ロクロナデ 体下半細かいナデ (外) カキメ? 鉄鉢状 外面摩滅 (残) 7/8	白色粒子多・黒色粒子少・ 雲母微 やや良 5Y7/2 灰白	床直 No.1 + 覆土 d
6 土師器 甕	底 (8.3) 高 (14.4)	(内) ヘラナデつけ (外) 横方向ヘラケズリ 接合しない同一個体片が多量 (残) 3/8	砂礫・白色粒子多・ 雲母少 良 5YR5/8 明赤褐	覆土 a + d
7 土師器 甕	底 (8.2) 高 (5.4)	(内) ヘラナデつけ底指ナデ (外) 横方向ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR5/6 明褐	覆土 d
8 土師器 甕	底 (8.2) 高 (6.8)	(内) ヘラナデつけ (外) 横方向ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	覆土 a
9 土師器 甕	口 (20.2) 高 (4.6)	内外面ともヨコナデ (残) 2/8	砂礫・黒色砂粒多 二次被熱 7.5YR6/6 橙	No.9 (位置不 明) + 覆土 b
10 土師器 甕	口 (22.0) 高 (10.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴丁寧な ナデ 内面に粘土が貼り付く 接合しない同一個体片多量 (残) 2/8	白色粒子多・雲母やや多・ 砂礫少 良 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土 c

SI-17 (第50・52~54図・図版九・十・十九)

位置 J29 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側でSI-16・58堅穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-58(旧)→SI-17→SI-16(新)である。

規模・形状 東西4.4m、南北4.2mだが、東壁が3.8mと短くなっているため、歪んだ方形を呈する。

主軸方向はN-3°-Wである。

覆土 ローム粒を多く含む暗黄褐色土を主体とする。

壁・壁溝 確認面から約25cmで、ほぼ直に立ち上がる。東壁のラインは緩いカーブを描き、隅は丸みをおびる。壁光はカマド部分を除き全周する。

床面・貼床 全面にロームブロックによる貼床を施している。掘り方はない。

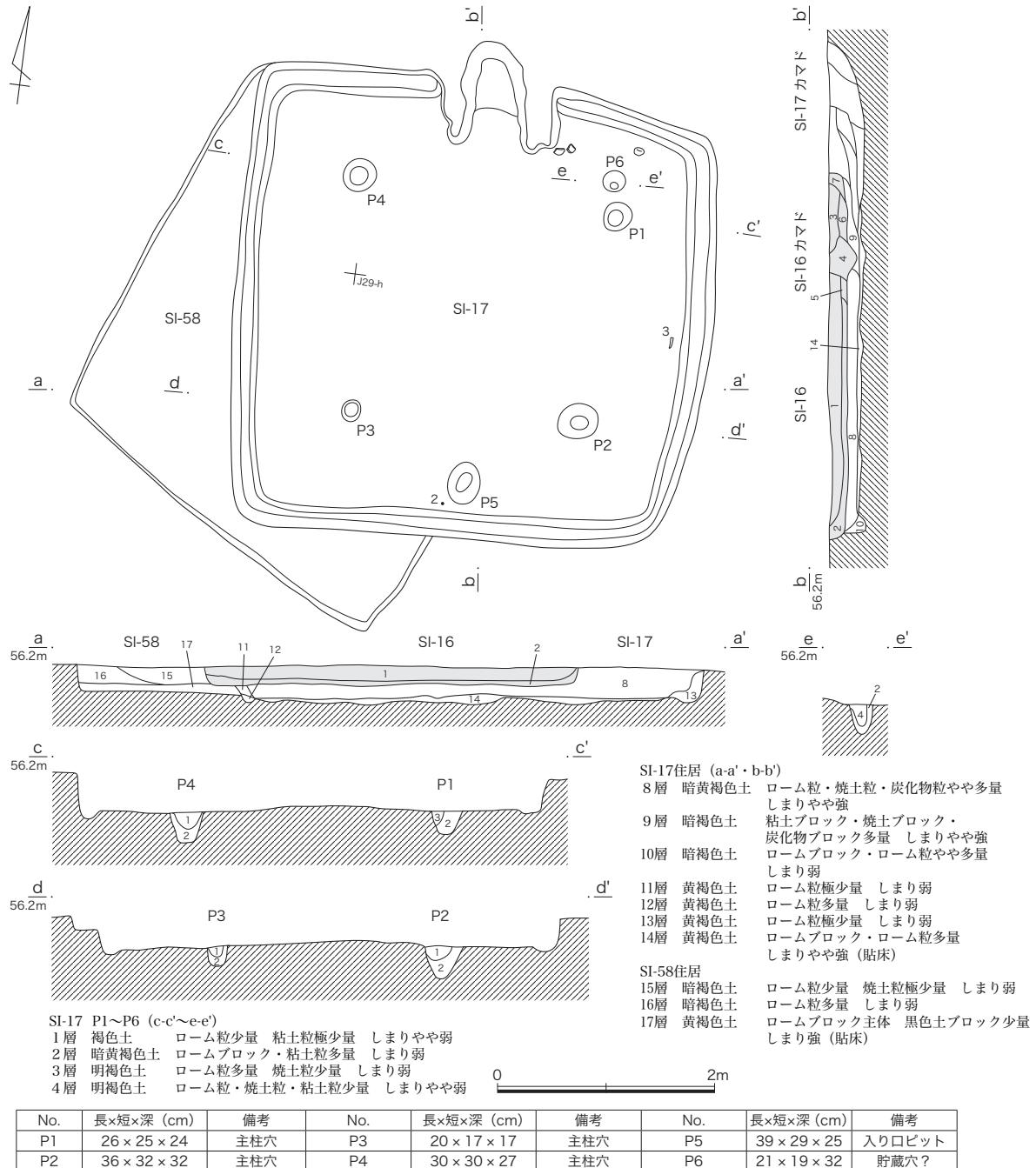
柱穴 4本主柱。円形の掘り方を呈し、柱痕はいずれも確認できない。覆土は暗黄褐色土を主体とする。

入り口ピット 南側壁寄りに1基確認された(P5)。南北に長い楕円状を呈し、深さは約25cmである。

火廻 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。袖は貼床状の土層(11層・12層)の上に白色粘土を積みあげて構築され、内面はよく焼けている。内部には天井崩落土と考えられる粘土が堆積し、その下に焼土が大量に堆積していた。底面の掘り込みはなく、平坦である。煙道は緩やかに立ち上がる。

その他の付帯施設 P1北側に柱穴状のピットが確認された(P6)。貯蔵穴の可能性もあるが、確定できない。

遺物 住居東壁寄りの覆土中から手鎌(第54図3)、南壁寄りの床面上から石製の双孔円盤(第54図2)



第52図 SI-17・58 竪穴住居跡

が出土している。

SI-58 (第52・54図・図版十九)

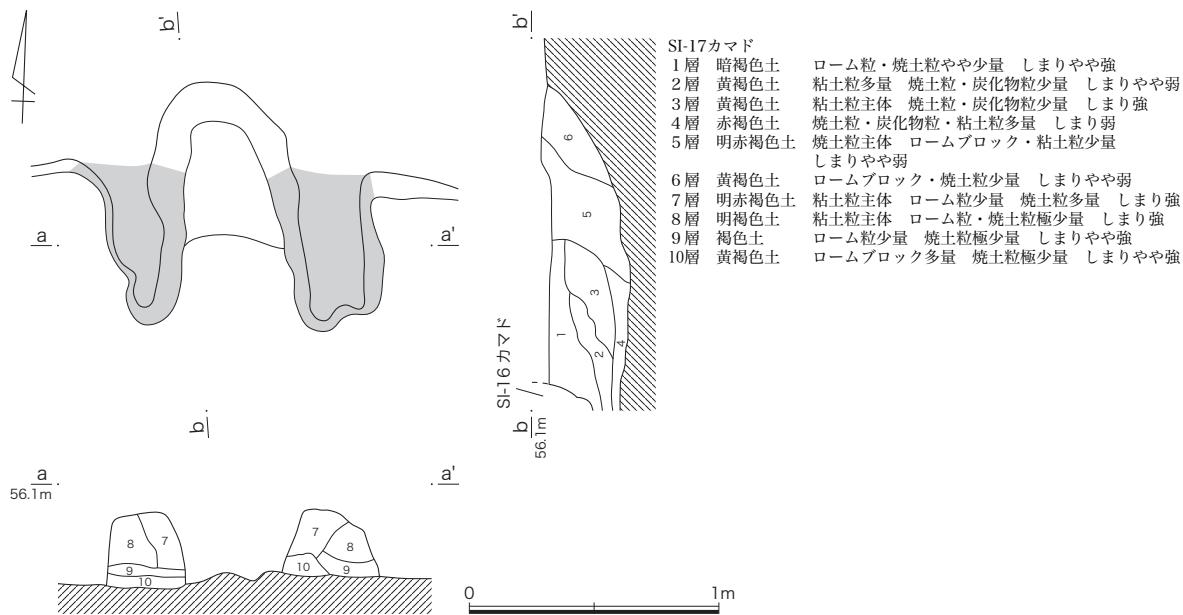
位置・重複関係 J29 グリッドに位置する。住居の大半が SI-16・SI-17 竪穴住居跡と重複するためほとんど残っておらず、住居の規模や形状は不明である。新旧関係は、SI-58（旧）→ SI-17 → SI-16（新）である。

覆土 残存部分では暗褐色土を主体とする。壁際にローム粒を多量に含む暗褐色土が堆積している。

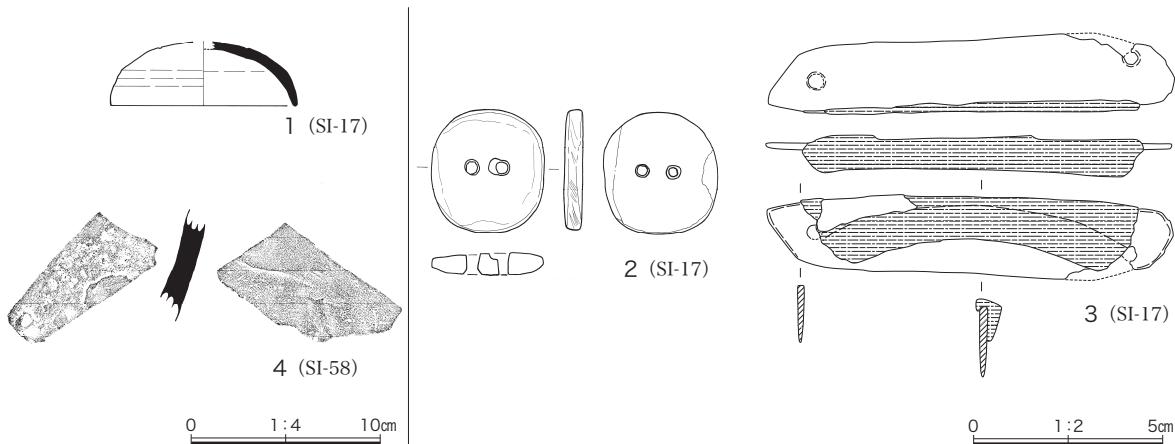
壁 ほぼ直に立ち上がる。壁溝は確認されなかった。

床面・貼床 貼床が施されるが、床面は柔らかい。掘り方は平坦である。

遺物 覆土中から土器片が少量出土しているが、図化できたのは第54図4の須恵器破片のみである。



第53図 SI-17・58 壁穴住居跡（2）



第54図 SI-17・58 出土遺物

第21表 SI-17・58 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	口 (9.8) 高 (3.4)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ (残) 1/8 産地不明	砂礫・白色粒子多 良 5Y6/1 灰	SI-17 床下
2 石製品 双孔 円盤	長 3.2 幅 3.0 厚 0.6 重 10.79	隅丸長方形。中央に 2 孔 (表裏両面から穿孔)、うち右 側は途中で開け直している。表面 (実測図左側) は光沢。 丸みを帯び、裏面は光沢なく平坦。側面は丁寧な研磨。	2.5GY3/1 暗オリーブ灰 粘板岩?	床直 SI-17No.5
3 鉄製品 手鎌	長 10.6 幅 2.0 厚 7.1 重 12.71	棟側に木質部が残る。長軸両側の孔から中央部にかけて弧状に木をつけている。棟 側では木質部の厚さ 9mm、刃部側では 4mm 程度である。孔は径 3mm で、木が 着かない側から穿孔されており、錆により埋没していた。刃部中央の摩耗はなく、 使用頻度は低い。	木	床上 +5cm SI-17No.4
4 須恵器 甕	破片	内外面とも無文 産地不明	白色粒子やや少・砂礫少 やや良 5Y6/1 灰	SI-58 覆土

SI-18 (第55～57図・図版十)

位置 K29 グリッドに位置する。

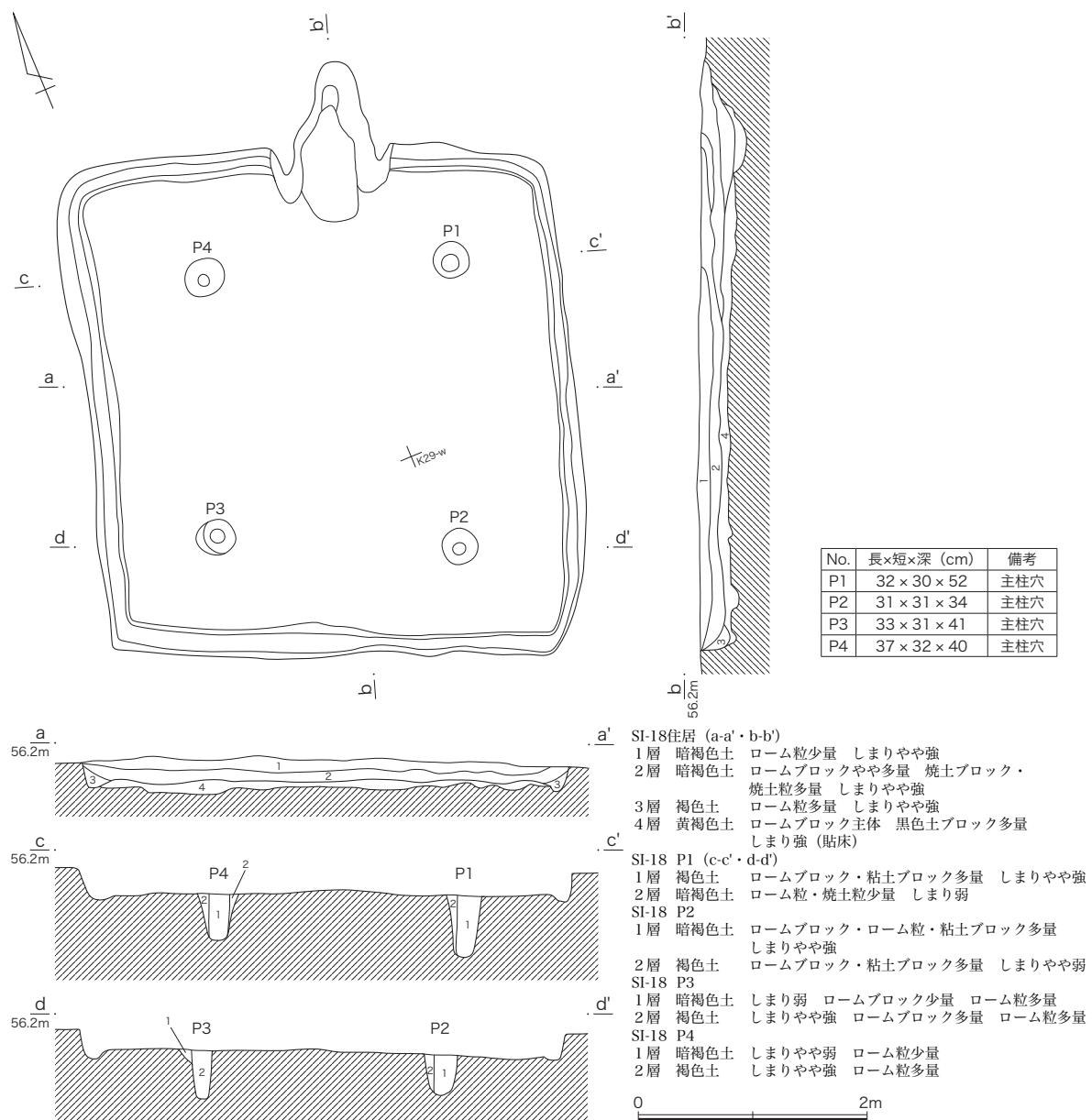
規模・形状 東西4.2m、南北4.4mで北西隅が突出するため、やや歪んだ方形となっている。主軸方向はN-20°-Eである。

覆土 暗褐色土主体で、2層に分層される。下層（2層）にはロームブロック・焼土ブロックが多く含まれる。

壁・壁溝 確認面から約20cmの深さで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分を除き全周する。

床面・貼床 住居中央はロームブロックによる貼床、周縁部分は褐色土による貼床が施され、床面は非常に堅くしまっている。カマド前面では焼土が踏み固められて貼床状になっている。

掘方 中央部分をわずかに高く掘り残しているが、レベル差はほとんどない。

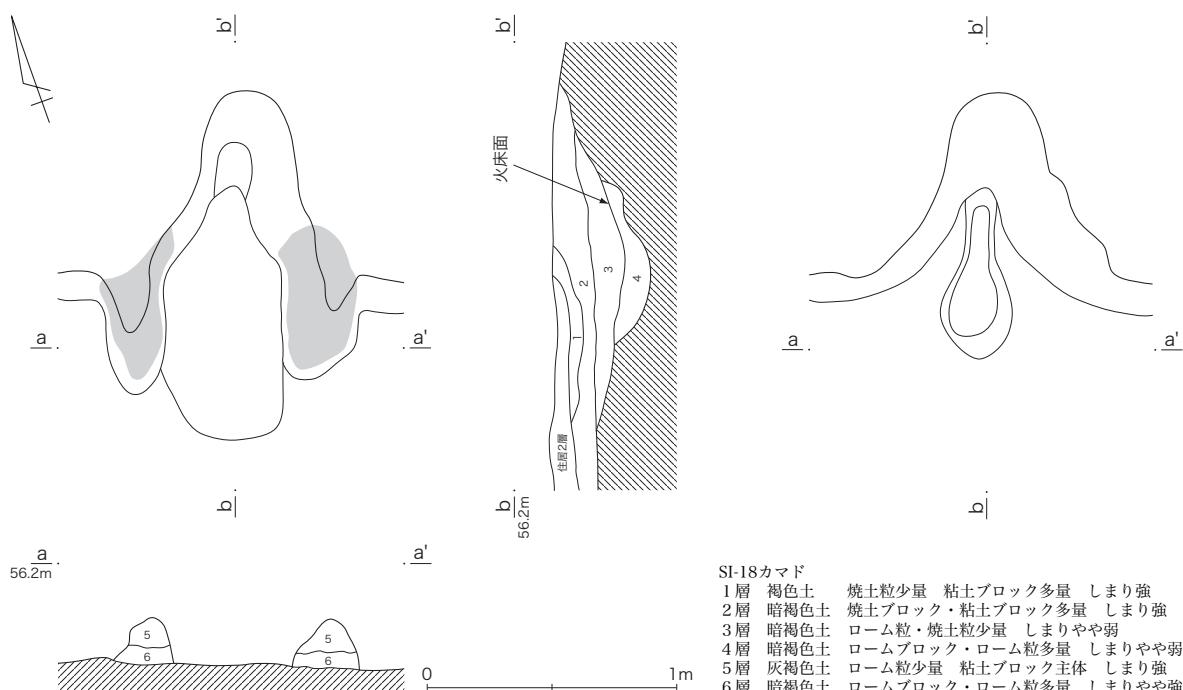


第55図 SI-18 穫穴住居跡（1）

柱穴 4本主柱。円形の掘り方で、いずれも柱痕状の土層が確認された。柱痕の周囲はロームブロックを多量に含む褐色土で埋めている。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しており、内部はよく焼けている。両袖は貼床の上に灰褐色粘土を積み上げてしている。カマド内部には粘土ブロックを多く含む層(1・2層)が堆積し、これが天井の崩落土と考えられる。底面には浅い掘り込みが確認されたが、内部に堆積していた土層(3層)中には焼土・炭化物はほとんど含まれていなかった。煙道は緩やかに立ち上がる。カマド袖の粘土を除去すると、わずかに凸型を呈する掘り方となる。また、底面に南北に細長い掘り込みが確認された。

遺物 覆土から少量の土器片が出土している。床面に伴う遺物はない。



第56図 SI-18 穫穴住居跡 (2)



第57図 SI-18 出土遺物

第22表 SI-18 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壊	底 5.0 高 3.0	手捏ね成形 内面一部ケズリ (残) 底部 6/8	微細白色粒子・赤色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 d
2 土師器 壊	破片	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ	白色粒子やや多・砂礫少 雲母微 良 7.5YR5/8 明褐	覆土 d

SI-19（第58～61図・図版十・四六）

位置 J30 グリッドに位置する。

規模・形状 東西4.7m、南北5.0mだが、北西隅が突出しているため歪んだ方形を呈する。住居の主軸方向はN-17°-E、カマドの主軸方向はN-53°-Eである。住居東側の上面が一部削平されている。

覆土 上下2層に分層され、上層はローム粒・焼土・炭化物を多く含む黒褐色土（1層）、下層はローム粒を多く含む暗褐色土（2層）を主体とする。

壁・壁溝 確認面からの深さが約35cmで、壁はほぼ直に立ち上がる。東壁は緩やかにカーブしている。壁溝は西壁では確認できなかった。その他の壁では、棚状施設部分を除き確認されている。

床面・貼床 全面にロームブロックによる貼床が施され、床面は堅くしまっている。

掘方 床面から約5cmの深さで、ほぼ平坦である。P4北東とP1北東でそれぞれ深さ約30cmのピットが2基確認されている（P5・P6）。貼床（9層）と同じ土層が堆積していることから、P5・P6は古い柱穴で、貼床構築時に埋め戻されたと考えられる。南側には古い柱穴は確認されなかつたことから、住居の全面的な建て替えは行われておらず、北側柱穴のみ部分的に作り替えたものと判断した。

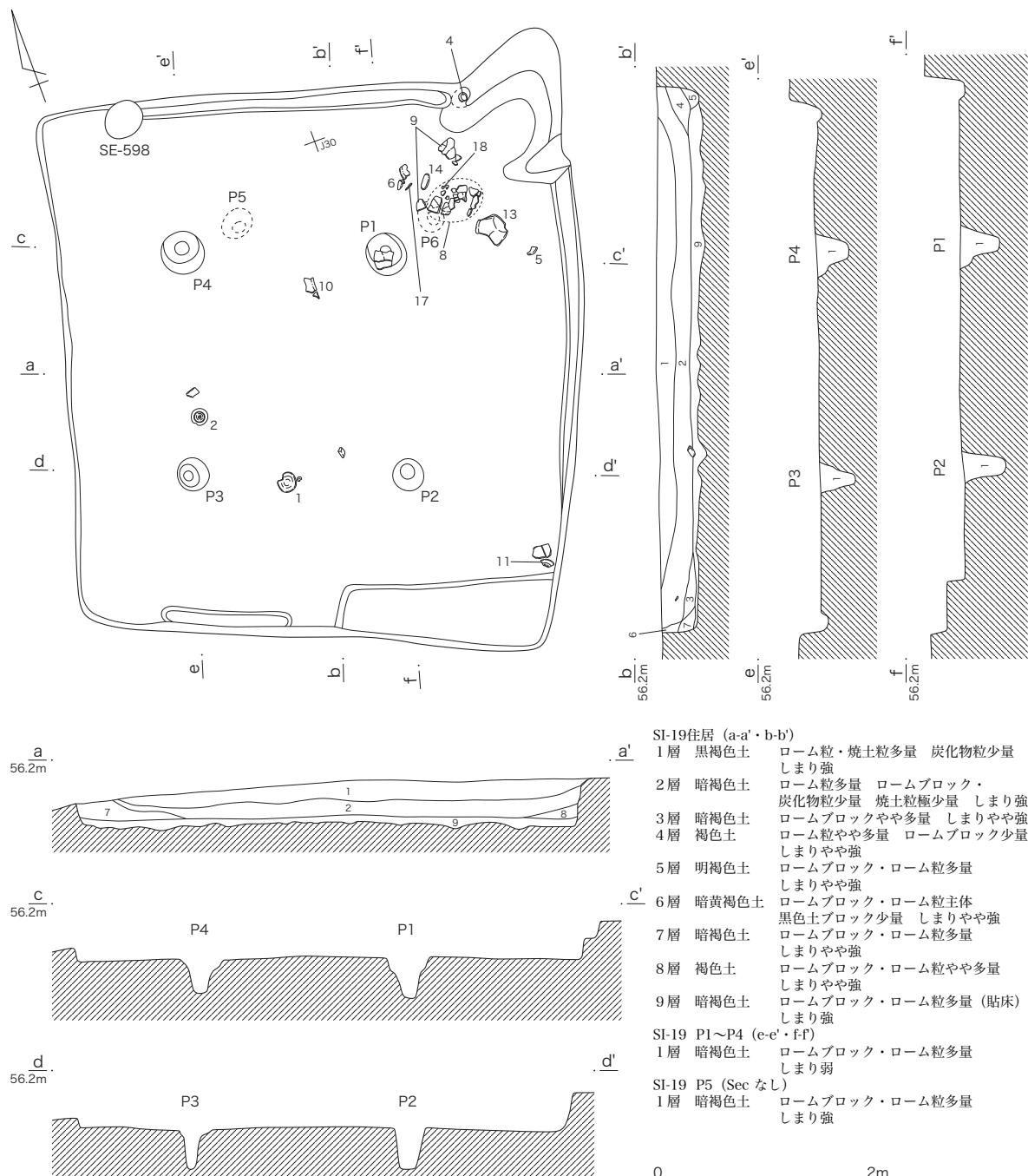
柱穴 4本主柱。住居の西側に寄っているが、北東隅にカマドがあるためと考えられる。いずれも円形の掘り方を呈するが、北側の2本が南側の2本に比べ若干掘り方が大きい。P1の上面には土師器甕の破片が落ち込んでいた。覆土はいずれもロームブロックを多く含む暗褐色土で、しまりは弱い。

火廻 北東隅にカマドを構築しており、両袖と奥壁が残存している。袖は白色粘土で構築され、左袖内部には芯材と考えられる土師器甕の破片（第60図7）が埋められていた。カマド内部には天井崩落土と考えられる粘土が厚く堆積しており（4層）、その下に焼土が大量に堆積している。内部はよく焼けている。底面からは焼けた礫が3点出土しており、支脚として用いられたものと考えられる。底面の掘り込みは確認できなかつた。奥壁は段状に掘り込まれており、緩やかに立ち上がる。

北東隅にカマドを設けているのはSI-19のみだが、峰高前遺跡で確認された古代の竪穴住居跡では、カマドがSI-16・SI-76・SI-77・SI-1003・SI-1004・SI-1016など、カマドが北壁中央よりも東（SI-1016は西）にかたよって作られるものが多い。

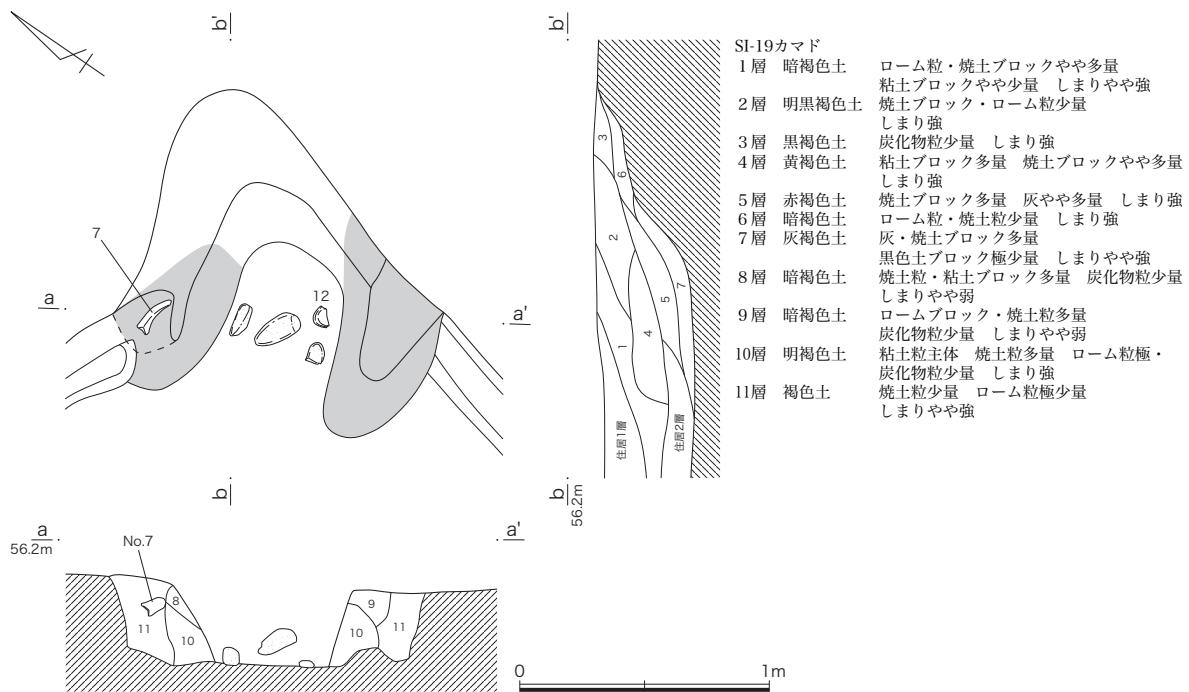
その他の付帯施設 住居北壁西側に棚状施設が構築されている。地山を長さ1.9m、幅0.5m、高さ15cmの棚状に掘り残しているが、上面は踏み固められていないことから、入り口施設ではなく棚状施設と考えられる。明確な棚状施設を伴う住居跡は、峰高前遺跡内では他はないが、SI-1014竪穴住居跡ではカマドの脇が段状に掘り残されており、棚状施設の可能性がある。また、東壁にもわずかながら段差があることが確認されている。同様の例として、SI-1304竪穴住居跡も壁を階段状に掘り込んでいる。

遺物 カマド焚き口付近から、第60図6の土師器壺、8・9の土師器甕、第61図13の須恵器鉢がまとめて出土している。6の土師器壺のみ床面上から、その他の遺物は床面から浮いた状態で出土した。また、P3東側の床面上からは須恵器蓋の体部と撮みが並んで出土している（第60図1）。その他には第61図10・12の土師器甕、17の刀子が床面上から出土している。

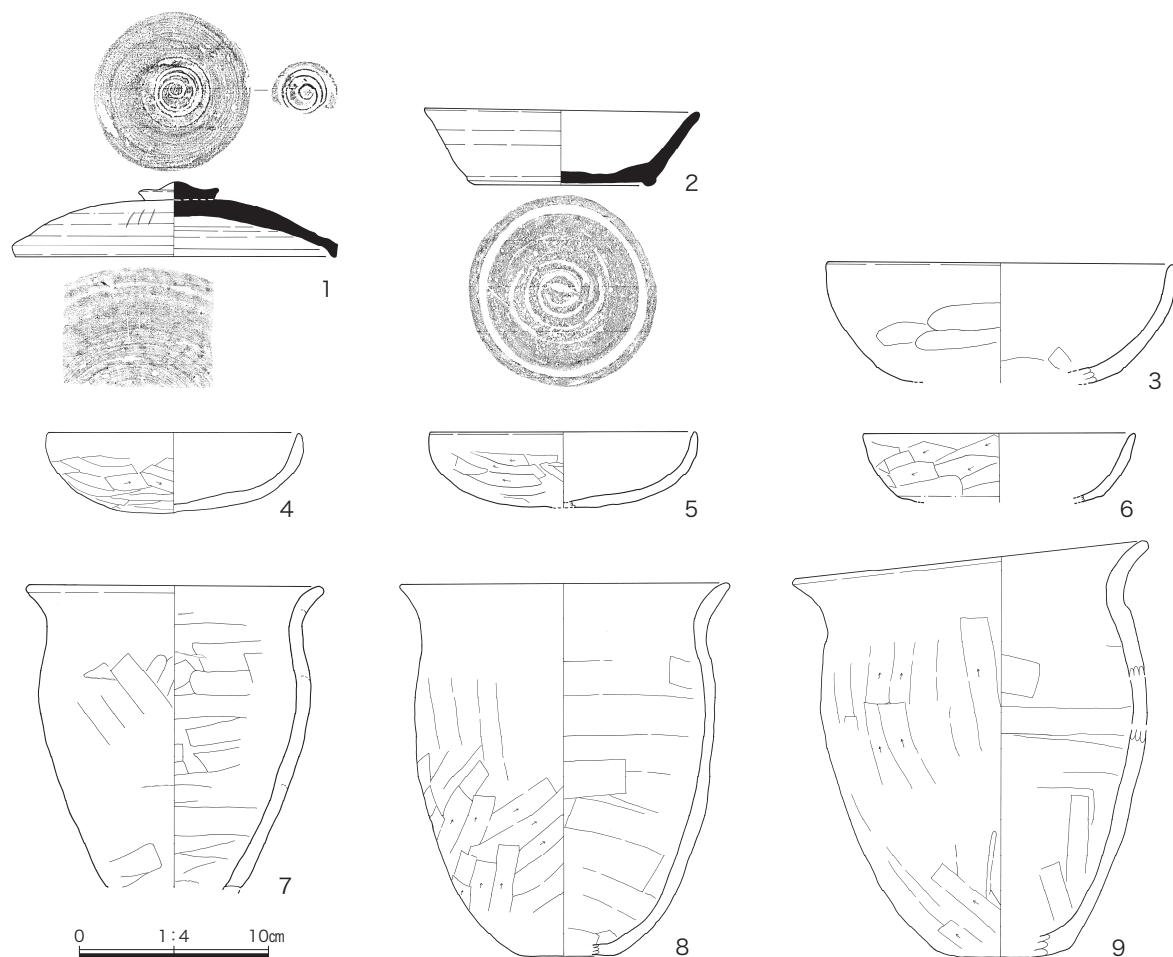


No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	40 × 37 × 36	主柱穴	P4	40 × 39 × 32	主柱穴
P2	30 × 29 × 37	主柱穴	P5	30 × 25 × 30	旧主柱穴?
P3	31 × 30 × 31	主柱穴	P6	28 × 23 × 35	旧主柱穴?

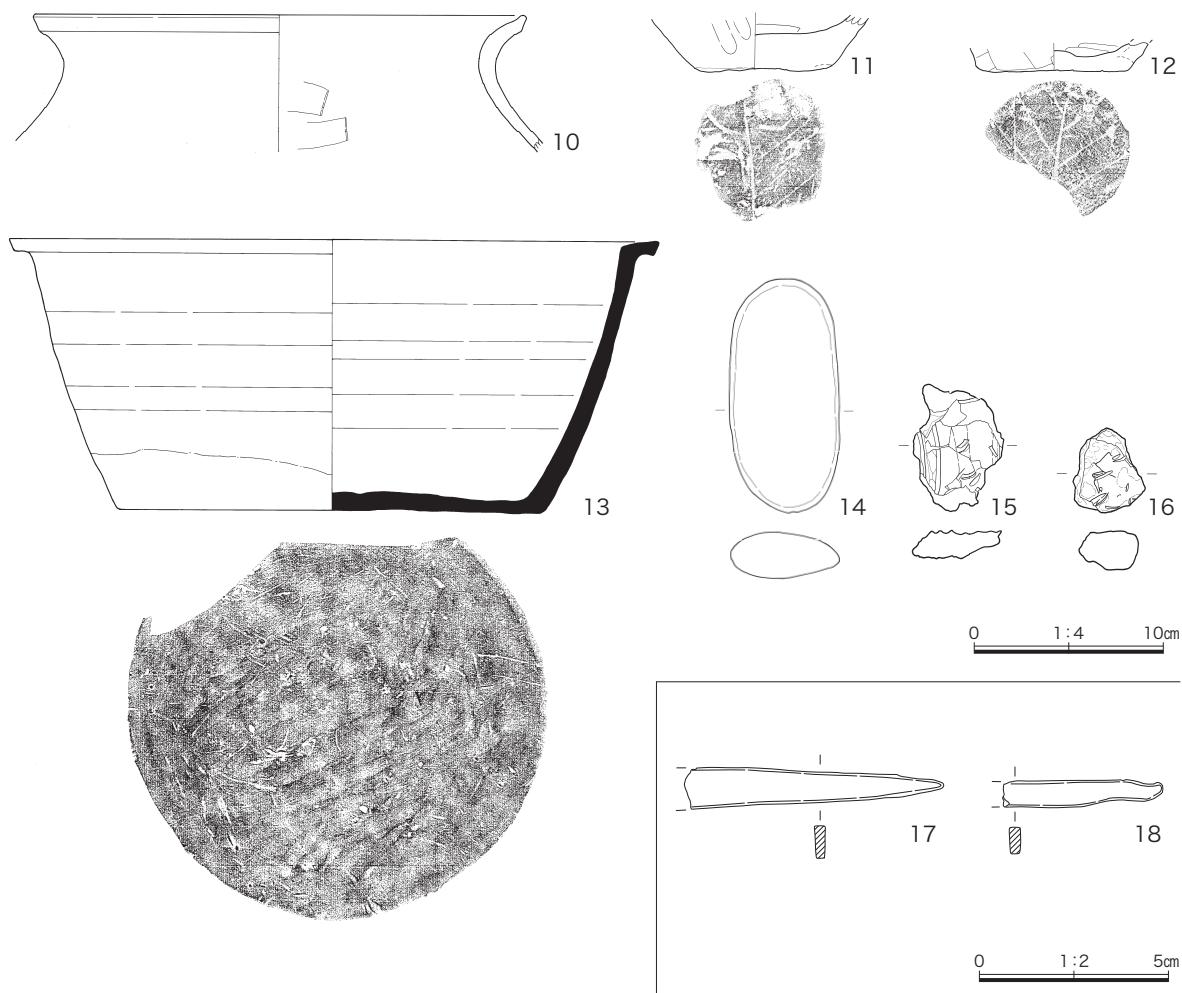
第58図 SI-19 竪穴住居跡 (1)



第59図 SI-19 竪穴住居跡（2）



第60図 SI-19 出土遺物（1）



第61図 SI-19出土遺物（2）

第23表 SI-19 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端 17.0 高 4.0 撮部径 4.1 撮み部高 1.0	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 撮み接合面に渦巻き状の凹線 表面に化粧土？付着 外面ヘラ記号有り（残）7/8 益子産	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母微 やや良 2.5Y7/2 灰黄	床直 No.21
2 須恵器 坏	口 14.4 底 9.0 高 4.1	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付（残）7/8 益子産	白色粒子多・砂礫少 良 2.5Y7/1 灰白	床直 No.20
3 土師器 坏	口 (18.3) 高 (6.3)	(内) ヨコナデ 底ナデ (外) 口ヨコナデ体ナデ 内面漆仕上げ？（残）2/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR5/3 にぶい褐	覆土 a
4 土師器 坏	口 (13.2) 高 4.3	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 4/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 5YR6/4 赤褐	覆土 No.1 + 覆土 a
5 土師器 坏	口 (14.0) 高 4.0	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ（残）3/8	砂礫・微細白色粒子やや多 良 5YR4/6 赤褐	床上 + 10cm No.16 + a

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
6 土師器 壺	口 (14.3) 高 (3.6)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 体部下端に稜 内面漆仕上げ (残) 3/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.9 + d
7 土師器 甕	口 (15.6) 高 (16.0)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ロヨコナデ胴丁寧なナデ 外面スヌ状の付着物 (残) 1/8	微細白色粒子やや多・ 砂礫少 良 7.5YR3/3 暗褐	レベル不明 No.26
8 土師器 甕	口 17.3 高 19.8	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ロヨコナデ胴上半ヘラナデ胴下半ヘラケズリ (残) 7/8	砂礫極多・白色粒子多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上 +15cm No.13 + No.14 + 覆土a
9 土師器 甕	口 18.8/21.8 高 18.7	(内) ロヨコナデ胴上半ヘラナデつけ下半ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 4/8	砂礫極多・白色粒子多 良 7.5YR4/2 灰褐	覆土 No.6 + No.12
10 土師器 甕	口 (26.0) 高 (7.2)	(内) ロヨコナデ・ヘラナデつけ (外) ヨコナデ (残) 1/8	白色粒子・雲母多・砂礫少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床直 No.18 + 覆土a
11 土師器 甕	底 6.5 高 (3.1)	(内) ヘラナデ (外) 粗いナデ 底部木葉痕 (残) 底 8/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/3 暗褐	床上 +10cm No.24
12 土師器 甕	底 7.8 高 (1.5)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕 (残) 底 6/8	微細白色粒子多 ・砂礫やや多 良 7.5YR3/2 黒褐	床直 No.4
13 須恵器 鉢	口 (34.2) 底 (22.4) 高 14.4	内外面ともロクロナデ 底部近く回転ヘラケズリ 底部ヘラ切り離し後ヘラナデ 桶形 (残) 4/8 常陸産?	黒色粒子やや多 良 2.5Y8/1 灰白	床上 +5cm No.15
14 礫	長 12.3 幅 5.7 厚 2.4 重 283.5	断面扁平な橢円形 上下端に弱い敲打痕	2.5Y6/2 灰黄 安山岩	覆土 No.11
15 焼成 粘土塊	長 4.4 幅 3.1 厚 2.0 重 22.2	扁平 実測図表面は幅広のヘラ状工具による同方向のナデ、草本植物の痕跡残る 裏面はちぎり取った状態	赤色融解粒極多 二次被熱 5YR6/8 橙	覆土 a
16 焼成 粘土塊	長 4.6 幅 6.3 厚 1.4 重 25.8	塊状 実測図表面下側のみ弱いナデ、他の部分はちぎり取った状態 刺突具による鋭い刺突あり	赤色融解粒極多 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土
17 鉄製品 刀子?	長 6.1 幅 0.9 厚 0.3 重 2.59	刃部が欠損した刀子の茎部片か。茎部は先端まで残る。断面方形で、厚さは刃部側で 3.5mm、先端で 1mm 程度である。鋸ぐれが著しい。		床直 No.10
18 鉄製品 刀子	長 4.2 幅 0.8 厚 0.6 重 1.94	刃部が欠損した刀子の茎部片。茎部は先端まで残る。断面は方形で、厚さは 2mm。 鋸ぐれが著しい。		床上 +10cm No.26

SI-20 (第 62 図・図版十一)

位置 I30 グリッドに位置する。西側約 1/2 を埋蔵文化財センターが、南西隅を二宮町教育委員会が調査している（町調査 NS-26）。中央は調査区外となっている。

規模・形状 推定値で 3.3 m、南北 3.1 m である。北東隅が突出し、やや歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 6° - W である。

覆土 明黒褐色土を主体とする。上面が削平されており、遺存状態は不良である。

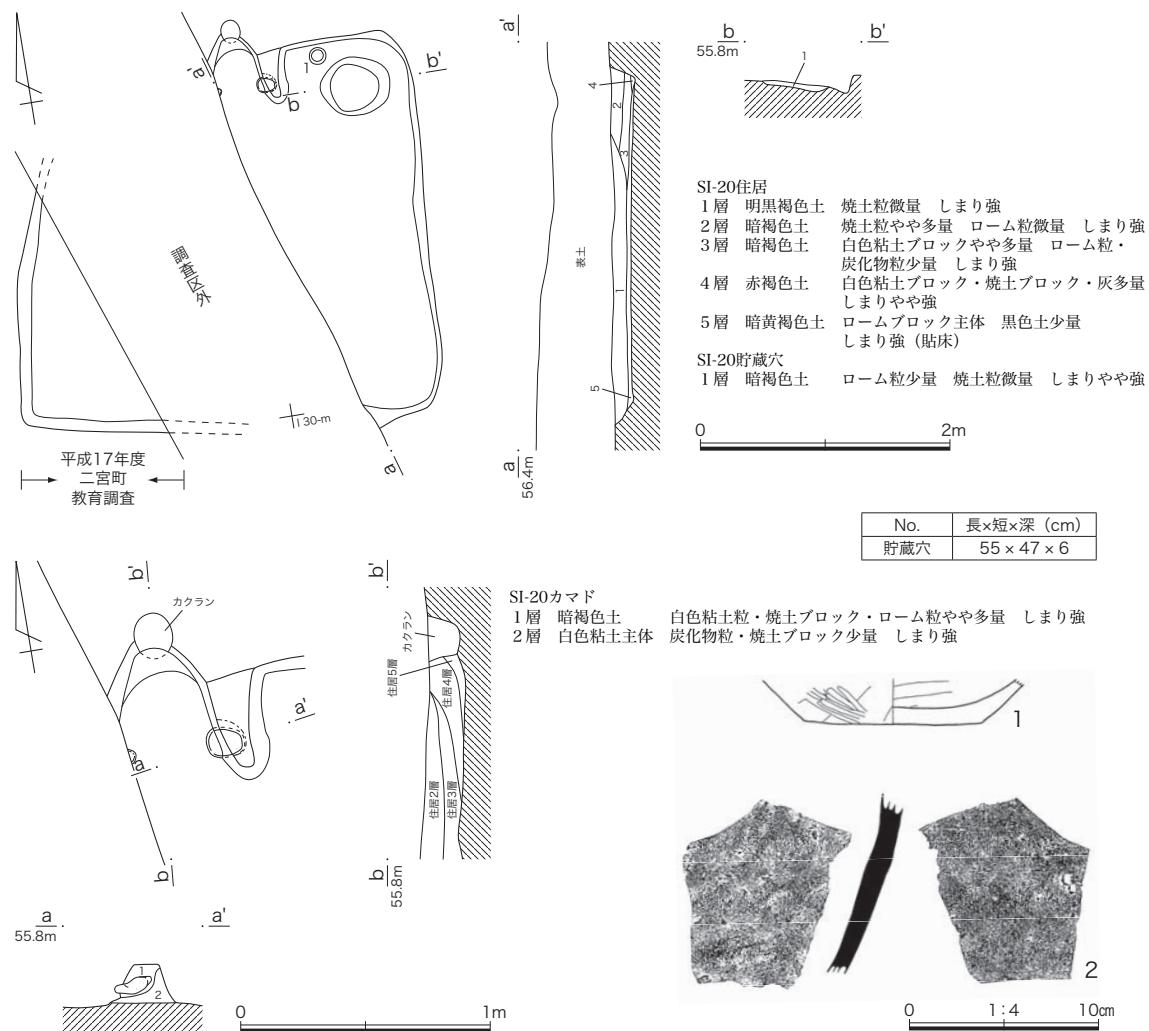
壁 確認面から約 10cm の深さで、緩やかに立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施され、床面は堅くしまっている。

火處 北壁中央にカマドが構築されている。左袖は調査区外となるため、右袖と奥壁を調査した。袖は床面に白色粘土を積み上げて構築されている。袖の内側に礫がはまっており、構築材の一部と考えられる。内部はよく焼けており、焼土と灰が大量に堆積していた（4層）。底面の掘り込みは確認されず、平坦である。奥壁は攪乱を受けているが、煙道は短く急な角度で立ち上がるものと考えられる。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。楕円状の浅い掘り込みで、暗褐色土が堆積していた。

遺物 貯蔵穴北側の床面上から、土師器甕の底部片が出土している（第62図1）。二宮町教育委員会調査部分では、図化可能な個体は出土していない。



第62図 SI-20 壇穴住居跡および出土遺物

第24表 SI-20 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置／注記
1 土師器 甕	底 9.6 高 (2.4)	(内) 底部近くヘラケズリ (外) ヘラナデ、ヘラケズリ 表面に薄く粘土をなでつけ (残) 底 8/8	白色粒子・砂礫多・ 雲母やや多 良 7.5YR4/6 褐	床直 No.1
2 須恵器 甕	破片	内外面とも無文 産地不明	白色粒子・黒色融解粒多・ 砂礫少 良 5Y5/1 灰	覆土一括

SI-21 (第63・64図・図版十一・四六)

位置 J30 グリッドに位置する。

規模・形状 東西4.5m、南北4.15mの方形を呈する。主軸方向はN-10°-Eである。

覆土 内容物をあまり含まない暗褐色土を主体とする。

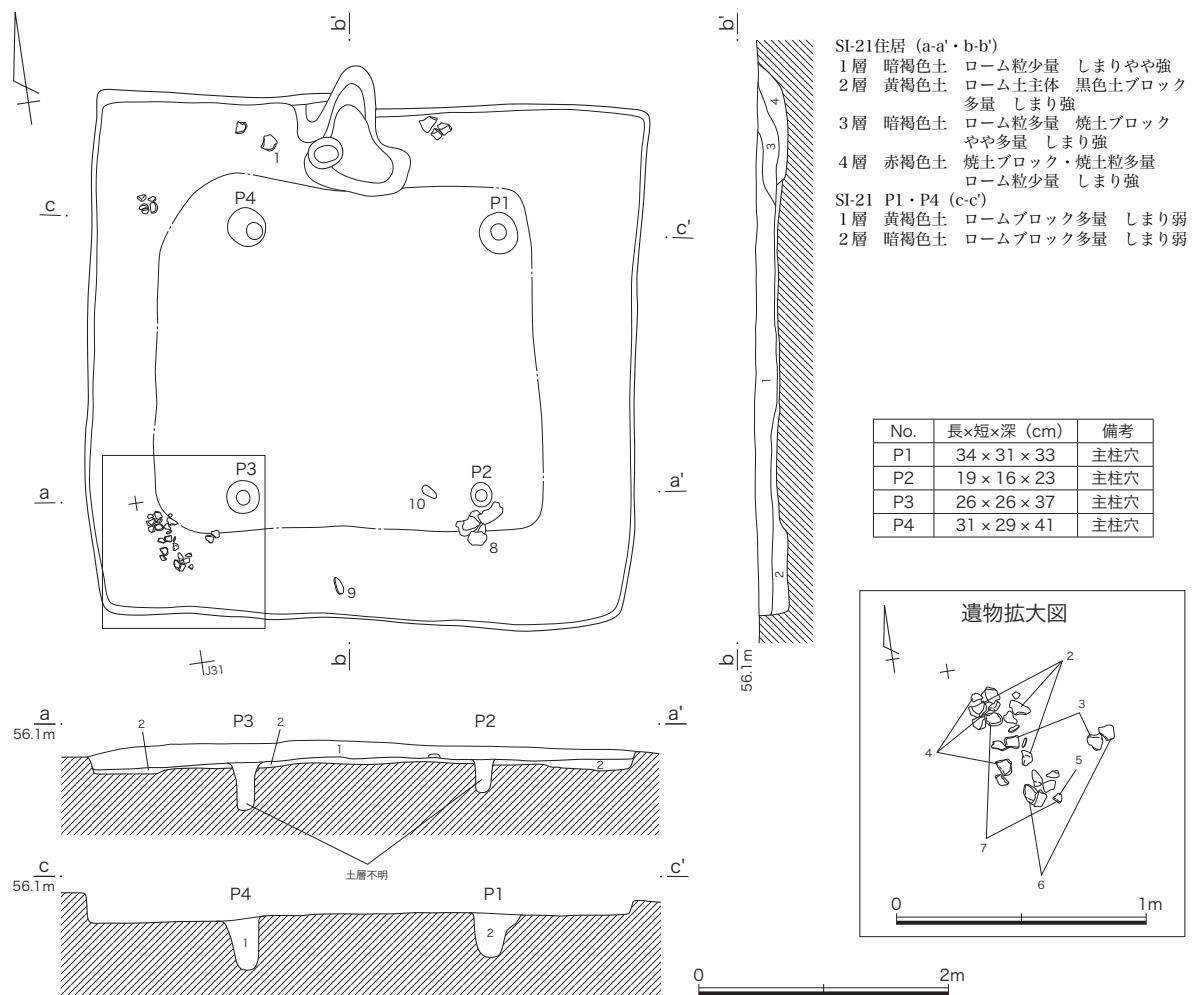
壁 確認面から深さ約15cmで、ほぼ直に立ち上がる。南東隅がやや丸みをおびている。壁溝はない。

床面・貼床 中央は地床（第63図平面図の波線内側部分）、周縁はロームブロックによる貼床を施している。全体的に堅くしまっているが、特に中央が著しい。

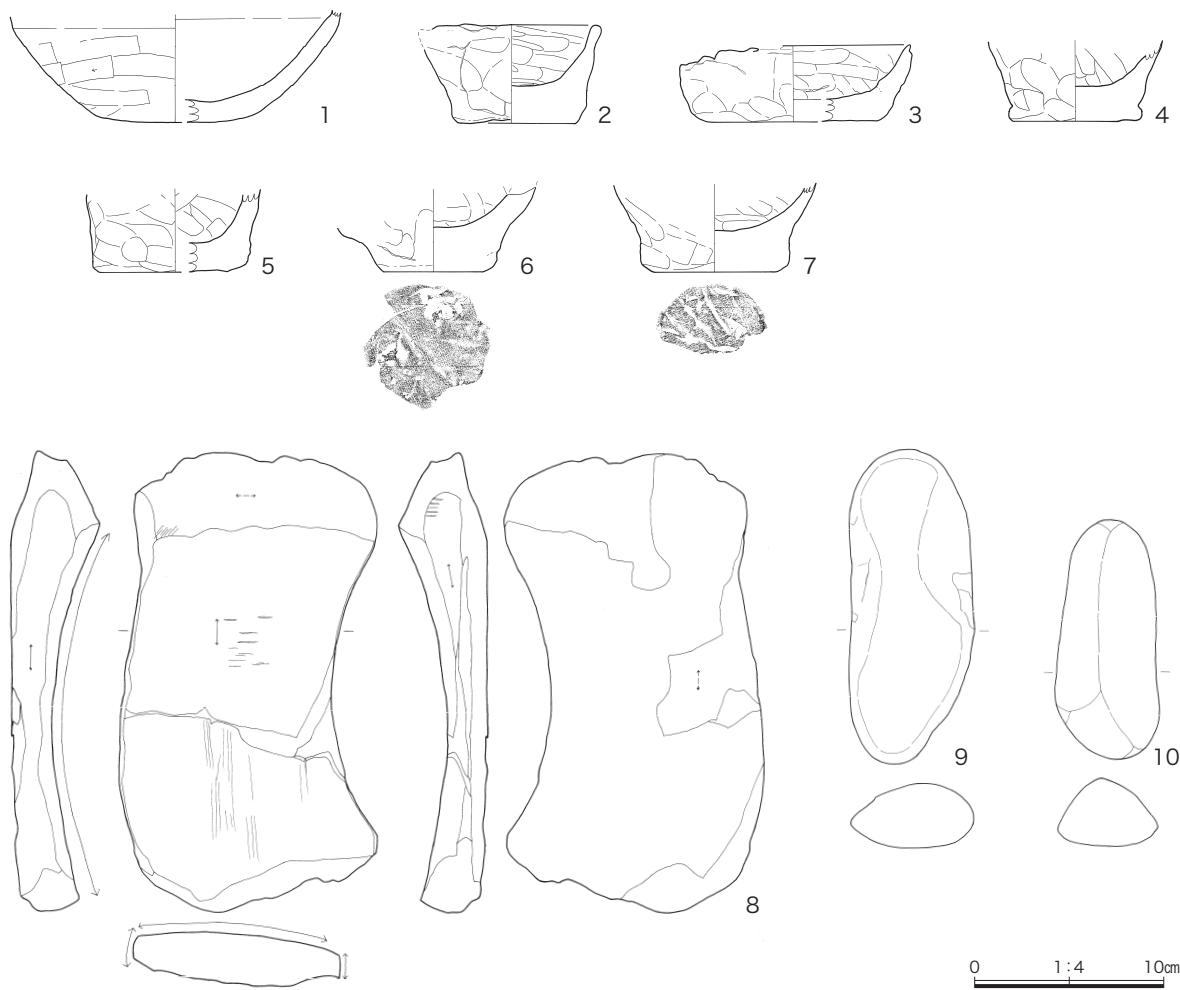
掘方 地床部分を島状に掘り残し、貼床が施される周辺部分を約5cm掘り下げている。

柱穴 4本主柱。円形の掘り方を呈し、いずれも柱痕は確認されなかった。南側のP2・P3は調査記録漏れにより土層が不明であるが、おそらく北側と同じようにロームブロックを多く含むしまりの弱い層が堆積していたと考えられる。P2のみ他の主柱穴に比べ細く浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、左袖と奥壁が残存している。左袖の手前には、住居跡よりも新しいピットが掘り込まれている。左袖は地山を掘り残した上に粘土を貼って構築されていたと考えられ



第63図 SI-21 穫穴住居跡



第64図 SI-21出土遺物

第25表 SI-21遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 坏	高 (5.8)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内外面一部漆付着 (残) 1/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 やや良 10YR4/1 褐灰	床上 +10cm No.30
2 土師器 坏	口 (9.6) 高 5.2	手捏ね成形 内外面指ナデ、外面に指頭圧痕 (残) 底 8/8 体 1/8	砂粒・白色粒子・ 赤色融解粒多 やや良 7.5YR6/6 橙	床直 No.11 + 17 + 21
3 土師器 坏	口 (12.2) 底 (9.2) 高 4.0	手捏ね成形 内外面指ナデ、一部ヘラナデ 外面に指頭圧痕 (残) 2/8	砂粒多・白色粒子・ 赤色融解粒やや多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.2 + 13
4 土師器 坏?	底 (6.8) 高 (4.4)	内外面とも指ナデ、一部ヘラナデ 外面に指頭圧痕 (残) 3/8	砂粒多・赤色融解粒多・ 微細白色粒子少・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.10 + 22 + 24
5 土師器 坏?	底 (7.0) 高 (4.3)	内外面とも指ナデ 内面黒色化 (残) 3/8	砂粒多・微細白色粒子・ 赤色融解粒多・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.5

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
6 土師器 壺？	底 5.3 高 (4.5)	(内) ヘラナデ (外) 指ナデ 底部木葉痕 (残) 底 8/8	砂粒多・微細白色粒子少・ 雲母微良 10YR6/6 明黄褐	床直 No.1 + 7
7 土師器 壺？	底 (6.3) 高 (4.7)	内外面とも指ナデ 底部木葉痕 (残) 底 3/8	砂粒多・微細白色粒子・ 赤色融解粒多・雲母微良 5YR4/6 赤褐	床直 No.5+19
8 石製品 砥石	長 24.3 幅 13.6 厚 2.5 重 1385.17	実測図両側面、表面、上面の4面使用。表面と左側面は研ぎ減りで湾曲している。裏面は欠損しているが、残っている部分は磨っている。表面縦横に弱い刃漬し痕あり。石の目に沿って薄くはがれた状態で出土した。	7.5Y5/2 灰オリーブ	床上 +5cm No.33
9 礫	長 16.6 幅 6.5 厚 3.8 重 563.8	断面楕円状 表面にタール状の付着物	2.5YR4/2 暗灰黄	床直 No.35
10 礫	長 12.6 幅 5.5 厚 3.5 重 320.7	断面三角状 左側面から裏面にかけてタール状の付着物	2.5Y6/1 黄灰	床上 +5cm No.34

るが、粘土はほとんど残っていない。内部はよく焼けており、焼土ブロックが大量に堆積している（4層）。底面には浅い掘り込みが確認された。

遺物 南西隅で手捏ねの土師器壺が集中して出土した（第63図出土状況図・第64図2～7）。床直あるいは5cm程度浮いた状態で出土しており、口縁部が欠けているものが多い。P2の南側からは破碎した砥石（第64図8）が床面から5cm程度浮いた状態で出土した。カマド周辺からも遺物が出土しているが、図化できたのは第64図1の土師器壺のみである。

SI-22（第65図・図版十一）

位置・重複関係 K30グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、南東部分をSD-102・106に大きく切られる。

規模・形状 残存部分が少なく規模は不明であるが、平面プランは方形と考えられる。主軸方向はN-5°-Wである。

覆土 暗褐色土を主体とするが、覆土はほとんど残っていない。

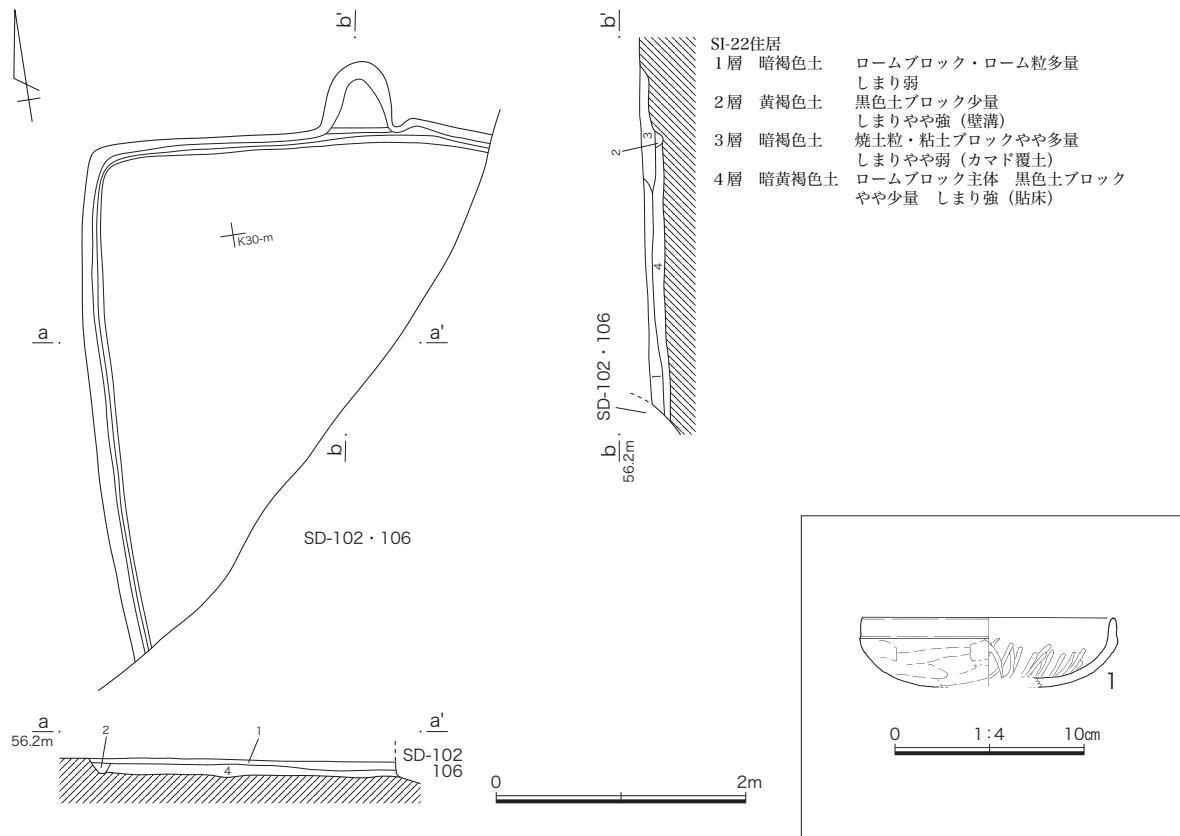
壁・壁溝 確認面から約5cmで、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はカマド前を含め全周する。

床面・貼床 黒色土を多く含むロームブロックで貼床を施しているが、しまりは弱く柔らかい。

掘方 床面から5cmの深さで、全体的に平坦である。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。残存状況が極めて悪く、粘土もほとんど残っていない。壁溝がカマド前にもあることから、壁溝を掘った後にカマド部分を埋め、カマドを構築していたものと思われる。内部には焼土・粘土ブロックが堆積していた（3層）。内部はあまり焼けていない。

遺物 覆土中の床面に近い部分で少量の土器片が出土している。図化できたものは土師器壺1点のみである（第65図1）。



第65図 SI-22 竪穴住居跡および出土遺物

第26表 SI-22 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (14.0) 高 (3.4)	(内) 口～体上半ヨコナデ→体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子・雲母多 良 7.5YR4/2 灰褐	覆土

SI-23 (第66・67図・図版十一・十二・四六)

位置・重複関係 K30・31グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、中央部分を SD-102・106 に大きく切られる。

規模・形状 残存部分が少なく、規模・主軸方向は不明である。プランは方形と考えられる。

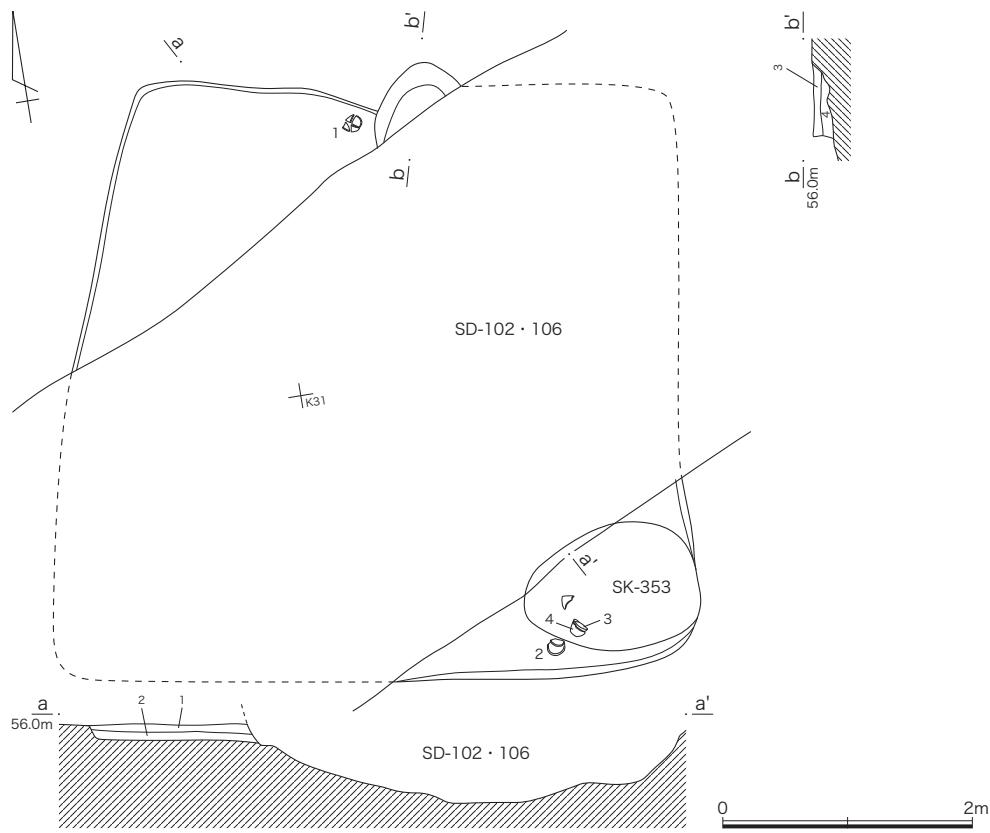
覆土 暗褐色土を主体とするが、覆土はほとんど残っていない。

壁 確認面から深さ約5cm程度である。壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はない。

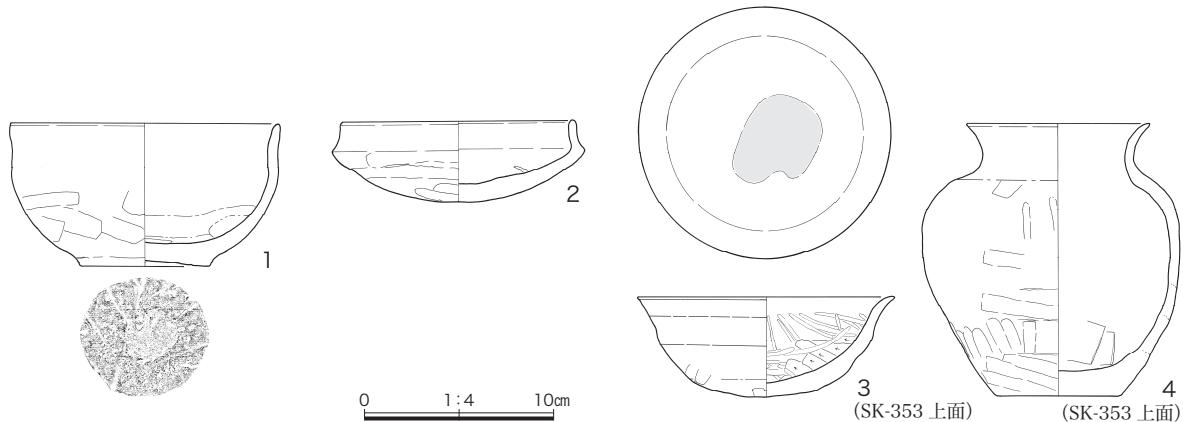
床面・貼床 黒色土を多く含むロームブロックで貼床を施しており、床面は堅くしまっている。

火廻 北壁中央にカマドが構築されており、大部分が SD-102・106 に切られて失われている。粘土も全く残っていない。内部には焼土ブロックが大量に堆積し、よく焼けている。

遺物 カマド西側 (第67図1) と住居北東隅 (第67図2) の床面上から土師器壺が出土している。また、南東隅を切るSK-353の上面から、SI-23に伴うと考えられる土師器壺 (第67図3) と小型甕 (第67図4) が出土している。



第66図 SI-23 竪穴住居跡



第67図 SI-23出土遺物

第27表 SI-23 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (14.2) 底 6.8 高 7.2	(内) 底面近くまでヨコナデ (外) 体部上半までヨコナデ、下半へラナデ 内面赤彩、体部下半に輪状の剥落と黒彩 底部木葉痕 (残) 体 5/8 底 8/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	床直 No.2
2 土師器 壺	口 (12.3) 高 4.2	(内) ヨコナデ、一部細いナデ (外) 口ヨコナデ体へラナデ底部近くへラケズリ 内面一部にタール状の付着物 (残) 2/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母微 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床直 No.1
3 土師器 壺	口 13.4 高 5.3	(内) ヘラケズリ→粗いミガキ (外) 口ヨコナデ体へラケズリ 内面漆仕上げ 内外面被熱により摩滅 (残) 8/8	微細白色粒子多・ 砂粒やや多 二次被熱 5YR5/4 にぶい赤褐	SK-353 No.1
4 土師器 小型甕	口 (9.6) 大 (12.4) 底 6.4	(内) 口ヨコナデ胴ナデ底へラケズリ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ下半ナデ→底へラケズリ 楊円形に歪む 内面タール状の付着物 (残) 口 1/8 胴下～底 8/8	砂粒・白色粒子多 二次被熱 2.5YR4/8 赤褐	SK-353 No.2

SI-24 (第68図・図版十二)

位置・重複関係 I31グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、住居南東部分がSD-102・106に切られる。西側約1/3は調査区外となる。

規模・形状 残存部分で東西2.5m、南北1.9mである。主軸方向はN-21°-Eである。

覆土 黒褐色土を主体とするが、覆土はほとんど残っていない。

壁 上面を大きく削平されているため、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はない。

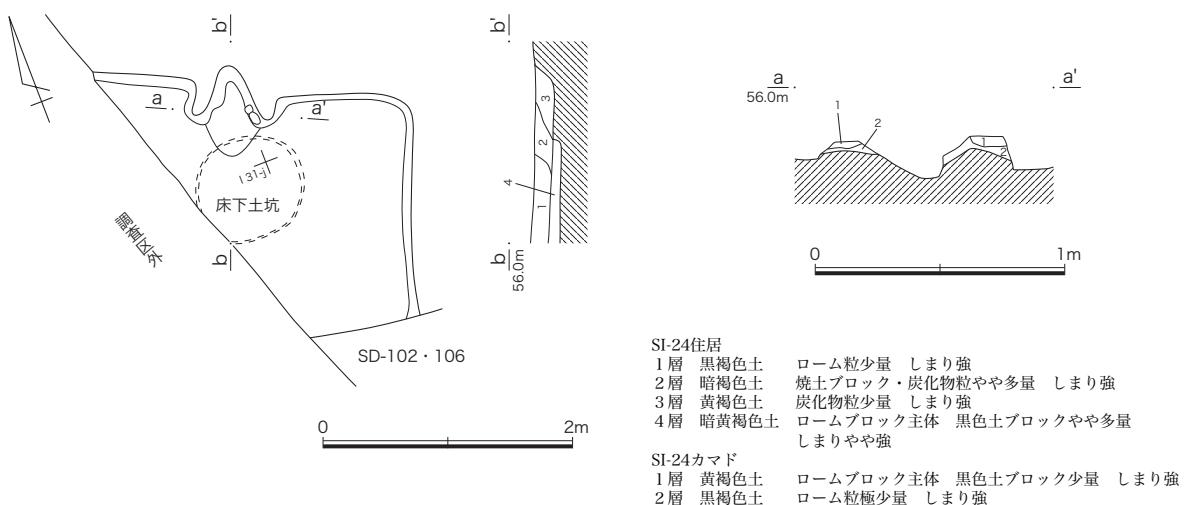
床面・貼床 ロームブロックによる貼床を施しており、床面は堅くしまっている。

掘方 床下で円形の浅い土坑が確認された。覆土はロームブロックを主体とする暗黄褐色土である。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、粘土はほとんど残っていない。

両袖は地山ローム層を掘り残した上に、粘土を貼って構築していたと考えられる。右袖内側には拳大の礫が2点貼り付くようにして出土している。焚き口手前がやや凹んでいるが、内部の掘り込みはなく、あまり焼けていない。煙道は短く、なだらかに立ち上がる。

遺物 覆土中から土器片が少量出土しているが、実測可能なものはなかった。



第68図 SI-24 竪穴住居跡

SI-25 (第69図・図版十二・四六)

位置・重複関係 J31グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、住居の大半をSD-102・106に切られる。

規模・形状 残存部分が少ないため、規模・形状・主軸方向は不明である。

覆土 暗褐色土を主体とし、ローム粒・焼土粒が多量に含まれている。覆土はほとんど残っていない。

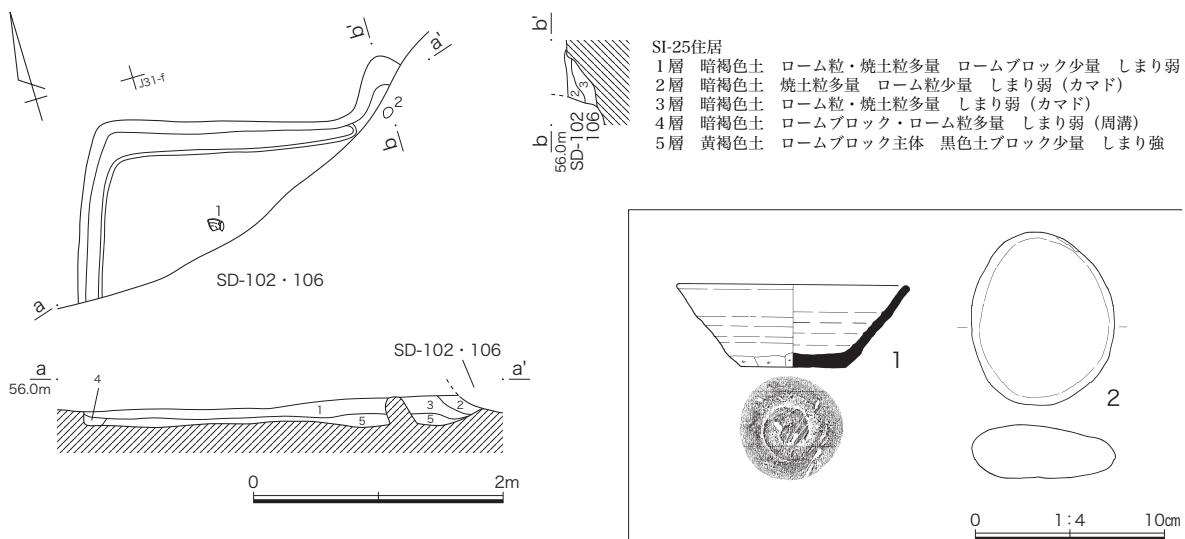
壁・壁溝 削平により、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はカマド部分を除いて全周している。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施されており、床面は堅くしまっている。

掘方 カマド前がやや凹んでいるが、他は平坦である。

火処 SD-102・106に削平され、奥壁がわずかに残るのみである。カマドの内部には焼土が大量に堆積している(2・3層)。内部のほぼ中央から礫が1点出土しているが(第69図2)焼けていないため、カマドの使用に伴う遺物ではないと考えられる。煙道は短く、なだらかに立ち上がる。

遺物 住居北西の床面上から須恵器坏が1点出土している(第69図1)。



第69図 SI-25 竪穴住居跡及び出土遺物

第28表 SI-25 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 底	口 (12.2) 底 (5.5)	内外面ともロクロナデ 底部近く手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラ切り離し後調整なし 底部に巻き上げ痕残る	白色粒子極多・黒色融解 粒多・砂礫やや多 良 10YR5/1 灰	床直 No.1
2 壺	高 4.4	(残) 体 3/8 底 8/8 堀ノ内産		
2 碟	長 9.1 幅 7.5 厚 3.0 重 280.4	扁平な円状 上端に弱い敲打痕あり	N4/ 灰	カマド No.2

SI-26 (第70・71図・図版十二・四六)

位置 L30・31 グリッドに位置する。

重複関係 住居東側で SI-27 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-27 (旧) → SI-26 (新) である。

規模・形状 東西 3.75m、南北 3.3 m の方形を呈する。主軸方向は、N - 3° - W である。

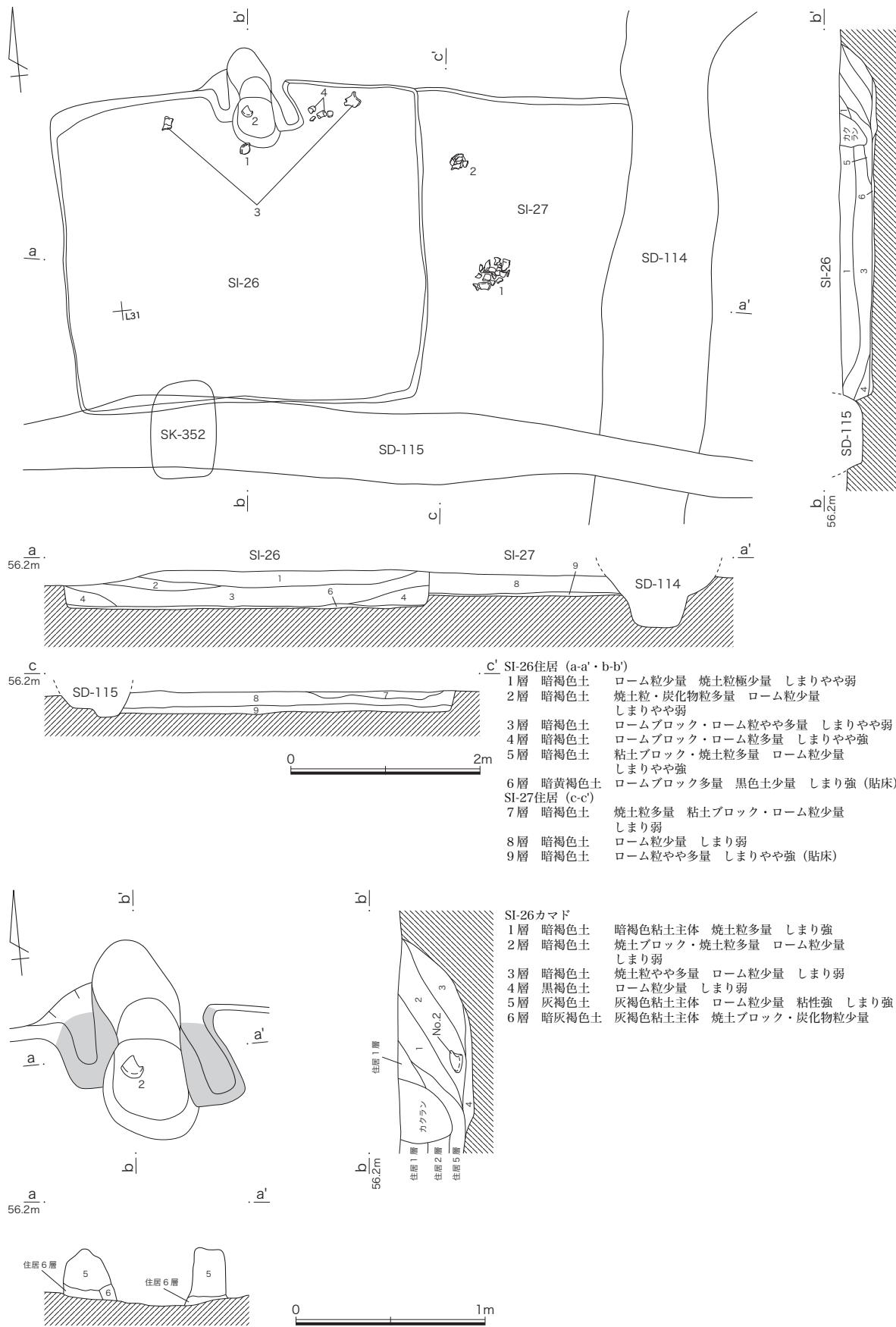
覆土 暗褐色土を主体とする。全体的にしまりが弱く、下層にはローム粒・ロームブロックが多く含まれている。住居西側には焼土粒・炭化物粒を多く含む層 (2層) が確認された。

壁・壁溝 確認面からの深さが約 35cm で、壁はほぼまっすぐ立ち上がる。壁溝はない。

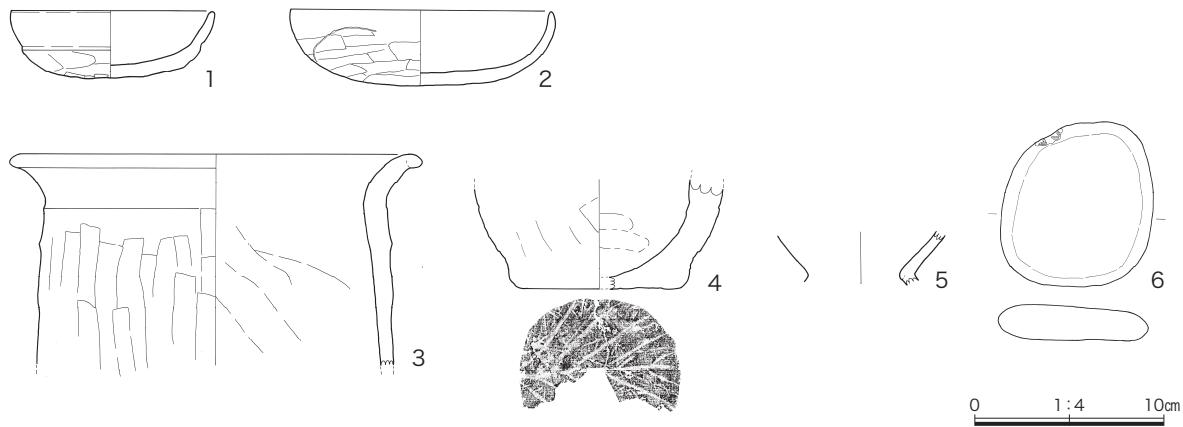
床面・貼床 ロームブロックによる薄い貼床が部分的に施される。掘り方はない。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。袖は住居貼床の上に灰褐色粘土を積み上げて構築している。内部には天井崩落土と考えられる粘土を主体とする土層 (1層) が厚く堆積しており、その下に焼土ブロックを大量に含む層 (2層) が堆積している。底面はわずかに凹んでおり、黒褐色土が薄く堆積している (4層)。底面からやや浮いた状態で土師器壺 (第71図2) が出土しているが、焼けていないことから、カマド廃絶後に入り込んだと考えられる。カマド土層断面の観察から、カマドが埋没した後に住居覆土がレンズ状に堆積した様子がはつきりと確認された。煙道は短く、急な角度で立ち上がる。

遺物 カマド周辺から土器片が多く出土しているが、図化できたものは少ない。土師器壺 (第71図1) と土師器甕 (第71図3) が床面上から出土している。



第70図 SI-26・SI-27 竪穴住居跡



第71図 SI-26出土遺物

第29表 SI-26遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壊	口 10.7 高 3.4	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体上半ヘラナデ下半ヘラケズリ 内面一部黒色 外面あばた状の剥離（残）6/8	白色粒子多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	床直 No.3
2 土師器 壊	口 (13.8) 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ 内面に一部漆付着（残）4/8	砂礫多・白色粒子 やや多・雲母微 良 10YR5/6 黄褐	床上 +10cm No.2
3 土師器 甕	口 21.6 高 11.0	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 口唇部に輪積痕（残）4/8	砂礫多・白色粒子やや多 良 10YR6/8 明黄褐	床直 No.1+8+ 覆土 a
4 土師器 甕	底 (8.6) 高 5.8	(内) 弱いナデ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕（残）4/8	砂礫極多・微細 な白色粒子少 良 10YR6/8 明黄褐	床上 +10cm No.4+6 No.3 と同一個体
5 土師器 小形壺	破片	内外面ヨコナデ 全面に赤彩・光沢有り (残) 1/8	砂礫少・雲母微 やや良 2.5YR4/8 赤褐	覆土 a + b
6 礫	長 8.7 幅 7.9 厚 1.8 重 220.0	盤状 左上端・裏面上端に敲打痕あり	N7/ 灰	確認面

SI-27 (第70・72図・図版十三・四六)

位置 L30・31 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側で SI-26 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-27 (旧) → SI-26 (新) である。また、SD-114・115 に切られる。

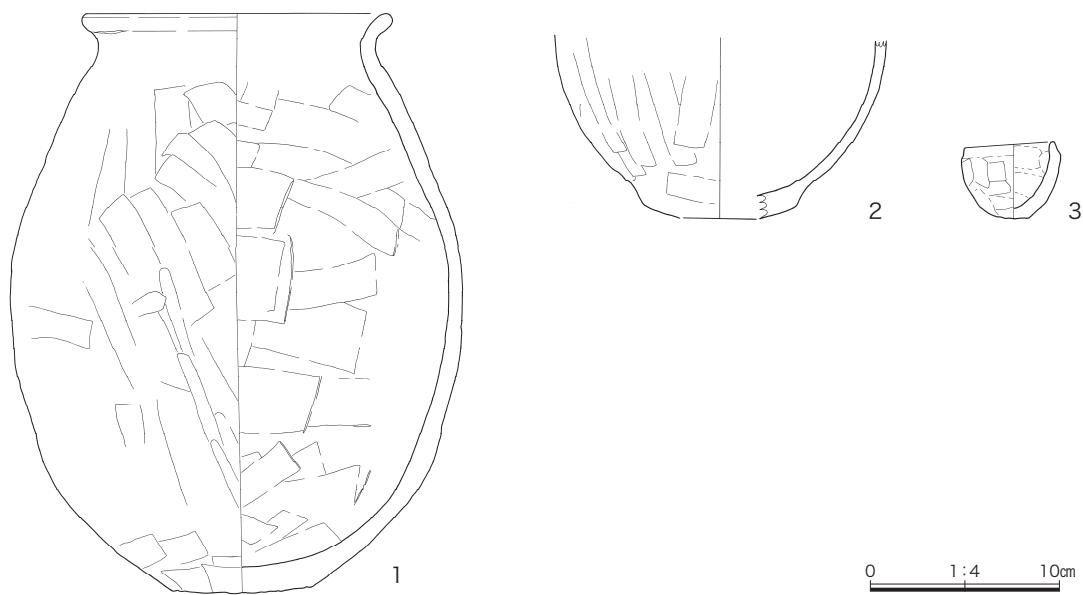
規模・形状 住居北壁の一部しか残存していないため、規模・形状・主軸方向は不明である。

覆土 暗褐色土を主体とする。北側上面には焼土粒を多く含む土層(7層)が確認された。粘土ブロックも少量含まれていることから、カマドに伴う土層とも考えられるが、本体が残存していないため不明である。

壁 確認面から約20cmの深さで、残存部分ではほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 暗褐色土による貼床が施されているが、しまりは弱く柔らかい。掘方はない。

火廻 残存していないため不明である。



第72図 SI-27出土遺物

第30表 SI-27 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (16.3) 底 7.4 高 30.3	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ下半ヘラナデ 外面にタール状の付着物 (残) 3/8	砂礫・白色粒子少・ 雲母微 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.1+ 覆土 a
2 土師器 甕	底 (8.0) 高 (9.4)	(内) ナデ (外) ヘラケズリ 底部丸み帯びる (残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 7.5YR3/3 暗褐	床上 +20cm No.2
3 土師器 小型壺	口 4.7 高 4.0	手捏ね成形? 内面に指頭圧痕残る 外面口ヨコナデ、体粗いケズリ (残) 6/8	白色粒子多・砂礫少 やや良 10YR3/1 黒褐	覆土 a

遺物 住居中央と北壁寄りから土器片が出土している（第72図1・2）。いずれも床面からは10cmほど浮いた状態で出土した。

SI-28 (第73～75図・図版十三・四六)

位置 K31・32 グリッドに位置する。

重複関係 住居東側でSI-54 竪穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-54（旧）→SI-28（新）である。また、SK-348・350・351に切られる。

規模・形状 東西4.7m、南北4.65mの方形を呈するが、東壁が外側にやや膨らんでいる。主軸方向はN-10°-Wである。

覆土 暗褐色土を主体とする。住居北側上面にロームブロックを多量に含む覆土（1層）が堆積している。

壁・壁溝 確認面から約15cmの深さで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分以外で全周する。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施されるが、しまりは弱く、柔らかい。

掘方 床面から10cm程度の深さで、平坦である。

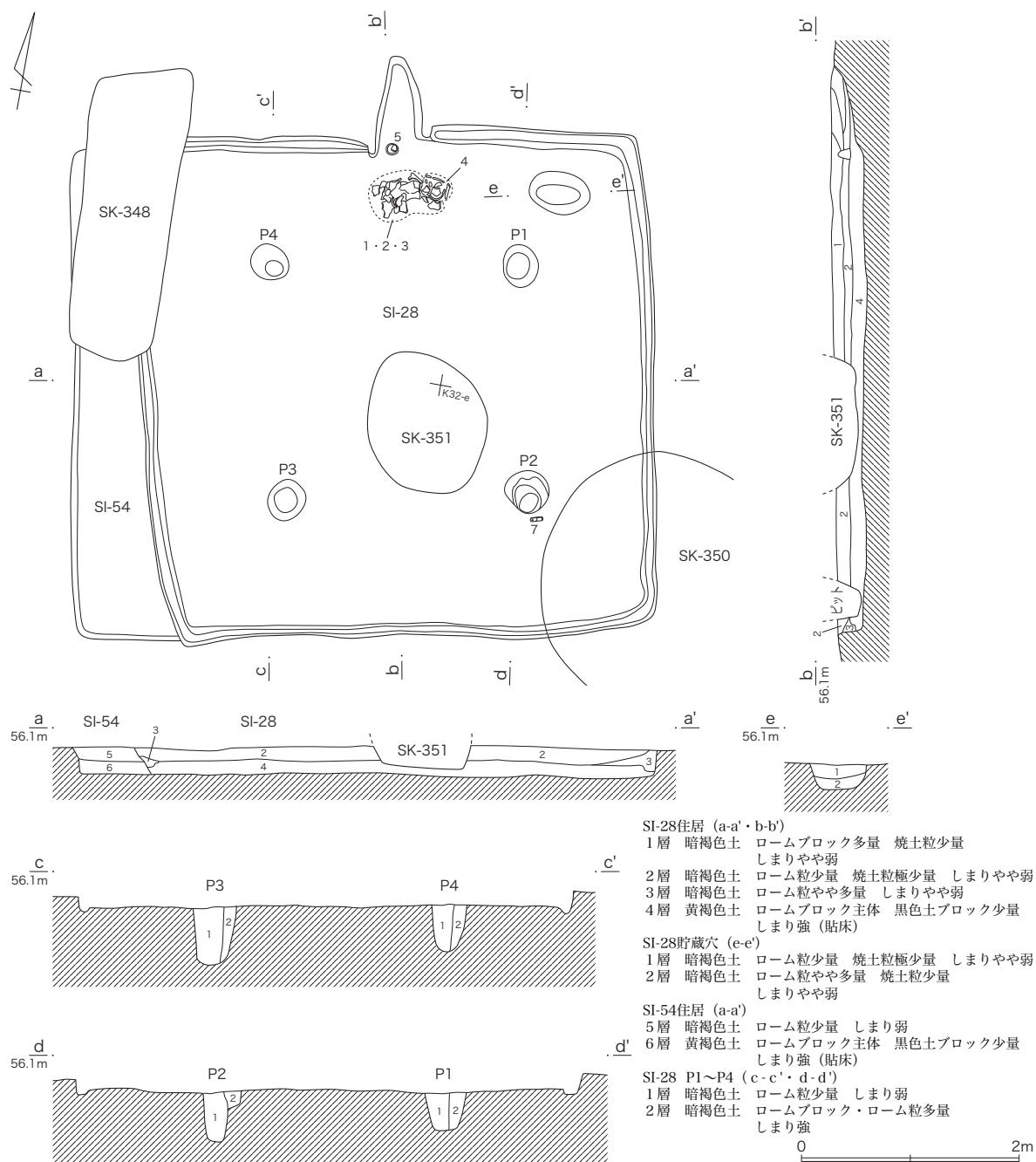
柱穴 4本主柱。円状の掘り方を呈し、いずれも柱痕と考えられる暗褐色土層の周りにロームブロックを

多量に含む土層が堆積している。

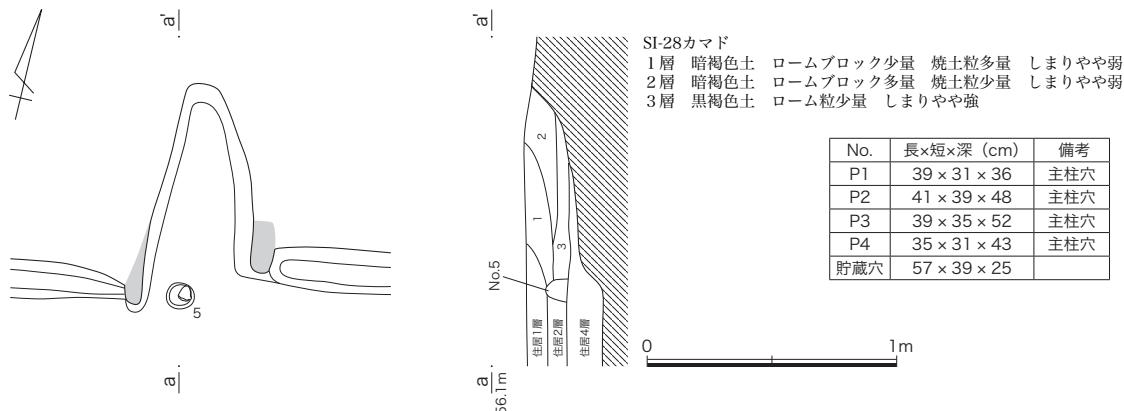
火廻 北壁中央にカマドが構築されている。奥壁と袖の粘土が一部残っているが、残存状況は悪い。燃焼部中央に土製の支脚が残っていた（第75図5）。内部には焼土が多く堆積し（1層）、よく焼けている。燃焼部には掘り込みはなく、底面は平坦である。煙道は緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴 住居北東で1基確認された。楕円状の掘り方を呈し、暗褐色土が堆積していた。

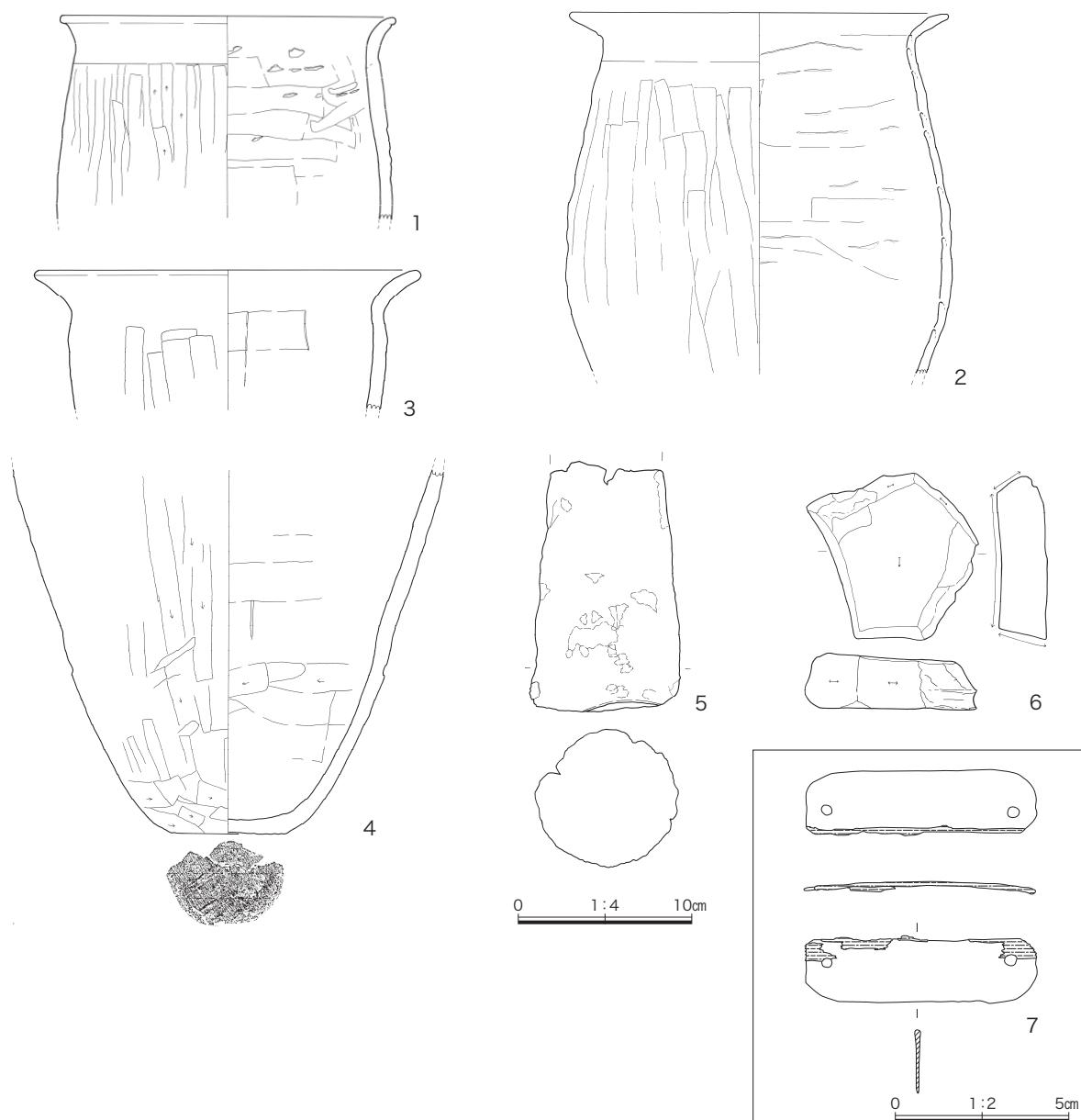
遺物 カマド南側で土師器甕の破片がまとまって出土している（第75図1～4）。1と2には二次的な被熱が認められることから、カマドで使われていた甕の可能性がある。また、P2南側から手鎌が出土している（第75図7）。



第73図 SI-28・SI-54竪穴住居跡（1）



第74図 SI-28・SI-54 穫穴住居跡（2）



第75図 SI-28・SI-54 出土遺物

第31表 SI-28 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置／ 注記
1 土師器 甕	口 19.2 高 (11.8)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 口唇部内面に輪積痕 (残) 6/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 雲母微 二次被熱 5YR4/8 赤褐	床上 +10cm No.1
2 土師器 甕	口 (21.6) 高 (21.0)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 内面に輪積痕多く残る (残) 2/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 雲母微 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	床上 +10cm No.1
3 土師器 甕	口 (22.0) 高 (8.0)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	小砂礫極多・白色粒子多 雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.1
4 土師器 甕	底 (6.5) 高 (21.0)	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ 底部ヘラケズリ (残) 2/8	砂礫極多・砂粒・白色粒子多・雲母微 良 7.5YR4/6 褐	床上 +10cm No.1
5 土製品 支脚	長 (14.4) 径 8.6 重 812.24	手捏ね成形 表面は被熱により剝落激しい 底部は平坦	砂礫・砂粒多 二次被熱 2.5YR6/4 にぶい黄	カマド No.3
6 石製品 砥石	長 9.6 幅 9.8 厚 3.1 重 337.45	実測図表面、左面及び上下端の5面使用。裏面と右側面は欠損。左側面は研ぎ減りにより湾曲している。	7.5Y6/2 灰オリーブ	覆土 b
7 鉄製品 手鎌	長 6.5 幅 1.9 厚 0.5 重 4.10	棟側にわずかに木質が残る。実測図下側の面では棟から幅3mm程度木がついていたと考えられる。上側の面には1mm程度木が残っている。棟はやや丸みをおびている。 断面は非常に薄い。		床上 +5cm No.2

SI-54 (第73図・図版十三)

位置 K31・32 グリッドに位置する。

重複関係 住居の大半がSI-28 壓穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-54(旧)→SI-28(新)である。また、SK-348に切られる。

規模・形状 残存部分が少ないため、規模・形状・主軸方向とも不明。

覆土 暗褐色土を主体とするが、覆土はほとんど残っていない。

壁 確認面から約10cmの深さで、壁の立ち上がりラインは不明である。残存部分で壁溝は確認できなかった。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施され、よくしまり堅い。遺物は出土しなかった。

SI-29 (第76～81図・図版十三・四六)

位置 J32 グリッドに位置する。

重複関係 住居東側でSI-30 壓穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-29(旧)→SI-30(新)である。また、壁の拡張とカマド・柱穴・床面の作り替えを伴う住居の立て替えが1回行われており、SI-29a(新段階)とSI-29b(旧段階)に分けられる。

SI-29a (第76図)

規模・形状 東西、南北共に5.1mの方形を呈するが、北西隅と南東隅が丸みをおびている。南西隅は調査区外となる。主軸方向は、N-22°-Eである。

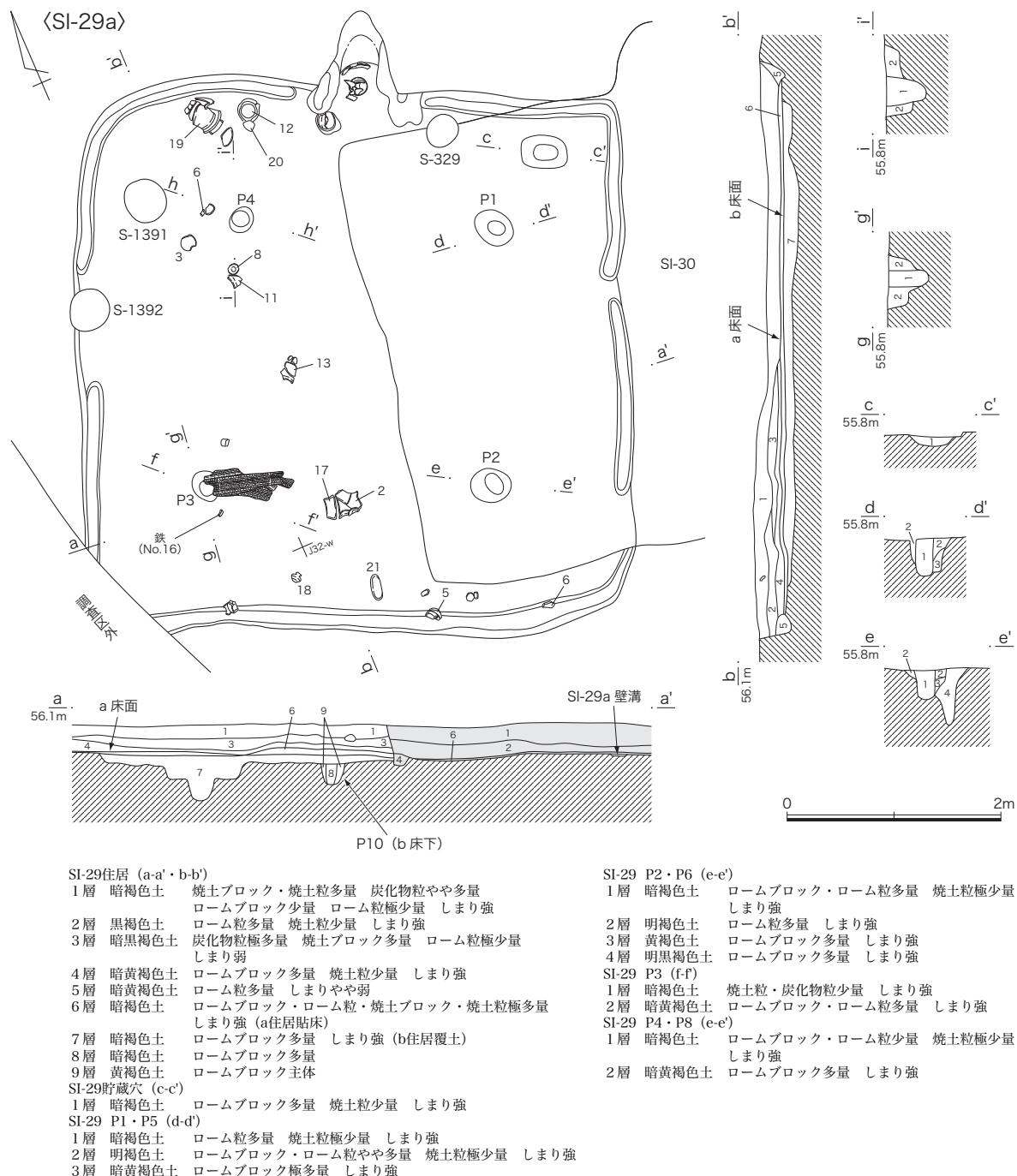
覆土 大きく2層に分層される。上層(1層)は焼土ブロックや焼土粒・炭化物を多く含む暗褐色土、下層(2層)は炭化物と焼土ブロックを多く含む黒褐色土である。

壁・壁溝 確認面から約25cmの深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分と西壁中央以外全周している。東壁の壁溝はSI-30の削平により部分的に失われているが、当初はつながっていたと考えられる。

床面・貼床 SI-29b と重複する部分（住居中央）は、ロームブロックや焼土ブロックを多量に含む暗褐色土でやや厚めの貼床を施している。重複しない部分の貼床は薄い。全体的によくしまり、堅い。

柱穴 4本主柱。円形の掘り方を呈し、いずれも柱痕が確認されている。P3 の上面では、柱材と考えられる炭化材が東に倒れた状態で出土した。P3 の覆土が柱痕状に残っていることから、床面より上の部分が折れて倒れた可能性がある。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。SI-29b のカマド煙道部分を埋め戻した上に作っており、右袖は SI-30 壁穴住居跡に切られて失われている。袖は、ローム地山を掘り残した上に、さらに粘土を積み上げ



第76図 SI-29 壁穴住居跡 (1)

て構築しており、内面はよく焼けている。左袖の先端には、土師器甕が直立した状態で残っていた（第80図15）。周辺に粘土が付着していることから、カマドの芯材と考えられる。カマド周辺には粘土が多く堆積し、内部には焼土ブロック・灰・炭化物が大量に堆積していた。中央には土師器甕・鉢が入れ子で伏せられた状態で残っており（第80図9・10）、内部には灰が堆積していた。カマドにかけた甕を支えるために置かれていたものと考えられる。これらの土師器甕・鉢のうち、10はカマド左袖の15と直接接合はしないものの同一個体の可能性が高いことから、カマド構築時に1つの甕を胴部半ばで打ち欠いた後、胴部をカマド袖の芯材として、口縁部はカマド内部の支えとして使用したと推測される。9・10の上から出土した破片（第80図11）は若干浮いており、カマド廃絶後の流れ込みに伴うものと考えられる。煙道は緩やかな階段状に立ち上がり、煙道の上部には粘土が貼られている。

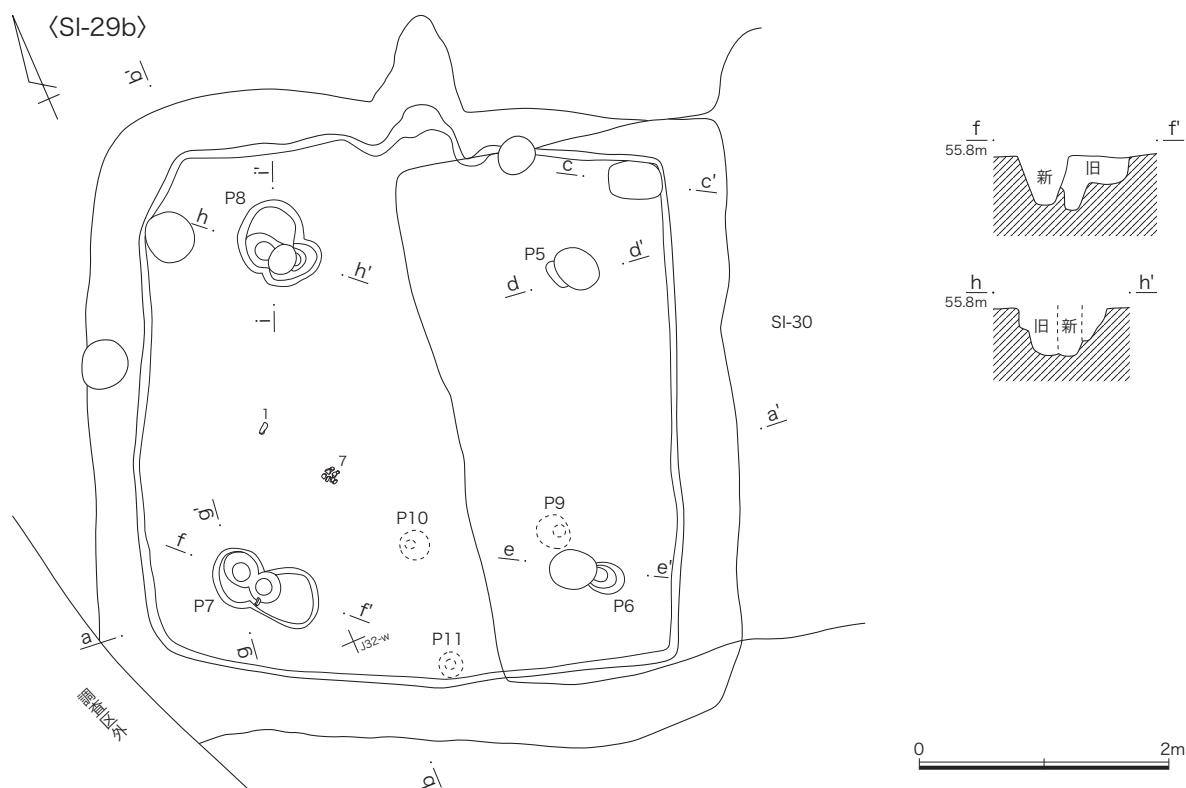
貯蔵穴 住居北東で1基確認された。楕円状の掘り方を呈し、上面はSI-30に削平されているため浅い。

遺物 SI-30竪穴住居跡に削平されている部分以外でまんべんなく出土しているが、カマド左袖外側に特に集中している。第81図19は、破片が重なった状態で出土している。多くが床面から5～20cm浮いており、住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。床面に伴うものは、第79図3の須恵器壺、第80図6の土師器壺、第81図20の砥石である。また、覆土上層から刀子の破片が出土している（第81図22）。

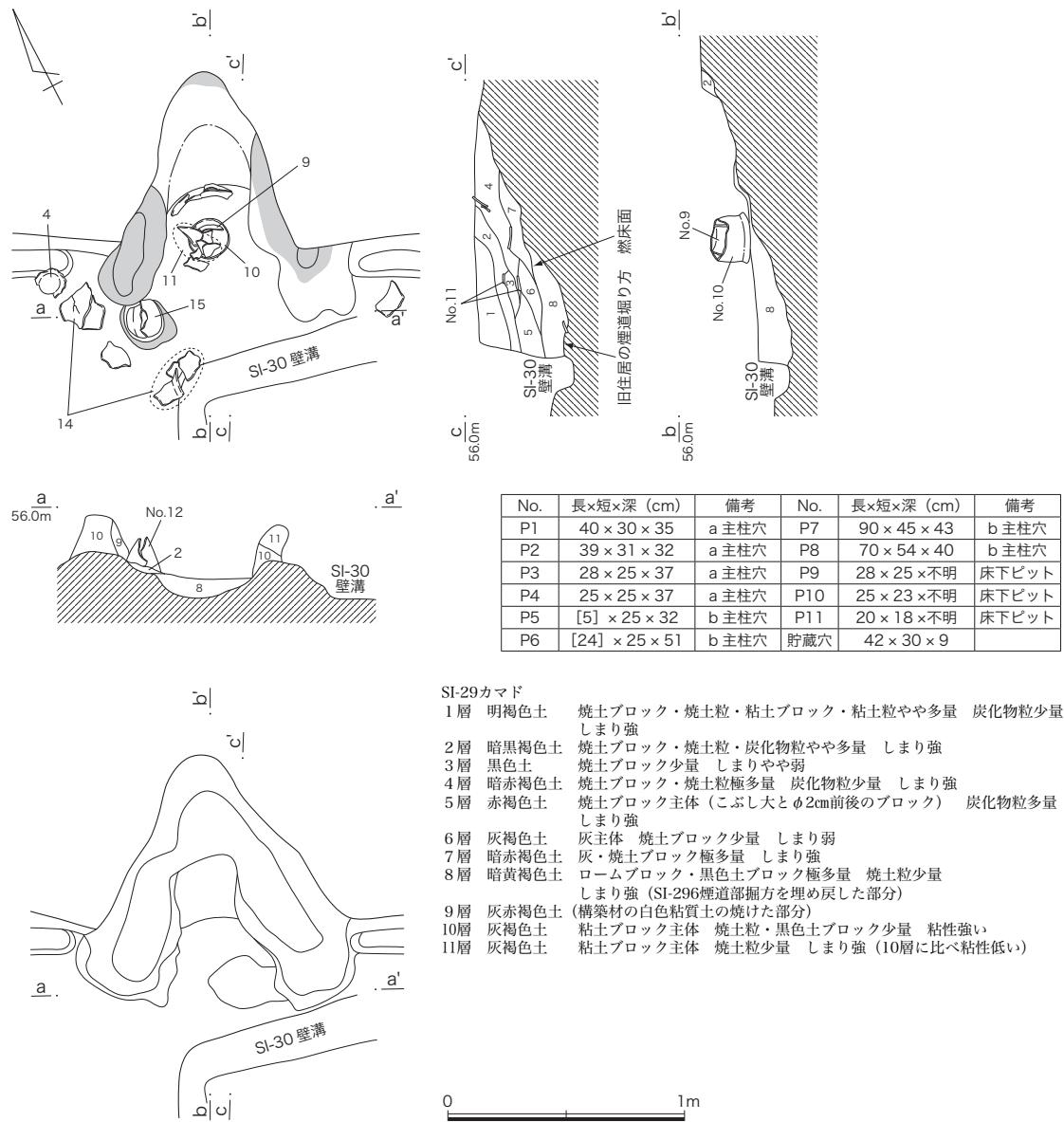
SI-29b（第77図）

SI-29a（新段階）竪穴住居跡の下から、一回り小さい住居跡が確認されている。主軸方向やカマドの位置が変わっていないことから、建て替えと判断した。

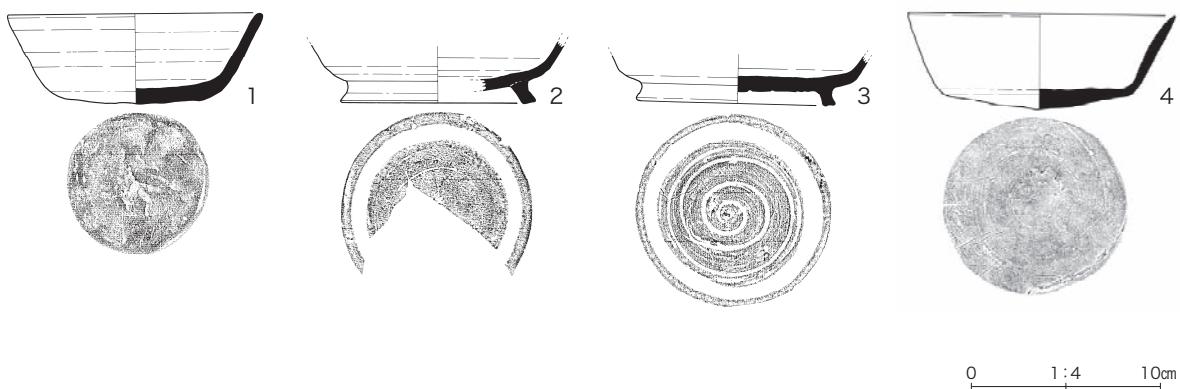
規模・形状 東西・南北共に4.3mの方形を呈する。主軸方向はSI-29a（新段階）と同じである。



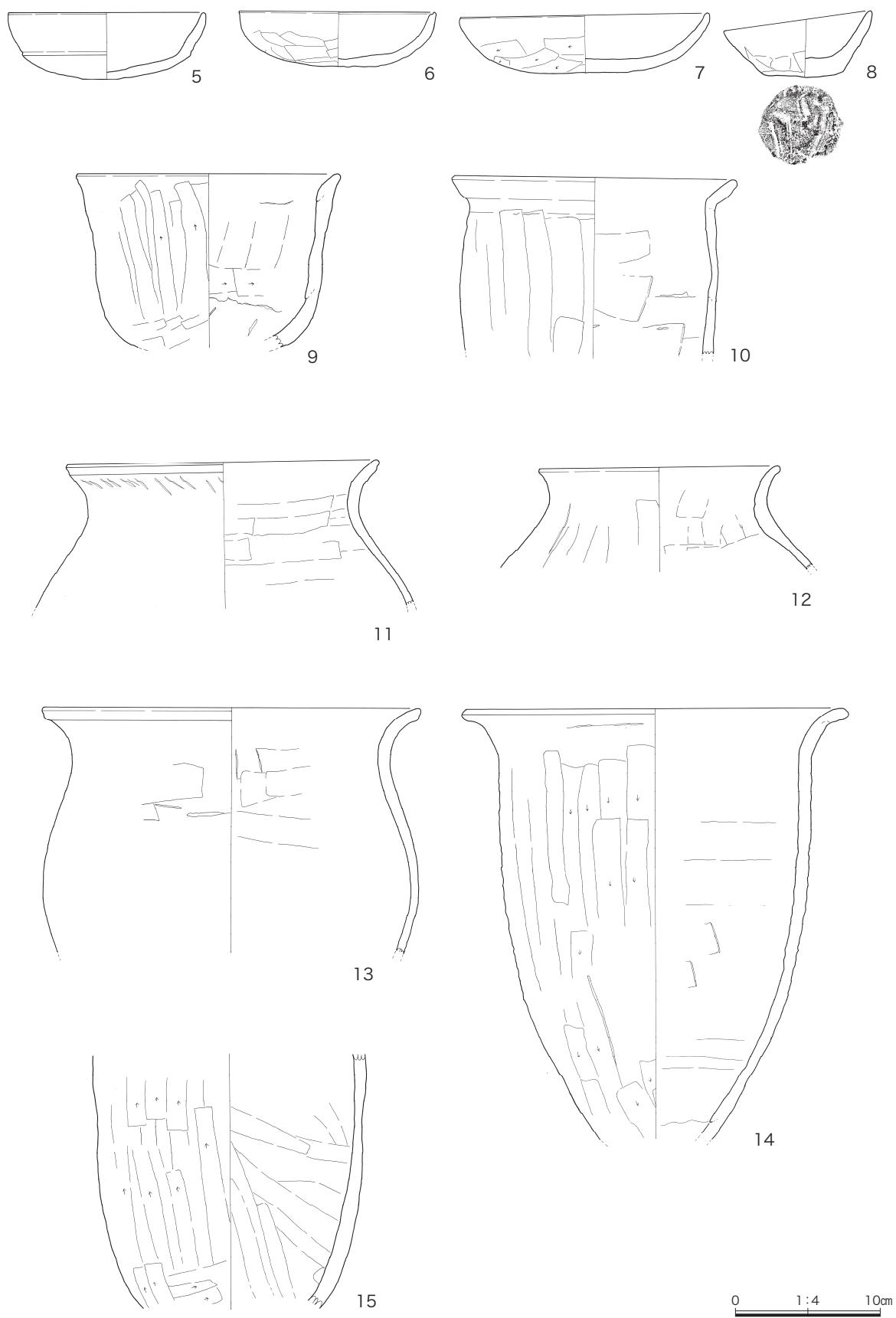
第77図 SI-29 竪穴住居跡（2）



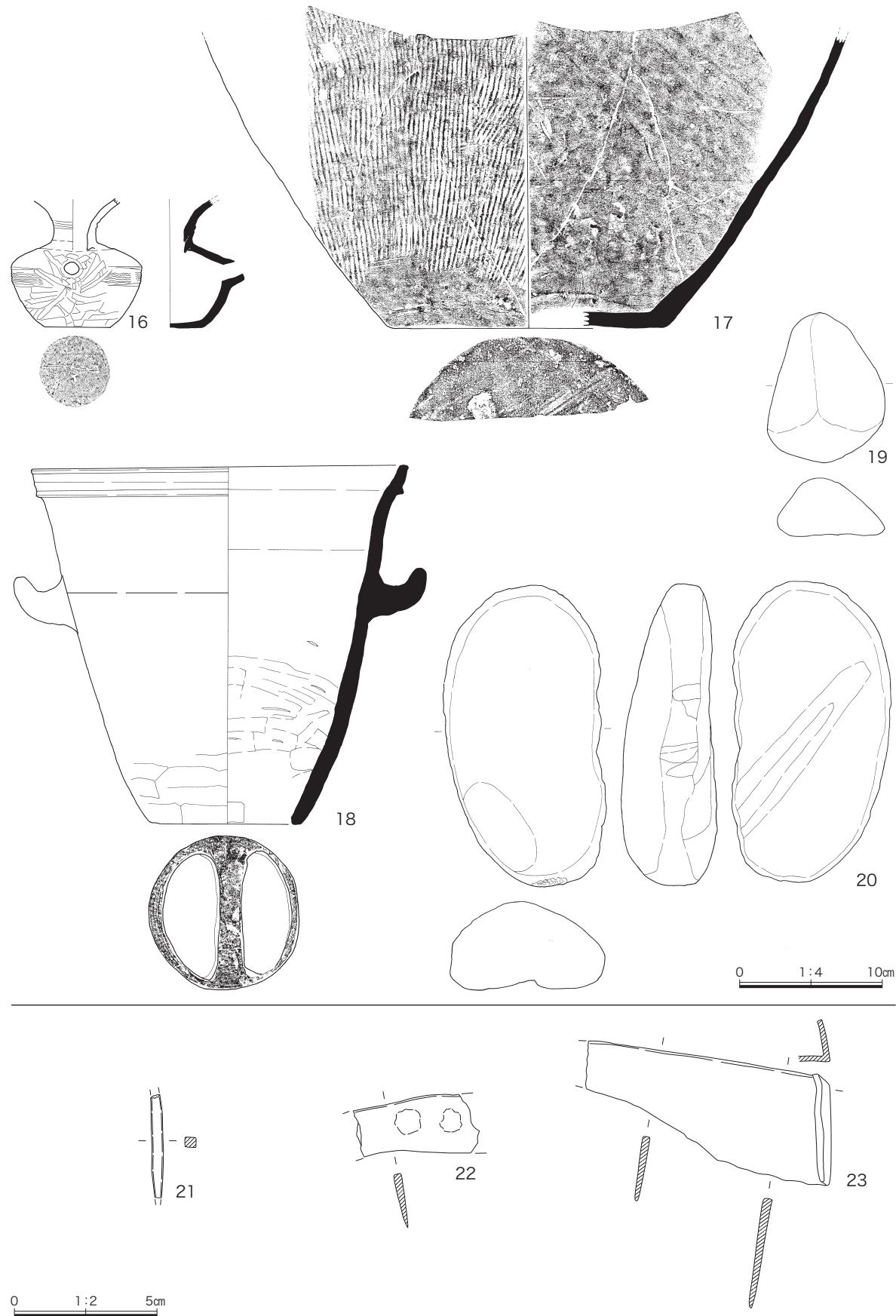
第78図 SI-29 穫穴住居跡 (3)



第79図 SI-29 出土遺物 (1)



第80図 SI-29 出土遺物（2）



第81図 SI-29出土遺物（3）

第32表 SI-29 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 13.4 高 4.6	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 底部丸み帯びる（残）7/8 益子産	砂礫・白色粒子多 やや良 7.5Y5/1 灰	壁溝 No.1
2 須恵器 壺	底 10.2 高 3.0	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付（残）底 6/8 益子産？	砂礫・白色粒子多 良 N5/ 灰	床上 +20cm No.11+ 覆土 a
3 須恵器 壺	底 10.4 高 2.6	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 底部渦巻き状の凹線（残）8/8 益子産？	白色粒子多・砂礫やや多 良 N5/ 灰	床直 No.7
4 須恵器 壺	口 14.0 高 5.0	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 内外面にスス付着（残）5/8 益子産？	砂粒・白色粒子少 良 10YR6/6 明黄褐	床上 +10cm No.42
5 土師器 壺	口 13.5 高 4.6	（内）ヨコナデ （外）口ヨコナデ体ヘラケズリ？ 底部中央に凹み 外面あばた状の剥離（残）7/8	白色粒子多・砂礫少・ 雲母微 良 10YR6/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.19
6 土師器 壺	口 13.5 高 3.8	（内）ヨコナデ （外）口ヨコナデ体ヘラケズリ 口唇部内面に凹線（残）4/8	砂粒・白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	床直 No.6 + 覆土 a
7 土師器 壺	口 (17.2) 高 3.9	（内）ヨコナデ （外）口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面一部漆付着（残）2/8	砂粒多・白色粒子・雲母少 良 10YR6/3 にぶい黄褐	SI-29b 床直 No.22
8 土師器 壺	口 10.1 高 4.1	（内）ヨコナデ（当て具痕残る） （外）口ヨコナデ体ヘラケズリ・指ナデ 底部近くに輪積痕（残）8/8	砂礫・砂粒・白色粒子 やや多・雲母微 良 7.5YR6/8 橙	床上 +5cm No.8
9 土師器 鉢	口 18.0 高 12.0	（内）口ヨコナデ胴上半丁寧なヘラナデ下半ヘラナデつけ （外）口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部・胴部下半に輪積痕（残）3/8	砂礫やや多・白色粒子少・ 雲母微 良 10YR6/8 明黄褐	床上 +5cm No.38
10 土師器 甕	口 20.8/19.5 高 12.0	（内）口ヨコナデ胴ヘラナデつけ （外）口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部梢円形 胴中位に輪積痕（残）8/8	白色粒子・砂粒多・雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄褐	床直 No.39
11 土師器 甕	口 (21.4) 高 10.0	（内）口ヨコナデ胴ヘラナデ（外）口ヨコナデ胴丁寧なナデ (胴下半縦方向のミガキ) 口縁部外 面にヘラ刻み（当て具痕？） 接合しない同一個体片有り（残）2/8	白色粒子・雲母多 良 5YR4/8 赤褐	床上 +15cm No.31+32 +34+36
12 土師器 甕	口 16.6 高 7.1	（内）口ヨコナデ胴ヘラケズリ （外）口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面あばた状の剥離（残）8/8	砂礫多・白色粒子少 良 10YR6/6 明黄褐	床上 +10cm No.3
13 土師器 甕	口 (26.0) 高 (16.8)	（内）口ヨコナデ胴ヘラナデつけ （外）口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデ 胴部外面に煤状の付着物（残）1/8	砂礫・雲母多・白色粒子少 良 7.5YR4/3 褐	床上 +5cm No.10
14 土師器 甕	口 (28.9) 高 (29.5)	（内）口ヨコナデ胴ヘラナデ（外）口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部外面・底部内面に輪積痕残る 全体的に被熱 (残) 2/8	砂礫極多・白色粒子多 二次被熱 5YR3/6 暗赤褐	床上 +5cm No.24+25 +26+43
15 土師器 甕	高 (17.5)	（内）ヘラナデ（外）ヘラケズリ 内面一部スス付着（残）胴 2/8 図 No.10 と同一個体か	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 7.5YR6/6 橙	床上 +5cm No.41
16 須恵器 甕	底 5.0 高 9.2	内外面ともロクロナデ 底部及び注口近く手持ちヘラケズ リ 胴部に6本1組の波状櫛描文 頸部に2本1組の平行 沈線 底部ヘラ記号有り（残）口唇部以外 8/8 益子産？	砂粒・白色粒子多・ 砂礫やや多 良 N5/ 灰	床上 +10cm No.13
17 須恵器 甕	底 (19.2) 高 (20.3)	（内）無文当て具痕+ヘラナデ （外）平行タタキ、底部静止ヘラケズリ 内面にヘラ当て具痕残る（残）2/8 新治産	白色粒子・雲母やや多 やや良 7.5YR5/1 灰	床上 +10cm No.12 + 覆土 b
18 須恵器 甕	口 26.3 底 10.6 高 25.1	内外面ともロクロナデ 胴下半内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ 2単位の把手 完存 益子産	砂礫小 良 N5/ 灰	床上 +10cm No.2
19 礫	長 10.4 幅 8.2 厚 4.4 重 422.2	三角錐状 全体的に著しく赤化 裏面に光沢有り	2.5YR4/3 暗赤褐	床直 No.4

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
20 石製品 砥石？	長 21.1 幅 11.2 厚 6.8 重 148.0	扁平な楕円状 側面及び裏面に溝状の使用痕あり	7.5Y4/1 灰	床直 No.17
21 鉄製品 釘？	長 3.6 幅 0.5 厚 0.5 重 1.37	全体的に層状の剥離が見られ、遺存状態は悪い。断面方形で、上下端とも欠損している。		覆土
22 鉄製品 刀子？	長 4.2 幅 1.7 厚 0.3 重 4.92	刀子の刃部と考えられる破片である。棟側は直線的に伸び、刃はカーブしている。先端と茎部は欠損している。断面は棟が平坦である。鋸ぶくれが著しい。		覆土上層 No.16
23 鉄製品 鎌	長 9.1 幅 3.6 厚 0.3 重 22.46	基部を L 字形に折り曲げた鎌。棟側は直線的に伸び、刃はややカーブしている。基部の折り曲げ幅は、棟側 13mm、刃部 2 mm 程度。全体的に鋸ぶくれが著しい。裏面に木質が残っているが、二次的なものと考えられる。		SI-29b 床直 No.21

覆土 ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。SI-29a 構築に伴い埋め戻されたと考えられる。

壁 SI-29b 床面から深さ約 10cm で、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝は確認されなかった。

床面・貼床 床面は SI-29a と同じレベルの可能性が高いが、確定できない。

掘方 ほぼ平坦である。住居南側で小ピットが 3 基確認された。

柱穴 4 本主柱。SI-29a と位置はほぼ同じだが、北側の 2 本は SI-29a の柱穴よりも西へ、南側の 2 本は東へずれている。西側の 2 本 (P7・8) は掘り方が大きく、不整形となっている。いずれも柱痕が残っていないことから、抜き取られたものと考えられる。

火処 北壁中央にカマドの掘り方が確認された。SI-29a カマドの構築時に壊されており、袖の掘り残しと煙道がわずかに残るのみである。内部はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で埋め戻されていた。

遺物 SI-29b に伴う遺物のうち実測可能なものは、住居西側で出土した土師器壺 (第 80 図 7) と鉄製の鎌 (第 81 図 23) である。

SI-30 (第 82・83 図・図版十四・四七)

位置 J32 グリッドに位置する。

重複関係 住居東部分で SI-29 壱穴住居跡と、南西部分で SI-31 壱穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-29・SI-31 (旧) → SI-30 (新) である。また、SK-327 に切られる。

規模・形状 東西 5.3 m、南北 4.3 m の東西に長い方形を呈する。主軸方向は N - 14° - E である。

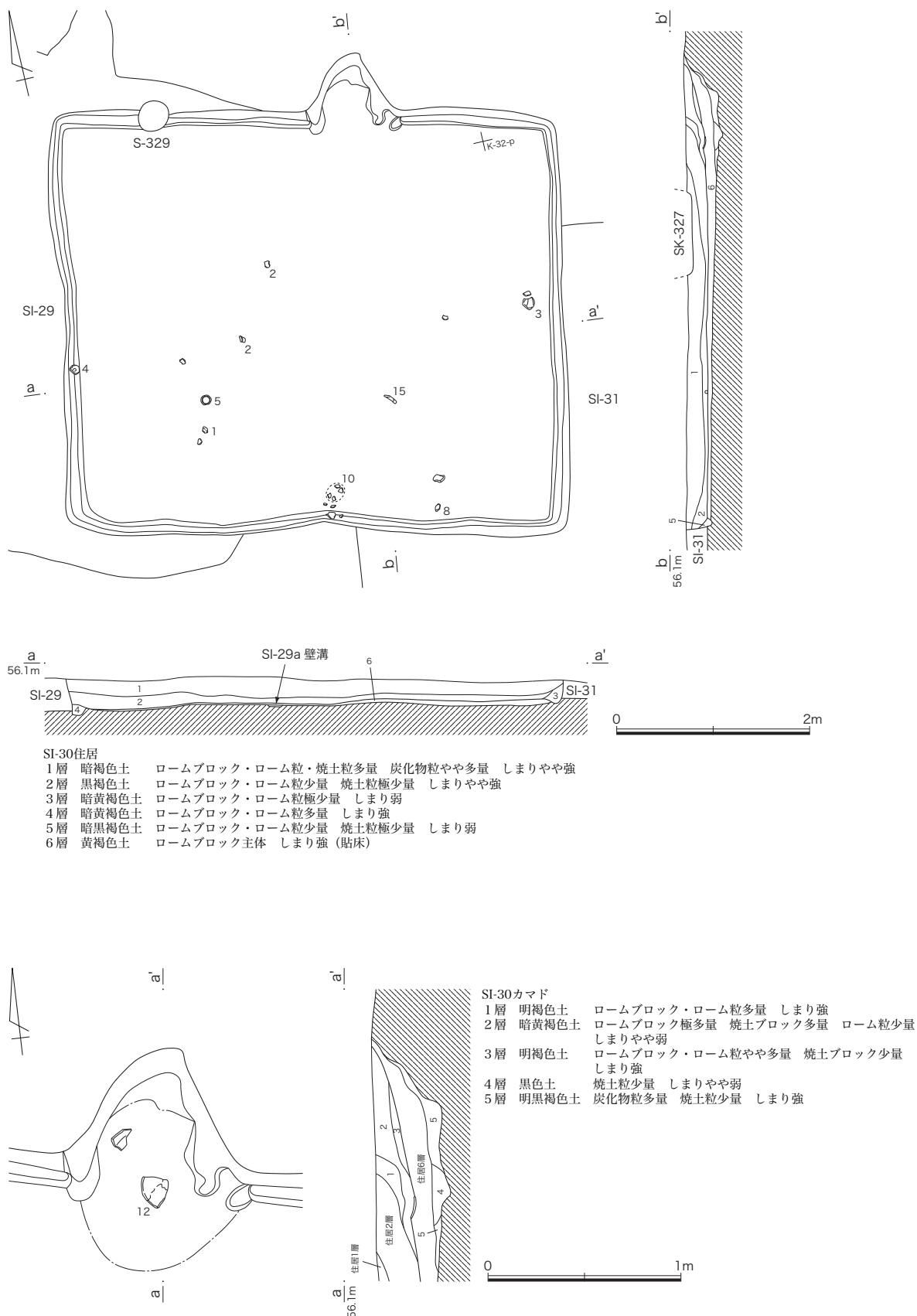
覆土 大きく 2 層に分層でき、上層 (1 層) はロームブロック・焼土が多く含まれる暗褐色土、下層 (2 層) は内容物が少ない黒褐色土を主体とする。

壁・壁溝 確認面から深さ約 25cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分を除き全周する。

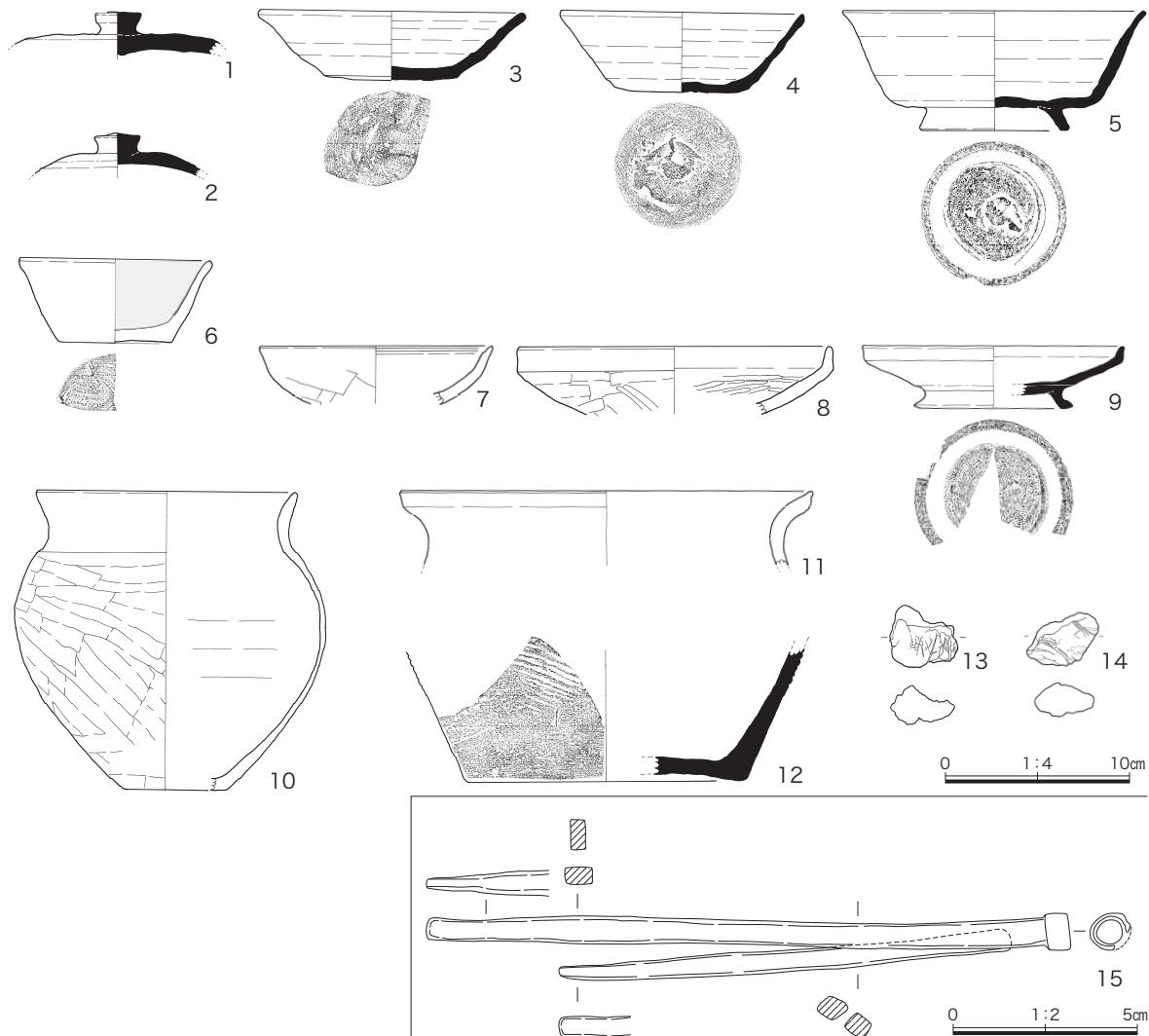
床面・貼床 重複する SI-29 壱穴住居跡とほぼ同じレベルで床面を構築している。ロームブロックによる貼床を施しており、よくしまり堅い。ロームブロックの貼床は住居中央部分に顕著に認められ、周縁部分は黒褐色土を多く含む貼床である。掘り方はない。

火処 北壁中央にカマドが構築されているが、遺存状況は悪く、両袖にわずかに粘土ブロックが残っている。内部を深く掘り下げた後に住居貼床と同じ土層 (6 層) で埋め戻し、その上部を燃焼面としている。内部はよく焼けており、焼土ブロックが多量に堆積していた (2 層)。煙道は掘り方部分では階段状に立ち上がるが、燃焼面では緩やかに立ち上がる。燃焼面上から須恵器甕の破片が出土している (第 83 図 12)。

遺物 床面上から須恵器壺 (第 83 図 3・4)、鉄鎌 (第 83 図 15) が出土している。



第82図 SI-30 竪穴住居跡



第83図 SI-30出土遺物

第33表 SI-30遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	高 (2.3) 撮部径 2.3	内外面ともロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ (残) 2/8 益子産	白色粒子極多・砂礫少 良 2.5Y4/1 黄灰	床上 +20cm No.11
2 須恵器 蓋	高 (2.4) 撮部径 2.4	内外面ともロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ 撮み部接合痕有り (残) 1/8 堀ノ内産	砂粒・白色粒子多 良 10G5/1 緑灰	床上 +5cm No.15
3 須恵器 坏	口 (14.4) 底 (7.2) 高 3.7	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ (残) 2/8 益子産	白色粒子・砂粒多・砂礫少 良 7.5GY4/1 暗紫灰	床直 No.17
4 須恵器 坏	口 (13.0) 底 7.2 高 4.2	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 底 8/8 体 3/8 益子産	砂粒・白色粒子多・砂礫少 良 7.5GY4/1 暗紫灰	床直 No.18
5 須恵器 坏	口 (16.3) 底 8.0 高 6.3	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後調整なし 高台付 (残) 底 8/8 体 1/8 益子産	白色粒子多・砂礫少 良 5BG5/1 青灰	床上 +10cm No.12+ 覆 土 c+d
6 土師器 坏	口 (10.4) 底 (6.1) 高 4.5	(内) ミガキ? (外) ロクロナデ、底面回転糸切り離し 内面黒色処理 (残) 底 1/8	白色粒子・砂粒多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	覆土 c

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
7 土師器 坏	口 (11.6) 高 (2.9)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面漆仕上げ 口縁部内面に沈線(残) 1/8	微細な白色粒子・砂礫少 良 10YR3/1 黒褐	覆土 c
8 土師器 坏	口 (15.6) 高 (3.4)	(内) ヨコナデ胴横方向ミガキ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ (残) 1/8	砂礫・砂粒多 良 5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.5
9 須恵器 盤	口 (14.2) 底 (8.6) 高 3.5	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 内外面に自然釉(残) 2/8 堀ノ内産?	白色粒子多・砂礫少 良 7.5Y5/1 灰	床上 +15cm No.14 + 覆土 d
10 土師器 甕	口 (14.0) 高 16.2	(内) ヨコナデ胴丁寧なヘラナデ (外) ヨコナデ胴ヘ ラケズリ 胴部外面にケズリ方向に直交する平行の凹凸面 有り 器壁非常に薄い (残) 3/8	微細な白色粒子・ 黒色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +20cm No.6+8+9 + 覆土 c
11 土師器 甕	口 (21.4) 高 (3.9)	内外面ヨコナデ (残) 1/8	白色粒子・砂粒多・雲母 やや多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	覆土 d
12 須恵器 甕?	底 (15.3) 高 (7.1)	(内) ナデ? (外) 平行タタキ 底部近くヘラケズリ 底部中心が上げ底(残) 1/8 新治産	砂粒・雲母多・白色粒子 やや多 やや良 10YR5/3 にぶい黄褐	床上 +5cm No.2
13 焼成 粘土塊	長 3.3 幅 3.5 厚 2.1 重 12.73	塊状 実測図表面は木葉痕、2種類のヘラ状工具によるナ デ 裏面は棒状工具によるキズあり 上下端はちぎり取った後に弱いナデ	白色粒子・赤色融解粒少 良 7.5YR6/6 橙	覆土 d
14 焼成 粘土塊	長 2.6 幅 3.2 厚 1.9 重 10.8	塊状 実測図表面はユビナデ後ヘラ状工具による同方向のキズ 裏面はちぎり取った状態にヘラ状工具によるキズ	白色粒子・赤色融解粒少 良 7.5YR6/6 橙	覆土
15 鉄製品 鉄鎌?	長 17.0 幅 0.4 厚 1.4 重 26.75	断面方形。実測図左先端は2本とも細くなる。実測図上のものは右端に段がつき、断 面方形。一部緑青付着。		床直 No.3

SI-31 (第84～86図・図版十四・四七)

位置 K33 グリッドに位置する。

重複関係 住居北西部分で SI-30 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-31 (旧) → SI-30 (新) である。

規模・形状 東西 5.7 m、南北 5.85 m の方形を呈する。主軸方向は N - 98° - E である。

覆土 ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。

壁・壁溝 確認面から約 10cm の深さで、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝は全周するが、カマド部分は貼床と同じ土層で埋め戻している。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床を施し、特にカマド前面は硬くしまっている。掘り方はない。

柱穴 4 本主柱。いずれも上面が円形で断面が凸型の大きな掘り方を呈する。南東の P2 のみ内側に寄っているが、これは貯蔵穴を避けたためと考えられる。いずれも柱痕が確認されており、周辺はロームブロックを多く含む暗黄褐色土で埋めている。

火廻 東壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。袖は、住居貼床上に暗黄褐色土で低い台状の高まり(5層)を作った後に、粘土質のロームブロック(4層)を積み上げて構築している。内部はよく焼けているが、焼土主体の堆積層ではなく、焼土混じりの暗褐色土が底面に薄く堆積していた(2層)。燃焼面中央には粘土質のロームブロックがあり、その上に土製の支脚が直立していた(第86図13)。

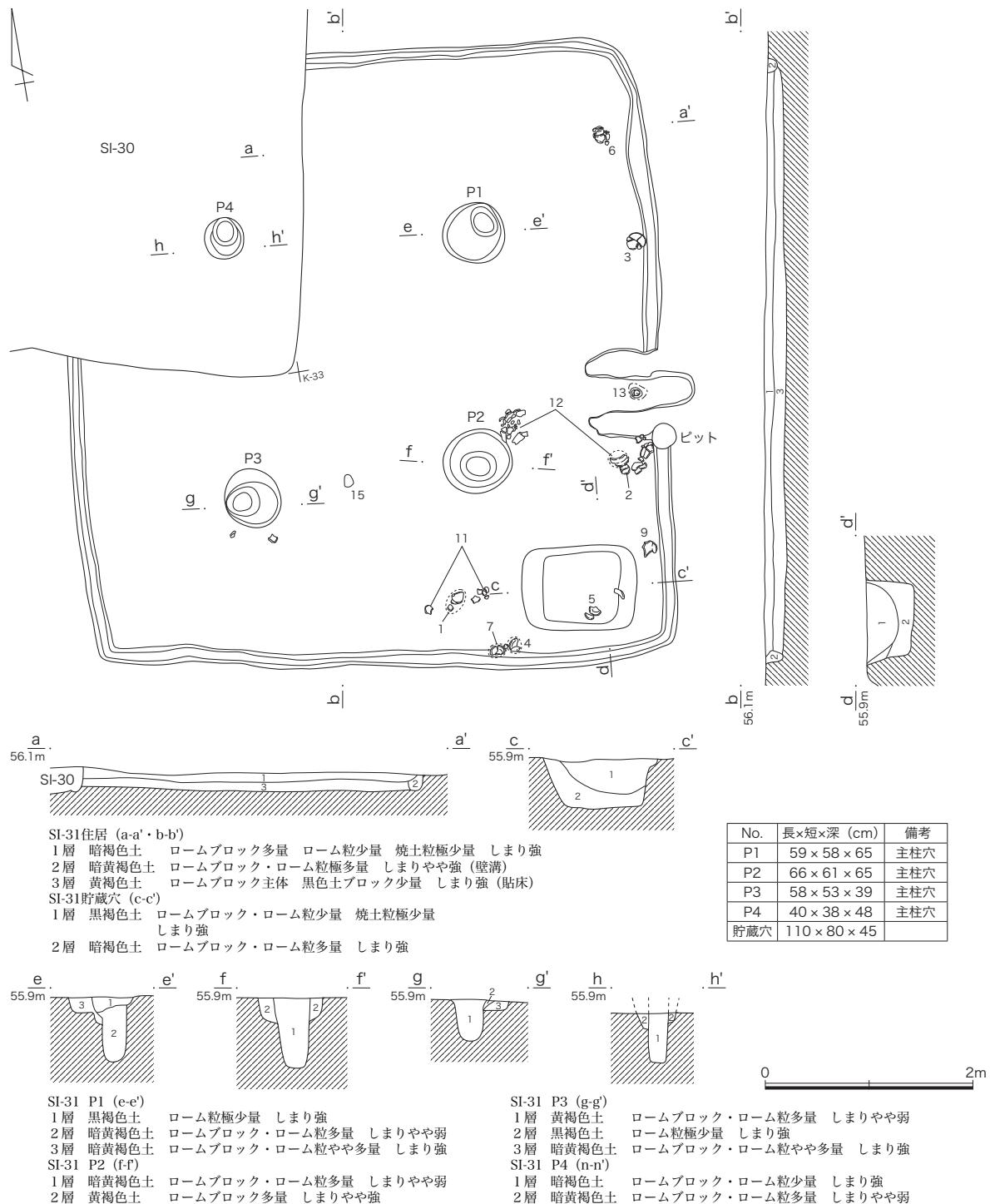
煙道は住居壁外に平坦に伸び、奥壁はほぼ直に立ち上がる。

第3章 発見された遺構と遺物

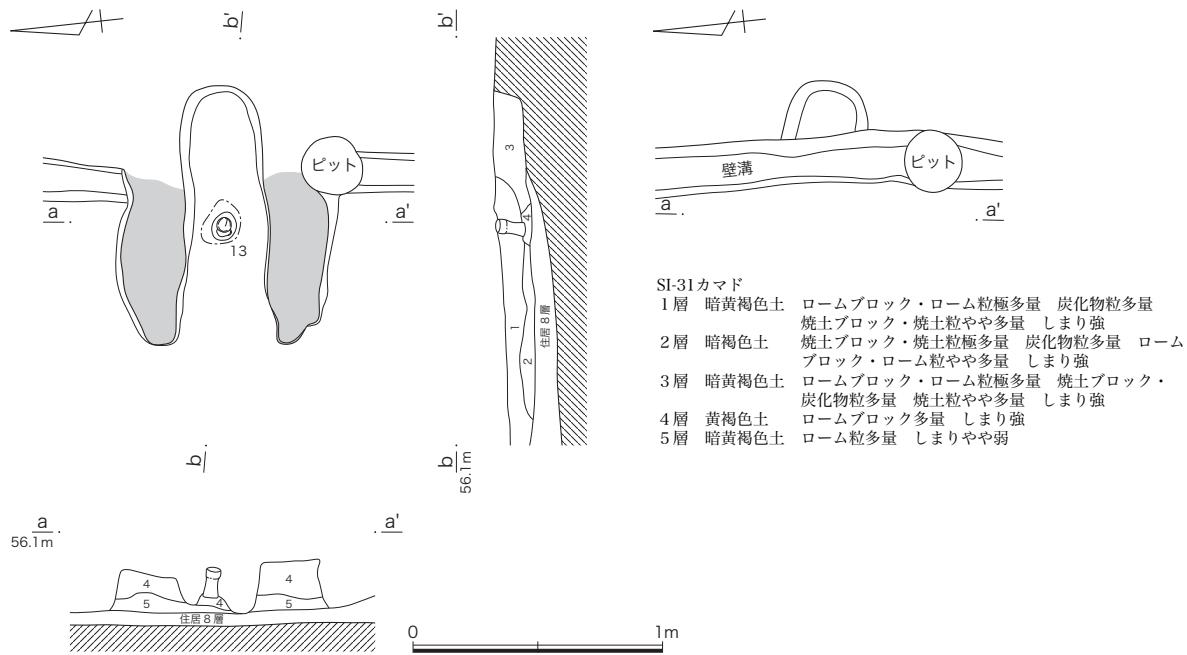
貯蔵穴 住居南東隅で1基確認された。東西に長い方形の掘り方を呈し、床面からの深さは約50cmである。

他の住居に比較して大きな貯蔵穴である。内部から土師器壊（第86図5）が出土している。

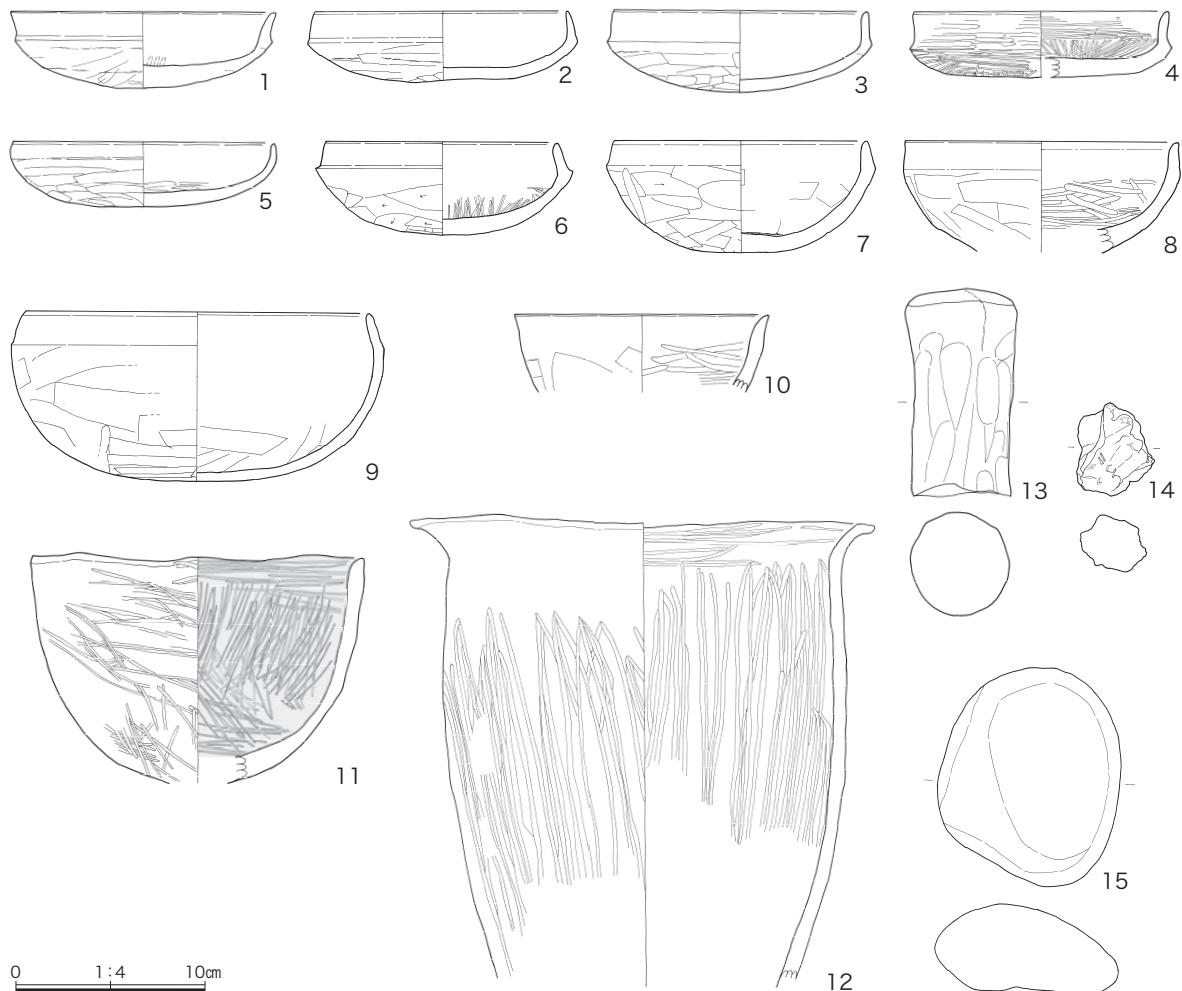
遺物 貯蔵穴周辺を中心として、床面から5～10cm浮いた状態で出土している。



第84図 SI-31 竪穴住居跡 (1)



第85図 SI-31 穫穴住居跡（2）



第86図 SI-31 出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第34表 SI-31 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (14.0) 高 4.0	(内) ミガキ? (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面摩滅強 内外面漆仕上げ (残) 3/8	白色粒子多・砂礫少 やや不良 7.5YR4/1 褐灰	床上 +10cm No.13
2 土師器 壺	口 13.4 高 3.7	(内) ヨコナデ、一部ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ (残) 4/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR6/8 橙	床上 +5cm No.5
3 土師器 壺	口 13.4 高 4.3	(内) ヨコナデ、ミガキ? (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 内面摩滅 (残) 7/8	白色粒子少 良 7.5YR6/6 橙	床上 +5cm No.2
4 土師器 壺	口 (13.4) 高 (3.5)	(内) 口横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) 口横方向ミガキ体上半横方向、下半平行ミガキ 口縁部内外面漆仕上げ (残) 3/8	白色粒子多・砂粒少 良 7.5YR4/6 褐	床上 +5cm No.16
5 土師器 壺	口 13.8 高 4.4	(内) 口ヨコナデ体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 摩滅強 内外面漆仕上げ (残) 6/8	微細な白色粒子やや多・ 雲母微 二次被熱 7.5YR7/8 黄橙	貯蔵穴 No.7+8
6 土師器 壺	口 (12.2) 高 4.9	(内) 口ヨコナデ体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 7/8	白色粒子・赤色融解粒多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.1+ 覆 土 d
7 土師器 壺	口 (13.4) 高 5.9	(内) 口ヨコナデ体丁寧なナデ底部に薄く粘土貼り付け後ヘ ラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内外面漆仕上げ (残) 4/8	砂礫・白色粒子少 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +10cm No.15
8 土師器 壺	口 (14.4) 高 (5.8)	(内) 口ヨコナデ? 体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部摩滅 内面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多・砂礫微 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土 d
9 土師器 塊	口 (18.0) 高 8.9	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ 球胴形 (残) 2/8	白色粒子多・雲母少 二次被熱 5YR3/2 暗赤褐	床上 +5cm No.18
10 土師器 塊?	口 (13.4) 高 (4.1)	(内) 口ヨコナデ体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ 内外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多・雲母少 良 7.5YR3/3 暗褐	覆土 d
11 土師器 鉢	口 (17.4) 高 (11.9)	内外面とも多方向の密なミガキ 内面黒色処理 口縁部近くに輪積痕 (残) 2/8	白色粒子多・砂礫少 良 7.5YR4/4 褐	床上 +10cm No.12+14
12 土師器 甑	口 24.6 高 (24.8)	(内) 口ヨコナデ→口横方向ミガキ・胴縦方向ミガキ (外) 口ヨコナデ胴縦方向ミガキ (残) 口～胴上半 7/8 同一個体の底部破片有り	白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +10cm No.3+4+10+ 貯穴 + カマト + 貼床
13 土製品 支脚	長 (11.0) 径 5.2 重 381.60	手捏ね成形 上端部摩滅 全体的に被熱による剥落	砂礫・白色粒子多 二次被熱 7.5YR6/8 橙	カマト No.19
14 焼成粘 土塊	長 4.9 幅 3.9 厚 2.6 重 29.69	塊状 実測図表面はユビナデ、その他の部分はちぎり取つた状態に一部弱いナデ 実測図裏面に草本植物の痕跡有り	赤色融解粒極多 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土
15 礫	長 11.1 幅 9.4 厚 4.6 重 689.5	表面風化により崩れている 使用痕不明	5Y4/1 灰	床上 +10cm No.9

SI-32 (第87～89図・図版十四)

位置・重複関係 K33グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、住居北東隅がSK-279に切られる。

規模・形状 東西4.1m、南北3.8mだが、北壁が南壁に比べ長くなっているため、歪んだ方形を呈する。

覆土 内容物をあまり含まない暗褐色土を主体とするが、覆土はほとんど残っていない。床面上には粘土質のロームがブロック状に堆積していた(2層)。カマド構築材の一部と考えられる。

壁 確認面からの深さが約10cmで、壁はなだらかに立ち上がる。壁溝はない。

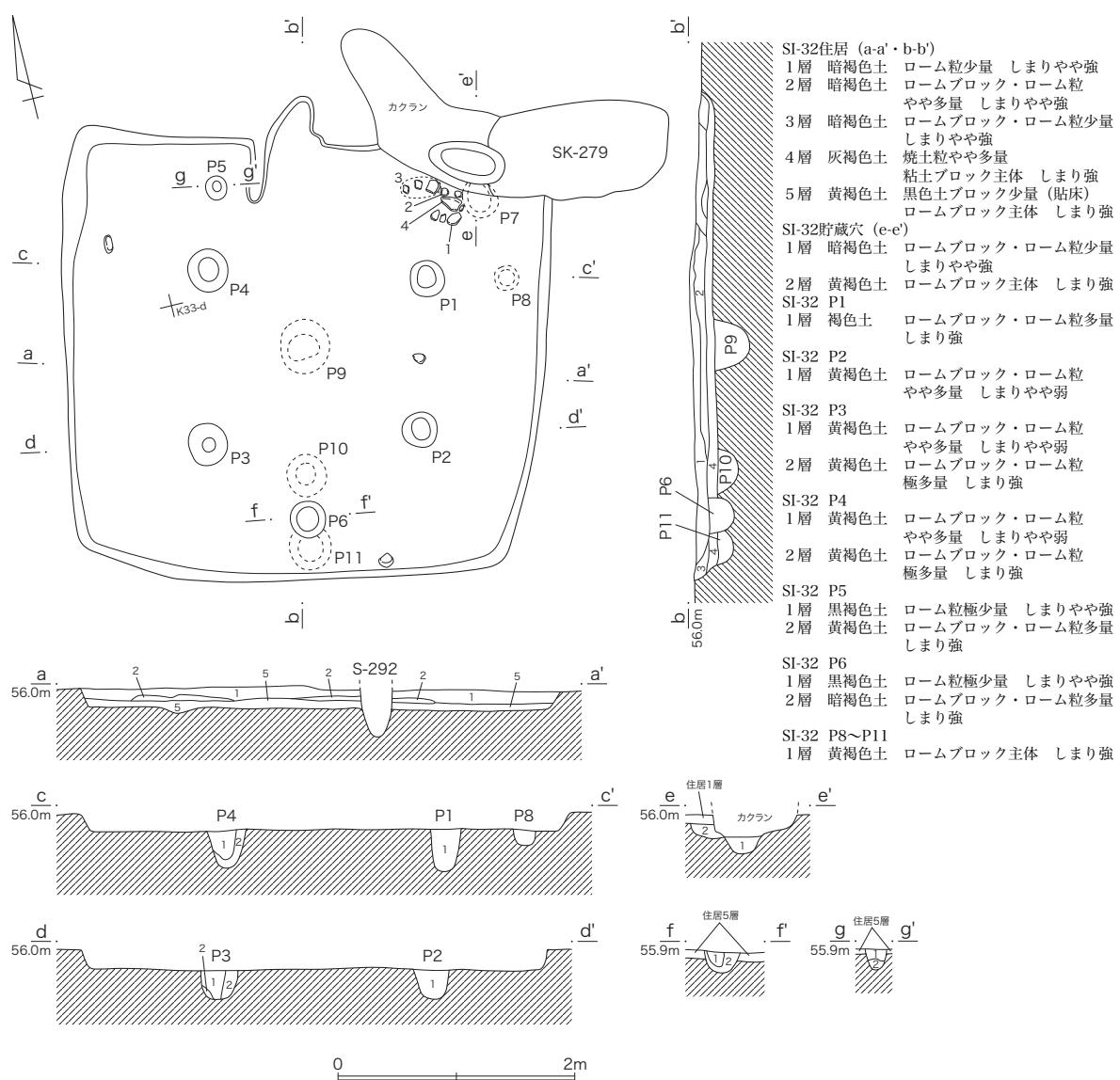
床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。

掘方 住居中央にピットが並んで確認された(P9～P11)。また、住居北東隅にピットが2基確認されており(P7・P8)、P7は貯蔵穴に切られている。

柱穴 4本主柱。いずれも円状の掘り方を呈し、ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。

入り口ピット 住居南壁寄りに1基確認された(P6)。円形の掘り方を呈し、浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、左袖と右袖の一部、奥壁が残存している。左袖は地山を掘り



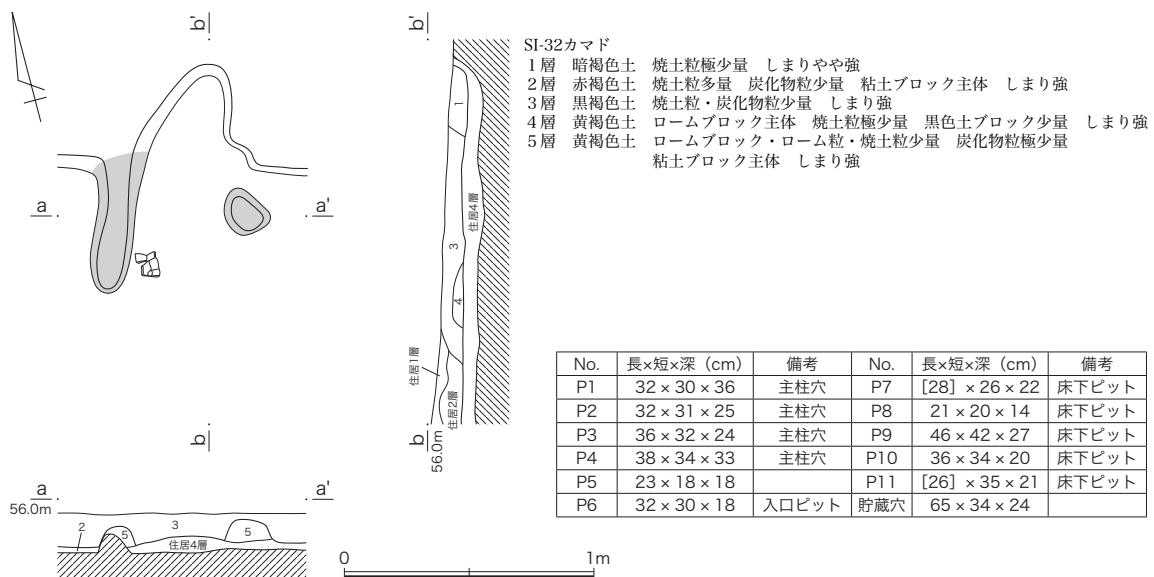
第87図 SI-32 竪穴住居跡 (1)

残した上に粘土を貼り付けて構築している。右袖は粘土が島状にしか残っていないが、左袖同様の作り方をしているものと考えられる。内部には焼土・炭化物は少ない。煙道は平坦に伸びた後、やや急な角度で立ち上がりっているようである。

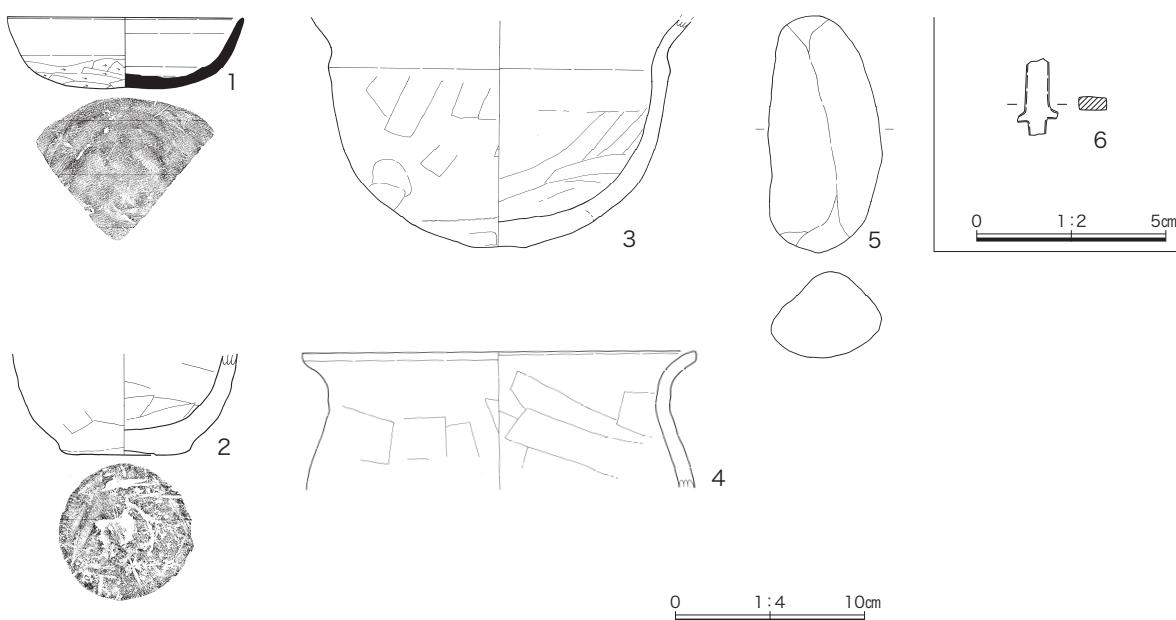
貯蔵穴 住居北東隅で1基確認された。攪乱により上面が大きく失われているが、浅い橿円状の掘り方が残っている。覆土は暗褐色土を主体とする。

その他の付帯施設 カマド左袖の西側に浅い小ピット (P5) が確認されている。

遺物 貯蔵穴周辺を中心に出土しているが、出土量は少ない。第89図1の須恵器壊、5の礫が床面に伴つており、その他の遺物は床面から5cm程度浮いている。また、覆土中から鉄鏃の破片が出土している（第89図6）。



第88図 SI-32 穫穴住居跡 (2)



第89図 SI-32 出土遺物

第35表 SI-32 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (12.4) 高 3.7	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ 内面底部が膨らむ 蓋の可能性もあり(残) 1/8 益子産?	白色粒子多・砂礫やや多 良 5Y5/1 灰	床直 No.4
2 土師器 甕	底 6.8 高 (5.3)	(内) ヘラナデつけ底部近くヘラケズリ (外) ヘラケズリ? 外面剥落 底部輪積痕残る (残) 底 8/8	砂礫・白色粒子多 やや良 7.5YR3/2 黒褐	床上 +5cm No.2 + 覆土
3 土師器 鉢	高 (12.1)	(内) 口～胴上半ヨコナデ、下半ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 底部近く輪積痕残る 外面スス付着 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 やや良 7.5YR4/1 褐灰	床上 +5cm No.1 + 2
4 土師器 甕	口 (20.7) 高 (7.2)	内外面とも口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (残) 1/8	砂礫・白色粒子・雲母微 良 10YR7/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.2
5 礫	長 12.5 幅 5.9 厚 4.5 重 443.7	断面三角状 調整・使用痕なし	5Y5/2 灰オリーブ	床直 No.5
6 鉄製品 鎌	長 2.2 幅 0.7 厚 0.5 重 1.4	棘籠被の破片。		覆土

SI-33 (第90図・図版十四・六一)

位置・重複関係 K32 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SK-281・294 に切られる。

規模・形状 東西 4 m、南北 2.7 m の東西に長い方形を呈するが、北東隅が飛び出しているため歪んでいる。

覆土 内容物をあまり含まない黒褐色土を主体とする。

壁・壁溝 確認面から深さ約 15cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。

入り口ピット 住居南壁寄りで 1 基確認された(P1)。掘り方は北側に柱を倒したような状態で崩れている。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。右袖と奥壁が残存しているが、右袖は残りが悪い。袖は貼床上に粘土を積み上げて構築している。袖内側はよく焼けており、内面には焼土ブロックが厚く堆積している(1層)。煙道は壁からほとんど飛び出さず、直に立ち上がる。

その他の付帯施設 北西隅に不整形の掘り込みが確認された。断面図では貼床を切っている状況が確認できるが、覆土上面ではプラン確認ができなかったため、住居に伴うものかは不明である。図面にはないが、調査記録では北東・南西隅にも床下で同様の掘り込みを確認したとあるため、床下土坑を貼床とは異なる土層で埋めている可能性もある。

遺物 いずれも覆土中からの出土で、極少ない。覆土中から鉄滓が 1 点出土している(図版六一)。

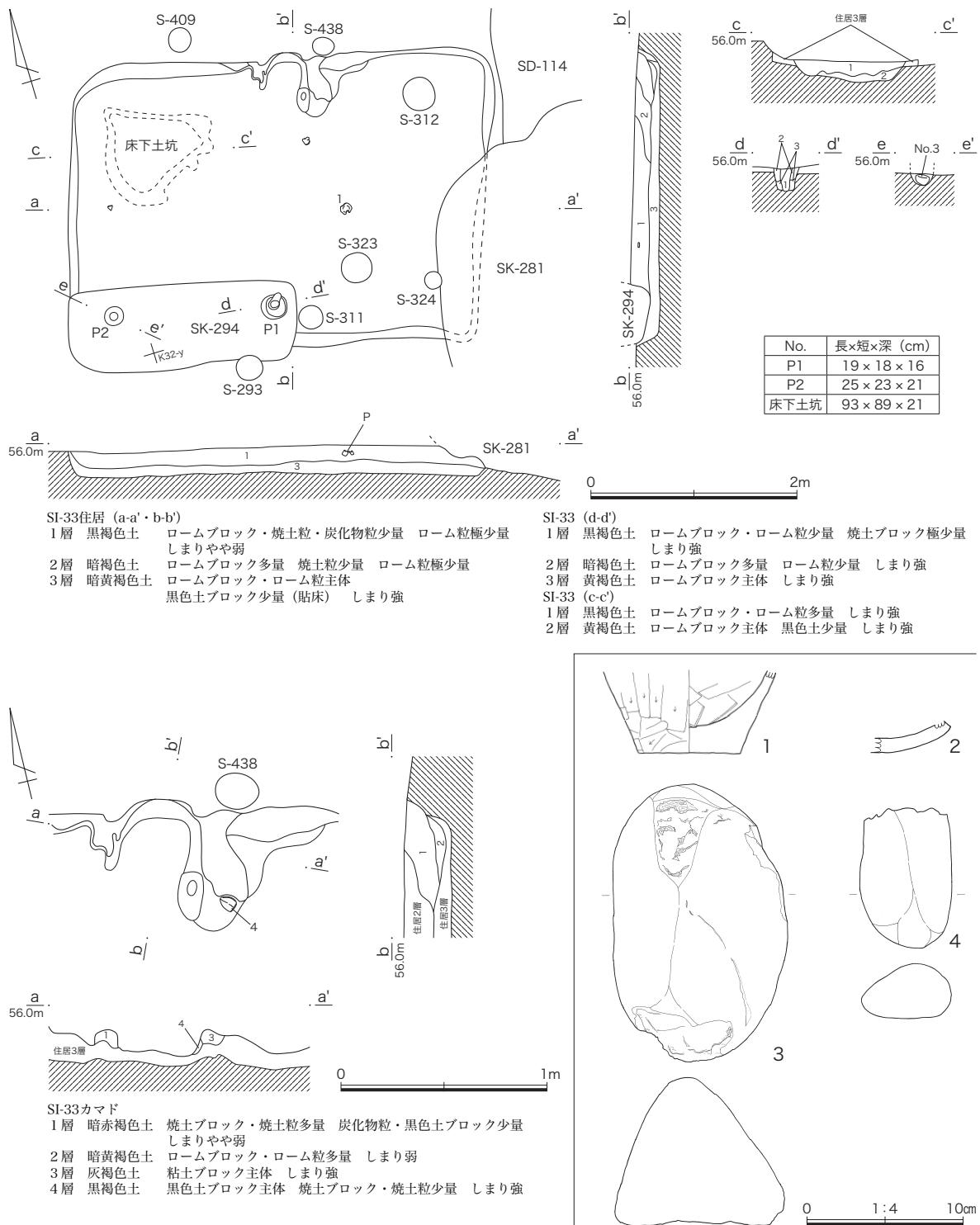
SI-34 (第91～95図・図版十五・四八)

位置・重複関係 L33 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SD-114・SK-275～277 に切られる。

規模・形状 東西・南北とも 7 m だが、北壁東側がやや飛び出しているため歪んだ方形を呈する。主軸方向は N-12°-E である。

覆土 焼土ブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。カマドから住居中央にかけての広い範囲で、粘性質のローム土を多く含む暗黄褐色土が堆積していた(3層)。

壁・壁溝 確認面から最も深いところで約 30cm だが、北壁と西壁中央部分以外は攪乱等により削平され



第90図 SI-33 穫穴住居跡および出土遺物

ている。残存部分では、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は北西隅と西壁中央でのみ確認された。

床面・貼床 張り出しピットから北西柱穴 (P4) にかけて (6層) と、住居東側柱穴 (P1・P2) 外側 (9層) の床面に薄い貼床が施されている。その他の部分は、地床を踏み固めて床面としており、硬化が著しい。

掘方 住居東側柱穴 (P1・P2) 外側の貼床をはがすと、東側に向かって緩やかな傾斜をもつ掘り込みが確認された (断面図 a-a' 参照)。その他の部分では掘り方は確認されなかった。

第36表 SI-33 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	底 6.4 高 (5.4) (残) 底 7/8	(内) ヘラナデつけ (外) 粗いヘラケズリ・ヘラナデ	砂礫極多・白色粒子 やや多・雲母少 良 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +10cm No.1
2 土師器 壺	破片	(内) ヨコナデ→放射状ミガキ (外) ヘラケズリ	雲母多・白色粒子少 良 7.5YR4/3 褐	覆土
3 礫	長 17.8 幅 11.1 厚 9.5 重 2200.0	断面三角状 隅に敲打痕 全体にスス付着	10YR6/2 灰黄褐	P1
4 礫	長 8.9 幅 5.7 厚 3.6 重 278.8	断面三角状 表面被熱により赤化	2.5Y6/2 灰黄	カマド袖 No.4
図版 六一 鉄滓	長 3.1 幅 1.8 厚 1.1 重 8.52	(写真図版のみ) 小型の生成初期の鍛冶滓。底面に炉床粘土付着。破面無し。緻密で重量感有り。		覆土 d

柱穴 4本主柱。円形の掘り方を持ち、いずれも柱痕が確認された。柱痕の周りはロームブロックを多量に含む土層で埋められているが、P3のみ粘土ブロックを主体とする土層で埋められていた。P2の内部からは土師器高壺の破片が出土している（第93図15）。

張り出しピット・入り口ピット 住居南壁中央に方形の土坑を伴う住居張り出し部分がある。上面はSD-114に削平されている。覆土にはロームブロックが多く含まれていた。また、張り出し部分の北側に入り口ピットが1基確認された（P5）。柱痕が確認でき、その周りを、P3同様粘土ブロックで埋めている。

間仕切り溝 床面上では北西の1本のみが確認されたが、貼床をはがした段階で残りの3本が確認された。貼床下の3本には、貼床と同じ土層が堆積していた。北東と南西の2本は柱穴中心の延長上に掘られているが、北西と南東の2本は柱穴からはずれた位置に掘り込まれている。

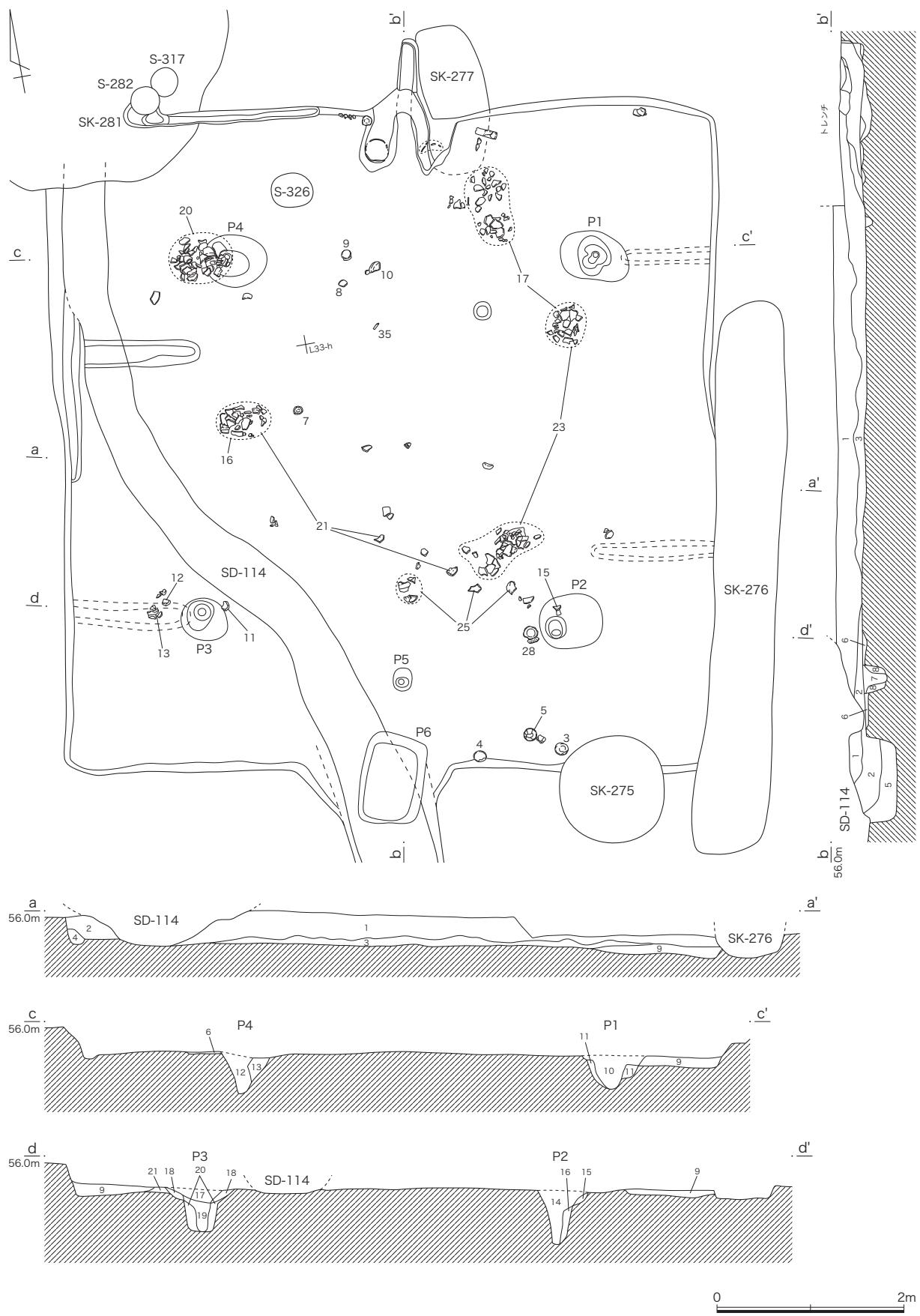
火処 北壁にカマドが構築されている。右袖はSK-277に切られて一部失われているが、左袖と煙道、天井部分が残っている。袖は地山をわずかに掘り残した上に粘土質のローム土を積み上げて構築しており、土師器甕が伏せた状態で埋め込まれている（第94図18・19・22）。内面はよく焼けており、焼土ブロックや炭化物が多く堆積している（4・6層）。天井部分は燃焼部上が崩落しているが、両袖奥にアーチ状に残存している。煙道は住居壁から長く伸びており、東側壁と奥壁に粘土が貼り付いた状態で残っていた。

No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	(65) × 64 × 35	主柱穴	P4	53 × 53 × 42	主柱穴
P2	55 × 53 × 56	主柱穴	P5	24 × 20 × 25	入口ピット
P3	(55) × 53 × 45	主柱穴	P6	97 × 72 × 31	張出ピット

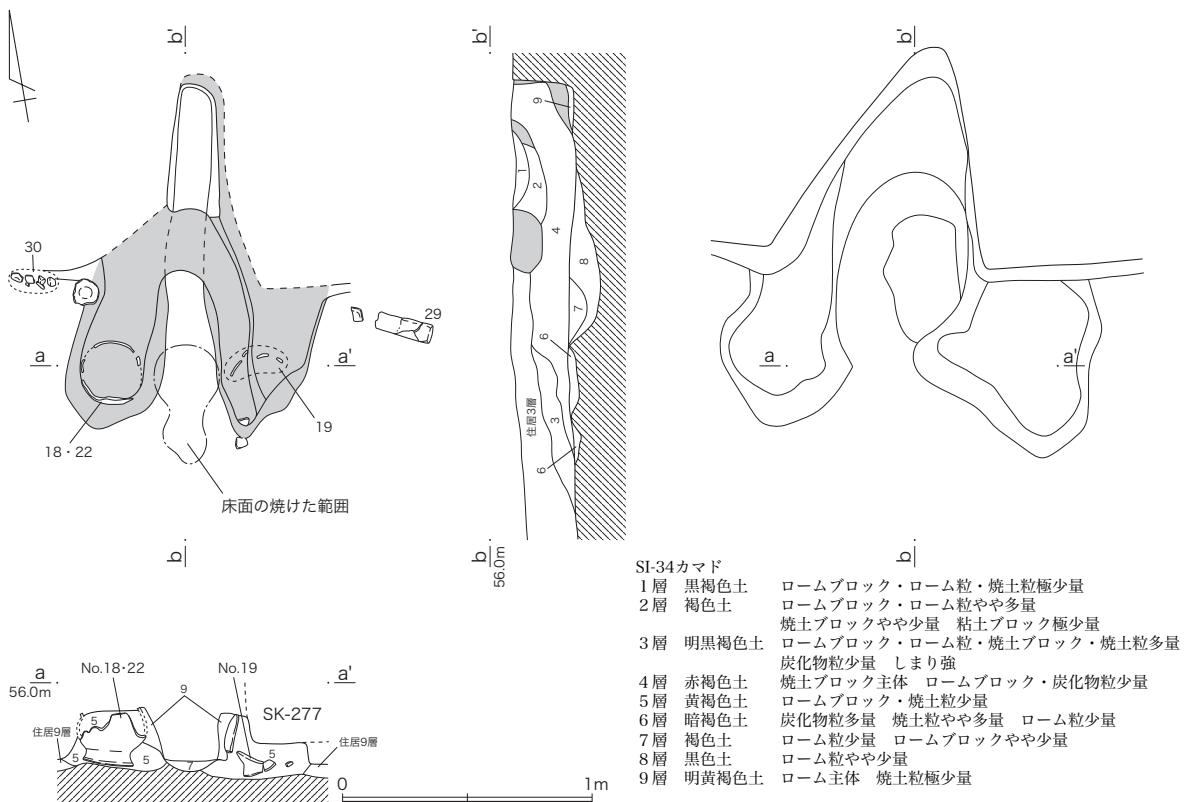
SI-34住居 (a-a'~d-d')

1層 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒極多量
ロームブロック・ローム粒・炭化物粒少量 しまりやや強
2層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 しまり強
3層 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 焼土ブロック・焼土粒少量
しまりやや強
4層 暗黄褐色土 ロームブロック多量 ローム粒少量(壁溝) しまり弱
5層 暗褐色土 ロームブロック多量 焼土ブロック少量 しまりやや弱
6層 明灰褐色土 ロームブロック主体 黒色土ブロック少量(貼床)
7層 暗褐色土 ローム粒少量
8層 灰褐色土 灰褐色粘土主体 ローム粒やや多量
9層 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒やや多量

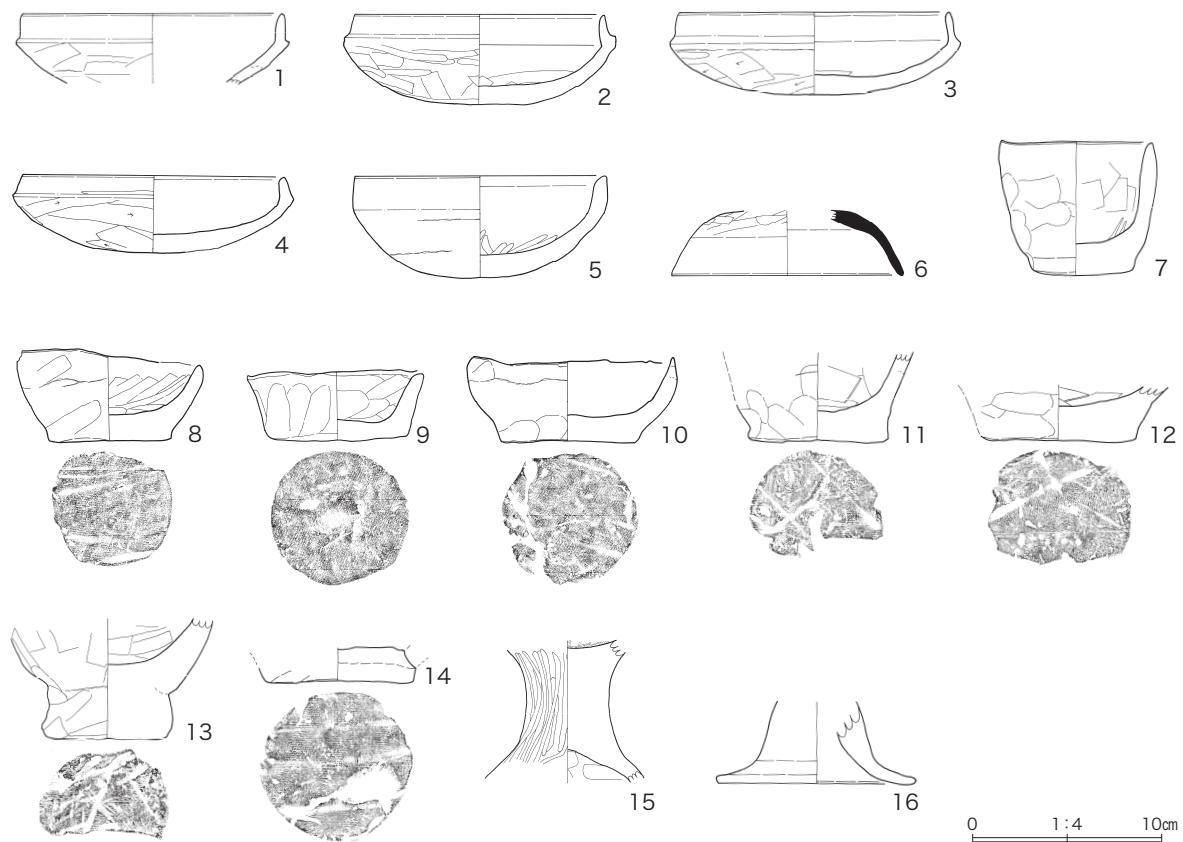
10層 黒褐色土 ローム粒極少量
11層 黒褐色土 ロームブロックやや多量 ローム粒少量 しまり強
12層 明黒褐色土 ロームブロック・ローム粒極少量
13層 明黒褐色土 ロームブロック・ローム粒やや多量
14層 明黒褐色土 ロームブロック・ローム粒極少量
15層 明褐色土 ロームブロックやや多量 ローム粒少量
16層 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
17層 暗褐色土 ロームブロックやや多量 ローム粒多量
18層 褐色土 ロームブロックやや多量 ローム粒少量
19層 黄褐色土 ロームブロック主体 ローム粒多量
20層 灰褐色土 ローム粒やや多量 粘土ブロック主体
21層 明黄褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量



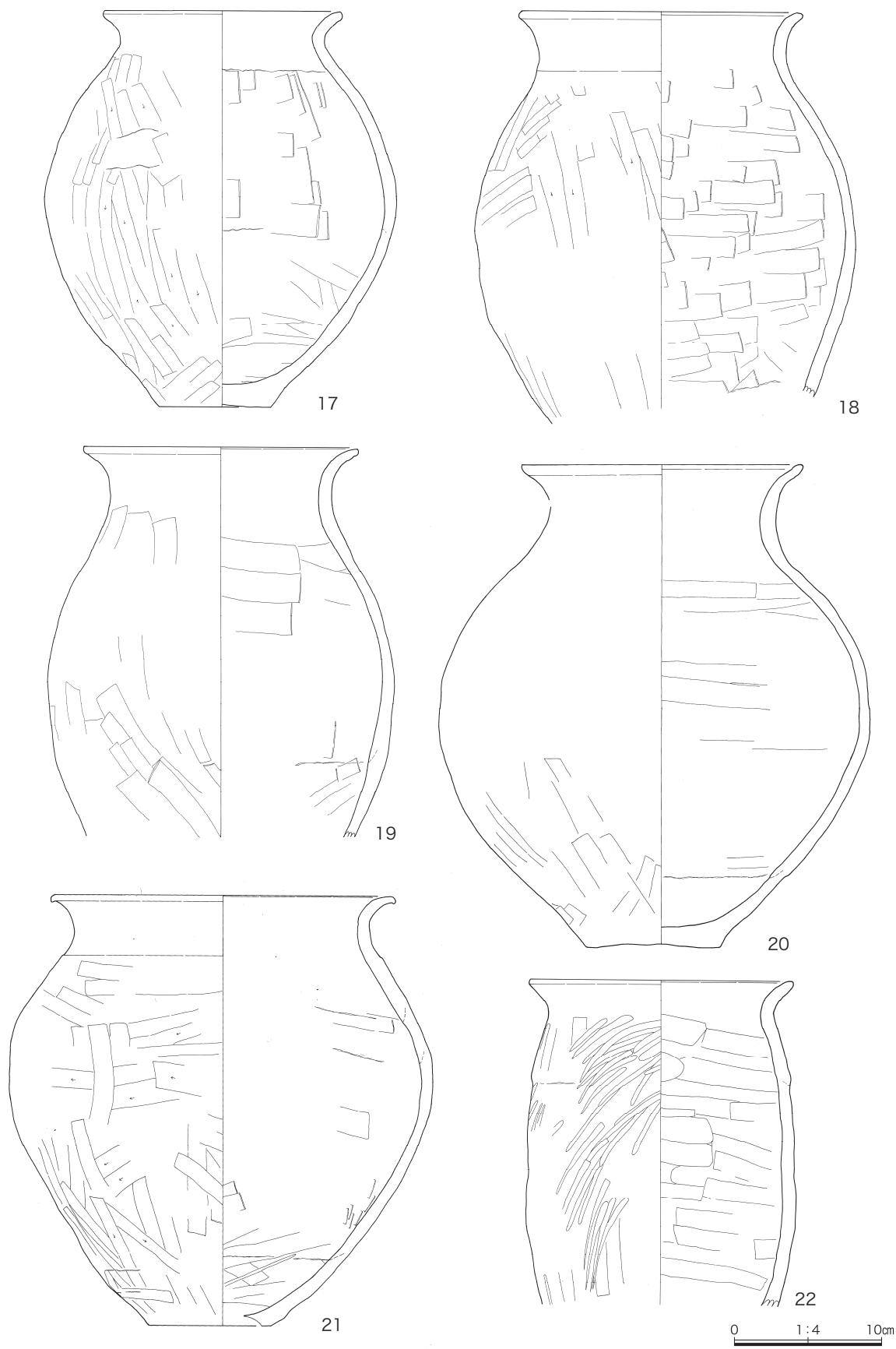
第91図 SI-34 竪穴住居跡（1）



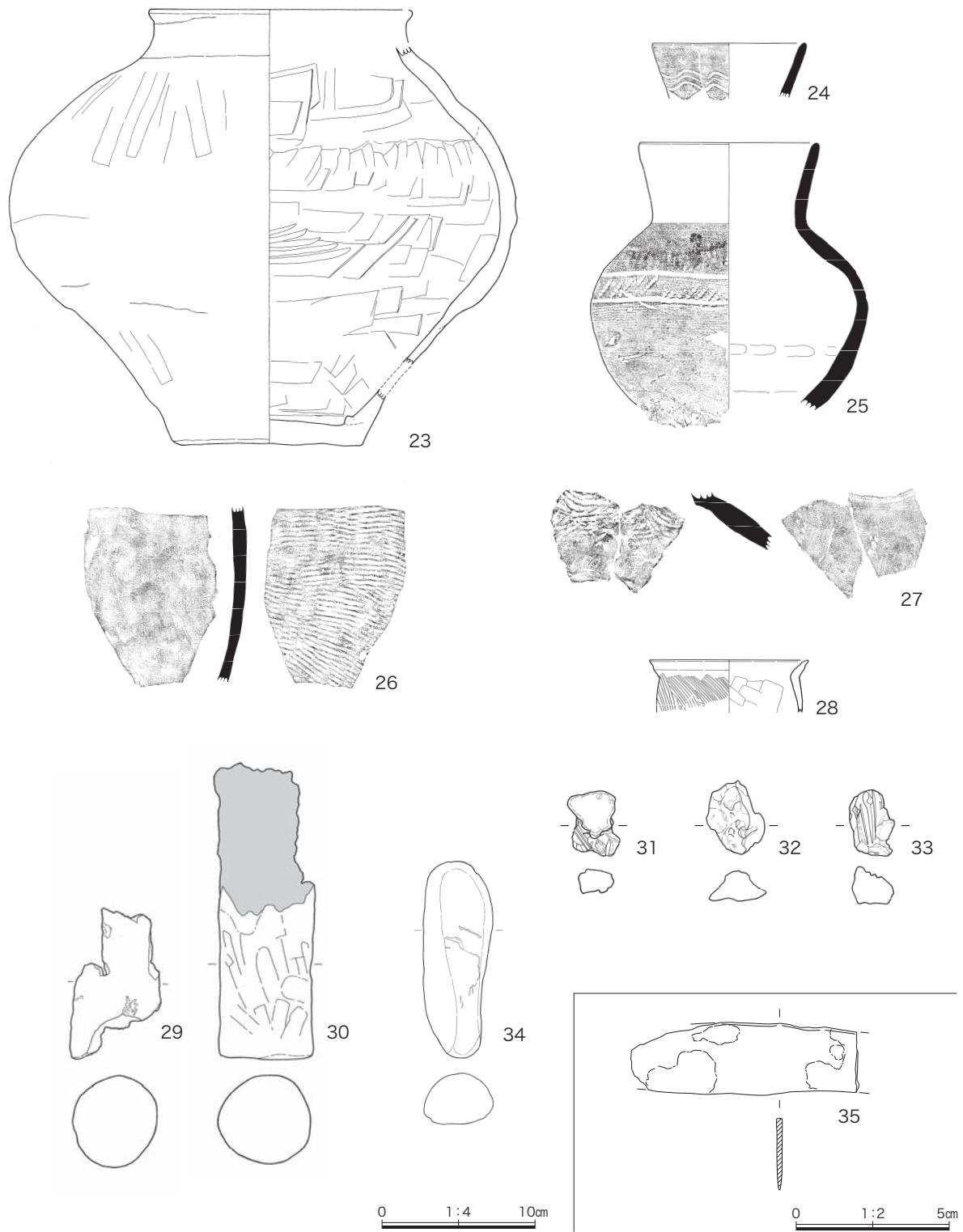
第92図 SI-34 壺穴住居跡（2）



第93図 SI-34 出土遺物（1）



第94図 SI-34出土遺物（2）



第95図 SI-34出土遺物（3）

遺物 住居全体の床面上から覆土中までかなり多く出土している。床面に伴うものは、第93図5・8～11の土師器壺、第94図17・20・21の土師器甕、第95図29・30の土製支脚である。また、覆土中から薄い鉄片が出土している（第95図35）。

第3章 発見された遺構と遺物

第37表 SI-34 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 坏	口 (13.8) 高 (3.7)	(内) 口ヨコナデ体ミガキ? (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 体部に輪積痕・内面剥落 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土
2 土師器 坏	口 13.2 高 4.75	(内) 口～体上半ヨコナデ・体下半 (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ一部ナデ 口縁部下にナデによる浅い凹線 (残) 8/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 10YR4/2 灰黄褐	床上 +5cm No.27
3 土師器 坏	口 (13.8) 高 4.1	(内) 不明 (外) 口ヨコナデ・一部ミガキ体ヘラケズリ 内面摩滅 (残) 2/8	砂礫・雲母多・白色粒子少 やや良 10YR7/4 にぶい黄橙	覆土
4 土師器 坏	口 (14.2) 高 4.4	(内) 口～体上半ヨコナデ・底部ナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ あばた状の剥落 (残) 口 3/8 体 8/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	入口壁際 No.24 + 覆土
5 土師器 坏	口 13.2 高 5.3	(内) 口～体上半不明体下半ミガキ (外) 不明 被熱により摩滅 (残) 7/8	赤色融解粒極多・白色粒子 ・砂礫多 二次被熱 2.5YR5/6 明赤褐	床直 No.25
6 須恵器 蓋	端 (12.2) 高 (3.4)	内外面ともロクロナデ 天井部手持ちヘラケズリ (残) 1/8 益子産?	白色粒子多・砂礫少 良 N6/ 灰	覆土
7 土師器 坏	口 8.0 底 5.3 高 7.1	(内) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ体指ナデ (残) 底 8/8 腴 3/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直 No.10 + 35 + 覆土
8 土師器 坏	口 9.7 底 6.4 高 4.8	手捏ね成形 内外面とも指ナデ 外面に輪積痕・ヒビ多い 底面に平行の凹凸 (残) 5/8	赤色融解粒多・白色粒子少 ・雲母微 良 7.5YR7/4 にぶい橙	床直 No.5
9 土師器 坏	口 9.3 底 7.3 高 3.7	手捏ね成形 内外面とも指ナデ 外面にヒビ多い 完形	砂礫少・白色粒子微 良 10YR7/4 にぶい黄橙	床直 No.4
10 土師器 坏	口 10.4 大 11.0 底 6.8 高 4.5	手捏ね成形 外面底部近く指ナデ 底面に平行の凹凸・体部上半に輪積痕・内面剥落 (残) 7/8	赤色融解粒極多・白色粒 子多 やや良 10YR5/2 灰黄褐	床直 No.6
11 土師器 坏?	底 7.4 高 (4.8)	手捏ね成形 (内) ヘラケズリ (外) 指ナデ 底部に平行の凹凸・輪積痕有 (残) 底 7/8	赤色融解粒極多・白色粒 子多 良 5YR5/6 赤褐	床直 No.30
12 土師器 坏?	底 8.0 高 (3.0)	手捏ね成形 内外面ともヘラケズリ 底面に多方向の凹線	赤色融解粒極多・砂礫・ 白色粒子多 良 5YR5/6 赤褐	床上 +20cm No.32
13 土師器 小型甕	底 6.4 高 (6.4)	手捏ね成形 (内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ・指ナデ 底部台状 底部木葉痕+凹線	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床上 +20cm No.33
14 土師器 坏?	底 8.0 高 (1.9)	手捏ね成形 底面に平行の凹凸 (残) 8/8	赤色融解粒極多・白色粒 子多 良 5Y5/6 赤褐	覆土
15 土師器 高坏	高 (7.5)	(坏部内) 密なミガキ (脚部外) 縦方向の密なミガキ (脚部内) ヘラナデ (残) 脚部中 8/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 7.5YR3/4 暗褐	P2 内 No.48
16 土師器 高坏	底 (10.6) 高 (4.3)	摩滅により調整不明 被熱により赤化 (残) 脚部 2/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.7
17 土師器 甕	口 (16.2) 大 (23.9) 高 26.9	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ、過半ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面摩滅強 (残) 4/8	砂礫多・砂粒・白色 粒子やや多・雲母微 良 7.5YR6/6 橙	床直 No.39 + 44 + 45
18 土師器 甕	口 (19.2) 大 (25.7) 高 (26.9)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面に一部粘土付着 (残) 4/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR6/6 橙	カマド袖芯 No.51 + カマド

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
19 土師器 甕	口 (18.6) 大 (23.4) 高 (26.4)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ底部近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部下半内面に輪積痕 (残) 3/8	砂粒・白色粒子多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド袖芯 No.52+かど +かど右袖
20 土師器 甕	口 (19.2) 大 (29.4) 高 (32.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴上半不明下半ヘラケズリ 胴上半摩滅 (残) 5/8	砂礫極多・白色粒子・砂粒多・雲母少 二次被熱 2.5YR4/8 赤褐	床直 No.41
21 土師器 甕	口 23.8 大 29.2 高 29.8	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部輪積痕残る 表面 にヒビ多く入る 底部輪積み部分で欠損 (残) 6/8	砂粒・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直 No.15+19+ 35
22 土師器 甕	口 (17.8) 高 (22.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ→ヘラナデ 被熱により赤化 (残) 2/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母やや多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	カマド袖芯 No.51
23 土師器 甕	口 (15.4) 大 33.0 高 28.5	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ+ヘラナデ (外) 口ヨ コナデ胴上半ヘラケズリ下半ヘラナデ+ヘラケズリ 胴部中位が大きく膨らむ (残) 胴 8/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 +5cm No.36+38+ 39
24 須恵器 壺?	口 (10.0) 高 (3.6)	内外面ともロクロナデ 外面3本1組の波状櫛描文 (残) 1/8	白色粒子多・雲母やや少 良 5Y5/1 灰	覆土
25 須恵器 壺	口 (11.6) 高 (17.4)	内外面ともロクロナデ 胴部中位平行沈線+櫛 歯状工具による連続刺突 胴部下カキメ 外面自然釉 胴部一部歪む (残) 口2/8 胴 6/8 常陸産?	砂礫・白色粒子極多 良 5G4/1 暗緑灰	床上 +15cm No.18+20+ 21
26 須恵器 甕	破片	(内) 無文当て具痕 (外) 平行タタキ 新治産	砂礫・白色粒子・雲母多 良 7.5Y5/2 灰オリーブ	床上 +20cm No.9
27 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状当て具痕 (外) 平行タタキ 産地不明	砂礫やや多・白色粒子少 やや不良 2.5Y8/2 灰白	覆土
28 土師器 甕	口 (10.4) 高 (3.4)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) ハケメ 口縁部S字状 (残) 2/8	白色粒子多 良 10YR5/1 褐灰	床上 +10cm No.23
29 土製品 支脚	長 (9.9) 径 5.7 重 158.97	表面丁寧なナデ 一部薄く粘土をナデつけ 下端が中央に向かって凹む	赤色融解粒極多・白色粒子 やや多・砂礫少 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 No.42
30 土製品 支脚	長 11.0 (生粘土接合 部含む) 径 5.9 重 602.26	表面丁寧なナデ 上部が欠損した支脚に粘土を継ぎ足 して使用している (網掛け部分が粘土) 接合した粘土 と元の支脚の上端部 (点線部分) は生焼け 底面ナデ 下端が中央に向かって凹む	赤色融解粒極多・白色粒子 やや多・砂礫少 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 No.42+46
31 焼成 粘土塊	長 4.2 幅 2.9 厚 2.4 重 173.6	塊状 実測図表面上部はナデにより平滑化 その他の部分 はちぎり取った状態にヘラ状工具による多方向のキズ 一 部草本植物の痕跡残る	白色粒子・赤色融解粒少 良 10YR7/6 明黄褐	覆土
32 焼成 粘土塊	長 4.8 幅 3.8 厚 2.0 重 14.59	塊状 実測図表面はちぎり取った状態 裏面に一部弱いナ デ 草本植物の痕跡残る	赤色融解粒極多 二次被熱 7.5YR7/4 にぶい橙	覆土
33 焼成 粘土塊	長 4.3 幅 3.1 厚 1.5 重 13.55	塊状 実測図表面は弱いナデ、半裁竹管による同方向のキ ズ 裏面はちぎり取った状態 摩滅強	白色粒子・赤色融解粒少 良 10YR7/6 明黄褐	覆土
34 礫	長 12.8 幅 4.5 厚 3.3 重 255.4	表面擦れて平滑化し、石の目がつぶれている 実測図下端に敲打痕 側面一部欠け	2.5YR6/3 にぶい黄	覆土
35 鉄製品 不明	長 7.2 幅 2.2 厚 0.3 重 9.5	非常に薄い鉄片で、特に両端は薄くなっている。実測図左右の端部はどちらも欠損し ている。中央に鏽ぶくれが見られる。		覆土 No.49

SI-35 (第96～98図・図版十五・四九)

位置 J33 グリッドに位置する。

規模・形状 残存部分で東西 4.75 m、南北 4.95m の歪んだ方形を呈する。南壁から南東隅は攪乱により大きく削平されている。

覆土 攪乱によりほとんど失われているが、残存部分では暗褐色土を主体とする。

壁・壁溝 確認面からの深さは約 10cm で、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。掘り方はない。

柱穴 4 本主柱と考えられるが、南側の 2 本は 2 組確認されている。当初、P2・P3 が柱穴と考えたが、P3 が他の柱穴に比べて浅すぎるため、周辺を精査したところさらに南側に P5・P6 が確認された。P6 の覆土は攪乱により失われているため不明だが、P2・P3 の覆土が周辺の中世以降のピットの覆土に似ていることから、住居の柱穴は P5・P6 の可能性が高いと考える。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。左袖は攪乱により失われており、右袖と奥壁が残っている。袖は地山を掘り残して構築しており、その上に粘土が貼り付けられていたかは不明である。内面はよく焼けしており、焼土ブロックが多く堆積している（2層）。煙道は短く、急な角度で立ち上がる。

貯蔵穴 住居北東隅で 1 基確認された。方形の掘り方を呈し、深さは約 25cm である。

遺物 カマド西側の床面上から、複数個体の土師器壺・甕・片口鉢・甑がまとまって出土している（第98図3～8）。また、東壁そばの土師器壺（第98図2）も床面上からの出土である。

SI-36 (第99・100図・図版十五)

位置・重複関係 K33 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SK-258・264 に切られる。

規模・形状 東西 4m、南北 3.7 m の方形を呈する。主軸方向は N - 36° - E である。

覆土 黒褐色土を主体とする。カマドから住居中央にかけて、ロームブロック・焼土粒を多量に含む暗褐色土が堆積している（2層）。

壁・壁溝 確認面からの深さは約 20cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は北壁西側から南壁にかけてめぐり、東壁には部分的に作られている。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床を施している。住居南東隅のみ地床となる。

掘方 極浅く、ほぼ平坦である。住居中央で小ピットが 1 基確認されている（P7）。

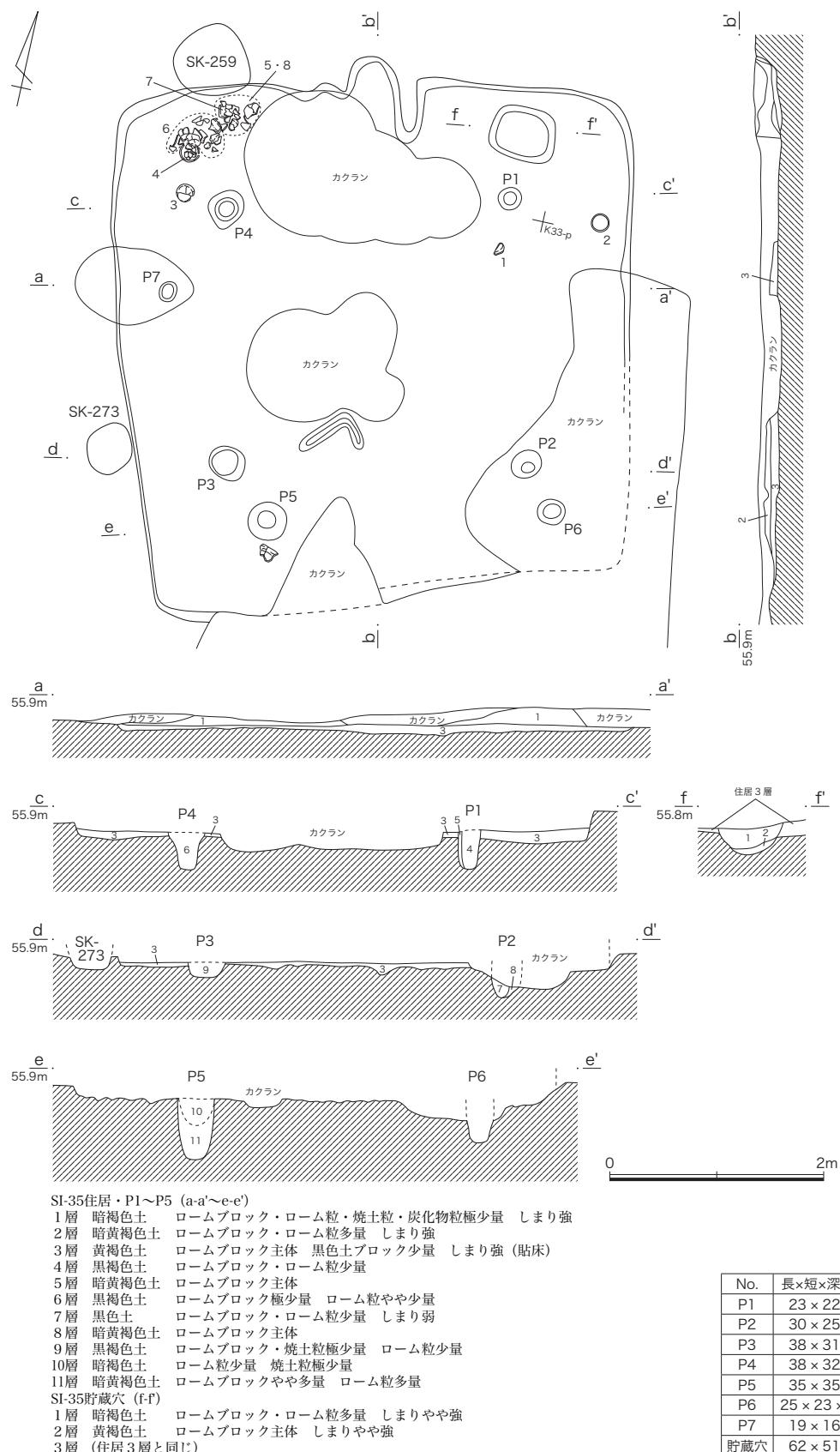
柱穴 4 本主柱と考えられるが、P2 と P3 の間で柱痕があるピットが 1 基確認されている（P6）。P1 から P4 はいずれも円形の掘り方を呈し、柱痕が認められる。柱痕の周りは、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で埋めている。

入り口ピット 南壁中央寄りで 1 基確認された（P5）。円形の掘り方を呈し、浅い。

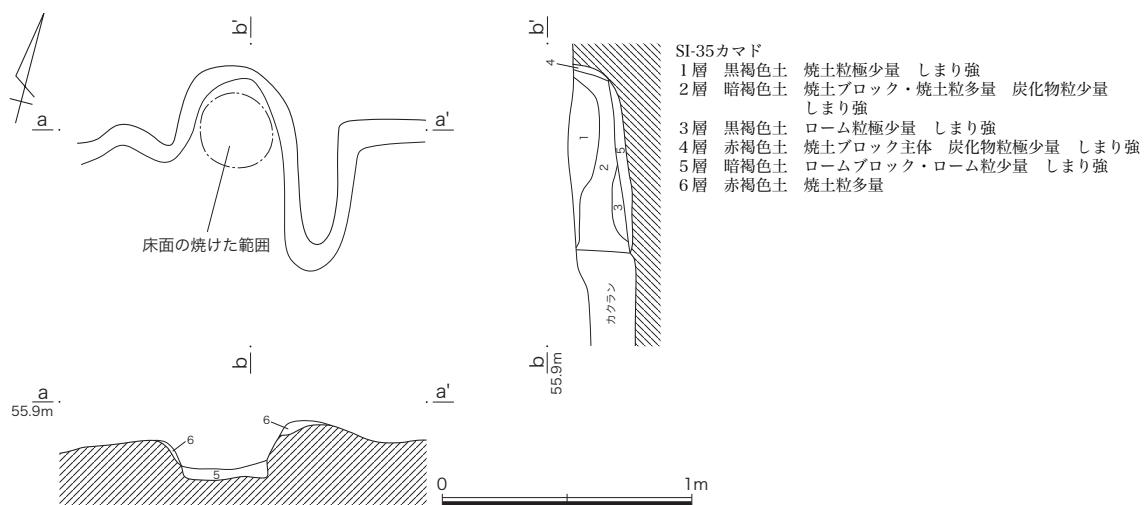
火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、袖の残りは悪い。両袖は貼床に似る土層（9 層）を厚く貼った上に粘土を積み上げて構築しているようだが、左袖は粘土が残っていない。内部はよく焼けており、炭化物・焼土・灰が薄く互層状に堆積していた（5・6 層）。煙道は階段状に立ち上がる。

その他の付帯施設 床下から井戸状の遺構が確認されている（P8）。上面が住居貼床に覆われており、住居よりも古い遺構と考えられる。住居床下の井戸跡としては SI-1014 竪穴住居跡床下の SE-1394 がある。

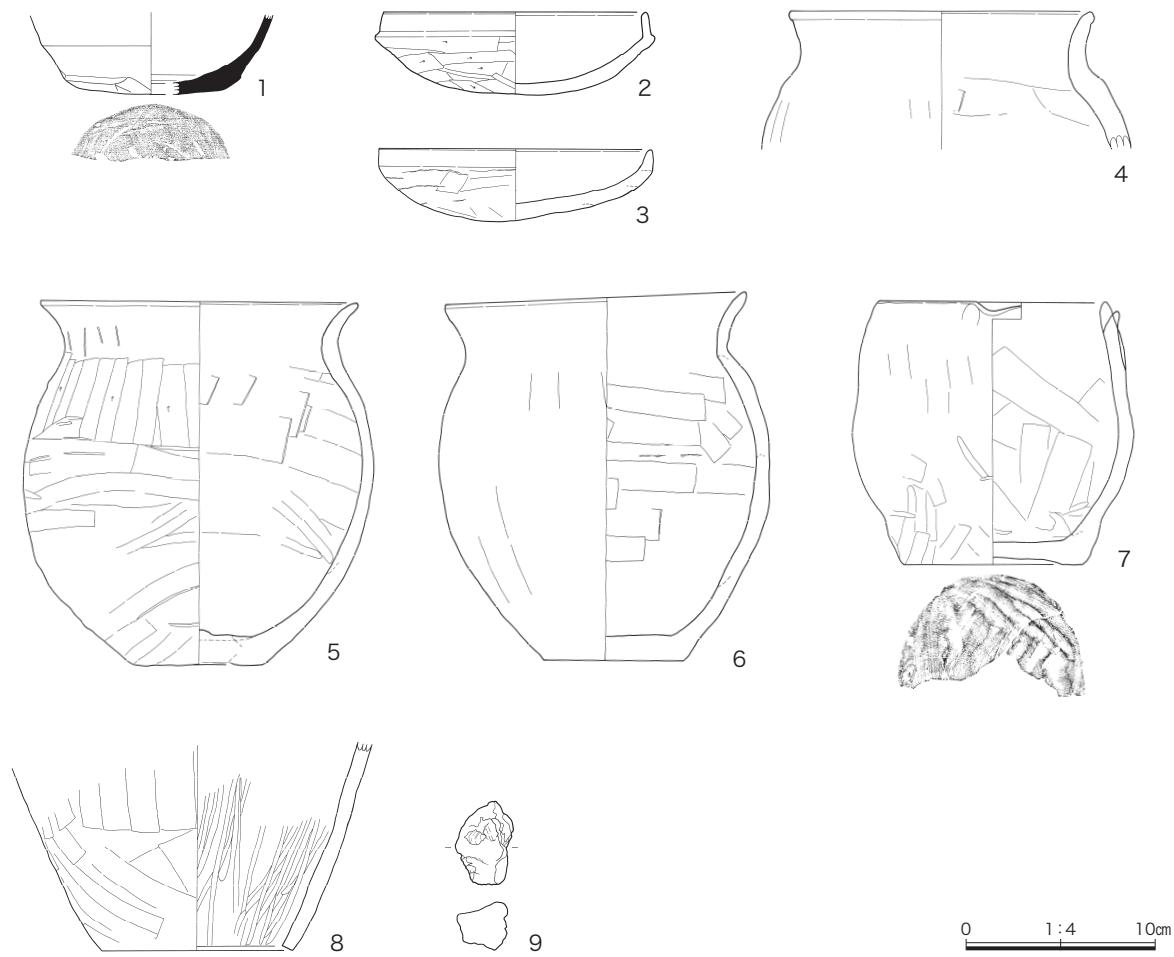
遺物 P4 脇の土師器甑破片（第100図2）以外は床面上から出土している。出土量は少なく、器形復元できるものは出土しなかった。



第96図 SI-35 壇穴住居跡 (1)



第97図 SI-35 穫穴住居跡 (2)



第98図 SI-35出土遺物

第38表 SI-35 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	高 (4.3)	内外面ともロクロナデ 底部近く手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ (残) 2/8 産地不明	白色粒子やや多・雲母微 やや良 N3/ 暗灰	攪乱 No.4
2 土師器 壺	口 13.8 高 4.3	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 8/8	砂礫やや多・白色粒子多 良 10YR4/2 灰黄褐	床直 No.5
3 土師器 壺	口 14.3 高 4.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ 外面に輪積痕 (残) 7/8	微細白色粒子やや多 良 7.5YR3/2 黒褐	床直 No.3
4 土師器 甕	口 16.0 高 (7.3)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 口縁部内外面に煤状の付着物 (残) 6/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR3/3 暗褐	床直 No.7 + 床直
5 土師器 甕	口 16.6 高 19.2	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ、下半一部ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴縦方向ヘラケズリ→横方向ヘラナデ 底部ドーナツ状に粘土貼り付け 脇下半摩滅 (残) 6/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 5YR4/6 赤褐	床直 No.1
6 土師器 甕	口 (15.9) 底 (7.4) 高 18.8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 内面輪積痕 外面口縁部に煤状の付着物 (残) 口 2/8 脇～底 5/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床直 No.2+7+ 床直
7 土師器 片口鉢	口 (12.0) 高 13.9	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴上半丁寧なヘラナデ下半ヘラケズリ底へ ラナデ 口縁部をつまみ出して片口部を作り出す (残) 1/8	砂粒・白色粒子多・ 砂礫少 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 No.1+2
8 土師器 甕	底 (10.0) 高 (10.8)	(内) 縦方向ミガキ (外) 縦方向ヘラケズリ 無底式 (残) 脇下半 8/8	微細白色粒子やや多・ 雲母微 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.1
9 焼成 粘土塊	長 4.5 幅 2.7 厚 2.6 重 15.72	塊状 実測図表面はちぎり取った状態に弱いナデ 草本植物 の痕跡残る 裏面はユビナデにより平滑化、小指大の礫が抜 け落ちた穴が残る	赤色融解粒多・白色粒子微 良 7.5YR6/6 橙	覆土

SI-38 (第101～104図・図版十六・四九)

位置 L34 グリッドに位置する。

重複関係 住居北東隅でSI-39と重複し、SI-38(旧)→SI-39(新)である。また、SD-114に切られる。

規模・形状 東西5.45m、南北5.75mの方形を呈する。主軸方向はN-13°-Eである。

覆土 内容物をあまり含まない黒褐色土を主体とする。上層(1層)よりも下層(2層)の方が色調が明るい。住居西壁から南壁西側にかけて、ローム粒を多く含む暗黄褐色土が堆積している(3層)。

壁 確認面から深さ約15cmで、壁はなだらかに立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床を全体的に薄く施している。掘り方はない。

柱穴 4本主柱。楕円状の掘り方を呈し、西側の2本(P3・P4)には柱痕が認められる。東側の2本も、覆土は西側の柱痕と似ているが、柱状の堆積は見られない。

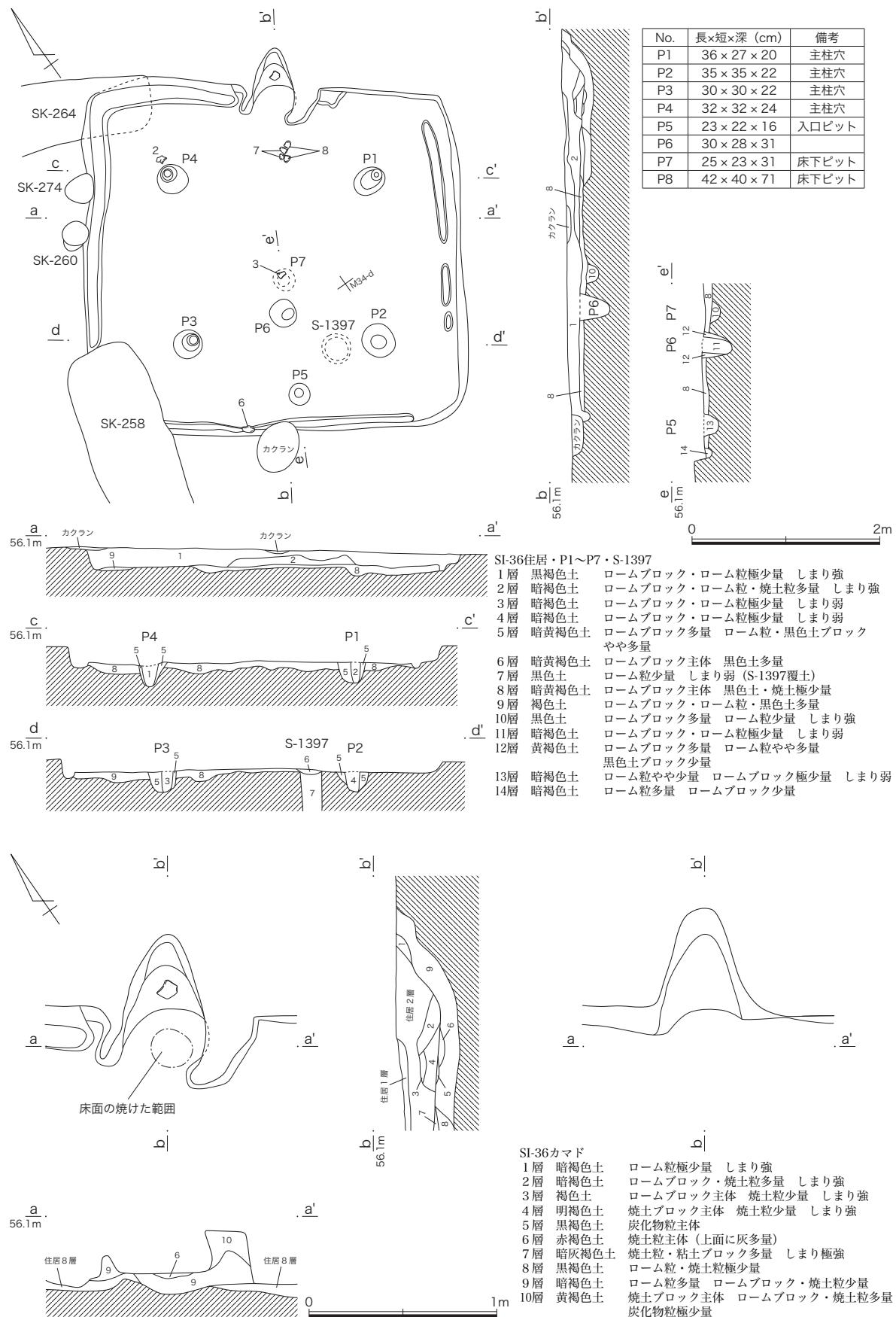
入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P5)。楕円状の掘り方を呈し、浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖・天井部分・奥壁が残存している。両袖は貼床の上に暗褐色土を積み上げて、さらに粘土質のローム土を貼り付けて構築している。天井は燃焼部が崩落しているが、両袖の基部からブリッジ状に残存している。両袖の内側と床面はよく焼けており、内部には焼土ブロックが大量に堆積していた(2・3層)。奥壁は短く、急な角度で立ち上がる。掘り方は凸字状を呈する。

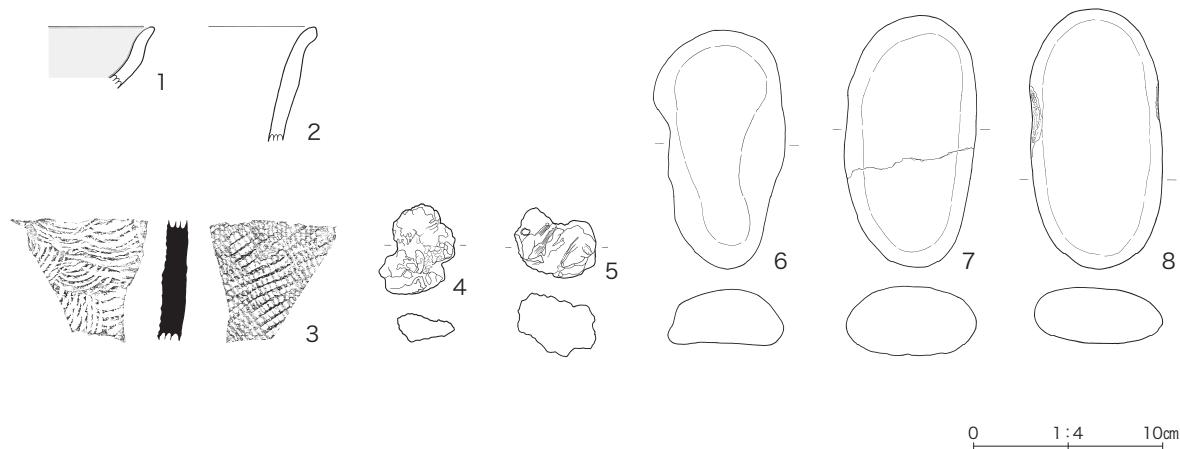
貯蔵穴 住居北東隅で1基確認された。長方形の掘り方を呈し、深さは約25cmである。

棚状施設 カマド西側の壁に接して、幅0.8m、奥行き0.15mの半円状を呈する棚状施設が確認された。

第3章 発見された遺構と遺物



第99図 SI-36 積穴住居跡



第100図 SI-36出土遺物

第39表 SI-36遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壊	破片	(内) 横方向ミガキ+放射状ミガキ (外) 横方向ミガキ 内面黒色処理	白色粒子多 良 7.5YR5/3 にぶい褐	覆土
2 土師器 甌?	破片	(内) 横方向ミガキ (外) ロヨコナデ胴縦方向ヘラケズリ	砂礫多・白色粒子やや多 良 10YR6/6 明黄褐	覆土 No.1
3 須恵器 甌	破片	(内) 同心円状當て具痕 (外) 平行タタキ 産地不明	白色粒子多・砂礫少 良 N5/ 灰	床直 No.2
4 焼成 粘土塊	長4.6幅3.4 厚2.0 重22.07	塊状 全体的にちぎり取った状態 ナデや工具痕はなし	白色粒子多・赤色融解粒少 良 7.5YR6/6 橙	覆土
5 焼成 粘土塊	長3.3幅4.1 厚3.0 重26.14	塊状 実測図表面はちぎり取った後にヘラ状工具によるキズ 左側面に棒状工具を刺したような貫通孔あり 裏面は弱いナデ	赤色融解粒多・白色粒子微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土
6 礫	長12.6 幅6.7厚2.8 重293.4	表面は丸みをおび、裏面は平坦 使用痕特になし	2.5Y6/2 灰黄	床直 No.3
7 礫	長13.4 幅7.0厚4.8 重506.8	やや丸みを帯びた扁平な礫 使用痕特になし 煤状の付着物が薄く残る	2..5Y6/1 黄灰	床直 No.5+6
8 礫	長13.7 幅6.9厚3.0 重403.9	長楕円形の扁平な礫 両側縁に敲打痕 全体が弱い赤化	2.5Y6/1 黄灰 安山岩	床直 No.4+7

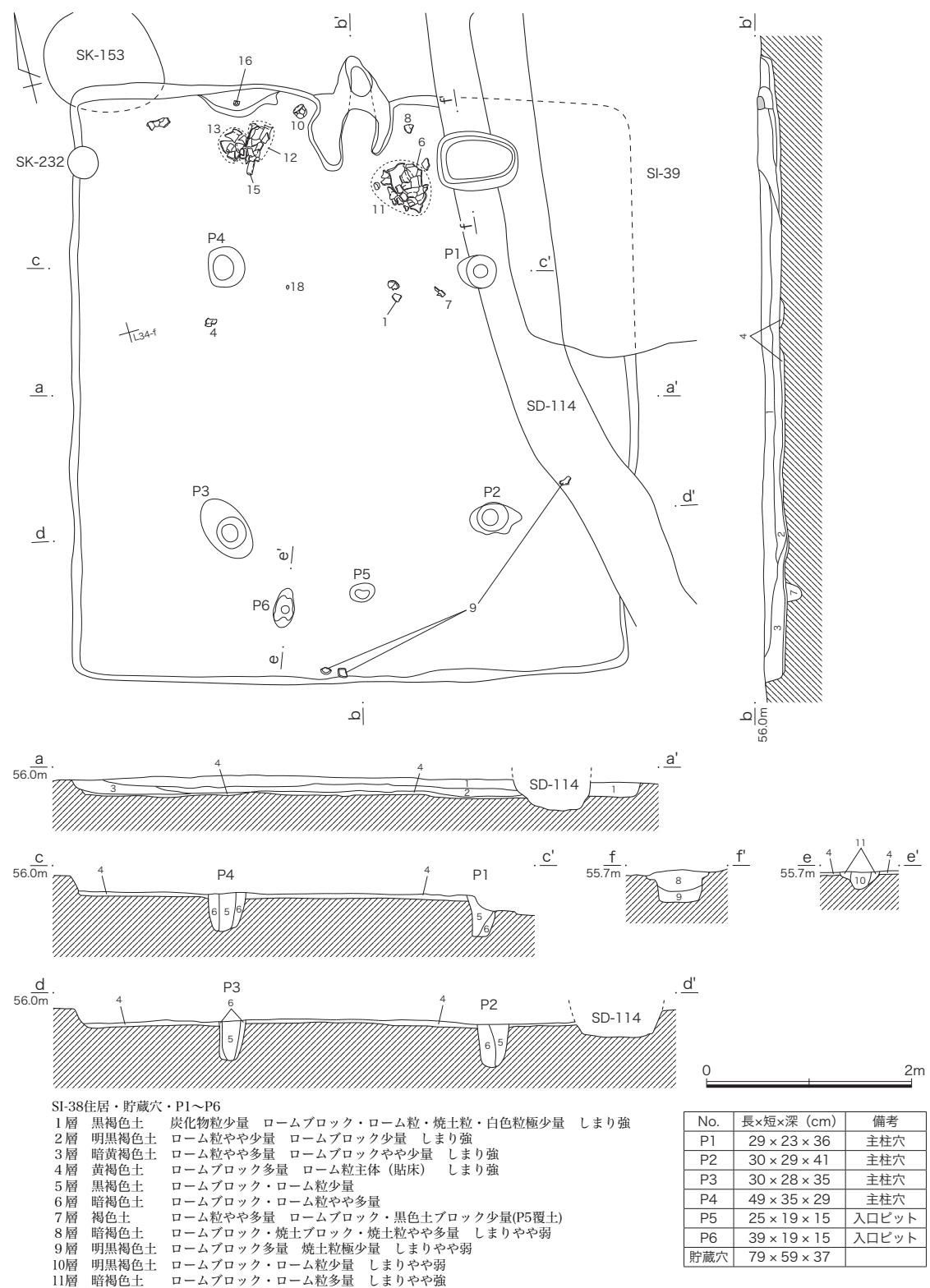
床面からの高さは約10cmである。棚の約5cm上から、土製紡錘車が出土している（第104図16）。

遺物 カマド周辺の床面上を中心に出土している（第103図10～13、第104図15）。また、P4東側の床面から5cm上で土玉が出土している（第104図18）。

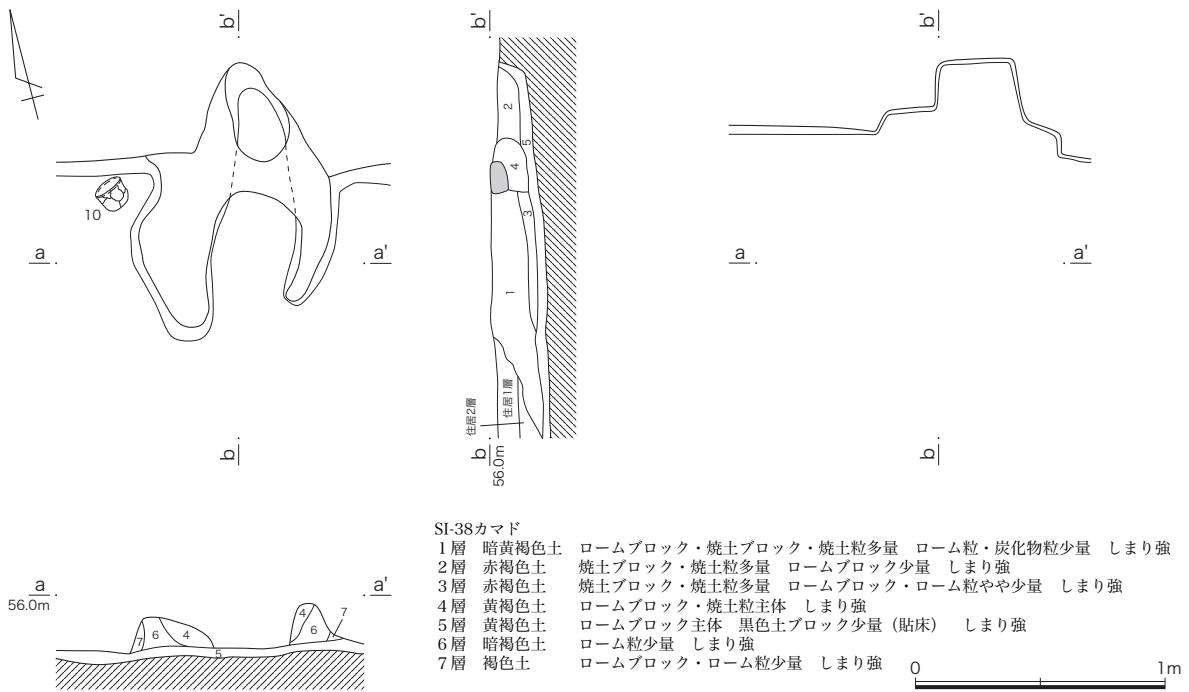
SI-39（第105図・図版十六）

位置 L34グリッドに位置する。

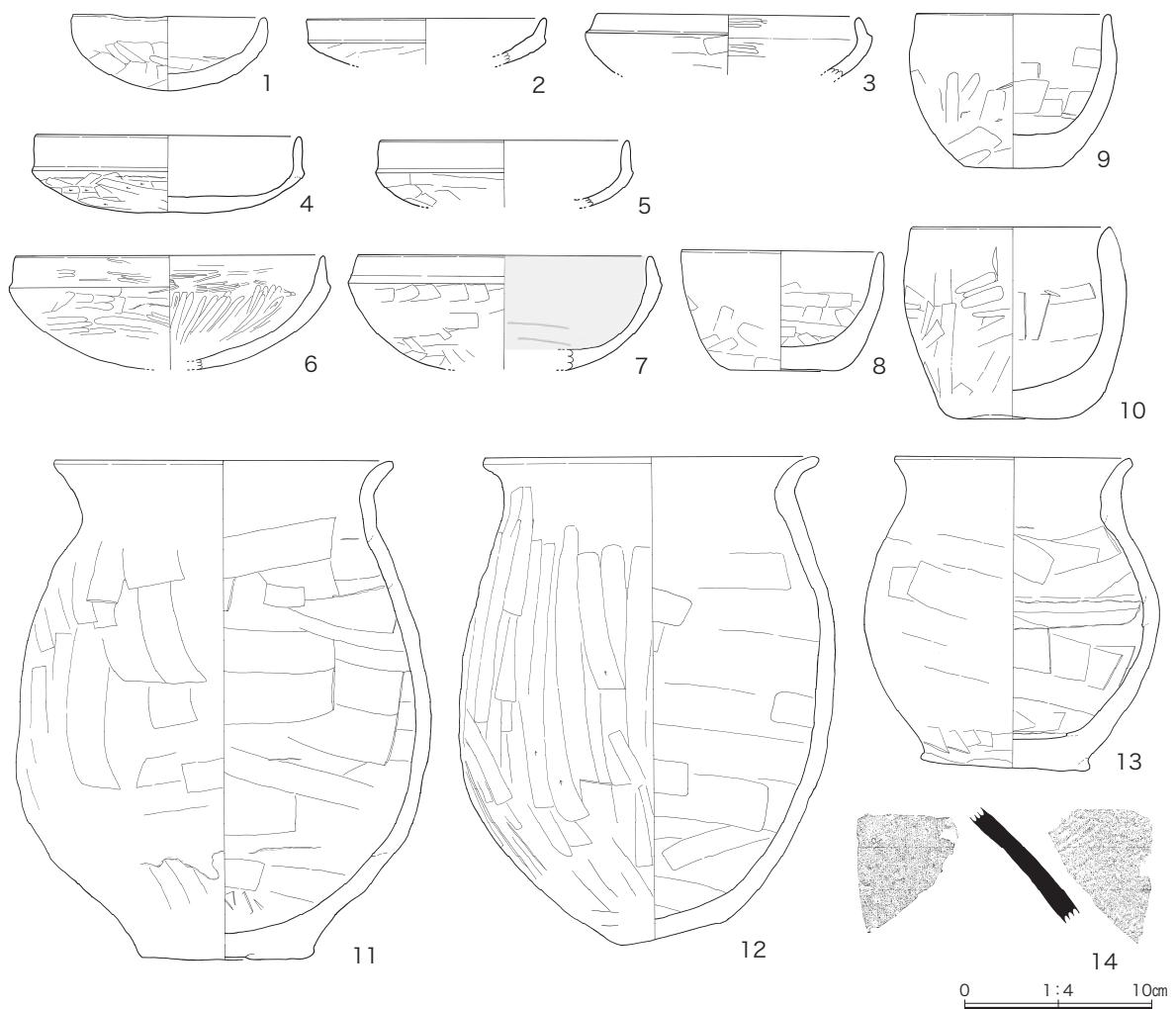
重複関係 住居西側でSI-38と重複する。新旧関係はSI-38（旧）→SI-39（新）である。また、SD-114・154に切られる。



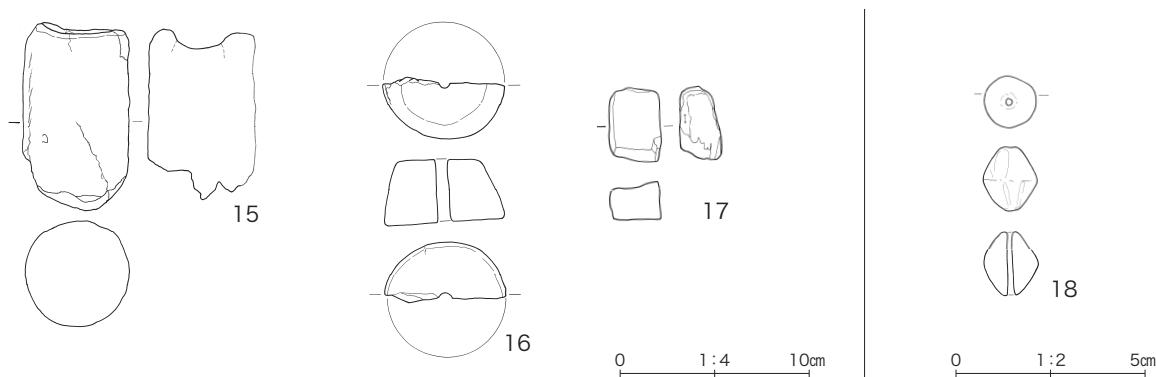
第101図 SI-38 竪穴住居跡 (1)



第102図 SI-38 竪穴住居跡（2）



第103図 SI-38出土遺物



第104図 SI-38出土遺物

第40表 SI-38遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 10.3 高 4.0	(内) 口粗いヨコナデ体粗いナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ? 口縁部大きく歪む 底面内部にヘラの当たり多数有り (残) 4/8	赤色融解粒多・砂礫やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土 No.5
2 土師器 壺	口 (12.8) 高 (2.4)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 全体的に摩滅 (残) 1/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 やや良 10YR4/4 褐	覆土
3 土師器 壺	口 (14.0) 高 (3.2)	(内) 口ヨコナデ→横方向の密なミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 全体的に摩滅 (残) 1/8	砂粒少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土
4 土師器 壺	口 14.1 高 4.1	(内) ヨコナデ底面近くナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面一部漆付着 外面に輪積痕 (残) 2/8	微細白色粒子・砂礫多 良 7.5YR4/3 褐	覆土 No.11
5 土師器 壺	口 (13.2) 高 (3.5)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面へ口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子やや多・雲母微 良 7.5YR4/3 褐	覆土
6 土師器 壺	口 (16.4) 高 (6.0)	(内) 口ヨコナデ→横方向ミガキ、体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ→横方向ミガキ、体ヘラケズリ+横方向ミ ガキ (残) 2/8	砂粒やや多・雲母少 良 7.5YR7/6 橙	覆土 No.1+ SI-39一括
7 土師器 壺	口 (15.6) 高 (6.1)	(内) 口ヨコナデ体ナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面黒色処理	微細白色粒子・雲母やや多 ・砂礫少 二次被熱 7.5YR4/4 褐	床直 No.7
8 土師器 塊	口 (10.5) 底 5.5 高 6.3	(内) 口ヨコナデ体弱いヘラナデ (外) 口ヨコナデ体弱いヘラナデ、底部近くヘラケズリ 口縁部やや歪む (残) 4/8	赤色融解粒やや多・砂粒・ 白色粒子少 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.4
9 土師器 塊	口 (10.3) 底 5.1 高 8.2	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体指ナデ、底部近くヘラナデ 口縁部やや歪む (残) 2/8	白色粒子やや多・砂礫・ 赤色融解粒・雲母少 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 No.8+9+10
10 土師器 塊	口 (10.6/11.6) 大 11.4 高 10.2	(内) 口ヨコナデ体粗いヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ、一部当たり残る 口縁部梢円形に歪む (残) 7/8	赤色融解粒多・微細白色 粒子少 やや良 0YR3/1 黒褐	床直 No.15
11 土師器 甕	口 18.0 大 (22.0) 高 26.7	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 胴下半被熱による荒れ (残) 口 7/8 胴 2/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 10YR6/6 明黄褐	床直 No.2 + 覆土
12 土師器 甕	口 17.8 底 5.8 高 25.9	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 斜めに大きく歪む (残) 7/8	砂粒・白色粒子極多・ 雲母少 良 10YR4/2 灰黄褐	床直 No.16
13 土師器 甕	口 12.6 高 16.7	(内) 口弱いナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ? 底部近くヘラナデつけ 内面に輪積痕多数 外面下半に煤状の付着物 (残) 7/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直 No.17
14 須恵器 甕	破片	(内) 無文ナデ (外) 平行タタキ 産地不明	白色粒子・黒色融解粒多 良 7.5Y5/1 灰	覆土 d

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
15 土製品 支脚	長 (9.9) 径 5.5 重 290.72	上端は粘土折り返し、中央部分が凹む 外面に薄く粘土付着 下端欠損	白色粒子・赤色融解粒や や多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 No.18
16 土製品 紡錘車	径 6.4 厚 3.4 孔径 0.6 重 (64.94)	表面細かいヘラミガキ 上面に歪みあり	白色粒子やや多・赤色融 解粒少・雲母微 良 7.5YR3/2 黒褐	覆土 No.13
17 石製品 砥石	長 3.9 幅 2.8 厚 2.0 重 31.76	断面方形。表裏及び縁側面の4面使用と考えられるが、摩 滅が著しく使用面残存部が少ない。	5Y7/2 灰白	覆土
18 土製品 土玉	長 1.7 径 1.4 重 2.59	算盤玉形。表面ナデにより平滑化。穿孔はかなり細いが、 貫通している。 完形。	白色粒子少 良 2.5YR4/1 黄灰	床上 +5cm No.14

規模・形状 東西、南北とも 3.75 mで、歪んだ方形を呈する。主軸方向は、N - 8° - E である。

覆土 ロームブロック・焼土・炭化物を多く含む暗褐色土を主体とする。単層で埋没しており、埋め戻されたものと考えられる。また、カマドから住居中央に向けて粘土ブロックが堆積している（2層）。

壁 確認面からの深さは 30cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる薄い貼床が施される。掘り方ではない。

入り口ピット 南壁中央寄りに 1 基確認された (P2)。円形の掘り方を呈し、極浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖の一部と奥壁が残存している。両袖は地山を掘り残した上に粘土を貼っていたものと考えられるが、粘土は残っていない。底面はよく焼けており（第 105 図下破線範囲）、天井崩落土と考えられる土層（1 層・住居 2 層）の下に焼土ブロックが多量に堆積していた。煙道は短く、やや急な角度で立ち上がる。

遺物 出土遺物は極めて少なく、図化できたのは須恵器甕の破片（第 105 図 1）と砥石破片（第 105 図 2）のみで、いずれも覆土中からの出土である。

SI-40 (第 106 ~ 108 図・図版十六・四九)

位置 K34 グリッドに位置する。柱穴と間仕切り溝、床面の作り替えを伴う住居の建て替えが 1 回行われており、SI-40a（新段階）、SI-40b（旧段階）にわけられる。

規模・形状 東西 5.7 m、南北 5.6 m だが、北東隅がやや内側に入るため、歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 29° - E である。

覆土 内容物をあまり含まない明黒褐色土を主体とする。また、下層（2 層）はロームブロックを多く含む土層で、薄く堆積している。

SI-40a (第 106 図)

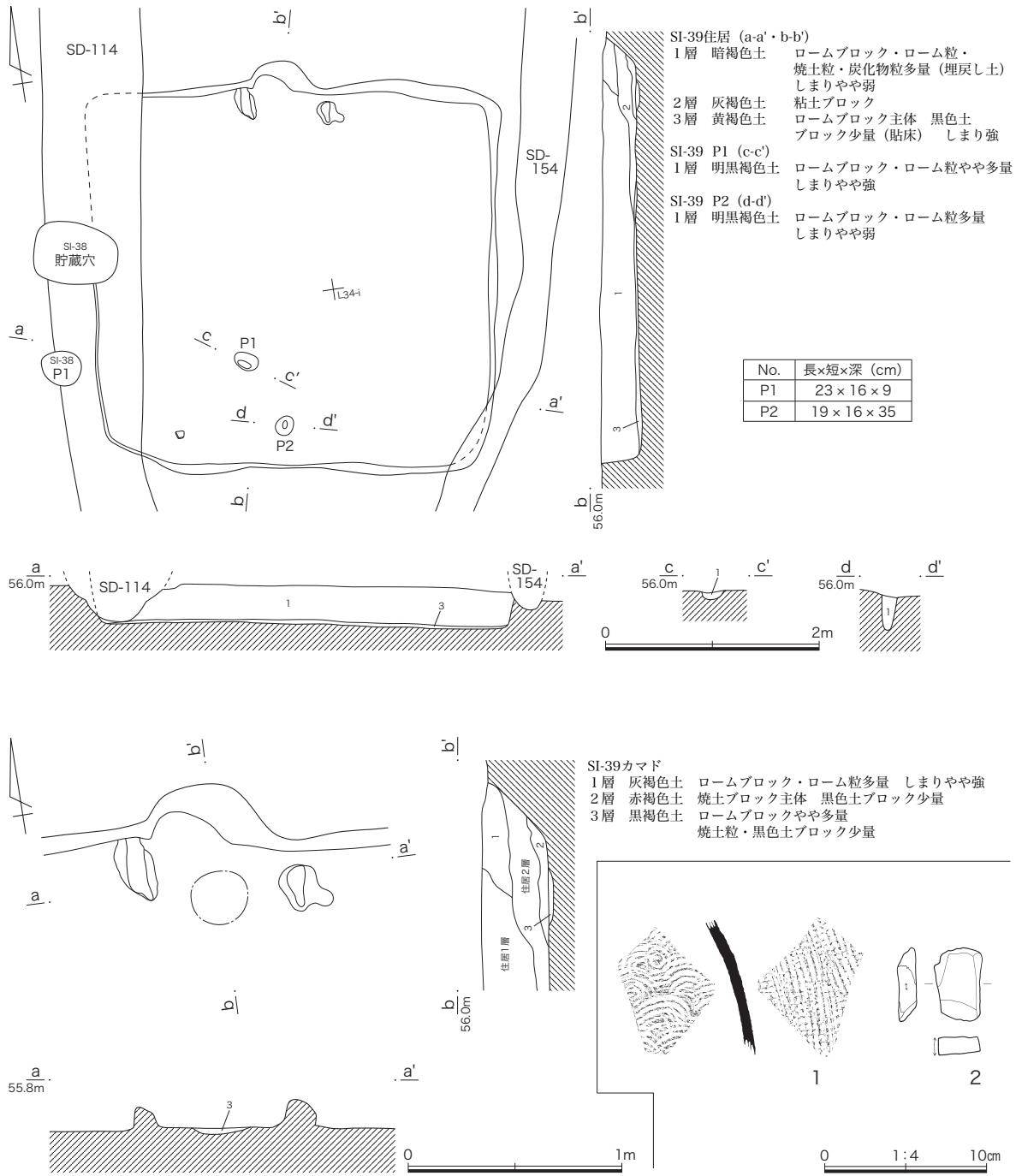
壁 確認面から約 20cm の深さで、壁はなだらかに立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる薄い貼床を施している。

柱穴 4 本主柱。いずれも円状の掘り方を呈し、柱痕が確認された。柱痕の周囲は、ロームブロックを主体とする土層で埋めている。また、カマド前の P8 は柱痕がある。

入り口ピット 南壁中央寄りに 1 基確認された。南北に長い楕円状の掘り方を呈するが、断面は浅い凸字状を呈する。住居下層（2 層）で埋没している。内部から礫が 1 点出土した（第 108 図 12）。

間仕切り溝 P4 西側の 1 本のみ確認された。柱穴中心から若干ずれている。



第105図 SI-39 竪穴住居跡および出土遺物

第41表 SI-39 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状當て具痕 (外) 平行タタキ+カキメ 産地不明	白色粒子・黒色融解粒多 良 N6/ 灰	覆土 No.1
2 石製品 砥石	長 4.6 幅 3.0 厚 1.1 重 18.19	断面方形。使用面 1 面のみ残り、他の面は全て欠損。	10Y5/1 灰	覆土一括

火処 北壁中央にカマドを構築している。両袖と奥壁が残存している。袖は地山を掘り残した上に粘土を貼り付けているが、粘土は内側にしか残っていない。内部はよく焼けており、焼土が大量に堆積していた（5層）。焼土の上には天井崩落土と考えられる粘土ブロック（3層）が厚く堆積している。カマド内部には貼床が施されており、それを除去すると浅い楕円形の掘り込みが確認された。煙道は急な角度で立ち上がる。

貯蔵穴 住居北東隅に1基確認された。楕円状の掘り方を呈し、極浅い。

遺物 住居全体の覆土中から出土しているが、出土量は少ない。床面に伴う遺物は、住居南壁東側から出土した長楕円形の礫2点のみである（第108図10・13）。

SI-40b（第107図）

床面と柱穴、間仕切り溝のみ確認されている。その他の施設は、SI-40aと共に考えられる。

床面 SI-40aの貼床下がSI-40bの床面である。貼床は確認できなかった。

柱穴 北側の2本はSI-40aと共に、南側の2本のみ建て替えを行っている（P6・P7）。P6はロームブロックで埋め戻されている。

間仕切り溝 P2・P7の外側及びP5の北側にそれぞれ確認された。P2・P5脇の間仕切り溝は柱穴の延長上に掘られているが、P6脇の間仕切り溝は若干ずれている。

遺物 SI-40bに伴う遺物は出土しなかった。

SI-41（第109・110図・図版十六・四九）

位置 I25グリッドに位置する。

規模・形状 残存部分で東西3.4m、南北3.35mだが、西壁が2.7mと短くなっているため大きく歪んでいる。主軸方向はN-15°-Eである。

覆土 暗褐色土を主体としているが、ほとんど残っていない。

壁・壁溝 上面が大きく削平されているため不明である。

床面・貼床 黄褐色土ロームを多く含む暗褐色土により薄い貼床を施している。

掘方 住居北西、北東に不定形の深い落ち込みが確認された。覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土を主体とする。南壁部分にも土坑状の掘り込みが確認されたが、プランが住居外まで及んでいることから、住居に伴わない遺構の可能性もある。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。

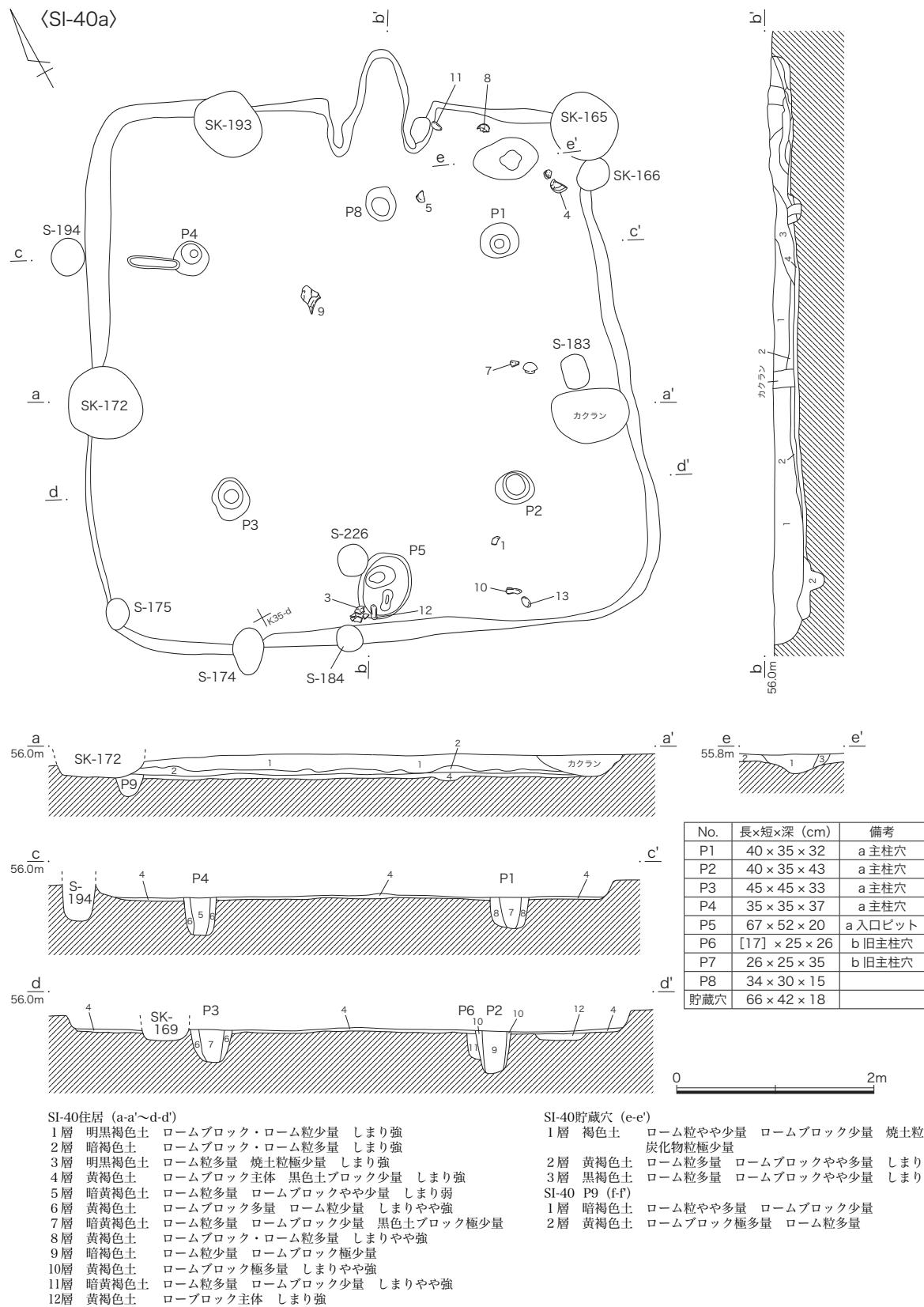
入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された（P1）。東西に長い楕円形で、極浅い。

火処 北壁中央より東寄りにカマドが構築されており、右袖と煙道のみ残っている。右袖は灰白色粘土を用いて作られており、煙道奥壁にも粘土が一部貼り付けられていた。内部には粘土と炭、灰、焼土が薄い層状に重なって堆積しており（3～5層）、この部分がカマドの火床面と考えられる。火床面の下は浅く掘り窪められており、ロームブロックやローム粒子を少量含む暗褐色土が堆積していた（6層）。煙道はほとんど失われているが、緩やかに立ち上がるようである。

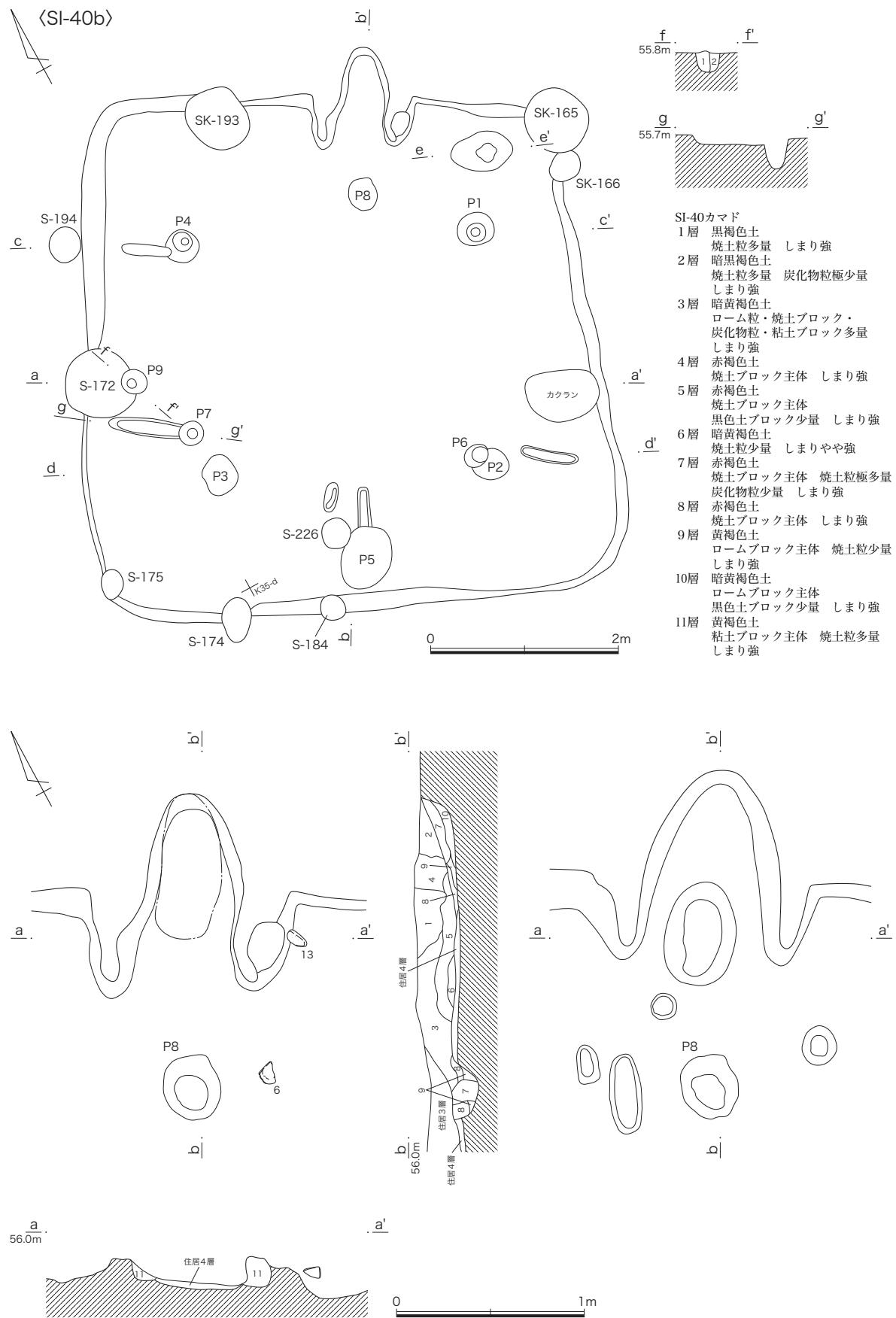
遺物 出土遺物は極めて少ない。図化した遺物はいずれも覆土中からの出土である。

SI-42（第111～113図・図版十七）

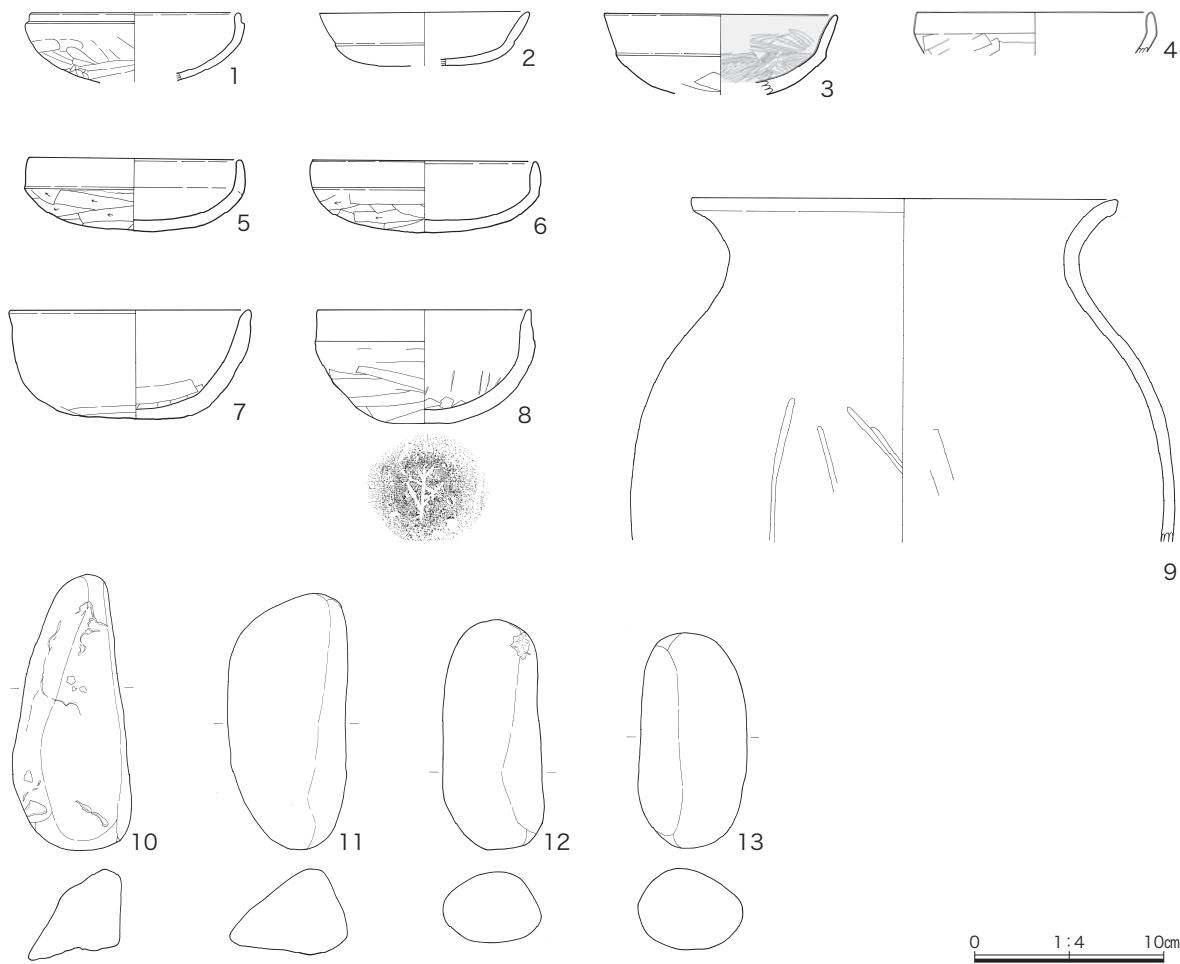
位置 H26グリッドに位置する。柱穴と壁溝の作り替えを伴う住居の建て替えが1回行われており、SI-42a（新段階）、SI-42b（旧段階）にわけられる。



第106図 SI-40 積穴住跡 (1)



第107図 SI-40 穫穴住居跡（2）

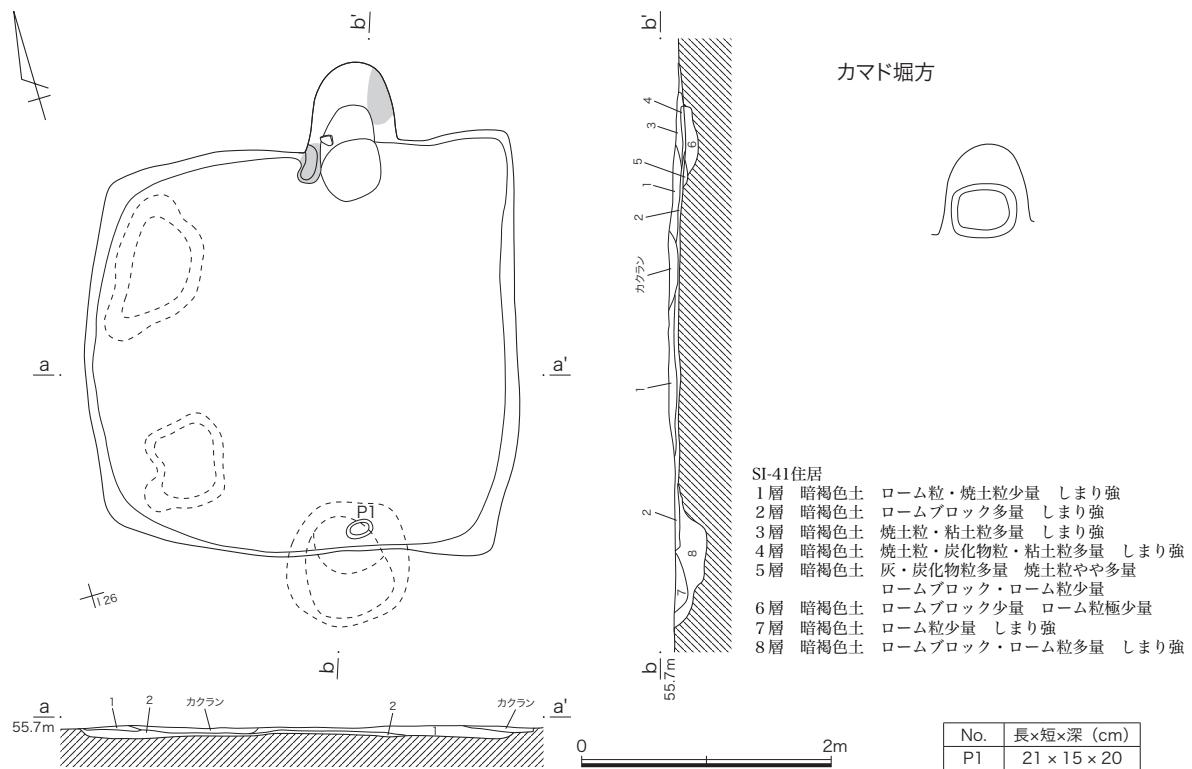


第 108 図 SI-40 出土遺物

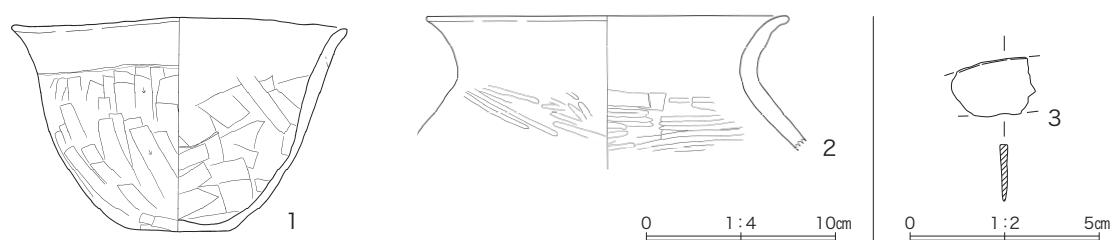
第 42 表 SI-40 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (11.0) 高 (3.6)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半ナデ→下半ケズリ 内面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.7
2 土師器 壺	口 (11.0) 高 (2.8)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ? 体部外面摩滅 内面一部漆付着 (残) 1/8	白色粒子・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	覆土
3 土師器 壺	口 (12.2) 高 (4.2)	(内) 密なミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 内面黒色処理 (残) 1/8	白色粒子多・砂礫やや多 やや良 7.5YR7/3 にぶい橙	床上 +5cm No.1
4 土師器 壺	口 (12.4) 高 (2.1)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 一部破片が赤化 (残) 1/8	砂粒多 二次被熱 5YR4/8 赤褐	覆土
5 土師器 壺	口 (11.2) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面一部漆付着 (残) 4/8	砂粒多・砂礫やや多・ 白色粒子・雲母少 良 5YR4/8 赤褐	床上 +5cm No.12
6 土師器 壺	口 (11.8) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面一部漆付着 (残) 4/8	白色粒子・砂粒多・砂礫少 ・雲母微 良 5YR4/8 赤褐	床上 +10cm No.16 + カマド
7 土師器 壺	口 12.8 高 6.5	(内) 口～体上半ヨコナデ・底部近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ? 胴部外面摩滅 (残) 4/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 10YR3/1 黒	床上 +5cm No.14

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
8 土師器 壺	口 11.2 高 6.0	(内) 口～体上半ヨコナデ・底部近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ体粗いヘラケズリ・ヘラナデ 底部木葉痕 (残) 7/8	砂礫多・砂粒・白色粒子 やや多・雲母微 良 7.5Y3/1 黒褐	床上 +5cm No.10
9 土師器 甕	口 (22.4) 高 (18.0)	内外面とも口ヨコナデ胴丁寧なナデ 胴部外面に一部ミガキ 外面摩滅 (残) 2/8	砂粒多・白色粒子・雲母 やや多・砂礫やや少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.17
10 礫	長 14.6 幅 6.2 厚 4.2 重 477.6	断面三角状 表面は自然の欠け面	2.5Y6/6 明黄褐	床直 No.8
11 礫	長 13.4 幅 6.2 厚 4.5 重 531.97	断面三角状 裏面に一部被熱による赤化 鑄付着	2.5Y6/2 灰黄	床上 +15cm No.15
12 礫	長 12.1 幅 5.2 厚 3.9 重 375.8	上半に敲打痕あり	5Y6/1 灰 安山岩	P5 内 No.6
13 礫	長 11.4 幅 5.7 厚 4.7 重 459.2	断面三角状で底面は平坦 側面一部赤化	2.5Y5/6 黄褐	床直 No.9



第109図 SI-41 竪穴住居跡



第110図 SI-41 出土遺物

第43表 SI-41 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 鉢	口 17.2/17.6 高 10.8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部大きく歪む 口縁部下端に輪積痕 (残) 6/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土
2 土師器 甕	口 (19.0) 高 (7.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (工具二種類) (外) 口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデ+ヘラケズリ 全体的に銷付着 口縁部やや歪む (残) 1/8	砂粒多・砂礫やや多 不明 10YR5/8 黄褐	覆土
3 鉄製品 刀子?	長 2.1 幅 1.4 厚 3.3 重 1.41	刀子刃部の破片と考えられる小片。断面上側は平坦で、下側は薄くなる。銷ぶくれが著 しい。	覆土	

SI-42a (第111・112図)

規模・形状 東西4.7m、南北4.6mだが、北壁が3.7mと短くなっている。東西の壁も中央が膨らんでいるためプランが歪んでいる。主軸方向はN-14°-Eである。

壁・壁溝 確認面から約10cmの深さで、なだらかに立ち上がる。壁溝はカマド部分を除き全周するが、東壁では壁溝が10~15cm程度壁から内側に作られている。

床面・貼床 ロームブロックを多量に含む暗褐色土により貼床を施している。床面上では、カマド前から住居中央にかけて焼土を含む粘土(6層)が薄く堆積していた。

掘方 SI-42bの掘方と共に、ほぼ平坦である。

柱穴 4本主柱。いずれも円状の掘り方で、P3のみ柱痕が確認された。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P5)。南北に長い楕円形を呈し、浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。袖は地山を掘り残し、その上に粘土を貼っていたものと考えられる。奥壁にも粘土が貼り付けられていた。煙道はカマド底面よりも一段高くなっている。内部には、粘土、焼土や炭、灰が多量に堆積していた(6・9層)。煙道にも焼土・炭化物が多量に堆積している(7層)。

貯蔵穴 北東隅に1基確認された。東西に長い長方形を呈する。内部には焼土とロームブロックの混ざった暗褐色土が堆積していた。

遺物 出土遺物は少なく、図化したものはいずれも覆土中から出土している。

SI-42b (第113図)

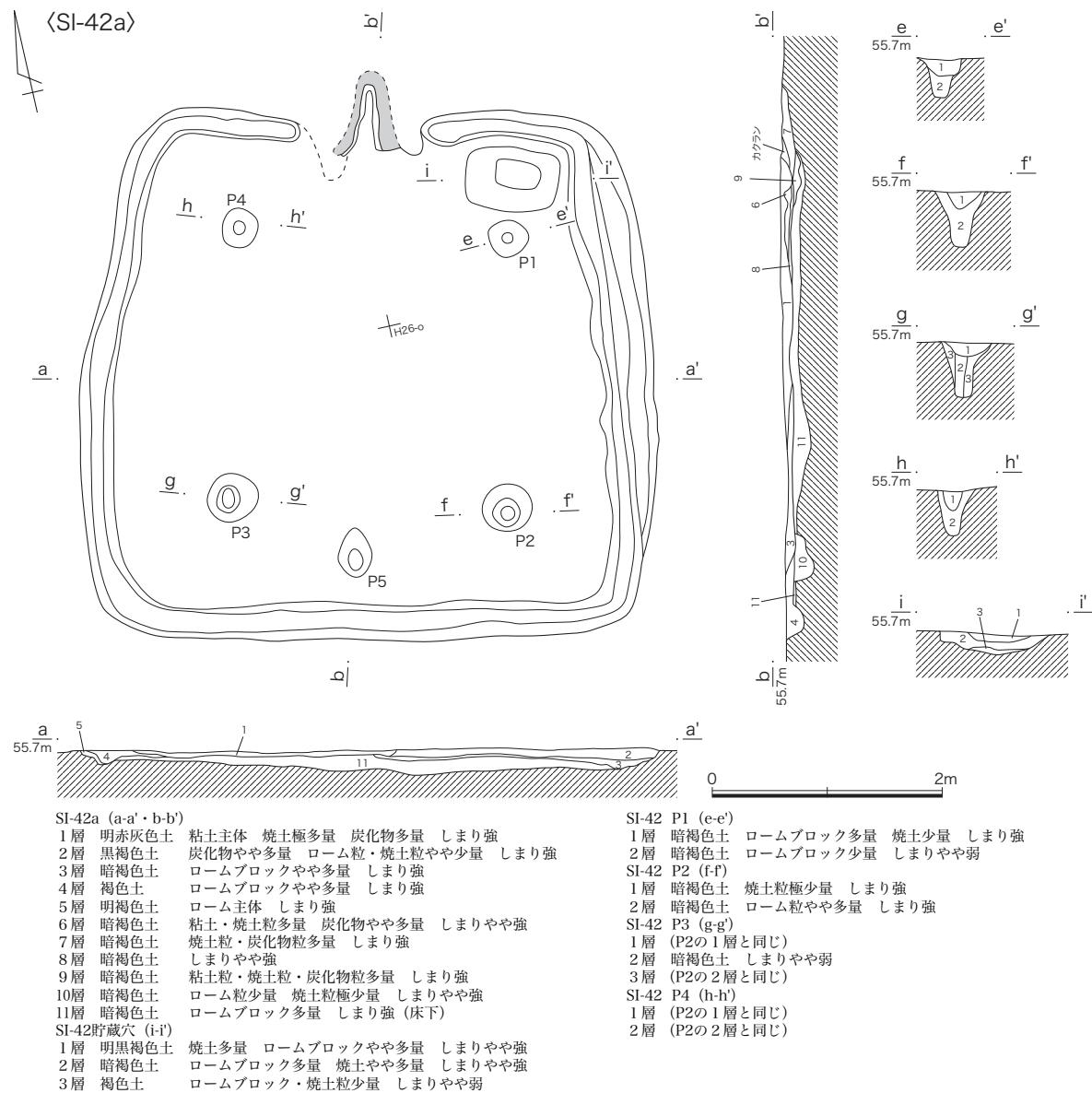
規模・形状 壁溝と柱穴のみ残存しているため、規模・形状は不明である。主軸方向はN-12°-Eで、SI-42aに比べてわずかに西に振れている。

覆土 ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。

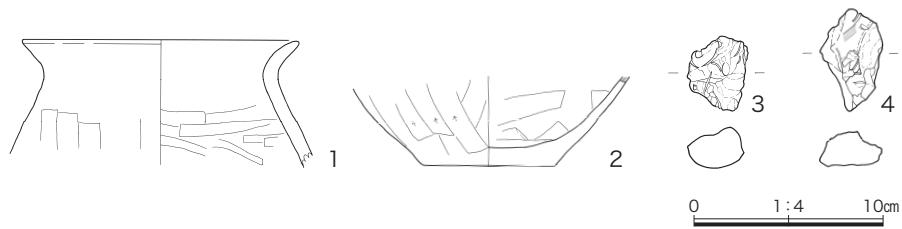
壁・壁溝 壁は残っていないが、南壁はSI-42aの壁よりも約30cm内側に周溝がめぐっていることから、SI-42aよりも内側にあったと考えられる。東壁は、SI-42aとほぼ同じ位置で周溝がめぐっているが、SI-42aの周溝も壁から離れてめぐっているため、壁の位置ははつきりとしない。しかし、柱穴がSI-42aの柱穴よりもいずれも内側にあることから、東壁はSI-42aよりも内側にあったと考えられる。

床面・掘方 SI-42aと同じレベルと考えられる。

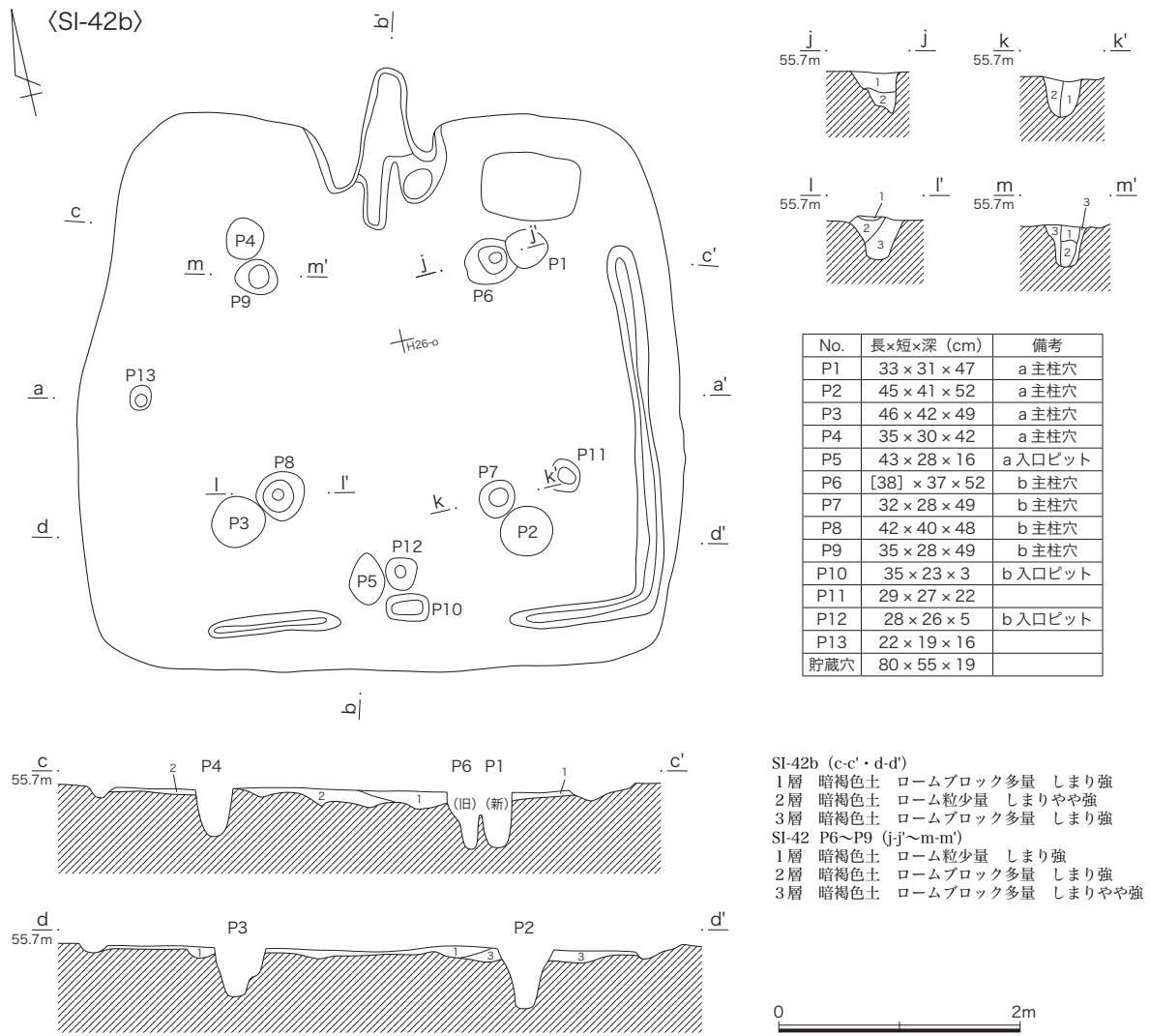
柱穴 4本主柱。SI-42aの柱穴よりも中心に向かって20cmほど内側に作られている。いずれも円状の掘り方で、P7とP9には柱痕と見られる暗褐色土が堆積していた。また、上面はいずれもSI-42aの貼床によつて覆われていた。



第 111 図 SI-42 竪穴住居跡 (1)



第 112 図 SI-42 出土遺物



第113図 SI-42 竪穴住居跡 (2)

第44表 SI-42 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (14.4) 高 (6.6)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂粒多・砂礫少・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	覆土
2 土師器 甕	底 7.0 高 4.7	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ 外面一部煤状の付着物 (残) 8/8	砂礫多・雲母微 良 5YR5/9 明赤褐	覆土
3 焼成 粘土塊	長 3.9 幅 3.0 厚 2.0 重 16.22	塊状 実測図表面は弱いナデ、ヘラ状工具によるキズ 裏面は弱いナデ、草本植物の痕跡あり	赤色融解粒多・白色粒子微 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土
4 焼成 粘土塊	長 5.6 幅 3.3 厚 1.8 重 16.33	塊状 実測図表面は弱いナデ、摩滅強 裏面は接合部がはがれた状態 タール状の付着物あり	赤色融解粒多・白色粒子微 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	P5

入り口ピット 南壁中央寄りに2基確認された。北側のP12は円形を呈し、南側のP10は東西に長い楕円形を呈する。入り口ピット付近には壁溝がない。

火処 SI-42aの燃焼部で地山が袖状に掘り残されている部分が確認されていることから、SI-42aよりも内側にあったと考えられるが、定かではない。

貯蔵穴 SI-42aと共に通またはなかつたものと考えられる。

遺物 SI-42bに伴う遺物は出土しなかつた。

SI-44 (第114～117図・図版十七・四九)

位置 K24グリッドに位置する。

重複関係 住居東側でSI-10、覆土中でSI-50竪穴住居跡と重複する。いずれも、SI-44竪穴住居跡より新しい。また、中央をSD-140に切られている。

規模・形状 東西5.35m、南北5.0mで東西にわずかに長い方形を呈する。主軸方向はN-20°-Eである。

覆土 1層（上層）はロームブロックを多量に含む褐色土、下層（2層・3層）はローム粒を多量に含む暗褐色土である。

壁・壁溝 確認面から約30cmの深さで、ほぼ直に立ち上がる。平面プランでは、各隅はやや丸みをおびている。壁溝は全周しており、覆土と同じ土層で埋没している。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施され、非常に堅くしまっている。

掘方 西側隅から西壁全体に、細長い土坑状の落ち込みが確認された。また、住居南東隅にロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積する部分が確認されたが、堆積範囲が住居外まで広がること、形状が不整形で深いことから、古い倒木痕であると考えた。

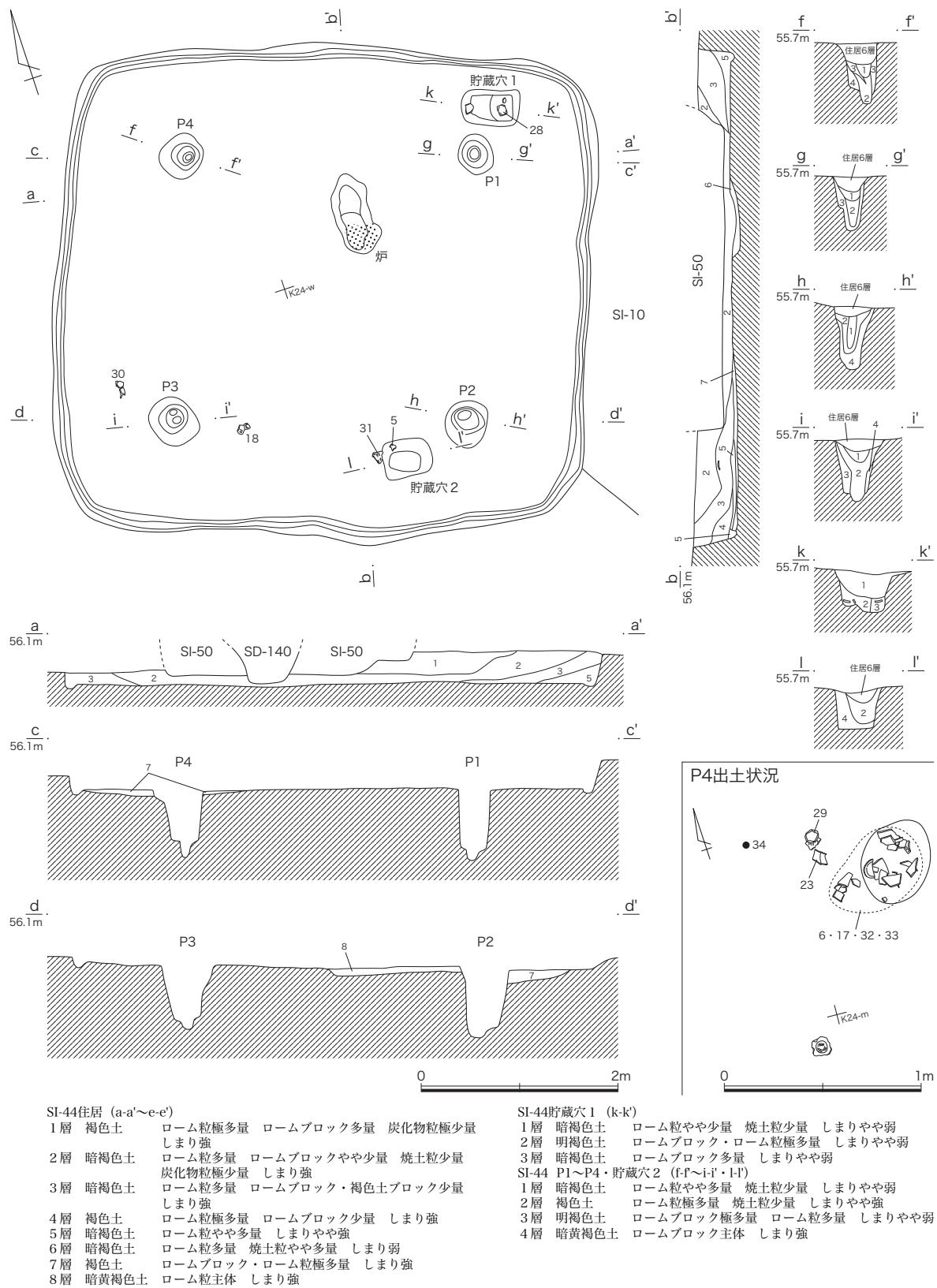
柱穴 4本主柱。いずれも上面・底面共に方形に近い掘り方で、底面には柱の当たりと考えられる浅い凹みがある。全ての柱穴で柱痕が確認された。柱痕の周りに堆積していた土層（3層）はほぼ純粋なローム土だが、地山に比べて著しくしまりが弱いことから、柱周辺の埋め土と考えた。他にも、カマドを構築しない住居では、同様に純粋なローム土で柱を埋めている状況が認められた（SI-1017など）。柱穴の上面には覆土下層（6層）が落ち込んでいることから、住居覆土の堆積が開始した段階で、柱穴には柱が残っていなかつたか、床面より下で切り取られていたと考えられる。

間仕切り溝 掘り方調査中に、南壁中央から住居中心に向かってのびる溝状の掘り込みを確認した。貼床と同じ土層で埋まっていることから、古い間仕切り溝と考えられる。深さは約5cmである。

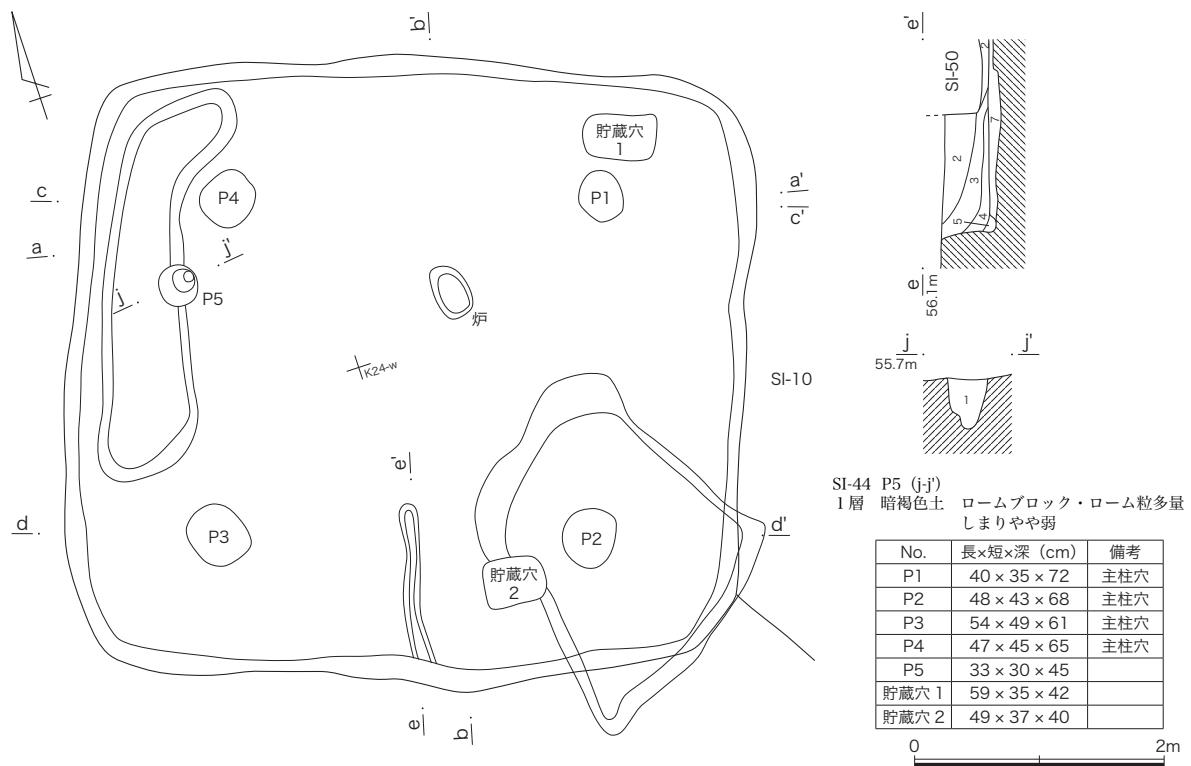
火処 住居中央に炉を構築している。南北に長い楕円状を呈し、南側がよく焼けていた。深さは約5cmと浅い。

貯蔵穴 住居北東隅と南東隅で計2基確認された。いずれも方形の掘り方を呈する。貯蔵穴1の覆土は暗褐色土を主体としており、内部からは土師器甕の破片が出土している（第117図28）。貯蔵穴2は、ピット状の土層の脇に、柱穴同様に純粋なローム土が堆積している。また、上面は住居下層（6層）が堆積していることから、貯蔵穴2は古い柱穴の可能性も考えられる。

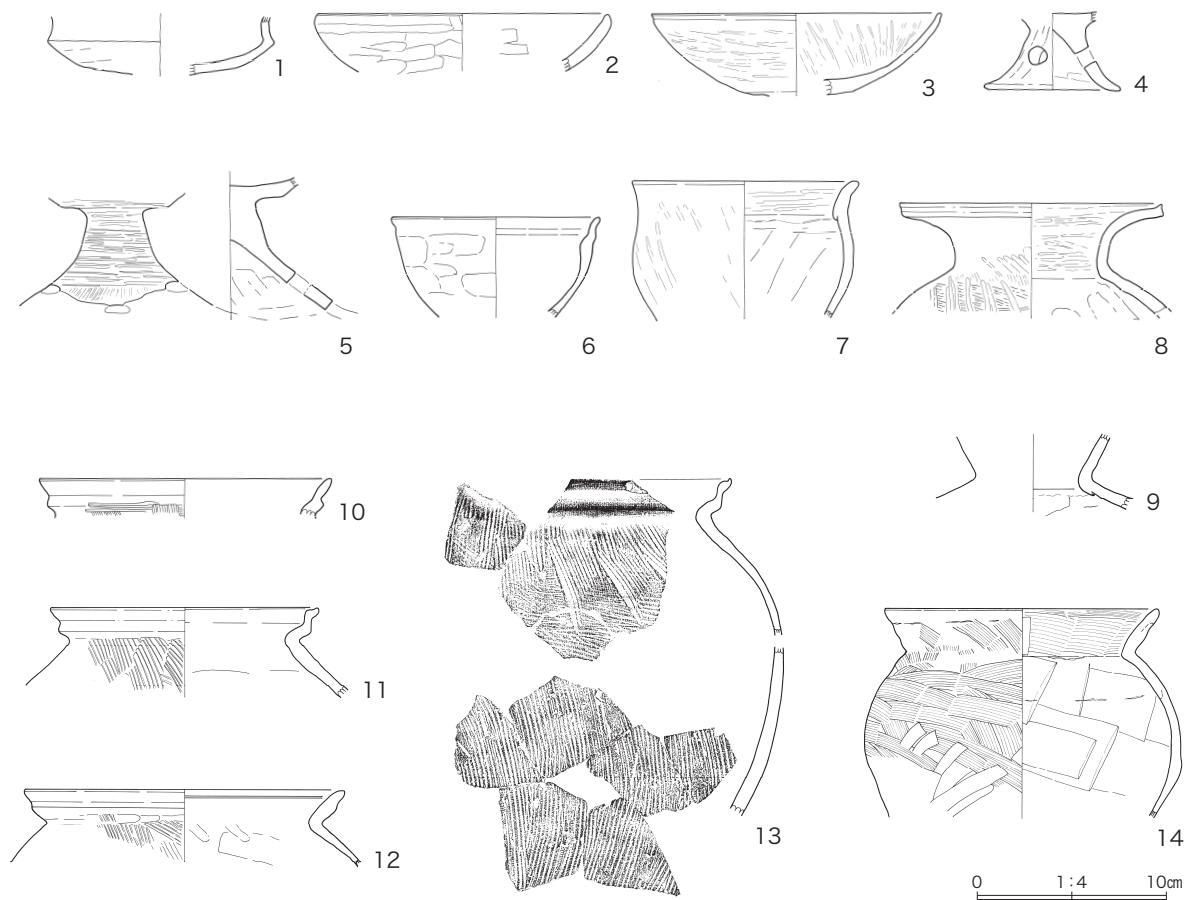
遺物 住居覆土内から床面上まで、大量の土師器破片が出土しているが、復元できるものは多くない。P1からは第117図18・21・24の土師器甕が出土している。また、P4の周辺及び上面からは多数の破片が出土しており、図化できたものは第116図6の土師器塊、第117図17・23・29・32の土師器甕、33・34の土師器壠がある。



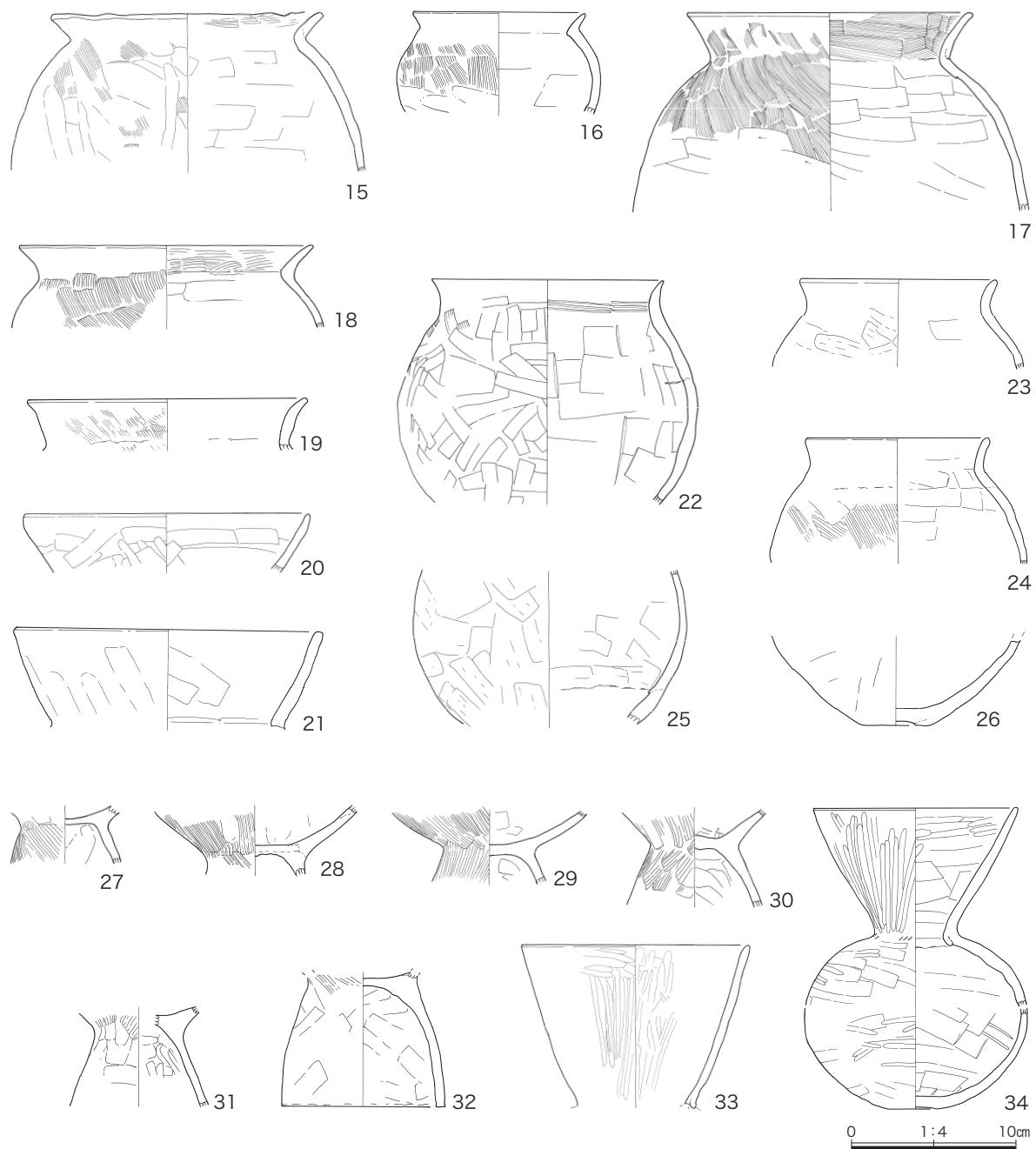
第114図 SI-32 豊穴住居跡 (1)



第115図 SI-44 竪穴住居跡（2）



第116図 SI-44 出土遺物（1）



第117図 SI-44出土遺物（2）

第45表 SI-44 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	大 (11.9) 高 (3.2)	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラナデ 内外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	覆土 d
2 土師器 壺	口 (15.4) 高 (3.0)	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ 内外面漆仕上げ (残) 2/8	砂粒少 良 7.5YR6/4 にぶい橙	覆土 d
3 土師器 高壺	壺部口 (15.2) 高 (4.4)	(壺部内) ナデ→斜め方向ミガキ (壺部外) ナデ→横方向ミガキ 口縁部つまみ上げ (残) 1/8	白色粒子少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 c + d
4 土師器 高壺	脚部下 端 (7.2) 高 (4.0)	(壺部内) ミガキ (脚部内・外) ナデ 脚孔 3 単位 外面から穿孔 (残) 脚部 4/8	砂粒少 良 7.5YR6/4 にぶい橙	覆土 a
5 土師器 高壺	高 (7.7)	(壺部内) ミガキ (壺部外) 横方向ミガキ (脚部内) ナデ (脚部外) 上半横方向ミガキ下半縦方向ミガキ 脚孔 3 単位×2段で互い違いに配列 (残) 脚部上半 5/8	砂粒少 良 10YR6/3 にぶい黄橙	床直 No.10 + 覆土 c
6 土師器 壺	口 (11.0) 高 (5.3)	(内) ロヨコナデ体ヘラナデ (外) ロヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部有段 (残) 1/8	砂粒少 良 10YR7/4 にぶい黄橙	P4 上面 No.1
7 土師器 甕	口 (12.0) 高 (7.3)	(内) ロヨコナデ→横方向ミガキ・胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ→全体にミガキ (残) 口 7/8	砂粒少 良 10YR6/3 にぶい黄橙	貯蔵穴 + 覆土 d + SD-140 一括
8 土師器 壺	口 (13.8) 高 (5.8)	(内) 口～頸横方向ミガキ胴ヘラナデ・指ナデ (外) ロヨコナデ頸縦方向のナデ→斜め方向ミガキ胴ハケメ →まばらな縦方向ミガキ 口縁部つまみ上げ (残) 1/8	砂粒少 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土 a + b + 貯蔵穴
9 土師器 壺	高 (4.0)	内外面ともナデ (残) 1/8	砂粒少 良 10YR3/2 黒褐	覆土 d
10 土師器 甕	口 (15.4) 高 (2.1)	(内) ロヨコナデ (外) ロヨコナデ、段の下横 線文状の施文・頸ハケメ 口縁部 S 字状 (残) 1/8	砂礫少 良 7.5YR7/4 にぶい橙	覆土 d
11 土師器 甕	口 (14.0) 高 (4.6)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ→ハケメ 口縁部 S 字状 器壁厚い (残) 2/8	砂粒少 良 7.5YR5/4 にぶい褐	覆土 d
12 土師器 甕	口 (16.8) 高 (3.8)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ頸ヘラケズリ胴ハケメ 口縁部 S 字 状 (内面の段は不明瞭) 胴部器壁薄い (残) 1/8	砂粒少 良 10YR8/3 浅黄橙	覆土 c
13 土師器 甕	破片	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ハケメ	砂礫多 良 7.5YR4/3 褐	覆土 a+b+c
14 土師器 甕	口 (14.0) 大 (15.0) 高 (11.0)	(内) ロヨコナデ→横方向ハケメ胴ヘラナデつけ (外) ロヨコナデ+斜め方向ハケメ胴ハケメ+下半ヘラナデ 口縁部端わずかに肥厚、輪積痕残る (残) 6/8	砂粒・白色粒子多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	覆土 a + b + 貯蔵穴
15 土師器 甕	口 (16.6) 高 9.5	(内) 口ハケメ胴ヘラナデ (外) 口粗いナデ胴ハケメ 口縁部歪む (残) 2/8	砂粒多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	覆土 a + b + 貯蔵穴
16 土師器 甕	口 (10.4) 高 (6.2)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) 胴部上半ハケメ→ロヨコナデ・胴部下半ヘラケズリ (残) 2/8	砂粒多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床直 No.8 + 覆土 d
17 土師器 甕	口 (17.2) 高 (12.5)	(内) 口ハケメ胴ヘラナデ (外) 口ハケメ→ロヨコナデ胴ハケメ、下半ヘラナデ? 外面煤状の付着物 ハケメ弱い (残) 2/8	砂粒や多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	P4 上面 No.1 + 覆 土 a + 北東 柱穴上面

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
18 土師器 甕	口 (17.8) 高 (5.0)	(内) 口ヨコナデ→ハケメ・胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ→胴ハケメ (残) 1/8	砂粒多 良 7.5YR5/3 にぶい褐	北東柱穴 (P1) 上面
19 土師器 甕	口 (16.8) 高 (3.1)	(内) ヨコナデ (外) ハケメ→口ヨコナデ (残) 2/8	砂粒少 良 10YR4/1 褐灰	覆土 c
20 土師器 甕	口 (17.2) 高 (3.6)	(内) 口ヨコナデ→ヘラケズリ (外) まばらなヘラナデ→ヨコナデ 外面の調整粗い 煤状の付着物 (残) 2/8	砂粒多 やや良 10YR3/2 黒褐	覆土 a
21 土師器 甕	口 (18.6) 高 (6.0)	内外面ともナデ 欠損部擬口縁状 (残) 2/8	砂粒少 良 7.5YR にぶい褐	覆土 c + d + P1 + P1 下部
22 土師器 甕	口 (14.0) 大 (18.2) 高 (13.6)	(内) 口ヨコナデ+ハケメ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ、一部ハケメ 外面に煤状の付着物 内面一部指頭圧痕 (残) 3/8	砂粒多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	覆土 a + b
23 土師器 甕	口 (11.8) 高 (5.3)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ・ヘラナデ (残) 2/8	砂粒少 良 10YR7/3 にぶい黄橙	床直 No.3
24 土師器 甕	口 (11.0) 高 (7.7)	(内) 口ヨコナデ頸ヘラケズリ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ハケメ 外面煤状の付着物 (残) 1/8	砂礫多 良 10YR6/2 灰黄褐	北東柱穴 (P1) 一括
25 土師器 甕	高 (9.5)	(内) ヘラナデ・ヘラケズリ (外) ヘラケズリ 外面煤状の付着物 (残) 2/8	砂粒多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 a + b + 貯藏 穴+柱穴
26 土師器 甕	底 (4.0) 高 (5.4)	内外面ともヘラナデ 内面煤状の付着物 底部ドーナツ状の粘土貼り付け (残) 2/8	砂粒少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 a + b
27 土師器 台付甕	高 (3.5)	(内) ヘラナデ (外) ハケメ 器壁薄い (残) 脚部 3/8	砂粒少 良 7.5YR6/3 にぶい褐	覆土 d
28 土師器 台付甕	高 (3.8)	(内) ヘラナデ (外) ハケメ 甕部底部は輪積の粘土円板 (残) 脚部 2/8	砂粒多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	貯藏穴 1 No.12
29 土師器 台付甕	高 (4.5)	(内) ヘラナデ (外) ハケメ (残) 脚部 3/8	砂粒多 良 10YR7/3 にぶい黄橙	床直 No.4
30 土師器 台付甕	高 (6.0)	(内) ナデ (外) 丁寧なハケメ (残) 6/8	白色粒子多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床直 No.7
31 土師器 台付甕	高 (6.0)	(内) ナデ (外) 胴ハケメ台部ナデ (残) 6/8	白色粒子多 良 7.5YR7.4 にぶい橙	床直 No.9 + 覆 土 c + d
32 土師器 台付甕	台部端 (9.9) 高 (8.1)	(内) ヘラナデ (外) 甕接合部ハケメ台部ナデ 端部平坦 (残) 脚部 2/8	砂粒多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	P4 上面 No.1 + 覆 土 a + b
33 土師器 壇	口 (13.8) 高 (9.8)	内外面とも密なミガキ 欠損部擬口縁状 (残) 口 1/8	砂粒少 良 5YR4/4 にぶい赤褐	P4 上面 No.1 + 覆土 a
34 土師器 壇	口 (12.6) 大 13.4 底 2.9 高 (18.3)	(内) 口ヘラナデ→横方向ミガキ胴弱いナデ (外) 口縦方向ミガキ胴弱いヘラケズリ→丁寧な横方向ミガキ 頸部ヘラ状工具の当たり (キザミ) 残る (残) 4/8	砂粒多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直 No.6 + 覆 土 a + c

SI-45 (第118～120図・図版十七・五〇)

位置 K26 グリッドに位置する。

重複関係 SI-11 竪穴住居跡・SI-46 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-11・SI-46 (旧) → SI-45 (新) である。

規模・形状 東西4.8m、南北4.8mの正方形を呈するが、西壁が内側に反っているため歪んでいる。主軸方向は N-4°-E である。

覆土 上層(1・2層)は暗褐色土を主体とする。2層は住居中央部分に厚く堆積しており、ローム粒やロームブロック、炭化物、焼土が多く含まれている。下層(3層)はロームブロックを多量に含む褐色土で、壁際から住居中央に向かって三角状に堆積している。

壁・壁溝 確認面から深さ約30cmで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分を除き全周する。

床面・貼床 ロームブロックをやや多く含む暗褐色土で貼床を施している。貼床は薄く、掘り方ではない。

柱穴 4本主柱。いずれも楕円状の掘り方を呈し、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積している。柱痕は認められなかった。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P5)。矩形の掘り方を呈し、深さは約20cmである。覆土は内容物をあまり含まない黒褐色土を主体とする。

火廻 北壁中央にカマドを構築する。両袖と奥壁が残存している。袖は床面上に粘土を積み上げて構築している。内部は天井崩落土と考えられる粘土が堆積し(2層)、その下に焼土・炭化物が大量に堆積していた(3層)。焼土・炭化物を含む土層は住居中央に向かって堆積している(6層)。内部はよく焼けており、底面も焼けて硬化している。燃焼面は緩やかに立ち上がるが、煙道の掘り方は急な角度で立ち上がる。

貯蔵穴 掘り方調査中に、住居北西隅で1基確認された。方形に近い楕円状を呈し、深さは5cm程度である。覆土は床下と同じ土層が堆積していた。

遺物 住居南東に集中している。第119図1の須恵器蓋、5・8の土師器甕は床面上から出土している。その他の土器は、床面から5～20cm浮いた状態で確認された。南西の壁溝脇からは、砥石が出土している(第119図12)。他にも、覆土中から2点の砥石が出土している(第119図13・14)。また、床面上から礫が多く出土している(第119図15・第120図16～20)。

No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考
P1	36×33×45	主柱穴	P4	32×30×42	主柱穴
P2	53×37×26	主柱穴	P5	25×23×19	入り口ピット
P3	35×29×35	主柱穴	貯蔵穴	73×55×6	

SI-46 (第121・122図・図版十七・五〇)

位置 K25 グリッドに位置する。

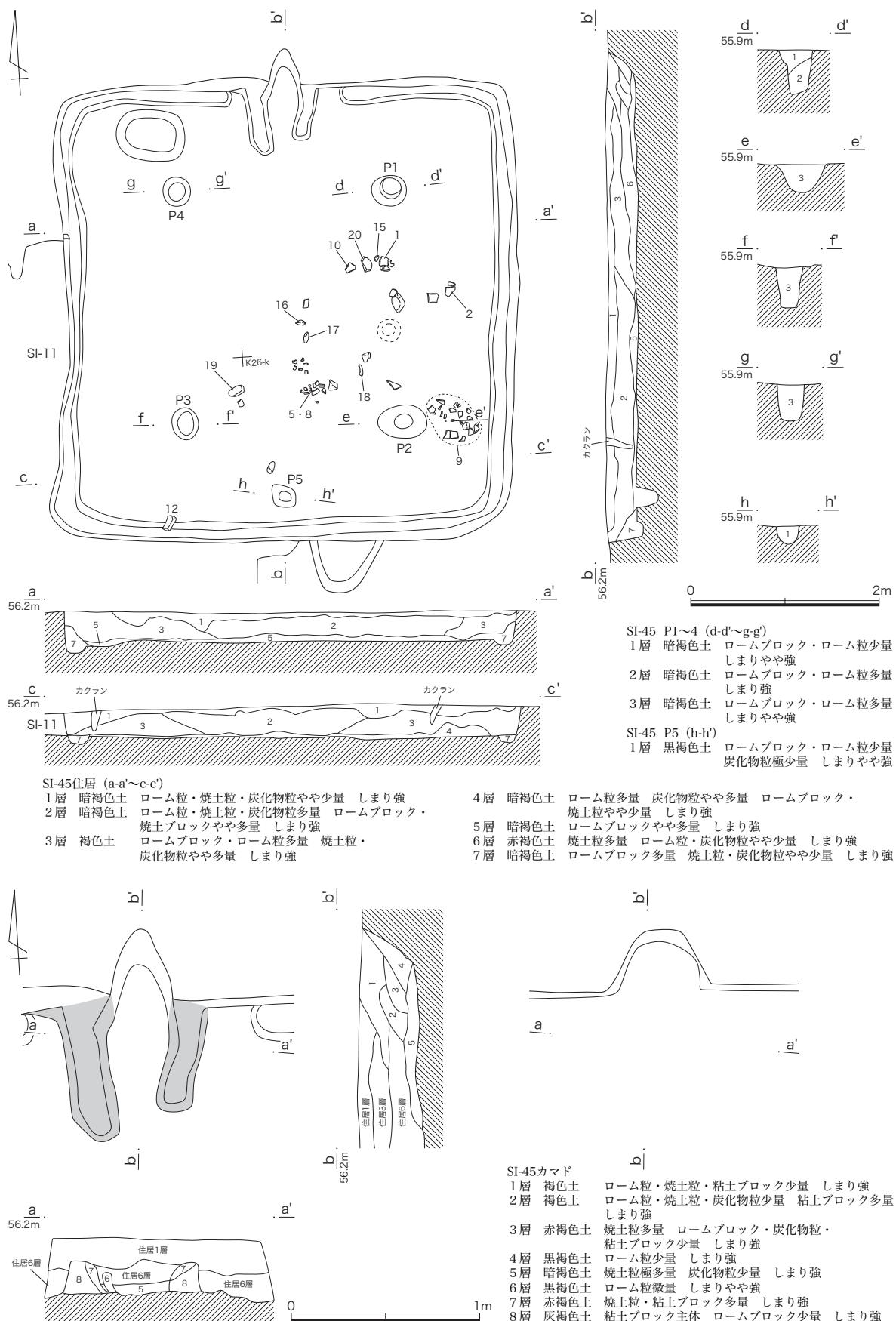
重複関係 住居南西隅で SI-45 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-46 (旧) → SI-45 (新) である。

規模・形状 東西4.3m、南北4.2mの方形を呈するが、北東隅がやや飛び出している。主軸方向は N-20°-W である。

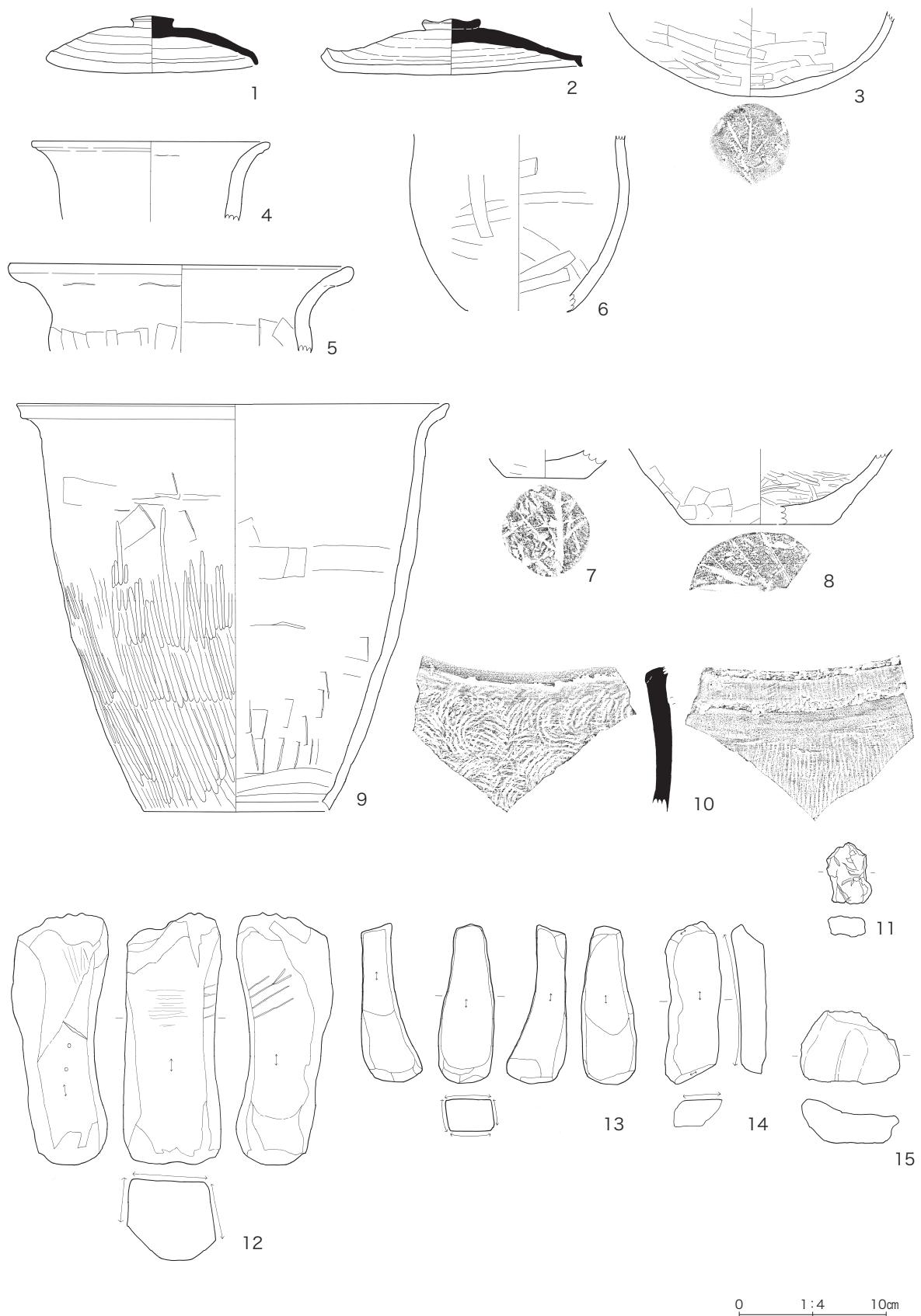
覆土 上層(1層)は黒褐色土、下層(2層)はロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。下層がかなり厚く堆積している。

壁・壁溝 確認面から30cmの深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は、SI-45 竪穴住居跡により削平されている南壁西側を除き全周する。

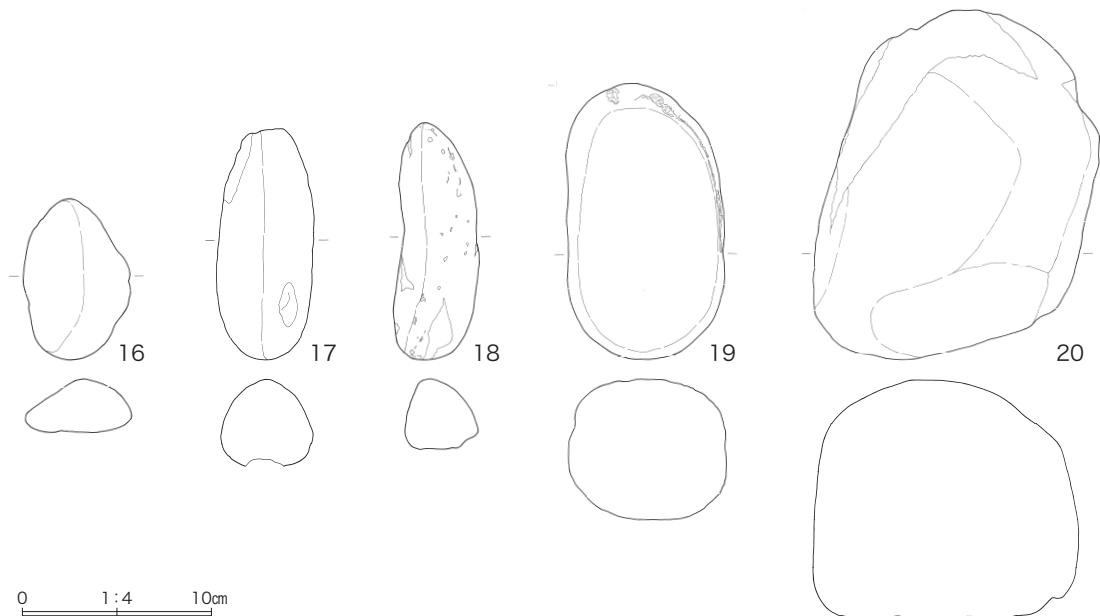
第3章 発見された遺構と遺物



第118図 SI-45 積穴住居跡



第119図 SI-45 出土遺物 (1)



第120図 SI-45出土遺物（2）

第46表 SI-45遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部 14.5 高 3.8 撮部径 2.8	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ ボタン状の撮み 楕円状に大きく歪む（残）7/8 産地不明	砂粒・白色粒子多・雲母微 良 5Y5/1 灰	床直 No.1 + 覆土 a
2 須恵器 蓋	端部 (17.6) 高 3.5 撮部径 3.9	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ ボタン状の撮み 大きく歪む（残）2/8 益子産	白色粒子極多・砂礫多 良 10Y5/1 灰	床上 +20cm No.2 + 覆土 c
3 土師器 鉢？	底 4.2 高 6.1	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 底部内面が凹む 底部木葉痕が一部残る（残）2/8	砂礫多・白色粒子・雲母少 良 2.5YR4/6 赤褐	覆土 b + カマド一括
4 土師器 甕	口 (16.0) 高 5.3	内外面ともヨコナデ (残) 1/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 b
5 土師器 甕	口 (33.2) 高 (5.9)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部に輪積痕（残）口 6/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.7 + 覆土 d
6 土師器 甕	高 (11.9)	(内) 丁寧なナデ (外) ヘラケズリ? 外面あばた状の剥落（残）4/8	砂礫極多・白色粒子や多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +15cm No.3 + 覆土 c
7 土師器 甕	底 5.4 高 1.9	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕（残）6/8	砂粒やや多・砂礫少 良 7.5YR5/8 明褐	覆土 c + カマド一括
8 土師器 甕	底 (9.6) 高 (5.1)	(内) ヘラケズリ→多方向のミガキ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕（残）3/8	砂粒多・砂礫少 良 7.5YR4/6 褐	床直 No.7
9 土師器 甕	口 29.4 高 27.6	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ底部近く強いナデ (外) 口ヨコナデ胴上半丁寧なナデ下半縦方向ミガキ 底部輪積部分で打ち欠き後研磨（制作時には底部があったものと考えられる）（残）6/8	砂礫極多・白色粒子・雲 母多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +25cm No.9 + 覆土 c

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
10 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状當て具痕 (外) 繩目タタキ 口縁部近くに突帶がはがれた痕跡有り	砂礫・白色粒子多 良 N5/灰	床直 No.4
11 焼成 粘土塊	長 4.15 幅 2.6 厚 1.6 重 14.2	塊状 実測図表面に草本植物の痕跡残る 裏面、側面ははちぎり取った状態	赤色融解粒多・砂礫少 二次被熱 5YR6/6 橙	カマド一括
12 石製品 砥石	長 17.1 幅 6.6 厚 5.5 重 969.47	側面 3 面使用、裏面は大きく欠損。表面・右側面は研ぎ減 りにより中央が凹む。全面に刃潰し痕が見られる。左側面 に深さ 2mm 程度の盲孔あり。	10Y6/2 オリーブ灰	床直 No.18
13 石製品 砥石	長 10.8 幅 3.7 厚 3.6 重 153.94	側面 4 面を使用。下方は撥形を開く。実測図正面以外は下 端から約 3cm は研ぎ面としては使用せず、その部分には敲 打痕が残る。敲打部分と裏面にはタール状の付着物が残る。	2.5Y7/4 浅黄	覆土 a
14 石製品 砥石	長 11.0 幅 3.3 厚 1.75 重 105.37	実測図表面及び上下端の 3 面使用。両側面及び裏面は欠け ている。表面は研ぎ減りにより湾曲している。	2.5Y6/3 にぶい黄	覆土 c
15 礫	長 5.0 幅 6.6 厚 2.8 重 97.4	溝状の使用痕 全体的に赤化	7.5Y3/3 オリーブ灰	床直 No.10
16 礫	長 8.5 幅 5.6 厚 3.1 重 167.8	断面三角状 全体的に赤化 裏面熱によるハジケ	7.5Y6/1 褐灰	床上 +5cm No.12
17 礫	長 12.1 幅 4.9 厚 4.4 重 412.6	断面三角状 部分的に欠け 使用痕特になし	5Y4/1 灰	床上 +5cm No.13
18 礫	長 12.5 幅 4.6 厚 3.9 重 258.9	三角錐状 使用痕特になし	10Y5/2 オリーブ灰	床上 +10cm No.17
19 礫	長 14.6 幅 8.3 厚 7.6 重 1300.0	楕円状の円礫 側面上半分に敲打痕あり	7.5Y6/1 灰	床上 +5cm No.14
20 礫	長 18.0 幅 13.9 厚 12.5 重 4351.1	頭大の自然礫 全体的に弱い被熱	2.5Y4/2 暗灰黄	床直 No.11

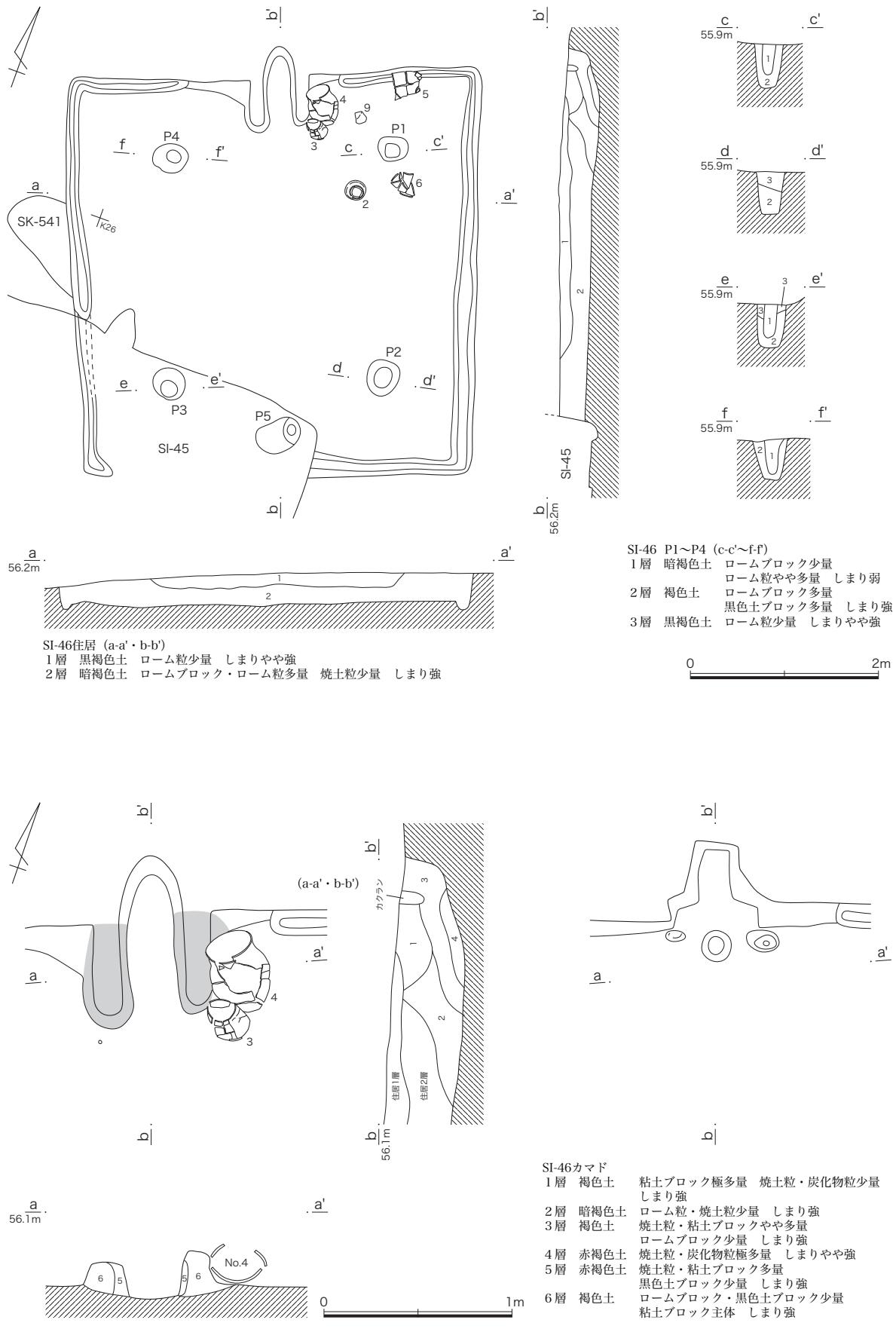
床面・貼床 ロームブロックによる貼床を施している。掘り方はない。

柱穴 4 本主柱。P1 が方形の掘り方、残り 3 本は円形の掘り方を呈する。P2 以外は柱痕状の土層が確認されており、その周りはロームブロックを主体とする褐色土で埋められている。

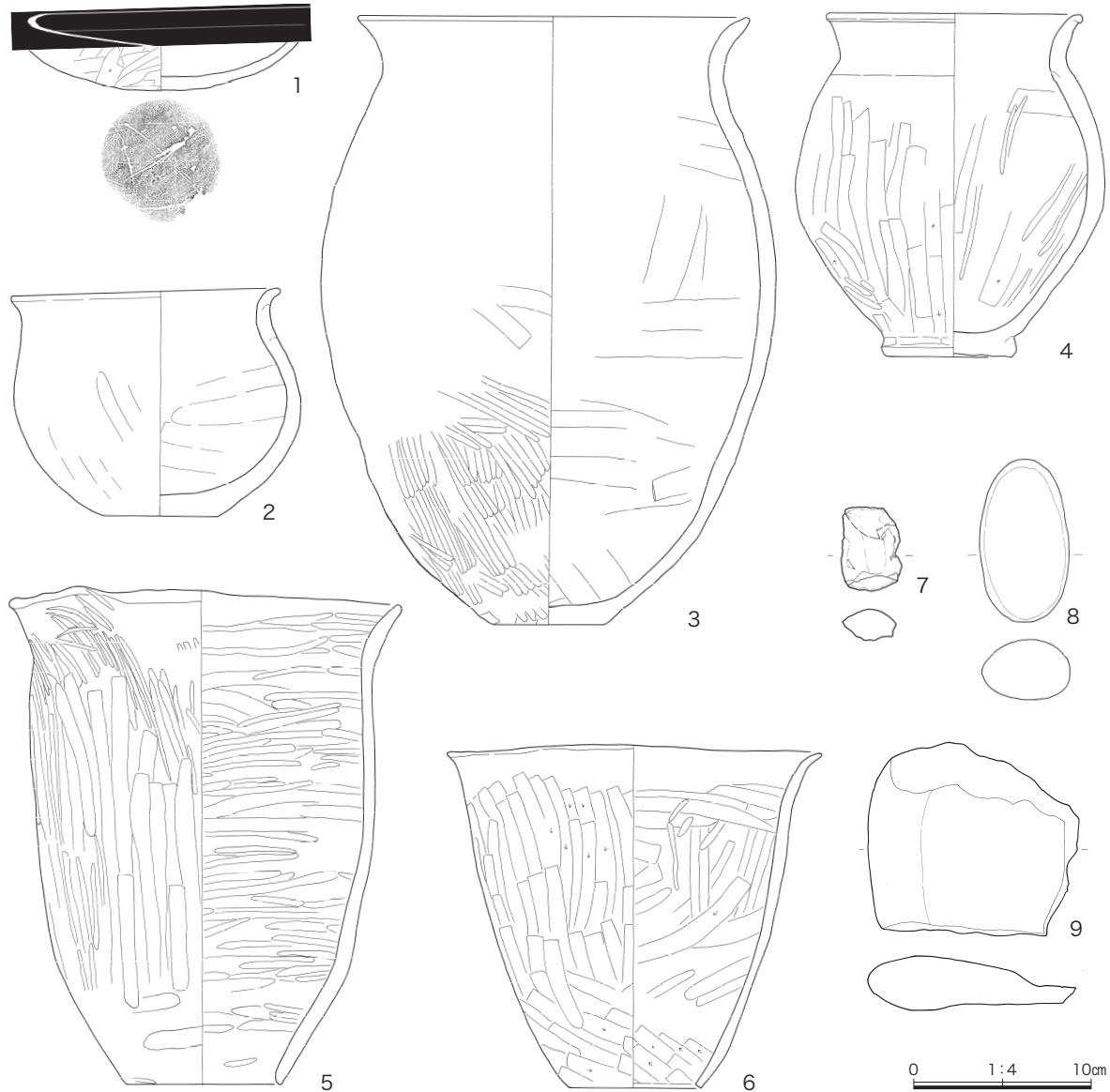
入り口ピット 南壁中央よりに 1 基確認された (P5)。SI-45 竪穴住居跡により上部を削平されている。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。両袖は床面に粘土を積み上げて構築しており、残存状況は良い。右袖外側に、ほぼ完形の土師器甕と甕が残っていた (第 122 図 4・6)。内部には天井崩落土と考えられる粘土 (カマド 3 層) が厚く堆積しており、その下に焼土・炭化物が堆積していた (4 層)。両袖の内側は非常に良く焼けている。底面は奥壁に向かって緩やかに立ち上がるが、奥壁はほぼ直角に立ち上がる。掘り方は凸字状を呈しており、底面中央に浅いピット状の掘り込みが確認された。また、左袖奥より拳大の礫が 1 点出土している。

遺物 カマド右袖外側、及び P1 周辺の床面上から多く出土している。いずれも遺存状況が良好で、ほぼ完形に近い。



No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考
P1	32×25×47	主柱穴	P3	34×33×53	主柱穴	P5	46×33×31	入り口ピット
P2	39×34×51	主柱穴	P4	39×30×42	主柱穴			



第122図 SI-46出土遺物

第47表 SI-46遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口(16.4) 高4.3	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 底面ヘラ記号有り 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多 良 7.5YR4/4 褐	覆土 d
2 土師器 甕	口15.0 底6.4 高17.8	(内) ヨコナデ胴指ナデ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ? 全体的に斜めに歪む 摩滅強 (残) 8/8	白色粒子多・砂礫 やや多・雲母微 やや良 10YR4/1 褐灰	床直 No.5
3 土師器 甕	口22.0 大25.8 底6.4 高34.2	(内) ヨコナデ胴弱いヘラナデ (外) ヨコナデ胴上半丁寧なナデ下半斜め方向ミガキ 胴上半に輪積痕残る (残) 8/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床直 No.1

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
4 土師器 甕	口 14.2 大 17.3 底 7.3 高 19.2 (残) 8/8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ+縦方向ミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 底部下端を面取り 頸部内面に輪積痕 摩滅強	砂礫・白色粒子多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	床直 No.2
5 土師器 甕	口 23.2/21.7 底 8.8 高 27.8	(内) 口ヨコナデ胴上半ミガキ→下半ヘラナデ底部横方向ナ デ (外) 全体的に横方向ミガキ、一部ヘラケズリ 口縁部梢円形に歪む (残) 完存	砂粒少 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.3
6 土師器 甕	口 20.9 底 7.2 高 19.3	(内) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴粗いヘラケズリ→ミガキ底部近くヘラ ケズリ (残) 完存	砂粒・白色粒子少・雲母微 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.4
7 焼成 粘土塊	長 4.7 幅 3.4 厚 1.8 重 24.57	塊状 実測図表面はナデにより平滑化 裏面は接合面からはがれた状態 支脚の破片か?	白色粒子・雲母微 良 5YR6/6 橙	覆土 b
8 礫	長 9.2 幅 5.0 厚 3.2 重 215.5	全体に擦痕 下端被熱による赤化	2.5Y6/4 にぶい黄	カマド袖 No.7
9 礫	長 13.1 幅 12.0 厚 3.0 重 458.0	扁平な石皿状	10YR6/2 灰黄褐	床上 +10cm No.6

SI-47 (第123・124図・図版十八・五〇)

位置・重複関係 L26 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SD-530・SD-137 に切られる。

規模・形状 東西 3.75 m、南北 3.1 m だが、東壁が 2.8 m と短く歪んだ方形を呈する。主軸方向は N – 10° – E である。

覆土 黒褐色土を主体とする。下層（2層）にはロームブロックが多量に含まれている。

壁・壁溝 住居東壁・北壁は黒色土中に掘り込まれている。確認面からの深さは 50cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は北壁西側から西壁にかけて部分的に確認された。

床面・貼床 床面は黒色土中に構築されており、ロームブロックと黒色土ブロックの混じり合った土で貼床が施される。床面は柔らかい。

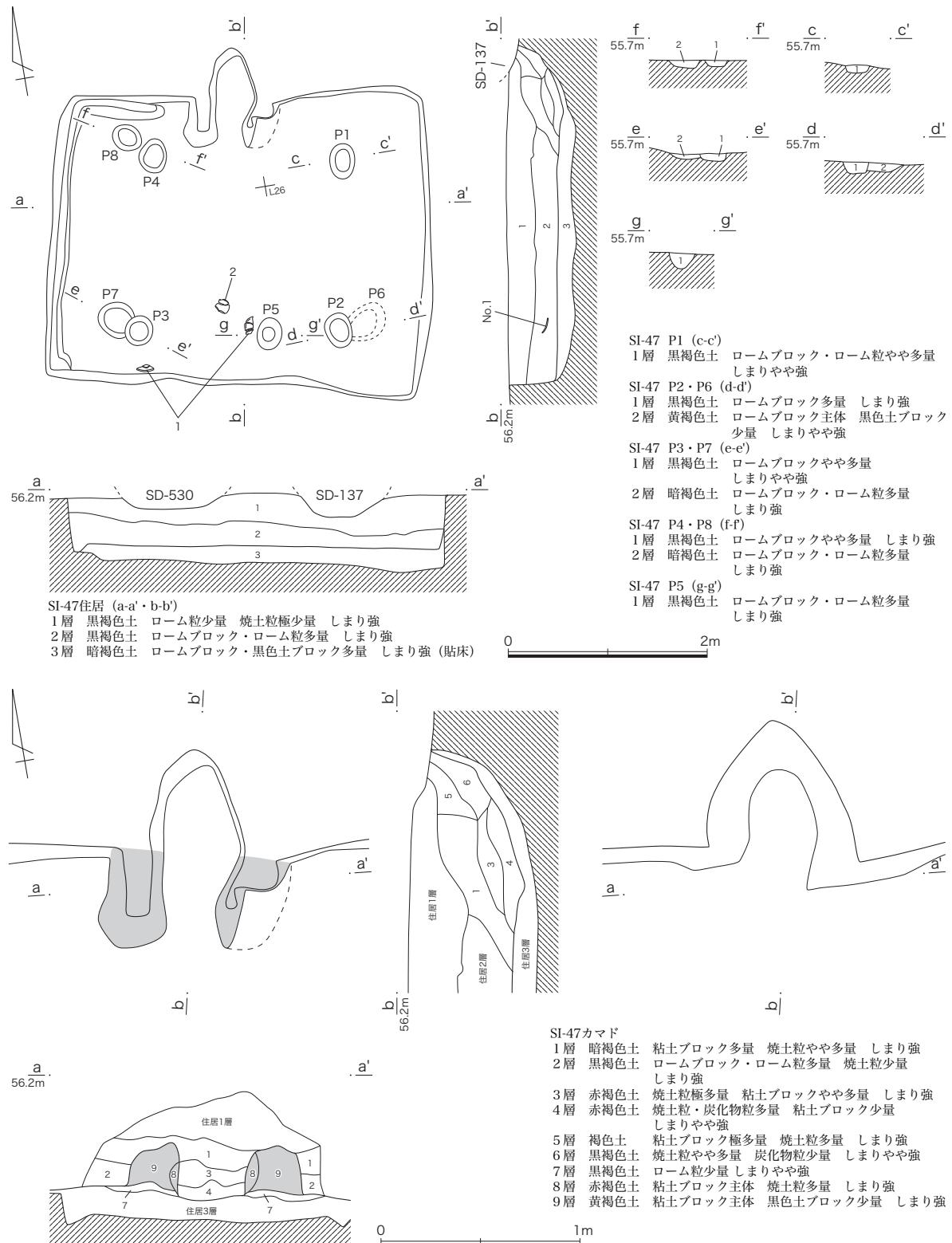
掘方 床面から 15cm の深さで、住居南東隅にのみ土坑状の掘り込みが確認された（P6）。

柱穴 掘り方調査中に 6 本の柱穴（P1 ~ P4・P7・P8）が確認された。床下の堆積土とよく似た土で埋没していたため、床面精査時では確認できなかった。いずれも円形の掘り方を呈するが、非常に浅く、床面から計っても 20cm 程度である。4 本主柱と考えられるが、西側の 2 本（P3・P4）は立て替えと考えられるピットと並んでいる（P7・P8）。

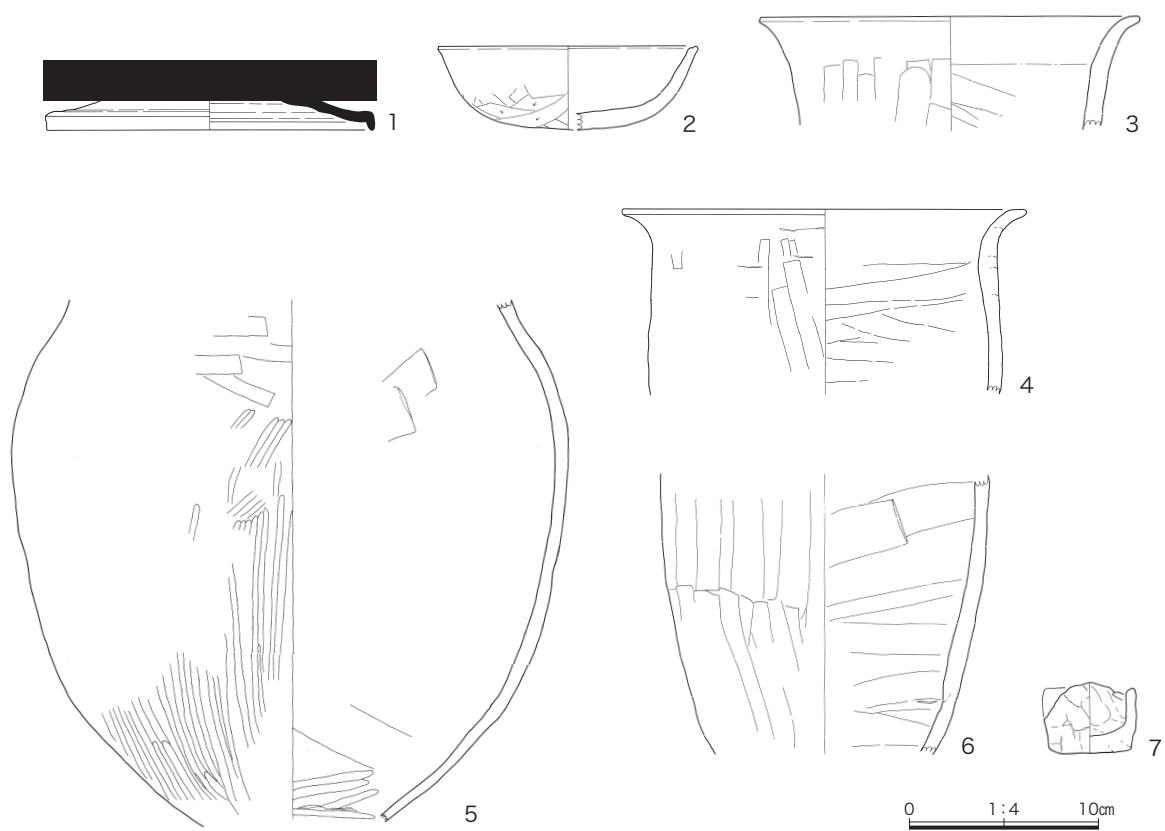
入り口ピット 掘り方調査中に、住居南壁寄りで 1 基確認された（P5）。柱穴に比べやや深い。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、右袖は調査時に誤って掘りすぎてしまっている。袖は床面上に粘土を積み上げて構築しており、袖の下には貼床が施されていた（3・4 層）。内部には粘土がブロック状に堆積しており（1 層・5 層）、その下に焼土・炭化物が大量に堆積していた。袖の内側と底面はよく焼けている。煙道は急な角度で立ち上がる。

遺物 図化した遺物はいずれも覆土中からの出土で、出土量は少ない。



第123図 SI-47 竪穴住居跡



第124図 SI-47出土遺物

第48表 SI-47遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端径 17.1 高 3.4 撮部径 3.4	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 外面ヘラ記号有り 内外面の一部が赤化 ボタン状の撮み 完存 益子産	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR5/1 褐灰	床上 +10cm No.2
2 土師器 壺	口 (13.6) 高 4.4	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 3/8	白色粒子極多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.3
3 土師器 甕	口 (20.0) 高 (6.0)	(内) 口ヨコナデ胴弱いナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR4/3 褐	覆土
4 土師器 甕	口 (21.2) 高 (9.7)	(内) 口ヨコナデ胴強いヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴一部ヘラケズリ・弱いナデ 外面に輪積痕多数 (残) 1/8	砂粒・微細白色粒子やや多 ・砂礫少 やや良 10YR4/1 褐灰	覆土 c No.6と同一 個体か？
5 土師器 甕	高 (28.6)	(内) 丁寧なナデ 底部近く細いナデ (外) 胴上半丁寧なナデ下半縦方向ミガキ 全体的に摩滅 (残) 1/8	砂粒・白色粒子極多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド一括
6 土師器 甕	高 14.8	(内) 強いヘラナデ (外) ヘラケズリ 胴部下位の擬口線上に連続キザミ (残) 1/8	砂粒・微細白色粒子やや多 ・砂礫少 やや良 10YR4/2 褐灰	覆土 c No.4と同一 個体か？
7 土師器 手捏ね 土器	口 (4.9) 底 4.2 高 3.6	手捏ね成形 指頭圧痕、粘土のヒビを多く残す 内面は強い指ナデ (残) 4/8	微細白色粒子多・雲母微 やや良 7.5YR4/1 褐灰	覆土

SI-48 (第125図・図版十八)

位置 J26 グリッドに位置する。

重複関係 SI-11 竪穴住居跡と重複するが、柱穴以外はすべて削平されているため、新旧関係は確定できない。ただし、本住居跡はカマドを構築していなかったと考えられるため、カマドを構築している SI-11 竪穴住居跡より古い時期の住居跡と考えられる。

柱穴 4本主柱。いずれも上面は円状で、覆土は暗褐色土を主体としている。西側の2本については、柱痕状の土層と考えられる堆積状況が確認された。東側の2本については、上面が SI-11 竪穴住居跡の貼床に似る土層で覆われていることから、SI-11 竪穴住居跡よりも本住居跡の方が古いと考えられる。

壁溝 住居跡の東から南東隅にかけて、溝状に暗褐色土が堆積した部分が確認されたが、極浅かつたため図化できなかった。

入り口ピット P2 と P3 の間に、暗褐色土が径 10cm ほどの皿状に堆積しているのが確認されたが、壁溝と同じく極浅かつたため図化できなかった。おそらく、入り口ピットがあったものと考えられる。

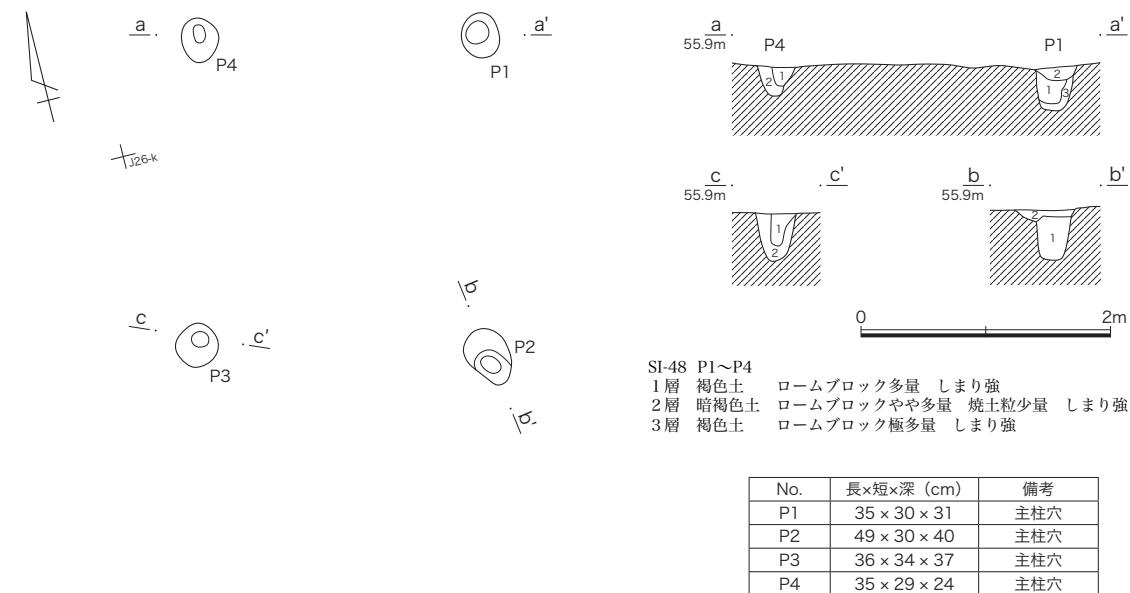
火処 P1 と P4 の間に、焼土を多く含む暗褐色土が楕円状に堆積している炉跡と考えられる部分が確認されたが、入り口ピット同様図化できなかった。遺物は出土しなかった。

SI-49 (第126図・図版十八)

位置 J25 グリッドに位置する。

重複関係 住居北東隅で SI-07 竪穴住居跡と重複する。柱穴と貯蔵穴以外は削平されているため新旧関係は確定できないが、SI-07 竪穴住居跡の調査記録に、重複部分の覆土が他の部分に比べ黒みがかっていたという記載があり、それが SI-49 竪穴住居跡の覆土とすれば、SI-07 (旧) → SI-49 (新) となる。

覆土 南東隅の残存部分にロームブロックとローム粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。しまりは強い。



第125図 SI-48 竪穴住居跡

柱穴 4本主柱。いずれも上面は円状で、北東のP4を除く柱穴で柱痕状の土層が確認された。P4はロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積しており、他は柱痕状の土層の周りを、ロームブロックを多く含む土層で埋めている。

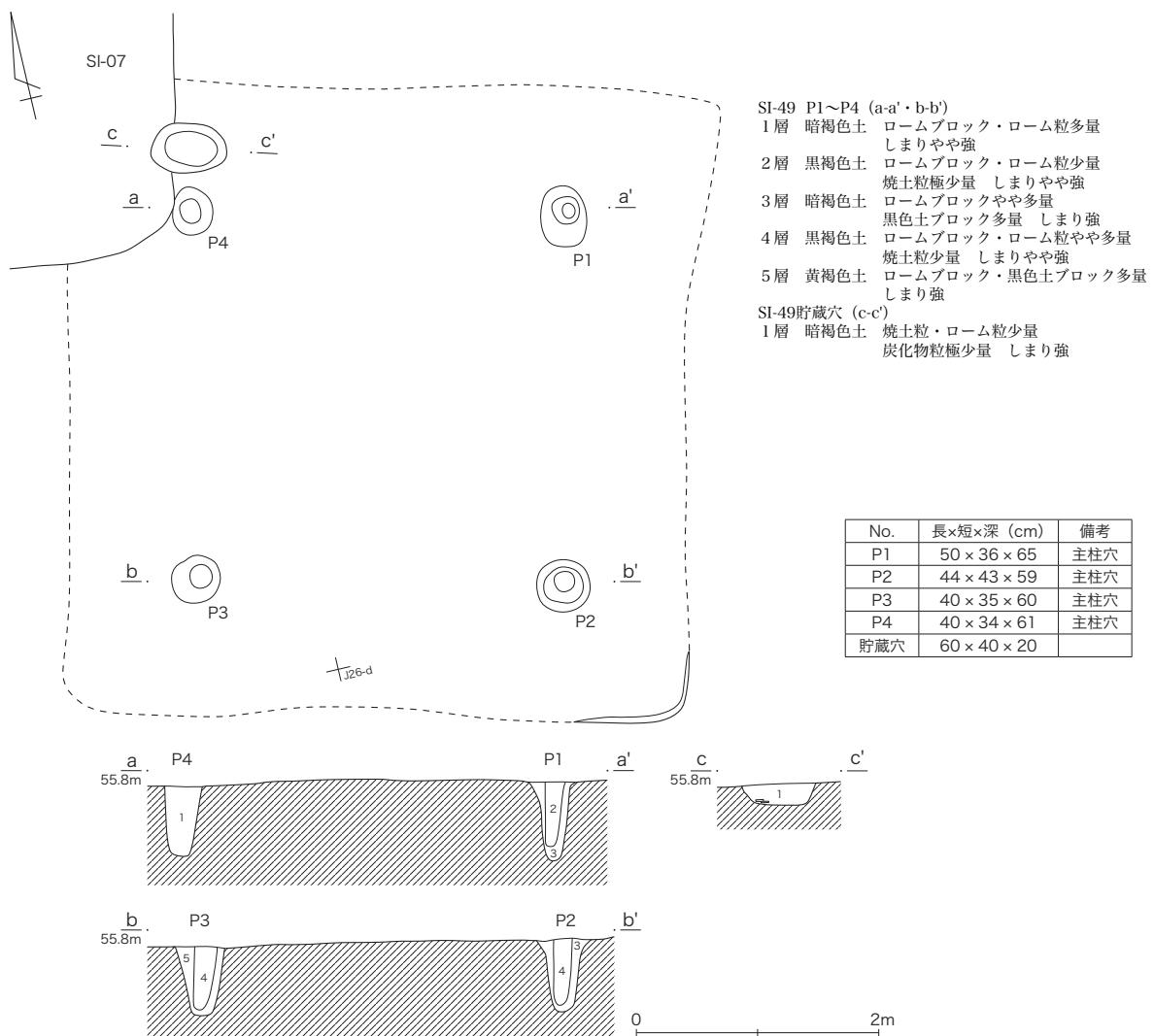
貯蔵穴 住居北西隅で確認された。当初、住居ではない単独の土坑として調査したが、その位置からSI-49の貯蔵穴であると考えた。楕円状の掘り方を呈し、深さは約15cmである。覆土は暗褐色土を主体としている。底面から土師器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

遺物 出土した遺物はいずれも土師器の小片で、実測可能な個体はない。

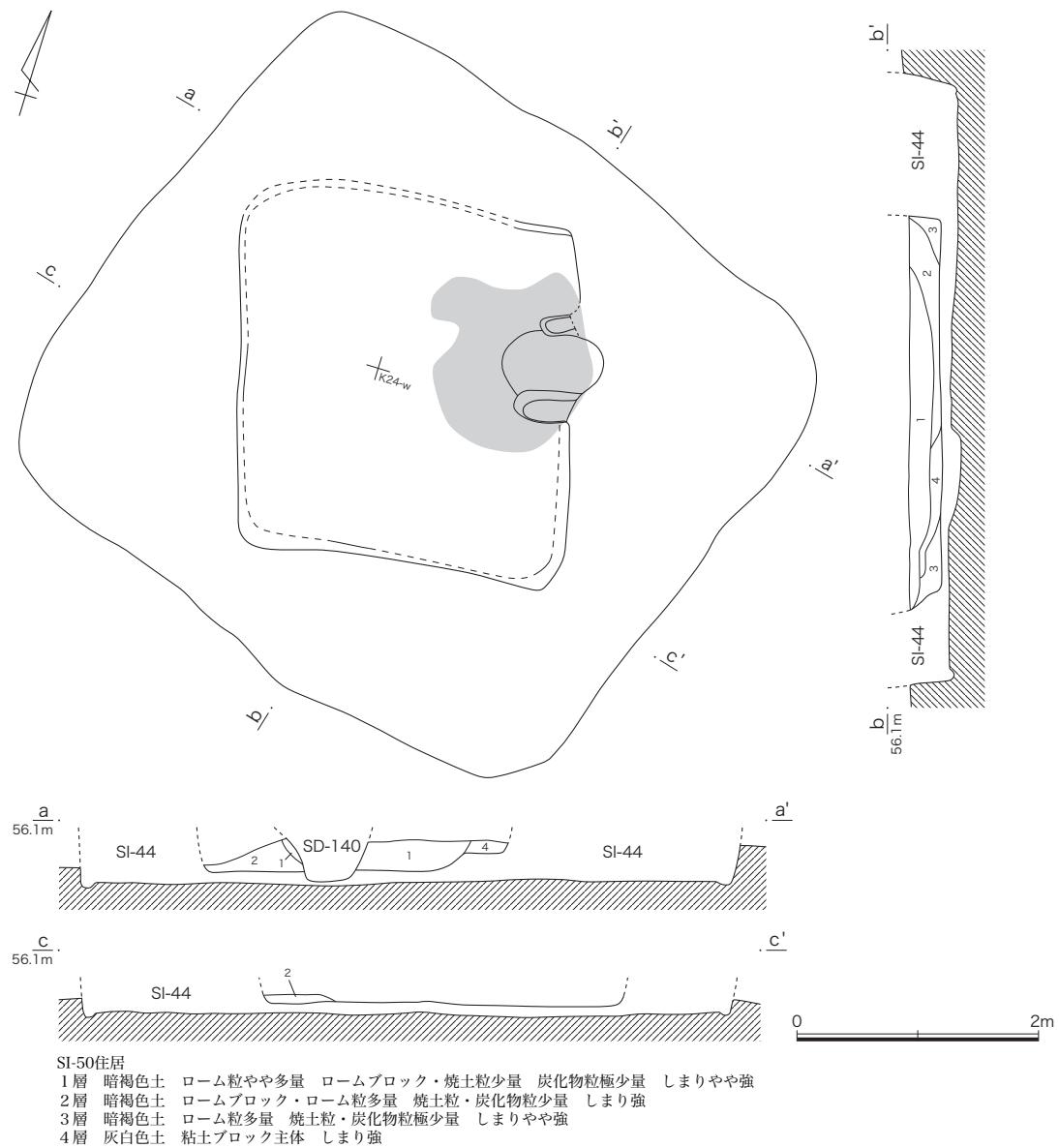
SI-50 (第127・128図・図版十八)

位置 K24グリッドに位置する。

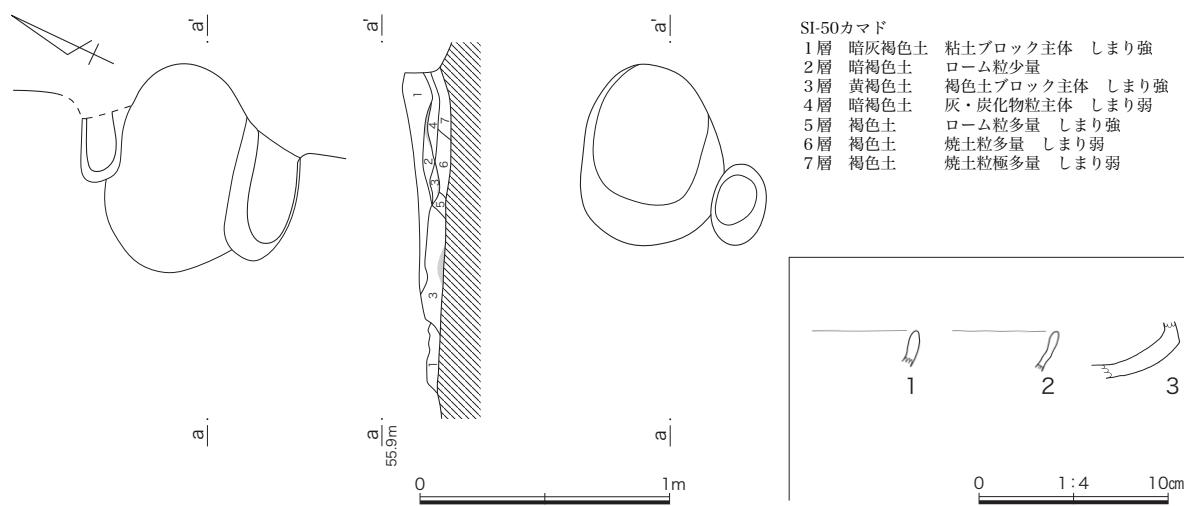
重複関係 SI-44堅穴住居跡の覆土中に構築されている。また、中央をSD-140に切られている。SI-44堅穴住居跡の覆土掘り下げ中に白色粘土のブロックを確認し、サブトレンチを入れたところ、粘土ブロックの下から焼土と灰が互層状に堆積している状況が確認された。また、土層断面の観察を行ったところ、住居壁



第126図 SI-49 堅穴住居跡



第127図 SI-50 竪穴住居跡



第128図 SI-50 カマドおよび出土遺物

第49表 SI-50 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記	実測 No.
1 土師器 壺	破片	内外面ともヨコナデ	白色粒子少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土	1
2 土師器 小型甕？	破片	内外面ともヨコナデ	白色粒子少・砂礫微 良 7.5YR5/6 明褐	覆土	2
3 土師器 壺	破片	(内) ヨコナデ→放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ？	白色粒子・砂礫多 良 7.5YR2/1 黒	覆土	3

の立ち上がりが確認できたため、SI-44 壱穴住居跡とは別の住居跡として調査を進めた。

規模・形状 住居跡覆土中にあるため壁は判然としないが、復元したラインで東西 2.8 m、南北 3.0 m の歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 77° - E であるが、確定はできない。

覆土 ローム粒が多く含まれる暗褐色土を主体とする。下層（2層）にはロームブロックが多く含まれており、SI-44 壱穴住居跡の覆土と似ている。

壁・壁溝 確認面から約 25cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がるものと考えられる。

床面・貼床 地床（= SI-44 覆土）を踏み固めて床面としている。掘り方ではない。

火処 住居東壁中央にカマドを構築している。上面に粘土が大量に堆積しており、袖部分がはっきりとなかったため、全体を崩しながら調査を進めた。粘土ブロックの大部分の下面は赤化していたことから、ブロックのほとんどは天井崩落土と考え、下面が赤化していない部分を袖として図化した。袖とした部分は、馬の背状に粘土が積み上げられており、高さは約 10cm である。粘土ブロックの上面は灰褐色粘土、下面是黃褐色粘土であった。カマド内部には焼土、炭化物、灰が薄く互層となって大量に堆積していた。煙道は失われているため、状態は不明である。右袖の粘土を除去したところ、下から浅い掘り込みが確認された。

遺物 覆土中から土師器壺および甕の小片が出土しているが、全体が復元できるものは出土していない。

SI-51（第 129・130 図・図版十八）

位置 J32 に位置する。西側 2/3 が調査区外となる。

重複関係 住居南側が SI-52 と重複する。新旧関係は、SI-52（旧）→ SI-51（新）である。

規模・形状 大部分が調査区外となるため、規模・形状等は不明である。

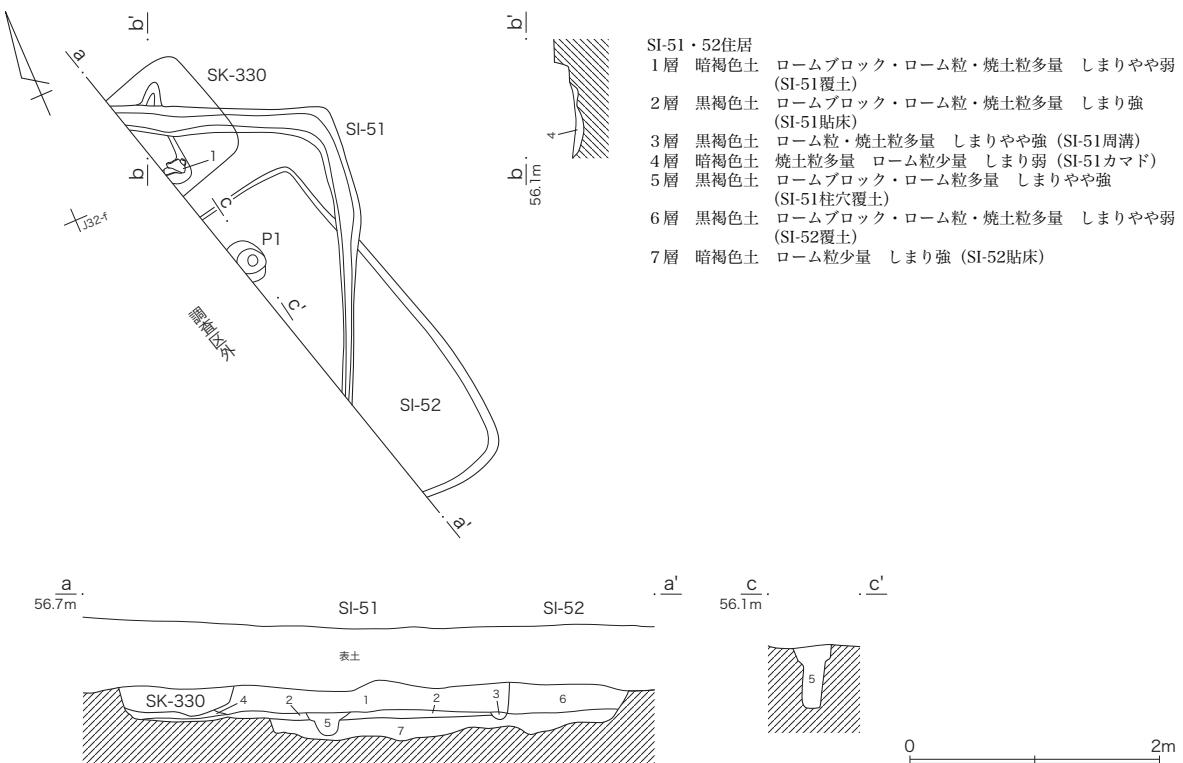
覆土 暗褐色土を主体とする。覆土中にはロームブロックや焼土が多く含まれている。

壁・壁溝 確認面から約 20cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は調査部分では全周している。

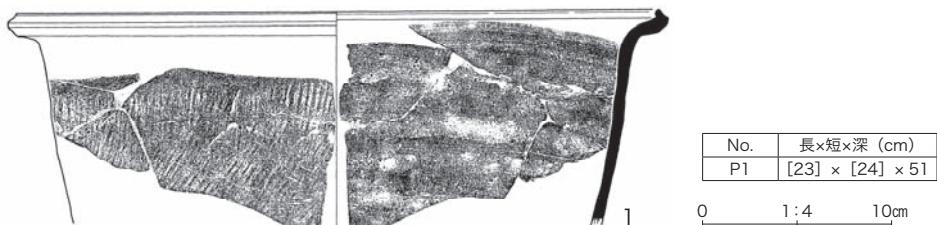
床面・貼床 ロームブロックおよび焼土を多く含む土層で貼床を施しており、床面は堅くしまっている。貼床を除去すると地山となり、掘り方ではない。

柱穴 柱穴が 1 基のみ確認されている（P1）。断面図では図化できなかったが、調査時に柱痕と考えられる黒褐色土の周辺に、貼床と同じ堅くしまった土層が確認された。

火処 北壁でカマドの痕跡が確認された。上面が SK-330 に切られており、掘り方しか残っていない。覆土（4 層）には焼土が多く含まれているが、粘土は全く残っていない。カマド部分にも壁溝が掘られており、埋め



第129図 SI-51・52 穫穴住居跡



第130図 SI-51 出土遺物

第50表 SI-51 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
I 須恵器 鉢？	口 (33.8) 高 (11.4)	(内) 無文ナデ (外) 平行タタキ 口縁部大きく外反し、内側へ折り返し (残) 1/8 新治産	砂粒・白色粒子・雲母少 やや良 5Y5/2 オリーブ灰	床面 +5cm No.1 +カ マド周り

戻した後にカマドを構築したものと考えられる。煙道は短く、急な角度で立ち上がる。

遺物 カマド跡の周辺で、須恵器鉢と考えられる破片が出土している（第130図1）。

SI-52 (第129図・図版十八)

位置 J32に位置する。西側2/3が調査区外となる。

重複関係 住居北側でSI-51と重複する。新旧関係は、SI-52(旧)→SI-51(新)である。

規模・形状 大部分が調査区外となるため、規模・形状等は不明である。

覆土 黒褐色土を主体とする。覆土中にはロームブロックや焼土が多く含まれる。

壁・壁溝 確認面から約20cmの深さで、壁はなだらかに立ち上がる。

床面・貼床 ロームブロックなどによる貼床はないが、床面は堅くしまっている。また、焼土が床面に多く散らばっていた。

掘方 床面から約15cmの深さで、底面は全体的に凹凸が見られる。

火処 削平により不明である。

遺物 遺物は出土しなかった。

SI-55 (第131図・図版十八)

位置 I28グリッドに位置する。

規模・形状 西側1/2以上を削平されており、規模・形状・主軸方向は不明である。

覆土 暗褐色土を主体とする。

壁 残存部分が少ないため、壁の状況は不明である。壁溝はない。

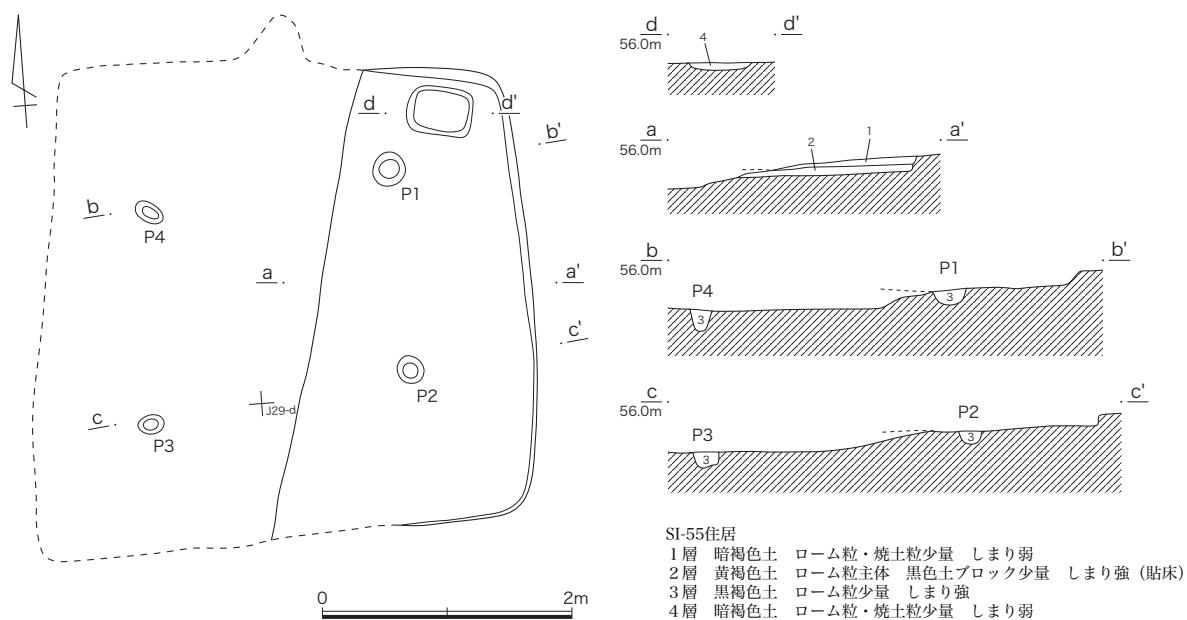
床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。

柱穴 4本主柱と考えられるが、東側と削平された西側の柱穴で深さが大きく異なっており、確定することはできない。上面はいずれも円状である。覆土は黒褐色土を主体とし、柱痕は確認できなかった。

火処 削平により不明。おそらく、北壁にカマドが構築されていたものと考えられる。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。方形の掘り方で、覆土は暗褐色土を主体とする。深さは約5cmである。

遺物 出土遺物は小破片のみで、実測可能な個体はない。



No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考
P1	28×26×13	主柱穴	P4	25×14×17	主柱穴
P2	23×20×11	主柱穴	貯蔵穴	51×38×7	
P3	20×15×12	主柱穴			

第131図 SI-55 穫穴住居跡

SI-56 (第132・133図・図版十九)

位置 I29グリッドに位置する。

重複関係 住居東側でSI-57竪穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-57(旧)→SI-56(新)である。

規模・形状 東西3.1m、南北3.2mでやや歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-11°-Eである。

覆土 黒褐色土を主体とする。上面が削平されているため、覆土はほとんど残っていない。

壁 確認面からの深さ約15cmで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施されており、堅くしまっている。

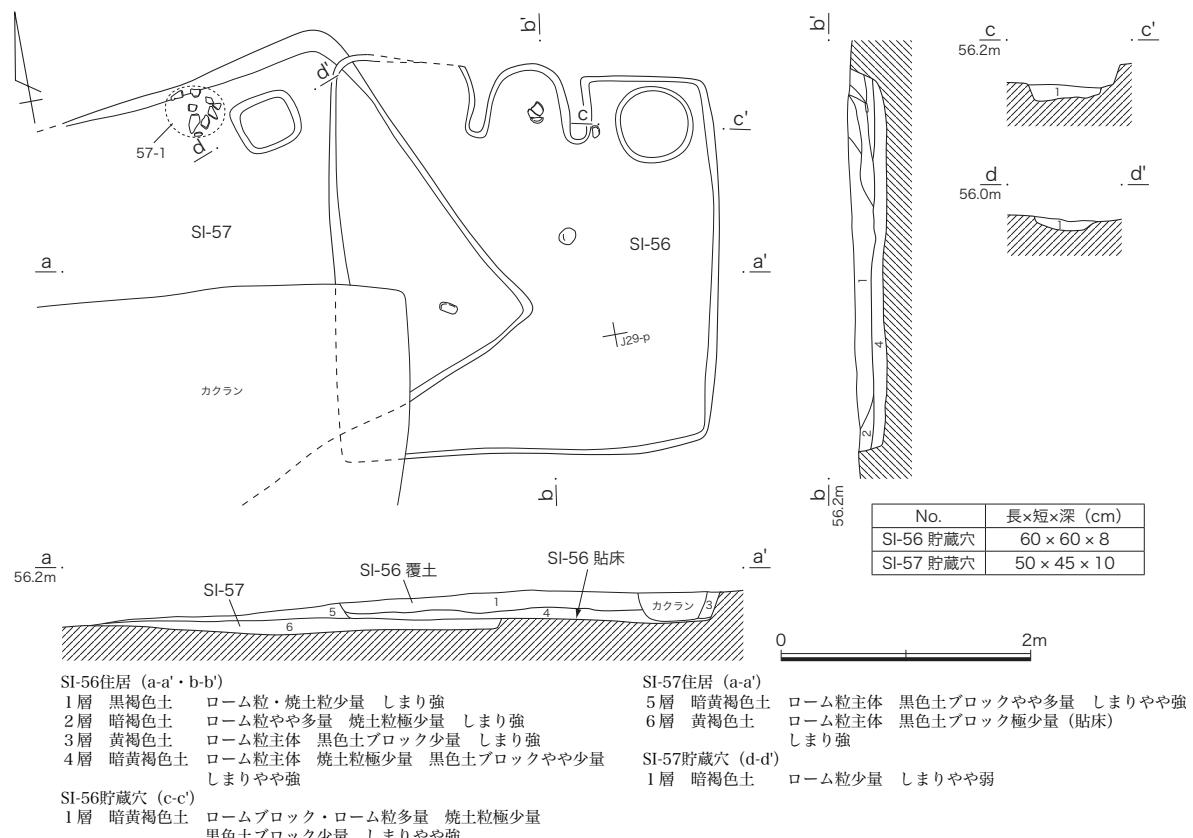
掘方 床面から約10cmで、底面は平坦である。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存している。焚き口が幅広いのに対し、煙道は短い。両袖は黒褐色土の上に粘土を貼って構築しており、内部はあまり焼けていない。焼土・炭化物は少ない。

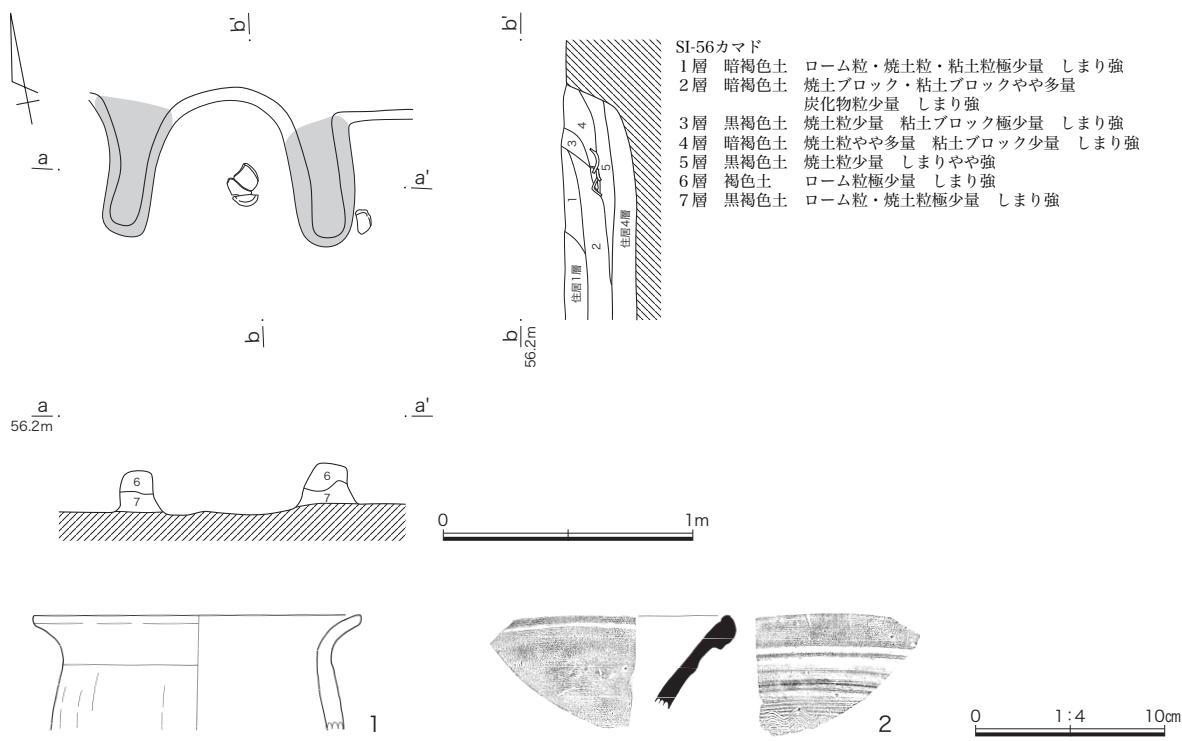
カマド中央に粘土ブロックを置き、その上に土師器甕の底部片を重ねて置いてあり、カマドに架ける甕の支柱とした可能性もある。煙道は壁からわずかに張り出すのみで、急な角度で立ち上がる。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。楕円状の掘り方で、内部にはロームブロックを多く含む暗黄褐色土が堆積していた。

遺物 カマド及び覆土中から土器片が出土しているが、出土量は少ない。図化した遺物(第133図1・2)はいずれも覆土中から出土したものである。



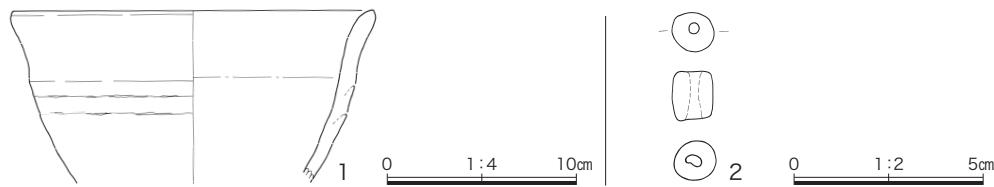
第132図 SI-56・57竪穴住居跡



第133図 SI-56 カマドおよび出土遺物

第51表 SI-56 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (17.4) 高 (6.0) (残) 1/8	(内) 口ヨコナデ胴ナデ? (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ	砂礫・白色粒子多・ 雲母やや多 良 10YR6/6 明黄褐	覆土 d + SI-57 覆土
2 須恵器 甕	破片	内外面ともロクロナデ 口縁部波状櫛描文 産地不明	白色粒子多・砂礫やや多 ・雲母少 良 N5/ 灰	覆土 d



第134図 SI-57 出土遺物

第52表 SI-57 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 鉢	口 (19.2) 高 (9.1) (残) 2/8	(内) 口ヨコナデ胴ナデ? (外) 口ヨコナデ胴不明? (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.1 + 覆土
2 土製品 土玉	長 1.3 径 1.1 孔径 0.2 重 1.41	管玉状 表面ナデ 下面に孔の跡 2カ所	砂粒少 良 10YR7/4 にぶい黄橙	覆土

SI-57 (第132・134図・図版十九)

位置 I29 グリッドに位置する。

重複関係 住居南東でSI-56 壓穴住居跡と重複し、南側は攪乱を受けている。新旧関係はSI-57(旧)→SI-56(新)である。

規模・形状 残存状況が極めて悪く、規模・形状共に不明である。

覆土 住居中央部分にわずかに残っており、ローム粒を主体とする黄褐色土が堆積している。

壁 最も残っている部分で確認面からの深さが約20cmで、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施され、床面はよくしまり堅い。

掘方 床面から約10cmの深さで、底面は全体的にほぼ平坦である。

火処 削平により不明である。

貯蔵穴 住居北東隅で確認された。方形の掘り方で、覆土は暗褐色土を主体とする。深さは約5cmである。

遺物 貯蔵穴周辺の覆土中から、土師器鉢が出土している(第134図1)。覆土中からは土玉が1点出土している(第134図2)。

SI-59 (第135・136図・図版十九・五〇・五一)

位置 J28 グリッドに位置する。

重複関係 住居東側でSI-15 壓穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-59(旧)→SI-15(新)である。また、SK-60に切られる。

規模・形状 東西が4.45m、南北が残存値4.4mで方形を呈する。主軸方向はN-1°-Wである。

覆土 暗褐色土を主体とする。下層(6層)にロームブロック・焼土粒・炭化物粒が多く含まれる。床面上約10cmで炭化材と土器片が多く出土しており、住居廃絶時に構築材などを焼却した可能性が考えられる。

壁・壁溝 壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は南西隅以外全周すると考えられる。南東隅では、壁から壁溝が離れてまわっている。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。全体的に焼けており、床面からも炭化材が出土している。

掘方 柱穴に囲まれた住居中央部分が島状に掘り残されている(断面図b-b')。

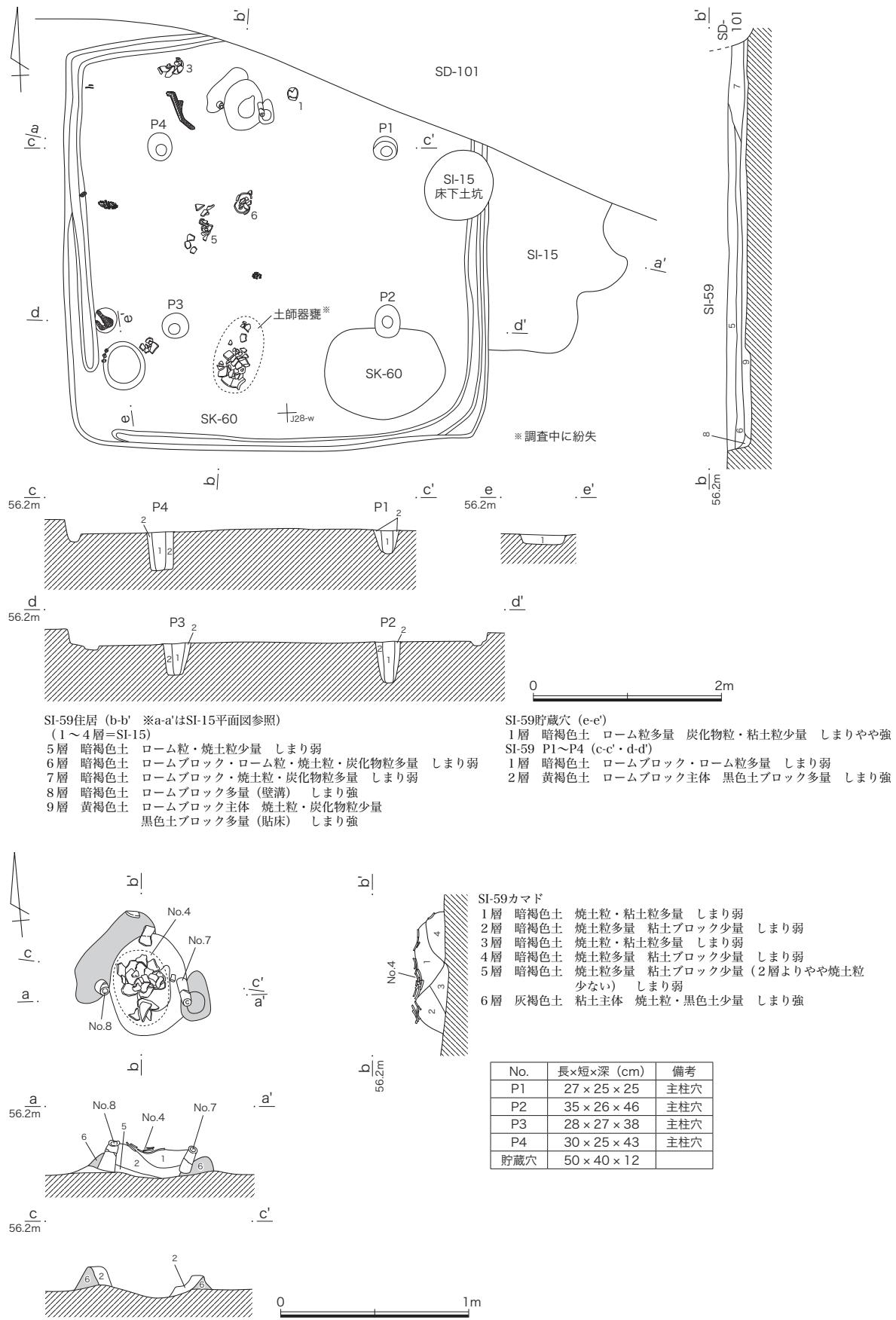
柱穴 4本主柱。円形の掘り方で、深さは一定しない。いずれも柱痕状の土層が確認され、その周りにロームブロックと黒色土ブロックが混ざり合った黄褐色土層が埋められている。

火処 住居中央北寄りにカマドと考えられる粘土ブロックと浅い掘り込みが確認された。カマド北側はSD-101により削平されているが、周辺には粘土と焼土が多く堆積していた。床面上に残されていた粘土ブロックの南側先端からは円筒形土器が出土している(第136図7・8)。粘土ブロック周辺には焼土が多く堆積しており、その上面からは土師器甕の破片が集中して出土した(第136図4)。この粘土ブロックがカマドであるならば、遺跡内の他の住居に比べ、住居中央に寄っている点が特徴的である。

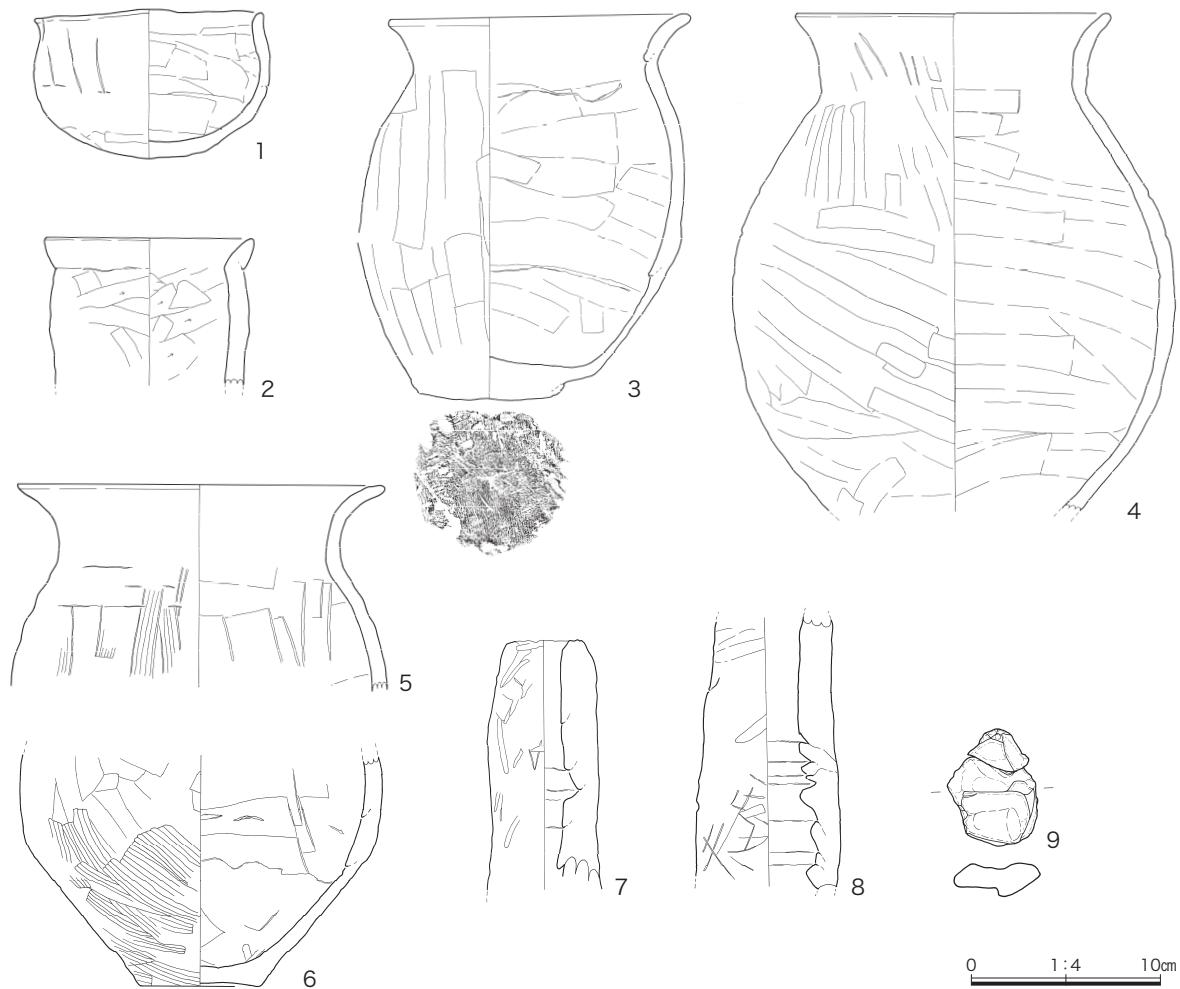
貯蔵穴 住居南西隅で1基確認されている。上面は南北にやや長い楕円状を呈し、ローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。

遺物 出土量は多く、図化したもののうち床面に伴うのは第136図1の土師器壺、4の土師器甕である。

住居南側の床面上に土師器甕の破片が集中していたが、調査時に紛失してしまったため、実測図が掲載できなかった。記録写真を見る限りでは、第136図4や5に似た甕だったと考えられる。



第135図 SI-59 竪穴住居跡



第136図 SI-59出土遺物

第53表 SI-59遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 12.0 高 7.9	(内) ヨコナデ体ヘラケズリ (外) ヨコナデ体上半ナデ下半粗いヘラケズリ 体上半 ヘラ状工具による縦方向のキズ多数 体部中央に輪積痕 (残) 6/8	白色粒子多・砂礫少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床直 No.3
2 土師器 小型甕	口 11.0 高 7.7	(内) ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) ヨコナデ体上半ヘラケズリ下半ナデ 口縁部下に輪積痕 (残) 2/8	白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/6 明赤褐	覆土
3 土師器 甕	口 (15.8) 底 (8.0) 高 20.4	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面に輪積痕残る 底部が大きく歪む (残) 1/8	砂粒・白色粒子多 良 5YR4/8 赤褐	床上 +5cm No.2
4 土師器 甕	口 (16.6) 高 (26.2)	(内) ヨコナデ胴ナデ (外) ヨコナデ胴上半半裁竹管によるケズ リ下半ヘラケズリ 上部摩滅 (残) 2/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 良 7.5YR4/4 褐	床直 カマド No.1
5 土師器 甕	口 (19.2) 高 (11.7)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ・一部ハケメ 外面口縁部下に輪積痕 (残) 2/8	砂粒・微細白色粒子多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	床上 +10cm No.8+9+ 確認面 + 覆土 b

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
6 土師器 甕	底 6.3 高 (12.2)	(内) ヘラナデつけ (外) 胴中位までヘラケズリ、下半・底部ハケメ 胴中位で大きく膨らむ 内面に輪積痕 (残) 6/8	砂粒・白色粒子極多・ 雲母少 やや良 10YR3/2 黒褐	床上 +10cm No.9
7 土師器 円筒形 土器	径 5.8 高 (13.0)	(内) 調整なし 輪積痕残る (外) 棒状工具による凹線をまばらに残す 輪積み成形 断面やや不整な橢円形 中空 著しく被熱	白色粒子・雲母やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 カマド No.5
8 土師器 円筒形 土器	径 7.5 高 (14.1)	(内) 粗いナデ、下半に輪積痕残る (外) 粗いナデ 棒状工具による凹線・ヘラ状工具による細かいキズが多く残す 断面やや不整な橢円形 中空 著しく被熱 (特に上半部)	砂粒・白色粒子多 二次被熱・下半やや不良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm カマド No.4
9 礫？	長 (6.2) 幅 (4.7) 厚 (1.4) 重 19.52	表面は摩滅強 一部に磨面あり 実測図裏面にタール状の付着物 礫と考えられるが、焼成粘土塊の可能性もある	泥岩? 10YR7/4 にぶい黄橙	床上 +5cm No.8

SI-61 (第137図・図版十九)

位置 I25 グリッドに位置する。

規模・形状 東壁の一部が調査区外となる。調査範囲内での規模は、東西 3.6 m、南北 3.6 m である。各隅は丸みをおびて、歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 20° - E である。

覆土 黒褐色土を主体とするが、上面は大きく削平されている。

壁 確認面から約 5cm の深さで、壁の立ち上がりラインは不明である。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。

掘方 カマド前の床下に、深さ約 10cm の浅い土坑 (P7) が確認された。

柱穴 4 本主柱。円形の掘り方を呈し、P2 以外は柱痕が確認された。南側の P2・P3 は壁に近くなっているが、実際の壁は平面図のラインよりも南側にあった可能性もある。

火処 北壁中央にカマドの痕跡が確認された。現代の浅い溝に切られてほとんど失われている。周辺に粘土粒が多量に含まれる土層 (2 層) が堆積していた。

その他の付帯施設 床面上で P5・P6 が確認されているが、住居に伴うものは不明である。

遺物 床面から、土師器甕の底部破片が出土している (第137図1)。その他に遺物は出土していない。

SI-62 (第138図・図版十九)

位置 I26 グリッドに位置する。

規模・形状 東西 4.2 m、南北 2.65 m の東西に長い長方形を呈する。主軸方向は N - 5° - E である。

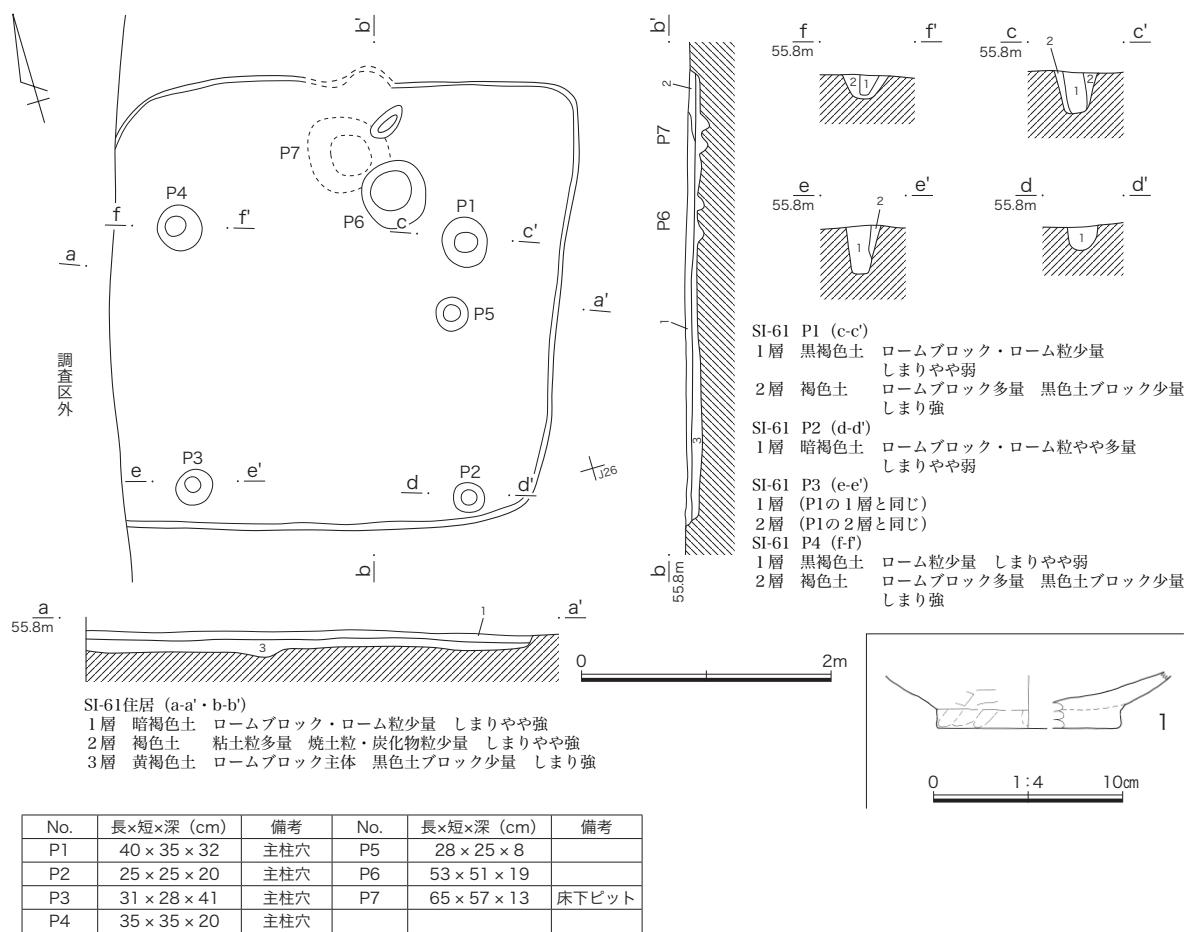
覆土 黒褐色土を主体とする。上面は床面まで大きく削平されており、覆土は住居東側 1/3 に薄く残っているのみである。

壁・壁溝 壁はほとんど失われているため不明である。壁溝はカマド部分を除き全周する。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施される。

掘方 床面から約 10 ~ 15cm の深さで、全体的にほぼ平坦である。

柱穴 2 本主柱。橢円状の掘り方で、2 本とも柱痕状の土層が確認された。柱痕状の土層の周りはロームブロックが多量に含まれる褐色土で埋められている。



第137図 SI-61 竪穴住居跡および出土遺物

第54表 SI-61 遺物観察表

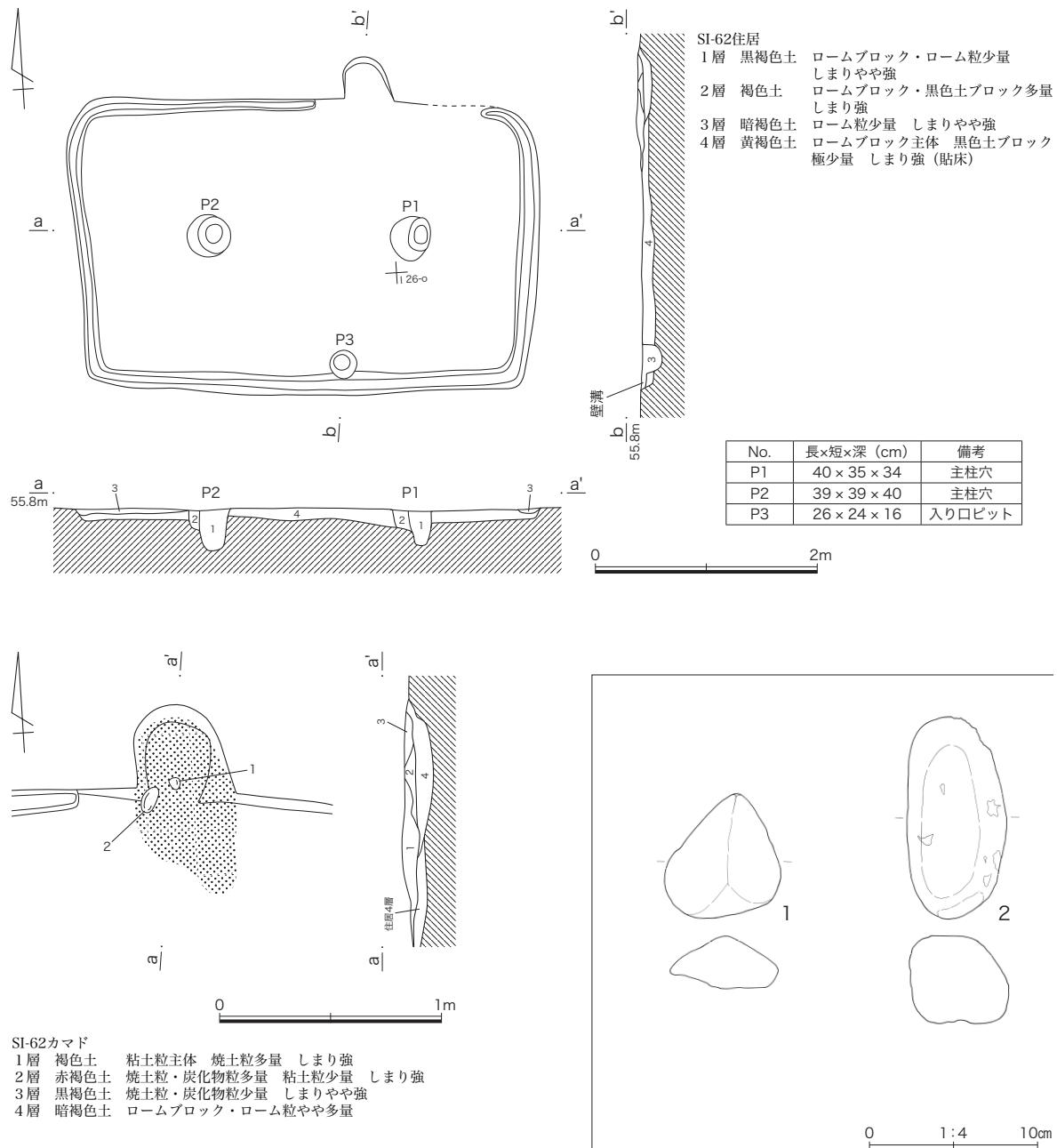
NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	底 (9.8) 高 (3.0)	(内) 不明 (外) 台部に指頭圧痕 胴粗いケズリ? 内面にタール状の付着物 (残) 3/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床直

入り口ピット 住居南壁中央からやや東寄りに1基確認された(P3)。壁溝と同じ土層が堆積している。

火処 住居北壁中央からやや東寄りにカマドが構築されているが、削平によりほとんど失われている。内部には焼土・炭化物が多く堆積していた(2層)。カマド内部から礫が2点出土している(第138図1・2)。

遺物 カマド内の礫以外に出土遺物はない。

第3章 発見された遺構と遺物



第138図 SI-62 壁穴住居跡および出土遺物

第55表 SI-62 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 礫	長 7.4 幅 6.9 厚 3.5 重 227.1	三角錐状 使用痕なし 全体的に平滑な自然礫	10BG3/1 暗青灰 硬質砂岩	カマド No.1
2 礫	長 12.0 幅 5.9 厚 5.5 重 580.5	楕円状の円礫 左側面に磨面 右側面は赤化 表面にタール状の付着物	5YR5/4 にぶい赤褐	カマド No.2

SI-65 (第139・140図・図版二〇・五一)

位置 N43グリッドに位置する。南側約1/3を平成13年度、残りの部分を平成17年度に調査している。

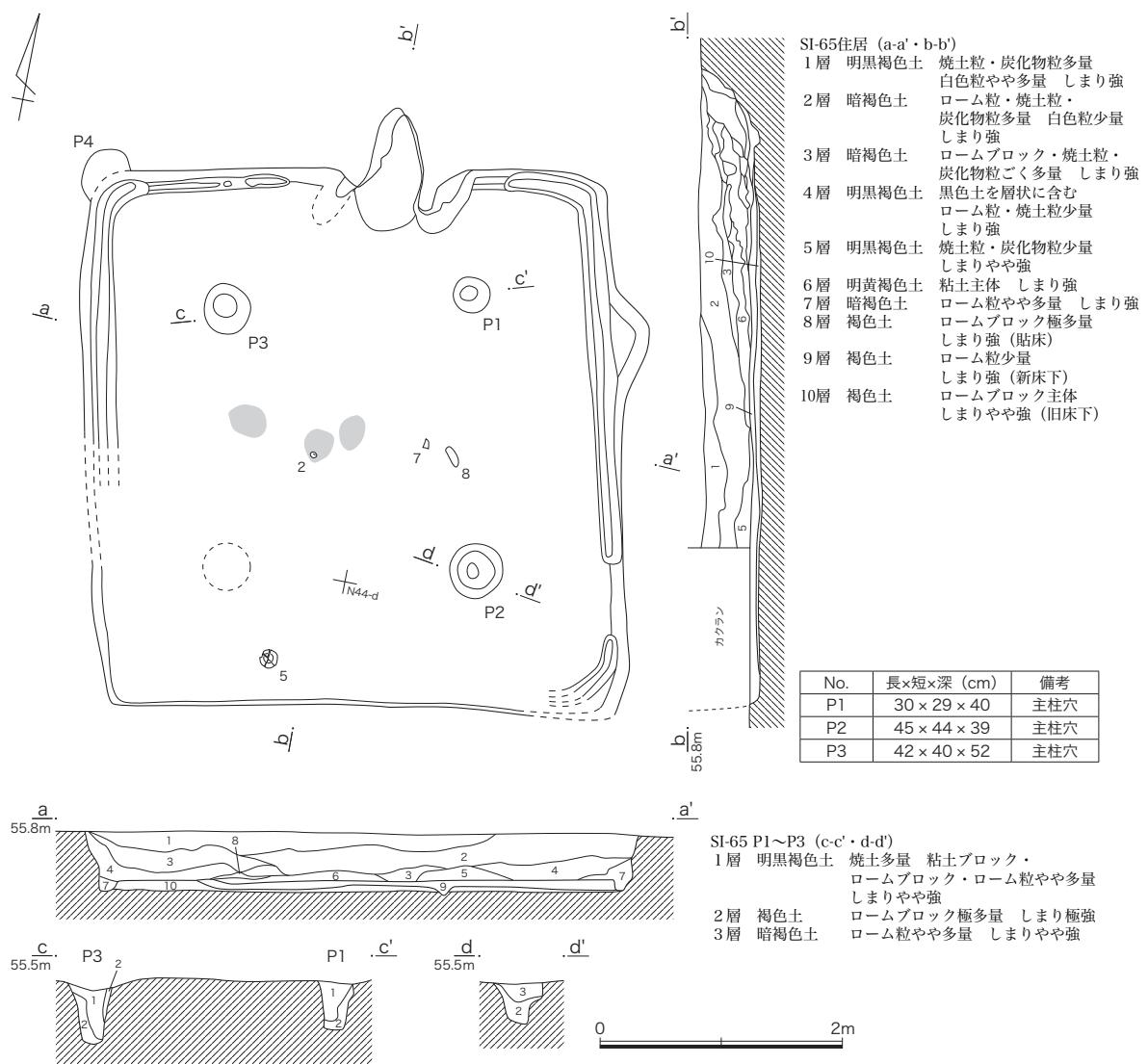
地山掘削に伴う安全地帯確保のため、両調査部分の間が一部調査できなかった（第139図破線部分）。

重複関係 住居南側でSI-66堅穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-66（旧）→ SI-65（新）である。

規模・形状 東西4.4m、南北4.45mの方形を呈する。主軸方向はN-10°-Wである。

覆土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を多く含む暗褐色土を主体とする。上面には、白色粒子を多く含む明黒褐色土が堆積している（1層）。また、カマド前面から住居中央にかけて、黄褐色粘土が流れ出た状態で堆積し、床面まで及んでいる（6層）。覆土は全体的にローム粒などの内容物を多く含んでいる。

壁・壁溝 確認面から約40cmの深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。東壁中央に階段状に張り出した部分があるが、棚状施設などといった住居に付帯するものか、あるいは埋没過程で壁が崩れたものは確定できない。平成17年度調査部分では壁溝が確認されているが、平成13年度調査部分では確認されていない。本来全周していたものが検出しきれなかったと考えられる。



第139図 SI-65 堅穴住居跡

床面・貼床 ロームブロックを極多量に含む褐色土による貼床(8層)と、褐色土ブロックによる貼床(7層)と2面の床面が確認された。しかし、他の住居付帯施設に建て替えや拡張等が見られないことから、床面のみ張り替えたものと考えられる。

掘方 掘り方はほとんどなく、P2周辺に浅い凹みが確認されたのみである。

柱穴 4本主柱と考えられるが、南西柱穴は安全地帯の中となり調査できなかった。いずれも円形の掘り方を呈し、北側の2本(P1・P2)には柱痕状の土層が確認された。P2はロームブロックを多く含む土層が堆積している。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、左袖は残りが悪い。袖は床面上に粘土を積み上げて構築している。内面と火床面はよく焼けており、内部には灰、焼土、炭化物の薄い層が交互に堆積していた(4~7層)。また、右袖外側の床面上から炭化材が出土している。煙道はやや急に立ち上がり、奥壁は焼土と灰が混ざった土層が厚く堆積していた(8層)。火床面の焼土を除去した後、底面に浅いピット状の掘り込みが確認された。掘り方は、袖の基部にあたる地山ををわずかに掘り残しており、側壁から奥壁にかけては、ゆるい凸字状を呈する。

遺物 出土量は少ない。第140図1・2の須恵器蓋は床面上から、3の須恵器壺も床面近くから出土している。他の遺物は、床面から約20cm浮いた状態で出土している。

SI-66(第141図・図版二〇・六一)

位置 N44グリッドに位置する。

重複関係 住居北側でSI-65豊穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-66(旧)→SI-65(新)である。

規模・形状 東西4.65m、南北はSI-65に削平されているため不明である。方形を呈するが、西壁が膨らんでいるため歪んでいる。

覆土 暗褐色土を主体とするが、覆土はほとんど残っていない。

壁 現道の断面観察によれば、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

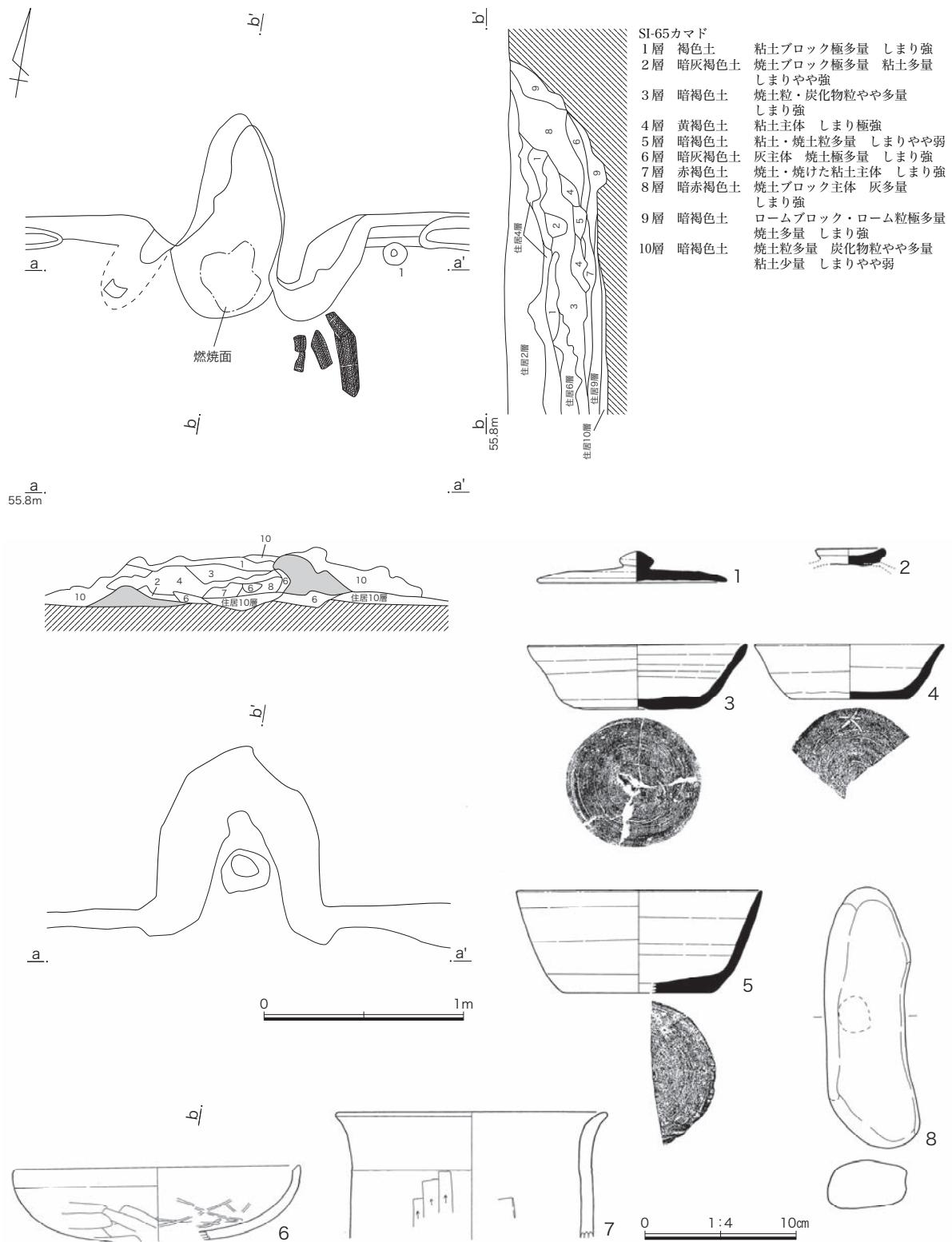
床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施されている。掘り方はない。

柱穴 4本主柱。いずれも円状の掘り方を持ち、P4以外は柱痕状の土層が確認された。P1とP3が深さ35~45cmであるのに対し、P2とP4は25cm程度(P4は推定)と若干深い。

火廻 P1とP4の間に、ブロック状の粘土がわずかに堆積しており(3層)、炉などカマド以外の火廻の痕跡も認められることから、北壁にカマドを構築していたと考えられるが、SI-65に削平され残っていない。SI-65の掘り方調査でも、痕跡は確認できなかった。SI-65との床面レベルがほぼ同じであるため、完全に削平されてしまったものと考えられる。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P5)。円状の掘り方を呈し、深さは約20cmである。

遺物 SI-65と重複する部分でわずかに出土しているが、出土量は少ない。床面に伴うのは、第141図4の礫のみである。また、覆土中から羽口の破片が1点出土している(図版六一)。



第140図 SI-65 カマドおよび出土遺物

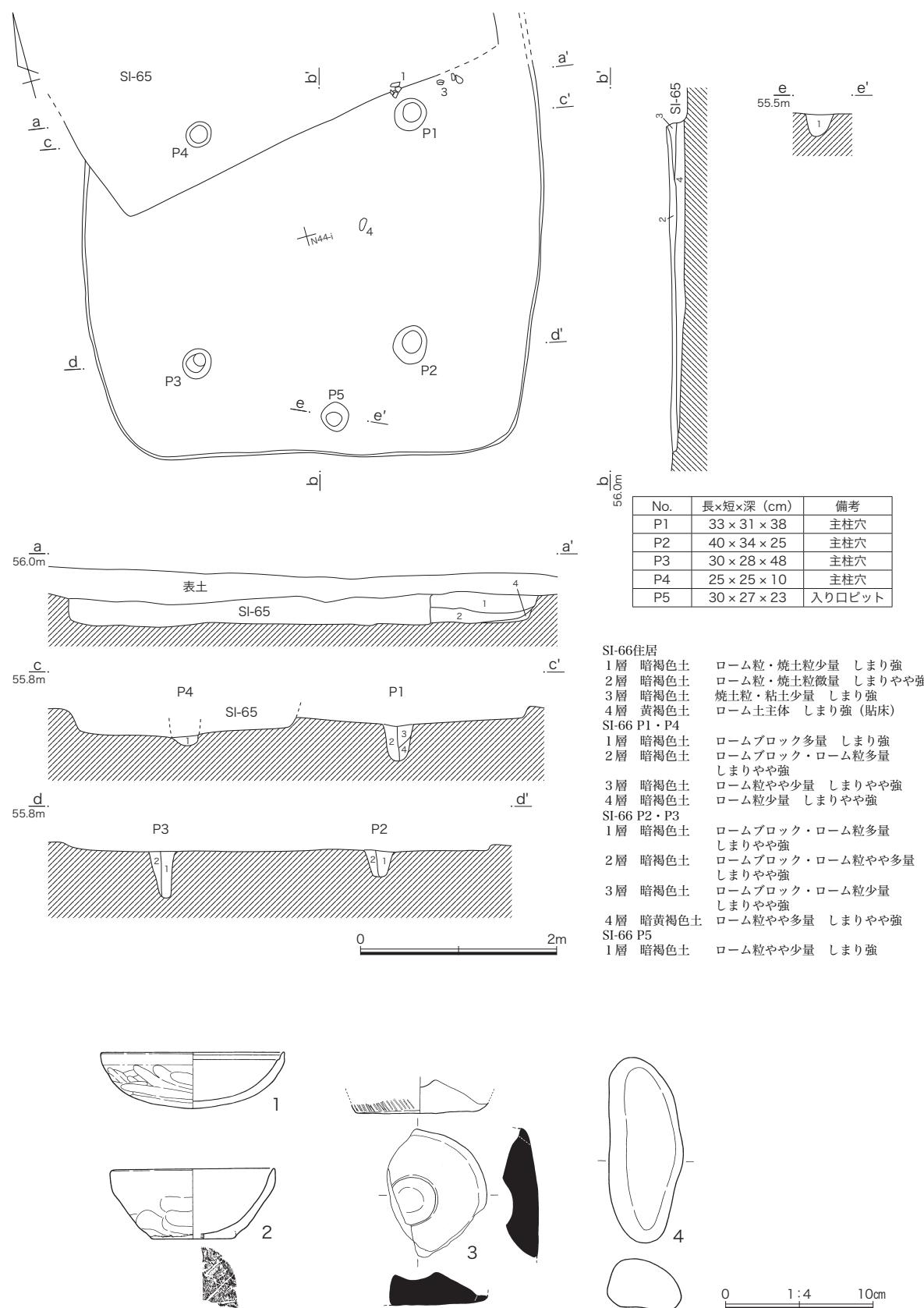
第3章 発見された遺構と遺物

第56表 SI-65 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 12.2 高 2.1 撮部径 2.2	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 端部やや摩滅 ボタン状の撮み (残) 8/8 益子産	砂礫・砂粒多 良 10Y5/1 灰	床直 No.5
2 須恵器 蓋	撮部径 4.6 高 (1.2)	ロクロナデ (残) 摄部 8/8 三毳産	白色粒子・黒色融解粒微 良 10Y7/1 灰	床直 No.2
3 須恵器 坏	口 14.2 底 7.8 高 4.2	内外面ともロクロナデ 底部へラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 7/8 益子産	砂粒多・砂礫や多 良 5Y7/1 灰白	床上 +5cm No.1
4 須恵器 坏	口 (12.6) 底 8.0	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 底面へラ記号有り (残) 2/8 益子産	砂粒多 良 7.5Y6/1 灰	床上 +20cm No.4・覆土 c
5 須恵器 坏	口 (16.2) 底 (9.6)	内外面ともロクロナデ 底部へラ切り離し後回転ヘラケズリ 大きく歪む (残) 2/8 堀ノ内産	砂礫・白色粒子多 良 N6/ 灰	覆土
6 土師器 坏	口 (19.0) 高 (4.9)	(内) 口ヨコナデ胴多方向のミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多 やや良 10YR3/1 黒褐	ベルト・ 覆土 b
7 土師器 甕	口 (18.0) 高 (8.3)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR4/1 褐灰	床上 +20cm No.3 + 覆土 d
8 礫	長 17.3 幅 5.2 厚 3.2 重 579.05	両側面に凹み	5GY7/1 明オリーブ灰	床上 +20cm No.4

第57表 SI-66 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 坏	口 (12.5) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 口縁部内面に沈線 (残) 4/8	微細白色粒子多 良 10YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.1
2 土師器 坏	口 (11.2) 底 (5.6) 高 4.7	(内) ナデ? (外) 体指頭圧痕 摩滅強 底部木葉痕 (残) 3/8	砂粒多 やや良 10YR6/2 灰黄褐	覆土 c
3 須恵器 甕?	底 (7.9) 高 (1.7)	底部近く外面平行タタキ? 底部中央が凹む 割れ面を磨った痕跡有り	砂礫 (花崗岩片) 多 良 2.5Y6/1 黄灰	床上 +5cm No.2
4 礫	長 13.5 幅 5.0 厚 3.7 重 335.4	長楕円・断面三角状 両側縁に自然の窪み 使用痕特になし	10Y5/1 灰	床直 No.3
図版 六一 羽口	外径 (推定) 4.2	羽口先端の発泡ガラス化した破片。口径は不明。		覆土 d



第141図 SI-66 壇穴住跡および出土遺物

SI-67 (第142～145図・図版二〇・五一)

位置 M42に位置する。

重複関係 SI-67a、SI-67b、SI-67cの3軒の竪穴住居跡が入れ子状に切り合っている。新旧関係は、SI-67c(旧)→SI-67b→SI-67a(新)である。さらに、いずれの住居跡も柱の建て替えを行っていると考えられるが、記録の不備により確認状況や覆土等がわからぬため、柱の位置から組み合わせを推定した。

SI-67a (第142図)

規模・形状 東西6.35m、南北6.56mであるが、上面の削平により南壁が5.4mと短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-9°-Wである。

覆土 暗褐色土を主体とする。下層(2層)にはロームブロック及び粘土粒が多く含まれている。

壁・壁溝 確認面から約10cmと浅く、壁はなだらかに立ち上がるものと考えられる。壁溝は深い溝状で、南東隅を除く部分で確認された。南東隅は削平により失われている。

床面 ロームブロックを多く含む黒褐色土で貼床を施している。床面はよくしまり硬い。

掘方 住居南東隅がやや浅く窪んでいる。全体的に掘方は浅く、3～5cm程度である。

柱穴 4本主柱。いずれも楕円状の掘り方を呈するが、P3が特に細長い楕円状を呈しており、柱材の抜き取りが行われているものと考えられる。覆土はしまりの弱い黒色土を主体とする。P4のみ柱痕状の土層と埋め方の土層が確認されたが、他の柱穴では柱痕状の土層は確認できなかった。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P15)。南北に長い楕円形を呈し、深さは9cmと極浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、上面が大きく削平され残りは悪い。袖は黄褐色粘土を積み上げて作られており、奥壁まで厚く粘土が貼り付けられている。袖の内側は良く焼けて赤化し、内部には粘土が多量に堆積していた(7層)。火床面は粘土が約5cmの厚さで堆積しており、その上面が良く焼けている。煙道は短く、ほぼ直に立ち上がる。掘方はゆるい凸字形を呈する。

貯蔵穴 北東隅に1基確認された。東西に長い楕円形を呈し、深さは5cmである。

遺物 出土量は少ないが、床面に伴うものが比較的多い。

SI-67b (第143図)

規模・形状 東西4.65m、南北4.0mの方形を呈する。火処が確認されなかたため、主軸方向は不明である。

覆土 SI-67aの貼床と共に、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。

壁 SI-67aにより壊されているため、立ち上がりのラインは不明である。SI-67aとほぼ相似形で、南壁よりも北壁が長いためゆがんでいる。壁溝はない。

床面 黄褐色土ロームによる貼床を全面に施している。

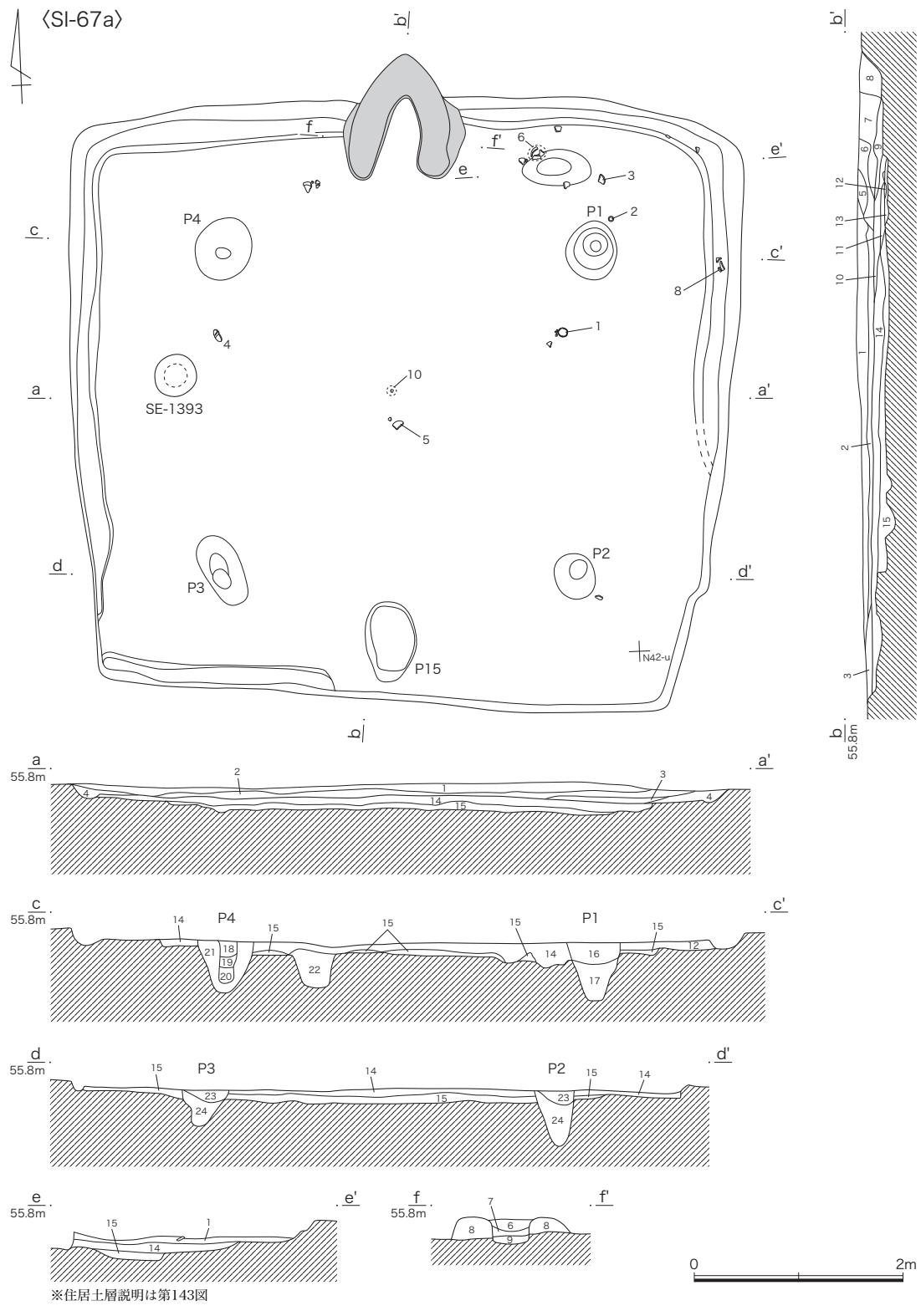
掘方 貼床の除去後、SI-67bよりも古いSI-67c竪穴住居跡が確認された。

柱穴 4本主柱(P5～P8)と考えられるが、P7が壁と接している点や、4本の形状にばらつきがある点から、SI-67aの柱穴(P1～P4)の建て替えの可能性も否定できない。覆土は記録漏れにより不明である。

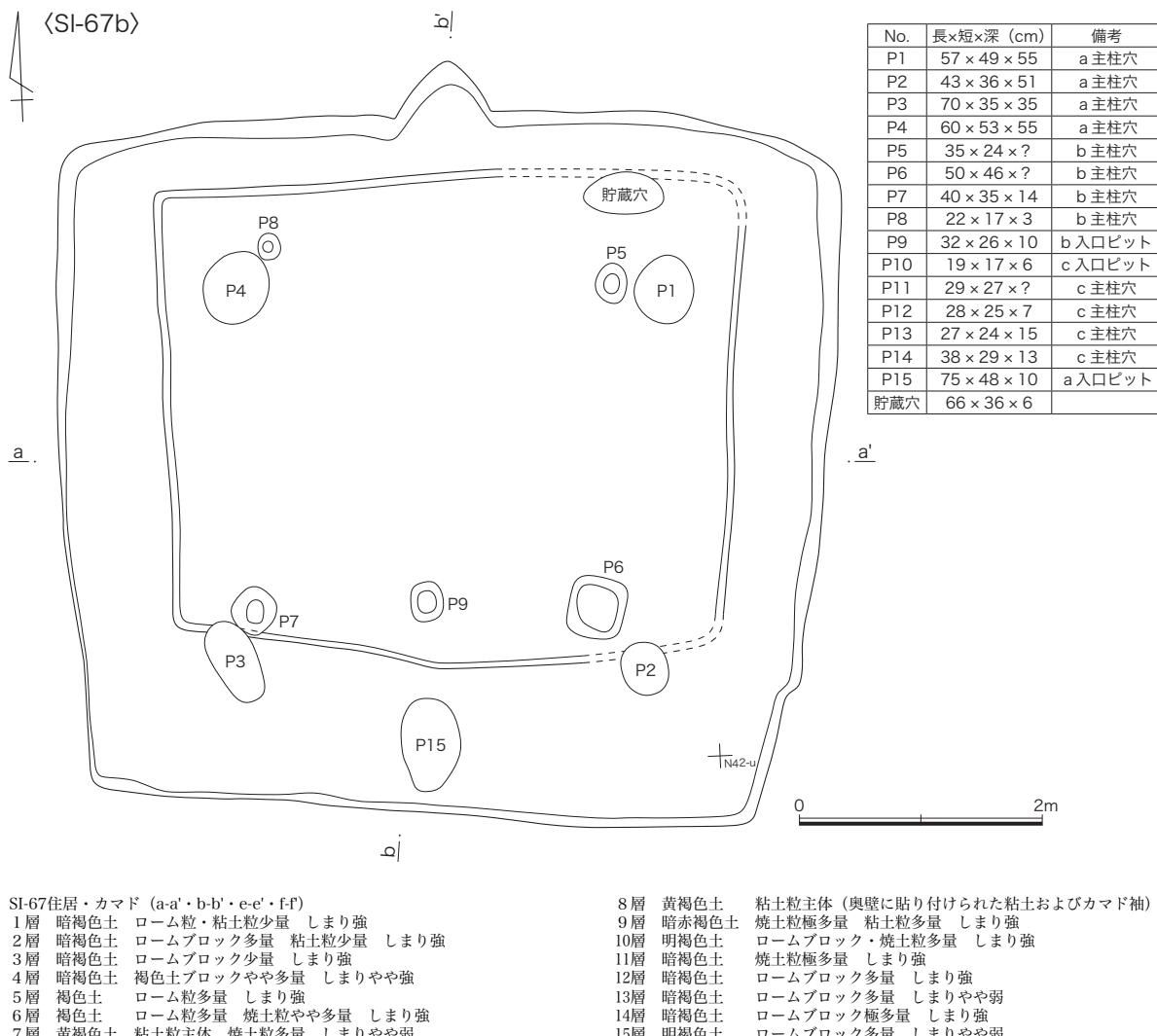
入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P9)。やや方形に近い掘り方を呈している。貼床と同じ土層が堆積しているため、より古いSI-67cに伴う可能性もある。

火処 火処の痕跡は確認できなかった。炉の痕跡も確認できず、古墳時代中期以前の遺物も確認できなかつた点から、カマドを構築していたと考えられるが、確定はできない。

遺物 SI-67bに確実に伴う遺物は確認できなかった。



第142図 SI-67a 竪穴住跡



第143図 SI-67b 竪穴住居跡

SI-67c (第144図)

規模・形状 東西3.7m、南北3.5mの方形を呈する。火処が確認されなかつたため、主軸方向は不明である。

覆土 SI-67b の貼床と共に、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体とする。

壁 SI-67a 及び SI-67b により壊されているため、立ち上がりのラインは不明である。SI-67b とほぼ相似形で、北壁は共通である。壁溝はない。

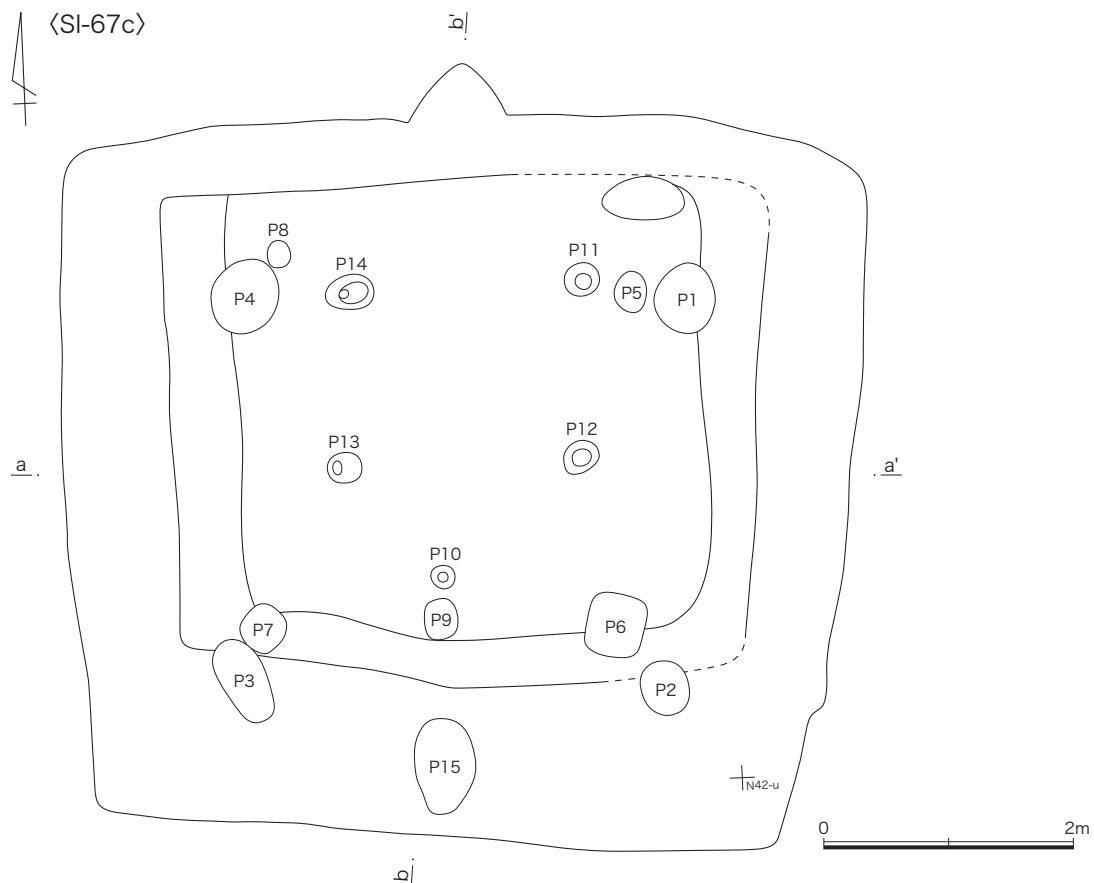
床面 地床と考えられる。掘方はない。

柱穴 4本主柱 (P11～P14) と考えられる。覆土はP14のみ記録されており、ローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする。

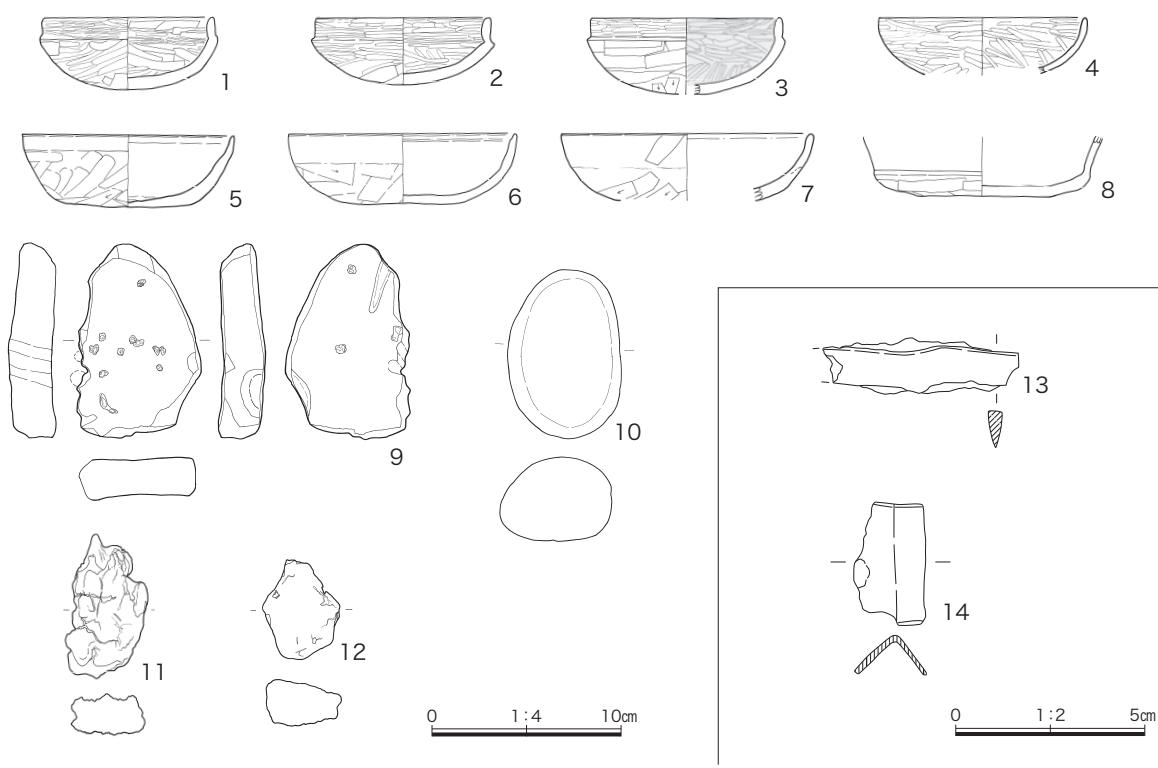
入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された (P10)。円状の掘り方を呈している。

火処 SI-67b と同じく、火処の痕跡は確認できなかつた。炉の痕跡も確認できず、古墳時代中期以前の遺物も確認できなかつた点から、カマドを構築していたと考えられるが、確定はできない。

遺物 SI-67c に確実に伴う遺物は確認できなかつた。



第144図 SI-67c 壇穴住居跡



第145図 SI-67 出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第58表 SI-67 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記	実測 No.
1 土師器 壺	口 (9.0) 高 3.8	内外面とも密な横方向ミガキ (残) 7/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 7.5YR3/4 暗褐	床上 +15cm No.10	2
2 土師器 壺	口 (9.1) 高 3.5	内外面とも密な横方向ミガキ 外面底部近くナデ (残) 8/8	砂礫多・白色粒子・雲母少 良 5YR4/8 赤褐	床直 No.19	3
3 土師器 壺	口 (10.0) 高 (4.0)	(内) 口～体上半横方向ミガキ・体下半放射状ミガキ (外) 口横方向ミガキ体へラナデ 内面黒色処理 (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR3/4 暗褐	床上 +10cm No.6	4
4 土師器 壺	口 (11.0) 高 (3.0)	内外面とも密なミガキ 内面漆仕上げ (残) 1/8	砂粒・白色粒子多 良 7.5YR3/4 暗褐	床直 No.15	1
5 土師器 壺	口 (11.0) 高 (3.8)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ底部近くヘラケズリ (残) 6/8		床直 No.12	5
6 土師器 壺	口 (12.0) 高 3.7	(内) ヨコナデ (外) 体へラケズリ→口ヨコナデ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多・砂礫や多 良 7.5YR3/1 黒褐	床直 No.2	6
7 土師器 壺	口 (13.2) 高 3.5	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体へラケズリ 外面に輪積痕残る 内面わずかに漆付着 (残) 1/8	白色粒子多・赤色融解粒少 良 5YR5/4 にぶい赤褐	覆土 d	7
8 土師器 壺	高 (3.1)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体へラケズリ 内面わずかに漆付着 (残) 1/8	雲母少・白色粒子微 良 10YR7/4 にぶい黄橙	壁溝内 No.9	8
9 石製品 不明	長 10.2 幅 6.2 厚 2.3 重 128.56	扁平な半円形で、表裏とも皿状に凹む。実測図左側面に穿 孔が2カ所あるが、いずれも半分は欠損している。裏面に 刃潰し痕のような溝状の凹みあり。石皿のようなものか？	N3/ 暗灰 表面はざらつく	覆土 b	9
10 礫	長 10.6 幅 6.0 厚 4.4 重 236.0	楕円状 全体に擦痕 使用痕特になし	2.5Y4/1 黄灰	床直 No.13	10
11 焼成 粘土塊	長 7.65 幅 3.9 厚 3.5 重 48.1	塊状 ちぎり取った状態のまま調整なく、胎土がひび割れ ている	砂粒多 良 10YR7/6 明黄褐	覆土 b	11
12 焼成 粘土塊	長 5.2 幅 4.0 厚 2.4 重 26.0	塊状 実測図表面はナデにより平滑化 裏面はちぎり取った状態 表面のみ被熱している	白色粒子多 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土	12
13 鉄製品 刀子?	長 5.1 幅 1.0 厚 0.7 重 3.38	刀子の破片と考えられる鉄片である。断面上側は平坦で、下側は尖る。全体的に鏽ぶ くれが著しい。		覆土	13
14 鉄製品 不明	長 3.0 幅 1.4 厚 0.3 重 4.8	90°に折れ曲がった鉄片。		カマド	14

SI-68 (第146・147図・図版二〇)

位置 N42 グリッドに位置する。

重複関係 住居東側で SI-69 積穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-69 (旧) → SI-68 (新) である。

規模・形状 東西 3.7m、南北 3.9m だが、東壁が 3.4 m と短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 12° - E である。

覆土 ローム粒をやや多く含む黒褐色土を主体とする。下層 (4・7 層) はロームブロックを多く含む。

壁 確認面から 25cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 黄褐色土ロームによる貼床を全面に薄く施す。

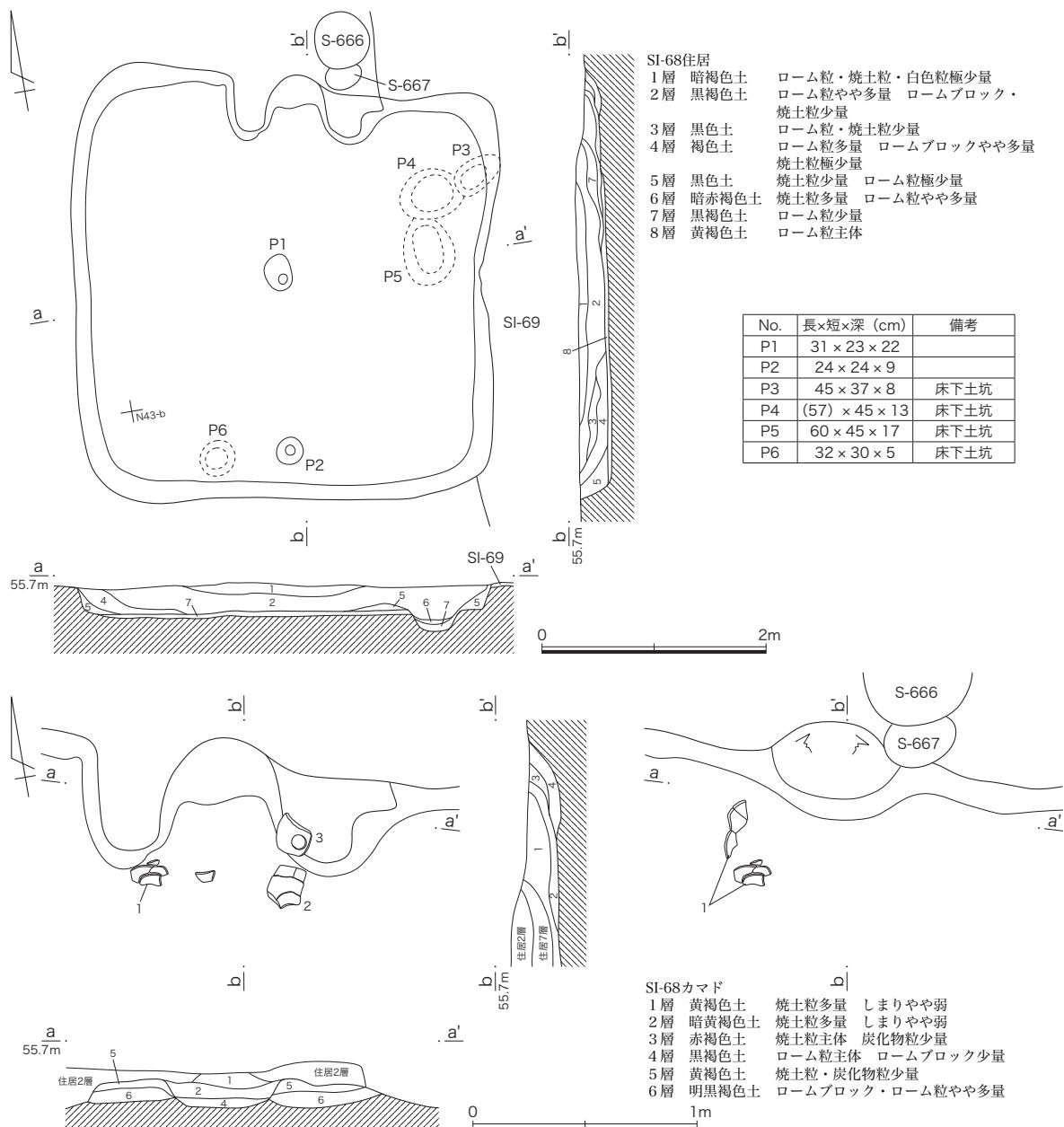
掘方 住居北東で床下土坑が3基（P3～P5）、住居南東で床下ピットが1基（P6）確認された。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された（P2）。円形の掘り方を呈し、極浅い。

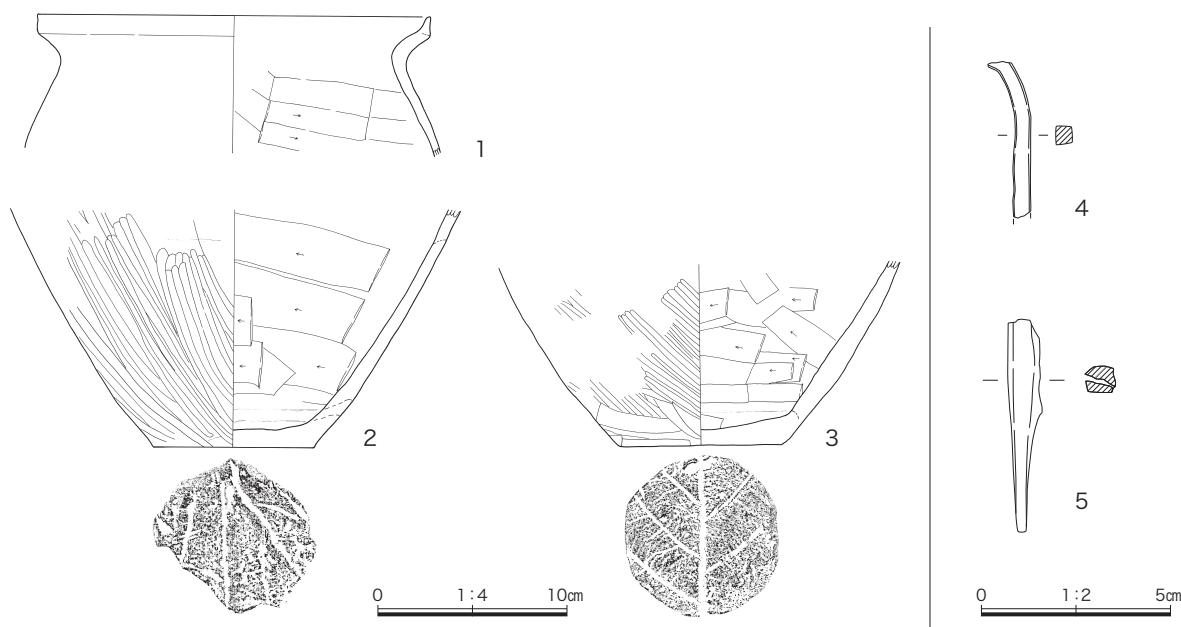
火処 北壁中央にカマドが構築されている。黄褐色土ロームを多く含む黒褐色土を積み上げ、その上に黄褐色粘土を貼り付けてカマド袖を構築している。2個体分の土師器甕の底部（第147図2・3）が右袖に貼り付いた状態で出土した。カマド左袖脇から出土した土師器甕の破片（第147図1）は、袖の下から出土した破片と接合している（第146図）。袖の内側は良く焼けて赤化しており、内部には黄褐色粘土や焼土が多量に堆積していた（2・3層）。煙道奥壁にも粘土を厚く貼り付けている。煙道は極短く、なだらかに立ち上がる。

その他の付属施設 住居中央に小ピットが1基確認された。柱穴状の掘り方を呈する。

遺物 出土量は少ない。覆土中から刀子及び釘が出土している（第147図4・5）。



第146図 SI-68 穫穴住跡



第147図 SI-68出土遺物

第59表 SI-68遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (20.8) 高 (7.0) (残) 1/8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ	砂礫・白色粒子・雲母多 良 10YR4/6 赤褐	床直 No.5+ カマド
2 土師器 甕	底 (8.4) 高 (12.5)	(内) ヘラナデつけ (外) 縦方向ミガキ 底部木葉痕 (残) 底 4/8	砂礫・白色粒子極多・雲 母多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.4
3 土師器 甕	底 (8.5) 高 (9.5)	(内) ヘラナデつけ (外) 縦方向ミガキ・底部近くヘラケズリ 外面に薄く粘土が付着 底部木葉痕 (残) 胴 2/8 底 8/8	砂粒・白色粒子多・雲母 やや多 良 5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.3
4 鉄製品 鎌か釘	長 4.0 幅 0.4 厚 0.6 重 2.75	断面方形で、上下端が欠損する。上側はカーブしている。		覆土
5 鉄製品 釘	長 5.4 幅 0.4 厚 0.4 重 3.46	断面方形。実測図上部が膨らんで割れている。		覆土

SI-69 (第148・149図・図版二一)

位置 N42 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側で SI-68 堪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-68 (旧) → SI-69 (新) である。また、住居南東部分で SB-86 掘立柱建物跡の P4 ~ P7 と重複する。新旧関係は、SI-69 (旧) → SB-86 (新) である。

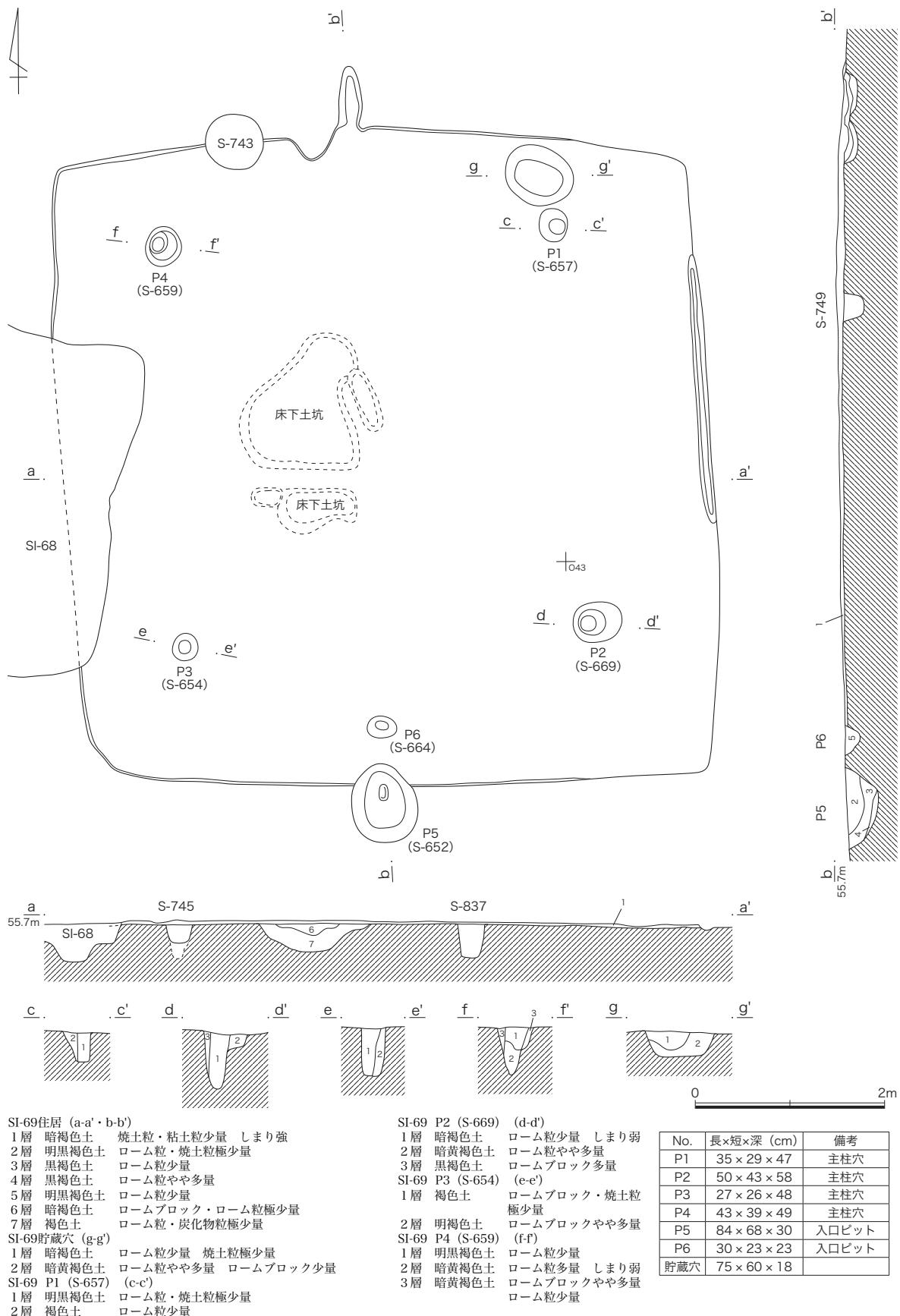
規模・形状 東西、南北とも 6.8 m の方形を呈すると考えられるが、南壁は推定の位置である。主軸方向は N - 3° - E である。

覆土 上部の削平により、覆土はほとんど失われている。また、床面、貼床についても不明である。

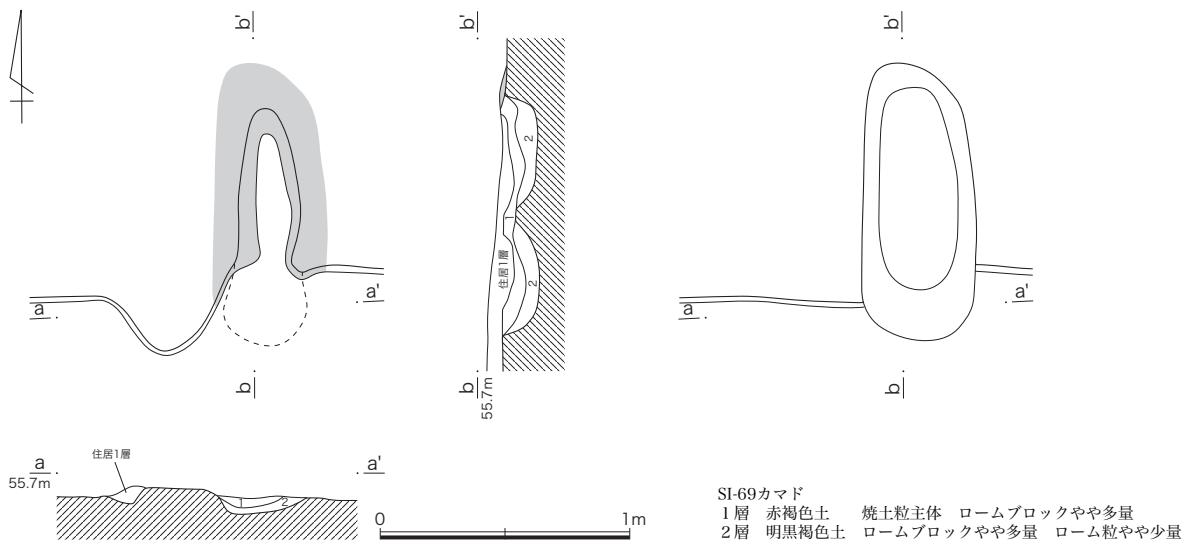
掘方 住居中央に不整形の浅い凹みが確認された。

壁・壁溝 壁は失われているため不明である。壁溝は東壁の中央で一部確認されている。

柱穴 住居プラン内で確認されたピット状遺構のうち、位置、形状、深さ、覆土の堆積状況から 4 基を



第148図 SI-69 竪穴住居跡 (1)



第149図 SI-69 竪穴住居跡（2）

SI-69 の主柱穴とした。いずれも梢円状の掘り方で、柱痕状の土層の周りにローム粒・ロームブロックを多く含む土層が堆積していた。また、P2・P4 には柱の当たりの痕跡が残っていた。

入り口ピット 南壁中央寄りにピット状遺構が確認されている (P6)。また、南壁中央から外に張り出しピット状の土坑が確認されている (P5)。住居に伴うものと考えられるが。上面の覆土が失われているため確定できない。いずれも覆土は黒褐色土を主体とする。

火処 北壁中央にカマドを構築している。左袖と奥壁が残存しているが、遺存状況は極めて悪い。左袖は地山を掘り残して作り出しているが、その上面に粘土を貼り付けていたものと考えられる。内部には焼土が薄く堆積していた。煙道は壁から 60cm ほど掘り込まれており、内側に粘土が厚く貼り付けられていた。幅は約 25cm と細長い。底面は瓢箪形に掘り込まれている。

貯蔵穴 北東隅で 1 基確認されている。東西に長い梢円形を呈し、深さは 25cm 程度である。内部から遺物は出土していない。

遺物 破片がわずかに出土したのみで、図化はできなかった。

SI-70 (第150～152図・図版二一・五一)

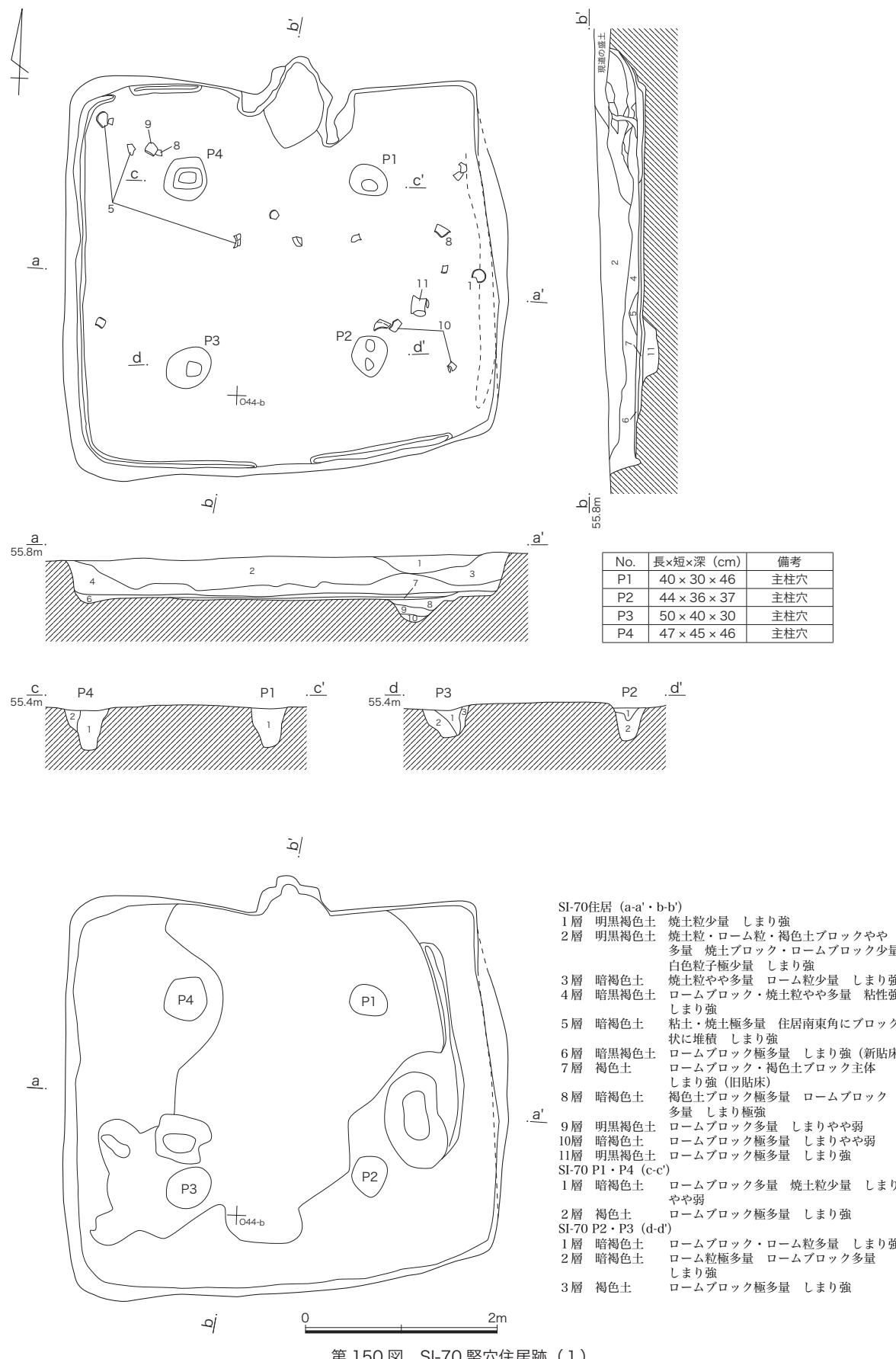
位置 O43 グリッドに位置する。平成 14 年度にカマドと北東隅、平成 17 年度にその他の部分を調査した。

規模・形状 東西 4.1m、南北 4.2 m だが、東壁が 3.8 m と短くなっているため、歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 1.5° - E である。

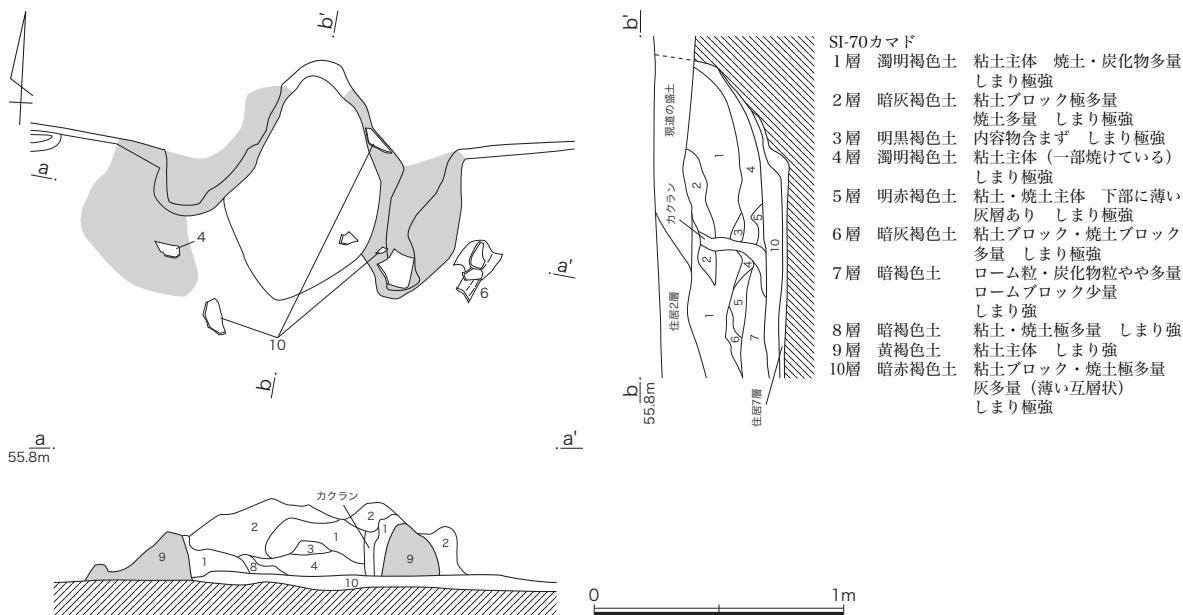
覆土 焼土粒・ローム粒・褐色土ブロックをやや多く含む明黒褐色土が厚く堆積している。

壁・壁溝 確認面から 40cm の深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝は北壁西側から南壁まで巡っているが、南壁中央部分では確認できなかった。また、東壁にも溝状の極浅い凹みが確認された。

床面・貼床 ロームブロックを極多量に含む暗黒褐色土による貼床 (6 層) と、ロームブロック及び褐色土ブロックを主体とする褐色土による貼床 (7 層) が確認されている。しかし、床面以外は建て替え、拡張などが見られないことから、床面のみ新たに貼り直したものと考えられる。住居南東隅の床面上には、粘土と焼土が多く含まれる暗褐色土 (5 層) がブロック状に堆積していた。



第150図 SI-70 穫穴住跡（1）



第151図 SI-70 竪穴住居跡（2）

掘方 床面から5cm未満と浅い。北東隅に、土坑状の浅い落ち込みが確認された。

柱穴 4本主柱。楕円形の掘り方を呈し、覆土はいずれも暗褐色土を主体とする。明瞭な柱痕は確認できなかった。P3・P4は底面が矩形を呈している。

火廻 住居北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存していた。袖は、白色粘土を積み上げて構築している。内側はよく焼けており、焼けた粘土や焼土が多く堆積していた（6～8層）。煙道は短く、やや急に立ち上がる。煙道にも粘土が張り付いたまま残っており、一部焼けていた。底面上には、炭化物が薄く堆積していた（10層上面）。カマド右袖の中から土師器甕の口縁部破片（第152図6）が出土している。

遺物 覆土中から多く出土している。床面に伴うものは第152図1の須恵器蓋、5・6・8・10の土師器甕で、比較的残りが良い。

SI-71（第153～155図・図版二一・五一）

位置 O43グリッドに位置する。

規模・形状 東西4.2m、南北4.1mの方形を呈するが、北東隅が飛び出しているため歪んでいる。

重複関係 住居南西隅でSB-86掘立柱建物跡のP2と重複するが、新旧関係は不明である。

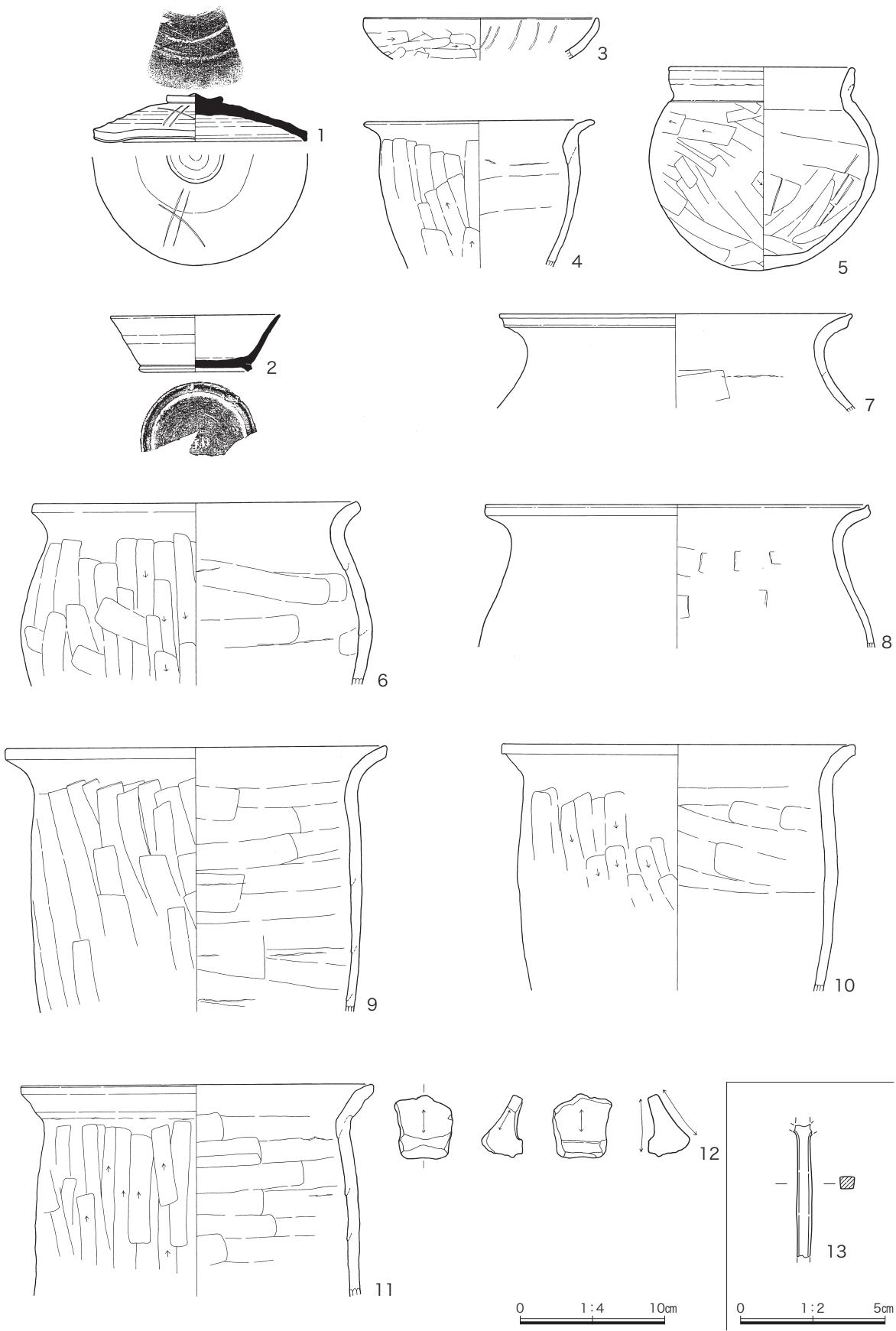
覆土 内容物をあまり含まない暗褐色土を主体とする。カマド近くの覆土中に、焼土粒・粘土粒を多く含む褐色土がブロック状に堆積している（4層）。

壁・壁溝 確認面から10cmの深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝は北壁中央から南西隅、南壁中央から東壁中央にかけて確認された。南壁西側は調査時に掘りすぎてしまったため、確認できなかった。

床面・貼床 床下を埋める覆土（6層）の上面が硬化していた。黄褐色土ロームによる貼床は部分的で、住居中央でやや厚くなっている。住居南西は貼床が施されていなかった。

掘方 四隅が浅く窪んでいる。いずれも内容物をあまり含まない暗褐色土や黒褐色土が堆積していた。

柱穴 4本主柱。いずれも円形の掘方を持つ。明確な柱痕は認められず、覆土にも内容物はあまり含まれない。



第152図 SI-70出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

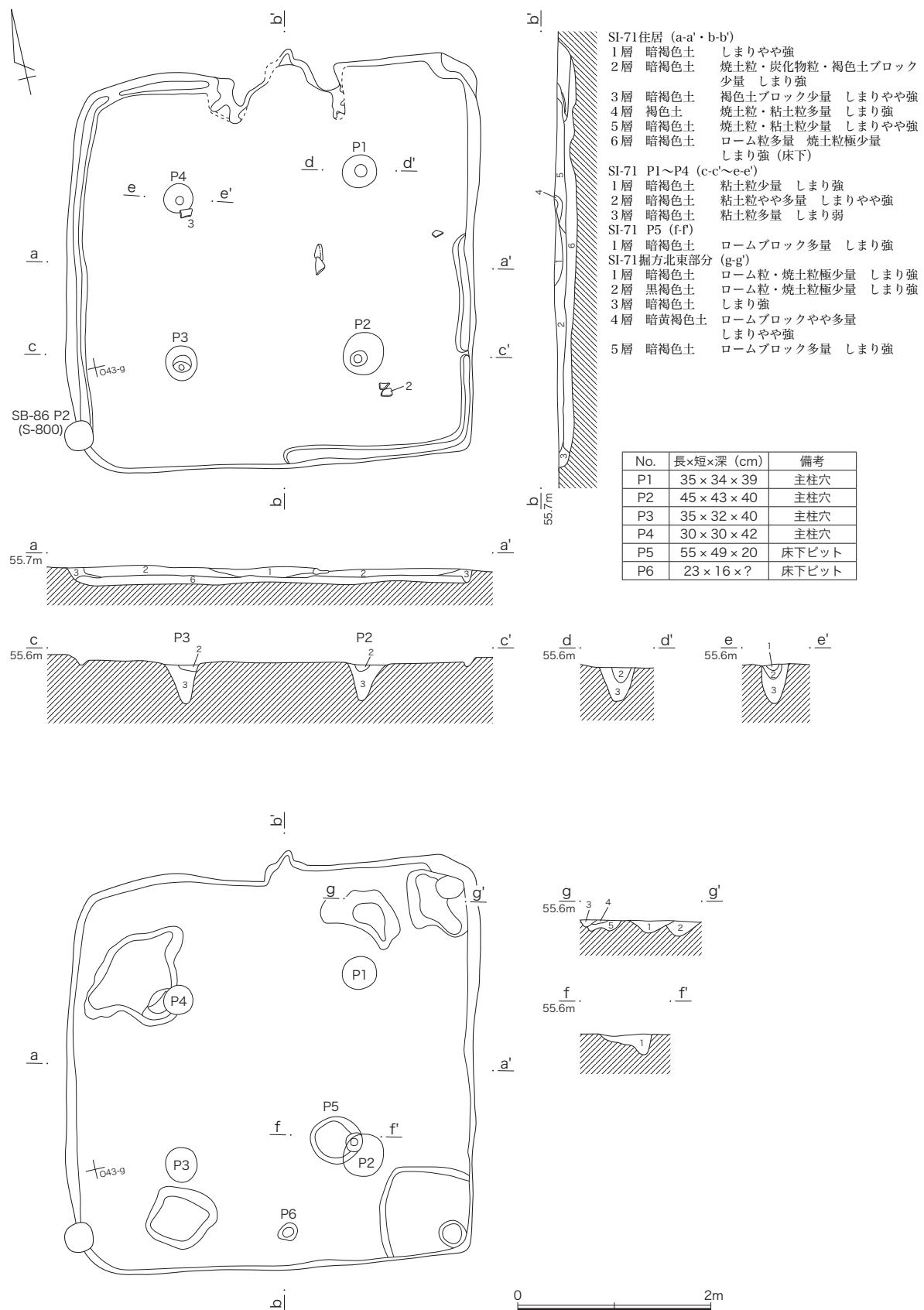
第60表 SI-70 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端 14.7 高 3.3 撮部径 3.9	内外面ともロクロナデ・天井部外面回転ヘラケズリ ボタン状の撮み 外面ヘラ記号有り (残) 7/8 益子産	砂礫・白色粒子多 良 N4/1 灰	床直 No.12
2 須恵器 坏	口 (11.8) 底 (7.8) 高 4.0	内外面ともロクロナデ・底部ヘラ切 り離し後回転ヘラケズリ 高台付 (残) 底 3/8 堀ノ内産	白色粒子多・黒色融解粒多 良 N6/ 灰	ベルト
3 土師器 皿?	口 (16.1) 高 (2.9)	(内) ヨコナデ→放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 1/8	砂粒・白色粒子・赤色融 解粒多 良 5YR4/6 赤褐	床下 No.23 + 覆土 a
4 土師器 甕	口 (16.0) 高 (10.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴弱いヘラケズリ 内面に輪積痕 (残) 2/8	砂粒・砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	カマド内 No.16+ 覆 土 a+c
5 土師器 甕	口 12.9 大 15.8 高 14.0	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ、底部近く指ナデ (外) 口ヨコナデ、上端にヘラ状工具による凹線胴ヘ ラケズリ 丸底 口縁部外面に輪積痕 (残) 6/8	砂粒・砂礫・白色粒子多 良 10YR5/2 灰黄褐	床直 No.1+2+ 5+ 覆土 c
6 土師器 甕	口 (22.6) 大 (24.2) 高 (12.6)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面煤状の付着物 (残) 2/8	砂粒・砂礫・白色粒子多 やや良 10YR6/4 にぶい黄橙	床直 No.21
7 土師器 甕	口 (24.2) 高 (6.5)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子・雲母多 二次被熱 7.5YR3/3 暗褐	床上 +5cm No.3 + 覆土
8 土師器 甕	口 (26.4) 高 (9.9)	(内) 口ヨコナデ胴弱いヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ 器壁薄い (残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母 やや多 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.10 + 覆土 a
9 土師器 甕	口 (26.3) 高 (18.4)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ・ヘラナデ 内面に輪積痕残る (残) 1/8	砂礫・砂粒やや多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.3+ ベル ト + 覆土 c
10 土師器 甕	口 (24.3) 高 (17.0)	(内) 口ヨコナデ胴弱いヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 摩滅強 (残) 2/8	砂粒・砂礫・白色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床直~ +10cm No.1+9+14+15+ 17+ ベルト + 覆土 a+b+ カマド 1層
11 土師器 甕	口 (24.3) 高 (14.6)	(内) 口ヨコナデ胴ナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 頸部・胴部内面に輪積痕残る (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 やや良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.13+ カド 右袖+カド
12 石製品 砥石	長 4.3 幅 4.1 厚 2.8 重 46.38	3面使用 表面上にタール状の付着物	2.5Y7/3 浅黄	覆土 c
13 鉄製品 鎌	長 4.4 幅 0.6 厚 0.6 重 2.69	棘籠被の破片。		ベルト

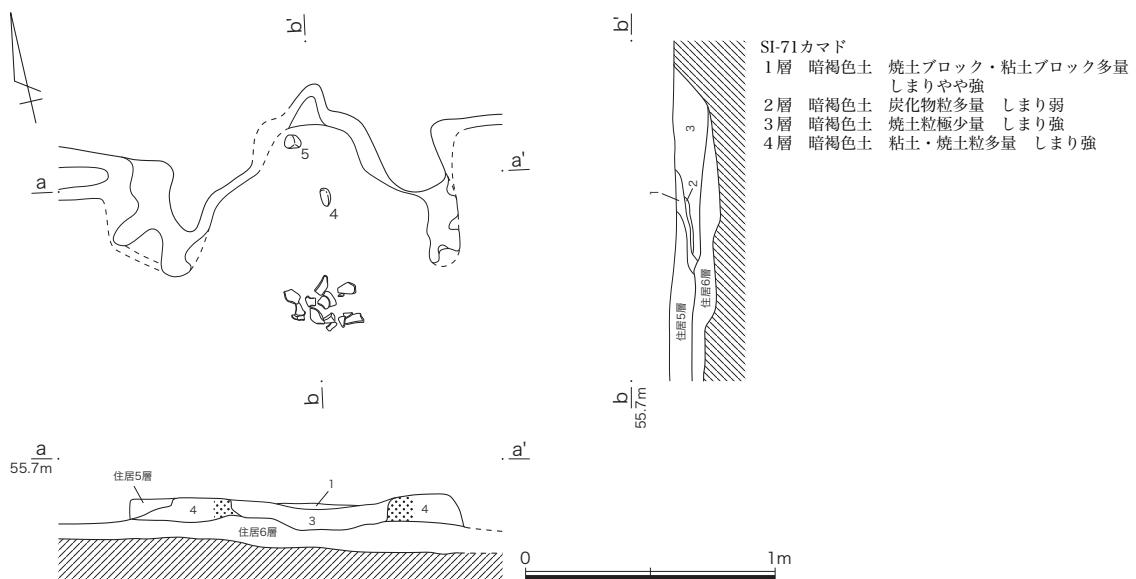
入り口ピット 掘方調査中に南壁中央寄りに1基確認した(P6)が、床面に伴うものか否かは判断できない。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。上部を削平されているため、遺存状況は極めて悪い。袖は黄褐色粘土を用いて構築されているが、暗褐色土が多く混じっているため大きく崩れている。袖の内側はよく焼けている。内部には暗褐色土が厚く堆積し(3層)、その上に炭が薄く堆積している(2層)。煙道は短く、緩やかに立ち上がる。焚口部分からは、土師器甕の底部破片がまとまって出土しているが、実測可能なものはなかった。掘方は凸字形を呈する。

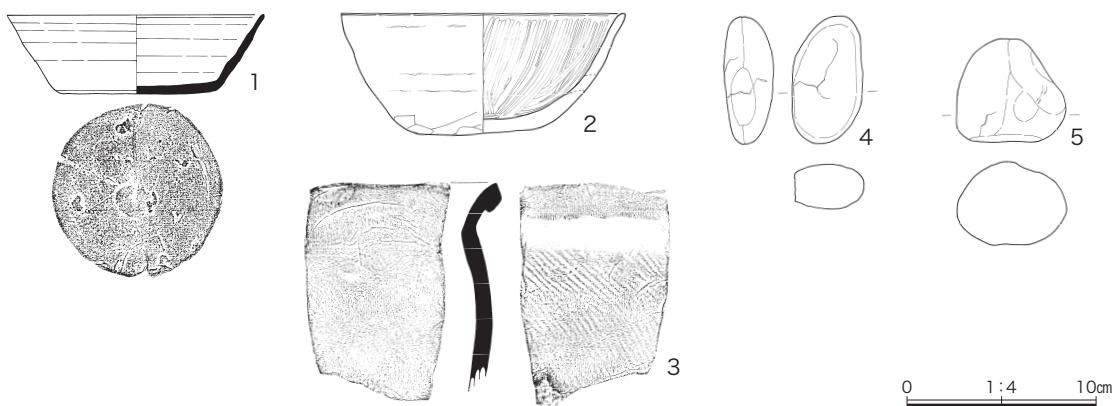
遺物 出土量は少ない。第155図2はP2南側の床面上から、3はP4南側の床面上から出土している。



第153図 SI-71 竪穴住居跡（1）



第154図 SI-71 穫穴住居跡（2）



第155図 SI-71 出土遺物

第61表 SI-71 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (13.6) 高 4.1	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後調整なし (残) 4/8 益子産	白色粒子・砂粒多・雲母微 二次被熱 2.5YR4/4 にぶい赤褐	覆土 b +床下
2 土師器 壺	口 (15.0) 高 6.4	(内) 密な放射状ミガキ (外) 丁寧なナデ、底部ヘラケズリ 塊形 赤色土器？(内面全体赤化) (残) 2/8	白色粒子やや多・雲母少 良 2.5YR4/6 赤褐	床直 No.8
3 須恵器 甕	破片	(内) 無文ナデ (外) 平行タタキ 折り返し口縁 新治産	白色粒子・雲母やや多・ 砂粒少 良 10Y6/1 灰	床直 No.4
4 礫	長 6.7 幅 3.6 厚 2.5 重 82.4	左側面に人為的に切り取られた部分あり 全面磨り面	5Y8/1 灰白	カマド内 No.1
5 礫	長 5.4 幅 5.8 厚 4.7 重 199.6	使用痕特なし 煤状の付着物が薄く残る 弱く赤化	5Y4/1 灰	カマド内 No.1

SI-72 (第156・157図・図版二〇・五一)

位置 N42 グリッドに位置する。

重複関係 住居東壁がSI-73 壓穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-72 (旧) → SI-73 (新) である。また、柱穴と入り口ピットが2組あることから、住居は少なくとも1回の建て替えを想定できるが、残存状況が悪く、詳細は不明である。

規模・形状 残存部分で東西5.0m、南北4.2mだが、南壁が3.7mと極端に短く、各隅もかなり丸みをおびているため大きく歪んでいる。主軸方向は、カマドとP5を結ぶラインがN-10°-E、P6を結ぶラインは真北を向いている。

覆土 ほとんど残っていないが、褐色土を少量含む暗褐色土を主体とする。

壁 壁は削平により不明である。壁溝はない。

床面・貼床 削平が床面にまで及んでいるため、不明である。

掘方 不規則に浅く窪んでいるが、おそらく人為的なものではない。

柱穴 2本主柱。柱穴は4本あるが、形状で2組に分けられ、時期差があるものと考えられる。P1・P2は南北に長い長方形の掘方の柱穴である。P1には柱痕と考えられる黒褐色土が堆積していたが、P2は覆土が水平に堆積しており、柱痕は認められなかった。P3・P4は円形の掘方の柱穴で、どちらにも柱痕と考えられる暗褐色土が堆積している。これら二組の柱穴の新旧関係は不明である。

入り口ピット 南壁中央寄りに2基確認された(P5・P6)。いずれも楕円状の掘り方を呈する。西側のP5には、柱痕と考えられる暗褐色土が堆積していた。新旧関係及び柱穴との組み合わせ関係は不明である。

火廻 北壁中央にカマドを構築している。両袖と奥壁が残存しているが、遺存状況は極めて悪い。両袖は地山を馬の背状に掘り残した後、黄褐色粘土を貼り付けて構築している。内部にはロームブロックと焼土を多く含む褐色土が堆積していた(1層)。また、奥壁にも厚く粘土を貼り付けている。煙道は短く、急に立ち上がる。また、掛け口にあたる部分には須恵器甕の口縁部が逆位に据えられていた(第157図5)。焚口付近では、土師器甕(第157図6)、土師器壺(第157図3)の破片がまとまって出土している。掘方では袖の地山が掘り残されていたが、調査中に誤って掘りすぎてしまったため、推定範囲を図示した。また、両袖の外側と焚口部分に、ごく浅い土坑状の掘り込みが確認された。

遺物 覆土が失われているため、カマド周辺以外ではほとんど遺物は出土していない。住居北東隅から出土した第157図4は、床面から10cm程度浮いている。

SI-73 (第158・160図・図版二〇・五一)

位置 O42 グリッドに位置する。

重複関係 住居西壁がSI-72 壓穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-72 (旧) → SI-73 (新) である。また、南壁中央でSB-87 堀立柱建物跡のP6と重複する。新旧関係はSB-87 (旧) → SI-73 (新) である。

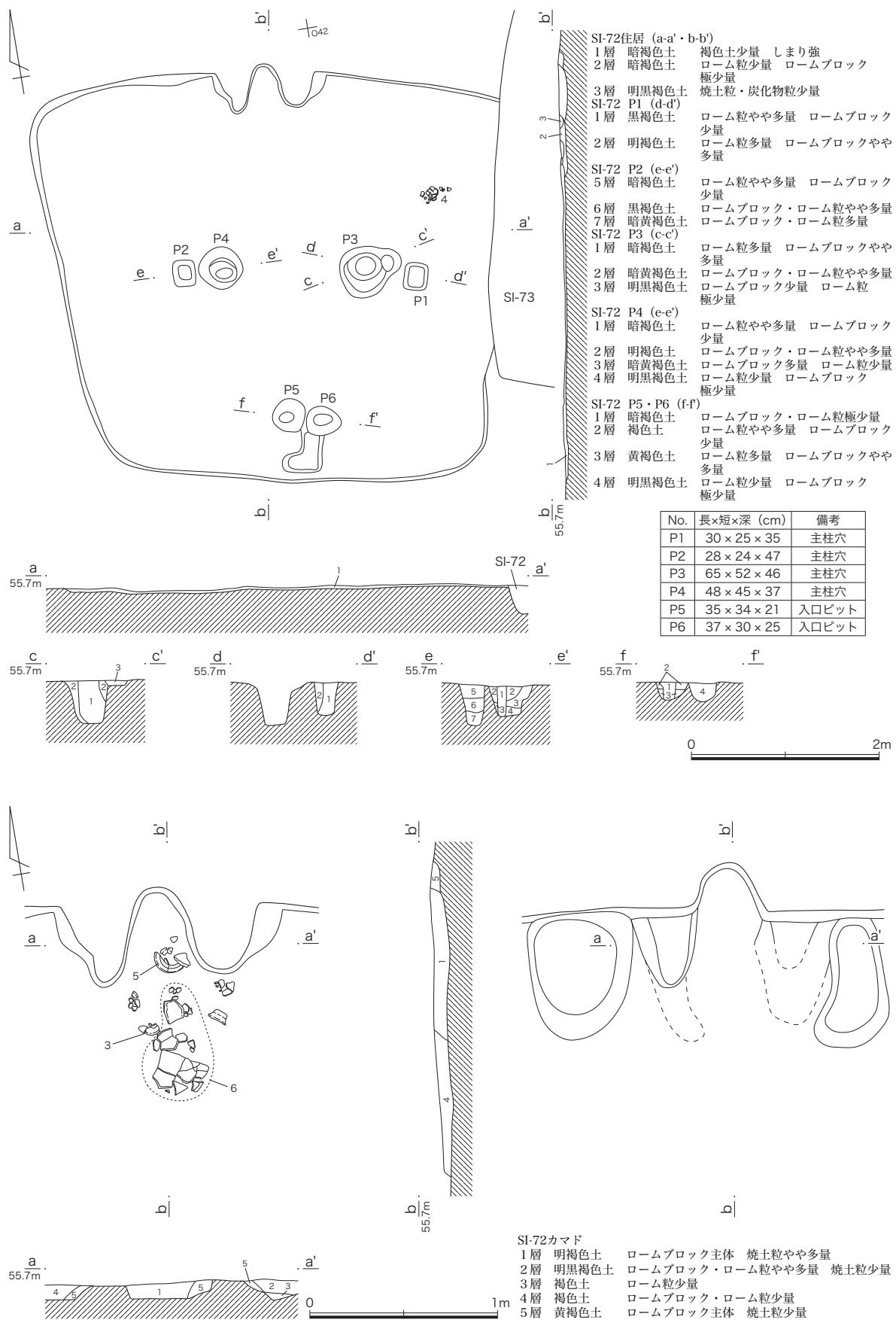
規模・形状 東西4.3m、南北4.2mの方形を呈するが、東壁がやや膨らみ、北東隅も鈍角になっていることから、全体的に歪んでいる。主軸方向はN-15°-Eである。

覆土 暗褐色土を主体とするが、部分的にローム粒や焼土粒を多く含む土層が堆積している(2層・4層)。

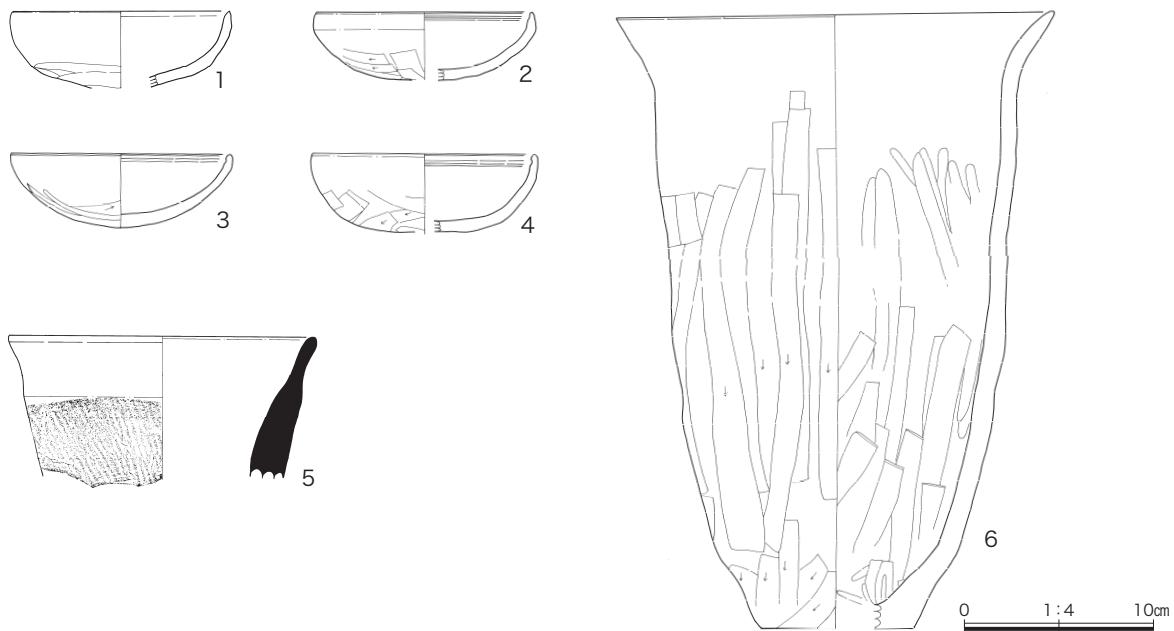
壁・壁溝 確認面から約20cmの深さで、ほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分と張り出し部分を除き全周すると考えられるが、南西隅でははつきりとしない。

床面・貼床 黄褐色土ロームで全体的に貼床を施している(6層)が、この土層を除去した後に、さらに

第3章 発見された遺構と遺物



第156図 SI-72 穫穴住跡



第157図 SI-72出土遺物

第62表 SI-72遺物観察表

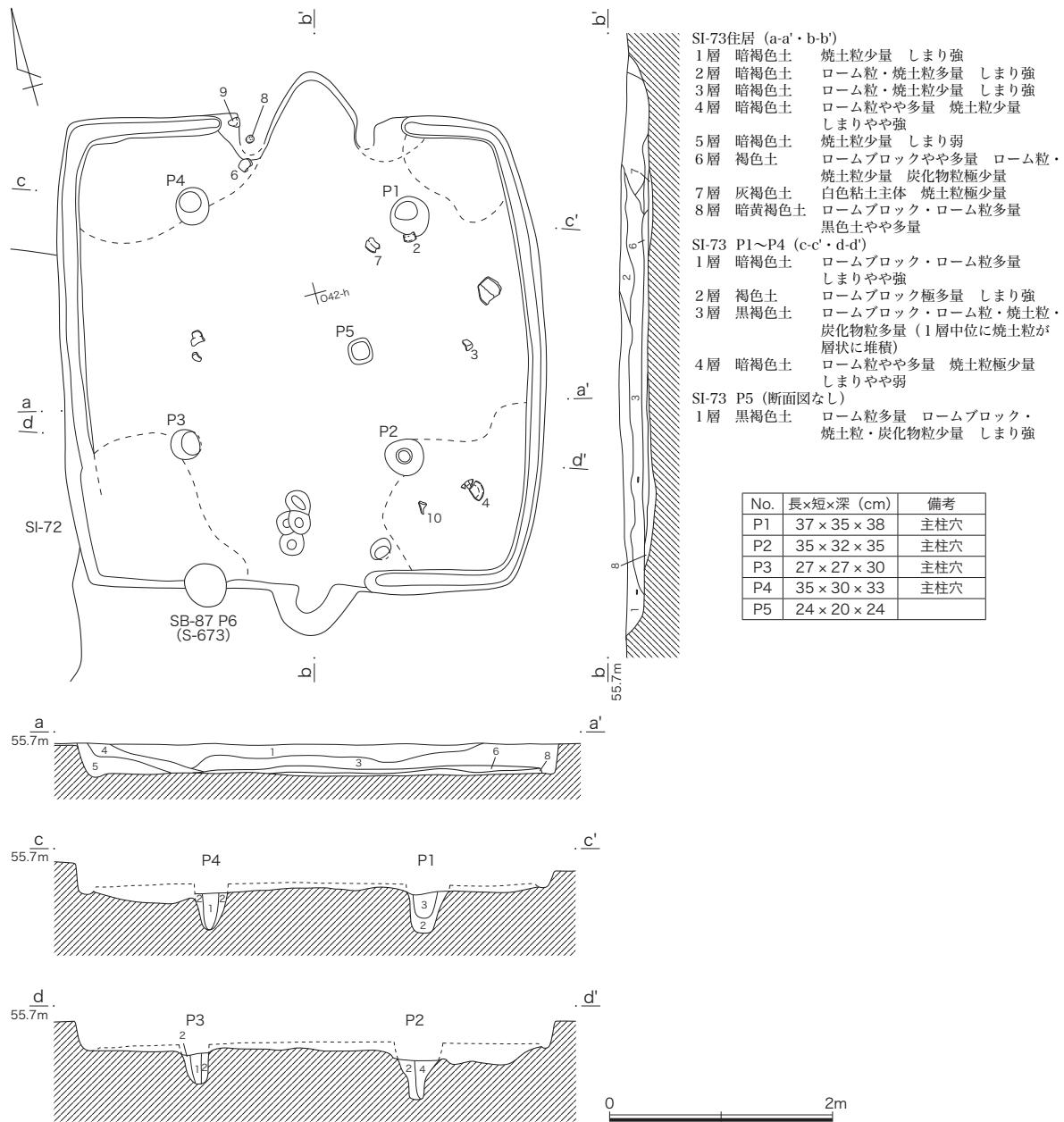
NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (11.4) 高 (4.0)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ? 内面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土
2 土師器 壺	口 (11.6) 高 (3.6)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	覆土
3 土師器 壺	口 11.7 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ? 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 5/8	白色粒子多・砂礫少 良 7.5YR3/4 暗褐	カマド内 No.7
4 土師器 壺	口 (11.8) 高 (4.7)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 3/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR3/4 暗褐	床上 +10cm No.9 + 覆土
5 須恵器 甕	口 (16.2) 高 (7.5)	(内) 無文ナデ (外) 平行タタキ (残) 3/8 産地不明	砂礫・白色粒子多 やや不良 2.5Y7/4 浅黄	カマド内 No.2
6 土師器 甕	口 (23.2) 底 (8.2) 高 32.2	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ底部近くヘラケズリ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 4/8	砂礫・白色粒子極多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	カマド内 No.4+8+ 床下 + 覆土

硬化した面を確認した(8層上面)。床面以外の作り替えが認められることから、住居構築時の床面上(8層上面)に、さらに貼床を施したものと考えられる。いずれも深さは5cm程度である。

掘方 住居の四隅が窪んでいる(第158図破線部分)。深さは10～15cmで、内部には8層が堆積していた。

柱穴 4本主柱。いずれも円形の掘方で、柱痕状の土層の周りにロームブロックを多く含む褐色土が堆積していた。

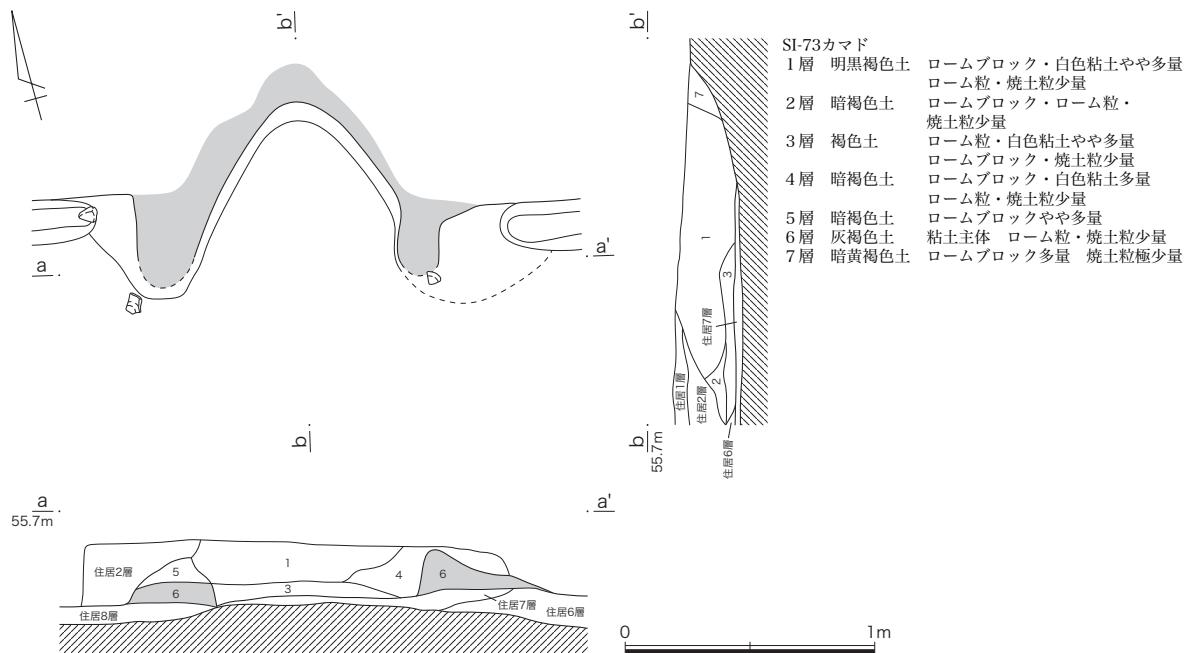
入口ピット・張り出し部 南壁中央に、壁から40cm外へ掘り込まれた張り出し部と、小ピットが並んだ入口ピットが確認された。張り出し部は半円形の掘方で、底面は住居床面レベルと同じである。住居覆土



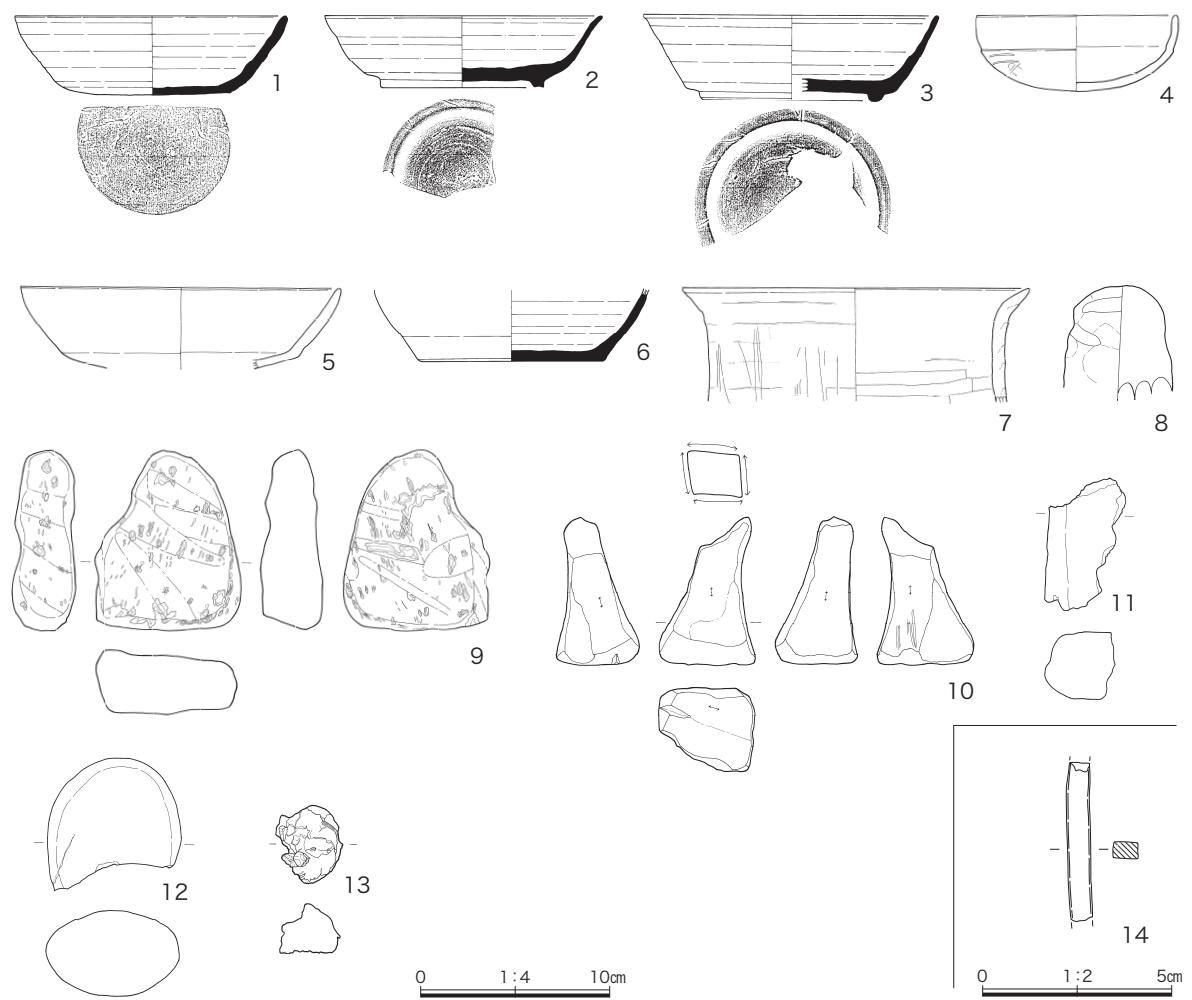
第158図 SI-73 壁穴住跡（1）

上層と同じ土層（1層）が堆積していた。入口ピットは直径約20cm、深さ20～30cmの小ピット4基が布堀状に連なっている。張り出し部とカマドを結んだ主軸方向から若干西側にずれていることから、両者の間には時期差がある可能性も考えられる。

火廻 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存していた。袖は、床面上に灰褐色粘土を積み上げて作られており、奥壁にも粘土を貼り付けている。内部には、粘土ブロックがやや多く堆積していたが、焼土や炭化物は少なかった。火床面は床面よりわずかに窪んでいるが、灰や焼土は残っておらず、上面には粘土が堆積していた（3層）。煙道は短く、急な角度で立ち上がる。袖の粘土を掘り下げるとき、壁溝の先端が確認された。カマドを構築した際に、カマド袖と重なる部分の壁溝を埋めたものと考えられる。掘方



第159図 SI-73 竪穴住跡（2）



第160図 SI-73 出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第63表 SI-73 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 14.2/16.0 高 4.2	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 口縁部梢円形に歪む (残) 5/8 益子産	砂礫・白色粒子・ 黒色融解粒多 良	床上 +5cm No.9
2 須恵器 壺	口 (14.6) 底 (4.3) 高 3.8	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 2/8 産地不明	白色粒子多 良 10YR6/1 灰	床上 +5cm No.2
3 須恵器 壺	口 (15.5) 底 (9.4) 高 4.4	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 5/8 産地不明	白色粒子多・砂粒少 良 7.5Y4/1 灰	床上 +5cm No.5
4 土師器 壺	口 10.5 高 4.0	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ? 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 3/8	白色粒子やや多 良 10YR8/3 浅黄橙	覆土
5 土師器 壺	口 (16.8) 高 (4.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体不明 摩滅強 内外面漆仕上げ (残) 2/8	砂礫多 良 10YR8/3 浅黄橙	床上 +5cm No.6
6 須恵器 甕?	底 (9.8) 高 (3.7)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ? (残) 1/8 益子産?	砂礫多・白色粒子やや多 良 5Y7/2 灰白	床下
7 土師器 甕	口 (18.4) 高 (6.0)	(内) 口ヨコナデ胴ナデ (外) 口ヨコナデ胴粗いヘラケズリ (残) 1/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR5/6 明褐	床上 +10cm No.8
8 土製品 支脚	長 6.1 径 5.6 重 165.77	手捏ね成形 表面に指頭圧痕 胎土極粗い	砂礫多 二次被熱 10YR6/6 明黄褐	床直 No.11
9 石製品 不明	長 9.5 幅 7.6 厚 3.3 重 81.18	表・裏面及び左側面に溝状の凹みあり。左側面は磨れて平 滑化。荒砥か?	10YR6/2 灰黄 輕石	床直 No.1
10 石製品 砥石	長 7.8 幅 5.1 厚 4.4 重 124.52	側面及び底面の5面使用。研ぎ減りが著しく、下端に向かつて撥形に開く。実測図裏面に刃潰し痕あり。 表面にタール状の付着物が薄く残る。	2.5Y7/4 浅黄	床上 +5cm No.10
11 石製品 石皿	長 7.1 幅 4.0 厚 3.5 重 103.4	全面磨面 側面は石の目もつぶれている 割れ面に穿孔?の痕跡有り	2.5Y7/6 灰白	覆土
12 礫	長 7.0 幅 7.0 厚 4.6 重 259.7	断面梢円形 全体に擦痕 割れ面に赤色の付着物	10Y4/1 灰	覆土
13 焼成 粘土塊	長 4.1 幅 3.3 厚 2.8 重 25.5	塊状 実測図表面は弱いナデ、草本植物の痕跡残る 裏面はちぎり取った状態 胎土は粗く、0.5～1cm 大の礫が多く練り込まれている	砂礫極多・白色粒子多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土
14 鉄製品 鎌か釘	長 4.1 幅 0.8 厚 0.5 重 2.44	断面方形だが、錆ぶくれが激しく、原型をとどめていない。上下端が欠損しているものと考えられる。		覆土

は西側のみ凸字形を呈している。

遺物 出土量は少なく、床面に伴うものはカマド左袖周辺から出土した土製支脚の破片（第160図8）、須恵器甕の破片（第160図6）、用途不明の石製品（第160図9）のみである。9の石製品は輕石を使用しており、似た形のものがSI-67豎穴住居跡から出土している（第145図9）。

SI-74 (第161～164図・図版二二・五二)

位置 O41グリッドに位置する。

重複関係 住居プランの変更と床面の作り替えを伴う拡張が行われており、SI-74a・bの2時期に分けられる。新旧関係は、SI-74b(旧)→SI-74a(新)である。

SI-74a(第161図)

規模・形状 東西4.2m、南北3.7mの東西に長い方形を呈するが、南西隅のみクラシック状になっている。

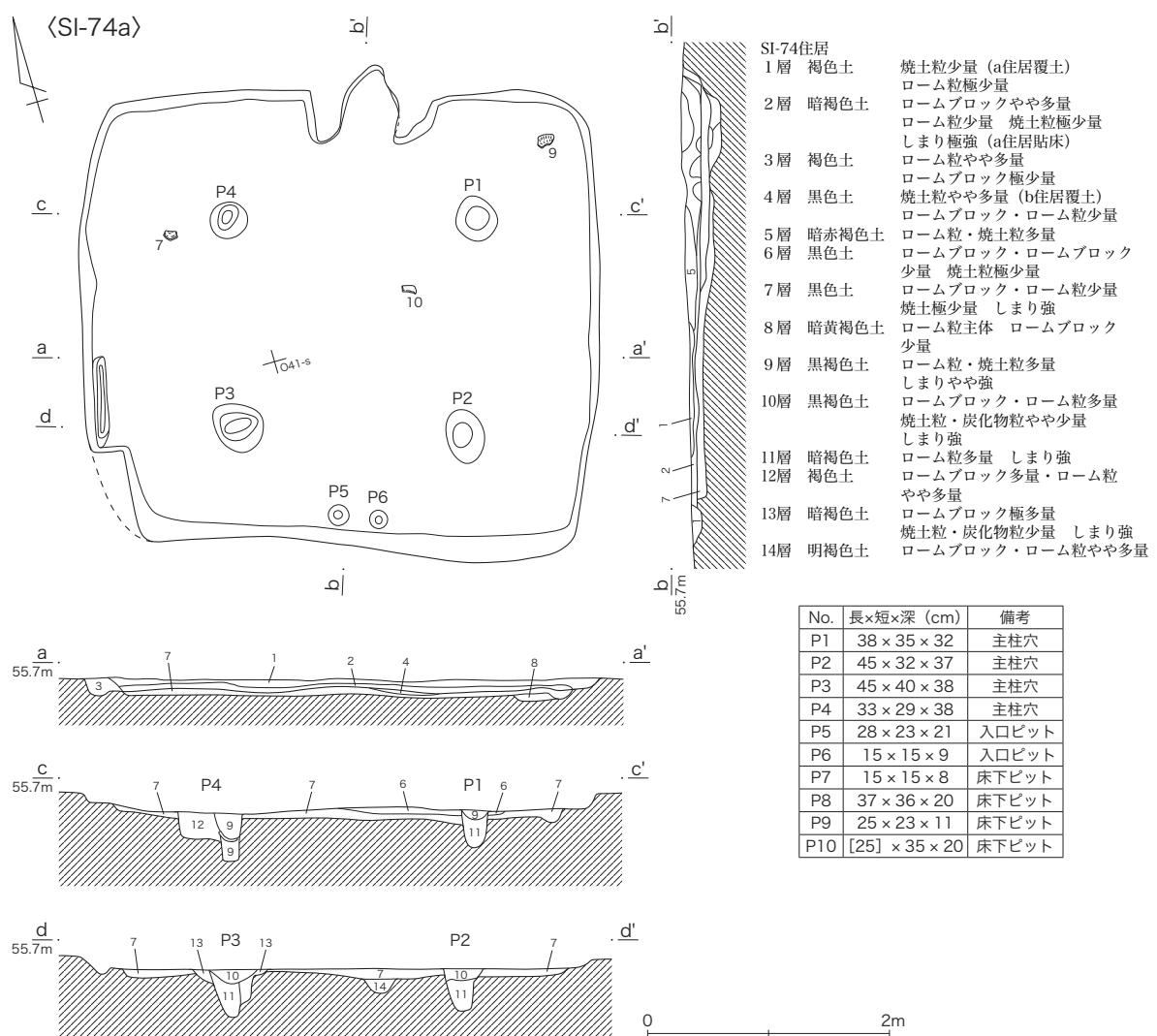
棚状遺構の可能性もあるが、上面が削平されているため不明である。主軸方向はN-18°-Eである。

覆土 褐色土を主体とする。カマド前面には焼土粒を多く含む暗褐色土が堆積している(5層)。

壁・壁溝 確認面から5cmと浅く、壁はややなだらかに立ち上がると思われる。壁溝は西壁南側のみ部分的に確認されている。

床面・貼床 SI-74bと重複する部分は黄褐色土ロームと暗褐色土が混ざった土層で貼床を施している(2層)。重複しない部分は地床である。

掘方 住居北東部分と西側及び南東隅が、不整形の土坑状に浅く凹んでいる(第163図破線部分)。



第161図 SI-74 積穴住跡(1)

柱穴 4本主柱いずれも楕円状の掘り方を呈し、P1～P3はローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。

P4はローム粒と焼土粒を多く含む黒褐色土が堆積している。P3・P4は柱痕状の土層が確認された。

入り口ピット 南壁中央寄りに2基確認された(P5・P6)。極浅い小ピットである。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。カマド部分を大きく掘り込んだ後に黒褐色土で埋め、その上に黄褐色粘土を積んで袖を構築している。内部には粘土(2層)の下に焼土・炭化物(3層)が互層となって多量に堆積していた。燃焼部の底面は粘土層で、これはSI-74bのカマドに使用されていた粘土が崩落した後、その面を火床面として使用したためと考えられる。煙道は短く、奥壁は急激に立ち上がる。奥壁部分にも粘土が貼り付けられている(5層)。

遺物 カマド周辺にまとまって出土しているが、全体の出土量は少ない。また、床面に伴う遺物はない。

SI-74b (第163図)

規模・形状 東西3.7m、南北3.15mの方形を呈するが、南壁の中央がやや膨らんでいる。主軸方向はN-14°-Eである。

壁・壁溝 SI-74aに削平されているため不明である。壁溝は東壁に部分的に掘り込まれている。

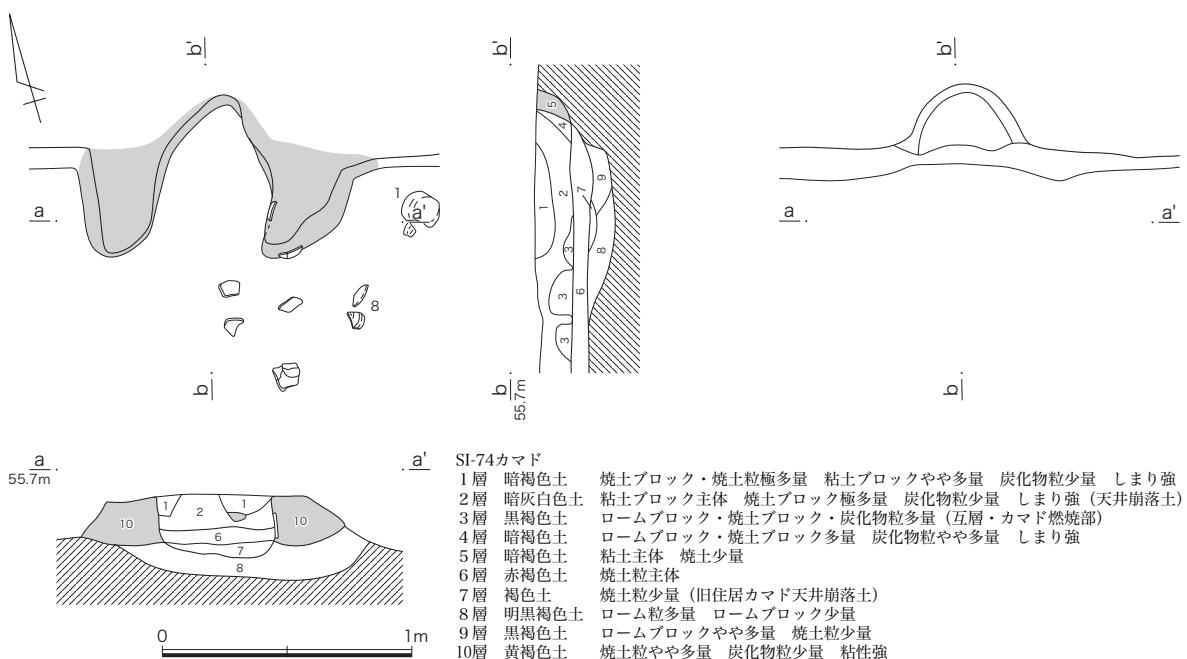
覆土 SI-74aの床下が覆土となる。内容物をあまり含まない黒色土で、踏みしめられて硬くなっている。

柱穴 SI-74aと共に西側に古い柱穴を埋めた痕跡が確認された(P10)。SI-74aの床下(7層)に相当する土層が堆積していた。

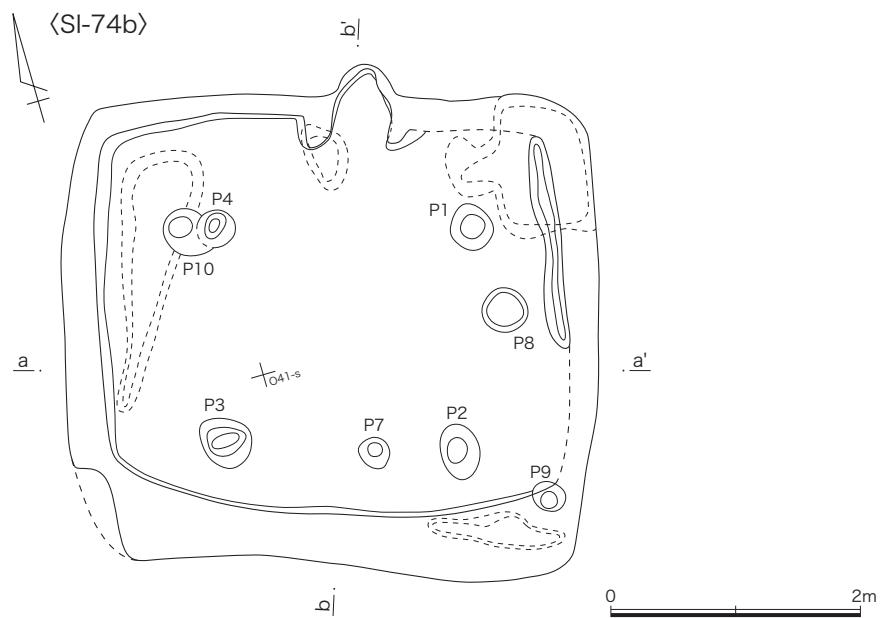
入り口ピット P2とP3の間に1基確認された(P7)。円状の掘り方を呈する浅い小ピットである。

火処 両袖と奥壁はSI-74aと共に、火床面はSI-74aの火床面よりも約20cm下となっている。SI-74a火床面との間には焼土を少量含む黄褐色粘土が堆積しており、SI-74bカマド天井の崩落土と考えられる。

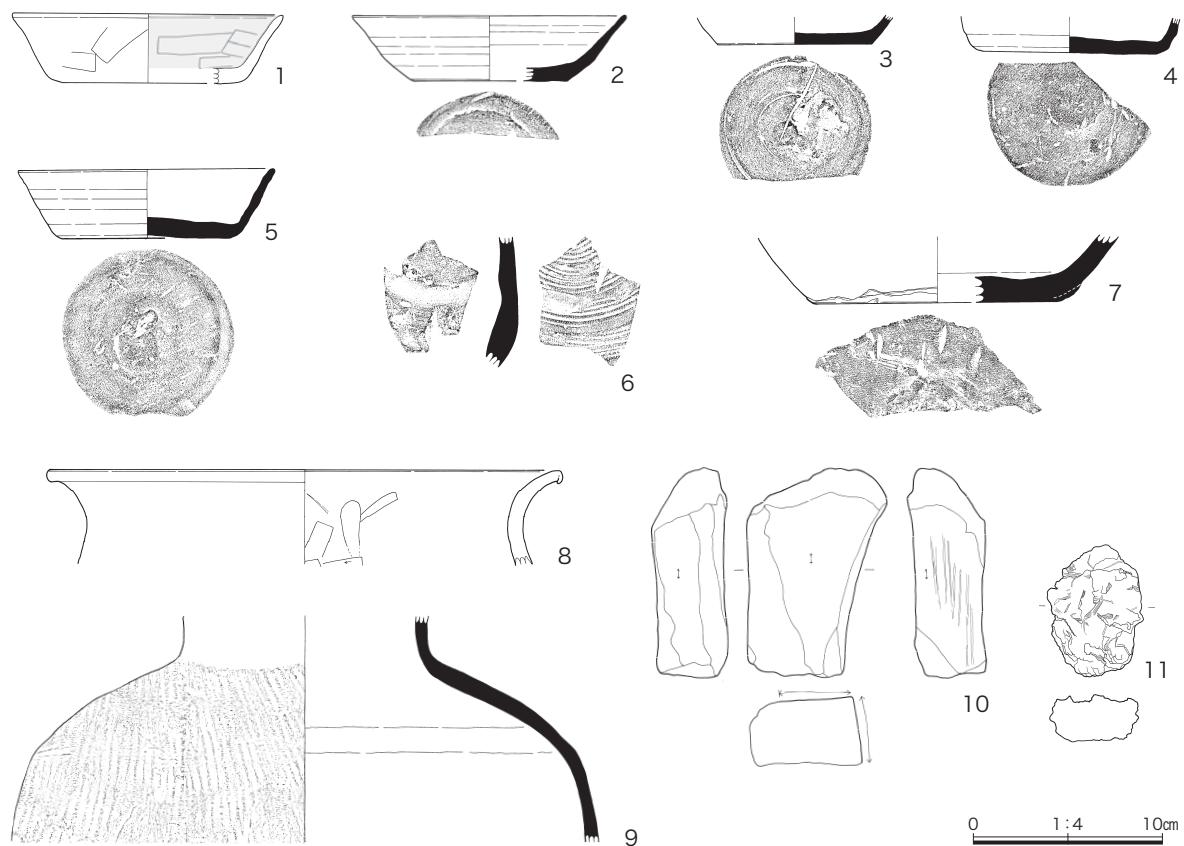
遺物 SI-74bに確実に伴う遺物は出土しなかったが、床下から出土した須恵器壺(第164図3)が伴う可能性がある。



第162図 SI-74 積穴住居跡(2)



第163図 SI-74 穫穴住居跡（3）



第164図 SI-74 出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第64表 SI-74 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 坏	口 (14.4) 底 (10.0) 高 3.6	内外面とも回転台を使用したナデ (残) 1/8	白色粒子多・砂礫少 やや良 10YR6/1 褐灰	覆土
2 須恵器 坏	口 (14.4) 底 (8.2) 高 3.4	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し (調整不明) (残) 1/8 益子産	砂粒・白色粒子少 良 N6/ 灰	覆土
3 須恵器 坏	底 8.2 高 (1.4)	底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 4/8 産地不明	砂礫・白色粒子多 良 2.5Y7/3 浅黄	床下
4 須恵器 坏	底 9.0 高 (1.9)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 4/8 産地不明	砂礫少・白色粒子やや多 やや良 2.5Y7/1 灰白	覆土
5 須恵器 坏	口 (13.6) 底 (9.0) 高 3.6	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ (残) 底 8/8 益子産?	白色粒子多・砂礫やや多 良 5Y7/2 灰白	床上 +15cm No.1
6 須恵器 提瓶	破片	(内) 指ナデ (外) カキメ 産地不明	白色粒子微 良 2.5Y8/1 灰白	覆土
7 須恵器 甕?	底 (13.0) 高 (3.5)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後ヘラケズリ (残) 2/8 産地不明	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母少 良 5Y7/1 灰白	床上 +15cm No.11
8 土師器 甕	口 (27.0) 高 (4.9)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) ヨコナデ (残) 1/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母少 二次被熱 2.5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.2
9 須恵器 甕	高 (12.0)	(内) ヨコナデ (外) 平行タタキ・口ヨコナデ (残) 3/8 新治產	砂礫・白色粒子多 やや良 7.5YR6/1 褐灰	床上 +15cm No.9
10 石製品 砥石	長 11.6 幅 5.9 厚 3.7 重 413.27	実測図表面及び両側面の3面使用で、残りの部分は欠けて いる。右側面の使用が顕著で、湾曲している。表面は欠け た後、再び研ぎ面としている。	2.5GY7/1 明オリーブ灰	床上 +15cm No.8
11 焼成 粘土塊	長 6.9 幅 4.9 厚 2.8 重 60.0	塊状 ちぎり取った後に軽く握った状態 表面はナデなどの調整なく、草本植物の痕跡残る 胎土は粗い	赤色融解粒やや多・白色 粒子・雲母微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土

SI-75 (第165・166図・図版二二・五一)

位置 P41 グリッドに位置する。

規模・形状 東西 4.6 m、南北 4.25 mだが、南壁が 4.0 m と短く、また北西隅が飛び出しているため歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 16° - E だが、カマド位置がはつきりとしないため確定できない。

覆土 ローム粒、焼土ブロック、炭化物ブロックを多く含む黒褐色土を主体とする。他の住居に比べ覆土に炭化物を多く含んでいるため、色調が暗い。また、住居北東から中央にかけては、床面の上に薄い粘土の層が広がっており、その上に炭化物層、焼土層が薄く広がっている (6層・第165図破線部分)。貼床中には、焼土粒子が多く含まれている。

壁・壁溝 確認面から 20cm の深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝は、現代の水路による攪乱を受ける北西隅以外とカマド部分を除き全周している。

床面・貼床 黄褐色土ロームによる貼床を全面に施しているが、南東側部分は特に厚く貼っている (7層)。

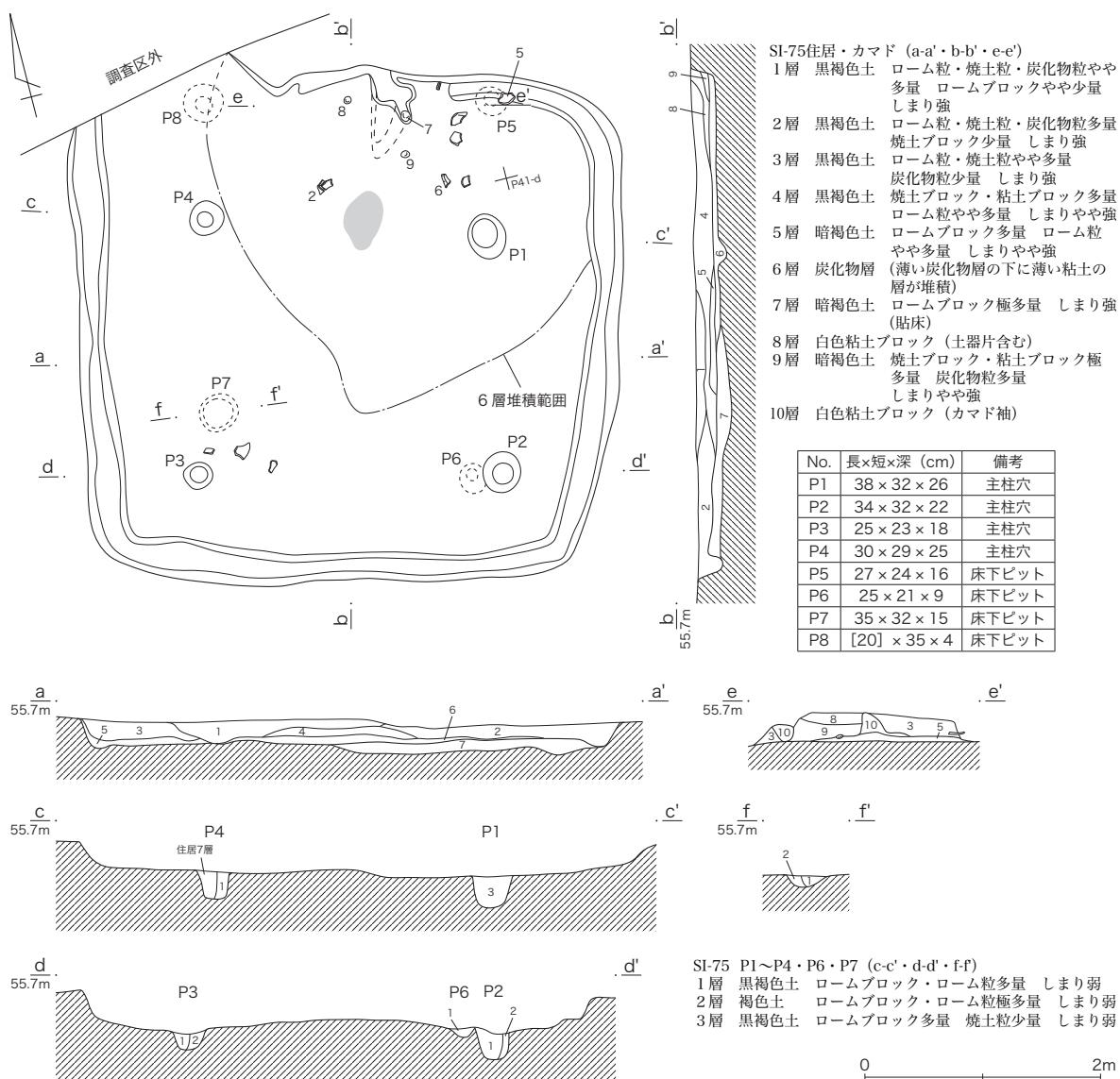
掘方 カマドから住居北東隅にかけて、台状に高く掘り残されている。住居中央が窪んでおり、壁際は浅い。

掘り方調査中に4基の小ピット（P5～P8）を確認した。いずれも浅い皿状である。

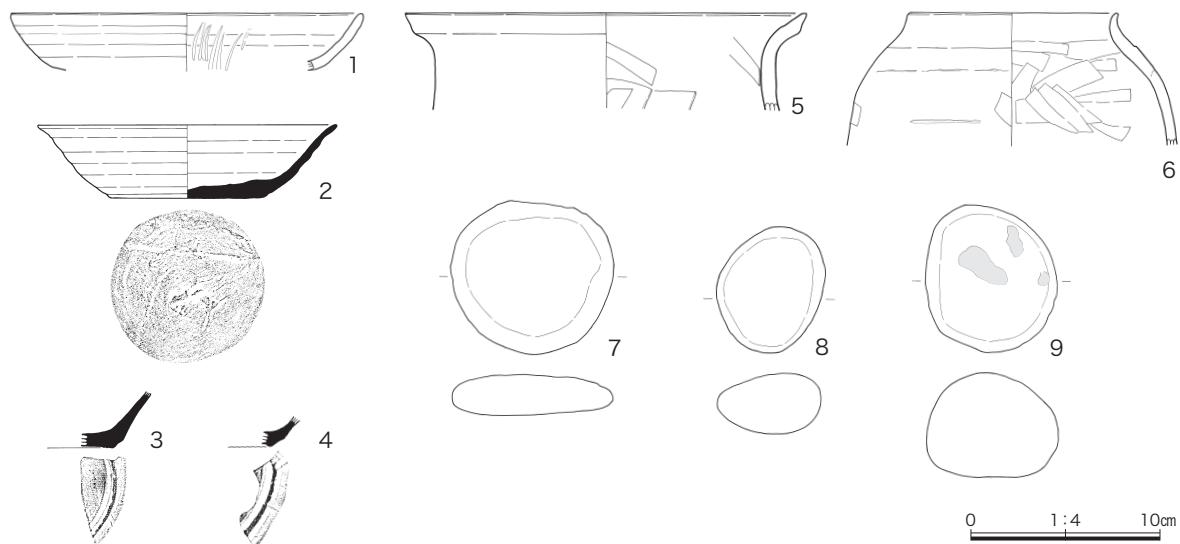
柱穴 4本主柱。いずれも円状の掘り方を呈し、P1以外は柱痕状の土層が認められる。柱痕状の土層の周囲はロームブロックを極多量に含む褐色土が堆積しているが、P4は貼床と同じ土層（7層）が堆積していた。

火廻 北壁中央にカマドを構築していたものと考えられるが、攪乱のため残存状況は極めて悪く、右袖の一部が残っているのみである。袖は床面上に白色粘土を積んで構築していたものと考えられる。燃焼部と思われる部分には白色粘土が多量に堆積しており（8層）、その下に焼土、炭化物が堆積していた（9層）。煙道は短いと考えられるが、上部の攪乱のため判然としない。カマド中央の底面から、拳大の礫（第166図8）が出土している。

遺物 カマド周辺でまとまって出土しているが、出土量は少ない。床面に伴うものは、第166図2の須恵器壊のみである。



第165図 SI-75 積穴住居跡



第166図 SI-75出土遺物

第65表 SI-75遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 皿	口 (18.4) 高 (3.0)	内外面ともロクロナデ 底部近く回転ヘラケズリ 表面一部ミガキ ロクロ土師器 (残) 1/8	白色粒子多・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	カマド
2 須恵器 壺	口 15.8/13.8 底 4.6 高 4.9	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 楕円形に歪む (残) 5/8 産地不明	砂礫・微細白色粒子多 やや不良 10YR8/2 灰白	床直 No.7 + SI-73No.9
3 須恵器 壺	破片	内外面ともロクロナデ 底部削りだし高台 三毳産	白色粒子少 良 N6/ 灰	覆土
4 須恵器 壺	破片	内外面ともロクロナデ 底部削りだし高台 群馬または三毳産	白色粒子少 良 N6/ 灰	覆土
5 土師器 甕	口 (21.2) 高 (5.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ (残) 1/8	砂礫・白色粒子・雲母多 良 7.5YR4/6 褐	床上 +5cm No.8
6 土師器 甕	口 (11.0) 高 (7.0)	(内) 口ヨコナデ胴ナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 壺形 (残) 1/8	白色粒子・微細黑色粒子多 良 10YR5/2 灰黄褐	床上 +5cm No.4
7 礫	長 8.1 幅 8.6 厚 2.0 重 153.5	円盤状の自然礫 使用痕特になし	10YR6/6 明黄褐	床上 +5cm No.2
8 礫	長 6.8 幅 5.4 厚 3.2 重 154.6	円盤状の自然礫 使用痕特になし	10YR6/4 にぶい黄橙	カマド* 内 No.1
9 礫	長 7.8 幅 6.9 厚 5.5 重 390.6	球状の自然礫 表面に一部焼け粘土付着	10YR6/1 褐灰	床上 +5cm No.6

SI-76 (第167図・図版二三・五二)

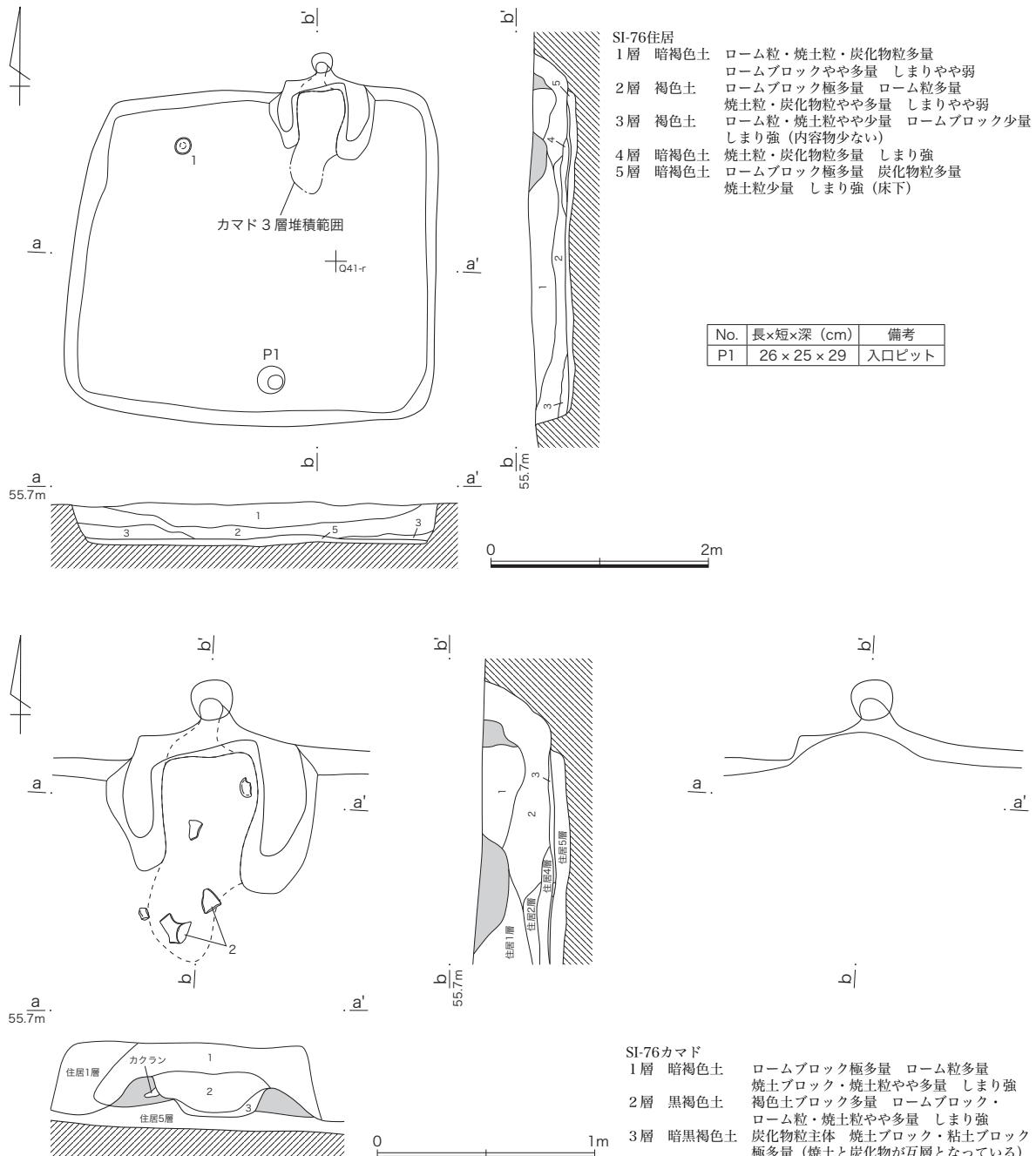
位置 Q41 グリッドに位置する。

規模・形状 東西3.4m、南北3.0mだが、西壁が2.8mと短いため歪んでいる。主軸方向は真北である。

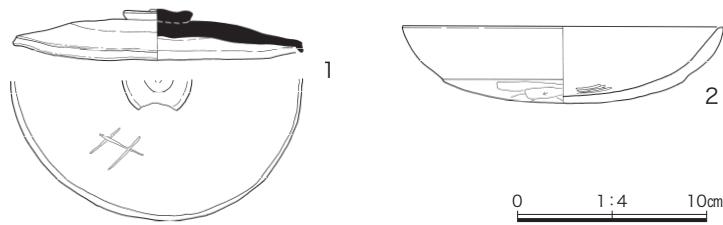
覆土 覆土はロームブロックなどの内容物を全体的に多く含んでいる。上層はローム粒、焼土粒、炭化物粒を多く含む暗褐色土(1層)、下層はロームブロックを多く含む褐色土(2・3層)がレンズ状に堆積している。また、カマド右袖付近には焼土・炭化物を多く含む暗褐色土がブロック状に堆積していた(4層)。

壁 確認面から30cmの深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。

床面・貼床 ローム土と暗褐色土の混合土で貼床を施している(5層)。貼床中にも炭化物が多く含まれる。



第167図 SI-76 積穴住跡



第168図 SI-76出土遺物

第66表 SI-76遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 (15.3) 高 2.7 撮部径 3.9	外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 外面ヘラ記号有り 完存 益子産	白色粒子多 良 N5/ 灰	床直 No.1
2 土師器 壺	口 (16.8) 高 4.0 (残) 2/8	(内) ヨコナデ、底面一部ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 2/8	微細白色粒子多・雲母微 二次被熱 10YR6/6 明褐	床直 No.3・4

掘方 住居中央が窪み、壁際が高くなっている。また、北東隅と南西隅に浅い窪みがある。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P1)。円形の掘り方を呈し、やや西側に傾いている。

火処 北壁の東寄りにカマドが構築されている。両袖と奥壁、天井の一部が残存していた。袖は黄褐色粘土を積み上げて構築している。奥壁上面の天井が、両袖からブリッジ状に残存している。焚き口上面にも部分的に残存していた(第167図カマド断面図網かけ部分)。袖の内側と天井の下面是良く焼けて赤化していた。内部はロームブロックと粘土が多量に堆積しており(1・2層)、燃焼面の上には、焼土と炭が薄い互層となって堆積していた(3層)。煙道は短く、急な角度で立ち上がる。掘方は、西側がわずかに凸字形を呈している。

遺物 出土量は少ないが、図化した遺物はいずれも床面上から出土している。

SI-77(第169・170図・図版二三・五二)

位置 Q42グリッドに位置する。

規模・形状 東西3.3m、南北3.2mの方形を呈するが、西壁が2.9mと短くなっているため歪んでいる。主軸方向は、N-20°-Eである。

覆土 ロームブロックを多く含む黒色土を主体とする。

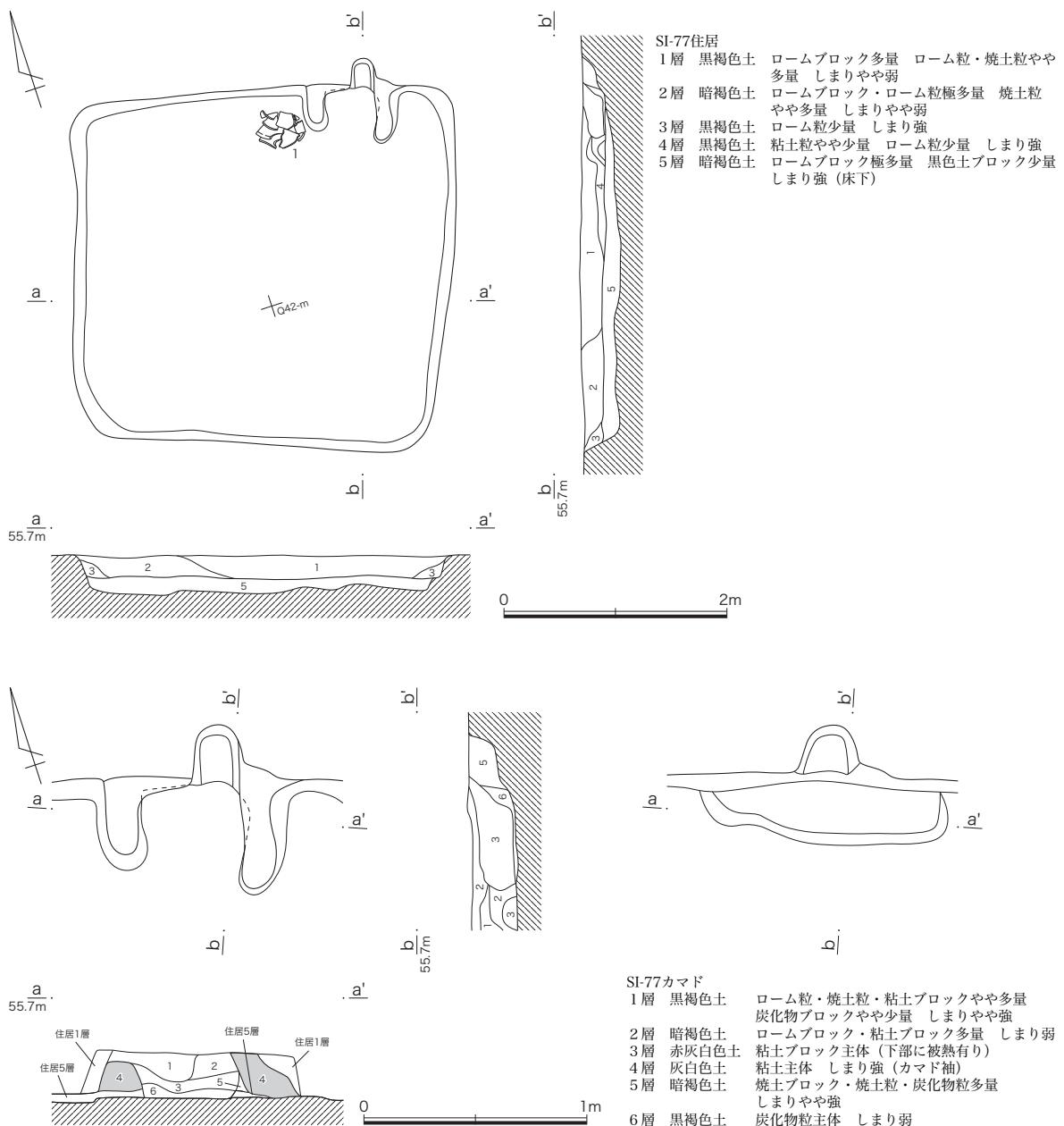
壁 確認面から約20cmで、西壁を除き直に立ち上がる。西壁は暗渠により一部破壊されている。壁溝はない。

床面・貼床 黄褐色土ローム土による貼床を全面に施している。

掘方 床面からの深さが10cmで、ほぼ水平である。

火処 北壁東隅近くにカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。両袖は灰白色粘土を積み上げて構築している。内部には天井崩落土と考えられる粘土が多量に堆積しており(3層)、その下部は焼けた赤化している。粘土の下には、炭を主体とする層が薄く堆積していた(6層)。煙道はカマド中央よりも東にずれて掘り込まれている。燃焼部より段状に高く掘り残し、奥壁は短く急に立ち上がる。カマド部分がの掘り方は、周辺の床面よりも10cmほど高い台状に掘り残されていた。

遺物 出土遺物は極少ない。カマド左袖の床面近くから、土師器甕がつぶれた状態で出土した(第170図1)。



第169図 SI-77 穫穴住居跡

SI-78 (第171図)

位置 M41 グリッドに位置する。

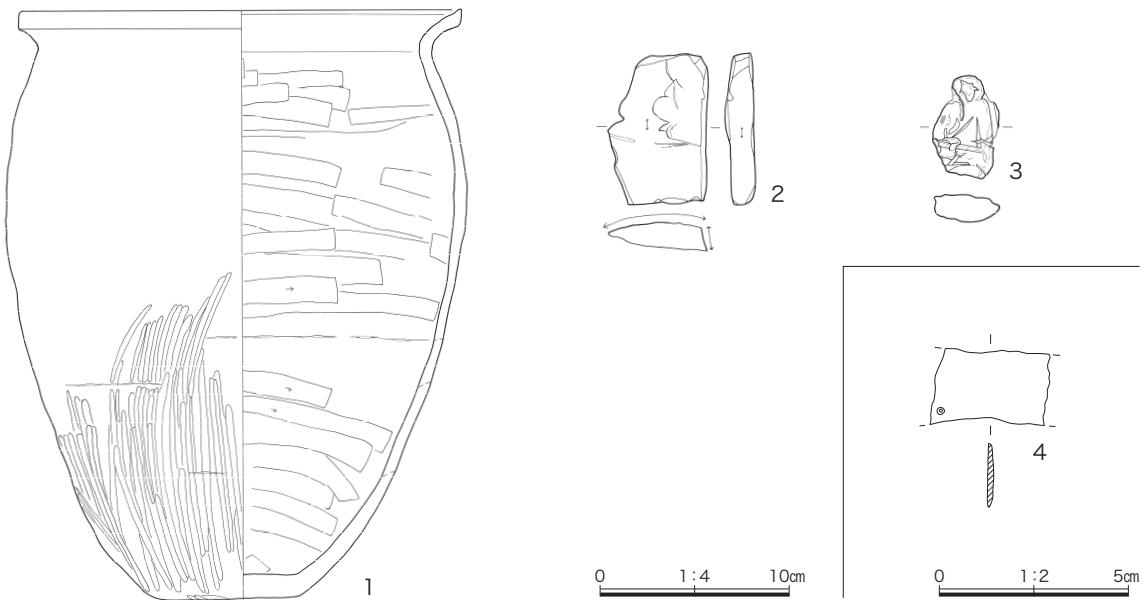
規模・形状 水路に切られて住居南東隅のみが残っていたため、規模や住居構造については不明である。

覆土 内容物をあまり含まない黒褐色土を主体とする。

壁・壁溝 壁は削平されて失われている。調査区壁のセクション面では、幅36cm、深さ10cmの壁溝が確認されているが、面的には確認できなかった。

床面・貼床・掘方 黄褐色ローム土と暗褐色土の混合土で貼床を施している。掘り方は床面から3～5cmの深さで、ほぼ水平である。

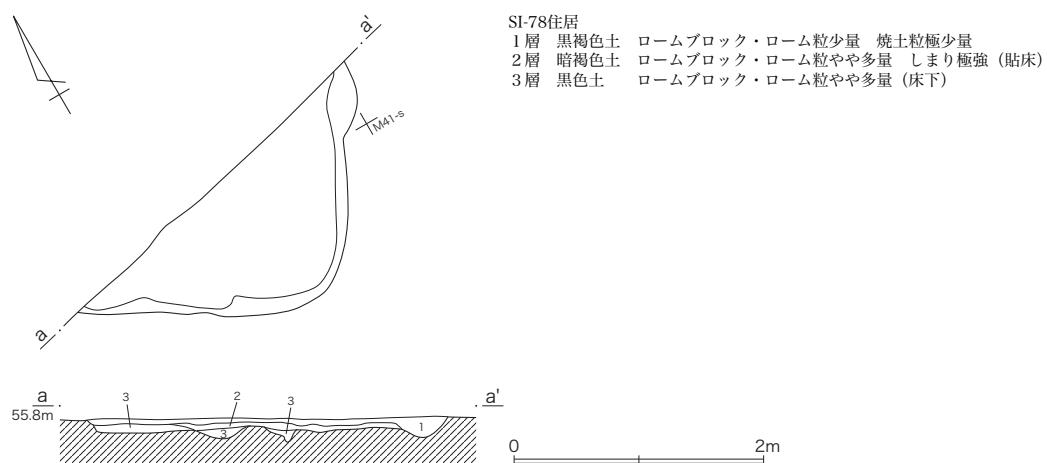
遺物 少量の土器片が出土したが、図化できなかった。



第170図 SI-77出土遺物

第67表 SI-77 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 23.2/22.0 大 24.2 底 7.6 (残) 完存	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴上半丁寧なヘラケズリ下半ミガキ	砂粒・白色粒子多・雲母少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床直 No.1
2 石製品 砥石	長 8.0 幅 5.2 厚 1.4 重 85.65	実測図表面と右側面の2面使用で、残り部分は欠けている。 表面は欠けた面を再び使用している。右側面は使い込まれて 著しく平滑化している。	5Y6/2 灰オリーブ	床下
3 焼成 粘土塊	長 5.4 幅 3.4 厚 1.5 重 19.7	扁平 実測図表面はヘラ状工具による多方向のキズ有り 裏面は接合面からはがれた状態 全体的に摩滅	赤色融解粒多・白色粒子微 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土
4 鉄製品 不明	長 3.2 幅 1.7 厚 0.3 重 2.65	薄い鉄片。表面剥離が著しいが、断面は片丸状である。短軸側縁は剥離していると思われる。		覆土



第171図 SI-78 竪穴住居跡

SI-88（第172～175図・図版二三・五二）

平成14年度に南側2/3、平成15年度に北側1/3を調査した。

位置 P37グリッドに位置する。

重複関係 床面の新旧と周溝の有無から、SI-88a（新段階）、SI-88b（旧段階）の2段階にわけられる。

SI-88a（第172・173図）

規模・形状 東西5.4m、南北5.3mの方形を呈する。主軸方向はN-12°-Eである。

覆土 ロームブロック・焼土粒・炭化物粒などの内容物を多く含む暗褐色土を主体とする。カマド前には粘土が大量に堆積していた（3層）。

壁・壁溝 確認面から15cmの深さで、壁はなだらかに立ち上がる。特に、東側の壁がなだらかである。

壁溝はSI-88aの床面上では確認できなかった。

床面・貼床 ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床が確認された（6・8層）。SI-88aでは住居全面に広がる貼床ではなく、部分的な硬化面が何層も重なった状態が認められた。おそらく、生活時に溜まった土が踏み固められたものと考えられる。掘り方はSI-88bの床面となる。

柱穴 4本主柱。北側の2本（P1・P4）は円状、南側の2本（P2・P3）は大きな楕円状の掘り方を呈する。P2・P3は掘方が段状となっており、底面にも柱の当たりが確認された。柱痕はいずれの柱穴でもはっきりとしない。P3は掘方が西側へ大きく開いていることから、抜き取られたものと考えられる。

入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された（P5）。東西にやや長い楕円状を呈する。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、中央部分をSK-1228により壊されているため、残存状況は極めて悪い。両袖は地山を掘り残し、その上に粘土を積み上げて構築している。内部には粘土、焼土、炭が多量に堆積していた（3・4層）。煙道は短く、急に立ち上がる。掘り方の中央部分は浅く掘り窪められている。

貯蔵穴 北東隅に1基確認された。東西に長い楕円形を呈している。内部からは拳大の粘土塊と、土師器甕の破片が出土した（第175図7・10）。

遺物 カマド周辺と貯蔵穴周辺からまとまって出土しているが、いずれも床面からは浮いた状態である。

SI-88b（第173・174図）

規模・形状 壁溝間の距離を測ると、東西4.9m、南北5.1mである。主軸方向はN-14°-Eで、SI-88aよりもわずかに東に振れている。

覆土 SI-88aの貼床と共通である。

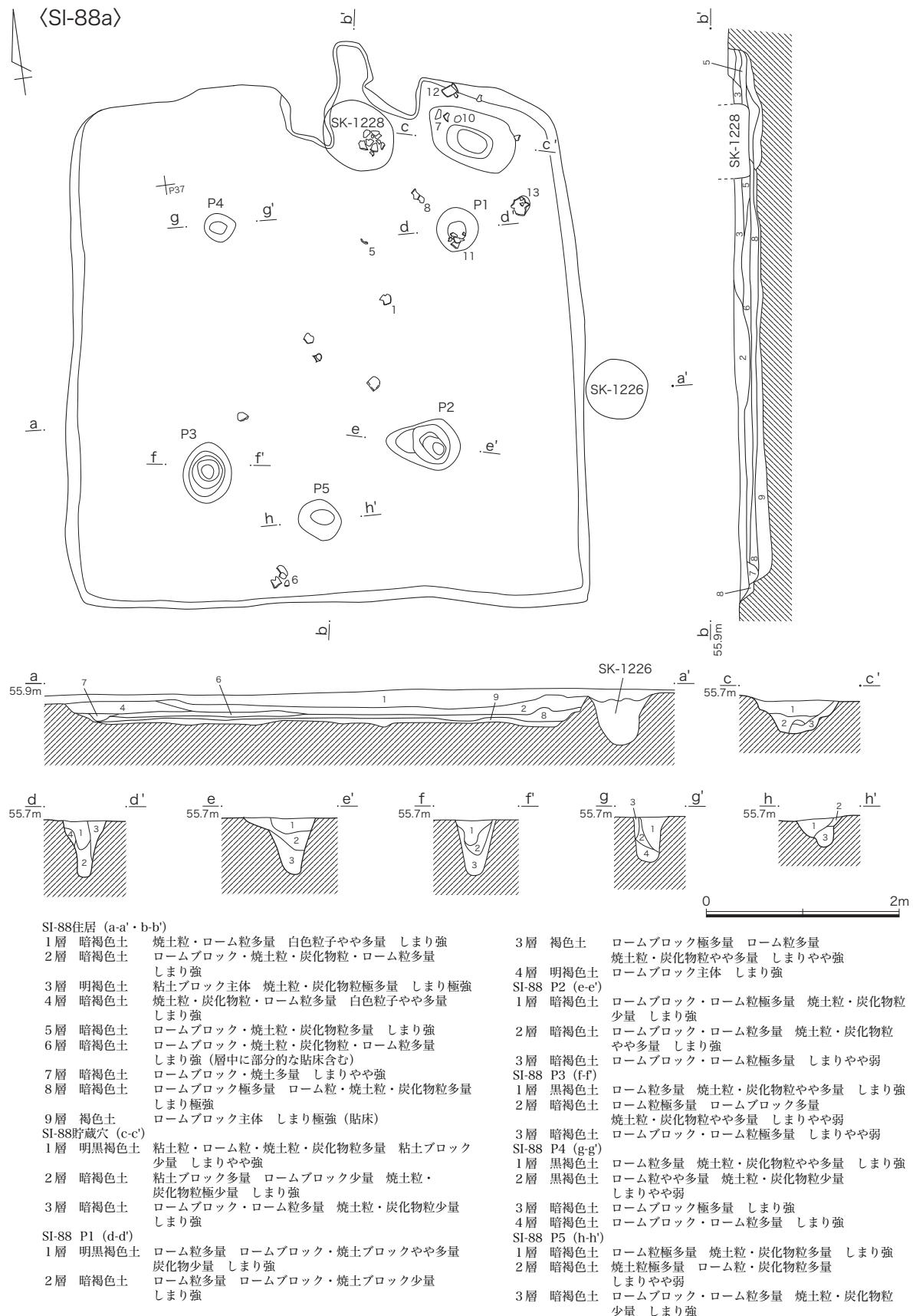
壁溝 カマド部分と貯蔵穴の周辺を除き、ほぼ全周する。SI-88aの壁よりも20cmほど内側をめぐっていることから、SI-88aは拡張されたものと考えられる。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が施されている。SI-88aとは異なり住居全面に貼床が広がっている。

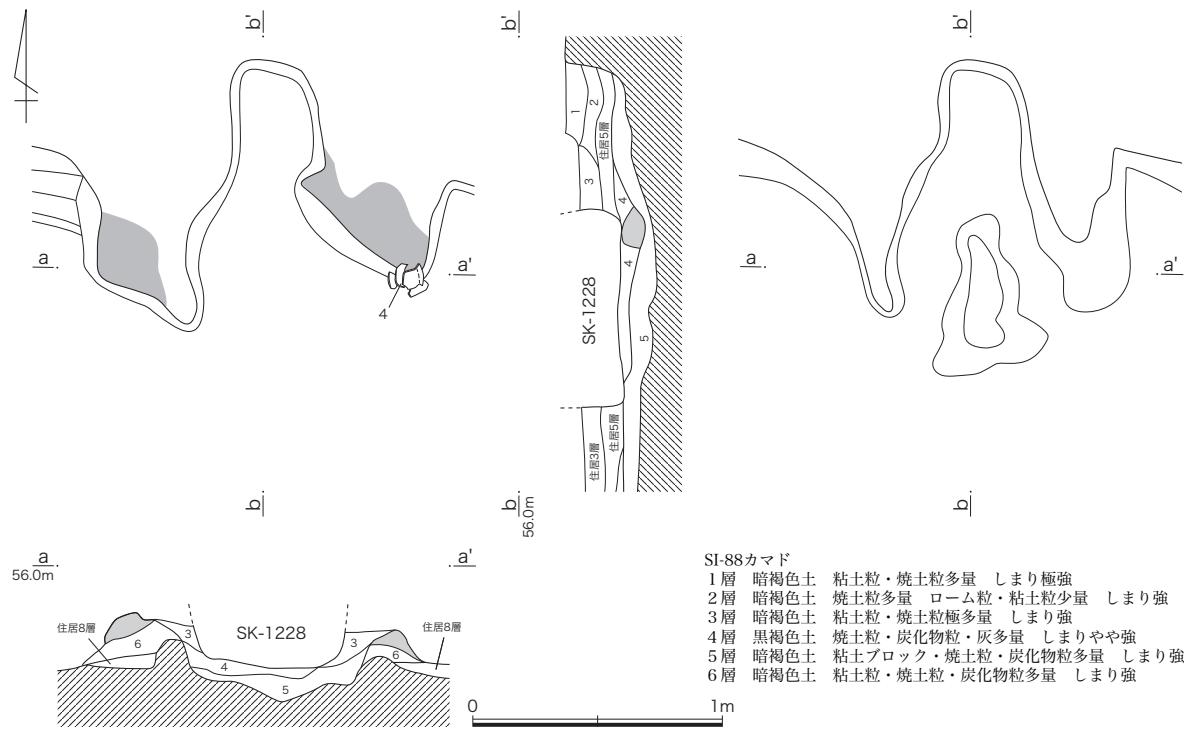
掘方 壁際がわずかに浅く掘り窪められており、深さは住居中央で5cm、壁際で7cmほどである。

柱穴 4本主柱でSI-88aと共通と考えられるが、北西、南西柱穴のみ、床下から別の柱穴が確認された（P6・P7）。いずれもやや歪んだ楕円形を呈する。覆土は住居貼床と同じ土層（9層）が堆積していたため、SI-88bよりもさらに古い柱穴と考えられる。

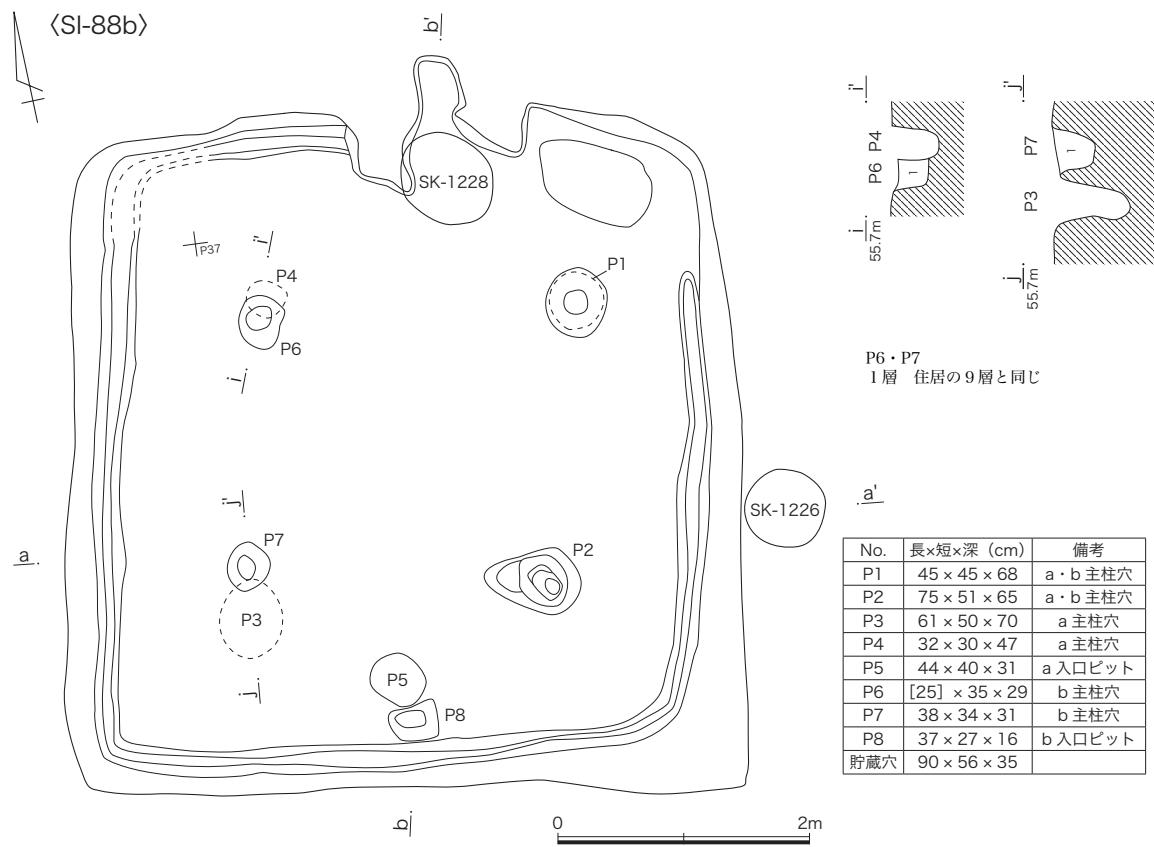
入り口ピット 南壁中央に1基確認された（P8）。東西に長い方形を呈し、覆土にはロームブロックと焼土が多く含まれていた。



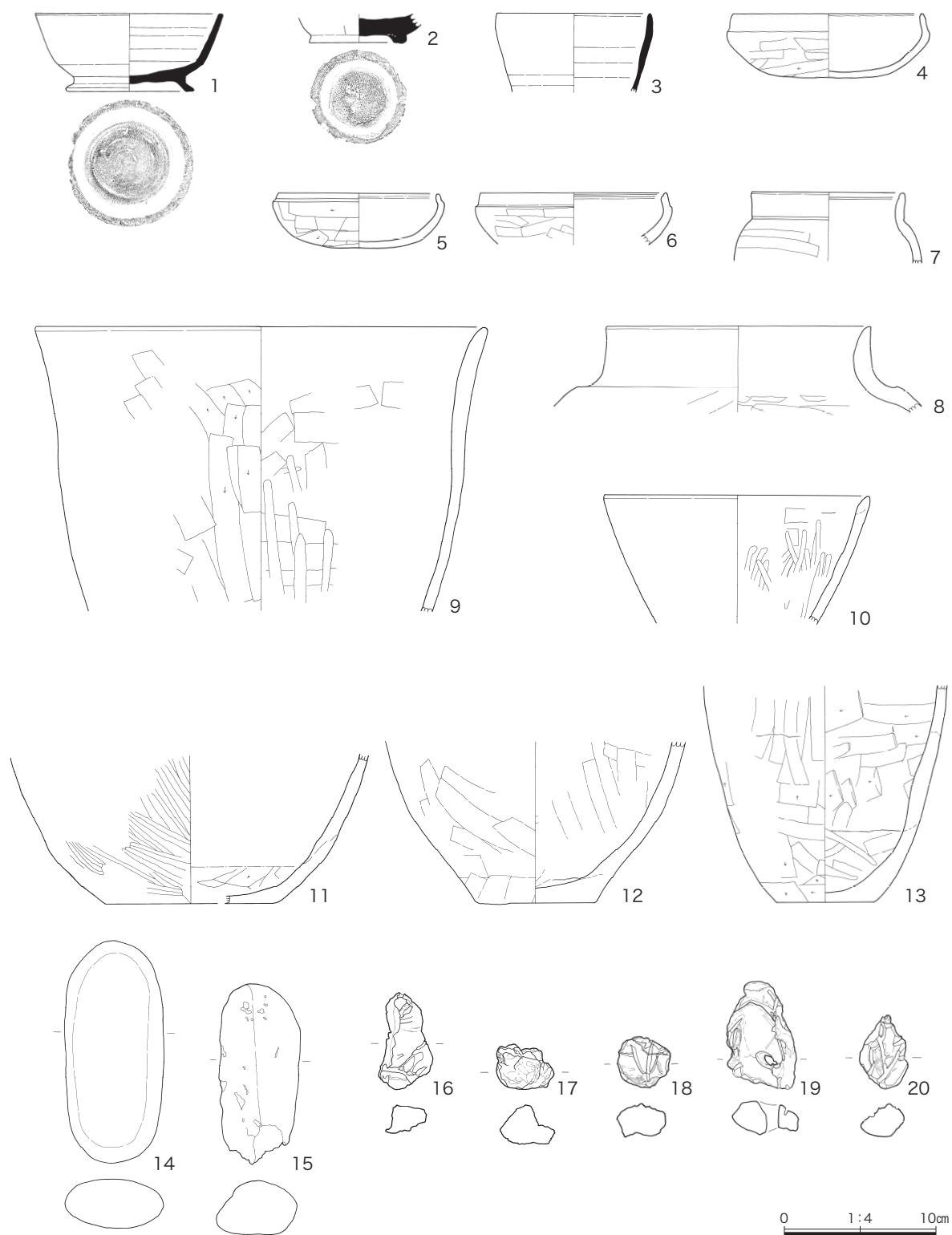
第172図 SI-88 積穴住居跡 (1)



第173図 SI-88 穫穴住居跡（2）



第174図 SI-88 穫穴住居跡（3）



第175図 SI-88出土遺物

火廻・貯蔵穴 SI-88a と共に考えられる。

遺物 SI-88b に伴う遺物は確認できなかったが、SI-88a の床下から出土した須恵器壺と考えられる破片（第175図3）が伴う可能性がある。

第68表 SI-88 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (12.4) 高 5.1	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台が大きく開く (残) 胴 2/8 底 8/8 益子産	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR4/1 灰	床上 +15cm No.12
2 須恵器 壺	底 6.4 高 (1.9)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 外面ヘラ記号? (残) 8/8 産地不明	黒色融解粒・白色粒 子極多・砂礫少 良 10Y5/1 灰	覆土 a
3 須恵器 壺?	口 (10.0) 高 (5.1)	内外面ともロクロナデ (残) 1/8 産地不明	白色粒子極多・砂礫少 良 N4/ 灰	SI-88a 床下
4 土師器 壺	口 (12.4) 高 4.2	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	微細白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.13 + カ マド掘り方
5 土師器 壺	口 (10.5) 高 3.6	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ 口縁部内面に沈線 (残) 2/8	微細白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +20cm No.6
6 土師器 壺	口 (12.2) 高 (3.5)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ 口縁部内面に沈線 (残) 2/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	床上 +15cm No.18
7 土師器 小型甕	口 (10.0) 高 (4.5)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子微 良 5YR6/6 橙	床上 +20cm No.6
8 土師器 甕	口 (17.4) 高 (5.6)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +5cm No.5
9 土師器 甕	口 (29.6) 高 (18.4)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ下半ミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部部分的に稜あり 内面タール状の付着物 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR3/6 暗赤褐	床上 +10cm No.2 + 覆 土 a + b
10 土師器 小型鉢	口 (17.4) 高 (8.4)	(内) 口ヨコナデ胴ミガキ (外) 摩滅 胴部下煤状の付着物 坂口縁部の可能性あり (残) 1/8	砂礫極多・白色粒子多 二次被熱 2.5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.7 + カ マド粘土
11 土師器 甕	底 (7.8) 高 (10.6)	(内) ヘラケズリ (外) ヘラミガキ 内面に輪積接合部がはがれた痕跡有り (残) 2/8	砂礫極多・白色粒子・ 雲母多 良 10YR5/6 黄褐	床上 +20cm 覆土 a + P8 + No.4
12 土師器 甕	底 7.8 高 (10.6)	(内) 丁寧なナデ (外) ヘラケズリ (残) 胴 2/8 底 8/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +20cm No.8 + No.6
13 土師器 甕	底 6.3 高 (14.2)	(内) ヘラケズリ・ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ (残) 胴 3/8 底 8/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR5/2 灰黄褐	床上 +15cm No.3
14 礫	長 14.6 幅 6.5 厚 3.3 重 473.7	断面楕円状・表面に茶褐色の付着物	2.5Y7/4 浅黄 礫岩	P3
15 礫	長 11.9 幅 5.2 厚 3.6 重 278.2	断面三角状 左側面に敲打痕あり	10YR7/1 灰白 安山岩	カマド 掘り方
16 焼成 粘土塊	長 6.4 幅 3.2 厚 2.4 重 26.6	塊状 表裏ともヘラ状工具によるケズリ、キズが多い 実測図左側面は接合面からはがれた状態	白色粒子・砂粒多 やや良 10YR6/6 明黄褐	覆土 a
17 焼成 粘土塊	長 2.8 幅 3.7 厚 2.9 重 17.3	塊状 全体的に摩滅、調整なし	白色粒子 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	カマド
18 焼成 粘土塊	長 3.3 幅 3.3 厚 2.0 重 15.4	塊状 実測図表面はヘラ状工具によるキズ有り 裏面はちぎり取った状態	白色粒子・赤色融解粒や や多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上ベルト
19 焼成 粘土塊	長 6.7 幅 4.4 厚 2.2 重 42.7	扁平 全体に草本植物の痕跡残る 棒状工具による貫通孔 1カ所 胎土粗くひび割れる	赤色融解粒微 良 10YR6/4 にぶい黄橙	カマド 掘り方
20 焼成 粘土塊	長 4.8 幅 3.1 厚 2.7 重 17.0	塊状 実測図表面に草本植物の痕跡残る 実測図左側面はちぎり取った状態	白色粒子微 やや良 10YR6/3 にぶい黄橙	覆土 b

SI-89 (第 176 ~ 180 図・図版二四・五二)

平成 14 年度に東側 1/4、平成 15 年度に西側 3/4 を調査した。

位置 O38 グリッドに位置する。

重複関係 床面、柱穴、壁溝の作り替えが 1 回行われており、SI-89a (新段階)・SI-89b (旧段階) に分けられる。

SI-89a (第 176 図)

規模・形状 東西 4.6 m、南北 4.7 m の方形を呈するが、東壁が 4.3 m と短くなっているため歪んでいる。主軸方向は真北である。

覆土 ロームブロック・焼土粒・炭化物粒を多く含む暗褐色土を主体とする。全体的に内容物が多く含まれており、特にカマド前面で顕著である。

壁・壁溝 確認面から 30cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分と北壁東側以外で全周する。西側の壁溝は東側、南側に比べやや幅広になっている。

床面・貼床 ロームブロック及び焼土を多く含む暗褐色土による貼床を全面に施している。貼床は何層もの極薄い層が版築状に固められており、生活時に堆積した土が踏み固められてできたものと考えられる。焼土はカマド付近に特に多く含まれている。カマド前から住居中央にかけて、焼けた粘土が面的に堆積していた (6 層、第 176 図破線範囲)。この層を掘り下げるとき、薄い灰層が面的に広がって堆積していた。

柱穴 4 本主柱。楕円状の掘り方を呈し、いずれも柱痕は確認されなかった。

入り口ピット 南壁中央寄りで 2 基のピット (P5・P10) が確認されたが、新旧関係は調査時に判断できなかった。位置や覆土が住居下層と似ているといった特徴から考えて、P5 が SI-89a に伴うと考えられる。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。両袖は黄褐色粘土を積み上げて構築されており、奥壁にも粘土が貼り付けられている。内部には多量の粘土が堆積し (1 層)、その下には、灰、焼土、炭が多量に堆積していた (5 層)。SI-89a カマドの火床面は 5 層底面と考えられる。粘土は袖の外側にも多量に堆積しており、その下から土器片が多く出土している (第 178 図)、いずれも復元はできなかった。また、カマド前には焼土が多量に堆積しており、その下には炭と灰が薄い層状に堆積していた (住居 3 層)。奥壁は短く、段状に掘り込まれている。

遺物 覆土中から多く出土している。特に、北東柱穴の周りでは、6 層下から多くの土器が出土している。

第 179 図 13 の土師器甕は、床面上で口縁部を下に伏せた状態で出土した。第 179 図 1・4 の須恵器蓋、9 の須恵器壺、10 の土師器壺も床面上から出土している。

SI-89b (第 177 図)

規模・形状 推定範囲で東西 3.8 m、南北 3.7 m の方形を呈するが、東壁が 3.3 m と短く歪んでいる。

覆土 SI-89a の貼床と共通である。

壁・壁溝 壁は残っていないため不明である。北壁東側から西壁、南壁では壁溝が SI-88a の壁より 35cm 内側でまわっており、SI-89a を構築する際に、西壁を外側へ拡張したと考えられる。

床面・貼床 ロームブロックと焼土粒を多く含む暗褐色土による貼床を全面に施している。

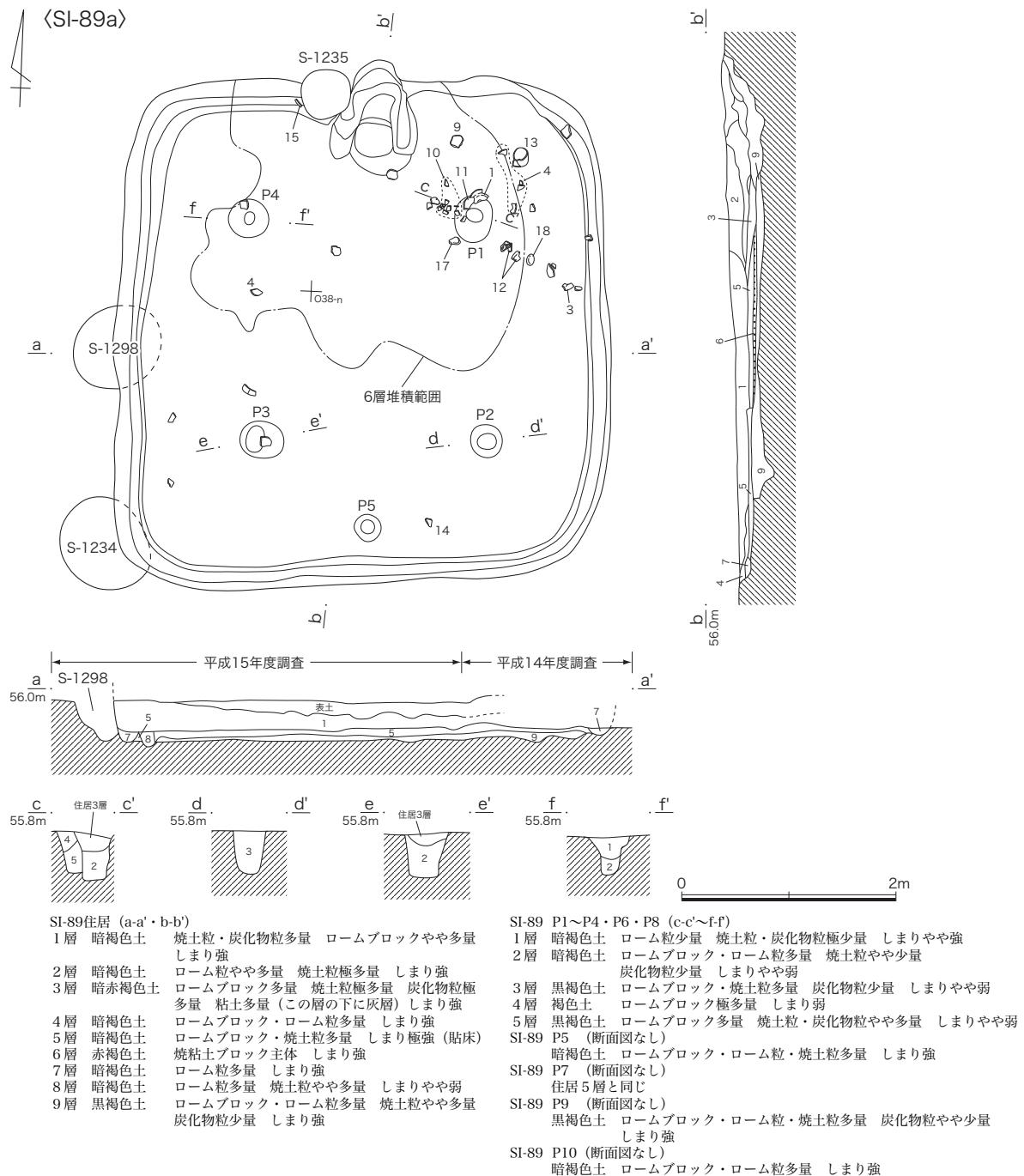
掘方 住居の四隅が土坑状に掘り窪められている。中央部分はほぼ水平で、東壁から壁溝に向かってながらに掘り込まれている。また、小ピットが 5 基確認された (P11 ~ P15)。

柱穴 4 本主柱。東側の 2 本 (P6・P7) は SI-89a の柱穴 P1・P2 よりも内側に作られている。SI-89a の構築に伴い、東壁を外側に拡張したためと考えられる。一方、西側の 2 本 (P8・P9) は SI-89a の柱穴 P3・

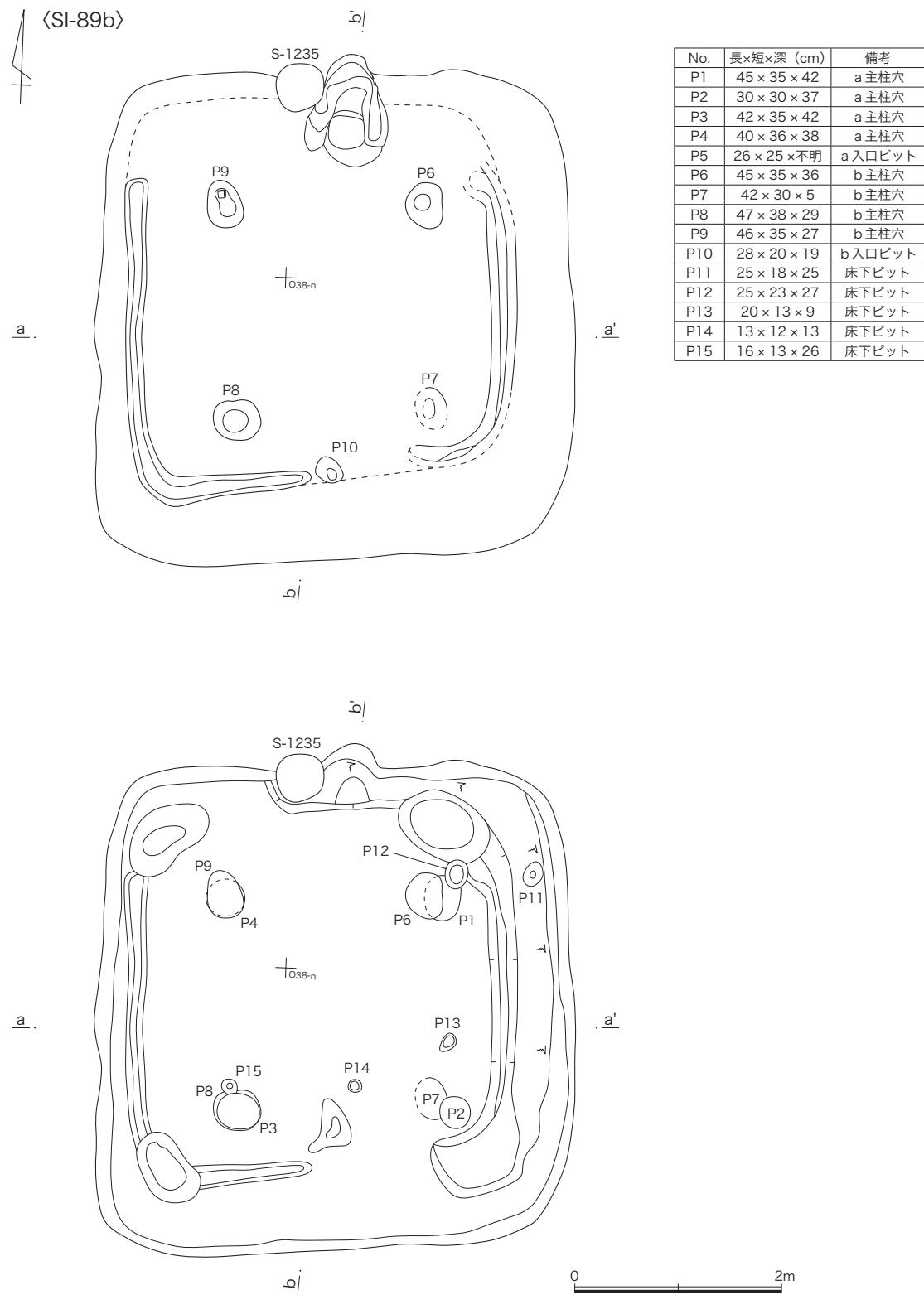
P4 とほぼ同じ位置に構築されている。

入り口ピット 覆土と位置関係から、P10 が SI-89b に伴う入り口ピットと考えられる。楕円状の掘り方を呈する浅い小ピットである。

火処 SI-89a カマドの火床面（5層底面）の下で確認された灰や焼土を多量に含む掘り込み（7層）が、SI-89b のカマド火床面と考えられる。また、SI-89a カマドの右袖外側に積み上げられた粘土が確認され、その粘土と SI-89a のカマド右袖との間にも粘土が多量に堆積していたことから、古いカマドの存在を想定して調査を進めた（第 178 図）。しかし、奥壁の痕跡がないことや、SI-89a のカマド内部に SI-89b の火床



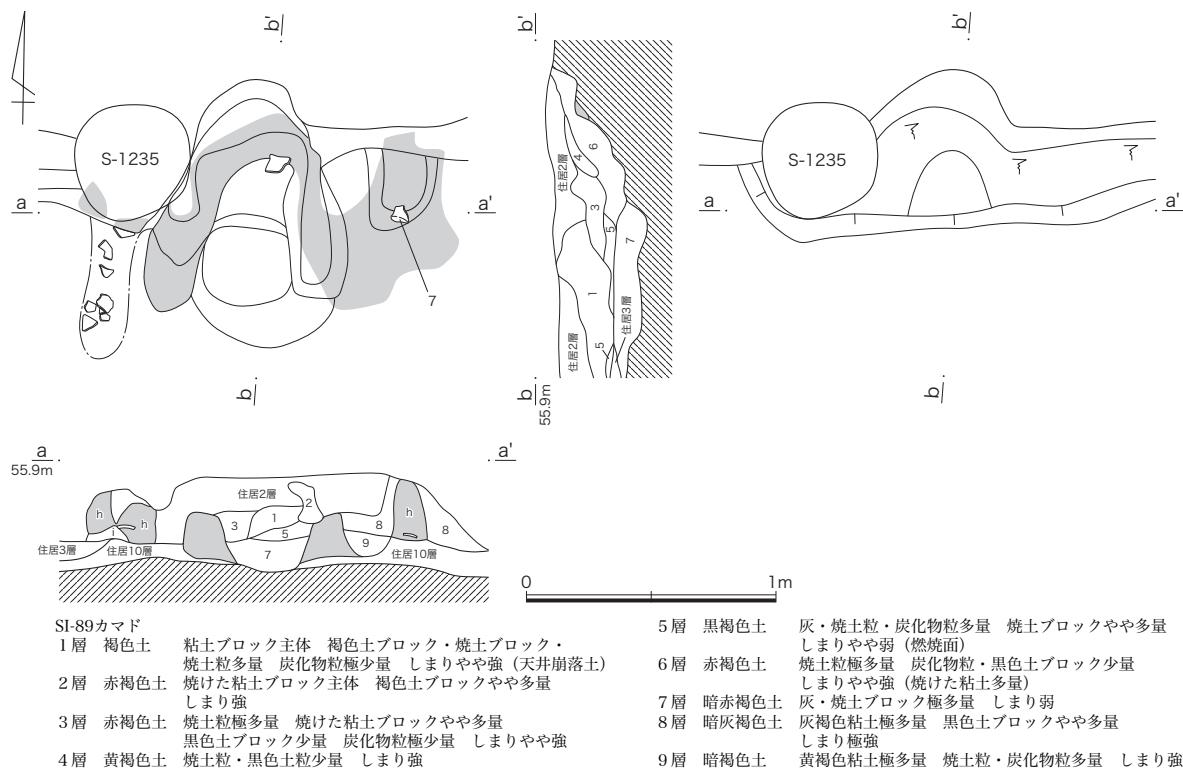
第176図 SI-89 墓穴住居跡（1）



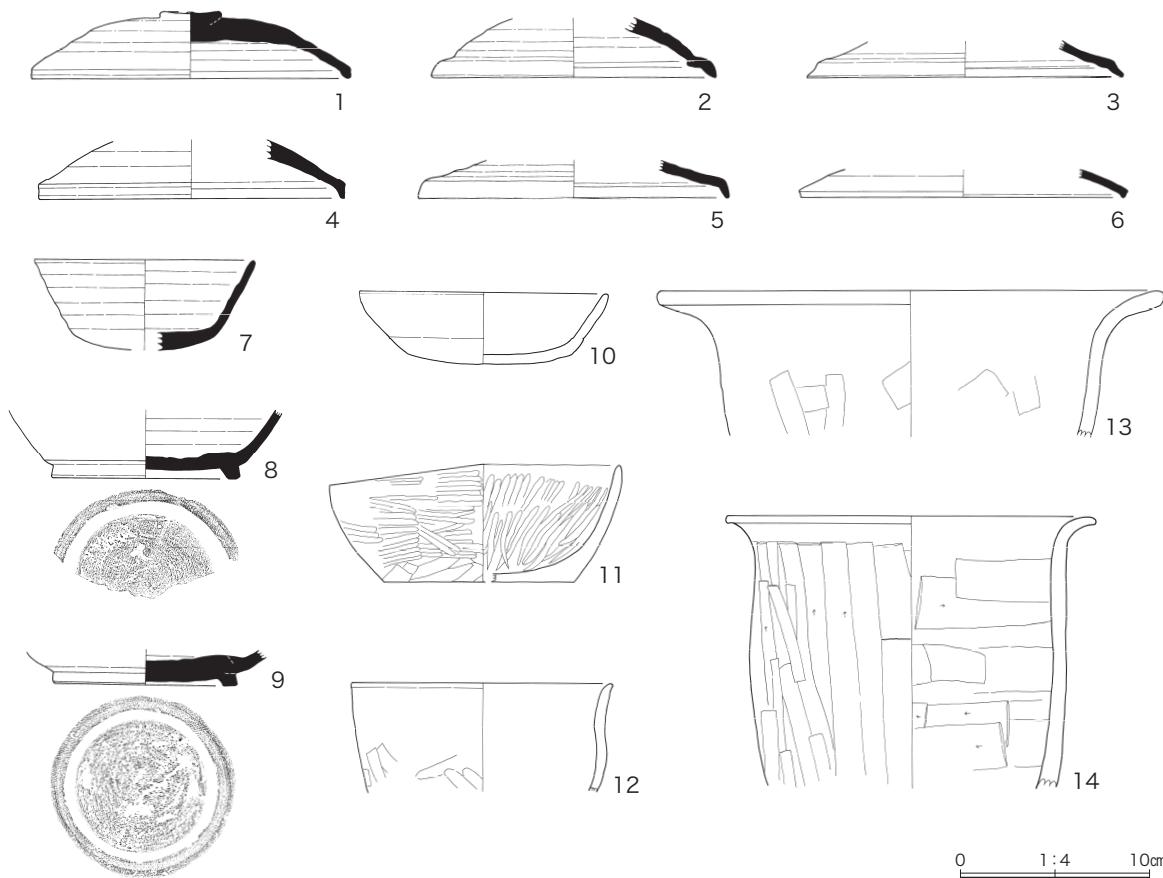
第177図 SI-89 穫穴住居跡（2）

面が確認されたことから、カマドは作り替えを行っていないと判断した。

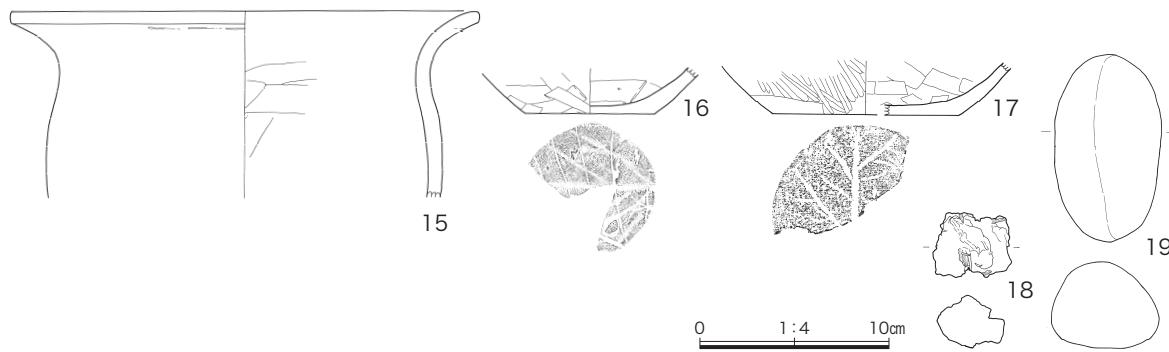
遺物 SI-89b に伴う遺物は P9 から出土した時期不明の土師器片 1 片のみで、図化はできなかった。



第178図 SI-89 壇穴住居跡（3）



第179図 SI-89 出土遺物（1）



第180図 SI-89出土遺物(1)

第69表 SI-89遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 (16.8) 高 3.5 撮部径 3.2	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 低いボタン状の攝み (残) 2/8 益子産	砂礫やや多・白色粒子多 良 7.5Y6/1 灰	床直 No.16 + 覆土 a
2 須恵器 蓋	端部径 (15.0) 高 (3.2)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ (残) 1/8 新治産	砂礫多・白色粒子・雲母多 良 5Y5/3 灰オリーブ	覆土 a
3 須恵器 蓋	端部径 (16.8) 高 (1.9)	内外面ともロクロナデ (残) 4/8 三毳産?	砂粒・白色粒子多・雲母微 良 2.5Y7/3 浅黄	床直 床上 +20cm No.4+3+14
4 須恵器 蓋	端部径 16.0 高 (3.1)	内外面ともロクロナデ (残) 4/8 益子産	白色粒子極多・黒色融解 粒多・砂礫やや多 良 2.5GY5/1 オリーブ灰	床直 No.11 ~ 13 ・ 20
5 須恵器 蓋	端部径 (16.4) 高 (2.0)	内外面ともロクロナデ (残) 1/8 益子産?	白色粒子多・砂礫少 良 10Y6/1 灰	覆土 b
6 須恵器 蓋	端部径 (17.0) 高 (1.5)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ? (残) 2/8 三毳産?	砂粒・白色粒子多 やや不良 2.5Y7/2 灰黄	覆土 d
7 須恵器 坏	口 (11.6) 高 4.8	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離しまたは丸底? (残) 1/8 常陸産	砂礫多・白色粒子やや多・ 黒色融解粒・雲母微 良 10Y3/1 オリーブ黒	カマド右袖 No.40
8 須恵器 坏	底 (9.8) 高 (3.6)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 (残) 5/8 益子産?	砂礫・白色粒子極多・ 雲母微 やや良 7.5Y6/2 灰オリーブ	床上 +15cm No.28
9 須恵器 坏	底 9.6 高 (1.9)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 底部内面に接合痕 (残) 8/8 益子産	砂礫・白色粒子極多 良 N5/ 灰	床直 No.21
10 土師器 坏	口 13.0 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 内面漆仕上げ 摩滅強 (残) 7/8	白色粒子・雲母やや多・ 砂粒少 やや不良 10YR7/2 にぶい黄橙	床直 No.17+ 覆土 a
11 土師器 坏	口 (15.3) 底 (9.9) 高 6.2	(内) ヨコナデ→縦方向ミガキ (外) ヘラケズリ→横方向ミガキ 内面漆仕上げ 口縁部大きく歪む (残) 3/8	白色粒子・雲母やや多 良 10YR4/4 褐	床上 +10cm No.15
12 土師器 小型甕	口 (13.8) 高 (5.7)	(内) ヨコナデ (外) ヘラナデ+ヘラケズリ 外面に煤状の付着物 (残) 4/8	砂粒・白色粒子・雲母少 二次被熱 7.5YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.7 + No.8 + 覆土 c
13 土師器 甕	口 19.5 高 (14.4)	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 脊上半 8/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少・ 雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.13

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
14 土師器 甕	口 (26.6) 高 (7.7) (残) 1/8	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母少 良 7.5YR3/2 黒褐	床上 +5cm No.27+ 覆土 b
15 土師器 甕	口 (24.6) 高 (9.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴粗いヘラケズリ? 口縁部輪積痕 (残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土 b
16 土師器 甕	底 6.9 高 (2.4)	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕 (残) 4/8	微細白色粒子・砂粒多・ 雲母微 良 10YR6/8 明黄褐	覆土 a
17 土師器 甕	底 (9.8) 高 (2.8)	(内) ヘラケズリ (外) ヘラナデ・底部近くヘラケズリ? 底部木葉痕 (残) 2/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母少 良 10YR5/8 黄褐	床上 +5cm No.26
18 焼成 粘土塊	長 3. 幅 4.0 厚 2.7 重 21.6	塊状 実測図表面に草本植物の痕跡有り その他の部分はちぎり取ったまま調整なし	赤色融解粒少 良 7.5YR4/3 褐	覆土 b
19 礫	長 9. 幅 5.6 厚 4.5 重 356.2	断面丸みを帯びた三角状 表面に弱い擦痕	2.5Y6/1 黄灰	床直 No.6

SI-90 (第181図・図版二四・五二)

位置 O39 グリッドに位置する。

規模・形状 東西 3.8 m、南北 3.0 m の東西に長い方形を呈する。主軸方向は N - 120° - E である。

覆土・壁 上面を大きく削平されており、覆土と壁はほとんど残っていない。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床が全体的に施されている。

掘方 地山の上に直接貼床を施しているため、北西隅と南西隅がわずかに窪むのみで、掘方はほとんどない。

入り口ピット 西壁中央寄りで 1 基確認された (P1)。円形の掘り方を呈し、極浅い。

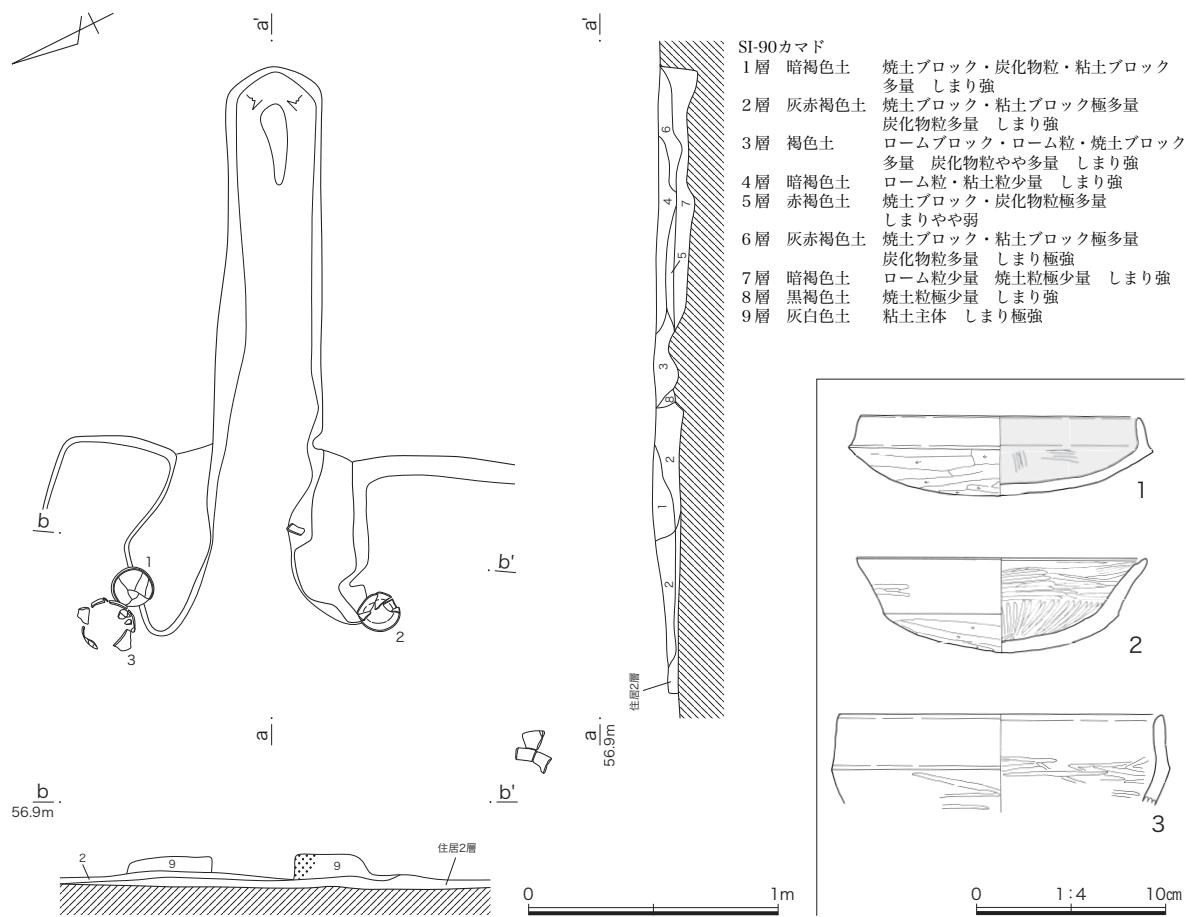
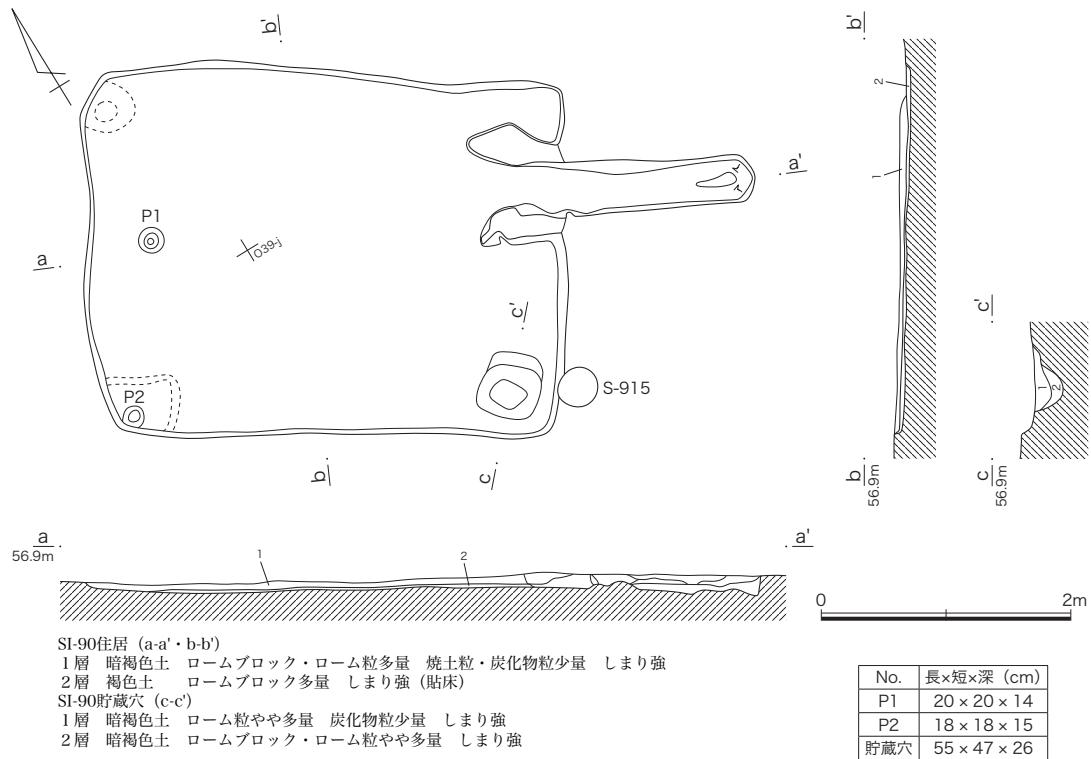
火処 東壁北寄りにカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、上面は大きく削平されているため残存状況は極めて悪い。両袖は灰白色粘土を積み上げて構築されており、内部はよく焼けている。煙道は非常に長く、壁から約 1.5 m 外に向かって掘り込まれている。奥壁手前は浅く楕円状に掘り込まれている。両袖の先端からは、土師器壺の破片が 3 個体分出土している (第181図 1 ~ 3)。

貯蔵穴 住居南東隅で 1 基確認された。南北に長い長方形を呈する。

遺物 出土遺物は極めて少なく、カマド袖付近から出土したもの以外で実測可能なものは出土しなかった。

第70表 SI-90 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 14.2/14.6 高 4.2	(内) 口ヨコナデ体丁寧なヘラミガキ (多方向) (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面黒色処理 (残) 7/8	砂粒・雲母多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床直 No.2
2 土師器 壺	口 (15.3) 高 5.0	(内) 口横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ+横方向ミガキ体ヘラケズリ (残) 8/8	白色粒子・雲母多 良 5YR6/6 橙	床直 No.4
3 土師器 壺	口 (16.9) 高 (4.8)	(内) 口ヨコナデ体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体粗いミガキ (残) 1/8	砂礫多・白色粒子やや多 良 7.5YR3/1 黒褐	床直 No.1+ 覆土 d



第 181 図 SI-90 竪穴住居跡および出土遺物

SI-91 (第182・183図・図版二四・五二)

位置 O40 グリッドに位置する。

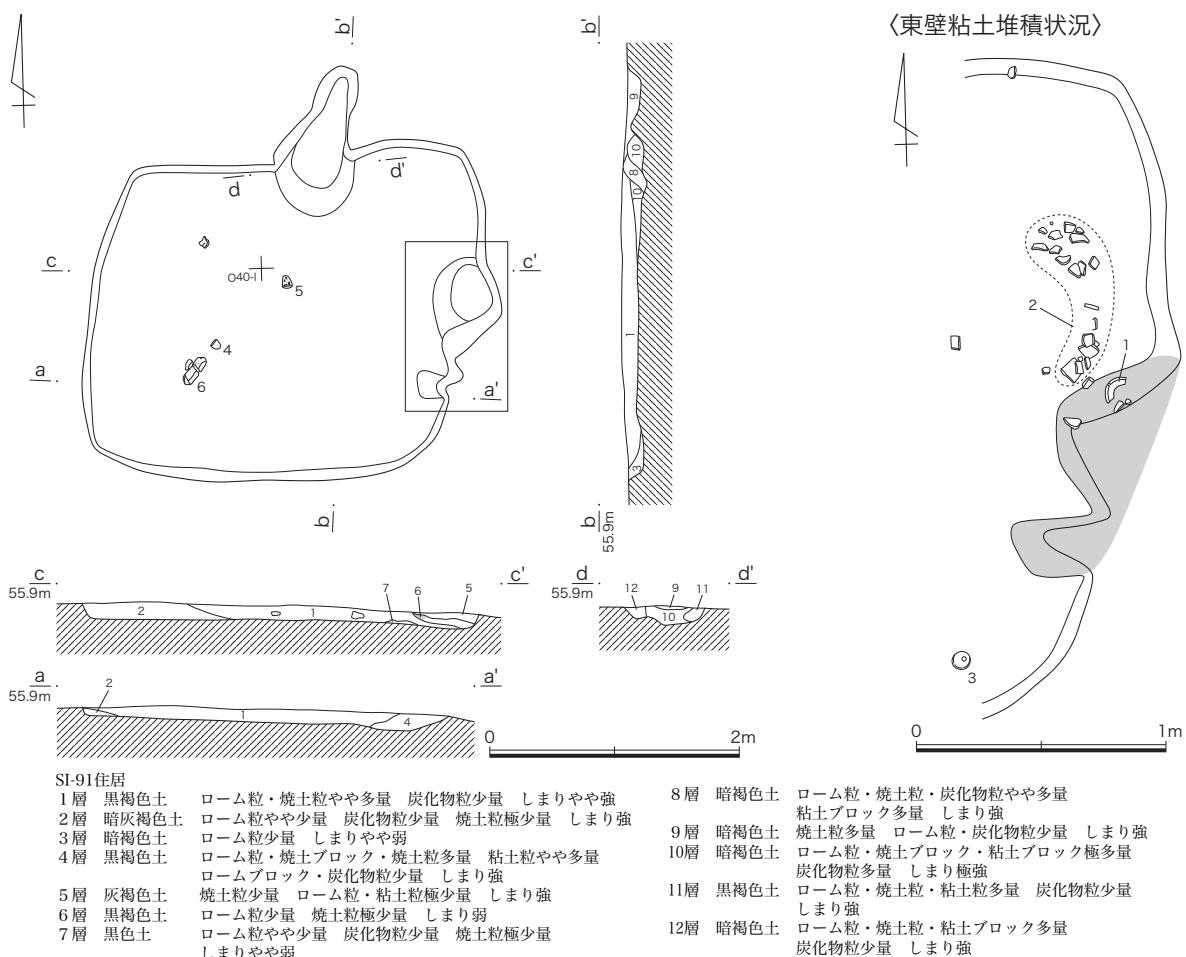
規模・形状 東西3.1m、南北2.6mだが、各隅が丸みをおびる上に直角となっていないため、住居全体が大きく歪んでいる。主軸方向はN-12°-Eである。

覆土 ローム粒・焼土粒をやや多く含む黒褐色土を主体とする。

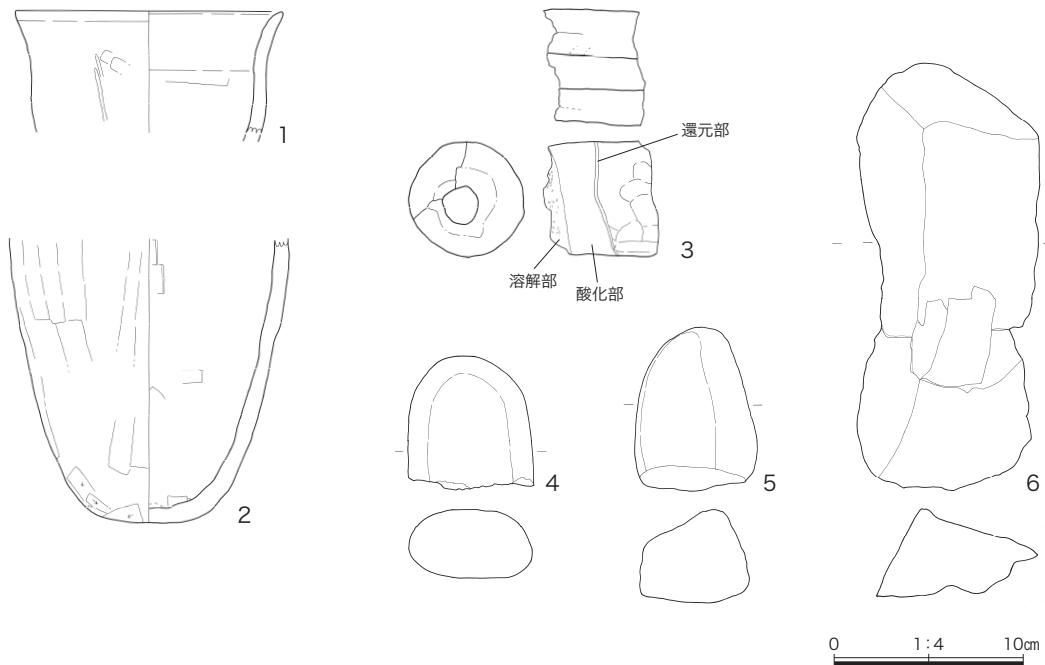
壁 削平によりほとんど残っていないが、緩やかに立ち上がるを考えられる。

床面・貼床 地床で、中央がやや窪んでいる。

火処 北壁中央にカマドの痕跡が確認された。袖は全く残っておらず、煙道と燃焼部の掘り込みだけが残存している。煙道は壁より65cmほど奥に掘り込まれており、おそらく段状に掘られていたものと考えられる。燃焼部は5cmほどの深さの窪みがあり、内部には粘土、焼土が多量に堆積していた(10層)。底面はほとんど焼けていない。また、東壁中央から粘土と土器片がまとまって出土したため、カマドの可能性を考えて精査した(第182図東壁粘土堆積状況)。粘土を取り外すと、馬の背状に掘り残された地山と、壁から約20cm奥へのびる掘り込みが確認された。しかし、粘土、地山とも焼けた様子が見られないことから、カマドであるか否かは判断できない。



第182図 SI-91 積穴住居跡



第183図 SI-91出土遺物

第71表 SI-91遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (14.0) 高 (6.4) (残) 3/8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ	砂礫多・白色粒子やや多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 + 5cm No.2 + ベルト
2 土師器 甕	高 (15.0)	(内) ヘラナデ? (外) 縦方向ヘラケズリ (残) 底～胴 2/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR5/6 黄褐	床上 + 5cm No.1
3 土製品 羽口	径 6.0 厚 2.3	手捏ね成形 中心に接合痕残る。 先端から 0.5 ~ 1cm が溶けて黒色ガラス質になっている。 気孔が多い(径 1mm 程度)。溶解部の下 1.5 ~ 2cm が灰白色、さらに 0.3cm 程度が淡黄色に酸化及び還元。	砂礫・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄褐	床上 + 5cm No.7
4 礫	長 7.0 幅 6.5 厚 3.8 重 259.8	丸みを帯びた楕円状 表裏の平坦面に弱い擦痕有り	2.5Y6/1 黄灰 砂岩	床上 + 5cm No.9
5 礫	長 8.6 幅 6.4 厚 5.1 重 391.3	断面台形 全体的に弱い赤化	10YR6/2 灰黄褐 安山岩?	床直 No.10
6 石製品 砥石?	長 22.5 幅 9.6 厚 4.6 重 1341.82	破碎礫。実測図右側は平坦で、弱い擦痕が見られる。左面、下面は平滑化。裏面は大きく欠損している。砥石と考えられるが、明確な研ぎ面が見られない。	2.5YR5/2 灰赤	床上 + 5cm No.8

遺物 東壁の粘土ブロックそばから土師器甕の破片が2個体分（第183図1・2）と羽口が出土している（第183図3）。羽口はこの他に、SI-66（図版六一）、SI-1001（図化不能）で小破片が出土している。また、住居中央の床面近くから破碎礫が数点出土している（第183図4～6）。4・5は円礫が折れたもので、目立った使用痕は見られない。6は砥石と考えられる破碎礫である。図化しなかったものの中には、研ぎ面を持つ薄く剥離した礫があり、いずれも被熱している。

SI-92 (第184～186図・図版二五・五二)

位置 O40 グリッドに位置する。

重複関係 SX-100 ピット群 (S-927・962・963) と重複する。SI-92 の方が古い。

規模・形状 南側 1/2 を現代の水路に切られているため、規模・形状は不明である。

覆土 内容物をあまり含まない黒色土を主体とする。また、上面に内容物をあまり含まない黒褐色土及び暗褐色土が薄く堆積していた。

壁・壁溝 残存部分では確認面からの深さが 20cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は住居北壁から西壁にかけて確認されているが、東壁では確認されなかった。

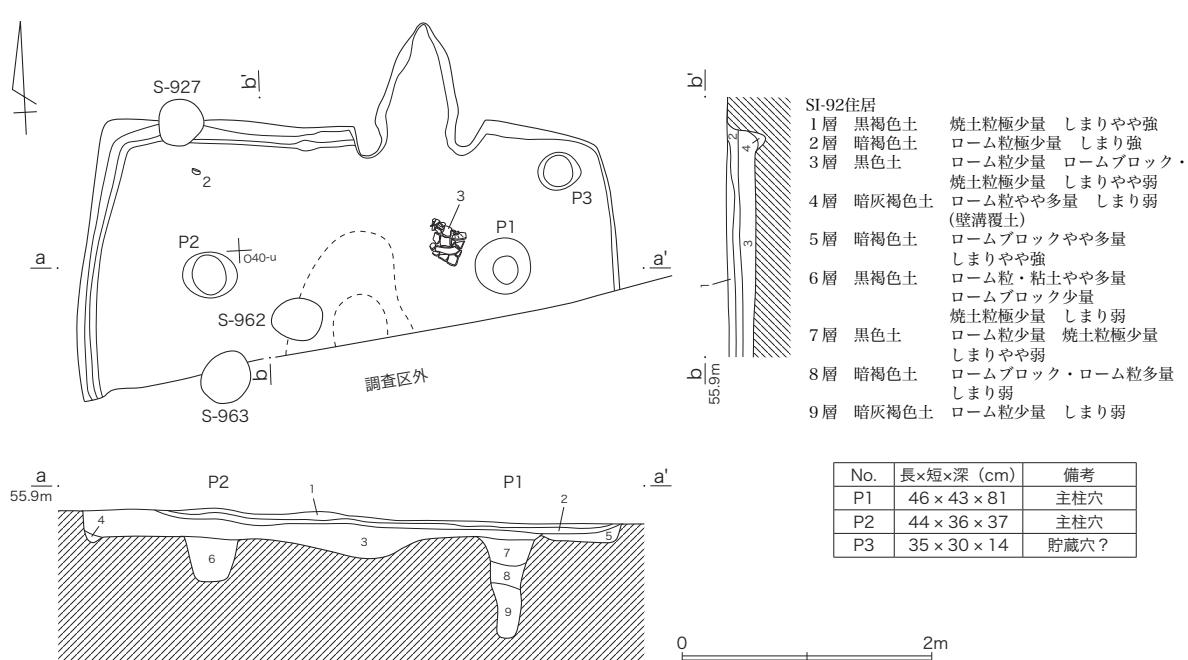
床面・貼床 ロームブロックによる貼床が部分的に施されている。住居全面には施されていないため、断面図作成箇所では確認できなかった。

掘方 住居中央が大きく窪んでいる（第184図破線部分）が、その他の部分はほぼ水平である。

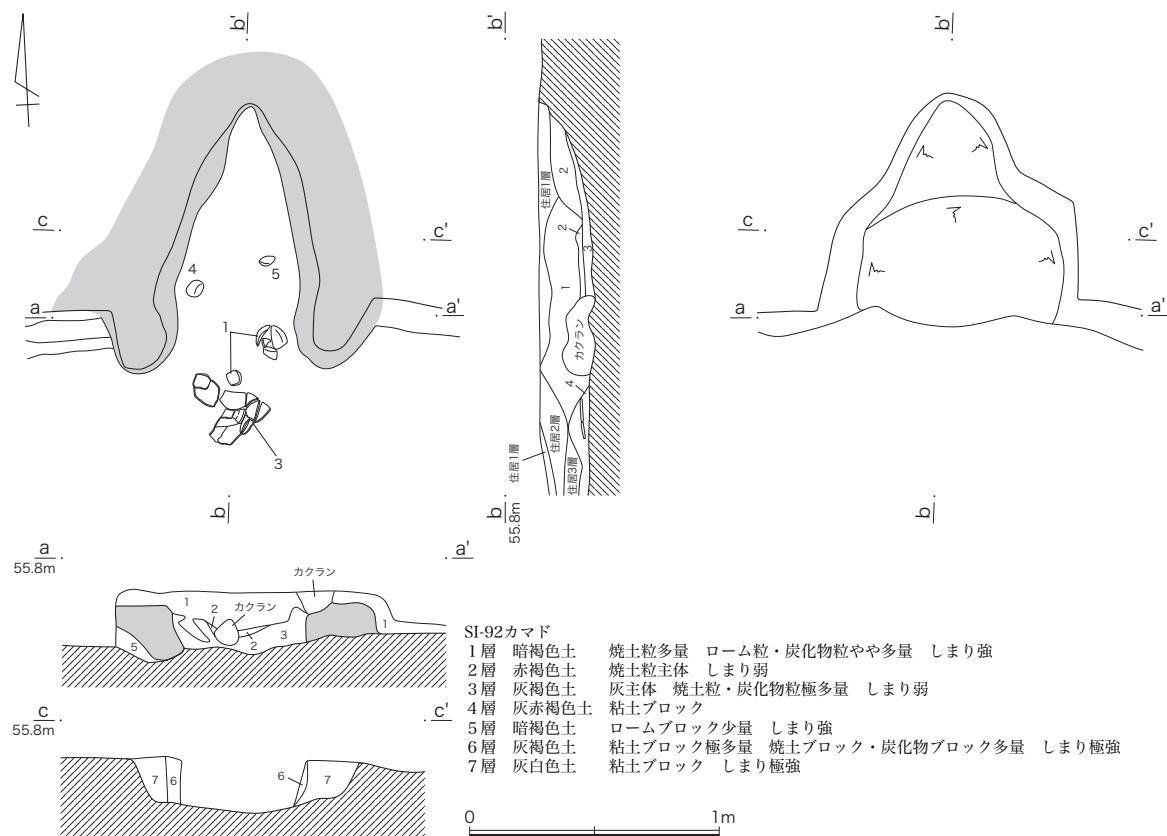
柱穴 2 本の柱穴が確認された (P1・P2)。柱の位置から、おそらく 4 本主柱であったと考えられる。P1 は P2 よりも 40cm ほど深い。2 本とも円状の掘り方を呈し、柱痕は確認されなかった。いずれもロームブロックを多く含む層が堆積しており、覆土のしまりは弱い。

火処 北壁中央にカマドが構築されており、両袖と奥壁が残存している。袖は非常に短く、凸字形に壁を掘り込んだ後、袖から奥壁にかけて粘土を 30～40cm ほど厚く貼り付けている。カマド内部の側壁は、ほぼ直に立ち上がっている。内部には焼土粒・炭化物粒を多く含む暗褐色土が厚く堆積しており（1 層）、その下に焼土粒を主体とする層（2 層）が薄く堆積している。さらに底面には、灰を主体とする層（3 層）が薄く堆積していた。この層には焼土粒・炭化物粒が極多量に含まれていることから、燃焼面であると考えられる。カマド焚口付近からは土師器壺（第186図1）および土師器甕の破片（第186図3）が出土している。

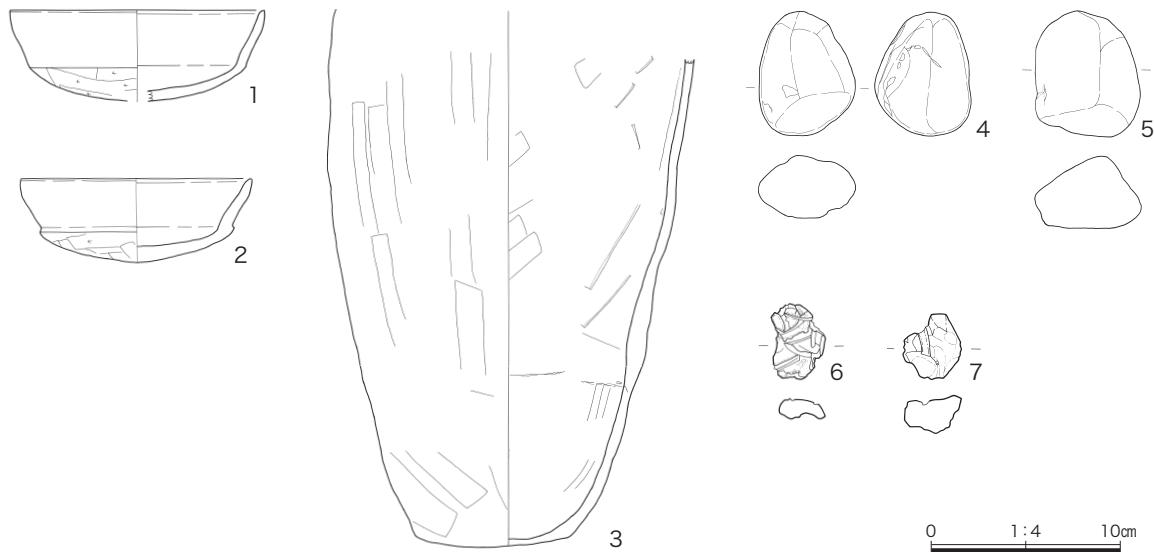
カマド底面はほぼ平坦で、奥壁はなだらかに立ち上がる。



第184図 SI-92 竪穴住居跡 (1)



第185図 SI-92 穫穴住居跡（2）



第186図 SI-92 出土遺物

貯蔵穴 住居北東隅で確認されたピット状の掘り込みが貯蔵穴とも考えられるが、他の住居に比べて著しく小さく、形状も異なっている。

遺物 P1 西側の床面上から土師器甕の胴部破片がまとまって出土しており、カマド内部から出土した破片と接合した（第186図3）。

第72表 SI-92 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 12.2 高 4.5	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 摩滅強 (残) 8/8	砂礫やや多・雲母少 二次被熱 10YR6/3 にぶい黄橙	床上 + 10cm No.5 + 7
2 土師器 壺	口 13.4 高 (4.8)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 7/8	砂礫やや多・雲母少 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床上 + 15cm No.1 + 下層 + 覆土一括
3 土師器 甕	高 (28.2)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 内面胴下間に輪積痕残る (残) 4/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 7.5YR5/6 明褐	床上 + 10cm No.2 + 7
4 礫	長 6.5 幅 5.0 厚 3.6 重 143.2	断面三角状 全体的に被熱 表面が一部層状に割れている	7.5YR6/2 灰黃 チャート	床直 No.3
5 礫	長 6.6 幅 5.5 厚 4.1 重 190.9	断面三角状 使用痕特になし	10YR6/2 灰黃褐 礫岩	床直 No.4
6 焼成 粘土塊	長 4.2 幅 2.6 厚 5.1 重 8.57	扁平 全体的にヘラ状工具による多方向のキズ有り 実測図左側面はちぎり取った状態	白色粒子微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド
7 焼成 粘土塊	長 3.4 幅 3.0 厚 1.8 重 10.37	塊状 全体的にヘラ状工具による多方向のキズ有り	白色粒子微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド

SI-95 (第187～189図・図版二五・五二)

位置 O39 グリッドに位置する。平成14年度にa-a'ラインから南側、平成15年度に残りの部分を調査した。

重複関係 住居北西部分がSI-1001 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-95(旧)→SI-1001(新)である。

規模・形状 残存部分で東西4.7m、南北4.8mの方形を呈するが、北東隅が丸みをおびているため歪んでいる。主軸方向は、N-8°-Eである。

覆土 内容物の少ない黒褐色土を主体とするが、遺存状態が悪く覆土はほとんど残っていない。住居東側は表土が大きく落ち込んでいる(1・9層)ため、地山と覆土の境が不明瞭になっている。

壁 H14年度の調査区壁(a-a'ライン)では深さ25cm程度残っていることが確認されていたが、H14年度に行われた水路工事の際に表土が削平されてしまったため、H15年度調査の際には壁がほとんど残っていなかった。a-a'ラインの状況から、壁はやや開きながら立ち上がると考えられる。

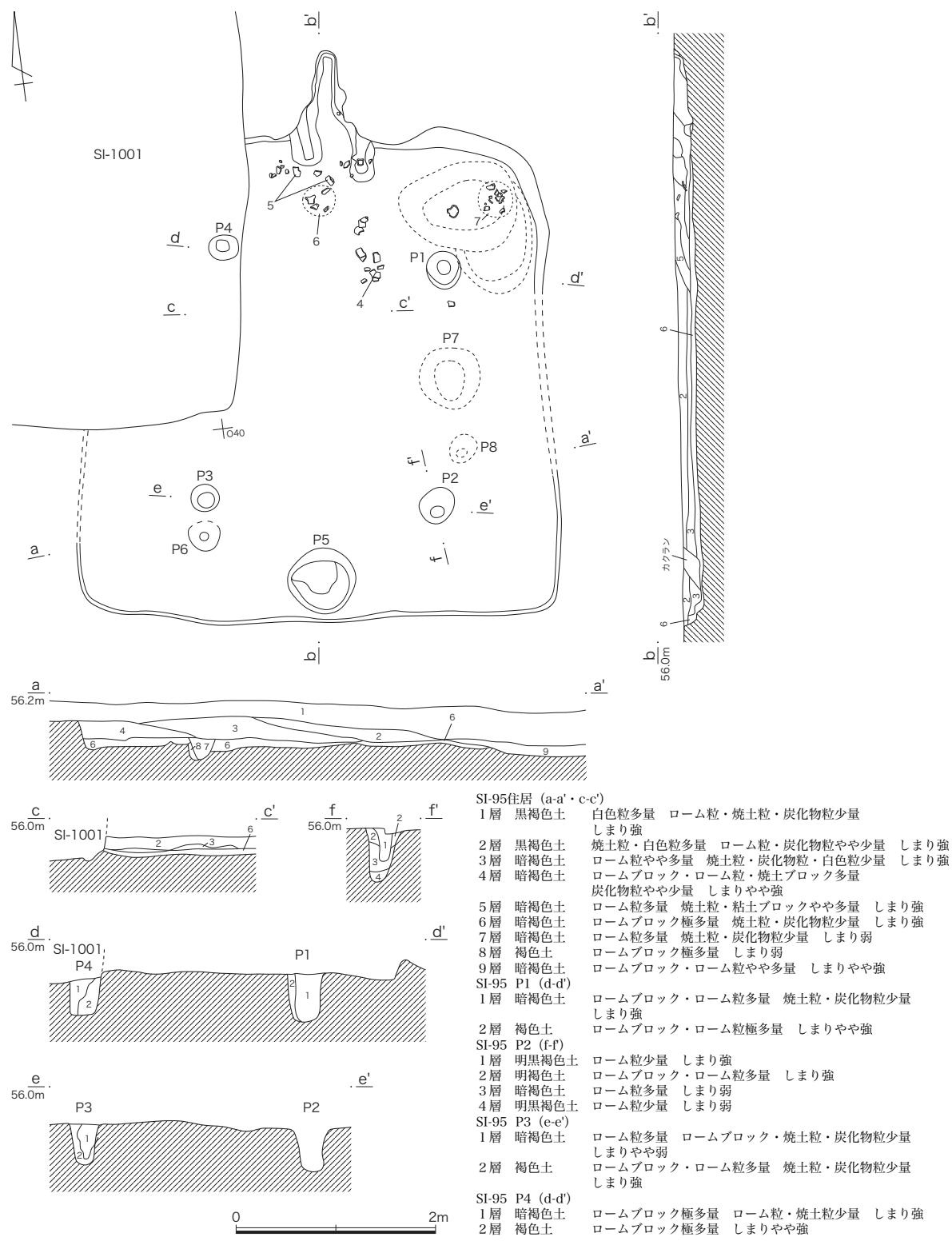
床面 ロームブロックを多く含む暗褐色土による貼床が、住居全面に施されている。

掘方 北東隅が大きく窪む他は、ほぼ水平である。

柱穴 4本主柱。円状の掘り方を呈し、柱痕状の土層が各柱穴で確認されている。柱痕の周りには、ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。

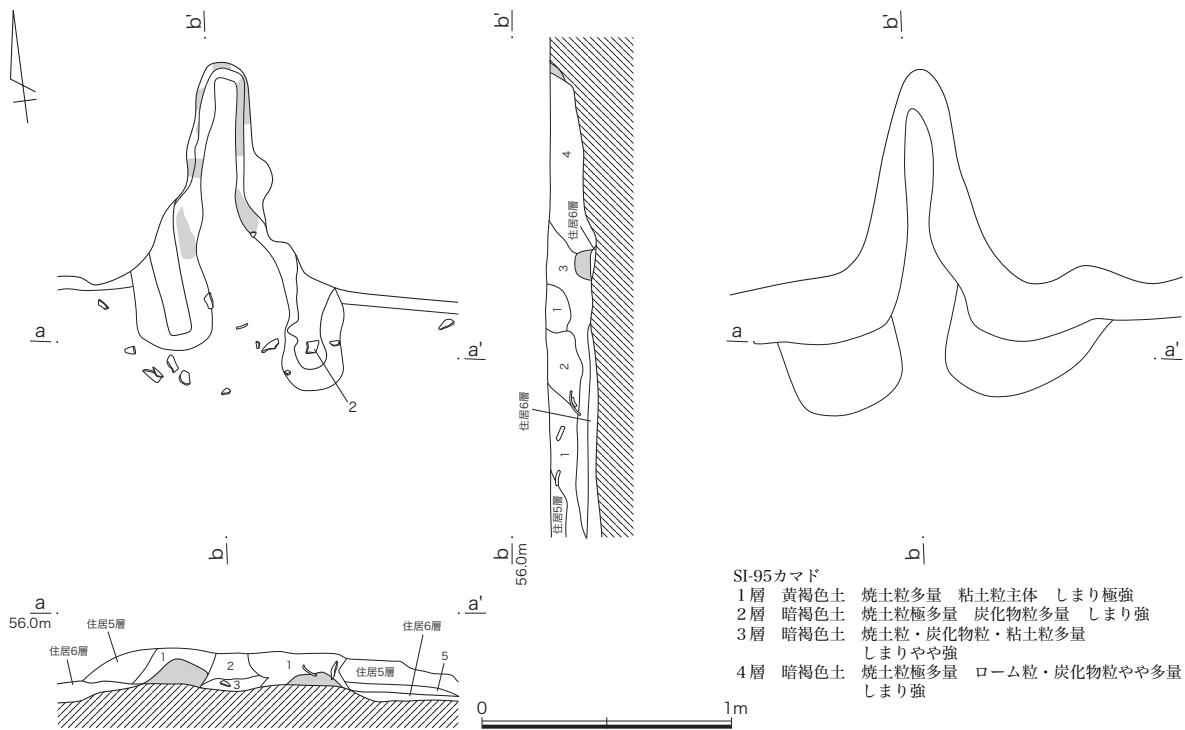
入り口ピット 南壁中央寄りに1基確認された(P5)。やや歪んだ円形の土坑で、極浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と煙道が残存しているが、遺存状況は極めて悪い。両袖は地山を掘り残した上に黄褐色粘土を貼り付けて構築している。煙道壁にも粘土を貼り付けており、内部は良く焼けている。煙道は、壁から約80cmほど外に長く伸びている。煙道の粘土と掘方の間には、焼土を多く含む土層が裏ごめ状に堆積している。SI-1006 竪穴住居跡やSI-1014 竪穴住居跡のカマドも同様に、粘

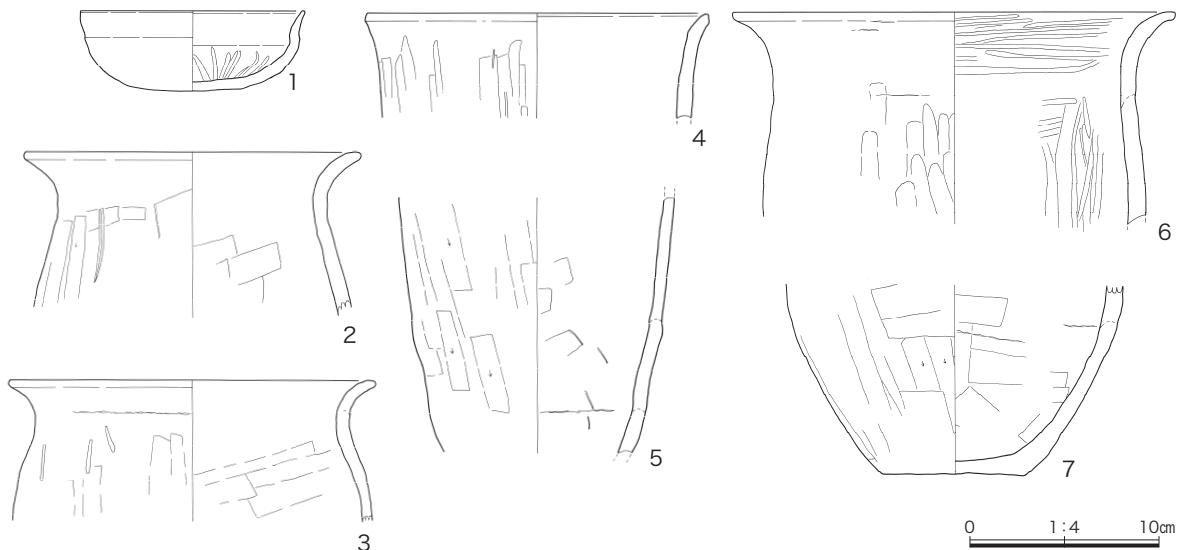


第187図 SI-95 壇穴住居跡 (1)

No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	39 × 34 × 50	主柱穴	P5	67 × 65 × 20	入口ピット
P2	36 × 32 × 46	主柱穴	P6	[23] × 30 × 26	
P3	29 × 27 × 41	主柱穴	P7	62 × 60 × 14	床下ピット
P4	30 × 26 × 32	主柱穴	P8	30 × 25 × 19	床下ピット



第188図 SI-95 竪穴住居跡（2）



第189図 SI-95 出土遺物

土と掘り方の間に裏ごめ土が確認されている。カマド周辺には、粘土がブロック状に多く堆積していた。

遺物 カマド周辺で土師器甕の破片が多く出土している（第189図4～6）が、住居全体の出土量は少ない。

第73表 SI-95 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 11.8 高 4.2	(内) 口～体上半ヨコナデ→放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体不明 (残) 6/8	白色粒子やや多・砂礫少 良 10YR6/4 にぶい黄褐	P5 内 No.29
2 土師器 甕	口 (17.8) 高 (8.2)	(内) 口ヨコナデ胴へラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR3/1 黒褐	床上 +10cm No.18+ カ マド焼土内
3 土師器 甕	口 (19.4) 高 7.4	(内) 口ヨコナデ胴ナデ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ? 口縁部に輪積痕 (残) 2/8	砂礫極多 良 5YR4/6 赤褐	カマド 焼土内
4 土師器 甕	口 (18.2) 高 (5.5)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.9+12+ カマド
5 土師器 甕	高 (13.5)	(内) 丁寧なヘラナデつけ (外) ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR3/1 黒褐	床上 +15cm No.2+4
6 土師器 甕	口 (23.4) 高 (11.2)	(内) 口ヨコナデ→隙間のあるミガキ胴へラケズリ (外) 口ヨコナデ胴へラナデ (残) 1/8	砂礫少・微細雲母微 二次被熱 5YR6/6 橙	床上 +10cm No.5+ 覆土 a
7 土師器 甕	底 (7.5) 高 (10.0)	(内) 口ヨコナデ胴へラナデつけ (外) 口ヨコナデ (残) 1/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.11

SI-96 (第190図・図版二五)

位置 M40 グリッドに位置する。

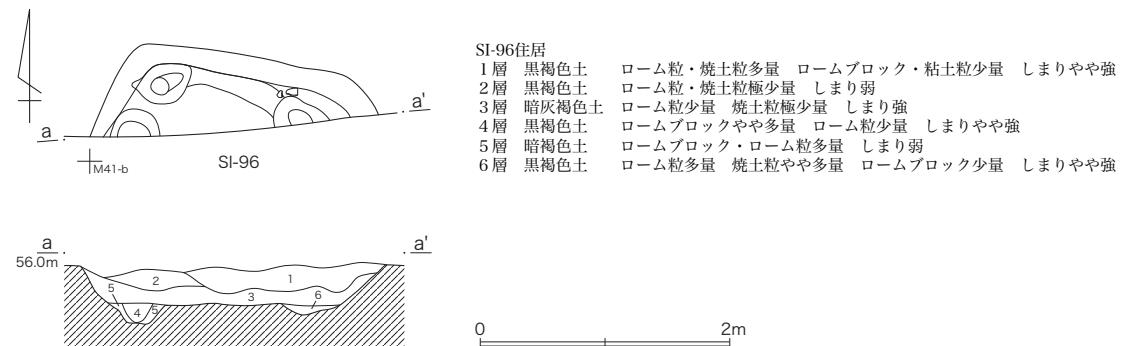
規模・形状 現代の水路に切られて残存部分が少ないため、規模や形状などは不明である。水路を挟んだ南側に SI-78 竪穴住居跡があり、同一の住居とも考えられるが確定できない。

壁 残存部分では緩やかに立ち上がる。壁溝は確認できなかった。

床面・貼床 地床であるが、一部黄褐色ロームによる貼床を施している。

掘方 壁際がやや凹む。また、調査区壁際のセクション面でピット状の落ち込みを確認したが、柱穴か否かは不明である。

遺物 土師器片が少量出土したのみで、実測可能な遺物は出土しなかった。



第190図 SI-96 竪穴住居跡

SI-1000 (第191～193図・図版二五・五二)

位置 K36グリッドに位置する。南西隅のみ平成17年度、残りの部分は平成15年度に調査した。

重複関係 住居南東隅をSD-1050溝状遺構に切られる。

規模・形状 東西4.1m、南北3.3mの東西に長い方形を呈する。主軸方向はN-10°-Eである。

覆土 上層(1層)は暗褐色土、下層(2層)は黒褐色土を主体とする。いずれの層もローム粒・ロームブロックを多く含む。1層には、黒色土ブロックも多量に含まれている。

壁・壁溝 確認面から深さ25cmで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は北東隅から東壁及び南壁の一部で確認された。

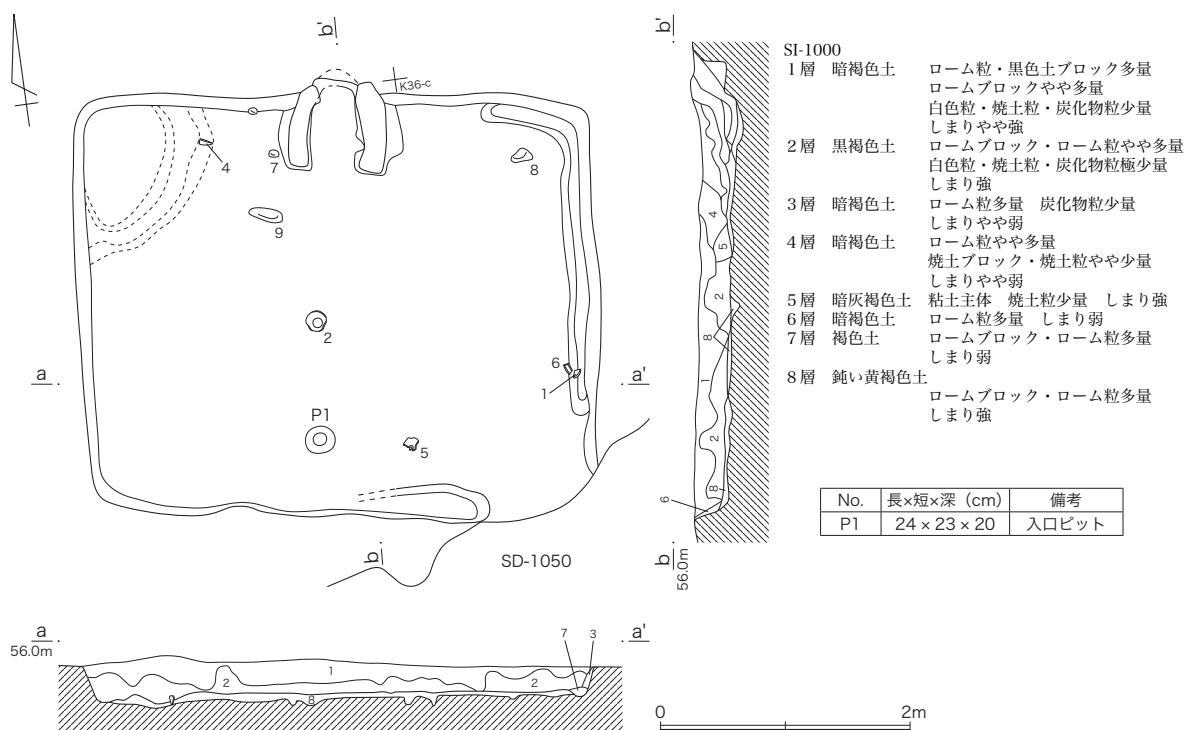
床面・貼床 水被により硬化したローム層(基本土層VII層)上面で床面を構築し、凹凸をならす程度にロームブロックによる貼床を施している。床面は非常に硬くほぼ水平だが、西壁際がやや低くなっている。

掘方 掘方はほぼ水平だが、南西隅で幅10～15cmほど弧状に掘り残された部分が確認された(第191図破線部分)。SI-1019堅穴住居跡では貯蔵穴の周囲に同様の周堤が作られているが、SI-1000堅穴住居跡では、内部に貯蔵穴などの住居施設は確認されなかった。

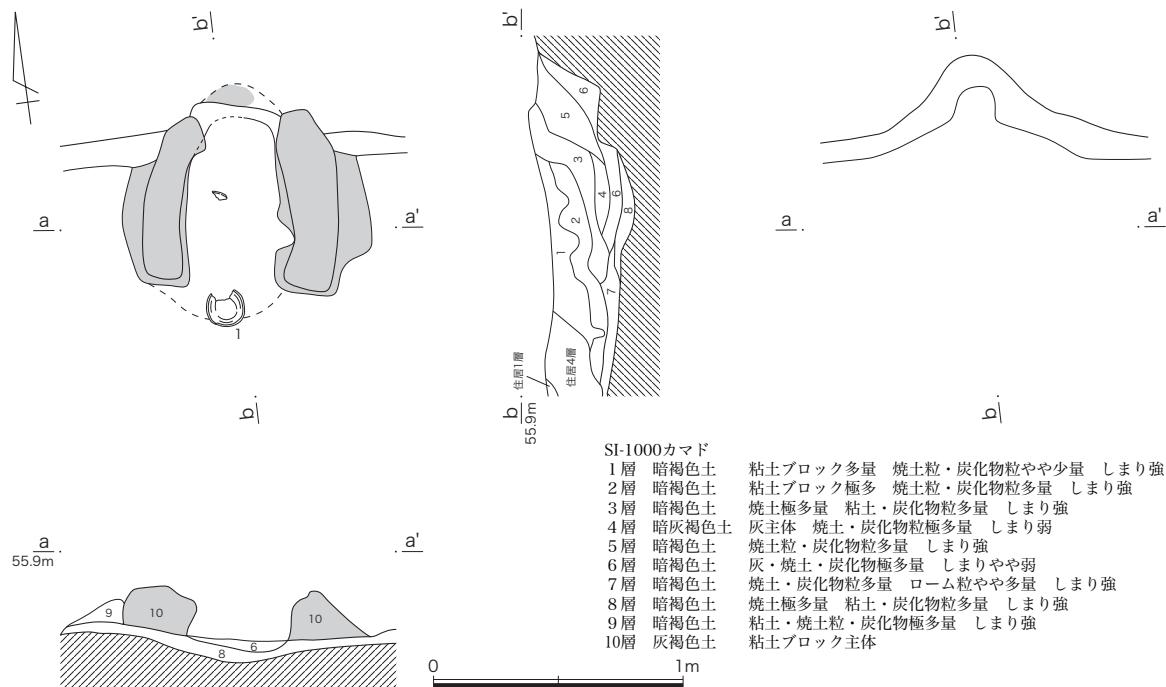
入り口ピット 南壁中央寄りの床下から1基確認された(P1)。円形の掘り方を呈し、極浅い。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しており、袖は多量の灰白色粘土を積み上げて構築している。内部には粘土ブロックが大量に堆積し(2・3層)、その下には焼土・灰・炭化物が幾層にもなって堆積している(4・6層)。特に燃焼面(8層)には灰が多量に堆積していた。奥壁は段状に掘り込まれており、短くほぼ直に立ち上がる。掘方は煙道部分がわずかに凸字状を呈する。

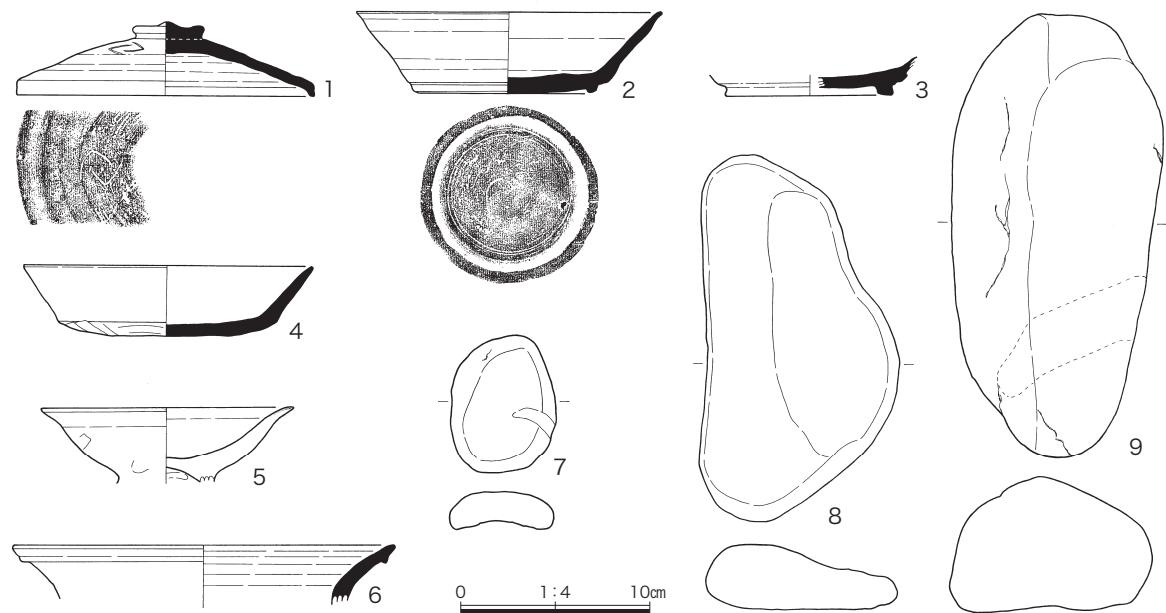
遺物 カマド焚口部分に須恵器蓋(第193図1)、住居跡のほぼ中央で須恵器坏(第193図2)が出土している。出土量は少ない。



第191図 SI-1000堅穴住居跡(1)



第192図 SI-1000 穫穴住居跡 (2)



第193図 SI-1000 出土遺物

SI-1001 (第194～199図・図版二六・五三)

位置 N39 グリッドに位置する。

重複関係 住居南東部分がSI-95 穫穴住居跡と、住居北東隅がSI-1002 穫穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-95・SI-1002（旧）→SI-1001（新）である。また、壁溝や間仕切り溝、カマドに床面に伴うものと掘り方に伴うものがあることから、住居の建て替えを行っている可能性も考えられるが、柱穴や床面が作り替え

第74表 SI-1000 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 (14.6) 高 3.9 撮部径 (3.8)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ ボタン状の撮み 外面ヘラ記号有り (残) 6/8 益子産	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR4/1 褐灰	カマド No.10
2 須恵器 坏	口 16.2 底 9.2 高 4.3	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 高台が坏部とずれて接着される (残) 7/8 産地不明	砂礫極多・白色粒子・ 黒色粒子多 やや良 2.5Y7/1 灰白	床上 +10cm No.2
3 須恵器 坏	底 (8.8) 高 (1.1) (残) 1/8	外面底部近くヘラケズリ 高台付 三毳産	砂粒・白色粒子多 良 5Y6/2 灰オリーブ	床直 No.4
4 土師器 坏	口 15.4 高 3.7 (残) 7/8	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 7/8	微細白色粒子やや多 良 10YR7/4 にぶい黄橙	カマド No.11
5 土師器 高坏	口 (13.3) 高 (4.0)	(内) ヨコナデ 脚部内面ナデ (外) 口ヨコナデ体ナデ 内外面くびれ部周辺に煤状の付着物	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.3
6 須恵器 甕	口 (10.1) 高 (3.3) 常陸産?	内外面ともロクロナデ (残) 1/8 全体的に弱い赤化	白色粒子やや多・砂礫少 良 7.5Y5/1 灰	床直 No.4
7 礫	長 7.4 幅 5.6 厚 2.0 重 101.3	左側に浅い溝状の擦痕 全体的に弱い赤化	7.5YR にぶい橙	床直 No.6
8 礫	長 19.5 幅 10.4 厚 3.4 重 930.0	不整形な盤状 全体的に弱い赤化	5YR4/6 にぶい赤褐	床直 No.8
9 礫	長 23.4 幅 11.1 厚 8.4 重 2810.0	長楕円 断面三角状 裏面に煤状の付着物	10YR6/1 灰	床直 No.7

られていない点から、全体的な建て替えではなく、部分的な作り替えと判断した。

規模・形状 東西 6.1 m、南北 5.5 m の方形を呈するが、南壁が一部失われているため南北の計測値は推定値である。主軸方向は N - 6° - E である。

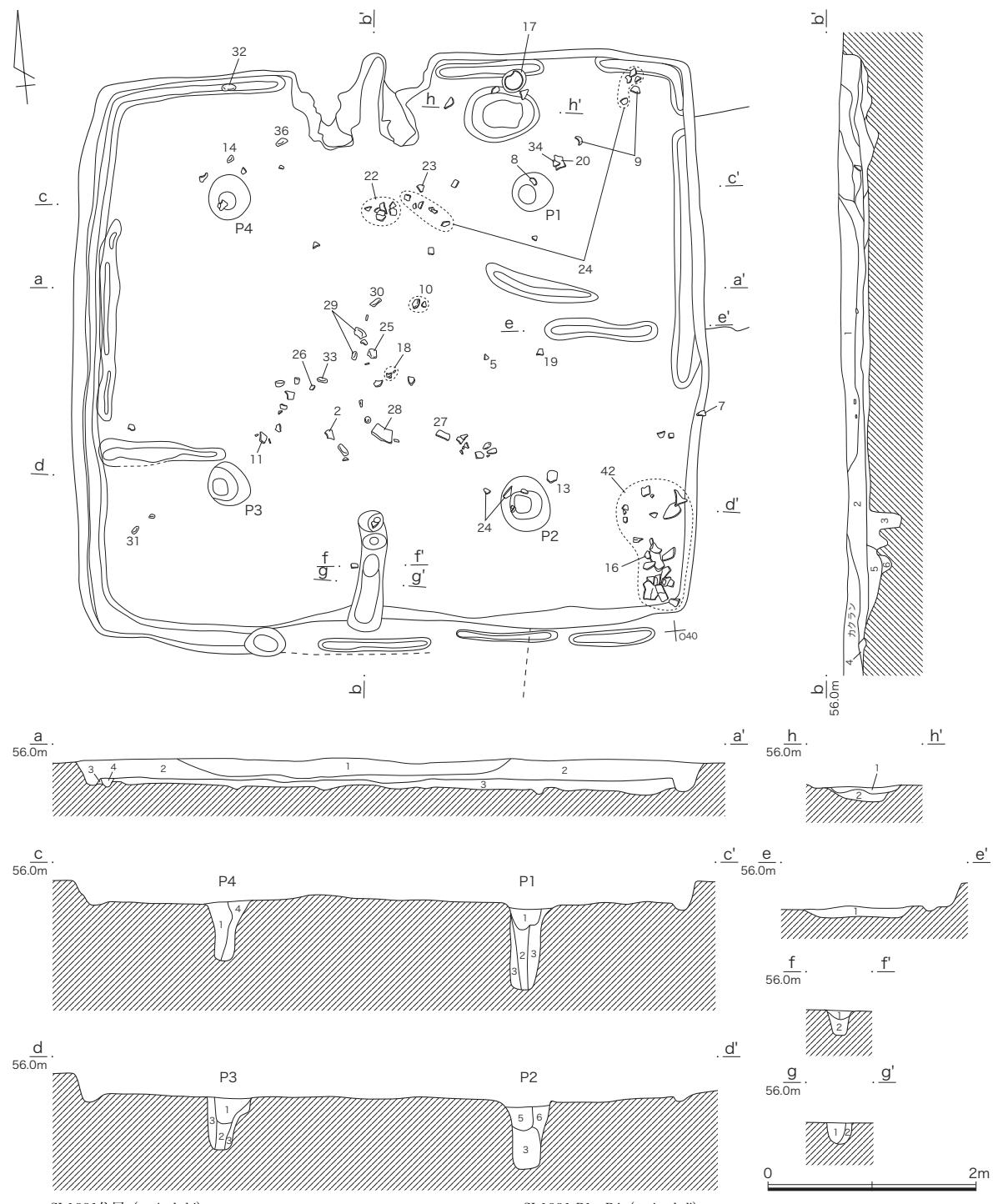
覆土 ローム粒・炭化物粒・焼土粒を多く含む暗褐色土を主体とし、全体的には均質な覆土が堆積している。

壁・壁溝 確認面から 20cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。南壁は攪乱により失われている。壁溝はカマド部分と住居南東隅以外ではほぼ全周する。西壁中央部分は、壁溝が二重に掘り込まれている。南壁では当初壁溝が確認されなかったが、住居壁と考えていた立ち上がりの外に溝状の掘り込みが確認されたため、南壁は攪乱により破壊され、内側の立ち上がりは掘方のものと考えた。さらに、床下調査中に、東壁から約 30cm 内側で溝状の掘り込みが一部確認された。

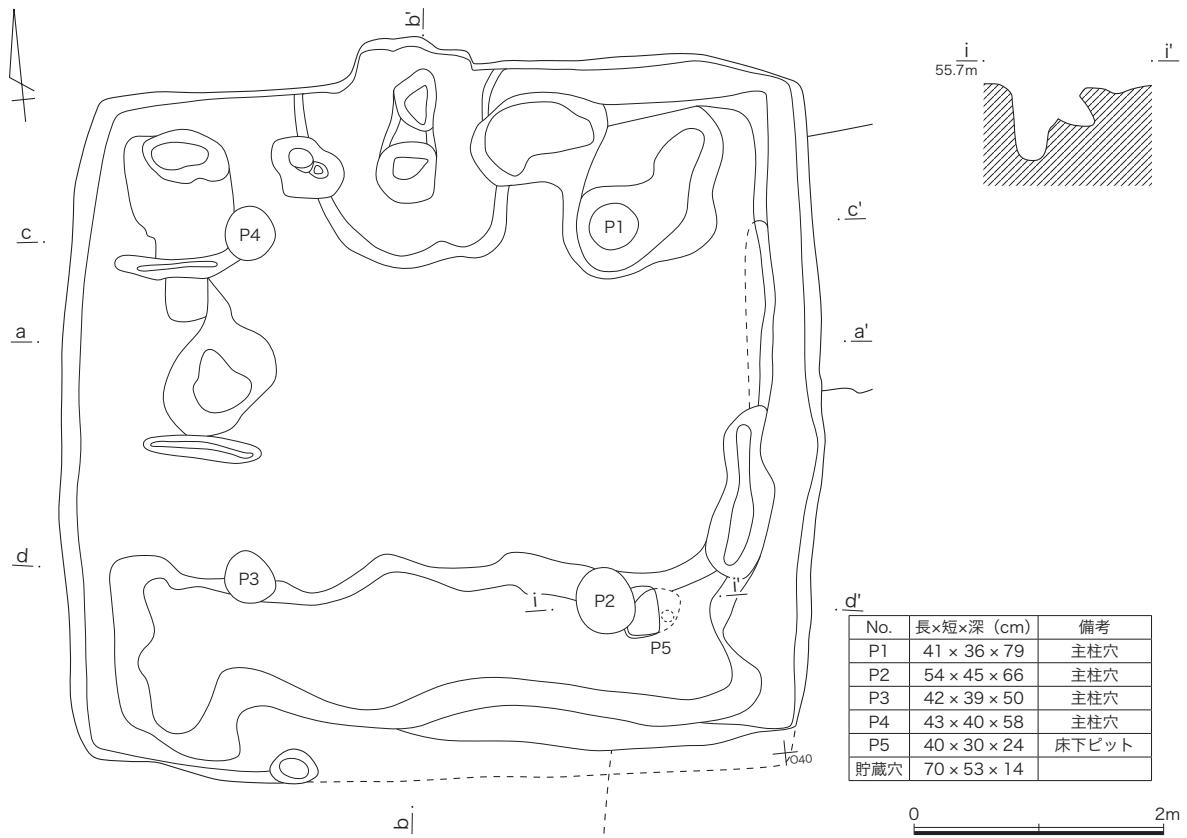
床面・貼床 ロームブロックによる薄い貼床が全面に施される。

掘方 北東、北西に土坑状の掘り込み、南壁から約 30cm 内側に幅広の溝状の掘り込みが確認された。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土だが、北西角の掘り込みのみローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積しており、貯蔵穴であった可能性もある。東壁側は、壁から約 15cm 内側に 5cm 程度の段差がある。カマド部分は島状に大きく掘り残している（第 195 図）。

柱穴 4 本主柱。いずれも円形の掘り方を呈し、P2 以外の柱穴では柱痕が確認された。P2 東側に P2 より古い横穴（P5）があり、内部には明灰褐色土ローム主体（基本土層Ⅶ 層と同じ）の覆土が堆積していた。



第194図 SI-1001 穫穴住居跡 (1)



第195図 SI-1001 穫穴住居跡（2）

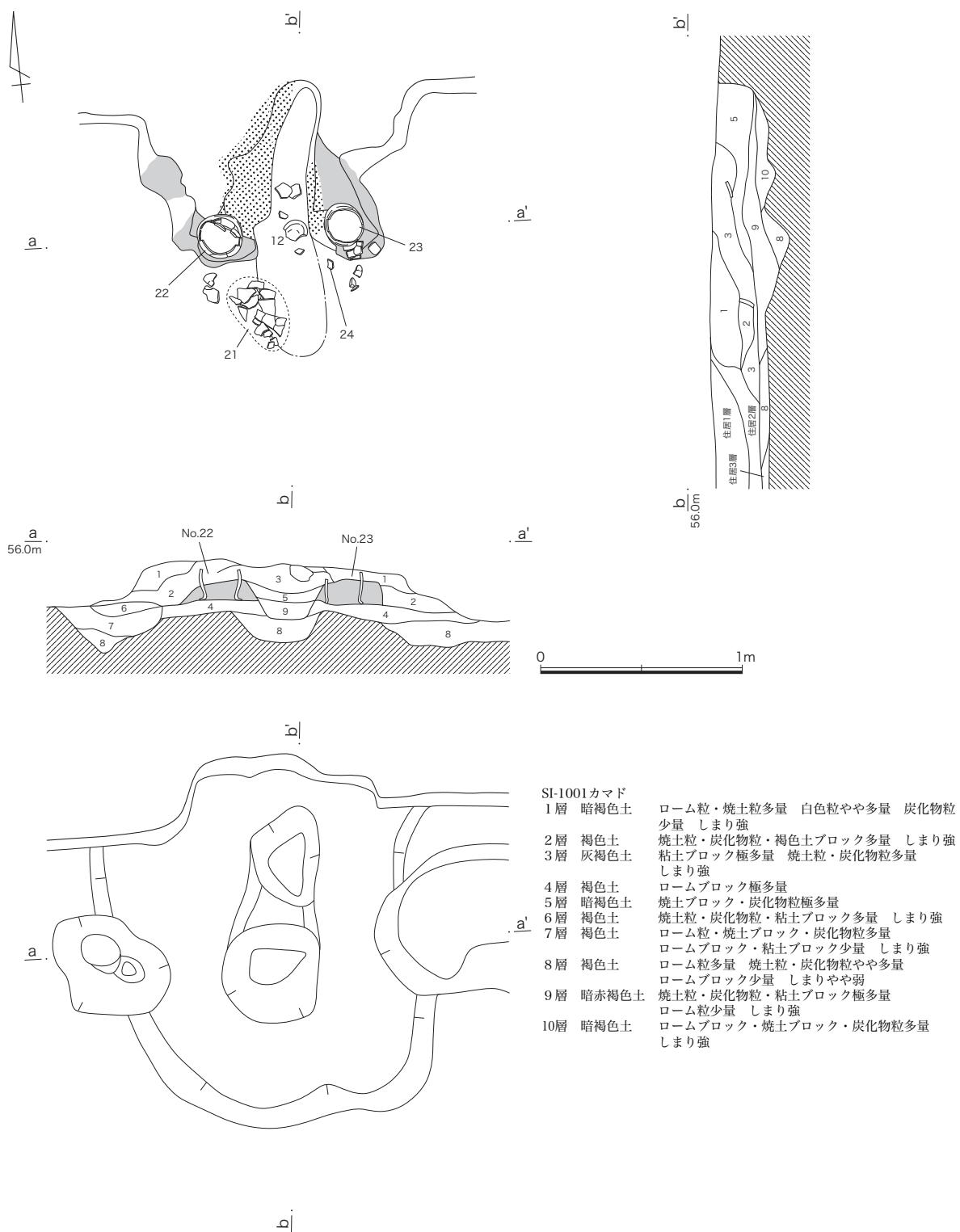
住居に伴うものかより古いものは判断できない。

入口ピット 南壁中央から住居中央に向けて、布堀状のピット列が確認された。覆土が貼床と同じ土層のため、住居使用中に埋められた可能性もある。

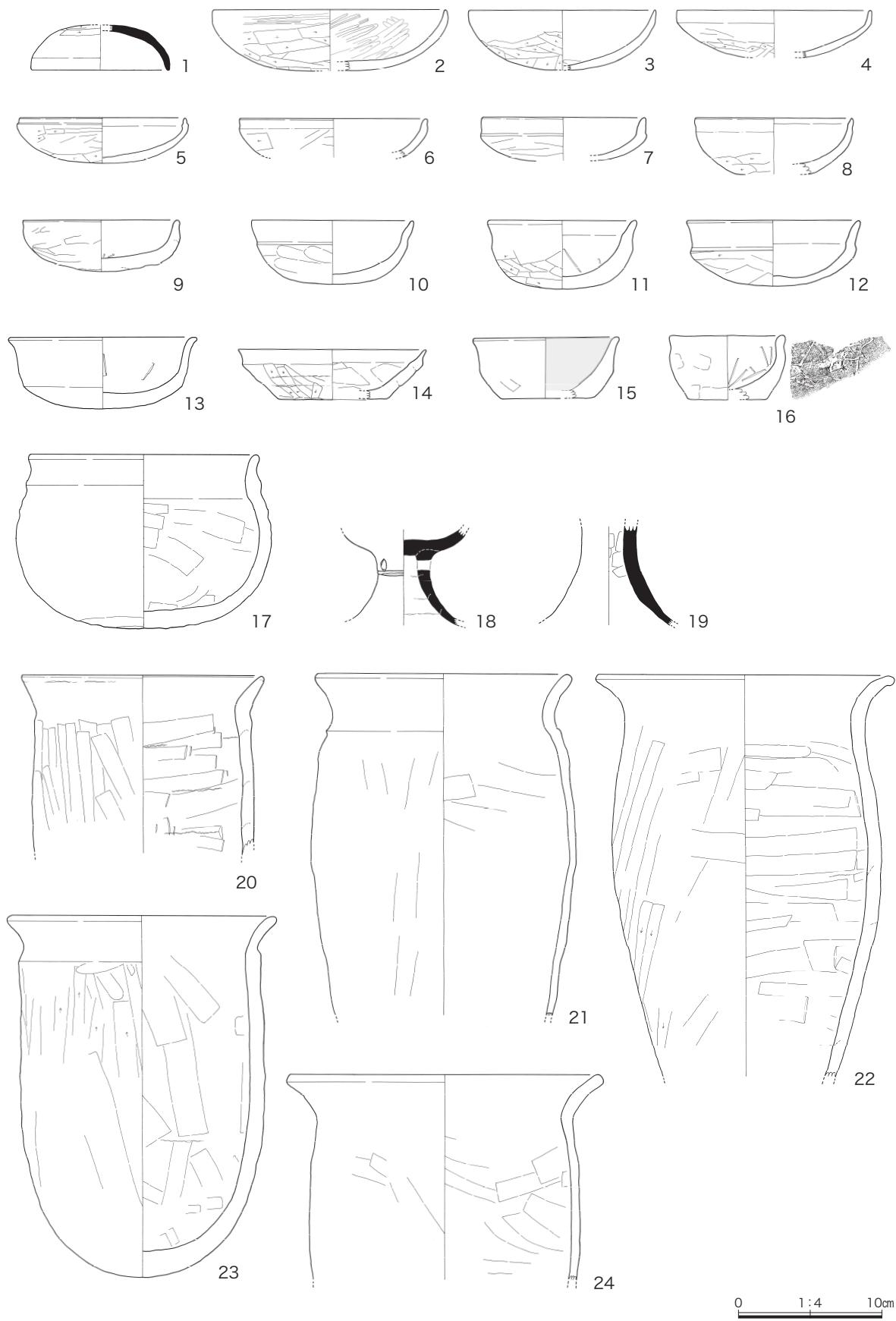
間仕切り溝 東西方向の間仕切り溝が5本確認された。住居西側中央と北側の2本にはロームブロックを主体とする褐色土、それ以外のものには黒褐色土が堆積していた。後者の覆土は住居覆土と似ることから住居床面に伴うもの、前者の覆土は掘方覆土と似ることから住居床面よりも古いものと考えられる。しかし、どの溝も柱穴から外れた位置に掘り込まれており、間仕切りとして作られたものかどうかは不明である。

火廻 北壁中央にカマドを構築している。両袖と奥壁が残存しているが、上部が大きく削平されているため残存状況は不良である。断面観察から、カマドの火床面は2面あることが確認された。新しいカマド（カマド9層を燃焼面とする）は古いカマド（カマド8層を燃焼面とする）を埋め戻した後に貼床を施し、その上に灰白色粘土を積み上げて袖を構築している。さらに、袖の先端部分に胴下半部を打ち欠いた甕を2個体埋め込んでいる（第197図22・23）。新しいカマドは袖内側から奥壁にかけてよく焼けており、内部には炭、粘土、焼土が多量に残っていたが、灰はほとんど残っていなかった（カマド5層・9層）。煙道は短く、ほぼ直に立ち上がる。古いカマドは、地山を島状に掘り残した後に燃焼部を掘り込んでいる。内部には、焼土・炭化物・灰等はほとんど残っていなかった。カマド部分の掘り方は大きく平坦に掘り残されている。奥壁は凸形を呈し、袖の両脇には土坑状の掘り込みがあった。

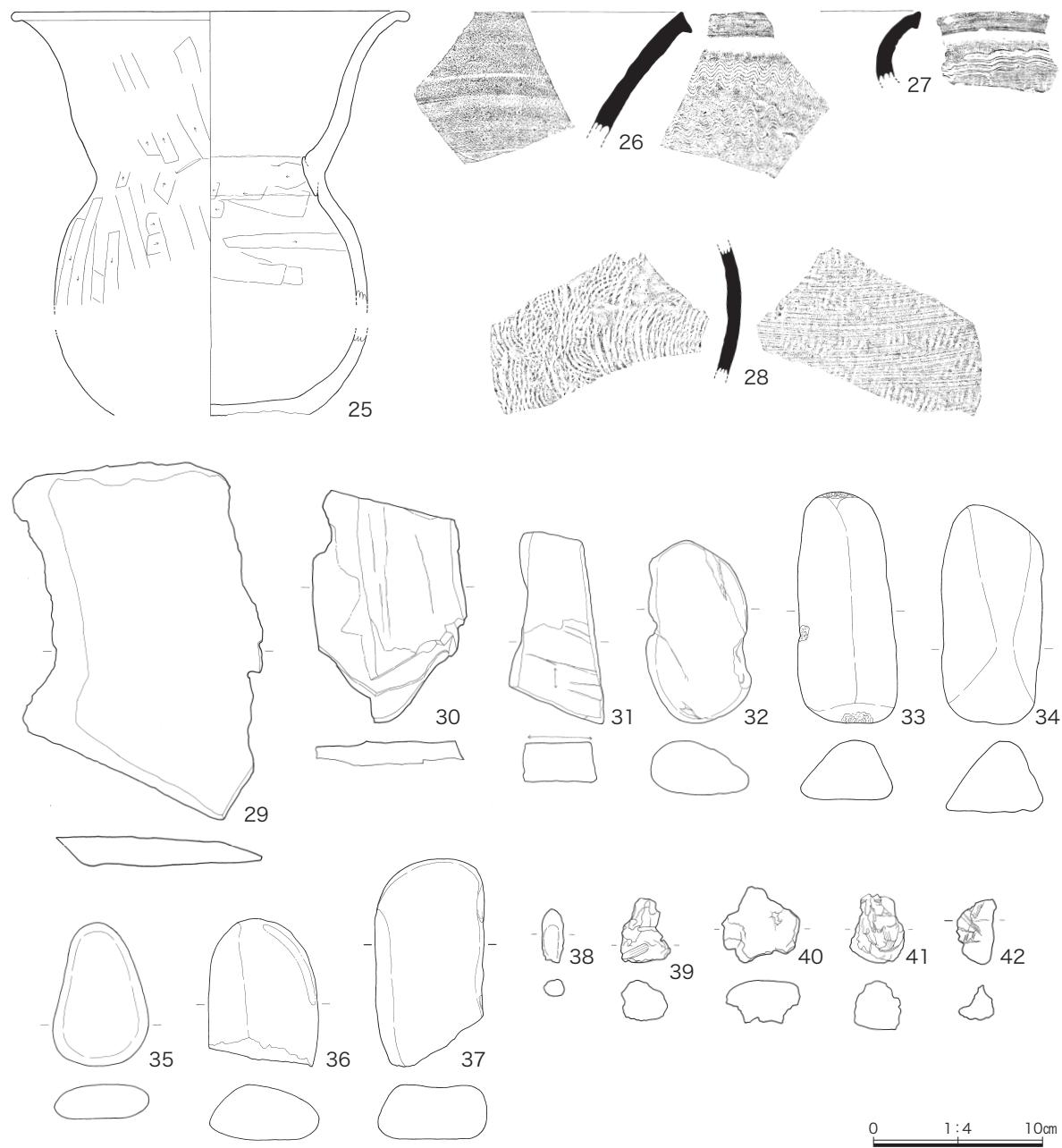
貯蔵穴 住居北東隅で1基確認された。東西に長い橢円状を呈し、極浅い。上面には焼土・炭化物が多く堆積していた（1層）。



第196図 SI-1001 穫穴住居跡（3）



第197図 SI-1001出土遺物(1)



第198図 SI-1001出土遺物（2）

遺物 出土量は多く、特に住居中央と南東隅、カマド周辺で集中して出土している。南東隅では、床面から20cmほど浮いた状態で、須恵器大甕の破片がまとまって出土した（第199図43）。住居中央では土師器、須恵器の破片と共に、砥石と考えられる破碎礫が出土している（第198図29・30）。カマド周辺では、焚口付近に土師器甕の破片がまとまっていた（第197図21・22・23）。また、覆土中からは焼成粘土塊が多く出土している（第198図38～42）。16の土師器壺の底部から胴部には、葉の形までわかる木葉痕が残っていた。25の土師器壺は、上半部が壠の形に近いが底部が平底となっている。図化はできなかったが、覆土中から羽口の小破片が出土している。



第199図 SI-1001出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物

第75表 SI-1001 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (9.6) 高 (3.1)	内外面ともロクロナデ 底部近く手持ちヘラケズリ (残) 4/8 新治産?	白色粒子やや多 やや良 5Y4/1 灰	ベルト
2 土師器 壺	口 (16.2) 高 (4.3)	(内) ヨコナデ→全体に斜め方向の(一部花弁状)ミガキ (外) ヨコナデ→横方向ミガキ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂粒多・白色粒子少・ 雲母微 良 7.5YR6/6 橙	床上 +20cm No.33
3 土師器 壺	口 (13.0) 高 (4.2)	(内) ヨコナデ、底部近く指ナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面一部漆付着 (残) 2/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	覆土 b + ベルト
4 土師器 壺	口 (13.4) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 2/8	砂粒少 良 5YR5/8 明赤褐	覆土 c + 床下
5 土師器 壺	口 (11.4) 高 3.2	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面一部漆付着 (残) 3/8	白色粒子多・砂粒やや多 良 7.5YR4/2 灰褐	床上 +20cm No.17+ 覆 土 a+ ベルト
6 土師器 壺	口 (13.0) 高 (2.7)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 摩滅強 (残) 1/8	砂粒多・白色粒子少 やや良 7.5YR4/2 灰褐	覆土 a+ 貯蔵穴
7 土師器 壺	口 (11.2) 高 (3.0)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面摩滅強 内面漆仕上げ (残) 1/8	微細白色粒子・砂粒少 やや良 7.5YR4/2 褐灰	床直 No.46
8 土師器 壺	口 (11.0) 高 (3.9)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口唇部内外面に漆付着 (残) 2/8	白色粒子・砂粒多・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.7+ 覆土 a
9 土師器 壺	口 10.8 高 3.6	(内) ヨコナデ (工具痕残る) (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ? (残) 7/8	微細白色粒子多・砂粒や や多 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +10cm No.5+8
10 土師器 壺	口 (11.2) 高 4.5	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ底ヘラケズリ? 口縁部内外面に漆付着 (残) 4/8	砂粒少・白色粒子・雲母微 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +10cm No.16
11 土師器 壺	口 (10.2) 高 4.8	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ (工具痕残る) (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 内外面一部剥離 (残) 5/8	砂粒多・微細白色粒子少 二次被熱 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +20cm No.34+ ベルト + トレンチ
12 土師器 壺	口 12.0 高 4.6	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ? 外面摩滅強 器壁厚さ一定せず (残) 4/8	砂礫多・白色粒子少 良 10YR4/1 褐灰	カマド内 No.78
13 土師器 壺	口 (13.0) 高 5.0	(内) ヨコナデ (工具痕残る) (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ? 内面一部漆付着 (残) 4/8	砂礫・砂粒・白色粒子少 良 7.5YR4/1 褐灰	床上 +5cm No.28
14 土師器 壺	口 (13.0) 底 (7.6) 高 3.5	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ (外) ヨコナデ胴ヘラナデ 外面に輪積痕残る (残) 1/8	微細白色粒子やや多 良 7.5YR4/4 褐	床上 +5cm No.44
15 土師器 壺	口 (10.2) 底 (6.5) 高 4.2	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面黒色処理 (残) 1/8	砂粒少・微細白色粒子微 良 7.5YR6/4 にぶい橙	覆土 c
16 土師器 壺	口 (8.0) 底 (5.5) 高 4.5	(内) ヨコナデ胴ナデ (工具痕多く残る) (外) ヨコナデ胴指ナデ 底部木葉痕 (胴下半まで残る) (残) 8/8	微細白色粒子極多・雲母少 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +10cm No.69
17 土師器 塊	口 (15.6) 高 12.1	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ (外) ヨコナデ胴不明 外面摩滅強 (残) 4/8	砂礫・微細白色粒子多・ 雲母微 やや良 10YR6/2 灰黃褐	床上 +10cm No.3

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
18 須恵器 高壺	高 (6.7)	内外面ともロクロナデ 壺部外面回転ヘラケズリ 脚部外面飾り孔下に凹線 孔3単位 脚部内面に輪積痕残る (残) 2/8 産地不明	砂粒・白色粒子・黒色粒子少 5YR6/1 灰	床上 +10cm No.22+ 覆土 b
19 須恵器 高壺	高 (6.8)	内外面ともロクロナデ 脚部内面上半ヘラナデ、脚部外面下半回転ヘラケズリ (残) 1/8 産地不明	砂粒多・砂礫・白色粒子少・ 雲母微 やや良 5YR4/2 灰褐	床上 +20cm No.18+ 覆土 b
20 土師器 甕	口 (16.8) 高 (12.4)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫極多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +10cm No.6
21 土師器 甕	口 (17.8) 高 (23.7)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部下半外面に粘土が薄く付着 内外面摩滅 (残) 3/8	砂礫・白色粒子・雲母多 二次被熱 5YR4/8 赤褐	カマド内 No.79+カド +ベット
22 土師器 甕	口 (20.6) 高 (27.8)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部中位の輪積部分で打ち欠く 外面に粘土が薄く付着	砂礫多・微細白色粒子や や多・雲母微 二次被熱 5YR5/6 赤褐	カマド左袖 No.14+91 +92+カマド
23 土師器 甕	口 18.6 高 25.1	(内) ロヨコナデ胴ナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部下半摩滅 内面に輪積痕残る (残) 6/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 2.5YR5/6 明赤褐	カマド右袖 No.12+92+ 覆土 a+カド
24 土師器 甕	口 (22.0) 高 (14.0)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 外面摩滅 (残) 2/8	砂礫・白色粒子・雲 母多二次被熱 5YR4/8 赤褐	カマド No.8 +10+11+82+ ベット+カド
25 土師器 壺	口 (23.4) 頸 (12.9) 底 (11.3) 高 (24.0)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ヘラケズリ 口縁部大きく外反 胴部は甕形 (残) 2/8	砂粒多・白色粒子やや多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	P2・床直 No.29+30+ 59+62+ 覆土 b
26 須恵器 甕	破片	内外面ともロクロナデ 外面7本1組2段の波状櫛描文 内外面に化粧土? 産地不明	白色粒子多・砂礫少 良 N3/ 暗灰	床上 +20cm No.21
27 須恵器 甕	破片	内外面ともロクロナデ 外面3本1組?の波状櫛描文 産地不明	砂粒やや多・白色粒子少 雲母微 不良 2.5Y3/1 黒褐	床上 +15cm No.38
28 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状當て具痕 (外) 繩目タタキ→カキメ 内面指頭圧痕残る 産地不明	砂粒・黒色粒子多・砂粒多 良 N4/ 灰	床上 +10cm No.25
29 砥石?	長 19.7 幅 13. 厚 1.8 重 630.2	板状 表面層状に剥離 破碎面が弱く磨れている 同一母岩と考えられる礫が出土 (No.31)	5YR4/3 にぶい赤褐	床上 +15cm No.57
30 石製品 砥石?	長 13.7 幅 8.8 厚 1.4 重 248.7	正面及び左側面の2面使用 (正面は研ぎ弱い)、他の部分 は剥離するように欠けている。実測図表面に刃潰し痕多く 残る。	7.5YR5/3 にぶい褐	床上 +10cm No.50
31 砥石?	長 11.3 幅 5.6 厚 2.4 重 199.92	板状 表面層状に剥離 実測図上端に弱い研ぎ面	5YR4/3 にぶい赤褐	床上 +10cm No.50
32 礫	長 10.8 幅 5.8 厚 3.2 重 266.3	両側面に抉り状の敲打痕あり 全体的に弱い赤化	7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +15cm No.55
33 礫	長 13.6 幅 5.8 厚 3.9 重 454.6	断面三角状 上下端に敲打痕 左側面中位に敲打痕	5GY5/1 オリーブ灰 礫岩	床上 +5cm No.47
34 礫	長 13.0 幅 6.0 厚 4.1 重 390.3	断面三角状 左側面に弱い擦痕	5Y5/2 灰オリーブ 安山岩	床直 No.53

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
35 礫	長 8.5 幅 5.6 厚 2.0 重 134.6	断面扁平な楕円状 裏面に煤状の付着物がわずかに残る	2.5Y6/1 黄灰 砂岩	床上 +10cm No.6
36 礫	長 9.8 幅 6.4 厚 3.8 重 275.7	断面三角状 上端左側にタール状の付着物 全体的に弱い擦痕	10YR7/1 灰白 砂岩	床直 No.49
37 礫	長 12.2 幅 6.4 厚 3.5 重 437.9	裏面に一部タール状の付着物 上端に磨面有り	5Y6/1 灰 砂岩	床上 +15cm No.48
38 焼成 粘土塊	長 3.2 幅 1.3 厚 1.0 重 3.82	棒状 下端はちぎり取った状態で、表面は軽く握った指の 痕がついている 調整なし	微細白色粒子微量 良 10YR4/4 褐	覆土 C
39 焼成 粘土塊	長 3.8 幅 2.9 厚 2.3 重 12.58	塊状 実測図下端と左上はちぎり取った状態 実測図表面 はヘラ状工具によるキズ有り 裏面はヘラ状工具によるナ デ	赤色融解粒少 二次被熱 5YR6/6 橙	ベルト
40 焼成 粘土塊	長 4.5 幅 4.6 厚 2.4 重 36.78	塊状 実測図表面は丁寧なナデにより平滑化 裏面は接合 面ではがれ落ちた状態 0.5～1cm 程度の礫が多く含まれ る 支脚の破片か？	砂礫・砂粒多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	ベルト
41 焼成 粘土塊	長 4.1 幅 3.1 厚 3.5 重 23.08	塊状 表面はヘラ状工具による多方向のキズが多くつく 実測図下端は、ちぎり取った後に弱いナデ	赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド
42 焼成 粘土塊	長 3.8 幅 2.1 厚 2.1 重 11.5	塊状 実測図表面はヘラ状工具による多方向のキズあり 下端及び左側面はちぎり取った状態 裏面は弱いユビナデ	赤色融解粒・砂粒多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	トレンチ
43 須恵器 甕	口 (20.2) 大 (31.2) 高 (33.5)	(内) 同心円状當て具痕・口ヨコナデ底粗いナデ (外) 格子目状タタキ→口ヨコナデ 丸底 (残) 破片より復元 三毳産	砂粒・微細白色粒 子多 やや不良 2.5YR6/2 黄灰	床上 +20cm No.60+64+ 65+67+68+ 76+77+ 覆 土 b +トレンチ

SI-1002 (第 200～202 図・図版二六・五三)

位置 O39 グリッドに位置する。

重複関係 住居南西隅で SI-1001 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は SI-1002 (旧) → SI-1001 (新) である。

規模・形状 東西 5.7 m、南北 6.1 m だが、北壁が 5.0 m と短くなっているので歪んだ方形を呈する。主軸方向は N - 6° - E である。

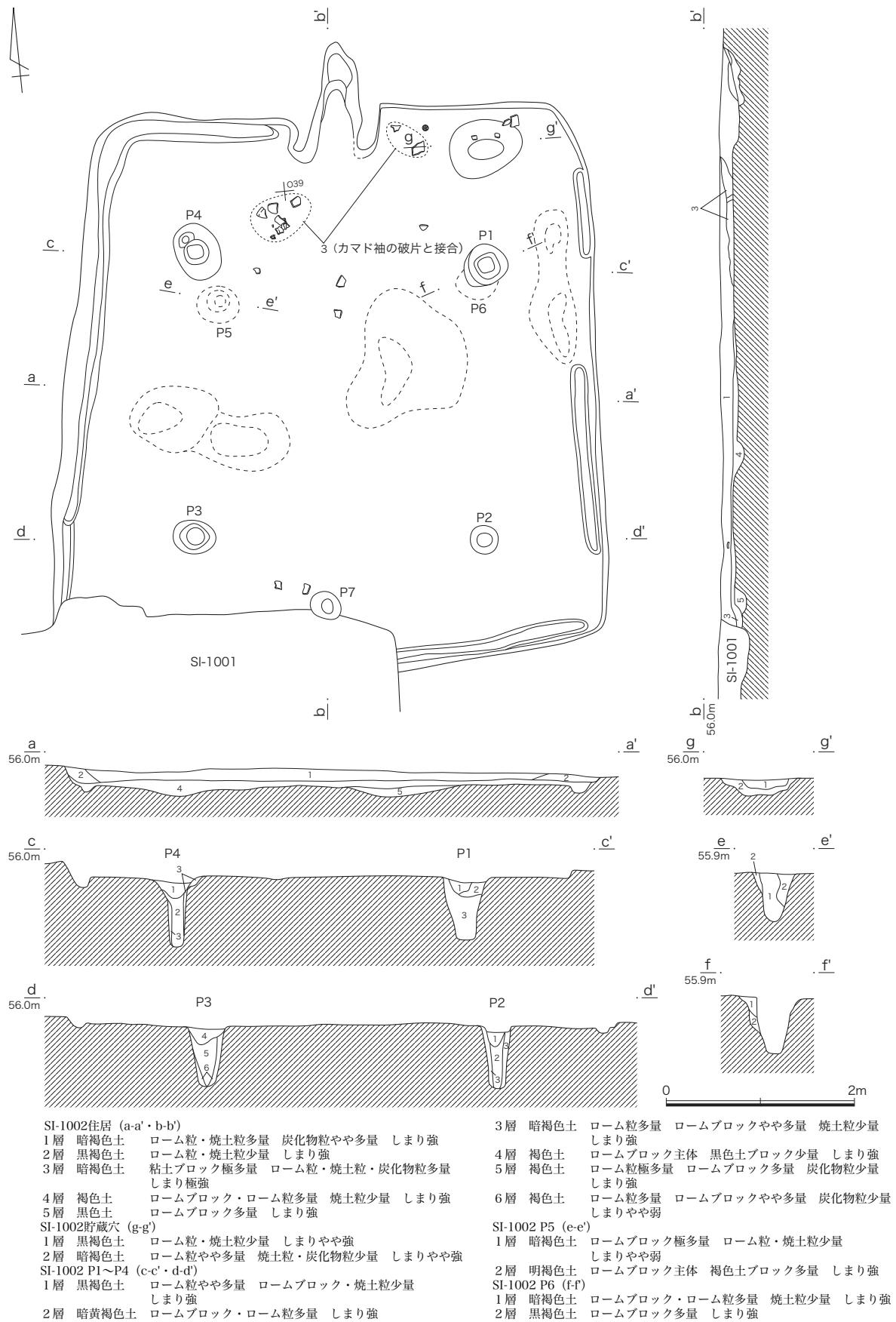
覆土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を多く含む暗褐色土を主体とする。壁際には内容物をあまり含まない黒褐色土が堆積している（2層）。

壁・壁溝 確認面からの深さが 15cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。南壁は SI-1001 竪穴住居跡に切られて失われている。壁溝は北壁東側と南壁西側以外でほぼ全周確認された。

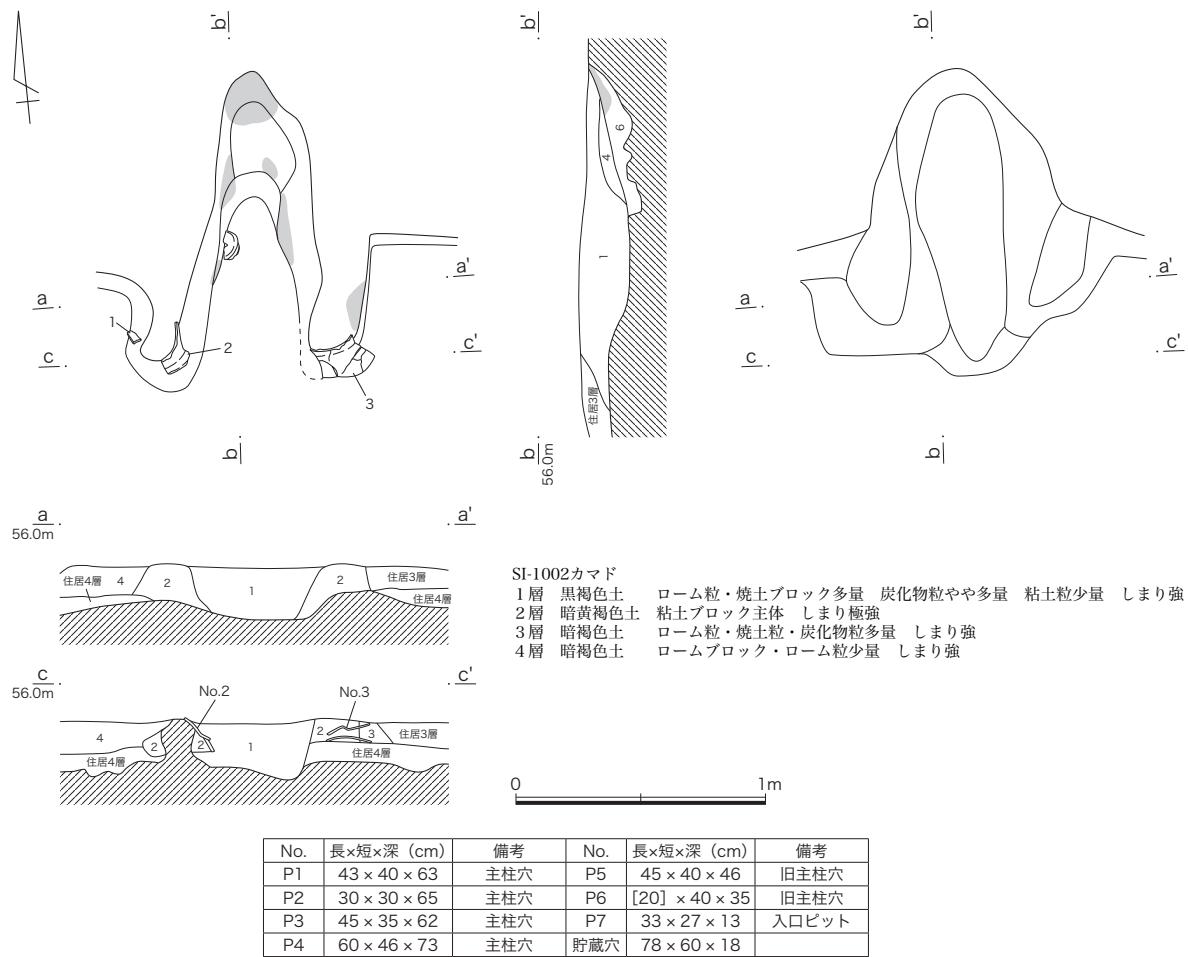
床面・貼床 ロームブロックによるはつきりとした貼床は確認されなかったが、床下覆土（4層）の上面に硬化面が確認された。

掘方 住居中央に不整形の凹みが 2ヶ所確認され、ロームブロックを多く含む黒色土が堆積していた。また、東壁と P1 の間に、溝状の掘り込みが確認された。

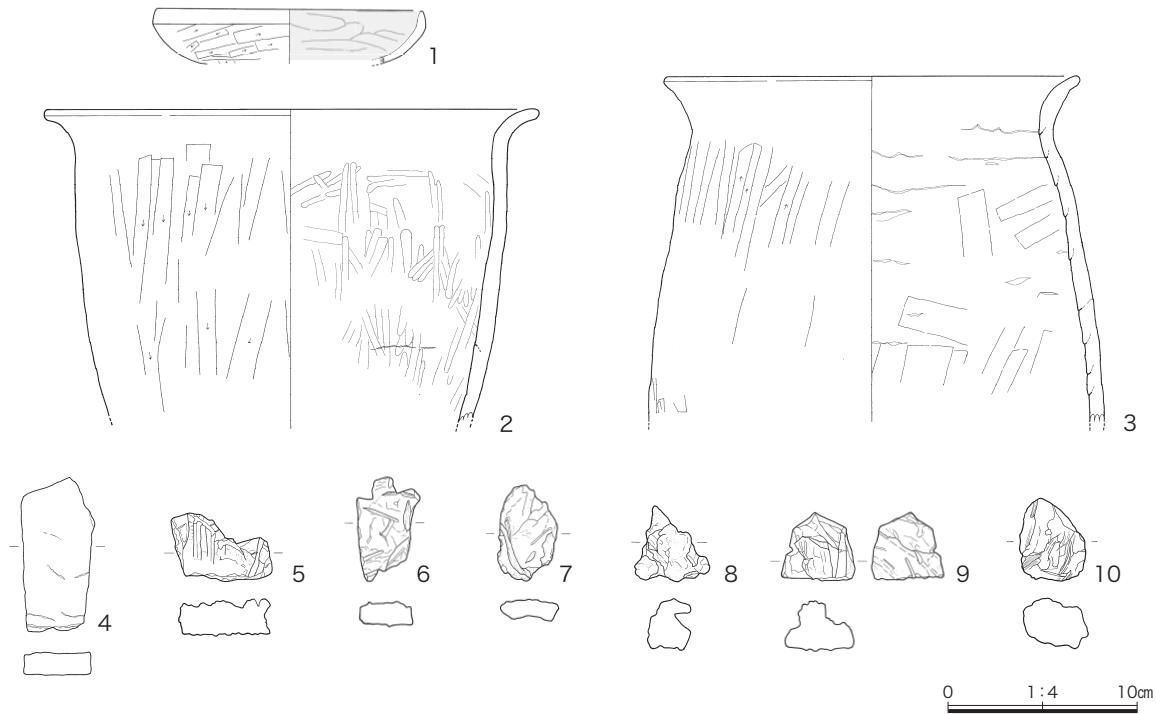
柱穴 4 本主柱。南東柱穴以外は掘方が大きく、底面が矩形となる。P1 以外は柱痕状の土層が確認された。P4 は柱の当たりが 2箇所確認された。また、掘方調査中に古い柱穴（P5・P6）が確認されたことから、北側の柱穴は建て替えを行っている可能性が考えられる。



第200図 SI-1002豊穴住居跡（1）



第201図 SI-1002 竪穴住居跡 (1)



第202図 SI-1002 出土遺物

第76表 SI-1002 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (14.0) 高 (2.9)	(内) ヨコナデ体ヘラナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面黒色処理 (残) 1/8	砂粒・微細白色粒子やや多 ・雲母少 やや良 2.5Y3/1 黒褐	床上 +5cm No.20
2 土師器 甕	口 (26.0) 高 (16.4)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ→ミガキ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部著しく赤化 (残) 2/8	砂粒・白色粒子多・ 砂礫やや多 良 7.5YR6/6 橙	カマド左袖 No.17
3 土師器 甕	口 21.8/24.0 高 (18.1)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部楕円状に歪む 内面に輪積痕多く残る (残) 口 7/8 胴 5/8	砂礫・微細白色粒子多 やや良 10YR4/2 灰黄褐	床直～+15cm No.1+2+6+12 +14+18+カド
4 礫	長 8.1 幅 3.8 厚 1.1 重 66.0	板状の礫 使用痕特になし 実測図両側面は折れ	5B3/1 暗青灰 粘板岩	カマド周辺
5 焼成 粘土塊	長 3.3 幅 4.9 厚 1.8 重 21.59	扁平 実測図表面はヘラ状工具による同方向のキズ、左右 側面に棒状工具による凹線。下端は断ち切った状態で、焼 成後に磨って平滑化している。裏面は弱いナデにより平坦。	赤色融解粒・白色粒子微 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土 c
6 焼成 粘土塊	長 5.5 幅 3.3 厚 1.6 重 17.72	扁平 実測図表面はヘラ状工具によるキズ有り。裏面は細い 棒状工具による弱いナデ、左右端は断ち切った状態で焼成後 に磨って平滑化。上端の左右は直角に切り取られている	赤色融解粒・砂粒多 良 10YR6/6 明黄褐	カマド
7 焼成 粘土塊	長 5.1 幅 3.0 厚 1.9 重 12.58	扁平 実測図表面は弱いユビナデ及びヘラ状工具によるキ ズ有り 裏面はちぎり取った状態で草本植物の痕跡有り	白色粒子多・赤色融解粒少 良 7.5YR6/6 橙	覆土 a
8 焼成 粘土塊	長 4.0 幅 3.8 厚 3.1 重 17.78	塊状 いくつかの塊をまとめて握った状態 下端はちぎり 取った状態 調整なし	赤色融解粒多 良 7.5YR6/6 橙	覆土 d
9 焼成 粘土塊	長 3.5 幅 3.8 厚 2.7 重 22.91	塊状 表面 (左側実測図) に棒状工具による凹線が 2 カ所 ついている 裏面 (右側実測図) はヘラ状工具によるナデ 下端は断ち切った状態	赤色融解粒多 二次被熱 5YR5.6 明赤褐	覆土 a
10 焼成 粘土塊	長 4.3 幅 3.4 厚 2.7 重 24.55	塊状 全体的にヘラ状工具による多方向のキズ 草本植物の痕跡有り 一部摩滅	赤色融解粒多 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土 b

入り口ピット 掘方調査中に南壁中央寄りに 1 基確認された (P7)。円形の掘り方を呈し、極浅い。

火廻 北壁中央にカマドが構築されている。袖と煙道が残存しているが、上面が大きく削平されている。袖は、地山を馬の背状に掘り残した上に、黄褐色粘土を積み上げて構築している。両袖の先端には甕の口縁部破片が残っていた (第 202 図 2・3)。煙道は長く緩やかに立ち上がり、内壁には粘土を貼り付けている。掘方は煙道部分がやや広くなっている。また、燃焼部が浅く掘り込まれていた。

貯蔵穴 北東隅で 1 基確認された。楕円形の掘り方を呈し、深さ約 15cm である。内部から土器破片が出士しているが、実測可能なものはなかった。

遺物 カマド周辺では、カマド右袖に置かれていた土師器甕 (第 202 図 3) の胴部が離れて出土している。住居全体の出土量は少ないが、SI-1001 壁穴住居跡と同様に焼成粘土塊が目立つ (第 202 図 5～10)。

SI-1003・SI-1010 (第 203～206 図・図版二六・五三)

位置 N39 グリッドに位置する。

重複関係 SI-1003 壁穴住居跡は、SI-1010 壁穴住居跡とカマドの位置、主軸方向を変えずに拡張した住居と考えられる。住居全体が SI-1007 壁穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-1007 (旧) → SI-1010 → SI-1003 (新) である。

SI-1003 (第 203・204 図・図版二六・五三)

規模・形状 東西 4.0 m、南北 3.3 m で東西に長い方形を呈する。主軸方向は N - 7° - E である。

覆土 覆土は大きく 2 層に分けられ、上層（1～3 層）は暗褐色土、下層は褐色土（4 層）を主体とする。

全体的にローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物粒を多く含んでいるが、特に下層には多く含まれる。

下層は他の住居に比べて著しく厚い。

壁 確認面から 35cm の深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 ロームブロックなどによる貼床は施されていないが、床下覆土の黒色土層（5 層）が著しく硬く締まっていたため、この層の上面を床面と考えた。6 層は同時に SI-1010 壱穴住居跡の覆土でもあることから、SI-1010 壱穴住居跡を埋め戻し、その上面を踏み固めて床面としたと考えられる。床面中央には、炭化物がブロック状に点在していた（第 203 図破線部分）。

火処 北壁中央東寄りにカマドが構築されている。カマド焚口手前の床下に粘土が多量に堆積していることから、SI-1003 壱穴住居跡のカマドは、SI-1010 壱穴住居跡のカマドを壊して焚口部分を住居床下と同じ土層で埋め立てた後に、同じ場所に構築したものと考えられる。カマドは両袖と奥壁、天井の一部が残存していた。袖は貼床上に黄褐色粘土を積み上げて構築している。天井は、煙道手前的一部分がブリッジ状に残っていた。カマド内部はあまり焼けていないが、焼土、炭、灰がそれぞれ薄く層状に堆積していた（8・11 層）。カマド底面は、焼土を多く含むロームブロック主体の土層が堆積しており（12 層）、硬くしまっていた。煙道は短く、奥壁がゆるやかな段状を呈する。カマド焚口附近から須恵器壺（図化不能）、カマド右袖前とやや離れた位置から、ほぼ完形の須恵器蓋と壺（第 204 図 1・3）が出土した。

遺物 カマド周辺の他に、南西隅の壁際から須恵器蓋が出土した（第 204 図 2）。第 204 図 3 の須恵器壺には油煙が付着しており、燈明具に転用されたものと考えられる。

SI-1010 (第 205・206 図・図版二六・五三)

規模・形状 SI-1003 壱穴住居跡よりも一回り小さく、東西 3.4 m、南北 2.8 m の方形を呈する。主軸方向は SI-1003 壱穴住居跡と同じである。

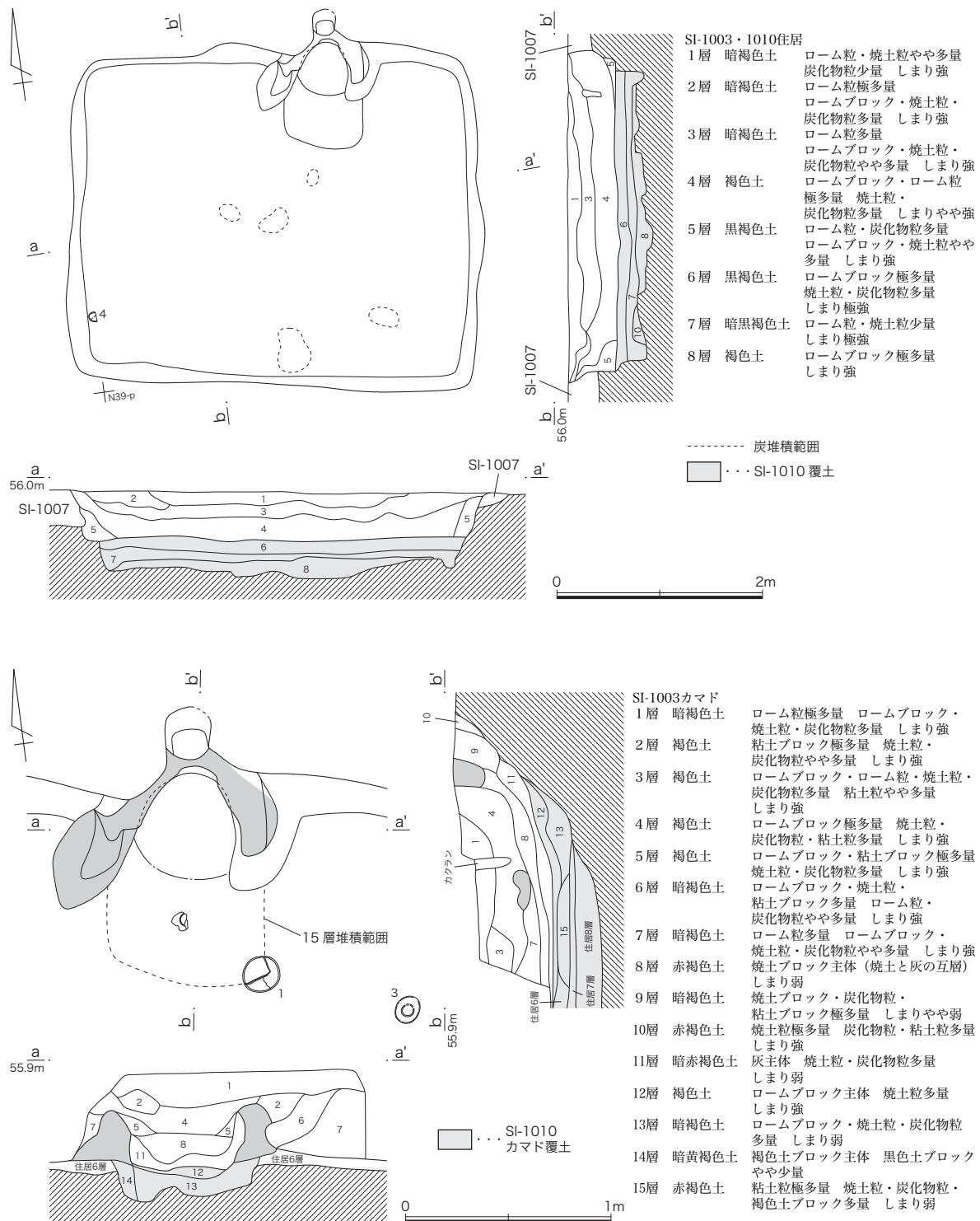
覆土 ロームブロック・焼土粒・炭化物粒を多く含む黒褐色土（6 層）と内容物をほとんど含まない暗黒褐色土（7 層）に分けられる。どちらも水平に堆積しており、著しく硬くしまっている。SI-1003 壱穴住居跡の構築に伴い、床面として踏み固められたものと考えられる。

壁・壁溝 SI-1003 壱穴住居跡の床面から 20cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド焚口部分を除き全周する。

床面・貼床 掘方を埋めるロームブロックを多量に含む褐色土層（8 層）が硬く締まっており、この層の上面が床面と考えられる。また、覆土 7 層も著しく硬くしまっており、その上面にカマド燃焼面と考えられる土層が堆積していることから、7 層上面も床面として使われていた可能性が高い。

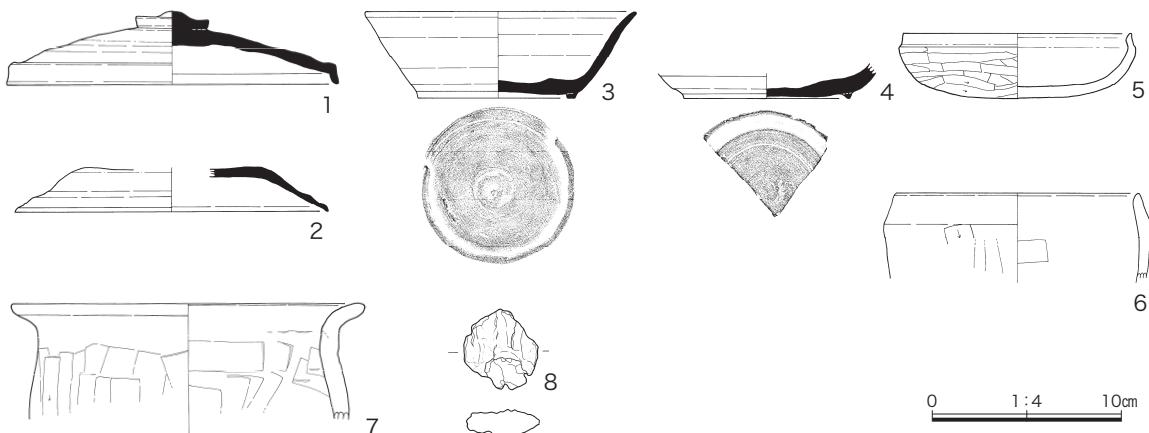
掘方 南西部と南東隅が浅い土坑状に窪んでいるが、他の部分は平坦である。床下調査中に、SI-1007 壱穴住居跡の柱穴（P1）の痕跡が確認された。

火処 北壁中央東寄りにカマドを構築している。SI-1003 壱穴住居跡のカマド構築時に壊されているため、燃焼部分のみ残存する（カマド 12～15 層）。燃焼部と考えられる部分には、住居を埋め戻した土層にあたる 7 層が薄く堆積しており、その上にロームブロック・焼土粒・炭化物粒を多く含む暗褐色土が堆積している（カマド 13 層）。それよりも上層の焚口にあたる部分に炭、焼土を多量に含む粘土が島状に堆積しており（カ



第203図 SI-1003 積穴住居跡

マド15層、第206図平面図・断面図の網かけ部分)、上面から須恵器壺の破片が出土している(第206図1)。さらにその上面はロームブロックを主体とする褐色土(カマド12層)に覆われており、これはSI-1003積穴住居跡のカマドを構築する際に埋め戻したものと考えられる。住居7層よりもカマド覆土が上部に堆積することから、カマドは7層上面を床面としていた段階に伴うものと考えられる。掘方はSI-1003積穴住居



第204図 SI-1003出土遺物

第77表 SI-1003遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 17.4 高 3.8	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ (残) 8/8 益子産?	砂礫・白色粒子多・雲母微 やや良 5Y7/3 灰白	床直 No.1
2 須恵器 蓋	端部径 (16.6) 高 (2.2)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ (残) 2/8 常陸産	白色粒子やや多・黒色融 解粒少 良 2.5Y6/1 黄灰	床上 +25cm No.3
3 須恵器 坏	口 15.0/14.0 底 8.5/8.3 高 4.5	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケ ズリ 口縁部を歪ませ、高台の片側を焼成前に削り取ってい る 内面に油煙付着、燈明具に転用か? 完存 益子産?	白色粒子やや多・砂粒少・ 雲母微 良 10YR6/1 灰	床上 +20cm No.2
4 須恵器 坏	底 (4.4) 高 (1.3)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 (残) 2/8 三毳座	砂礫多・雲母微 やや良 2.5Y8/2 灰白	覆土 b
5 土師器 坏	口 (12.0) 高 3.4	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/3 暗褐	覆土 a+ ベルト
6 土師器 甕	口 (12.8) 高 (3.9)	(内) ヨコナデ胴丁寧なナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面煤状の付着物 (残) 3/8	白色粒子多・砂礫少 二次被熱 10YR4/2 灰黄褐	覆土 b
7 土師器 甕	口 (18.4) 高 (6.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 2/8	砂礫極多・白色粒子・ 雲母多 やや良 7.5YR3/2 黒褐	覆土 b+d
8 焼成 粘土塊	長 4.2 幅 3.9 厚 1.4 重 10.44	扁平 実測図表面は弱いユビナデ 裏面はちぎり取った状態	白色粒子微 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	カマド

跡のカマドと共に通で、明瞭な凸字状を呈している。奥壁はゆるい段状に掘り込まれている。

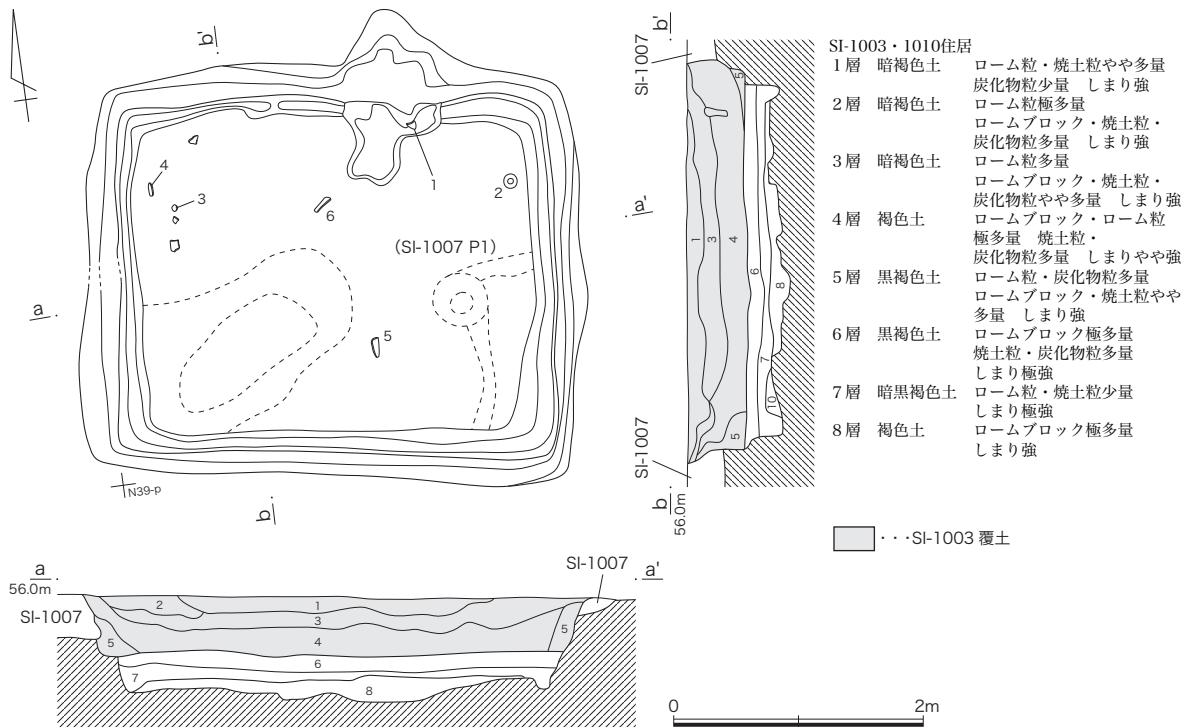
遺物 覆土内出土の遺物は少ない。北東隅の床面からは土師器高坏（第206図2）、住居中央の床面から鉄製鎌が出土しているが、遺存状況は極めて悪い（第206図6）。

SI-1004（第207・208図・図版二七・五三）

位置 N38グリッドに位置する。

規模・形状 東西、南北共に3.2mだが、北東隅が大きく崩れて歪んでいる。主軸方向はN-19°-Eである。

覆土 ローム粒及びロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。特に下層（2層）には多く含まれている。床面上にはロームブロック・ローム粒・炭化物粒を多く含む黒褐色土（4層）が薄く堆積している。



第205図 SI-1010 穫穴住居跡（1）

第78表 SI-1010 遺物観察表

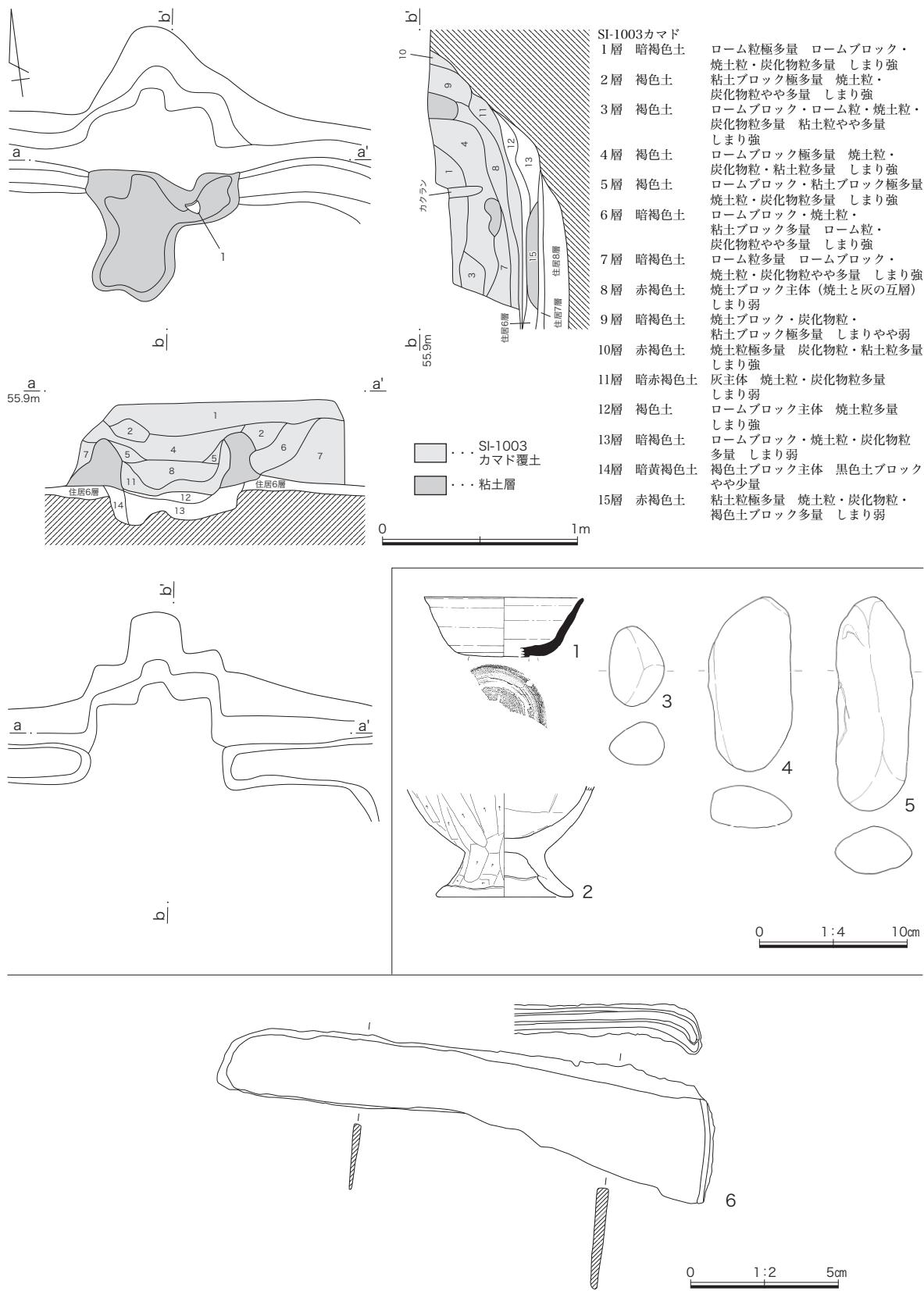
NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (10.8) 高 (4.0)	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台欠損 (残) 2/8 新治産?	白色粒子多・砂礫少 良 5Y5/2 灰オリーブ	床上 +5cm No.2
2 土師器 高壺	底 9.2 高 (7.5)	(壺部内) 丁寧なヘラナデつけ (壺部外) ヘラケズリ (脚部) 内外面ともヨコナデ 脚部調整→壺部調整 脚部外面に煤状の付着物 脚部に赤彩? (残) 脚部 8/8		床直 No.1
3 礫	長 5.4 幅 3.7 厚 2.9 重 6.6	表面に擦痕あり 断面三角状	2.5Y7/3 浅黄 安山岩	床上 +5cm No.8
4 礫	長 11.8 幅 5.7 厚 2.7 重 252.1	断面扁平な楕円状 使用痕特になし	2.5Y7/2 灰黄 礫岩	床上 +10cm No.6
5 礫	長 14.4 幅 5.2 厚 3.2 重 326.5	左側面がややつぶれている (自然面) 使用痕特になし	5Y5/2 灰オリーブ 安山岩	床直 No.4
6 鉄製品 鎌	長 16.1 幅 2.4 厚 0.4 重 71.85	棟側は刃部側先端が弧状に曲がる。棟側に対して基部折れは鈍角である。棟側の層状剥離により、3枚の合わせ鍛えであることがわかる。表面に土砂が厚く付着する。		床直 No.3

壁・壁溝 確認面から 40cm の深さで、壁はやや斜めに立ち上がる。壁溝はカマド部分を除いて全周していたと考えられるが、南東隅と北東隅は、調査時に床面を掘りすぎたため確認できなかった。

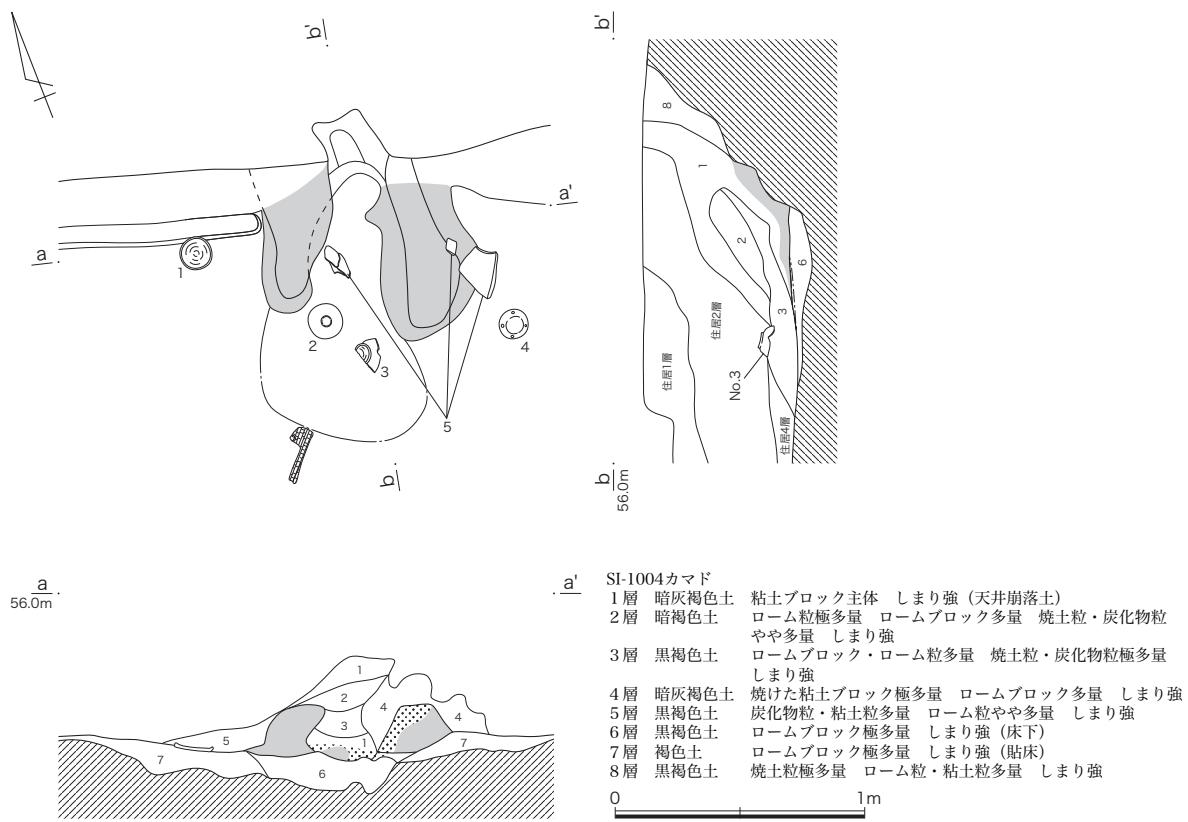
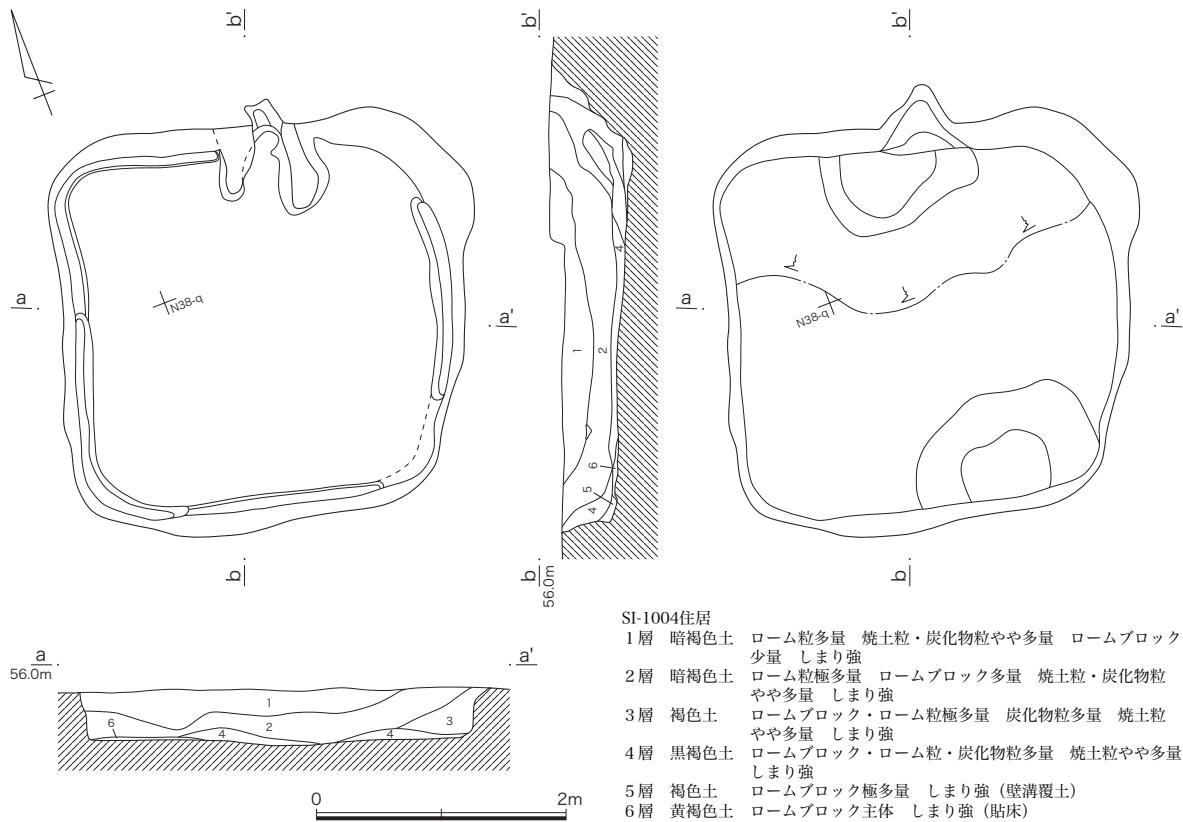
床面・貼床 中央部分がわずかに凹む。ロームブロックによる貼床は、住居壁際に部分的に施されている。

掘方 住居北側と南東隅に浅い窪みがあり、カマド前は深い土坑状に掘られている。

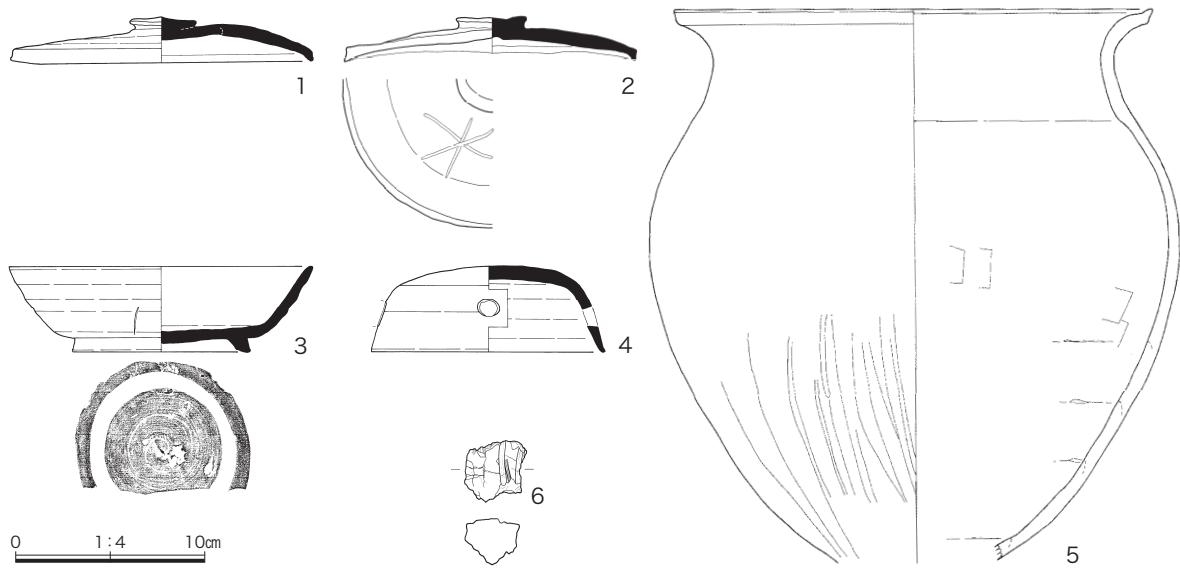
火廻 北壁中央にカマドが構築されており、袖と奥壁が残存している。袖は床面上に灰白色粘土を積み上げて構築され、右袖の内側はよく焼けている。カマド燃焼部上には下部が焼けた粘土ブロックが堆積 (1 層)、それに挟まれるように炭と焼土が薄い層状に堆積している (3 層)。また、右袖外側には焼けた粘土ブロック、左袖外側には炭化物・粘土粒が厚く堆積していた。掛け口があったと考えられる部分では、土師器



第206図 SI-1010 カマドおよび出土遺物



第207図 SI-1004 穫穴住居跡



第208図 SI-1004出土遺物

第79表 SI-1004遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 15.8 高 2.4 撮部径 4.6	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ ボタン状の撮み 天井部歪む 完存 益子産	細砂・白色粒子多・砂礫 やや多 やや良 5Y8/1 灰白	床直 No.7
2 須恵器 蓋	端部径 15.3 高 2.3 撮部径 3.7	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 外面ヘラ記号有り ボタン状の撮み 全体的に大きく歪む 完存 益子産	砂礫多・白色粒子多・ 黒色融解粒少 良 5Y5/1 灰	床直 No.5
3 須恵器 壺	口 (16.0) 高 4.5	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 外面ヘラ記号有り (残) 2/8 益子産	白色粒子極多・砂礫多 良 N5/ 灰	床上 +10cm No.2
4 須恵器 香炉 蓋?	端 12.2 高 4.5	内外面ともロクロナデ 天井と体部の境目回転ヘラケズリ 天井部手持ちヘラケズリ後ナデ消し? 飾り孔 4 単位 (外→内へ向かって焼成前に穿孔) 完存 産地不明	白色粒子極多・砂礫少 良 5GY5/1 オリーブ灰	床直 No.3
5 土師器 甕	口 (25.1) 大 (27.8) 高 (29.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 胴部外面の一部に粘土ナデつけ (残) 1/8	砂礫・白色粒子極多・ 雲母多 良 7.5YR4/3 褐	床上 +10cm No.6+8+9
6 焼成 粘土塊	長 2.9 幅 3.1 厚 2.4 重 12.60	塊状 表面全体的にヘラ状工具によるキズが多くつく 上下端はちぎり取った状態	赤色融解粒・白色粒子多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	ベルト

甕の破片が粘土塊の上に積まれた状態で出土した（第208図5）。支脚の代わりとして使用されていたものと考えられるが、右袖外側から出土した破片とも接合しており、確定はできない。また、カマド内部から須恵器壺（第208図3）、須恵器蓋（第208図2）、カマド両脇から須恵器蓋（第208図1）と飾り孔の施された須恵器香炉の蓋と考えられる個体（第208図4・写真図版は天地逆で撮影している）が出土している。焚き口部分からは、炭化材が出土している。奥壁は階段状に掘り込まれ、急な角度で立ち上がる。掘り方はなだらかな三角形を呈している。カマド前の掘り込みの内部には、焼土粒・粘土粒を多く含む黒褐色土が堆積し（6層）、その上面が一部左袖で覆われていることから、カマドの作り替えを行っている可能性もある。

遺物 カマド周辺以外の出土遺物は少なく、図化できたものは第208図6の焼成粘土塊のみである。

SI-1005 (第209～211図・図版二七・五四)

位置 N38 グリッドに位置する。

規模・形状 東西4.6m、南北4.4mだが、北壁が4.0mと短くなっている。主軸方向はN-1°-Eである。

覆土 黒色土ブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。覆土中には焼土・炭化物が多量に含まれている。

壁 大きく削平されており、確認面からの深さは20cmである。壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 貼床は焼土と炭を多く含む黄褐色土ロームを使い、柱穴で囲まれた住居中央に施されている(第209図破線部部分)。壁際は地床である。床面上には炭化物と焼土がブロック状に堆積しており、炭化材も出土しているが、床面が焼けた痕跡は認められなかった。炭化材や焼土は特に壁際に集中しており、住居中央には遺物が多い。掘り方はない。

柱穴 4本主柱。いずれも円形の掘り方を持ち、柱痕状の土層が確認された。P1は木根により覆土が一部攪乱されている。柱穴は住居中央にかなり寄っており、南東柱穴は特に住居中央に寄っている。

入り口ピット 住居南壁中央寄りに1基確認された(P6)。円形の掘り方で極浅い小ピットである。

火処 住居中央東寄りにカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、上部が大きく削平されているため、残存状況は極めて悪い。地山を低い馬の背状に掘り残し、その上に黄褐色粘土を積んでカマド袖を構築している。袖の内側はよく焼けており、カマド内部には焼土、炭を多く含む土層が堆積していた(5層)。燃焼面は床面よりも若干高く掘り残しており、掘り込みは認められなかった。煙道は短く、残存部分ではなだらかに立ち上がる。カマド内部から土器破片が数点出土しているが、復元はできなかった。また、左袖に接して同一母岩の砥石破片と考えられる礫が出土している(第211図11～13)。

遺物 特に住居中央の床面上から集中して出土しているが、出土量は少ない。第211図7の土師器甕は破片になった後に被熱しているため、破片ごとに著しく色調が異なっている。

SI-1006 (第212～214図・図版二七・五三)

位置 L36 グリッドに位置する。

規模・形状 東西4.2m、南北4.1mの方形を呈するが、南東隅は黒色土中となるため確認できなかった。

主軸方向はN-15°-Eである。

覆土 内容物をあまり含まない黒褐色土を主体とする。低地の落ち際に構築されているため、覆土は全体的に黒味を帯びている。

壁・壁溝 最も残りの良い部分で確認面から25cmの深さである。壁はほぼ直に立ち上がる。南東隅は低地黒色土中に構築されているため、調査時は確認できなかった。壁溝は北壁西側から西壁にかけて確認された。南・東壁では確認できなかったが、住居東側は低地に入っているため、壁溝の有無については不明である。

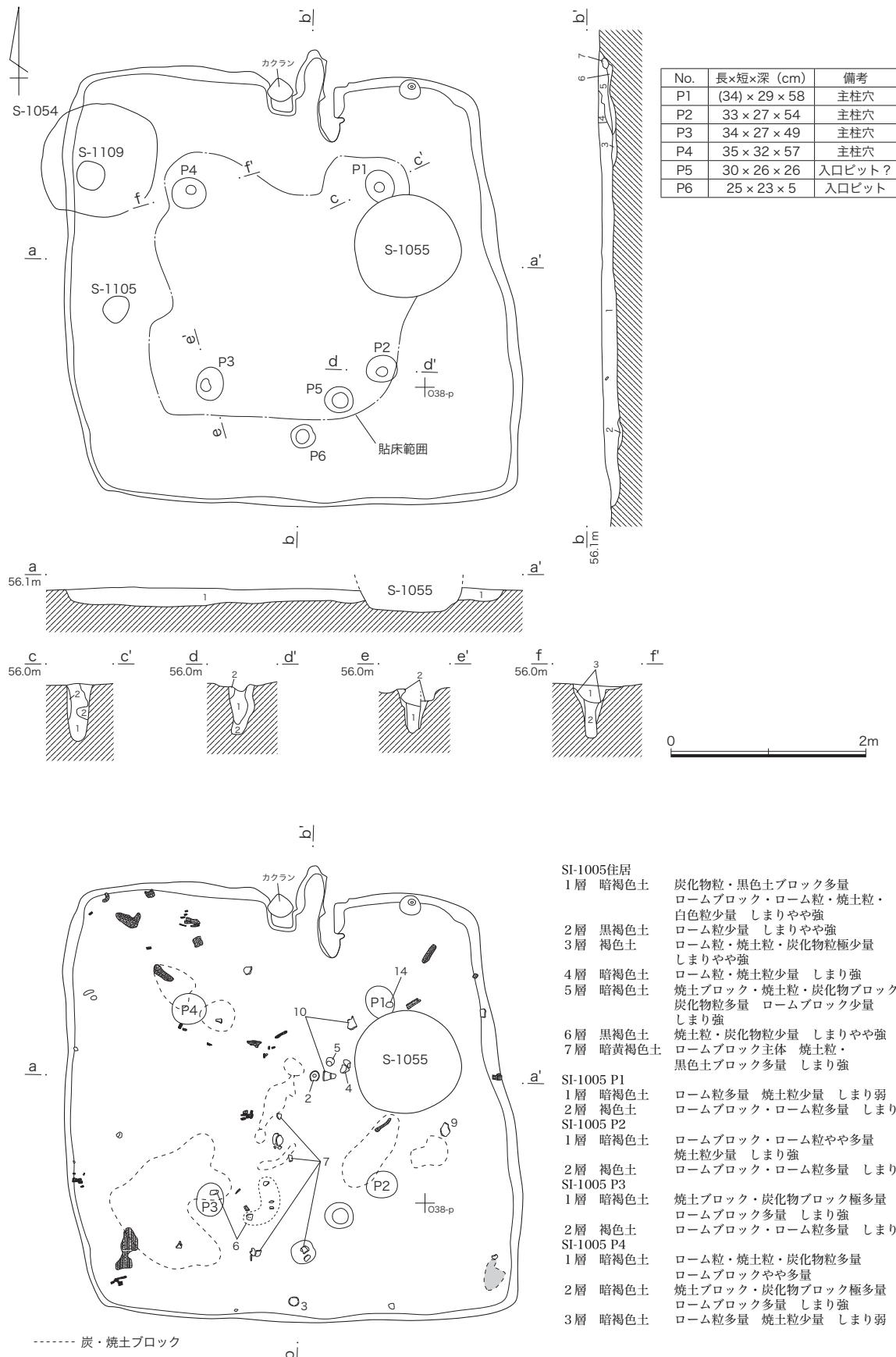
床面・貼床 住居北側に黄褐色土ロームによる貼床が施されていた。低地となる東側には貼床はない。

掘方 北東隅が浅い土坑状に窪むが、おそらく自然地形と考えられる。また、床下からピット2基(P9・P10)、土坑2基(P5・P6)が確認された。

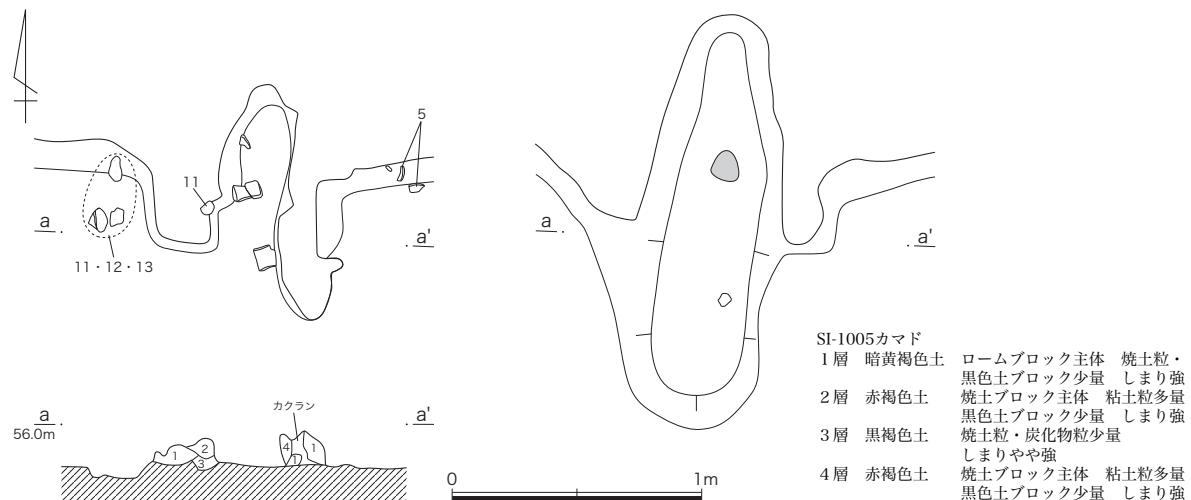
柱穴 4本主柱。いずれも円形の掘り方を呈し、北側のP1・P4は底面の平面形が矩形となっている。P1のみ深さ30cm、それ以外の3本は深さ50cm程度である。P2を除く3本には、柱痕と考えられる黒色土層が確認されている。

入り口ピット 掘方調査時に、南壁中央寄りに小ピットが2基確認された(P7・P8)。いずれも極浅い。

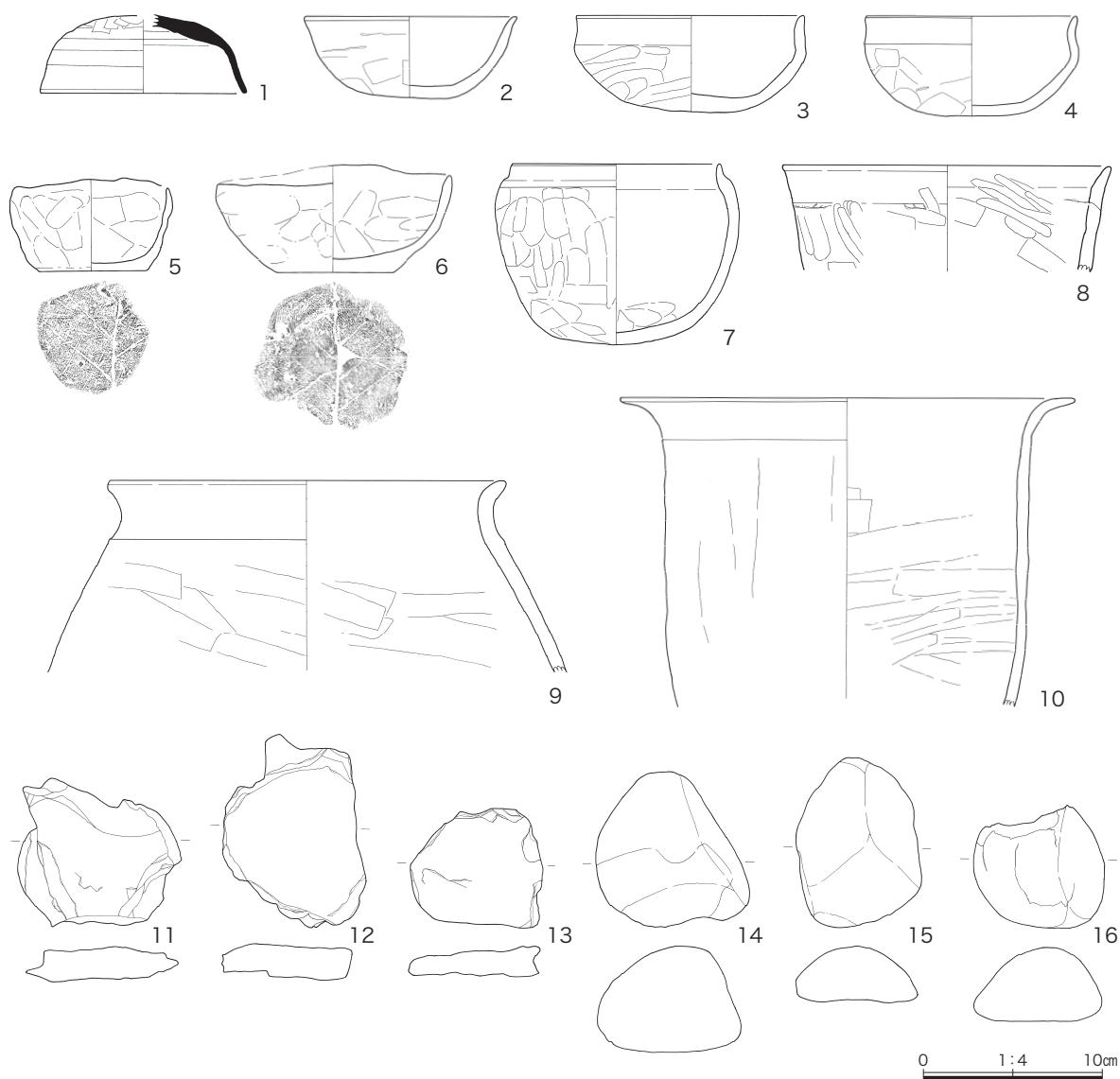
火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、左袖が一部攪乱を受けている。



第209図 SI-1005 穫穴住跡 (1)



第210図 SI-1005 竪穴住居跡（2）

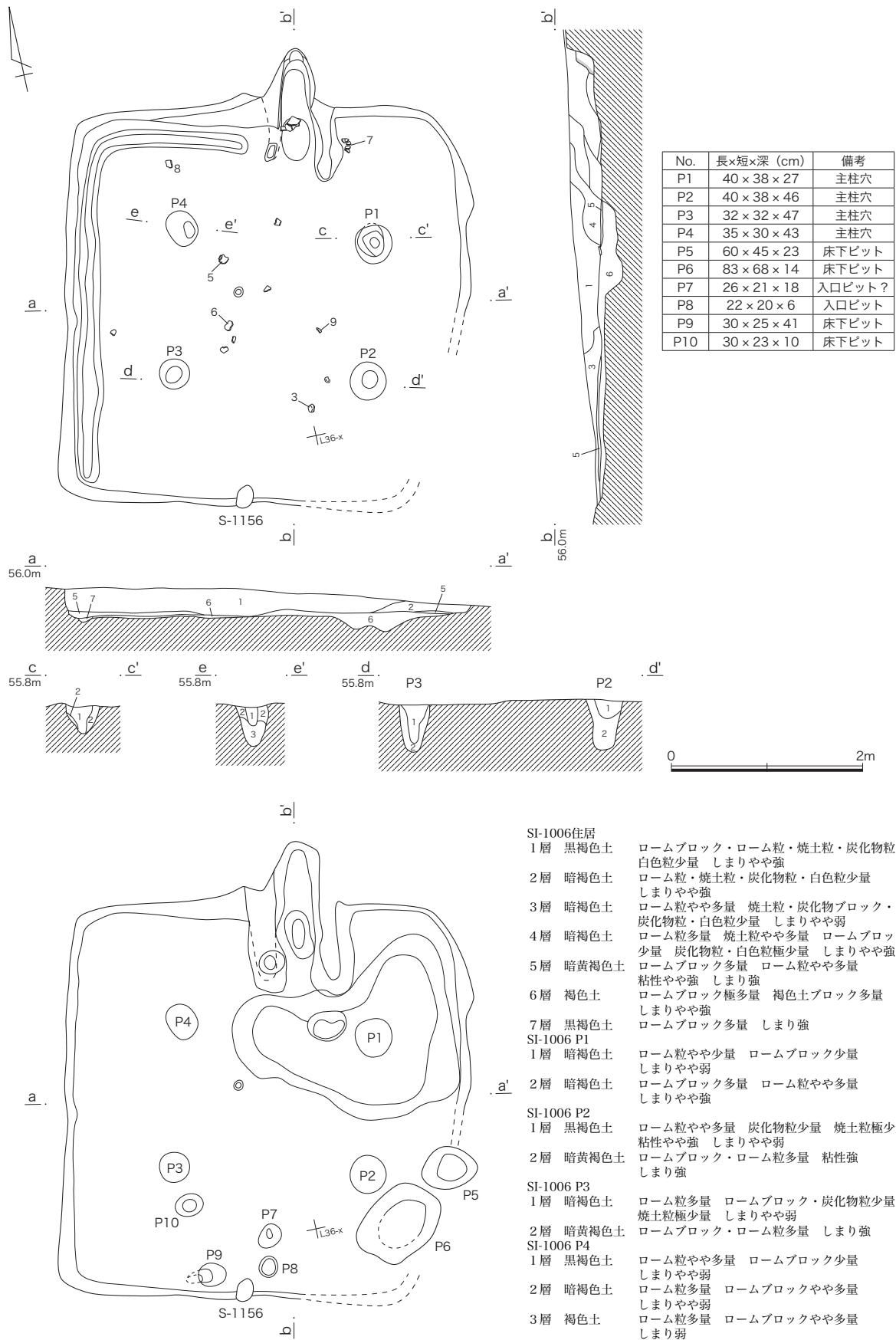


第211図 SI-1005 出土遺物

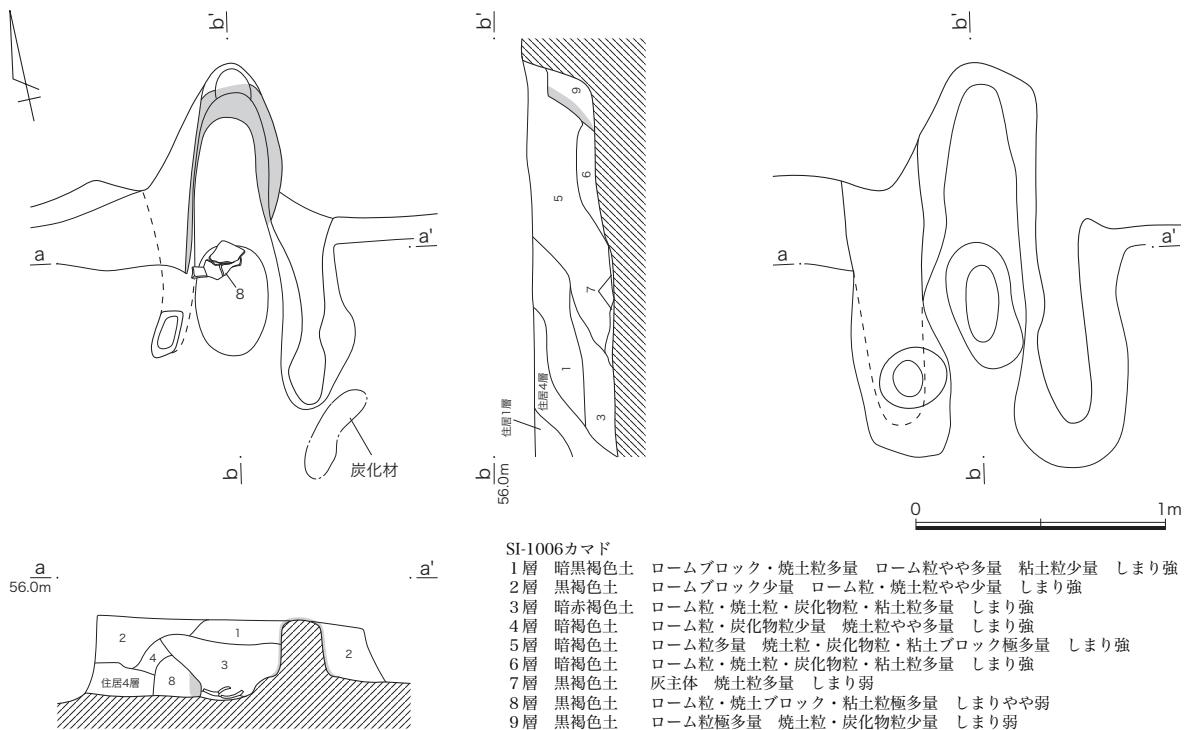
第3章 発見された遺構と遺物

第80表 SI-1005 遺物観察表

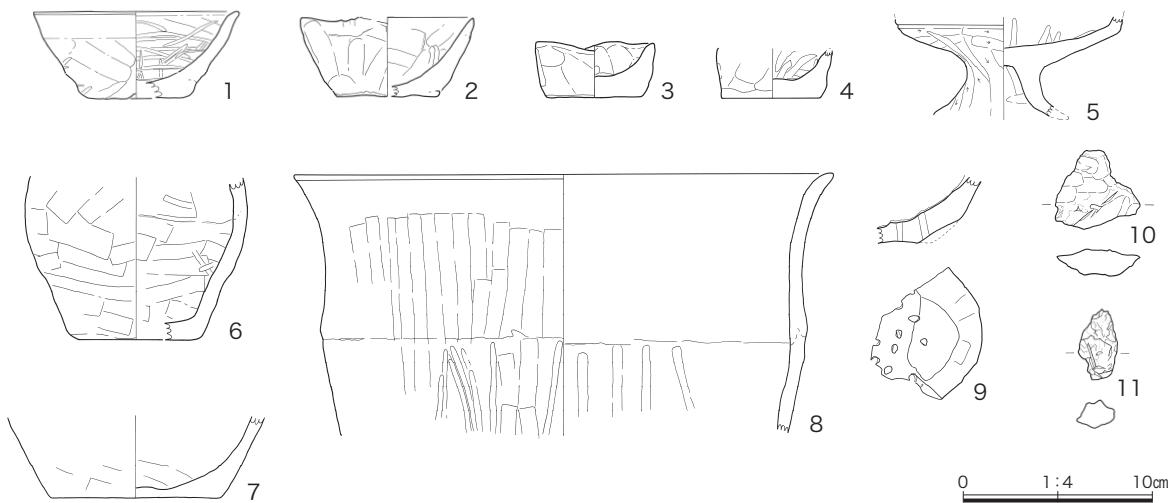
NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径 (11.4) 高 (4.1)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ (残) 3/8 三毳産?	白色粒子多・黒色融解粒 やや多 良 7.5Y6/1 灰	床直 No.5+6+ 確認面
2 土師器 壺	口 11.8 高 4.5	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部輪積痕残る (残) 6/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 10YR4/2 灰黄褐	床直 No.11
3 土師器 壺	口 13.0 大 13.0 高 5.3	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ・底部近くヘラケズリ 口縁部輪積痕残る (残) 8/8	砂礫・白色粒子少・雲母微 良 2.5YR5/6 明赤褐	床直 No.30
4 土師器 壺	口 (11.7) 高 5.4	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 4/8	白色粒子・砂粒多・砂礫少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.14
5 土師器 壺	口 (8.4) 底 (5.8) 高 5.2	手捏ね成形 内外面に指頭圧痕 一部ナデ 底部木葉痕 器壁薄い (残) 4/8	砂礫やや多・砂粒少・ 白色粒子・雲母微 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 +10cm No.13
6 土師器 壺	口 (13.1) 底 6.6 高 5.0	手捏ね成形 内外面に指頭圧痕 底部木葉痕 器壁薄い (残) 4/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 やや良 10YR6/3 ~ 4/1 にぶい黄橙～黒褐	床直 No.23 +24+25+26 +覆土 b+c
7 土師器 甕	口 11.5 大 13.6 高 10.1	(内) 口～胴上半ヨコナデ、底部近く指ナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面光沢帶びる (残) 7/8	白色粒子多・砂粒少・ 砂礫微 やや良 5YR3/2 暗赤褐	床直 No.19 +21+28+29 +ペルト
8 土師器 甕	口 (18.2) 高 (5.9)	(内) 口ヨコナデ→ヘラナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 口縁部に輪積痕残る 内外 面に棒状工具?による細いナデ (残) 1/8	砂礫多・砂粒・白色粒子多 良 7.5YR4/1 褐灰	覆土 a
9 土師器 甕	口 (18.6) 高 (10.5)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・砂粒・白色粒子多・ 雲母微 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床上 +5cm No.18
10 土師器 甕	口 (25.5) 高 (16.7)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部外面に粘土貼り付け後被熱 (残) 2/8	砂礫・砂粒多 良 10YR4/1 褐灰	床直 No.12 +15+ 覆土 a+ カマド
11 砥石? 厚 1.9 重 138.63	長 8.3 幅 8.5	使用痕特になし 第 221 図 12・13 と同一母岩	N4/ 灰	カマド 左袖 No.7
12 砥石? 幅 7.2 厚 2.0 重 186.66	長 10.7	表、裏面に弱い擦痕 第 221 図 11・13 と同一母岩	N4/ 灰	カマド 左袖 No.7
13 砥石? 厚 1.7 重 114.21	長 6.6 幅 7.8	使用痕特になし 第 221 図 11・12 と同一母岩	N4/ 灰	カマド 左袖 No.7
14 礫	長 9.2 幅 6.4 厚 6.3 重 523.4	断面三角状 表面下部に煤状の付着物	5Y5/2 灰オリーブ	床直 No.16
15 礫	長 9.5 幅 7.0 厚 3.1 重 255.4	断面三角状 下端のみ被熱	2.5Y7/3 浅黄	床直 No.31
16 礫	長 7.3 幅 6.8 厚 4.2 重 245.4	断面三角状 欠面も含め全体的に被熱	2.5Y4/2 灰黄褐	床直 No.8



第212図 SI-1006 積穴住居跡（1）



第213図 SI-1006 穫穴住居跡（2）



第214図 SI-1006 出土遺物

袖は、黒色土の地山を掘り残した上に、薄く灰褐色粘土を貼り付けて構築している。粘土は奥壁にも貼り付けられており、火があたる内側は赤く焼け込んでいる。内部にはロームブロックや焼土、炭化物、粘土が多量に堆積しており（5層）、底面には薄く灰が堆積していた（7層）。掛け口があったと考えられる部分の床には浅い掘り込みがあり、土師器瓶（第214図8）の破片が重ねられていた。また、カマド右袖前には炭化物がブロック状に遺存していた（第213図破線部分）。煙道は細長く掘り込まれており、奥壁は段を持ち急な角度で立ち上がる。

遺物 出土量は少なく、床面に伴う遺物もない。第214図9の瓶は多孔式だが、遺跡内ではこの破片以外に多孔式の瓶は出土していない。

第81表 SI-1006 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (10.8) 高 4.6	(内) ヘラケズリ→多方向ミガキ、口唇部ヨコナデ (外) ヨコナデ体指ナデ、一部棒状工具によるナデ 底部近く輪積痕残る 口縁部わずかに歪む (残) 2/8	砂礫多・微細白色粒子 やや多 やや良 10YR3/1 黒褐	覆土 d
2 土師器 壺	口 (9.4) 高 4.2	(内) ヘラケズリ、指ナデ (外) 指頭圧痕、ヘラナデ 輪積痕残る (残) 1/8	白色粒子多・雲母微 良 2.5YR5/6 明赤褐	ベルト
3 土師器 壺	口 6.1 底 4.4 高 2.9	(内) 指ナデ (渦巻状) (外) 指頭圧痕、底部指ナデ 内面擂鉢状に凹む (残) 7/8	砂礫やや多・白色粒子少 良 2.5YR5/6 明赤褐	床上 +10cm No.12
4 土師器 壺	底 5.1 高 2.5	(内) 棒状工具による強いナデ (外) 指ナデ、底部ナデ 口唇部わずかに欠け (残) 4/8	白色粒子多・砂粒やや多 良 5YR5/6 明赤褐	ベルト
5 土師器 高壺	高 (5.1)	(壺部内) ヨコナデ→放射状ミガキ (壺部外～脚部外) ヘラケズリ (脚部内) ヘラナデ、底部 ヨコナデ 内面漆仕上げ (残) 壺部 3/8 脚部 8/8	砂粒・白色粒子多・雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 +10cm No.4
6 土師器 小型甕	底 (6.6) 高 (8.5)	内外面ともヘラケズリ 輪積痕残る (残) 3/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 +15cm No.6
7 土師器 甕	底 (8.8) 高 (4.3)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ (残) 3/8	砂礫極多・白色粒子多 良 5YR5/6 明褐	床上 +15cm No.2
8 土師器 甕	口 (28.5) 高 (13.7)	(内) ヨコナデ胴丁寧なナデ・ミガキ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ、ヘラナデ 輪積痕残る (残) 1/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	カマド No.1 + 13
9 土師器 甕	破片	内外面ヘラケズリ 多孔式 (穿孔: 外→内) 1カ所盲孔 内面黒化色	微細白色粒子多 良 5YR6/6 橙	床上 +10cm No.10
10 焼成 粘土塊	長 4.1 幅 4.5 厚 1.4 重 14.30	塊状 実測図表面ユビナデ、下端にヘラ状工具によるキズ 裏面は接合面からはがれ落ちた状態	赤色融解粒・白色粒子 やや多 やや良 10YR5/3 にぶい黄褐	覆土 a
11 焼成 粘土塊	長 3.7 幅 2.0 厚 1.5 重 5.78	塊状 全体的にヘラ状工具による多方向のキズ 草本植物の痕跡有り	赤色融解粒・砂粒やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	ベルト

SI-1007 (第215・216図・図版二七・五四)

位置 N39 グリッドに位置する。

重複関係 住居北半がSI-1003及びSI-1010竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-1007(旧) → SI-1010 → SI-1003(新)である。

規模・形状 東西5.5m、南北5.3mだが、カマド部分が大きく崩れているため歪んでいる。主軸方向はN-11°-Eである。

覆土 ローム粒・焼土粒を多く含む暗褐色土を主体とするが、壁際は内容物をあまり含まない。

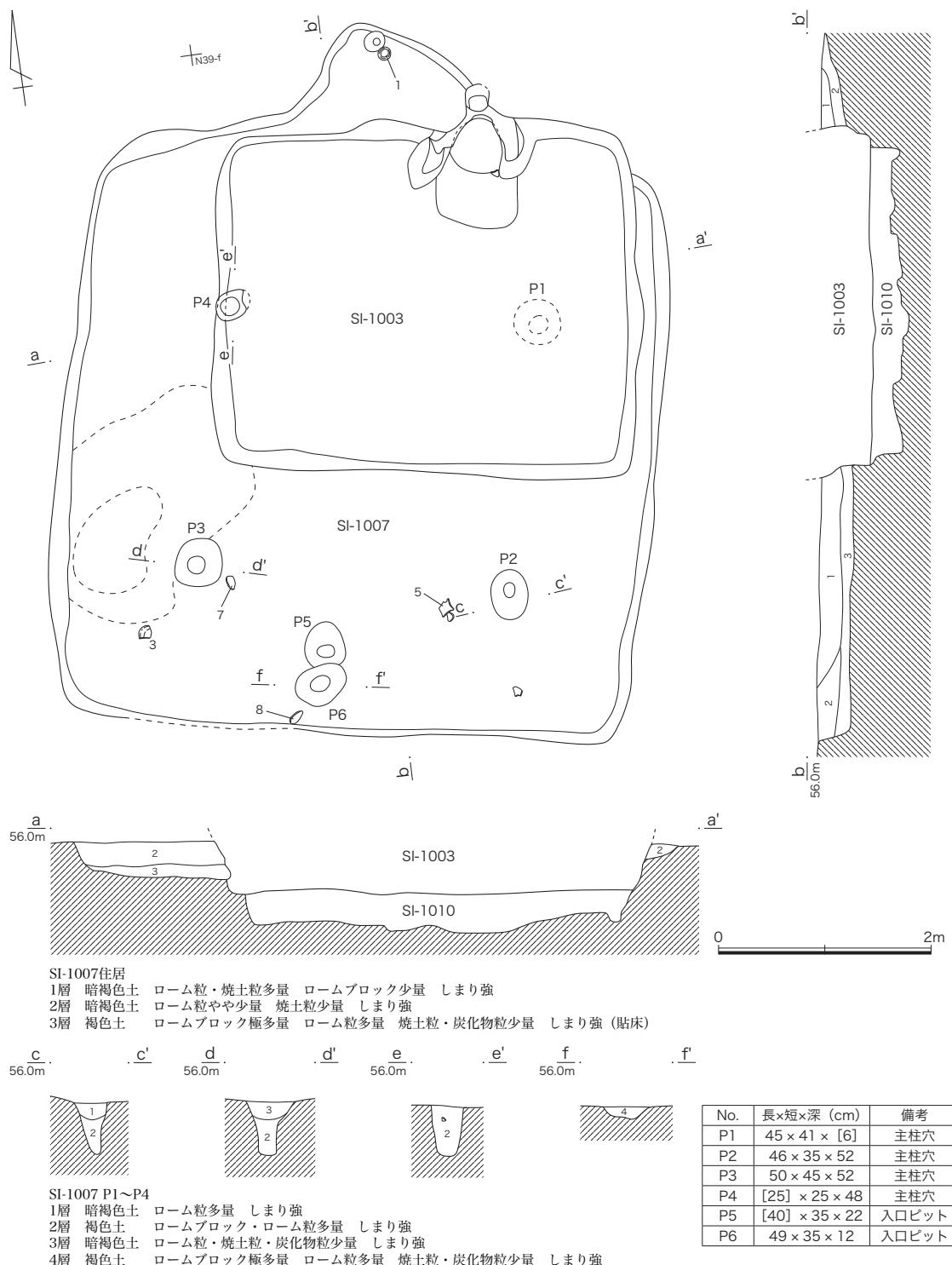
壁 確認面から20cmの深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はない。

床面・貼床 貼床は部分的で、堀方を埋める3層上面が硬化したものと考えられる。

掘方 南西隅が大きく窪むが、他の部分はほぼ水平である。

柱穴 4本主柱。北側の2基はSI-1003、SI-1010竪穴住居跡に切られているため、一部しか残っていない。いずれも、明瞭な柱痕は見られない。

入り口ピット 掘り方調査時に、南壁寄り中央に小ピットが2基発見された(P5・P6)。床面調査時には

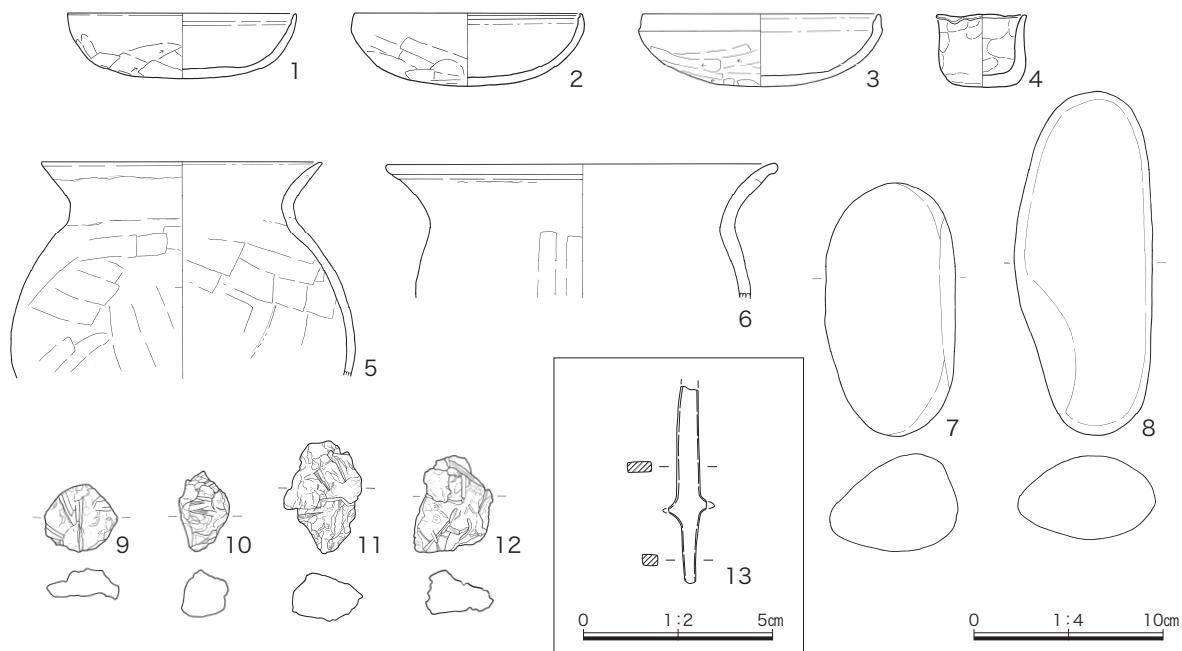


第215図 SI-1007 穫穴住居跡

確認できなかったが、これらが入り口ピットであると考えられる。いずれも歪んだ楕円状の掘り方を呈する。

火処 北壁中央にカマド掘方の痕跡が残る。攪乱を受けているため、形状等は判然としない。奥壁にあたると見られる箇所から土師器坏が出土した（第216図1）。

遺物 出土量は少なく、床面に伴う遺物もない。覆土中から鉄鎌の破片が出土している（第216図13）。



第216図 SI-1007出土遺物

第82表 SI-1007遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 12.0 高 3.4	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ、一部ヘラナ デ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 5/8	白色粒子・雲母少 良 7.5YR5/2 灰黄褐	床上 +15cm No.7
2 土師器 壺	口 (12.0) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内外面漆仕上げ (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR3/3 暗褐	カマド付近
3 土師器 壺	口 (12.4) 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 4/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR5/2 灰黄褐	床上 +5cm No.6
4 土師器 ミニチュア 土器	口 (4.8) 高 3.7	手捏ね成形 口縁部赤化 (赤彩?) (残) 3/8	微細白色粒子多・雲母少 良 5YR6/6 橙	覆土
5 土師器 甕	口 (14.8) 高 (11.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 輪積痕残る (残) 2/8	赤色粒子多・砂礫・白色 粒子少 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上 +10cm No.3+ ベルト
6 土師器 甕	口 (20.6) 高 (7.0)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 輪積痕残る (残) 1/8	砂礫・白色粒子・雲母少 良 2.5YR3/6 暗赤褐	覆土
7 礫	長 13.3 幅 6.8 厚 5.2 重 655.6	断面楕円状 裏面にわずかな擦痕	7.Y7/1 灰	床上 +10cm No.5
8 礫	長 18.1 幅 7.2 厚 4.5 重 870.1	断面楕円状 使用痕特になし	10Y6/2 オリーブ灰	床上 +5cm No.4
9 焼成 粘土塊	長 3.5 幅 3.9 厚 1.9 重 11.13	扁平 表面に木葉痕 裏面はちぎり取った状態 全体的に摩滅	白色粒子多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
10 焼成 粘土塊	長 4.2 幅 2.7 厚 2.4 重 15.45	塊状 全体的にヘラ状工具によるキズ有り はちぎり取った状態	赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土
11 焼成 粘土塊	長 5.9 幅 4.1 厚 2.2 重 27.45	塊状 実測図表面にヘラ状工具によるキズ有り 裏面は弱いユビナデ 左上端はちぎり取った状態	赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土
12 焼成 粘土塊	長 5.1 幅 3.8 厚 2.4 重 29.24	塊状 実測図表面弱いユビナデ 裏面及び左右から細い棒状工具による刺突多数	砂粒多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土
13 鉄製品 鉄鎌	長 5.3 幅 0.6 厚 0.3 重 1.73	棘籠被の破片。断面長方形で、一部剥離する。茎部の先端が欠損。		覆土

SI-1009 (第 217 ~ 220 図・図版二八・五四)

平成 15 年度に北東側半分、平成 17 年度に南西側を調査した。

位置 K37 グリッドに位置する。

規模・形状 東壁が攪乱によって失われているため、東西の長さは不明である。南北は 4.6 m で、主軸方向は N - 17° - E である。床面と柱穴の作り替えが 1 回行われており、SI-1009a(新段階)、SI-1009b(旧段階)にわけられる。

SI-1009a (第 217 図)

覆土 内容物をあまり含まない暗褐色土(2 層)を主体とする。最上面に堆積する 1 層は住居外にまで及んでいることから、住居覆土ではないと考えられる。

壁・壁溝 確認面から約 30cm の深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝は東壁と南壁で確認された。北壁ではなく、西壁は攪乱を受けているため不明である。

床面・貼床 ロームブロックにより貼床を施しているが、南側はロームブロックを多く含む暗褐色土を使用している。床面はあまりしまっておらず、柔らかい。

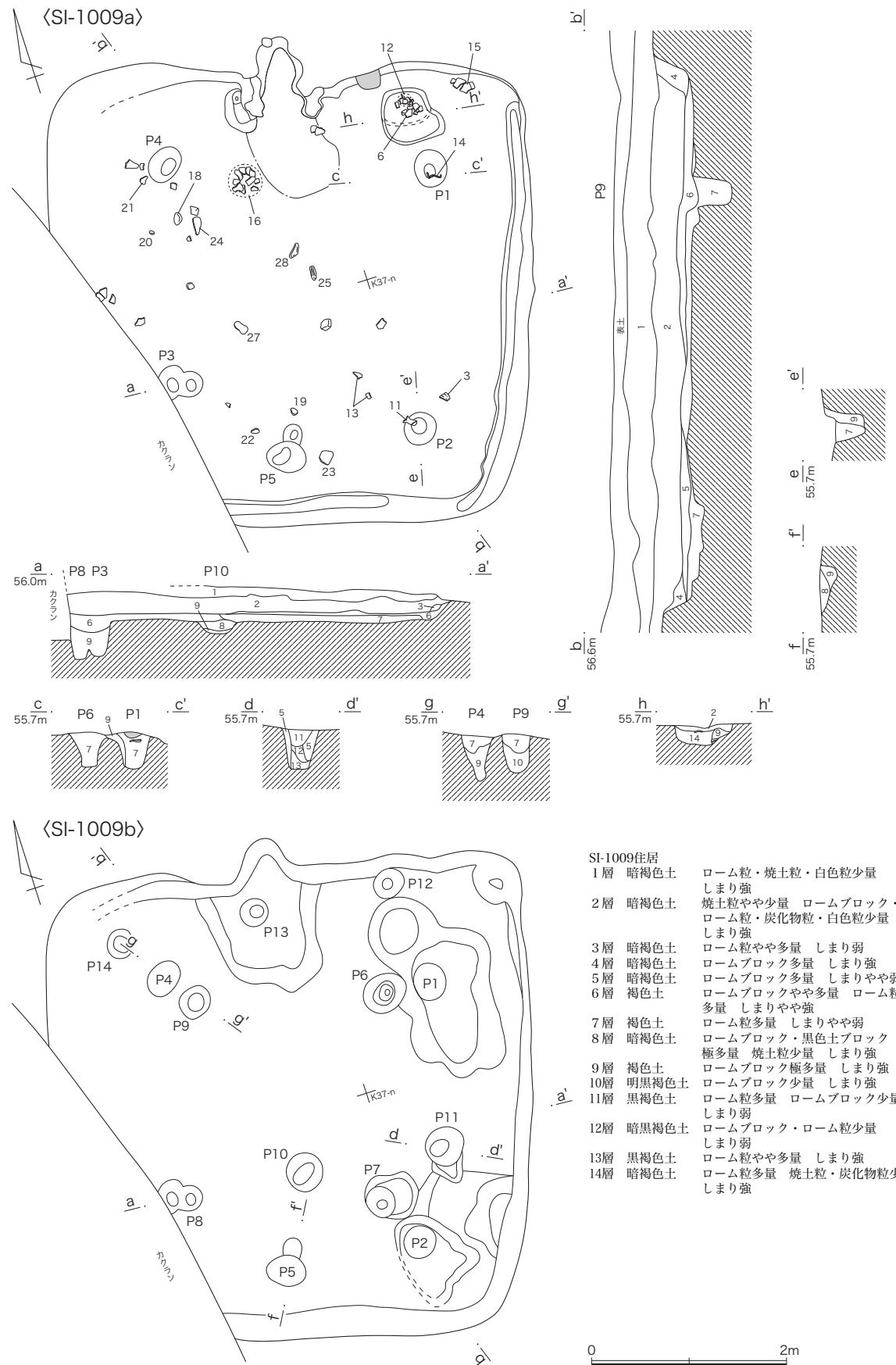
柱穴 4 本主柱と考えられる(P1 ~ P4)が P3 がやや内側によっており、攪乱部分に別の柱穴があった可能性もある。また、全ての柱穴に床下覆土(7 層)またはそれに類似する土層が堆積しているため、SI-1009a に伴う主柱穴かどうかは確定できない。

入り口ピット 南壁寄り中央に 1 基確認された(P5)。歪んだ橢円状の掘り方を呈しており、浅い。

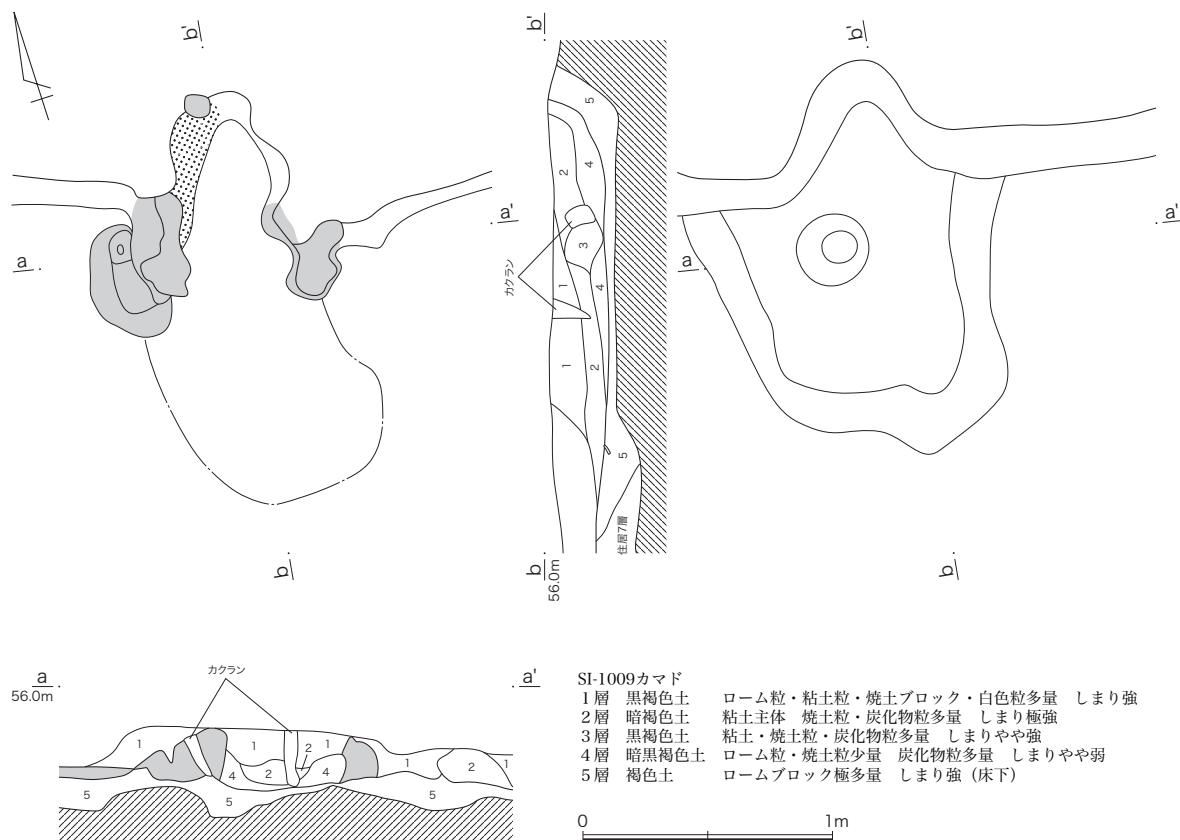
火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しており、両袖は白色粘土を積み上げて構築している。袖の内側はよく焼けており、内部には焼土ブロックや炭化物が多く堆積していた(3・4 層)。その上面には、カマド構築材と考えられる粘土が厚く堆積している。粘土や焼土、炭化物はカマド前面にも流れ出した状態で堆積していた(2 層・第 217 図破線部分)。煙道は短く、奥壁は急な角度で立ち上がる。掘方は、カマド部分を大きく島状に掘り残しており、SI-1001・SI-1005 竪穴住居跡のカマド掘り方と似ている。

遺物 住居全体に広がって出土しているが、大部分が小破片で出土量は少ない。覆土中から床面にかけて、

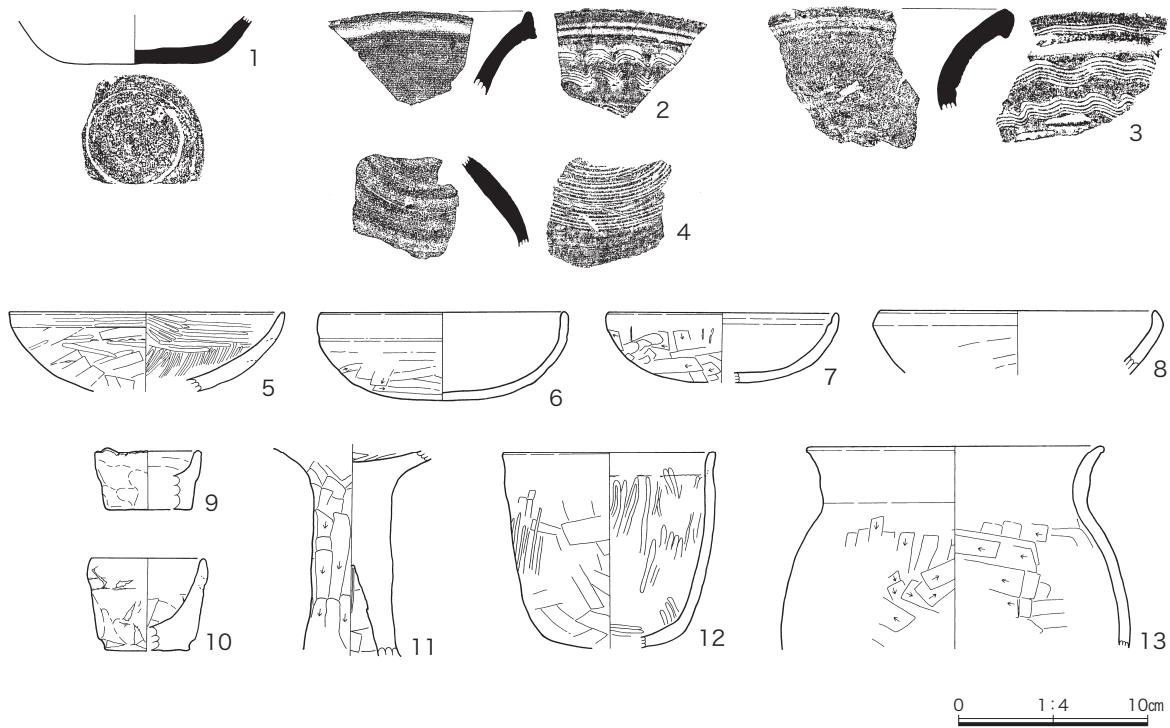
No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考	No.	長×短×深(cm)	備考
P1	39 × 34 × 41	a 主柱穴	P6	45 × 39 × 39	b 主柱穴	P11	42 × 38 × 43	主柱穴?
P2	34 × 33 × 40	a 主柱穴	P7	55 × 45 × 45	b 主柱穴	P12	32 × 29 × 42	主柱穴?
P3	[27] × 29 × 35	a 主柱穴	P8	[20] × 25 × 34	a 主柱穴	P13	30 × 28 × 21	床下ピット
P4	40 × 25 × 49	a 主柱穴	P9	35 × 28 × 38	b 主柱穴	P14	30 × 22 × 20	床下ピット
P5	50 × 22 × 17	a 入口ピット	P10	40 × 40 × 23	b 入口ピット	貯蔵穴	65 × 58 × 22	



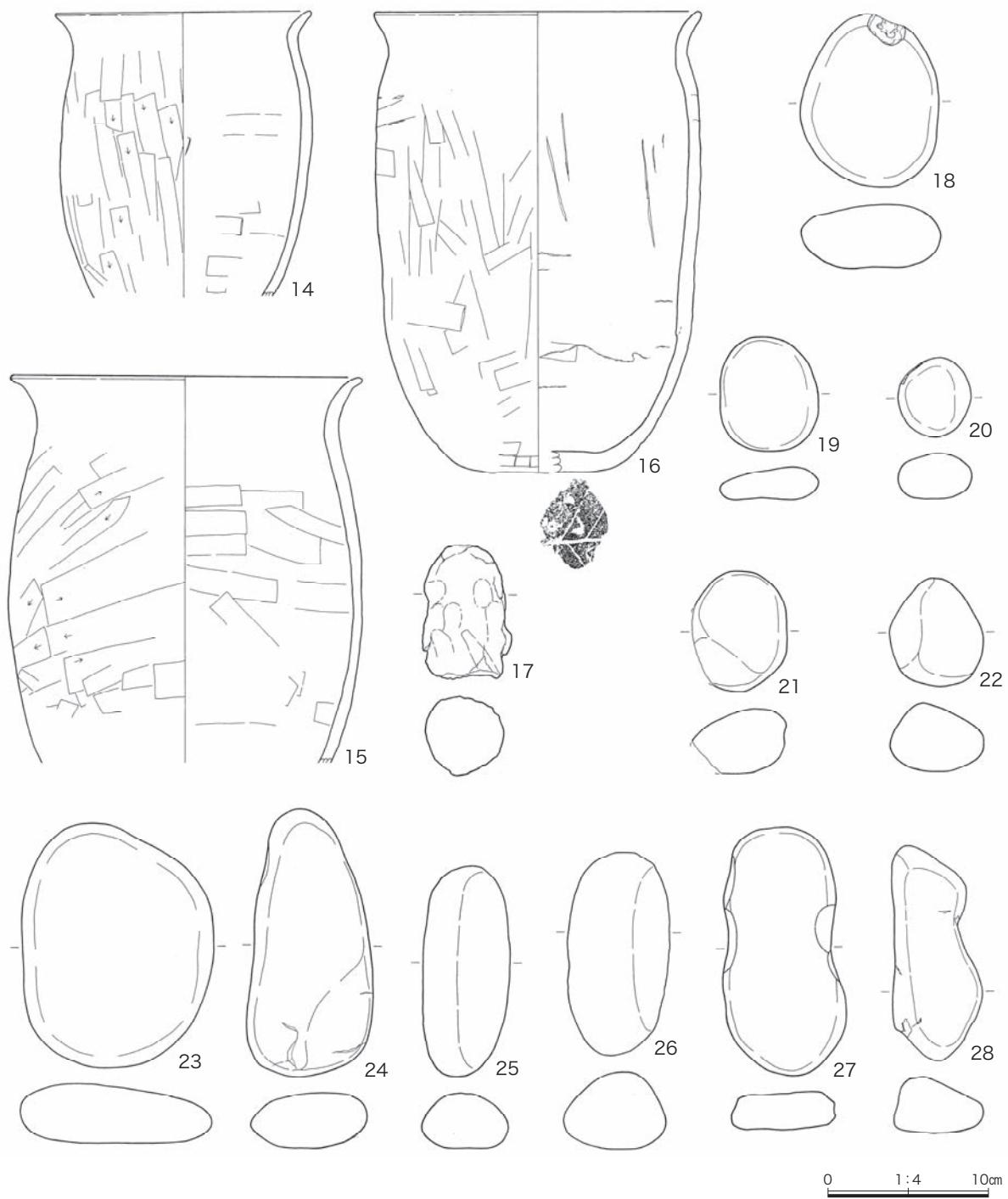
第217図 SI-1009 穫穴住居跡（1）



第218図 SI-1009 穫穴住居跡（2）



第219図 SI-1009 出土遺物（1）



第220図 SI-1009出土遺物(2)

第3章 発見された遺構と遺物

第83表 SI-1009 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	高 (2.6)	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 全体的に赤化（生焼け）（残）2/8 益子産	砂礫・白色粒子多 良 5YR4/6 赤褐	確認面
2 須恵器 甕	破片	内外面ともロクロナデ 口縁部突帯、波状櫛描文 産地不明	白色粒子多 良 5GY オリーブ黒	確認面
3 須恵器 甕	破片	内外面ともロクロナデ 口縁部突帯、波状櫛描文 常陸産？	白色粒子極多・砂礫多 やや良 N6/ 灰	床上 +10cm No.9
4 須恵器 壺	破片	内外面ともロクロナデ 外面カキメ 産地不明	白色粒子多・砂礫少 良 N6/ 灰	覆土 d
5 土師器 壺	口 (14.8) 高 (4.2)	(内) 体縦方向ミガキ→口横方向ミガキ (外) 口横方向ミガキ体ヘラケズリ 内面密なミガキ 全体的に赤化（残）1/8	砂粒多・砂礫少 良 5YR4/6 赤褐	確認面
6 土師器 壺	口 (13.2) 高 4.7	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体粗いヘラケズリ下半密なヘラケズリ 内面漆仕上げ（残）3/8	白色粒子極多 良 5YR3/2 暗褐	貯蔵穴内 No.18 + 貯蔵穴
7 土師器 壺	口 (12.2) 高 (3.7)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ、一部ナデ 内面漆仕上げ 口縁部内面に沈線（残）2/8	白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	カマド + 床下 a + ベルト内
8 土師器 壺	口 (14.6) 大 (15.5) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面へ口縁部外面赤彩 外面赤彩から下は黒彩（残）1/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 10YR5/3 にぶい黄褐	確認面
9 土師器 手捏ね 土器	口 (5.6) 高 (3.1)	手捏ね成形 内面弱い指ナデ (残) 2/8	微細白色粒子多・雲母微 良 7.5YR3/4 暗褐	確認面
10 土師器 手捏ね 土器	口 (6.0) 高 (4.9)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴粗い指ナデ 輪積痕残る（残）2/8	白色粒子・砂粒多・雲母少 良 5YR5/6 明赤褐	覆土
11 土師器 高壺	高 (11.0)	(壺部内) ヘラナデ (脚部内) ヘラケズリ、ヘラによる鋸い沈線 (脚部外) ヘラケズリ 壺部内面にヒビ（残）脚部 8/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 +10cm No.8
12 土師器 甕	口 11.2 高 (10.4)	(内) 口ヨコナデ体ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ、一部ミガキ 外面部分的に粘土付着（残）6/8	砂礫やや多・微細白色粒 子少 二次被熱 7.5Y4/2 灰褐	貯蔵穴内 No.2+19+ 貯蔵穴+ベルト
13 土師器 甕	口 (15.6) 高 (10.7)	内外面とも口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面摩滅 (残) 2/8	砂粒多・砂礫やや多・白 色粒子少 やや良 10YR6/3 にぶい黄橙	床直 No.6+7+ ベルト
14 土師器 甕	口 (16.0) 高 (17.7)	(内) 口ヨコナデ胴上半丁寧なナデ下半ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部外面に煤状の付着物 全体的に弱い赤化（残）3/8	砂礫極多・雲母多・ 白色粒子やや多 二次被熱 7.5YR5/6 明褐	P1 内 No.17+ 確 認面 + カド + 覆土・床 下 a + ベルト
15 土師器 甕	口 (22.0) 高 (24.1)	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面に煤状の付着物（残）4/8	砂礫極多・白色粒子多 良 5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.1 + 貯蔵 穴 + 覆土 a
16 土師器 甕	口 (20.4/18.8) 高 28.8	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 全体的に摩滅（残）4/8	砂礫極多・白色粒子やや多 不明 10YR6/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.11+12+ 13+14+ 貯蔵 穴 + カマド + 覆土 a
17 土製品 支脚	長 8.2 径 5.5 重 249.09	手捏ね成形 外面に粘土付着	砂礫・砂粒・白色粒子多 やや不良 7.5YR4/4 褐	貯蔵穴

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
18 礫	長 10.8 幅 18.5 厚 4.0 重 537.69	断面楕円状 全体的に磨面 上端右よりに敲打痕あり	2.5Y7/3 浅黄	床直 No.26
19 礫	長 7.1 幅 6.0 厚 2.0 重 130.73	扁平な河原石 全体的に磨り面	5Y5/1 灰	床上 +5cm No.36
20 礫	長 5.0 幅 4.5 厚 2.8 重 84.80	断面楕円状 全体的に磨り面・被熱痕あり 左側面上に敲打痕あり	5Y6/4 にぶい橙	床上 +15cm No.28
21 礫	長 7.4 幅 5.9 厚 4.1 重 238.58	円礫 全体的に磨り面 磨石か？	2.5Y6/2 灰黄	床上 +10cm No.22
22 礫	長 6.7 幅 5.9 厚 4.3 重 222.5	断面三角状 全体的に磨り面 磨石か？	10YR7/1 灰白	床上 +10cm No.35
23 礫	長 15.2 幅 11.9 厚 3.7 重 1076.23	扁平な台状 全体的に磨り面	10YR7/1 灰白	床上 +20cm No.37
24 礫	長 16.7 幅 7.9 厚 3.4 重 642.05	扁平 全体的に平滑 実測図下端にヒビがはいる	2.5Y5/4 黄褐	床上 +10cm No.25
25 礫	長 13.1 幅 5.5 厚 3.6 重 398.1	断面楕円状 使用痕特になし	7.5Y5/1 灰	床直 No.16
26 礫	長 12.6 幅 5.4 厚 4.9 重 595.0	断面楕円状 全体的に弱い擦痕	7.5Y6/1 灰	覆土 b
27 礫	長 15.5 幅 7.7 厚 2.2 重 433.57	断面扁平な長方形 左右側面に欠け 表面と欠け部分に擦痕あり	2.5Y6/1 黄灰	床直 No.33
28 礫	長 13.3 幅 5.6 厚 3.7 重 401.3	断面三角形 使用痕特になし	2.5Y6/1 黄灰	床上 +5cm No.15

長楕円状の礫が多く出土している（第220図23～28）。また、貯蔵穴内からは比較的多くの遺物が出土している（第219図6・12、第220図17）。

SI-1009b（第217図）

覆土・壁 覆土はSI-1009aの貼床（5・6層）と共にある。壁もSI-1009aと同じ位置である。

床面・貼床 ローム粒を主体とする褐色土により貼床を施している（7層）。SI-1009aの貼床とはほとんどレベル差がなく、南西隅で7層が見られないことから、両住居で同じ床面を使用している可能性もある。

柱穴 4本主柱（P6～P9）だが、他にも柱穴状のピットが確認されている（P11・P12）。いずれも柱穴も、SI-1009aの柱穴より内側に作られている。覆土はP1～P4とほぼ同じである。

入り口ピット P8とP7の間に1基確認された（P10）。円状の掘り方を呈する。

火処 SI-1009bと共にある。燃焼面の作り替えは確認されなかった。

遺物 SI-1009bに確実に伴う遺物はないが、第219図7の土師器壺や第220図14の土師器甕に、床下から出土した破片が接合している。

SI-1014 (第 221 ~ 228 図・図版二八・二九・五四~五六)

位置 O36 グリッドに位置する。

重複関係 南東部分が SX-1190 円形周溝遺構と重複する。新旧関係は SI-1014(旧) → SX-1190(新) である。

規模・形状 東西 7.9 m、南北 8.3 m の長方形で、カマド東側の棚状施設を含めた南北の長さは南北 8.7 m である。峰高前遺跡で調査された中では最も規模の大きい竪穴住居跡である。主軸方向は N-7°-E である。

覆土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を多く含む明黒褐色土を主体とする。また、覆土正面に火山灰と考えられる白色粒子が集中していた。本来は、白色粒子を多量に含む暗褐色土が上部に堆積していたものと考えられるが、削平により張り出しピットの上面のみ残っていた (1 層)。南西隅は他の部分とは違い、しまりの弱い暗褐色土が堆積していた (11 層)。

壁 確認面から深さ 30cm で、壁はほぼ直に立ち上がる。南東隅は SX-1190 円形周溝遺構によって壊されている。壁溝はない。

床面・貼床 部分的に黄褐色土ロームによる貼床 (3 層) が施されており、特に南西隅と張り出しピット周辺で顕著である。他の部分では床下覆土 (8 層) の上面が硬化しており、その面が床面と考えられる。

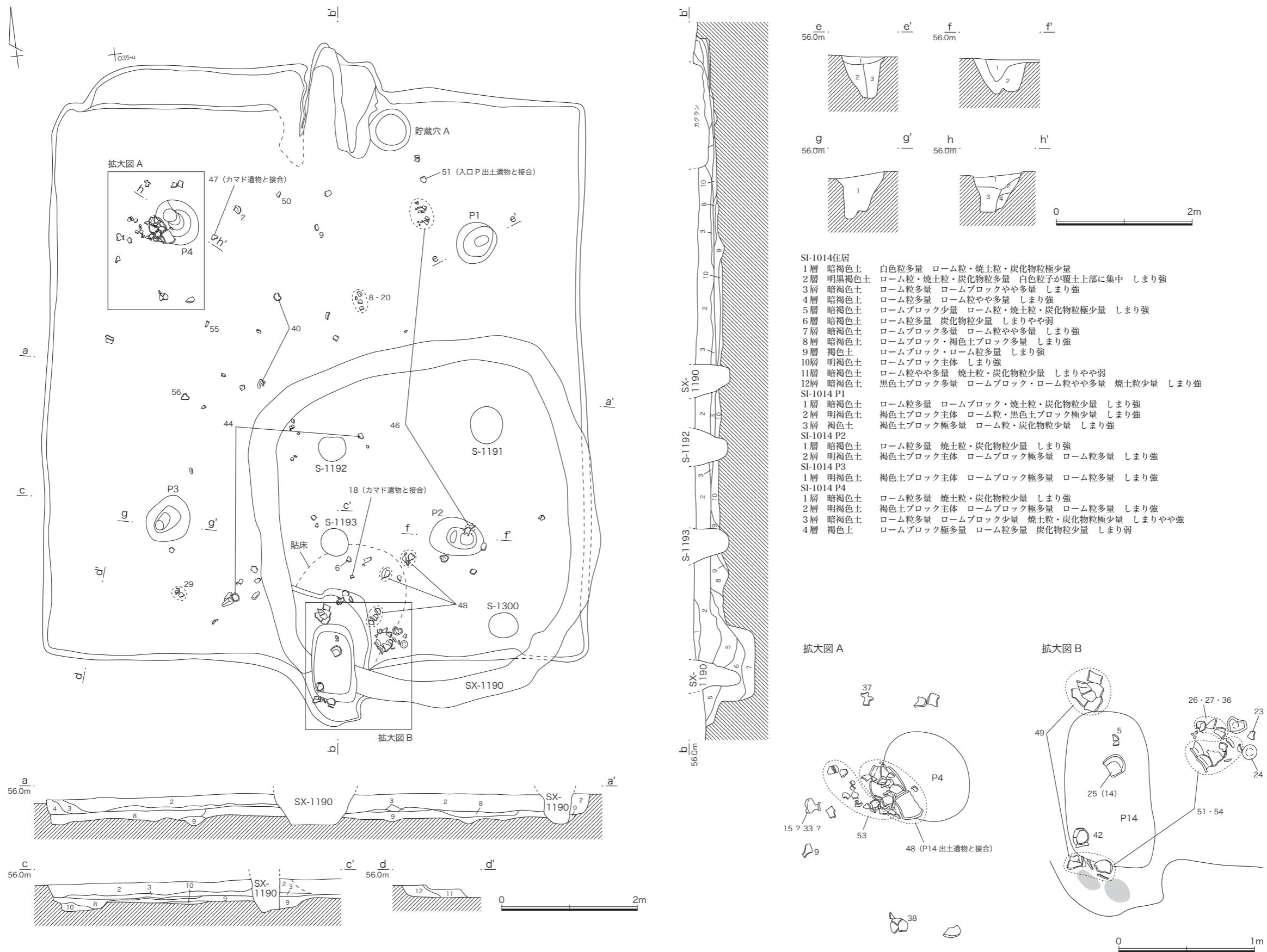
掘方 北西隅、北東隅とカマドの前および P1 の南側が浅く窪んでいる他は、ほぼ水平である。掘方調査中に床下からピットが多く確認された。深さ 10 ~ 15cm、直径 20 ~ 30cm の小ピットがほとんどであるが、西側中央付近で確認された SE-1394 は直径 60cm、深さが 1m 以上となり、住居よりも古い井戸であると考えられる。

柱穴 4 本主柱。いずれも楕円状の掘り方を呈する。片側が大きく斜めに掘り込まれており、柱痕にあたる覆土が確認されないことからも、柱が抜き取られたものと考えられる。

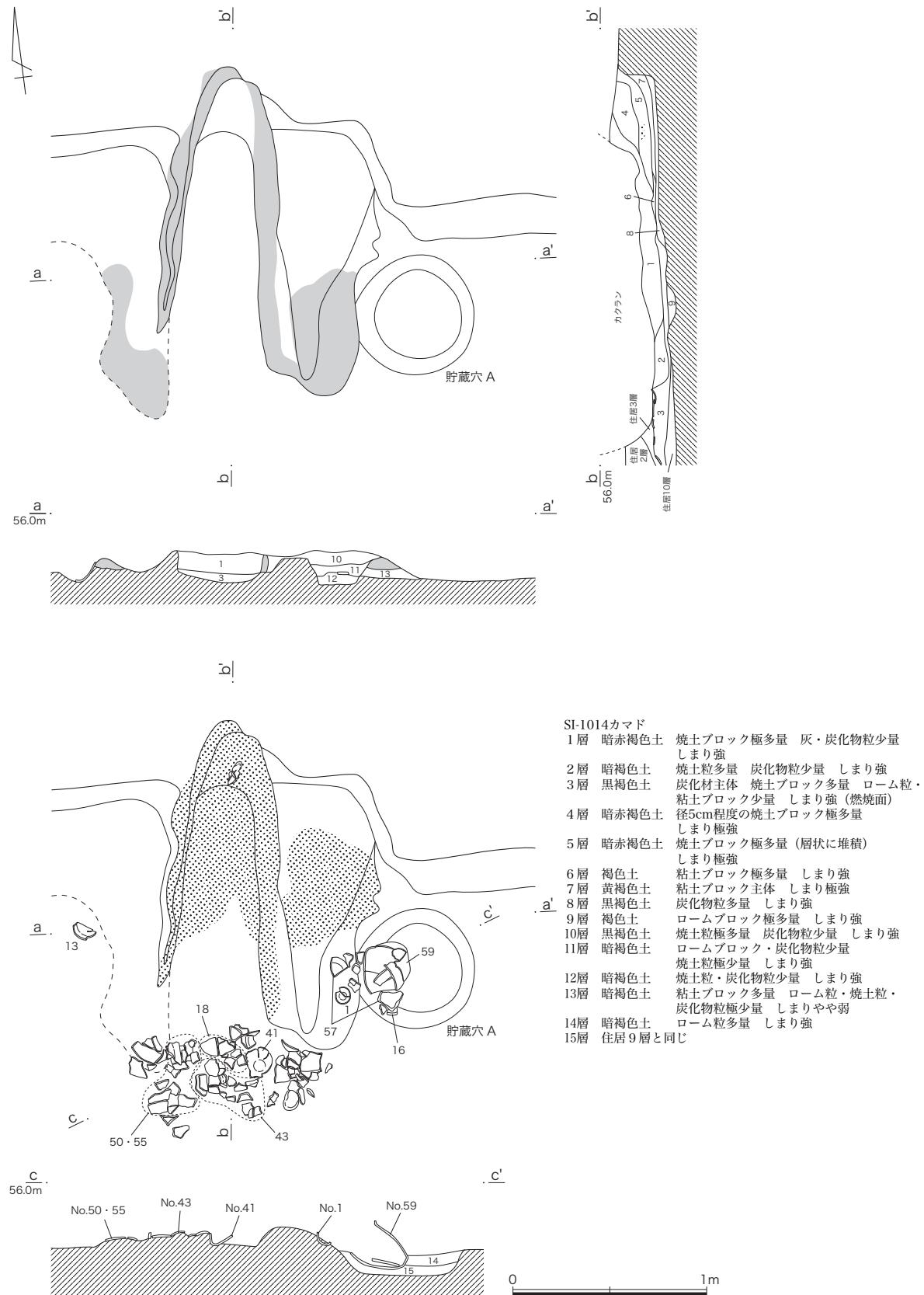
張り出しピット 南壁中央に、長辺 2m、短辺約 70cm の隅丸長方形を呈する張り出しピットが確認された。2 段掘り込みとなっており、床面からの深さは約 55cm である。覆土は一部 SX-1190 円形周溝遺構に切られている。内部からは、土師器小型甕 (第 226 図 42) や土師器壺 (第 226 図 25) が出土し、周辺からも土師器甕などが多く出土している。また、南側壁の上部に拳大の粘土塊が貼り付いていた。

間仕切り溝 掘方調査中に 3 条確認された (第 223 図)。いずれも浅い溝状で、1 条は P1 から壁に向かって掘り込まれている。残りの 2 条は、東西壁の中央近くに掘り込まれている。いずれも住居床面では確認できなかったこと、床下覆土 (11 層) が堆積していることから、これらの間仕切り溝は住居床面には伴わぬず、床面構築時に埋め戻されたものと考えられる。

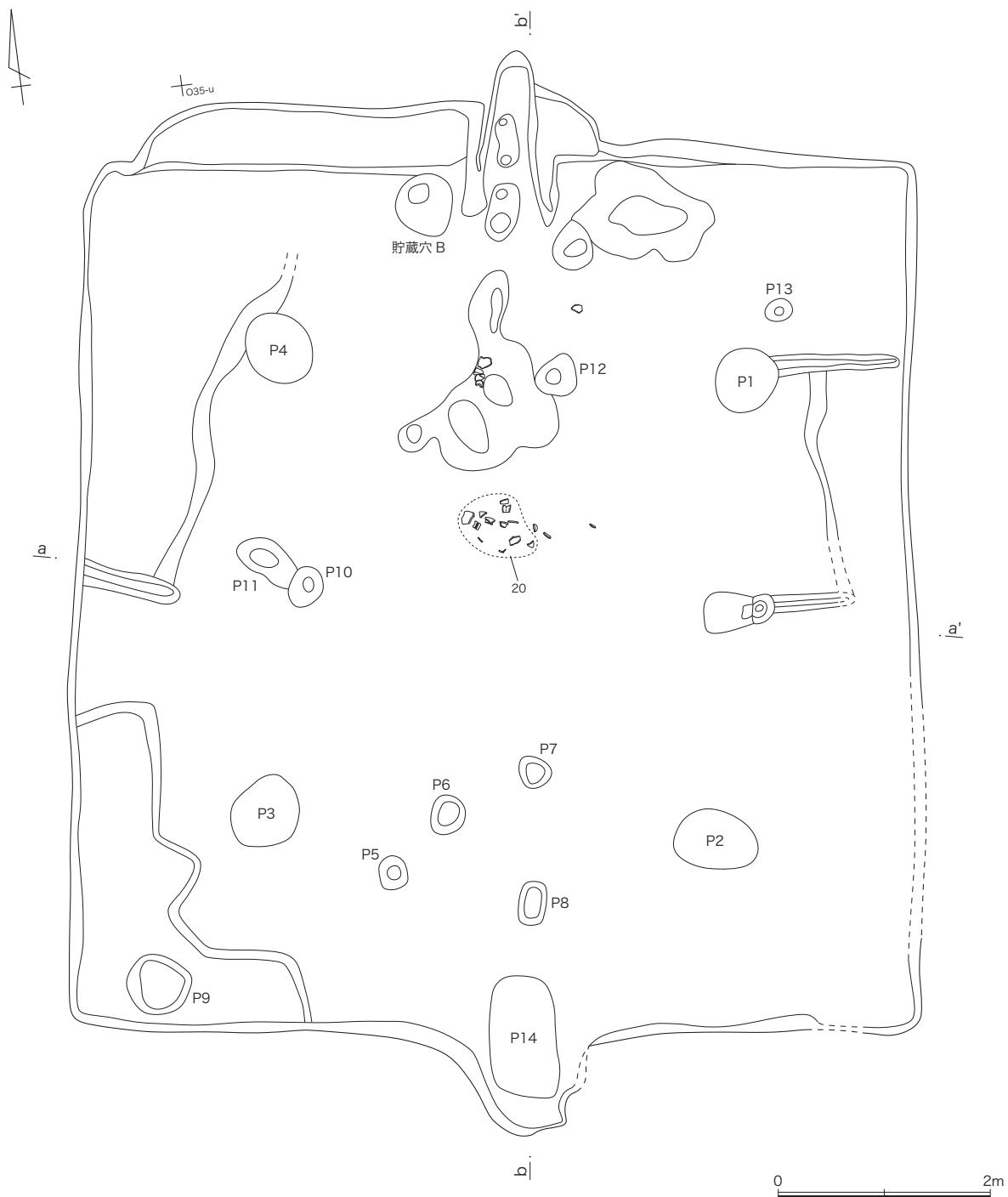
火処 北壁中央にカマドが構築されている。現代の攪乱により上部が大きく削平されていたが、両袖の基部と奥壁が残存していた。左袖は地山を掘り残した後、薄く粘土を貼り付けていたものと考えられる。同様の構築方法は、SI-95・SI-1006 竪穴住居跡などでも認められる。右袖の外側には粘土が多量に堆積していた。粘土の下には地山とは異なる土層が堆積しており (13 層)、その下から土器が多量に出土した。焼土も多く含まれていることから、古いカマドの可能性を考え精査したが、奥壁などの掘り込みや袖などが確認できず、13 層を挟んだ上下で出土した破片が接合している (第 225 図 16、第 228 図 57) ことから、カマドではないと考えた。内部には焼土が多量に堆積しており (1 層)、特にブロック状の焼土が目立つ。カマド底面の中央から奥壁にかけて黄褐色粘土が貼り付けられていた (6・7 層) が、この粘土自体は焼けておらず、その上に堆積した焼土層 (カマド 5 層) が良く焼けている。奥壁はわずかに段差が認められ、おそらく削平される前は段状に掘り込まれていたものと考えられる。遺物はカマド前の焚口付近からまとめて出土している (第 225 図 18、第 226 図 41・43、第 227 図 50、第 228 図 55)。



第 221 図 SI-1014 穫穴住居跡 (1)

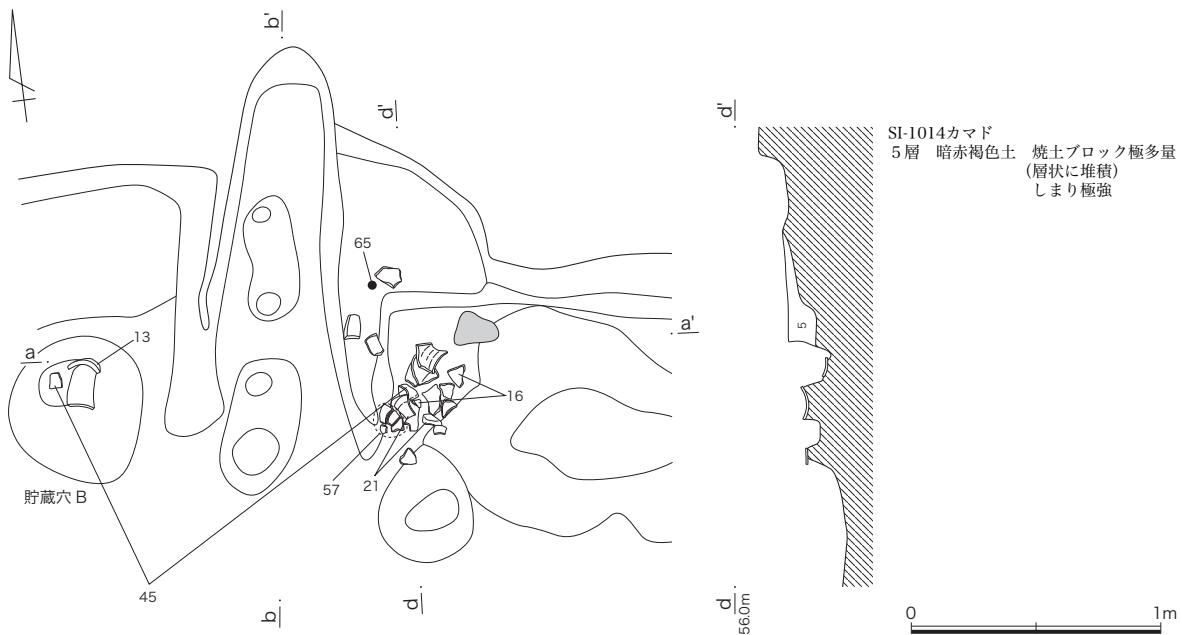


第222図 SI-1014 穫穴住跡 (2)

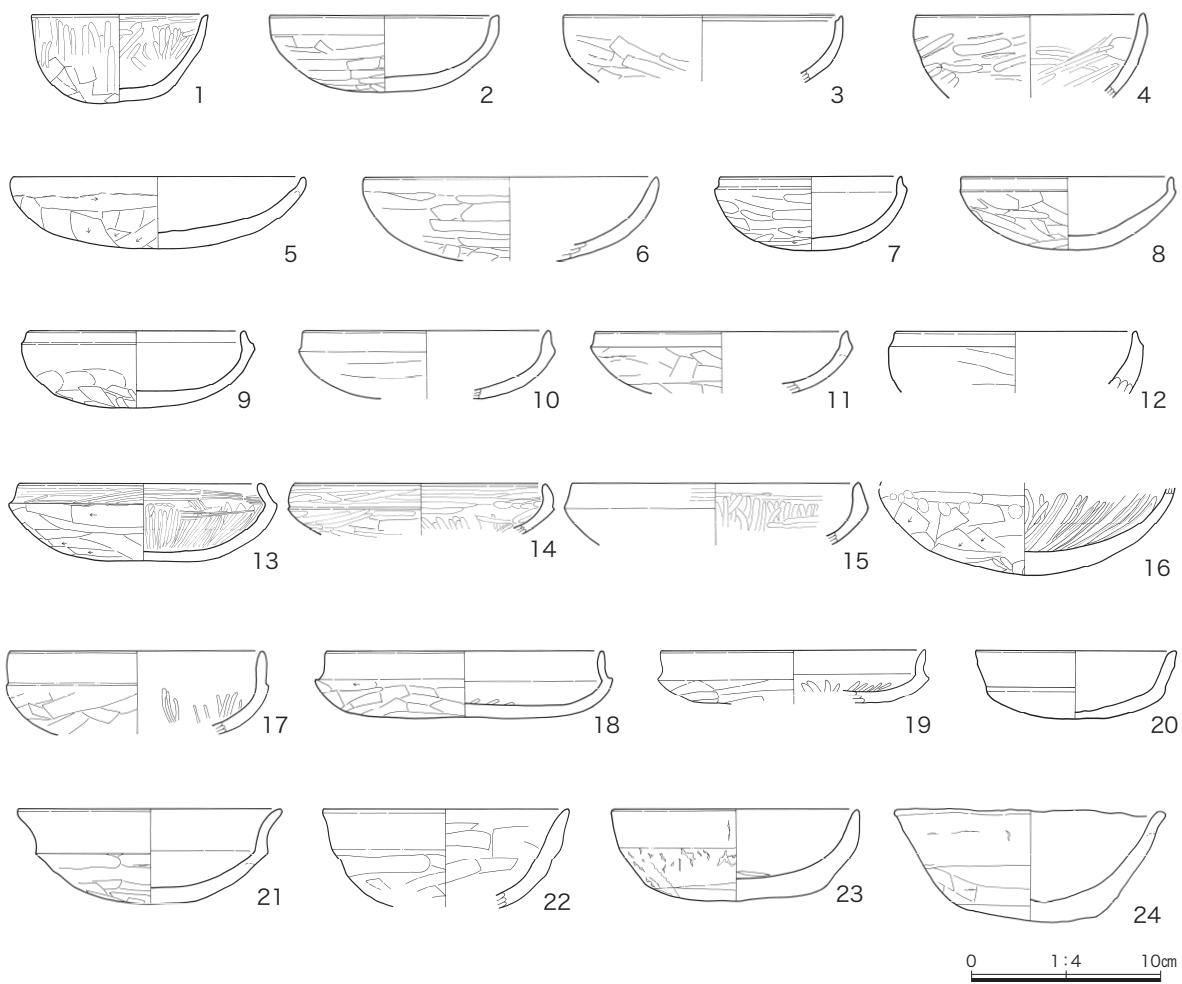


No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考	No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	65 × 56 × 60	主柱穴	P6	37 × 30 × 20	床下ビット	P11	[60] × 32 × 32	床下ビット
P2	80 × 55 × 51	主柱穴	P7	33 × 27 × 16	床下ビット	P12	40 × 35 × 19	床下ビット
P3	73 × 62 × 60	主柱穴	P8	42 × 25 × 16	床下ビット	P13	26 × 20 × 16	床下ビット
P4	74 × 60 × 52	主柱穴	P9	62 × 56 × 24	床下ビット	P14	115 × 63 × 51	張出ビット
P5	32 × 26 × 27	床下ビット	P10	40 × 30 × 25	床下ビット			

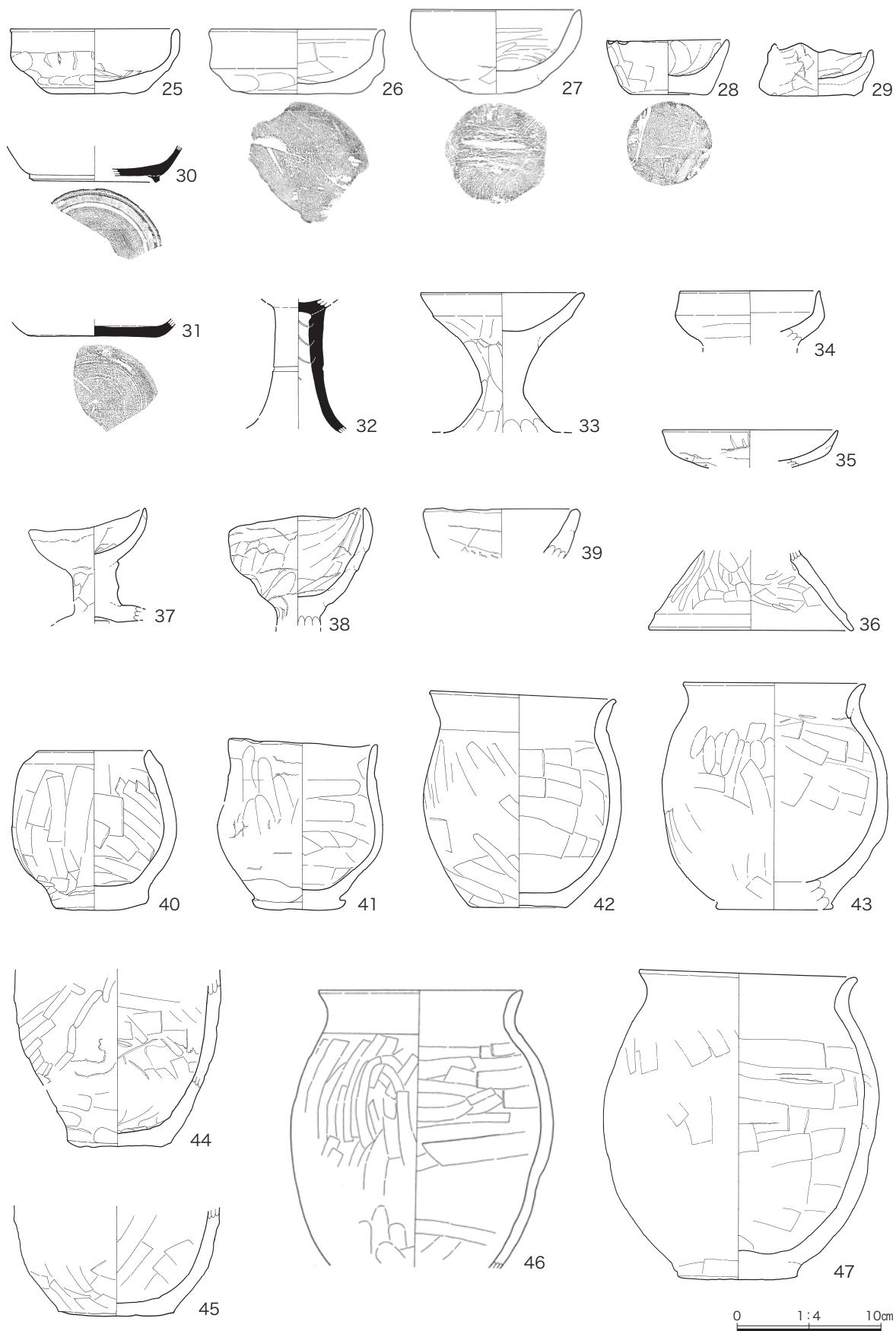
第223図 SI-1014 穫穴住居跡（3）



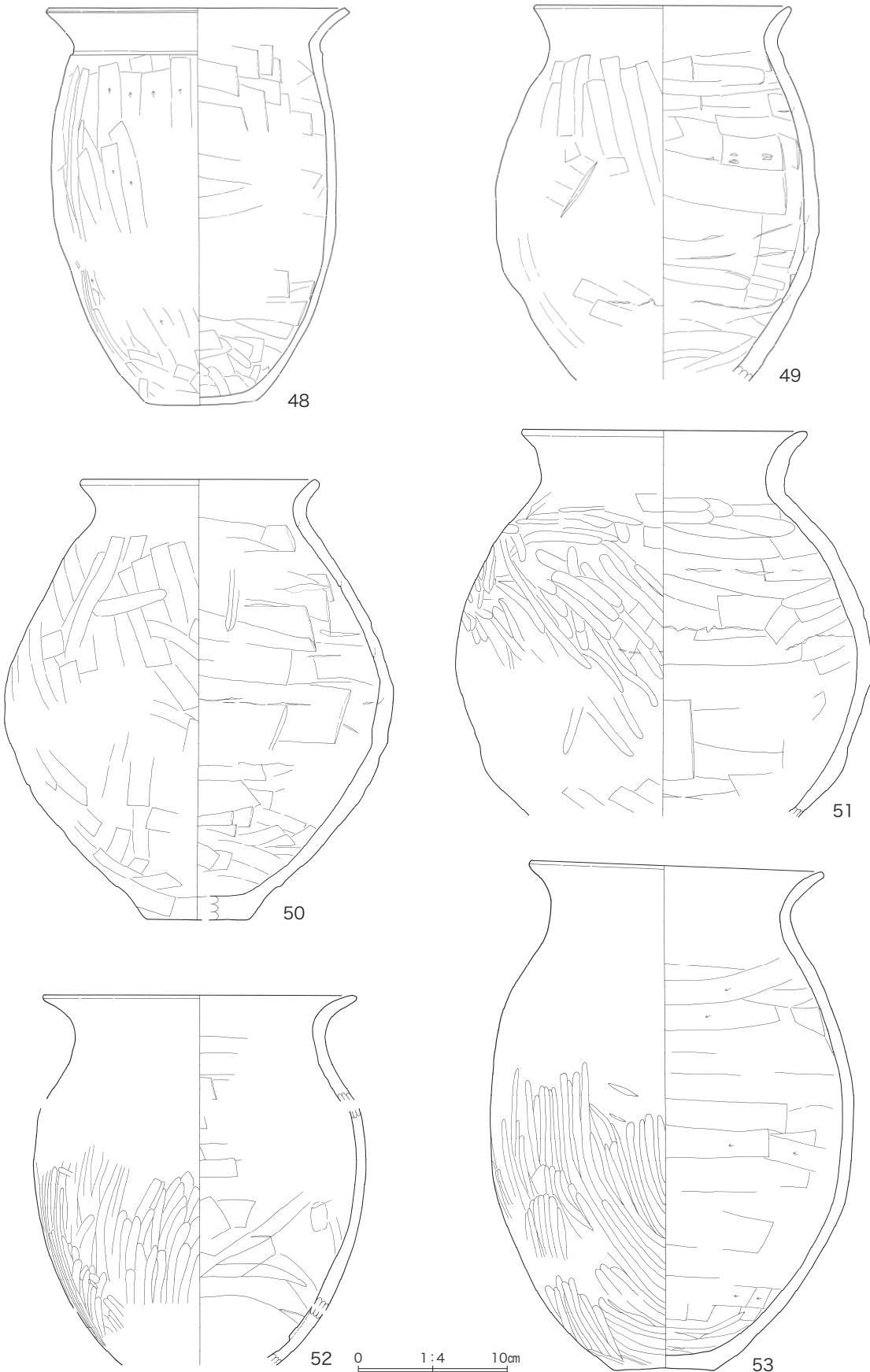
第224図 SI-1014 穫穴住居跡 (4)



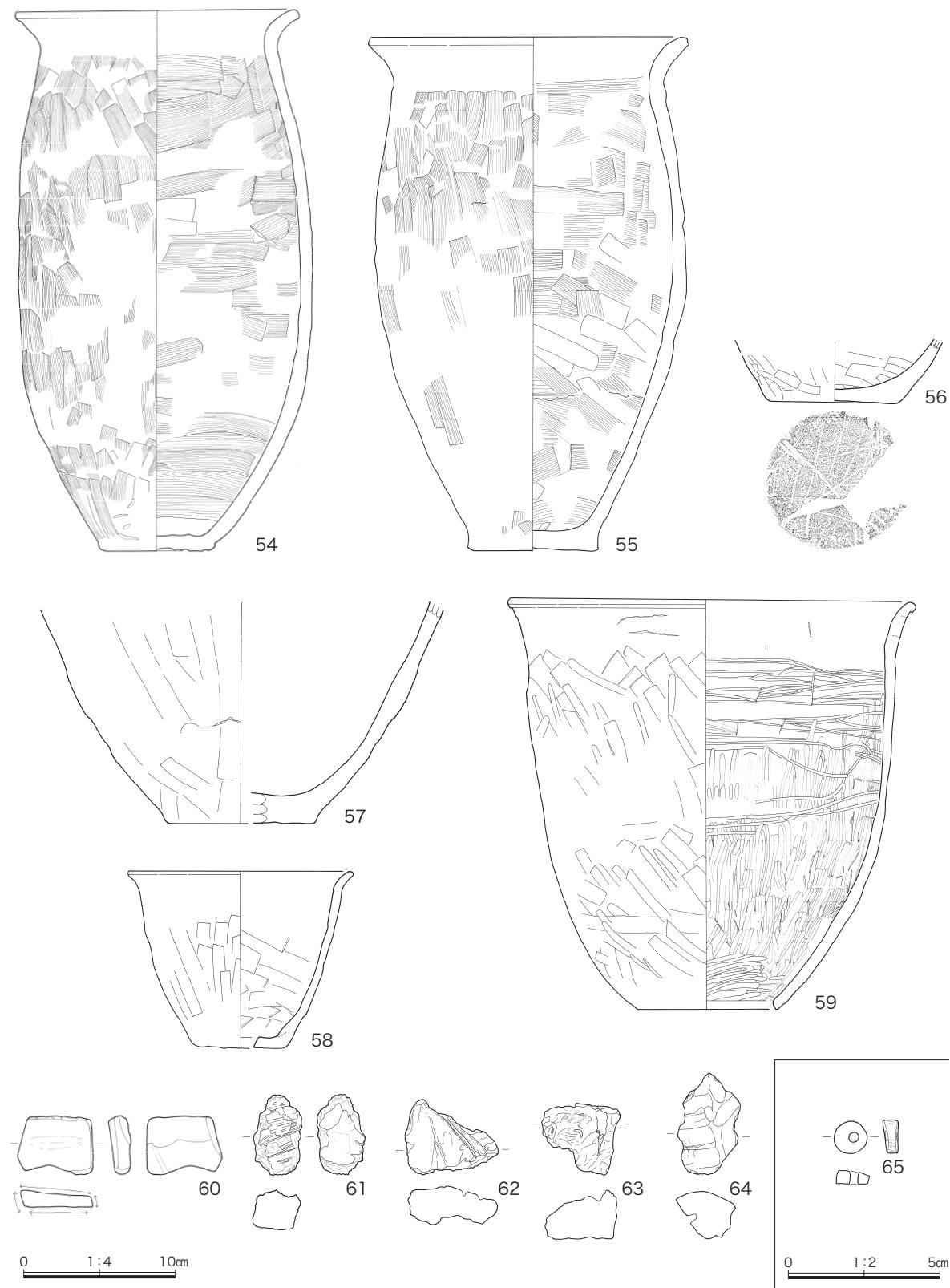
第225図 SI-1014 出土遺物 (1)



第226図 SI-1014出土遺物（2）



第227図 SI-1014出土遺物(3)



第228図 SI-1014出土遺物(4)

第84表 SI-1014 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (9.2) 高 4.6	(内) ヨコナデ→横方向ミガキ体多方向ミガキ (外) ヨコナデ→縦方向ミガキ体ヘラケズリ 口縁部斜めに歪む(残) 6/8	砂粒極多・白色粒子多・ 砂礫少 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.120
2 土師器 壺	口 12.0 高 5.1	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ(残) 5/8	白色粒子多・砂粒少 良 10YR4/1 褐灰	床上 +10cm No.4
3 土師器 壺	口 (14.8) 高 (3.5)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体粗いヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 1/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	SE-1394+ トレンチ
4 土師器 壺	口 (12.0) 大 (12.2) 高 (4.4)	(内) ヨコナデ体多方向ミガキ (外) ヨコナデ体弱いナデ→横方向ミガキ 外面に輪積痕残る 高壺の破片か？(残) 1/8	白色粒子少 良 10YR6/6 明黄褐	覆土南
5 土師器 壺	口 15.6 高 4.8	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 外面に輪積痕残る 内面漆仕上げ(残) 7/8	砂礫・白色粒子多 やや良 7.5YR3/1 黒褐	P14 内 No.68
6 土師器 壺	口 (15.4) 高 (4.4)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 1/8	微細白色粒子多・雲母微 良 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +15cm No.40
7 土師器 壺	口 (9.4) 大 (10.0) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 2/8	微細白色粒子多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	トレンチ + 覆土 b+c+d
8 土師器 壺	口 11.0 高 4.9	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 7/8	白色粒子極多・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.10+ 覆土 a+ トレンチ
9 土師器 壺	口 11.4 高 4.0	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体上半ユビナデ下半ヘラケズリ 内面漆仕上げ(残) 5/8	白色粒子極多 良 7.5YR3/2 黒褐	床上 +5cm No.15+58+ 覆土 c 北 +d
10 土師器 壺	口 (13.0) 大 (13.5) 高 (3.6)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ? 内面漆仕上げ(残) 2/8	白色粒子多 雲母微 良 7.5YR5/4 にぶい褐	覆土 a+b+c+d
11 土師器 壺	口 (13.2) 大 (13.8) 高 (3.2)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 1/8	白色粒子多 雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 d + トレンチ
12 土師器 壺	口 (12.8) 大 (13.4) 高 (3.2)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部歪む(残) 1/8	微細白色粒子多 雲母微 二次被熱 7.5YR5/6 明褐	覆土 b
13 土師器 壺	口 13.0 高 4.1	(内) ヨコナデ→横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) ヨコナデ→横方向ミガキ体ヘラケズリ (残) 8/8	小砂礫・雲母多 白色粒 子やや多 やや良 10YR3/2 黒褐	貯蔵穴 B 内 No.117 +138+ 覆土 d
14 土師器 壺	口 (13.4) 大 (14.0) 高 (2.7)	(内) 口横方向ミガキ→体縦方向ミガキ (外) ヨコナデ→横方向ミガキ 体ヘラケズリ→一部ミガキ 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 2/8	白色粒子多 やや良 10YR2/1 黒	PI4 内 No.69+PI4
15 土師器 壺	口 (15.0) 大 (16.0) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ→横方向ミガキ→体放射状ミガキ (外) ミガキ? 体不明 外面あばた状の剥離(残) 1/8	砂粒多 雲母少 二次被熱 10YR7/3 にぶい黄橙	SE-1394+ 覆土 d+ カ マド燃焼面
16 土師器 壺	口 (15.3) 高 (4.3)	(内) ヨコナデ体放射状ミガキ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ+指頭圧痕 全体にあばた状の剥離 内面漆仕上げ(残) 7/8	白色粒子・雲母多・砂礫 やや多 やや良 7.5YR3/3 暗褐	貯蔵穴 A 内 No.118+119 +126+136
17 土師器 壺	口 (13.4) 大 (13.8) 高 (4.4)	(内) ヨコナデ→体放射状ミガキ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 1/8	白色粒子多 良 5YR6/6 橙	床下 No.141+142

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
18 土師器 坏	口 (14.4) 大 (15.2) 高 3.6	(内) 口～胴上半ヨコナデ→放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	砂礫・白色粒子極多・ 雲母少 良 7.5YR7/3 にぶい橙	床直 No.42 +109+113+ 覆土 c+ 床直 +c 南 +P14
19 土師器 坏	口 (13.8) 大 (14.2) 高 (2.7)	(内) 口ヨコナデ→体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ (残) 2/8	砂礫多・白色粒子やや多・ 雲母少 やや良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 a+b+c+ 南 +P14
20 土師器 坏	口 (10.6) 高 4.5	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体不明 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子極多・雲母少 やや良 10YR3/1 黒褐	床上 +5cm 覆土 a+ No.10
21 土師器 坏	底 13.8 高 5.0	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半ユビナデ下半ヘラケズリ (残) 7/8	砂粒多・白色粒子・砂礫少・ 雲母微 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床下 No.122 +125+132
22 土師器 坏	口 (12.8) 高 (5.2)	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体上半ユビナデ下半粗いヘラナデ 外面にヒビ、輪積痕残る (残) 4/8	白色粒子砂粒やや多・ 砂礫少 良 5YR4/6 赤褐	覆土 a+b+P14
23 土師器 坏	口 12.8 高 4.9	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ユビナデ 外面にヒビ (残) 6/8	微細白色粒子やや多 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.67+ 床直
24 土師器 坏	口 14.0 高 5.9	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ナデ 外面にヒビ (残) 7/8	微細白色粒子多・砂粒や や多 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.66+67+ 床直
25 土師器 坏	口 (11.8) 高 (4.4)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ユビナデ 外面にヒビ (残) 6/8	白色粒子・赤色融解粒多 良 5YR4/6 赤褐	P14 内 No.69
26 土師器 坏	口 (12.0) 高 4.5	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ユビナデ底ランダムな沈線 内面黒色化 (残) 1/8	微細白色粒子多・雲母微 良 5YR6/4 赤褐	床直 No.65+ 覆土 b
27 土師器 坏	口 11.7 高 5.8	(内) 横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体弱いナデ 底部に鋭利なキズ (砥石に 転用か?) 体部下半に輪積痕残る (残) 5/8	白色粒子・赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 No.65+ 覆 土 a+b
28 土師器 坏	口 8.4 底 5.4 高 3.9	(内) 放射状にユビナデ (外) 弱いユビナデ、ヘラナデ底ランダムな沈線 全体的に赤化 (残) 5/8	細砂粒少・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 a
29 土師器 手捏ね 土器	口 (6.8) 高 3.6	内外面ともユビナデ 外面に指紋多く残る (残) 3/8	白色粒子・赤色融解粒多 良 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.31
30 須恵器 坏	底 (9.0) 高 (2.5)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 高台付 (残) 2/8 三毳産?	白色粒子やや多・砂礫少 やや良 7.5Y6/1 灰	覆土 a + b
31 須恵器 坏	底 (8.6) 高 (1.2)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ (残) 1/8 三毳産?	白色粒子多・砂礫少 やや不良 2.5Y7/3 浅黄	P4 上面
32 須恵器 高坏	高 (9.3)	内外面ともロクロナデ 外面中位に凹線 粘土を巻き上げ (正位上から見て時計回り) →ロクロで調 整? 坏部欠損 産地不明	微細白色粒子多 砂礫少 良 5Y6/1 灰	床直 No.12
33 土師器 高坏	口 (11.0) 高 (9.7) 脚部径 2.9	(坏部内) ヨコナデ (坏部外) 口ヨコナデ体弱いナデ (脚部外) 上半ユビナデ下半ヘラケズリ (残) 4/8	白色粒子多・砂礫少・ 炭状の黑色粒子微 やや良 10YR5/1 褐灰	床直 No.16
34 土師器 高坏?	口 (9.6) 高 (3.7)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体弱いナデ 内面にタール状の付着物 (残) 2/8	微細白色粒子多・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 b+d

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
35 土師器 壺	口 (12.0) 高 (2.5)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体強いヘラケズリ 外面に輪積痕残る (残) 1/8	微細白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 a
36 土師器 高壺?	脚 (11.8) 高 (5.8)	(内) ヘラケズリ+ユビナデ (外) ヘラケズリ (残) 破片より復元	砂礫・白色粒子微 良 10YR4/4 褐	床直 No.65
37 土師器 高壺	口 8.2 高 (7.5) 脚部径 3.0	(壺部内) ヨコナデ (壺部外) 口ヨコナデ体弱いナデ (脚部内) ユビナデ (脚部外) ヘラナデ (残) 5/8	白色粒子多・砂礫やや多 やや良 10YR5/3 にぶい黄褐	床上 +5cm No.1
38 土師器 高壺	口 9.4 高 (8.1) 脚部径 2.9	(壺部内) 口ヨコナデ体ヘラナデつけ (壺部外) 口ヨコナデ体弱いナデ 輪積痕残る 壺部接合痕が明瞭 (残) 6/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 10YR6/4 にぶい黄澄	床直 No.14+ 覆土 d
39 土師器 壺	口 (10.4) 高 (3.4)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ 外面に輪積痕残る (残) 1/8	砂礫・微細白色粒子・ 赤色融解粒多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 a + b
40 土師器 甕	口 7.8 大 11.2 底 6.7 高 11.0	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 底部丸みを帯びる (残) 7/8	砂礫・白色粒子多 良 5YR4/6 赤褐	床直 No.23+57+ トレン+覆c北 +c 床下+d
41 土師器 甕	口 (10.4) 大 (11.4) 底 (6.0) 高 11.8	(内) 口ヨコナデ胴上半ユビナデ下半ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴弱いユビナデ 外面輪積痕残る 脇下半煤状の付着物 (内面赤化) 胴上半赤化 (残) 4/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR3/6 暗赤褐	床直 No.116
42 土師器 甕	口 12.8 大 13.6 底 6.8 高 14.9	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 全体的に被熱 (残) 7/8	白色粒子極多・砂礫多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	P14 内 No.70
43 土師器 甕	口 12.4 大 15.4 高 (15.7)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胴下半強い被熱、煤状の付着物 (残) 6/8	砂粒・白色粒子多・雲母少 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床直 No.105 +111+113+ 115+カド燃 焼面+床下 a
44 土師器 甕	底 (7.0) 高 (12.0)	(内) ヘラナデ (外) 粗いヘラナデ 未調整の部分多く残る (残) 3/8	砂礫極多・白色粒子多 やや良 10YR5/3 にぶい黄褐	床上 +15cm No.28+35+ 覆c+c北+d
45 土師器 甕	底 (8.0) 高 (7.6)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 全体的に粗い調整 被熱により赤化 (残) 1/8	砂礫・砂粒・白色粒子極多 二次被熱 5YR3/6 暗赤褐	貯蔵穴 B 内 No.135+ 140
46 土師器 甕	口 (13.4/14.2) 大 (17.2/18.0) 高 (14.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 内面に輪積痕残る 楕円形に歪む (残) 口 5/8 脇 3/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母少 良 10YR5/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.8+48+P4 上面+床下 a
47 土師器 甕	口 (15.2) 大 (19.0) 高 16.4	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ底部近くヘラケズリ (残) 5/8	砂粒・白色粒子多・砂礫 やや多 二次被熱 7.5YR5/6 明褐	床直 No.3 +101+114+ カド燃焼面
48 土師器 甕	口 19.8 大 22.0 底 7.2 高 (27.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 器壁薄い (残) 6/8	砂礫極多・白色粒子多 良 10YR6/2 灰黄褐	床上 +15cm No.44+46 +52+54
49 土師器 甕	口 (17.0) 大 (21.4) 高 (25.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胴部中央にヘラによるキズ残る (残) 口～脇 7/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 5YR4/8 赤褐	P14 内 No.55+71+ P14
50 土師器 甕	口 (16.0) 大 (25.8) 高 29.3	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ底ヘラケズリ 内面輪積痕多く残る 外面中位が著しく被熱・煤状の付着物 (残) 8/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床上 +10cm No.5+106+ 109+112

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
51 土師器 甕	口 (19.0) 大 (27.6) 高 (25.8)	(内) 口ヨコナデ頸ユビナデ同ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ→斜め方向ミガキ (残) 3/8	白色粒子多・砂礫やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床直 No.7+ 65+66+71 +P14+P4上 +床下 b
52 土師器 甕	口 (21.0) 高 (4.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ (残) 1/8	白色粒子極多・砂礫多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床下 No.141
53 土師器 甕	口 19.8 大 24.1 底 6.4 高 33.6	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ底ヘラナデ+ヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴上半丁寧なナデ下半ミガキ 全体的に楕円状に歪む (残) 7/8	砂礫極多・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.18 + 54
54 土師器 甕	口 (18.6/17.7) 大 19.2 高 35.4	(内) 口ヨコナデ胴横方向ハケメ (外) 口ヨコナデ胴縦方向ハケメ 口縁部楕円状に歪む (残) 7/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 7.5YR4/6 褐	床直 No.65
55 土師器 甕	口 (21.0) 高 33.6	(内) 密な横方向のハケメ・一部ヘラナデ (外) 縦方向のハケメ 口縁部調整なし (残) 4/8	砂礫・白色粒子極多 二次被熱 5YR4/8 赤褐	床直 No.113+ 111+ 燃焼面
56 土師器 甕	底 (8.2) 高 (4.0)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕 (残) 1/8	砂粒・白色粒子極多・ 砂礫少 良 7.5YR4/6 褐	床上+10cm No.19+ 覆 土 a+b
57 土師器 甕	底 (9.5) 高 (14.6)	(内) 被熱により剥落 (外) ヘラケズリ 外面に輪積痕残る (残) 3/8	砂礫・砂粒・白色粒子極多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	貯蔵穴 A 内 No.119+123 130+ 貯蔵穴
58 土師器 甕	口 14.4 底 6.2 高 11.6	(内) 口～胴上半ヨコナデ胴下半ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 底部近くに輪積痕残る (残) 5/8	砂粒多・砂礫少・雲母微 良 10YR5/4 にぶい黄褐	覆土 b+ 覆土北
59 土師器 甕	口 26.2/25.6 底 8.4 高 26.8	(内) 口ヨコナデ胴ミガキ (外) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ一部ミガキ 口縁部に輪積痕多く残る (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	貯蔵穴 A 内 No.118
60 石製品 砥石	長 3.9 幅 5.0 厚 1.1 重 27.31	断面長方形で、全ての面を使用。特に実測図表裏面が顕著 に平滑化している。	2.5Y5/2 暗黄灰	覆土 d
61 焼成 粘土塊	長 5.3 幅 3.1 厚 2.5 重 31.79	塊状 表面(実測図左)は草本植物の束が押しつ けられたような痕が残る 側面には貫通孔あり 裏面はヘラナデにより平滑化 No.62 と胎土、特徴が似る	砂粒・赤色融解粒多 良 7.5YR6/6 橙	カマド内 No.124
62 焼成 粘土塊	長 5.0 幅 6.1 厚 2.3 重 33.69	塊状 実測図表面はヘラ状工具による弱いナデ及びキズあ り 裏面はちぎり取った状態で調整なし 草本植物の痕跡 有り No.61 と胎土、特徴が似る	砂粒・赤色融解粒多 良 7.5YR6/6 橙	カマド内 No.124
63 焼成 粘土塊	長 4.6 幅 5.1 厚 3.2 重 45.38	塊状 実測図表面はちぎり取った状態 裏面および右側面は断ち切った状態で平らになっている 細い棒状工具による刺突あり	砂粒・赤色融解粒極多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	床下 c
64 焼成 粘土塊	長 6.7 幅 3.9 厚 3.0 重 46.39	塊状 実測図表面はユビナデにより平滑化 左側面と裏面は接合面からはがれた状態 支脚の破片か?	赤色融解粒極多 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土 d
65 石製品 白玉	最大径 1.1 最大厚 0.5 孔径 0.3	表面は丁寧な研磨により平滑化、裏面に自然面が残る。 側面縦方向の擦痕残る。 表面(実測図左側)から穿孔。	5GY オリーブ灰 粘板岩	カマド掘り方 No.144

貯蔵穴 カマドの両外側には、円形の土坑状の掘り込みが確認された。貯蔵穴Aはカマド精査中に確認された。内部からは土師器甕・甌（第228図57・59）や壺（第225図16）が出土している。覆土は住居覆土とほぼ同じ土層が堆積していた。貯蔵穴Bは掘方調査中に確認された。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土であり、住居床下の土層とよく似ている。内部からは、土師器甕（第226図45）や壺（第225図13）の破片が出土した。

その他の付帯施設 南壁西側にはテラス状の段差があり、棚状施設とも考えられる。しかし、この上面には現代の攪乱が広範囲に入っていたため、覆土の堆積状況が確認できなかった。よって、住居に伴う施設か否かは判断できない。

遺物 住居全体から多く出土しており、今回調査された竪穴住居跡の中では、最も多くの個体が図化できた。特にカマド周辺と張り出しピット周辺に、遺存状態の良い個体が多い。また、第225図18・第226図44・46・47など、離れた点から出土した破片が接合するものが目立つ（第221図遺物出土図参照）。特徴的な遺物としては、この住居のみから出土しているハケメのある土師器長胴甕（第228図54・55）や、白玉（第228図65）がある。

SI-1015（第229～233図・図版二九・五六）

位置 O35グリッドに位置する。

重複関係 住居北東隅がSI-1017竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-1017（旧）→SI-1015（新）である。床面と柱穴の作り替え及び東壁の拡張を伴う建て替えが1回行われており、SI-1015a（新段階）、SI-1015b（旧段階）にわけられる。

SI-1015a（第229図）

規模・形状 東西5.3m、南北5.5mで歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-10°-Wである。

覆土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を多く含む黒褐色土を主体とする。他の住居に比べ、覆土が黒味がかっている。カマドから住居中央の床面上に、焼土粒・炭化物粒を極多量に含む暗褐色土が堆積していた（4層、第229図破線範囲）。

壁・壁溝 確認面から30cmの深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝はカマド部分以外は全周している。北東隅はSI-1017竪穴住居跡の覆土中に掘り込まれていたために図面上では記載できなかつたが、肉眼で周溝が掘り込まれていたことを確認している。

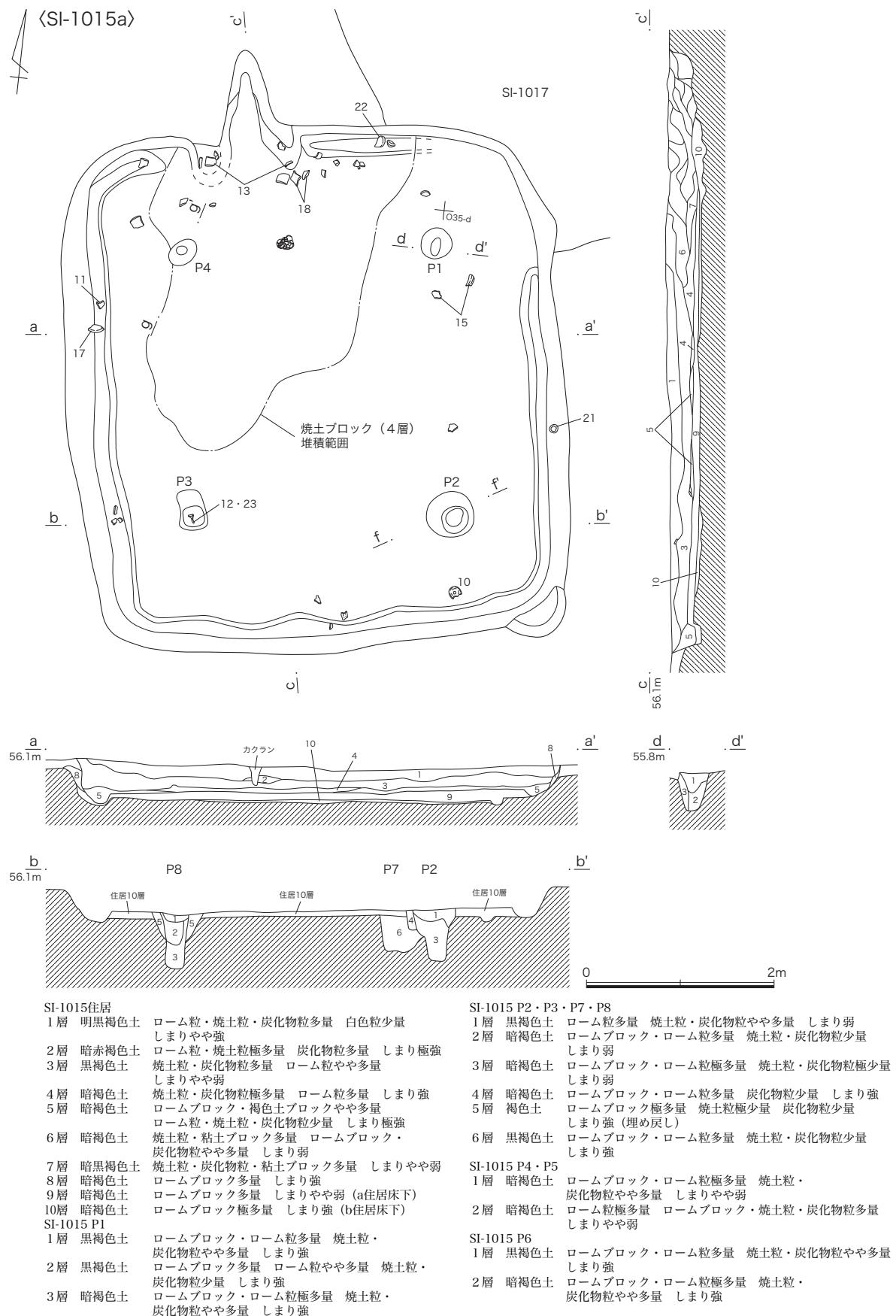
床面・貼床 SI-1015aの床面は、黄褐色土ロームによる貼床が全面に施されている。

柱穴 4本主柱。北側の4基についてはいずれもSI-1015aの床面で確認されているが、位置や覆土の堆積状況から、P1・P4の2本がSI-1015aに伴うものと考えられる。P3は矩形、その他の3本は円状の掘り方を呈する。P2・P3は底面が矩形に近い。

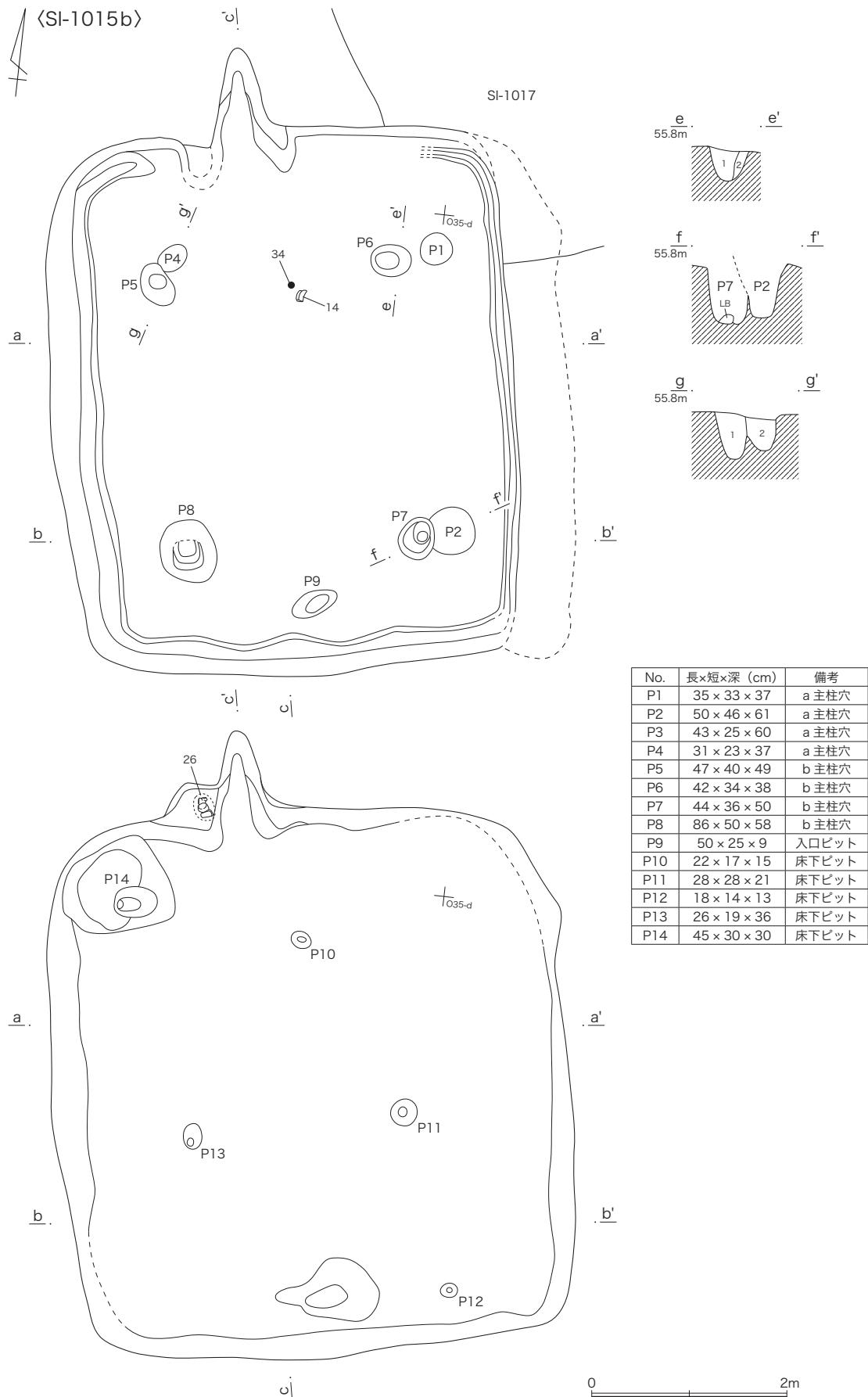
火処 北壁中央東寄りにカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、木根による攪乱を受けしており、残存状況は極めて悪い。両袖は地山を浅い馬の背状に掘り込んだ後に、暗黄灰色粘土を上に積み上げて構築している。内部の底面には粘土が多量に堆積しており、その上に炭・灰・焼土が堆積していた。奥壁は細く、内部には粘土が多量に堆積していた（13・14層）。天井が崩落したものと考えられる。遺物は両袖に張り付くようにして出土しているが、攪乱が著しいため、原位置を保っているかどうかは不明である。

遺物 カマド周辺でまとまって出土しているが、床面に伴うものはほとんどない。

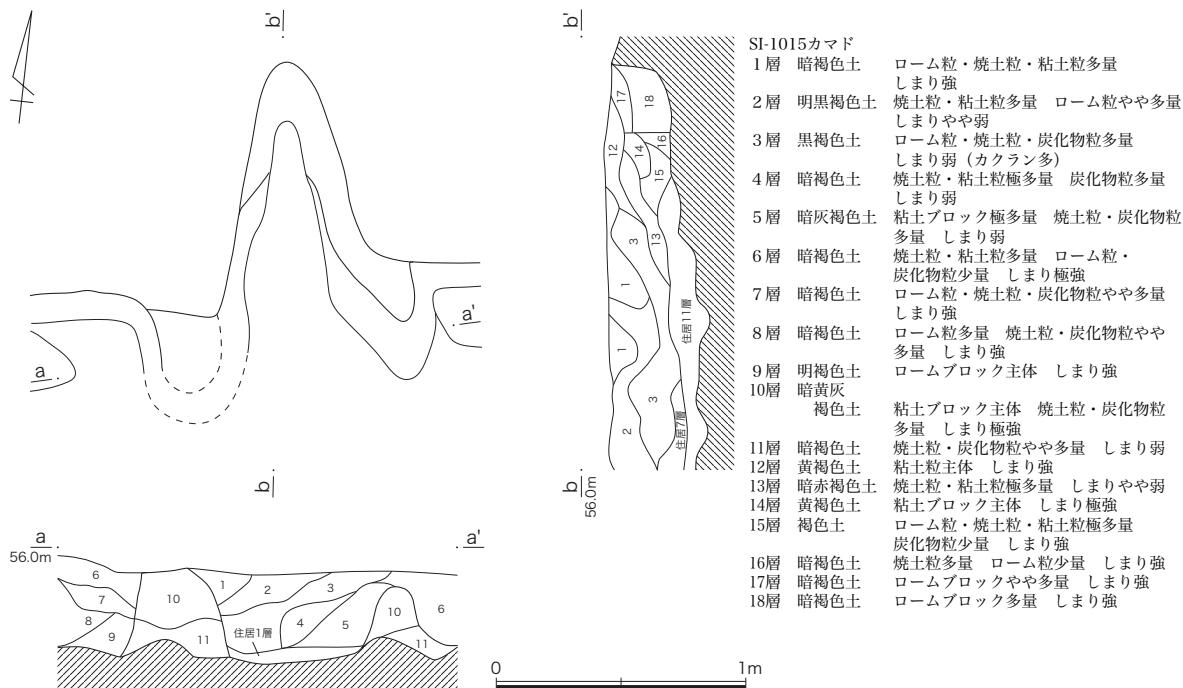
第3章 発見された遺構と遺物



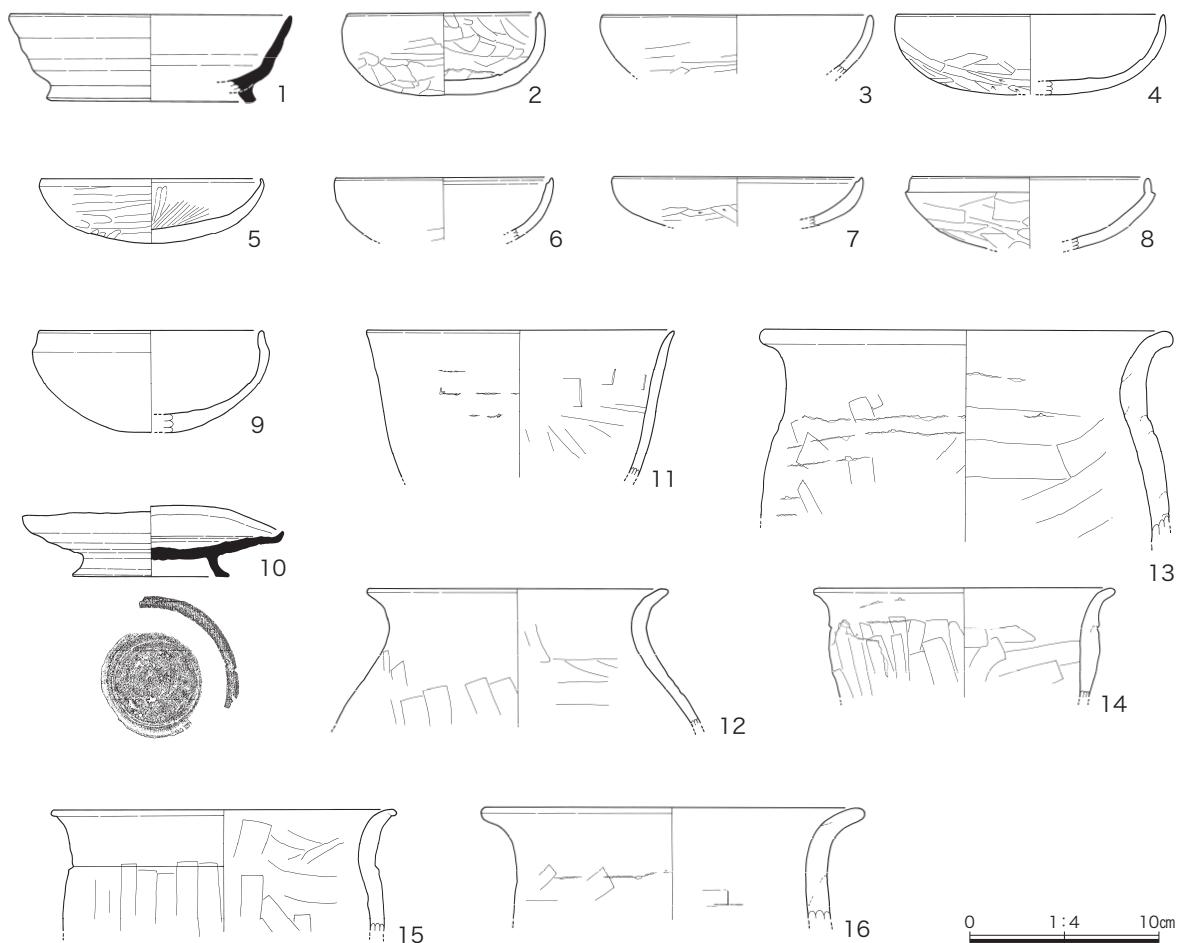
第229図 SI-1015 穫穴住居跡 (1)



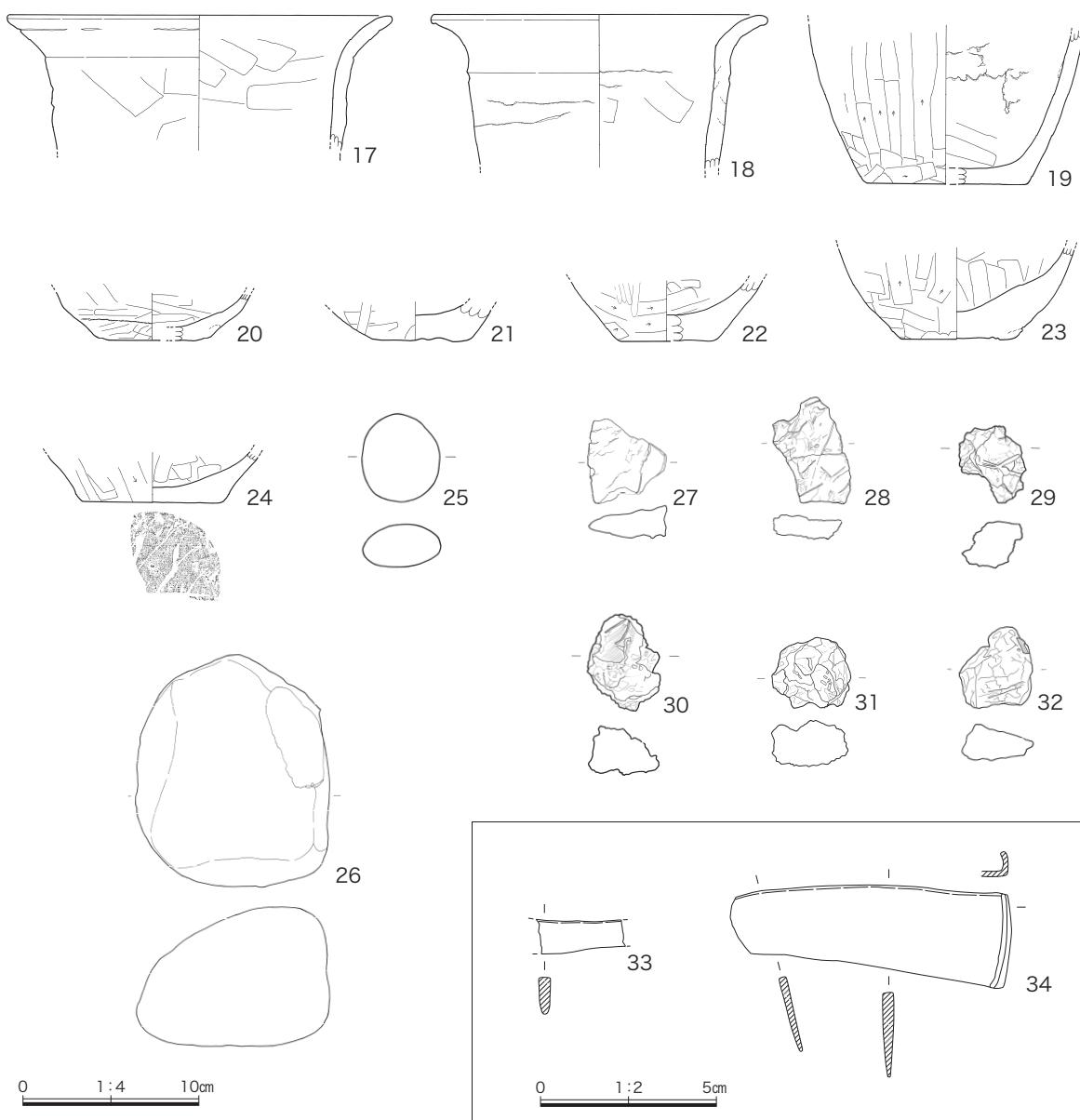
第230図 SI-1015 穫穴住居跡 (2)



第231図 SI-1015 壁穴住居跡（3）



第232図 SI-1015出土遺物（1）



第233図 SI-1015出土遺物(2)

第85表 SI-1015遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (15.0) 高 4.6	内外面ともロクロナデ 高台付 (残) 2/8 三毳産?	白色粒子極多・砂礫少 やや不良 2.5Y7/3 浅黄	覆土 4層
2 土師器 壺	口 (10.2) 高 4.3	(内) ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 底部内面に粘土を削り残した部分あり (残) 2/8	砂粒・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 a + b
3 土師器 壺	口 (14.2) 高 (3.1)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	覆土 a

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
4 土師器 壺	口 (14.0) 高 (4.2)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 4/8	砂粒・白色粒子多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	覆土 a
5 土師器 壺	口 (11.6) 高 3.4	(内) 口ヨコナデ体ミガキ (外) 口ヨコナデ体弱いヘラケズリ 全体的に赤化 内面タール状の付着物 (残) 3/8	微細白色粒子多・雲母微 良 2.5YR4/8 赤褐	カマド＋ ベルト
6 土師器 壺	口 (11.4) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半弱いナデ下半ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	P4
7 土師器 壺	口 (13.2) 高 (2.6)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	床下
8 土師器 壺	口 (12.4) 高 (3.8)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	白色粒子やや多 良 10YR4/4 褐	P2
9 土師器 壺	口 (11.8) 高 (5.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体摩滅により不明 口縁部に一部漆付着 (残) 1/8	白色粒子極多 二次被熱 10YR6/4 にぶい黄褐	覆土 a
10 須恵器 盤	口 13.8 高 3.6	内外面ともロクロナデ 底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ 高台付 (残) 6/8 益子産	白色粒子多・砂礫少 良 N4/ 灰	床上 +5cm No.23+ 覆土 b
11 土師器 鉢	口 (16.2) 高 (7.7)	(内) 口～胴上半ヨコナデ下半弱いナデ (外) 口ヨコナデ胴弱いナデ 外面に輪積痕残る 内面一部漆付着 (残) 1/8	微細白色粒子多・砂礫少 良 10YR6/2 灰黄褐	壁溝内 No.14
12 土師器 甕	口 (15.8) 高 (7.3)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面剥落 (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	P3 内 No.19
13 土師器 甕	口 (21.6) 高 (11.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 外面に輪積痕残る 全体的に摩滅 (残) 1/8	砂礫多・白色粒子やや多 二次被熱 7.5YR6/4 にぶい橙	カマド左袖 No.28 + 30
14 土師器 甕	口 (15.8) 高 (5.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面に輪積痕残る (残) 1/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 7.5YR4/2 灰褐	床下 No.32
15 土師器 甕	口 (18.2) 高 (6.4)	(内) 口ヨコナデ胴弱いヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 2/8	砂礫極多 二次被熱 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +5cm No.12+13
16 土師器 甕	口 (20.6) 高 (5.9)	(内) 口ヨコナデ胴弱いヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴弱いナデ 内外面に輪積痕残る (残) 1/8	砂礫多・白色粒子少・ 雲母微 良 7.5YR6/6 橙	カマド
17 土師器 甕	口 (21.8) 高 (7.6)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部外面に輪積痕残る (残) 1/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母少 良 7.5YR4/3 褐	壁溝内 No.15+ 覆土 d
18 土師器 甕	口 (19.0) 高 (8.7)	(内) 摩滅により不明 (外) 口ヨコナデ胴弱いナデ 全体的に摩滅 内外面に輪積痕 (残) 1/8	砂礫極多・白色粒子・ 雲母多 良 7.5YR6/6 橙	床上 +10cm No.7
19 土師器 甕	底 (9.2) 高 (9.0)	(内) 丁寧なナデ (外) ヘラケズリ (残) 1/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 a
20 土師器 甕	底 (4.8) 高 (2.6)	(内) 弱いヘラナデ (外) 弱いナデ＋ヘラナデ 外面に輪積痕 底部木葉痕 (残) 1/8	微細白色粒子多 良 10YR3/1 黒褐	覆土 a
21 土師器 甕	底 (5.0) 高 (2.2)	(内) 摩滅により不明 (外) ヘラケズリ底部粗いナデ (残) 底 8/8	砂礫・砂粒・雲母多・ 白色粒子少 良 7.5YR6/6 橙	床上 +10cm No.17

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
22 土師器 甕	底 (5.4) 高 (3.4)	(内) ヘラナデ? (外) ヘラケズリ、一部にミガキ 底部木葉痕 (残) 1/8	白色粒子多・砂礫・雲母少 良 7.5YR5/6 明褐	床直 No.19
23 土師器 甕	底 (6.6) 高 (5.2)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 底部外面に粘土貼り付け (残) 6/8	砂礫・砂粒極多・雲母や や多 良 7.5YR6/6 橙	床上 +15cm No.1+ 覆 土 d
24 土師器 甕	底 (8.0) 高 (2.9)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ 底部木葉痕 (残) 2/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母少 良 7.5YR5/6 明褐	ベルト
25 礫	長 4.1 幅 3.6 厚 2.0 重 41.36	白い玉石状で、全体的に磨って丸みを持たせている。 土器製作用の調整工具か?	5Y8/1 灰白 石英	覆土 b
26 礫	長 13.2 幅 10.9 厚 10.8 重 1690.0	頭大の自然礫 使用痕特になし 実測図左上に欠け 全体的に弱く赤化	7.5YR5/4 にぶい褐 礫岩	カマド左袖 No.25
27 土製品 不明	長 5.5 幅 5.9 厚 2.2 重 44.97	表面に指頭圧痕 ヒビ多い 円盤状の土製品か?	白色粒子多・赤色融解粒 やや多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 d
28 焼成 粘土塊	長 8.3 幅 5.4 厚 1.8 重 55.62	扁平 実測図表面は調整なし、草本植物の痕跡有り 裏面はヘラケズリ、ヘラナデにより平滑化	白色粒子・赤色融解粒や や多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土一括
29 焼成 粘土塊	長 4.3 幅 3.6 厚 2.5 重 20.29	塊状 実測図表面にヘラ状工具によるキズあり 裏面はちぎり取った状態	白色粒子・赤色融解粒や や多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土 d
30 焼成 粘土塊	長 4.9 幅 3.5 厚 2.4 重 22.78	塊状 実測図表面一部にヘラナデ 側面及び裏面はちぎり取った状態	赤色融解粒・砂粒少 良 10YR6/6 明黄褐	覆土 d
31 焼成 粘土塊	長 4.6 幅 5.1 厚 3.6 重 53.49	塊状 ちぎり取った後に軽く握った状態 裏面のヒビにタール状の付着物あり 胎土中に雲母片を多く含む	雲母・赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	覆土 c
32 焼成 粘土塊	長 4.9 幅 4.1 厚 1.9 重 23.16	扁平 実測図表面はユビナデにより平滑化 表面及び側面に細い棒状工具による刺突あり 左側面及び裏面はちぎり取った後に軽く磨っている	白色粒子・赤色融解粒多 二次被熱 5YR5/8 明赤褐	ベルト
33 鉄製品 刀子	長 2.3 幅 0.5 厚 0.4 重 1.74	刀子の茎部破片と考えられるが、錆ぶくれにより原型をとどめていない。断面は上側 が平坦で、下側は尖っている。		覆土 a
34 鉄製品 鎌	長 7.8 幅 2.4 厚 0.3 重 15.45	基部を L 字形に曲げる鎌。棟側、刃側ともゆるくカーブしている。表面、裏面とも錆 が瘤状に付着している。		床下 No.25

SI-1015b (第230図)

規模・形状 東西 4.7 m、南北 5.5 m で南北に長い方形を呈する。東壁は SI-1015b の壁から 50cm ほど内側に位置している。主軸方向は、N - 15° - W である。

覆土 SI-1015a の床下覆土と共に共通である。ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。

壁・壁溝 東壁のみ拡張しており、その他の壁は SI-1015a と共に共通である。壁溝も東壁以外は SI-1015a と共に共通だが、北壁東側は明瞭ではなかった。

床面・貼床 掘方に直にロームブロックを貼り付けて床面を構築している。

掘方 北西隅と入り口ピット付近が大きく窪んでいる。床下から小ピットが 4 基確認された (P10 ~ P13)。

柱穴 南西隅の P8 以外は位置を違えて作り替えている。北側の柱穴は P5・P6 の 2 本が SI-1015b に伴う

ものと考えられる。南側の柱穴については、P7・P8の上に貼床が施されていたことから、この2基がSI-1015bに伴うものと考えられる。P7・P8はいずれも底面が矩形に掘られている。

火処 SI-1015aと共に通する。燃焼面の作り替えなども確認できなかった。

入り口ピット SI-1015bに伴うピットが1基確認された(P9)。東西に長い楕円形を呈する。

遺物 SI-1015bに伴う遺物は、第232図7の土師器壺、P5とP6の間の床面上から出土した土師器小型甕の破片(第232図14)と鉄製鎌(第233図34)である。

SI-1016(第234・235図・図版二九)

位置 O34グリッドに位置する。

重複関係 南東部分がSI-1017堅穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-1017(旧)→SI-1016(新)である。

規模・形状 攪乱を多く受けているため、規模は推定で東西3.5m、南北3.4mの方形を呈する。

覆土 ロームブロックやローム粒・焼土粒・炭化物粒を極多量に含む明黒褐色土を主体とする。床面上には炭化物を多く含む焼土ブロック(2層)がブロック状に堆積していた。

壁・壁溝 確認面から20cmの深さで、ほぼ直に立ち上がる。東側の壁はSI-1017堅穴住居跡および現代の攪乱によって壊されている。

床面・貼床 黄褐色ローム土による貼床を施している。また、カマド右袖脇の床面が焼けて焼土化している。

掘方 攪乱を受けている南東を除く住居各隅が浅く窪む。北西隅と南西隅の凹みには、ピット状の掘り込み(P2・P3)が付随している。また、東壁と西壁の北側に、溝状の掘り込みが2ヶ所確認された。床面下にも焼土ブロックが確認されている(第234図右網かけ部分)。

入り口ピット 南壁際中央寄りに1基確認された(P1)。円形の掘り方を呈し、極浅い小ピットである。

火処 北壁西寄りにカマドが構築されており、左袖と奥壁、天井部分が残存している。右袖は残っていない。袖は床面に粘土を積み上げて構築している。奥壁部分の天井がブリッジ状に残っており、下面が良く焼けている。カマド内部も良く焼けており、灰、炭、焼土が層状に堆積していた(7層)。カマド焚口の手前には、カマド内から掻き出したと考えられる炭、焼土が貼床状に硬化していた(10層)。カマド中央の掛け口があったと考えられる場所の下には粘土塊がおかれており、甕を支えるために利用されていたものと考えられる。煙道は短く、急な角度で立ち上がる。掘方は、右側のみ凸字状を呈する。また、左袖は地山が馬の背状に掘り残されていた。

遺物 カマド内から鉄製の鎌が出土している(第235図8)。遺物の出土量は少なく、床面に伴うものはない。

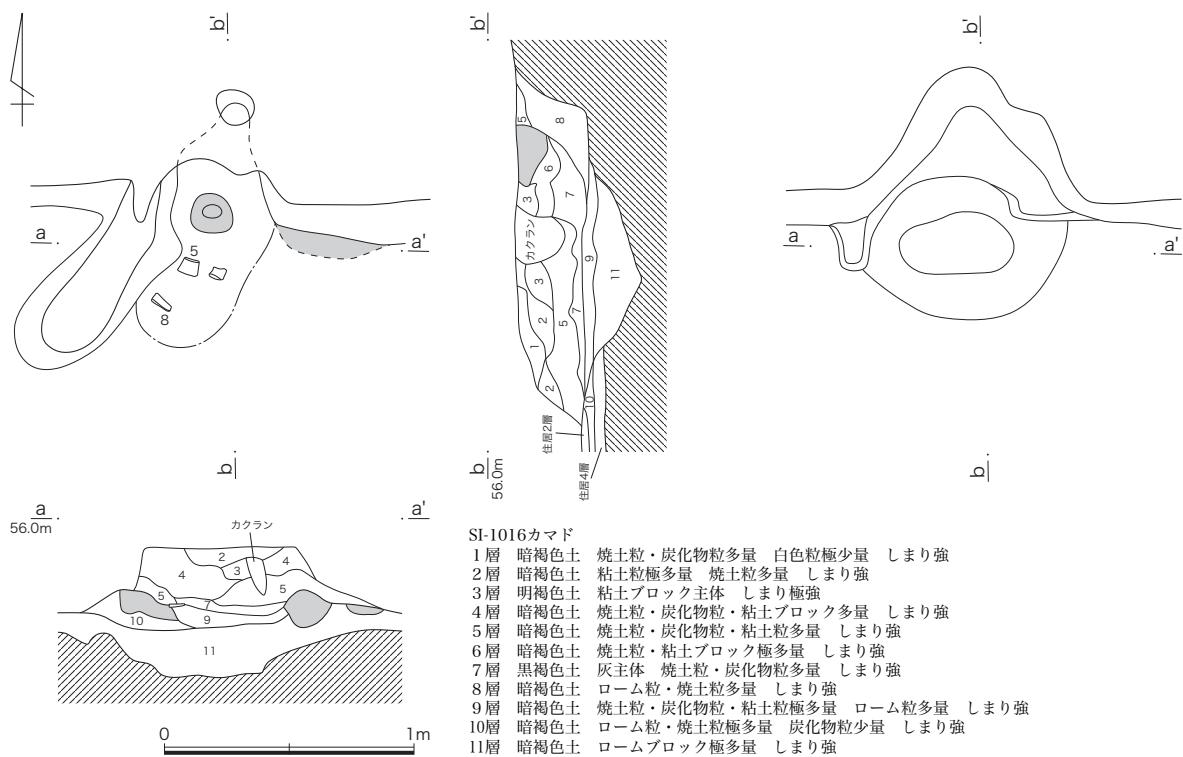
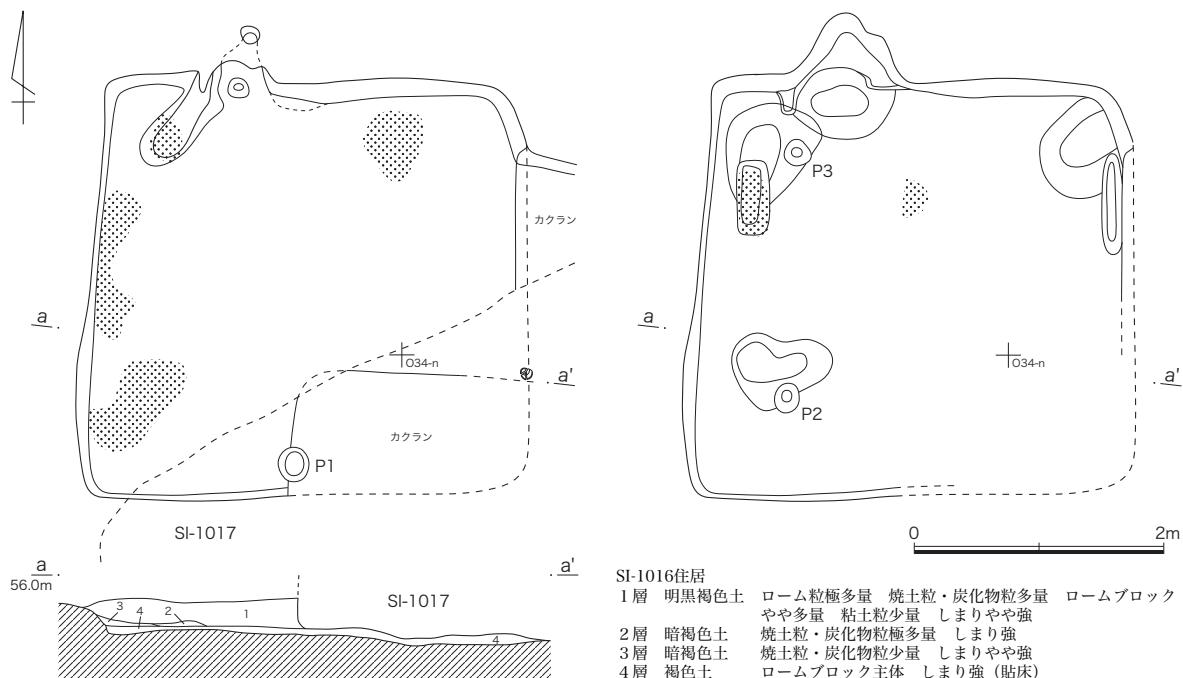
SI-1017(第236・237図・図版二九・五六)

位置 O34グリッドに位置する。

重複関係 住居北側の一部がSI-1016堅穴住居跡、南西隅がSI-1015堅穴住居跡と重複する。新旧関係は、SI-1017(旧)→SI-1015・SI-1016(新)である。

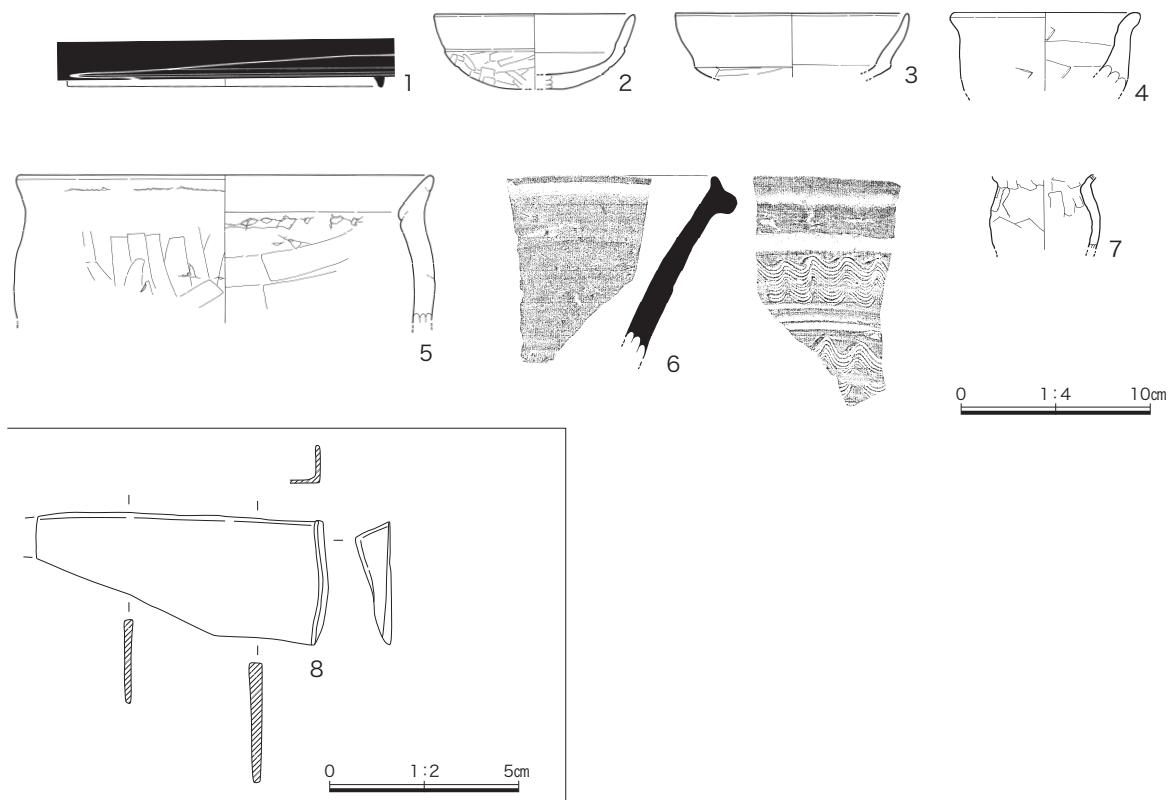
規模・形状 東壁が調査区外となるため、東西の長さは不明、南北は6.3mである。壁のラインの方向はN-30°-Wである。

覆土 攪乱が多く入っており、覆土の堆積状況は不明な点が多い。主体となる土層は焼土粒、炭化物粒を多く含む暗褐色土(2層)だが、住居の範囲外まで堆積していることから、1~3層は古い攪乱層の可能性も高い。SI-1017堅穴住居跡に確実に伴う土層は4~7層である。



No.	長×短×深(cm)	備考
P1	28×25×23	入口ピット
P2	25×18×23	床下ピット
P3	22×20×23	床下ピット

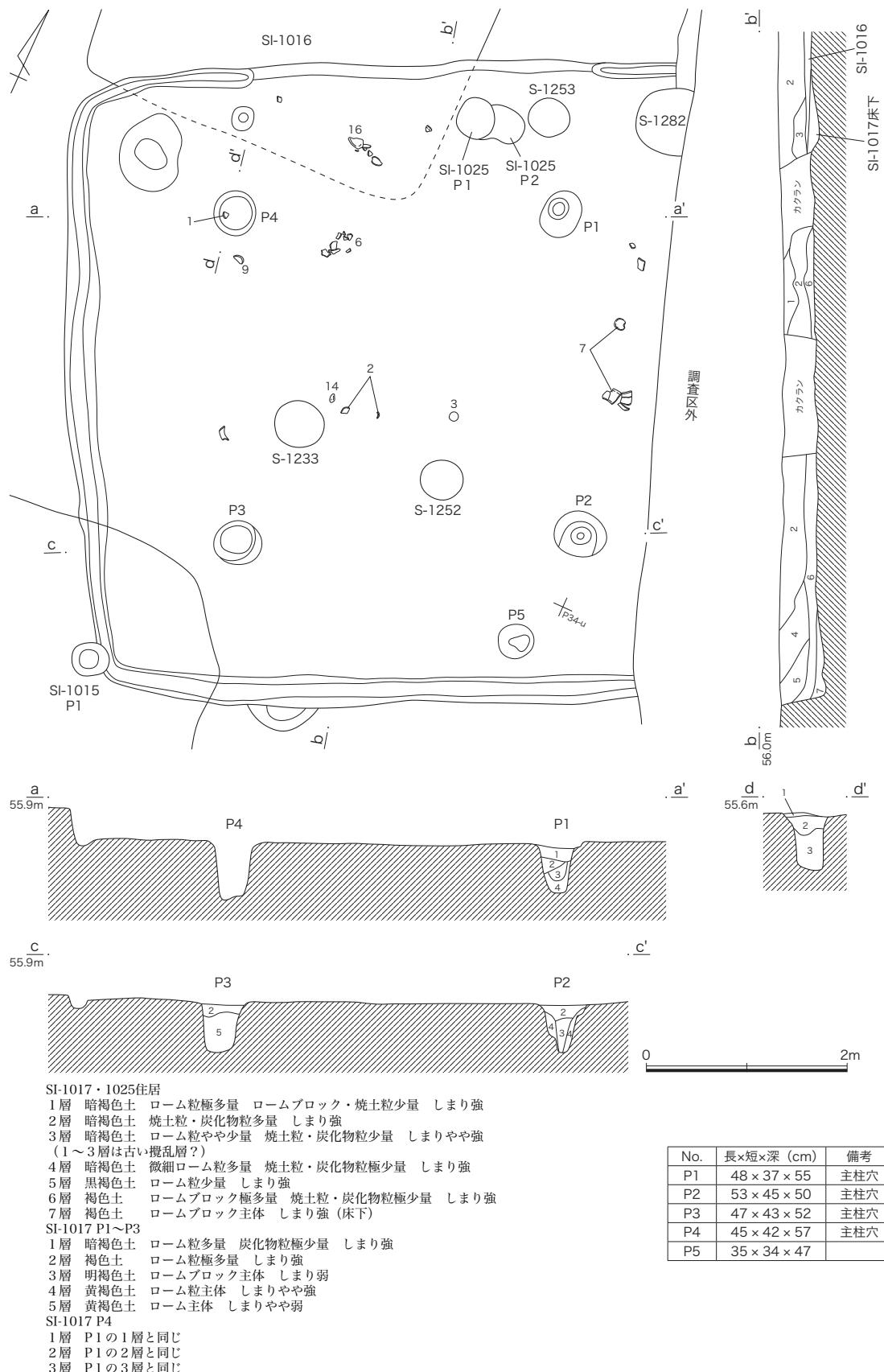
第234図 SI-1016 穫穴住居跡



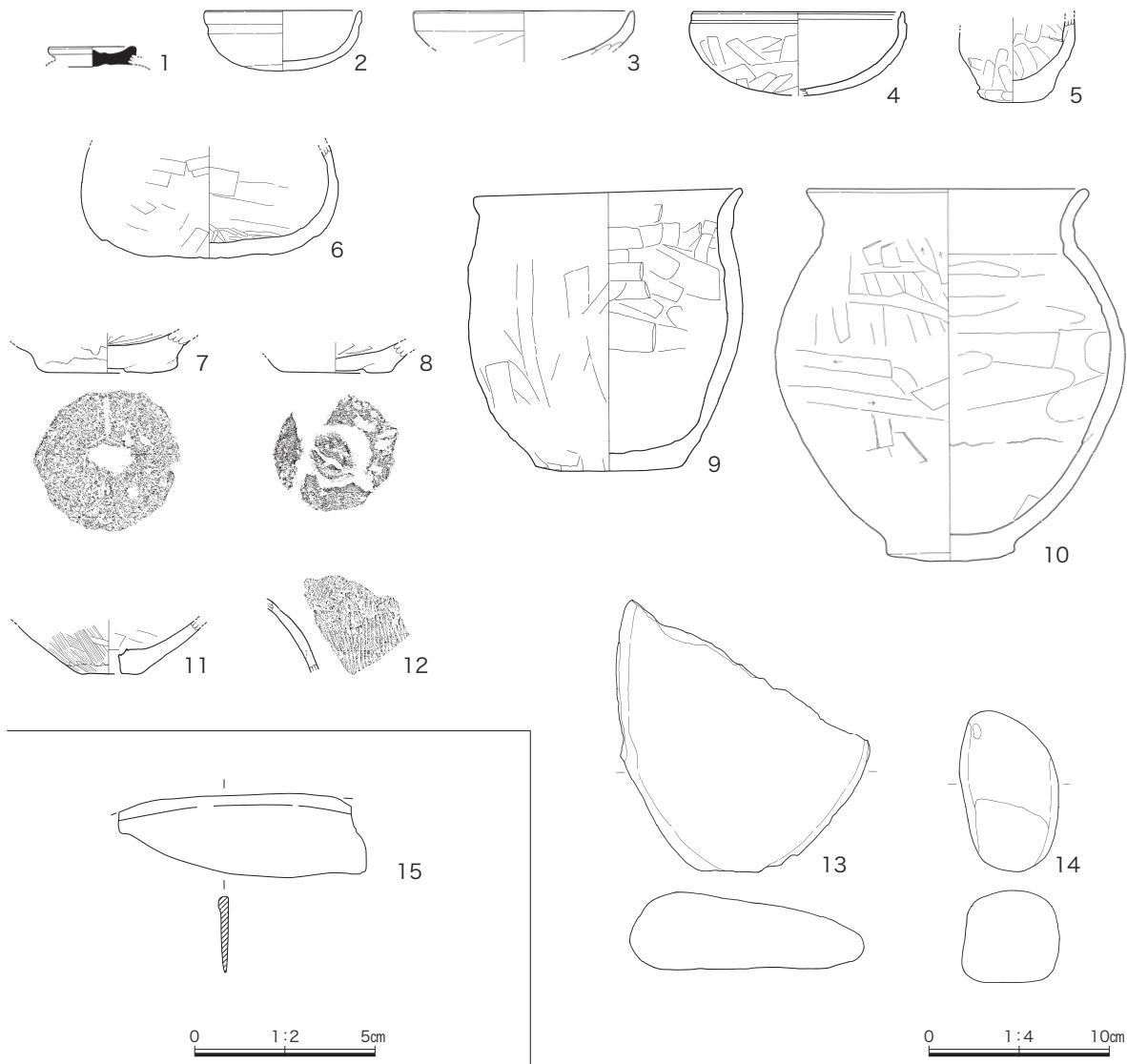
第235図 SI-1016出土遺物

第86表 SI-1016 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径(16.6) 大(17.4) 高(2.4)	内外面ともロクロナデ→外面全体回転ヘラケズリ (残) 1/8 益子産?	白色粒子多・砂礫や多 良 N5/ 灰	覆土 d
2 土師器 壺	口(10.6) 高(4.0)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面へ口縁部外面漆仕上げ(残) 2/8	白色粒子多・砂礫少 良 10YR3/2 黒褐	覆土 a
3 土師器 壺	口(12.2) 高(3.4)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ? 口縁部外面にタール状の付着物(残) 1/8	砂粒・白色粒子や や多・雲母微 良 10YR5/2 灰黄褐	覆土
4 土師器 壺	口(10.0) 高(4.1)	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体粗いナデ (残) 1/8	微細白色粒子多 良 7.5YR5/4 にぶい褐	トレンチ
5 土師器 甕	口(22.0) 高(7.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内外面とも輪積痕残る(残) 1/8	砂礫・白色粒子多・雲母少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	カマド内 No.2
6 須恵器 甕	破片	内外面ともロクロナデ 外面11本1組の波状櫛描文 産地不明	白色粒子多 良 2.5Y5/1 黄灰	覆土 d
7 土師器 ミケア 土器	高3.9	(内) 粗いユビナデ (外) 上半粗いユビナデ下半ヘラケズリ 甕形か?	砂粒・白色粒子少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 d + SI-1017 覆土
8 鉄製品 鎌	長7.5 幅3.2 厚0.3 重16.42	基部をL字形に曲げる鎌。刃の先端は欠損している。棟側はまっすぐのびており、刃側 は刃先に向かってカーブしている。基部はやや膨らんでいる。断面の上端は平坦である。 装着部の折り曲げ幅は棟側1mm、刃側5mm。		カマド内 No.1



第236図 SI-1017 穫穴住居跡



第237図 SI-1017出土遺物

第87表 SI-1017遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	撮部径 4.8	ボタン状の撮み 産地不明	白色粒子・黒色融解粒少 良 N6/ 灰	覆土 c + 床直
2 土師器 坏	口 8.6 高 3.3	内外面ともロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ (残) 8/8	砂粒・白色粒子やや多・ 雲母微 不良 10YR8/1 灰白	床上 +20cm No.9 SI-1025 ?
3 土師器 坏	口 (12.2) 高 (2.8)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 一部煤状の付着物 (残) 1/8	微細白色粒子微 やや良 7.5YR8/4 浅黄橙	覆土 c
4 土師器 坏	口 11.6 高 4.6	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半弱いヘラナデ下半ヘ ラケズリ 口縁部内面に沈線 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 4/8	白色粒子多・砂礫少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 +20cm No.5+8
5 土師器 ミキュア 土器?	底 3.4/3.0 高 (4.6)	(内) ユビナデ (外) 弱いユビナデ、底部近くヘラケズリ 内面輪積痕 (残) 4/8	白色粒子やや多 良 10YR5/1 褐灰	床上 +5cm No.1

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
6 土師器 甕？	高 (6.2)	(内) 脇上半弱いヘラナデ底難なミガキ (外) 口ヨコナデ？体粗いヘラナデ 外面煤状の付着物 (残) 2/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土 No.4+ SI-1016 覆土 d
7 土師器 甕	底 7.6 高 (2.2)	(内) ヘラの当たりが放射状に残る (外) 弱いナデ 底部ドーナツ状の粘土貼り付け (残) 1/8	白色粒子・砂粒多・ 砂礫やや多 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +25cm No.2
8 土師器 甕	底 6.2 高 (1.7)	(内) ヘラナデつけ (外) 不明 内面に多量の焦げ付着 底部ドーナツ 状の粘土貼り付け (残) 1/8	白色粒子極多 やや良 10YR5/2 灰黄褐	床上 +5cm No.13
9 土師器 甕	口 14.8 底 8.0 高 15.6	(内) 口ヨコナデ胴強いヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ？ 被熱により著しく赤化・あばた状の剥離 (残) 6/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.10+11 SI-1025 ?
10 土師器 甕	口 (15.6) 底 7.0 高 20.6	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴上半ヘラナデ下半ヘラケズリ 底部丸みをおびる 外面に多量の煤状の付着物 (残) 6/8	砂粒・白色粒子多・砂礫少 良 5YR3/1 黒褐	覆土 No.3 +4+SI-1016 覆土 b+d
11 土師器 甕	底 (3.6) 高 (2.9) 孔径 (1.2)	(内) 弱いナデ (外) ハケメ (残) 1/8	白色粒子少 良 5Y5/6 明赤褐	覆土 b
12 土師器 甕	破片	(内) 弱いナデ (外) ハケメ	砂粒多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	覆土 b+ トレンチ
13 礫	長 15.1 幅 13.9 厚 4.7 重 1130.0	盤状 裏面が磨面 表面弱い赤化	7.5YR6/2 灰褐 安山岩？	床上 +15cm No.3
14 礫	長 8.9 幅 5.5 厚 5.1 重 346.8	断面隅丸方形状 実測図裏面は平坦 表面わずかに煤付着	5Y5/1 灰	床上 +20cm No.7
15 鉄製品 小刀？	長 6.7 幅 2.4 厚 0.3 重 9.23	鎌の刃先の破片と考えられる。棟側は鋸ぶくれにより丸みをおびる。層状の剥離が著 しい。刃側欠損。		東西ベルト 東

壁 確認面から 25cm の深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は北壁中央を除き全周すると考えられる。

床面・貼床 地山のローム層硬化面（基本土層VII層）まで掘り込んだ後、掘り方の凹凸を埋めるように黄褐色土ロームによる貼床を薄く施している。SI-07 や SI-44 竪穴住居跡などの古墳時代前期の竪穴住居跡の床面構築方法とよく似ている。

柱穴 4 本主柱。いずれも円形の掘り方を呈し、覆土は褐色土主体である。特に下層は、ローム粒やロームブロックを主体とする土層が堆積していた。P1 と P3 は、掘方が矩形を呈する。

火処 当初、北側調査区壁際で確認されたカマドの痕跡が住居に伴うと考えていたが、別の住居 (SI-1025 竪穴住居跡) に伴うカマドであることが判明した。北壁中央に壁溝が作られていないことから、カマドが SI-1025 竪穴住居跡及び攪乱によって壊された可能性も考えられたが、床面にカマドの痕跡が残っていないこと、壁に煙道を掘り込んだ跡が確認できることから、調査区範囲にはカマドが構築されていないものと考えた。東壁が調査区外であるため、東カマドがある可能性も否定できないが、床面構築の方法が SI-07、SI-44 竪穴住居跡に似ている点や、床面出土遺物の時期などから、古墳時代前期の住居であると考えられる。当該時期に炉が構築されることの多い住居中央から北壁間にかけての床面も精査したが、この部分では床面直上まで攪乱が及んでいたこともあり、炉の痕跡は認められなかった。

遺物 攪乱層中からは多く出土しているが、確実に住居に伴う遺物は第 237 図 7・8 の土師器甕破片のみで、極少ない。重複する SI-1016・1025 の遺物が流入しているとも考えられ、出土遺物の時期も一定しない。

SI-1018 (第238図・図版二九・三〇・五六)

位置 O33グリッドに位置する。住居東壁が調査区外となる。

規模・形状 東壁が調査区外となるため、東西の長さは不明である。南北は3.9mで、主軸方向は真北である。

覆土 焼土粒・炭化物粒を多量に含む暗褐色土を主体とする。壁際には内容物をあまり含まない黒褐色土が三角状に堆積している(2層)。

壁 確認面から30cmの深さで、壁はなだらかにたちあがる。壁溝はない。

床面・貼床 貼床は顕著ではなく、部分的に黄褐色ロームを使用している。

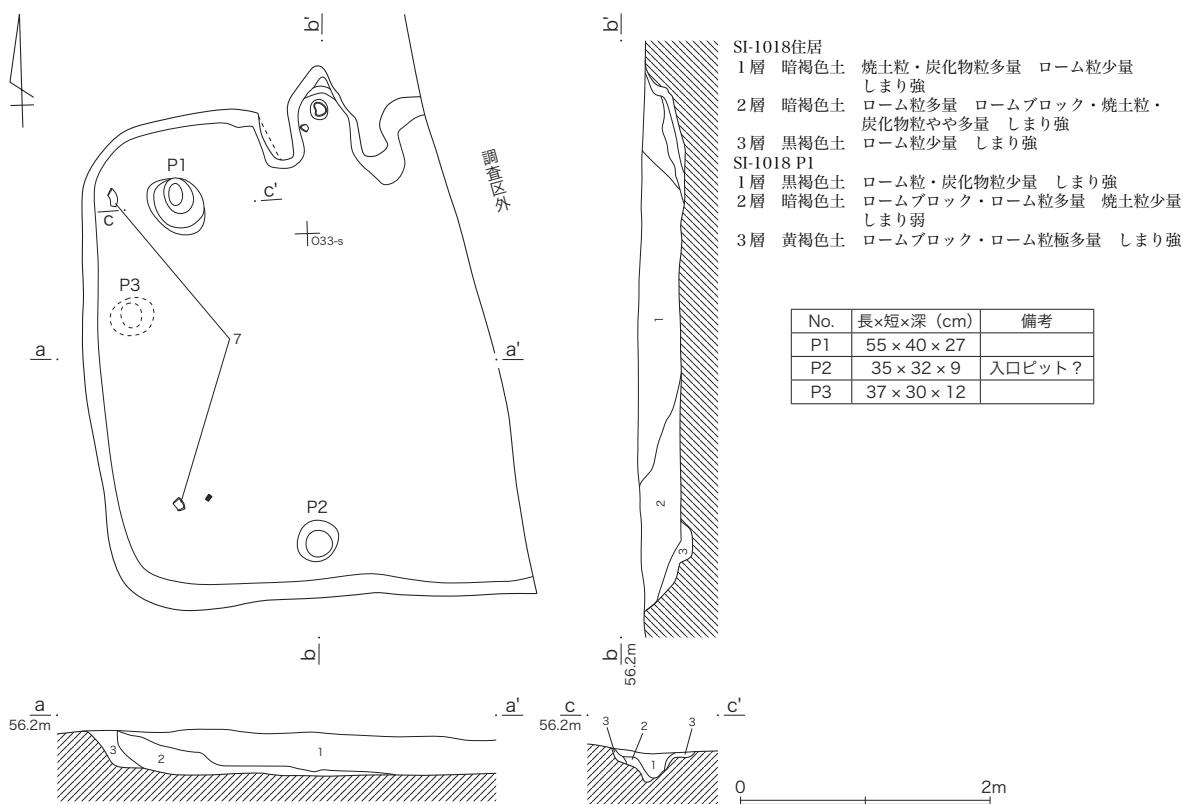
掘方 住居西側中央壁寄りの床下から、小ピットが1基発見された(P3)。

入り口ピット 南壁中央に1基確認された(P2)。円形の掘り方を呈する極浅い小ピットである。

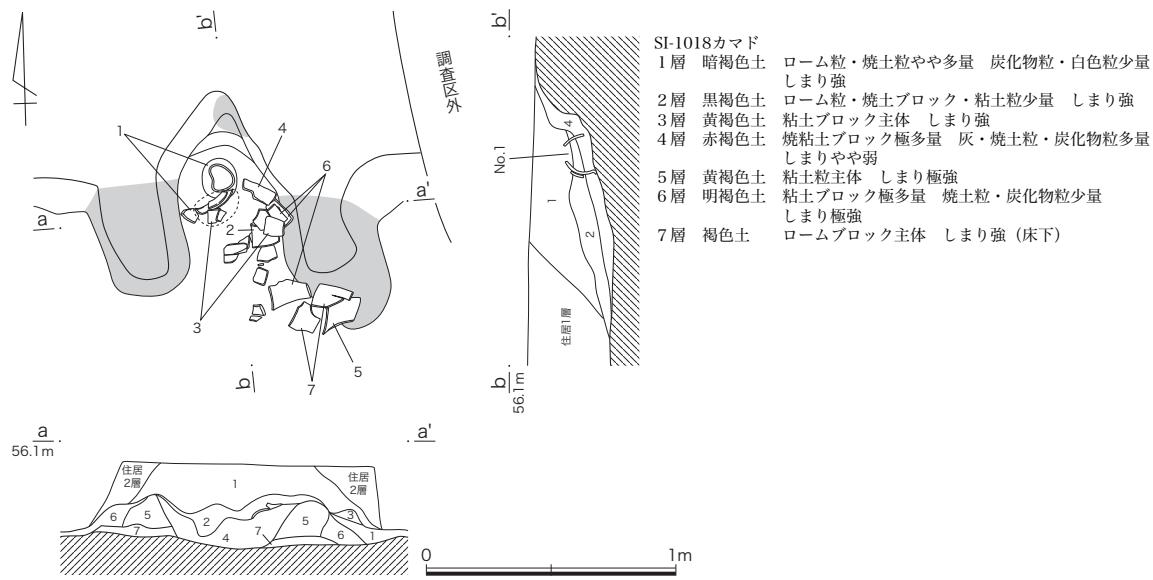
火処 北壁中央にカマドを構築している。両袖と奥壁が残存していた。袖は黄褐色粘土を用いて構築しており、袖内側は良く焼けている。カマド内には焼土ブロックが大量に堆積しており(2層)、その下から土師器甕の破片がまとめて出土した(第240図2~7)。破片の下には、炭、灰、焼土が多く残っていた(4層)。カマド中央には土師器甕が逆位に据えられていた(第240図1)が、支脚の代わりとして使用されていたものと考えられる。煙道は短く段状に掘り込まれており、直角に近い角度で立ち上がる。

貯蔵穴 住居北西隅に土坑がある(P1)が、不整形で浅いことから貯蔵穴とは考えにくい。住居東側が調査区外となるため、貯蔵穴の有無については不明である。

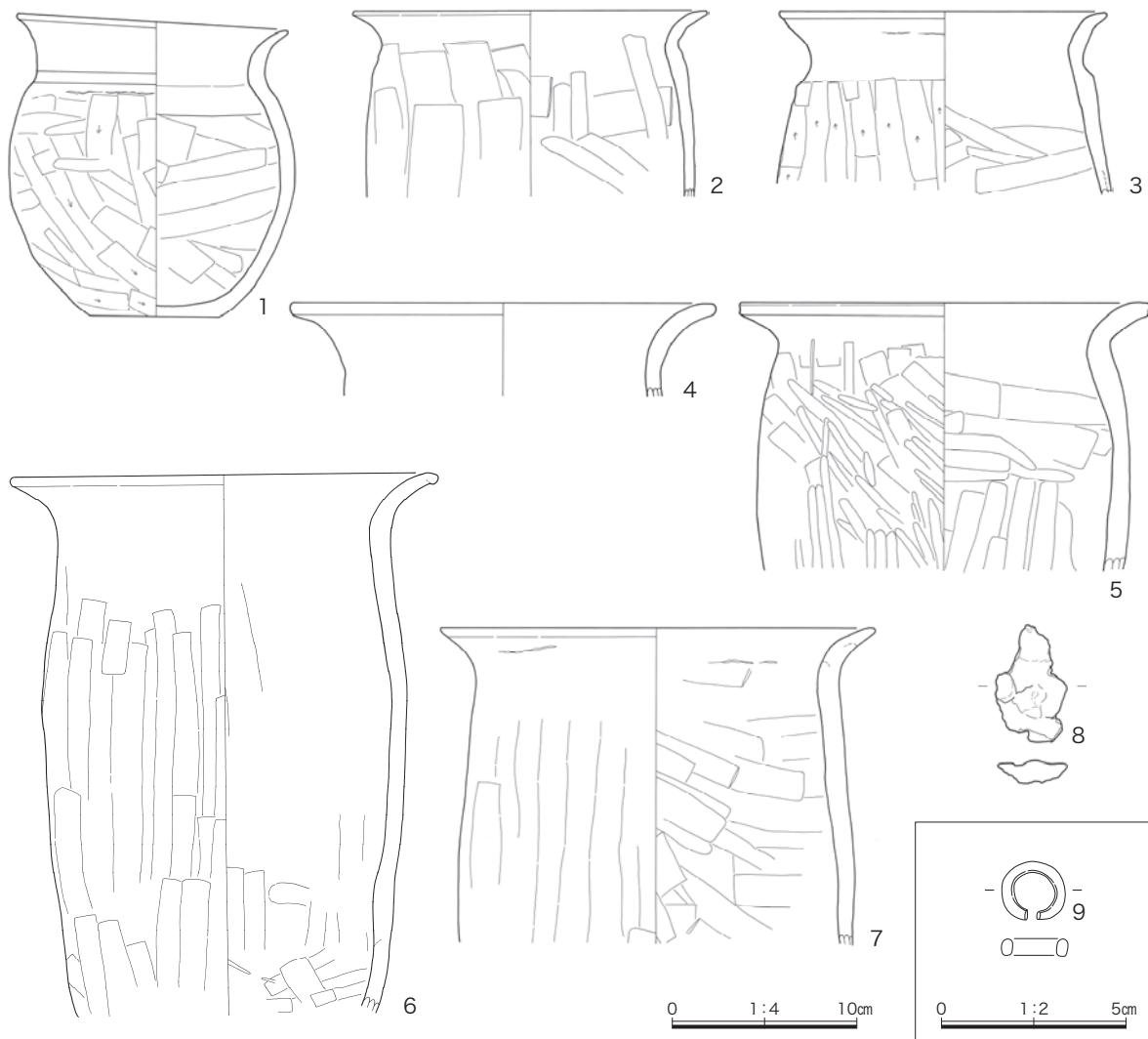
遺物 カマド内を中心に多く出土しているが、全体の出土量は少ない。カマド内から出土した土師器甕(第239図7)は、覆土中から出土した破片とも接合している。覆土中からは耳環が1点出土している(第240図9)。



第238図 SI-1018 積穴住居跡(1)



第239図 SI-1018 穫穴住居跡 (2)



第240図 SI-1018 出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第88表 SI-1018 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 14.4 大 15.6 高 16.0	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胴下半被熱により摩滅（残）7/8	砂礫極多・白色粒子多・ 雲母少 二次被熱 7.5YR4/6 褐	カマド内 No.21 + 22
2 土師器 甕	口 19.2 高 (10.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ+ユビナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内面煤状の付着物（残）1/8	砂礫極多・白色粒子やや多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	カマド内 No.4
3 土師器 甕	口 17.4 高 (9.2)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 楕円形に歪む（長径側欠損） 口縁部輪積痕残る（残）5/8	砂礫少 良 10YR5/3 にぶい黄褐	カマド内 No.1+ 3+20
4 土師器 甕	口 (23.0) 高 (5.0)	内外面ヨコナデ (残) 2/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 二次被熱 7.5YR4/3 褐	カマド内 No.1+18 + 覆土 c
5 土師器 甕	口 (22.1) 高 (14.4)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ+ミガキ 内面に煤状の付着物（残）1/8	白色粒子多・砂礫少・ 雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	カマド 右袖 No.13
6 土師器 甕	口 (21.6) 高 (28.2)	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ底部近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴上 1/4 調整なし下 3/4 ヘラケズリ 底部近くの外面に粘土付着（残）1/8	砂粒・白色粒子多・砂礫・ 雲母やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド内 No.6+9 +17+20
7 土師器 甕	口 (21.8) 高 (17.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内外面に輪積痕 全体的に被熱（残）3/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	カマド内 No.11+12 +14+15+ 覆土 c
8 焼成 粘土塊	長 6.3 幅 3.8 厚 1.7 重 18.76	扁平 実測図表面はユビナデにより平滑化 裏面はちぎり取った後まばらにヘラ状工具によるキズがつく	白色粒子・赤色融解粒多 二次被熱 5YR6/6 橙	覆土 a
9 銅製品 耳環	縦径 1.6 横径 1.7 断横径 0.2 断縦径 0.4	鉄地金銅張の耳環だが、表面は摩滅して緑青が付着している。端部はほぼ平らで、断面は 楕円形となる。重さ 2.95g		ベルト

SI-1019 (第 241 ~ 243 図・図版三〇・五七)

位置・重複関係 K35 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SK-1188・SD-1187 に切られる。

規模・形状 東西 5.5 m、南北 5.4 m の方形を呈する。壁のラインの方向は真北である。

覆土 内容物をあまり含まない暗褐色土と、ロームブロックや焼土粒をやや多く含む暗褐色土に分けられる。

壁・壁溝 確認面からの 30cm の深さで、壁は直に立ち上がる。壁溝はカマドが構築されていたと考えられる部分以外で全周する。

床面・貼床 住居南側に、黄褐色土ロームを用いた貼床を施している。住居北側では、はつきりとした貼床は認められなかった。床面が基本土層VII層上面で極硬いため、貼床を施す必要がなかったものと考えられる。

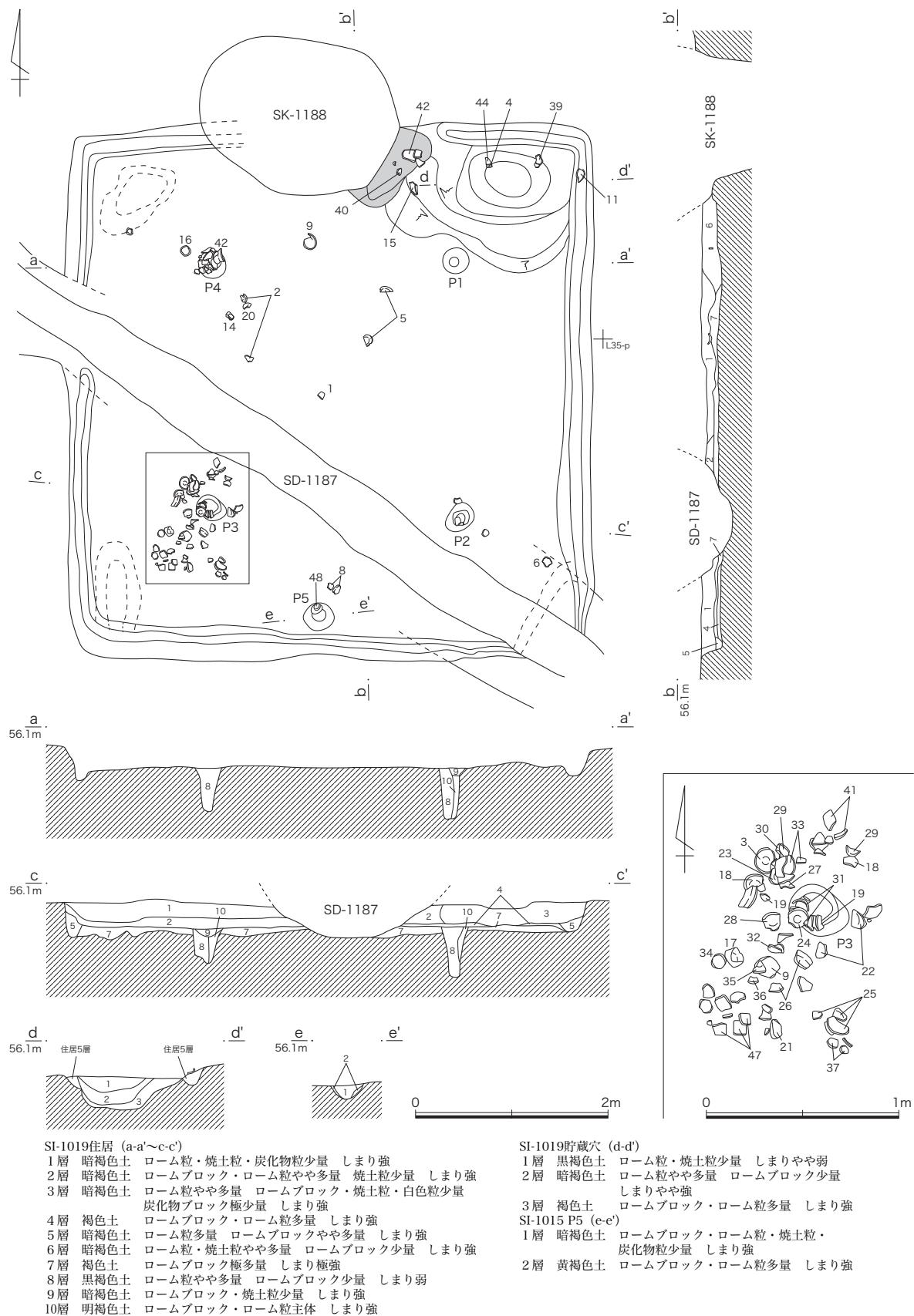
掘方 住居の四隅が浅く窪むのみで、住居中央では掘方はほとんどない。

柱穴 4 本主柱。P1 以外は矩形の掘方である。他の住居に比べ、掘方が著しく細い。

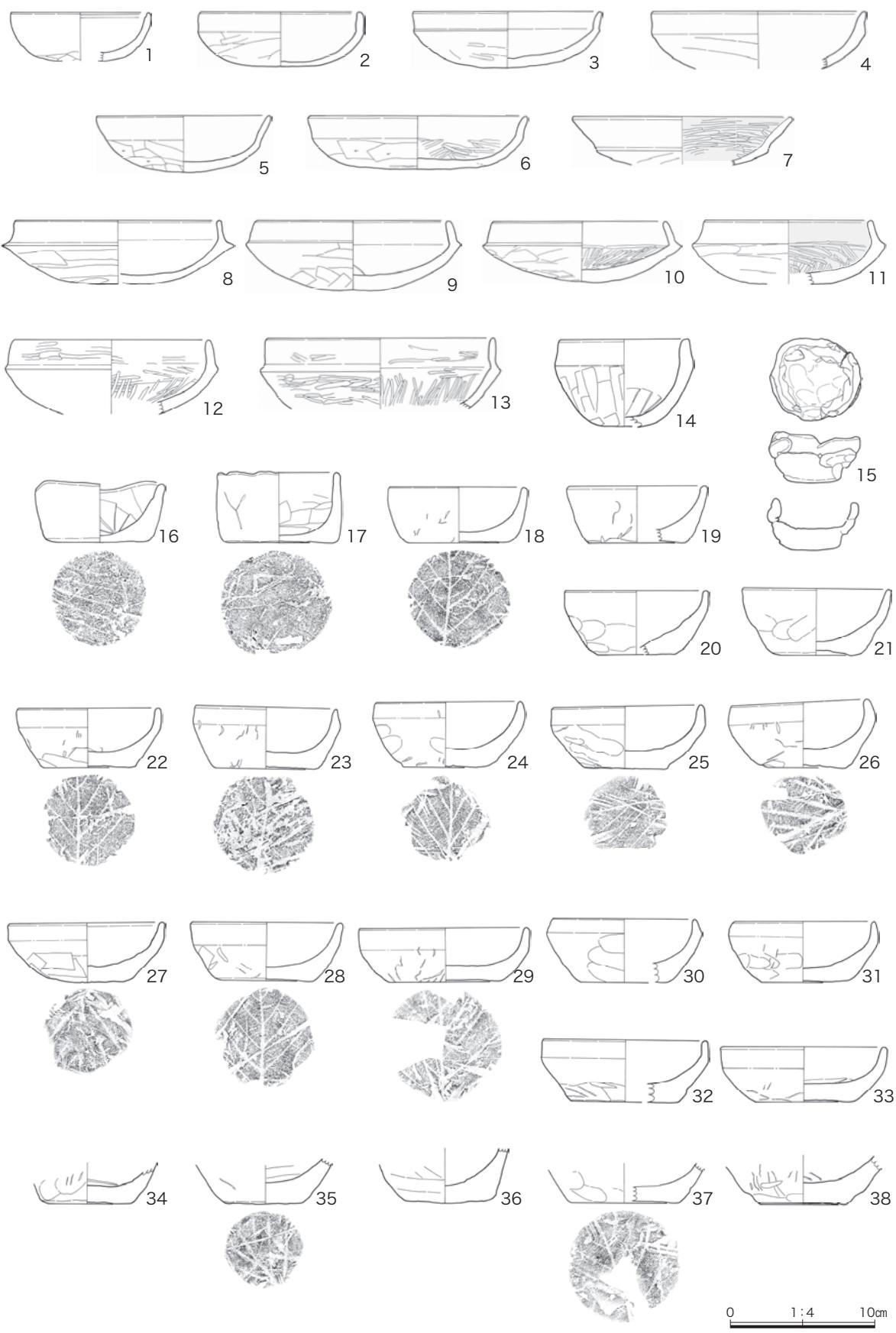
入り口ピット 南壁中央寄りに 1 基確認された (P5)。円形の掘り方を呈する極浅い小ピットである。

火凧 カマドがあつたと考えられる部分に SK-1188 が掘り込まれているため、残っていない。袖の一部と考えられる粘土ブロックが、住居北壁東寄りで確認された (第 241 図網かけ部分)。

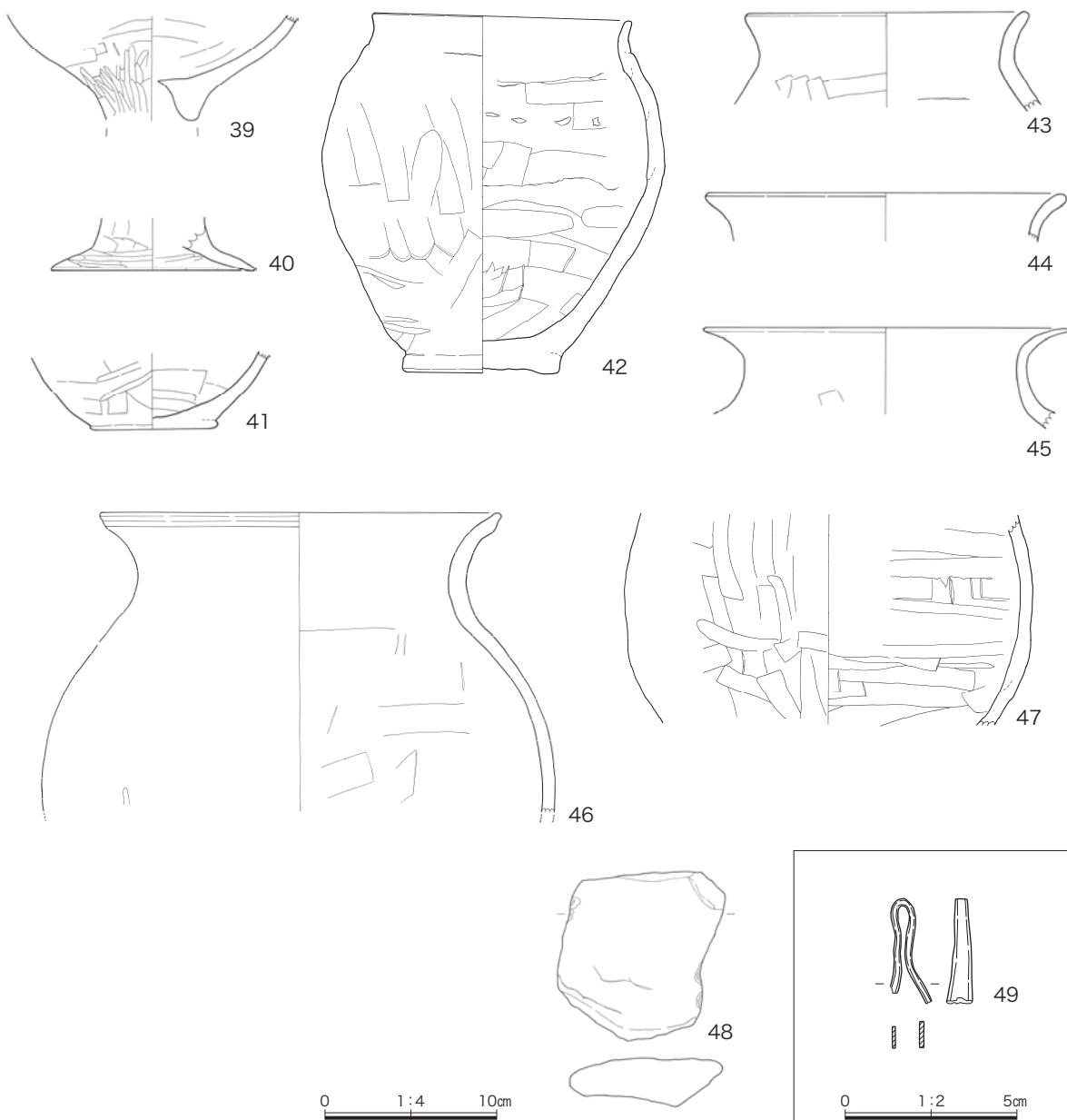
No.	長×短×深 (cm)	備考
P1	28 × 27 × 55	主柱穴
P2	32 × 25 × 54	主柱穴
P3	30 × 23 × 39	主柱穴
P4	29 × 28 × 45	主柱穴
P5	32 × 28 × 15	入口ピット
貯蔵穴	113 × 83 × 33	



第241図 SI-1019 穫穴住居跡



第242図 SI-1019出土遺物(1)



第243図 SI-1019出土遺物（2）

貯蔵穴 住居北東隅で1基確認された。掘方は東西に長い方形で、深さは約25cmである。貯蔵穴の周りは、地山が帶状に高く掘り残されている。貯蔵穴内からは土師器壺（第242図4）、高壺（第243図39）、甕（第243図44）の破片が出土している。

遺物 遺物量は多いが土師器壺類が大半を占めており、甕類は極少ない。住居南西のP3周辺で、土師器壺と手捏ね土器がまとまって出土した（第241図拡大図）。また、住居北東のP4上面からは、土師器甕の破片がまとまって出土している（第243図42）。また、覆土中から鉄製の毛抜が出土している（第243図49）。

第3章 発見された遺構と遺物

第89表 SI-1019 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (9.6) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半弱いユビナデ下半ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	微細白色粒子少 良 7.5YR4/4 褐	床上 +10cm No.16
2 土師器 壺	口 (10.8) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 底部器壁薄い (残) 2/8	砂粒・白色粒子多・雲母少 良 7.5YR6/6 橙	床上 +15cm No.12 + 15
3 土師器 壺	口 13.0 高 3.7	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ+ヘラナデ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 4/8	微細白色粒子多・砂礫少 やや良 10YR3/1 黒褐	床上 +15cm No.26
4 土師器 壺	口 (14.8) 高 (4.0)	(内) 不明 (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ? 全体的に摩滅 (残) 1/8	白色粒子多・砂礫・ 雲母少 やや良 10YR6/3 にぶい黄褐	貯蔵穴内 No.3
5 土師器 壺	口 12.0 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面一部漆付着 (残) 7/8	微細白色粒子多・雲母少 良 7.5YR5/6 明褐	床上 +10cm No.6 + 7
6 土師器 壺	口 (15.2) 高 3.7	(内) 口ヨコナデ体ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ (残) 1/8	砂粒・白色粒子極多 良 10YR4/2 灰黃褐	床上 +10cm No.58+ 覆土 a +b+SD-1187
7 土師器 壺	口 (15.1) 高 (3.3)	(内) 口ヨコナデ→口～体横方向ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ 内面黒色処理 (残) 1/8	微細白色粒子少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	確認面
8 土師器 壺	口 (14.2) 大 (16.0) 高 4.4	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	微細白色粒子極多 良 7.5YR3/1 黒褐	床上 +10cm No.1
9 土師器 壺	口 (13.5) 大 (14.8) 高 4.9	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 2/8	雲母多・白色粒子微 良 7.5YR3/3 暗褐	床上 +10cm No.60 + ベルト
10 土師器 壺	口 12.0 大 13.5 高 4.1	(内) ヨコナデ→横・放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 外面一部粘土付着 内面あばた情の剥離 (残) 6/8	砂礫・砂粒・白色粒子多・ 雲母微 二次被熱 7.5YR5/6 明褐	床直 No.8 + 覆土 a
11 土師器 壺	口 (11.5) 大 (13.4) 高 (4.4)	(内) 口ヨコナデ体横・縦方向ミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラ削り? 内面黒色処理 外面摩滅 (残) 2/8	白色粒子多・雲母微 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +10cm No.54
12 土師器 壺	口 (13.3) 大 (14.6) 高 (5.1)	(内) 口ヨコナデ→横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ→横方向ミガキ体不明 体部外面摩滅 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 1/8	砂礫・微細白色粒子多・ 雲母微 良 10YR3/1 黒褐	覆土 a + SD-1187
13 土師器 壺	口 (15.8) 大 (16.6) 高 (4.9)	(内) ヨコナデ→口横方向ミガキ体放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ→横方向ミガキ体横方向ミガキ 細かいミガキが密に行われる (残) 1/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 5YR4/4 にぶい赤褐	覆土 a
14 土師器 壺	口 (9.0) 大 (9.6) 高 (6.0)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 内外面にタール状の付着物 (斑状) (残) 2/8	白色粒子多・雲母微 良 5YR6/4 赤褐	床上 +10cm No.14 + 66
15 土製品 ニチュア 土器	口 5.9 底 3.6 高 3.5	粘土紐巻き上げ後調整なし (残) 完存	微細白色粒子多・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.5+ SD-1187 確認面
16 土師器 壺	口 8.8 底 7.0 高 4.0	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (ヘラ状工具の当たり残る) (外) 口ヨコナデ体不明 底部に平行沈線 (木葉痕?) 底部赤化 (残) 7/8	微細白色粒子少・砂礫微 やや良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.10
17 土師器 壺	口 8.6 底 7.6 高 4.9	(内) ヘラケズリ (外) 粗いユビナデ? 表面にヒビ (残) 7/8	微細白色粒子極多・赤色 融解粒・砂礫多 二次被熱 10YR5/6 黄褐	床上 +20cm No.44 + ベルト

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
18 土師器 壺	口 9.4 底 7.0 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ヘラナデ 底部木葉痕 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 5/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒やや多 良 5YR6/4 赤褐	床上 +15cm No.21 + 30 +ベルト
19 土師器 壺	口 (9.6) 底 6.6 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ユビナデ 表面にヒビ 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 4/8	微細白色粒子多・雲母微 良 7.5YR4/4 褐	床上 +10cm No.35 + 61 + 62
20 土師器 壺	口 (9.8) 底 (5.4) 高 4.4	(内) ヨコナデ? (外) ロヨコナデ体ユビナデ 底部木葉痕 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 1/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.13
21 土師器 壺	口 10.2 底 6.0 高 4.6	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部擬木葉痕 内外面にタール状の付着物(斑状)(残) 2/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.23 + 49
22 土師器 壺	口 9.8 底 6.5 高 4.1	(内) 口～体上半ヨコナデ底ヘラナデ (外) ロヨコナデ体弱いナデ 底部木葉痕 表面にヒビ 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 脛 2/8 底 8/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.23 + 36 +ベルト
23 土師器 壺	口 9.9 底 7.1 高 4.4	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部木葉痕 表面にヒビ 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 6/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +10cm No.63 + ベルト
24 土師器 壺	口 10.1 底 5.0 高 4.7	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部木葉痕 内面一部黒色化(残) 6/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.33+L36 +SD1187
25 土師器 壺	口 10.5 底 5.8 高 4.5	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ +ヘラ状工具による沈線 外面に指紋多数 底部木葉痕+ヘラ状工具による沈線(残) 7/8	微細白色粒子・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.46 + 48 + 覆土 c
26 土師器 壺	口 9.2 底 5.6 高 4.8	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ユビナデ 底部木葉痕+沈線 内面タール状の付着物(残) 7/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒微 良 7.5YR4/4 褐	床上 +20cm No.37 + 38
27 土師器 壺	口 (10.8) 底 5.9 高 4.1	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体粗いヘラケズリ 底部木葉痕 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 3/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +15cm No.29 + ベルト
28 土師器 壺	口 10.4 底 7.0 高 4.1	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部木葉痕 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 6/8	微細白色粒子やや多・赤 色融解粒少・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.32+ 覆 土 c + ベルト
29 土師器 壺	口 11.3 底 7.6 高 3.7	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部木葉痕 表面にヒビ 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 5/8	微細白色粒子・雲母多 赤色融解粒やや多 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.20+25+ 覆土 c
30 土師器 壺	口 (9.9) 底 (6.2) 高 4.4	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底面に浅い沈線(残) 2/8	微細白色粒子多・雲母微 良 7.5YR4/4 褐	床上 +10cm No.64 + ベルト
31 土師器 壺	口 9.7 底 6.0 高 4.1	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体ユビナデ底ヘラケズリ 表面にヒビ 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 4/8	微細白色粒子・雲母少 やや良 7.5YR3/3 暗褐	床上 +15cm No.34 + 45 +ベルト
32 土師器 壺	口 (11.4) 底 (7.4) 高 4.2	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部木葉痕(体下半まで) 内面にタール状の付着物(斑状)(残) 1/8	微細白色粒子・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.42
33 土師器 壺	口 (11.3) 底 (6.6) 高 3.8	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ体弱いユビナデ 底部木葉痕 表面にヒビ 内面一部黒色化(残) 2/8	微細白色粒子多・雲母少 良 7.5YR4/3 褐	床上 +10cm No.24 + 28
34 土師器 壺	底 6.0 高 (2.9)	(内) ヨコナデ (外) ユビナデ 底部木葉痕 表面にヒビ (残) 8/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/3 暗褐	床上 +25cm No.31

第3章 発見された遺構と遺物

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
35 土師器 壺	底 5.0 高 (3.1)	内外面とも弱いナデ 底部擬木葉痕 内面にタール状の付着物（斑状） (残) 底 8/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.40
36 土師器 壺	底 6.2 高 (3.8)	(内) ヨコナデ (外) 粗いヘラケズリ 底部擬木葉痕 (残) 底 7/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.43+ 覆 土 d+ ベルト
37 土師器 壺	底 7.6 高 (2.8)	(内) ヨコナデ? (外) ユビナデ 底部木葉痕 内面にタール状の付着物（斑状）(残) 底 3/8	微細白色粒子多・赤色融 解粒少・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +20cm No.47+ 覆 土 c+ ベルト
38 土師器 壺	底 (6.2) 高 (3.4)	(内) ヨコナデ (外) 粗いユビナデ 底部木葉痕 表面にヒビ 内面にタール状の付着物（斑状） (残) 4/8	微細白色粒子多・赤 色融解粒・雲母微 良 5YR4/6 赤褐	ベルト +SD-1187 確認面
39 土師器 高壺	高 (6.2)	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ+縦方向ミガキ 脚部接合部で欠損 (残) 壺部 1/8	微細白色粒子・雲母少 やや良 10YR4/2 灰黄褐	貯蔵穴内 No.2 + 貯蔵穴
40 土師器 高壺	底 (11.8) 高 (3.0)	(内) ヨコナデ+棒状工具によるナデ (外) ヘラケズリ (残) 1/8 No.39 と同一個体?	微細白色粒子・雲母少 やや良 10YR4/2 灰黄褐	床上 +5cm No.4
41 土師器 甕	底 7.3 高 (4.4)	(内) ヘラナデ (外) 弱いナデ (残) 5/8	砂粒・白色粒子多・ 雲母少 やや良 2.5YR6/4 にぶい黄	床直 No.17 +I8+ ベルト + SD-1187
42 土師器 甕	口 (15.0) 大 (19.8) 底 9.0 高 20.3	(内) 口ヨコナデ胴へラナデ (外) 口ヨコナデ胴へラナデ一部ユビナデ 全体的に歪む 内外面に輪積痕残る 外面粘土を撫でつけ た痕跡あり (残) 1/8	砂粒・白色粒子多・雲母少 やや良 7.5YR5/6 明褐	床上 +5cm No.4 + 覆 土 b + d
43 土師器 甕	口 (16.6) 高 (5.4)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体へラケズリ タール状の付着物が残る破片あり 内面に輪積痕残る (残) 1/8	白色粒子多・雲母少 良 5YR4/6 赤褐	覆土 a
44 土師器 甕	口 (20.9) 高 (2.8)	内外面ともヨコナデ (残) 1/8	微細白色粒子・雲母少 良 7.5YR6/6 橙	貯蔵穴内 No.3
45 土師器 甕	口 (21.2) 高 (5.1)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ 全面赤彩 (残) 1/8	白色粒子多・砂礫少 二次被熱 2.5YR4/8 赤褐	ベルト + 覆土 a
46 土師器 甕	口 (23.2) 高 (17.3)	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ 外面にタール状の付着物 (残) 4/8	白色粒子極多・雲母多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +15cm No.9
47 土師器 甕	高 (12.1)	(内) 強いヘラナデ (外) 粗いヘラケズリ 表面粘土貼り付け痕が残る (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +25cm No.51 + 確認面
48 礫	長 9.6 幅 8.6 厚 2.8 重 311.0	表面、側面に弱い擦痕あり	5Y6/2 灰黄	床下 No.67
49 鉄製品 毛抜	長 (3.0) 幅 0.9 厚 0.3 重 1.71	上端部の折り曲げた部分のみ残る。一度くびれた後、下へ向かって開く。断面は薄い 長方形。側面は下端に向かって幅が広がっている。		覆土 d

SI-1020 (第244～246図・図版三〇・五六)

位置・重複関係 N33 グリッドに位置する。竪穴住居跡との重複はないが、SB-1028・SB-1029 挖立柱建物跡と重複する。新旧関係は SI-1020 (旧) → SB-1028・SB-1029 (新) である。

規模・形状 東西 4.2 m、南北 4.1 m だが、住居は低地 A 落ち際の黒色土中に掘り込まれており、壁のラインは明瞭ではなかった。そのため、住居のプランは大きく歪んでいる。

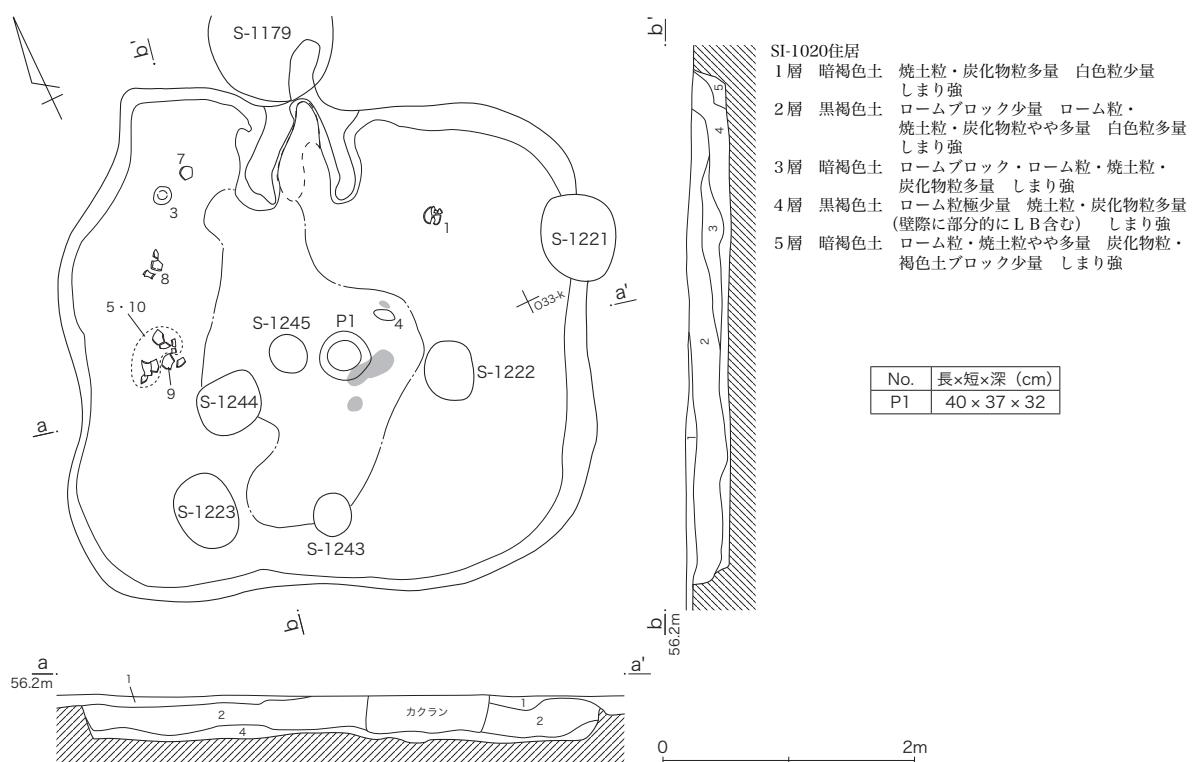
覆土 火山灰と考えられる白色粒子を多量に含む黒褐色土を主体とする。覆土は地山の黒色土とよく似ているため、識別は困難だった。

壁・壁溝 確認面から深さ 25cm で、東壁はなだらかに立ち上がる。西壁は立ち上がりが明瞭ではなかったが、やや緩やかに立ち上がるものと考えられる。

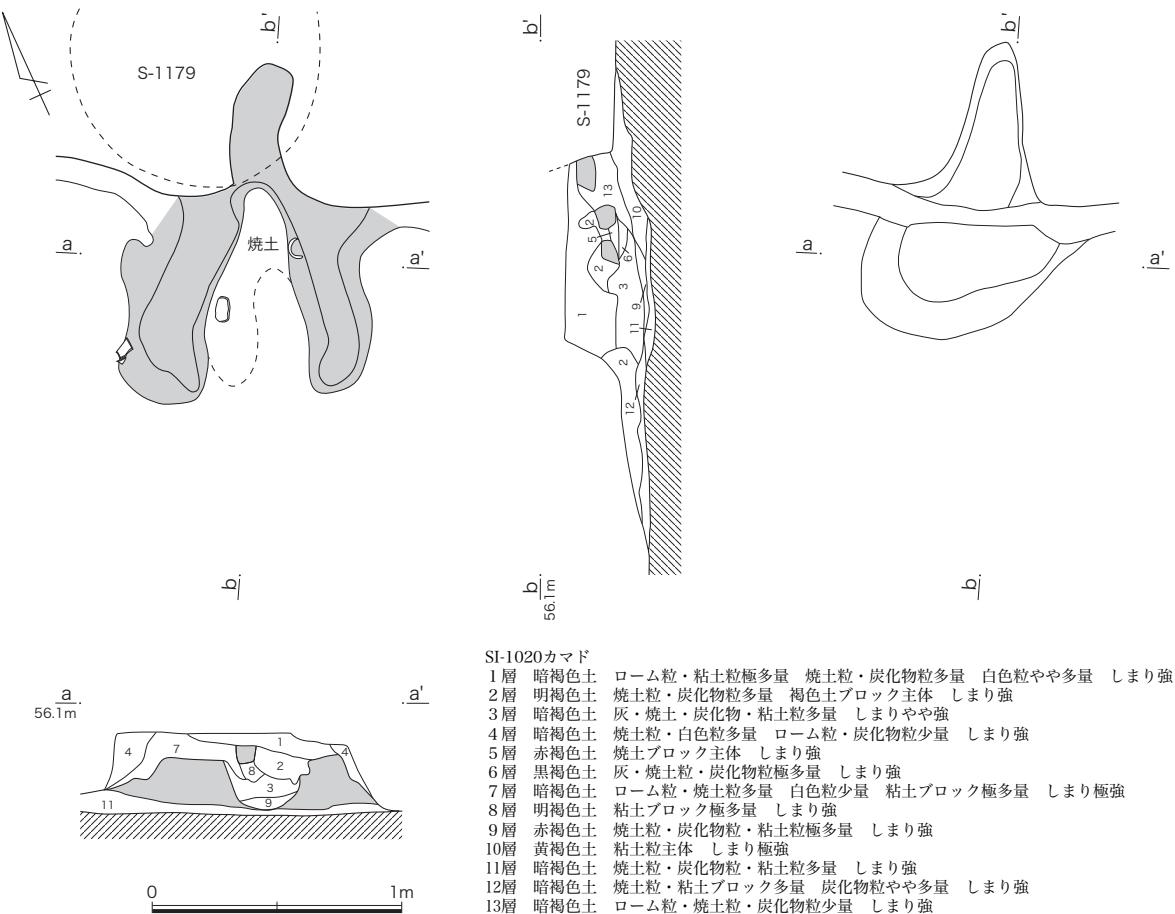
床面・貼床 住居東側の床が黒色土中となるため、判然としなかった。住居中央部分に、黄褐色ローム土による貼床が施されている (第244図破線部分)。その他の部分は地床である。

火処 住居北壁中央にカマドを構築している。両袖と奥壁が残存しているが、上部に SK-1179 が掘り込まれているため、残存状況は極めて悪い。両袖は黄褐色粘土を用いて構築している。カマド内部には炭、焼土が多量に残っていた (3層)。煙道は住居壁と同じ位置で一度段状に立ち上がり、住居外に向けて細長く掘られている。煙道内部には黄褐色粘土が厚く堆積しているが (10層)、これは天井に使用されていた粘土が崩落したものと考えられる。掘方では、カマド燃焼部が浅い土坑状に掘り込まれている。

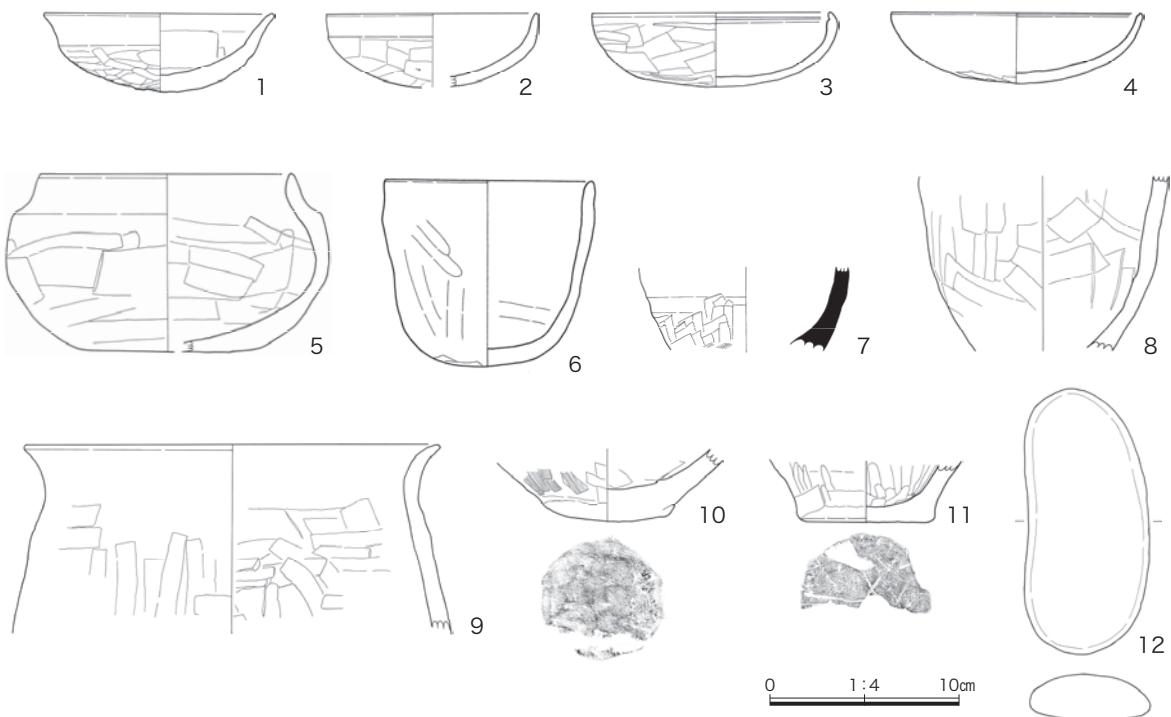
遺物 床面上から土師器壺 (第246図1・3)、須恵器壺 (第246図7) が出土しているが、出土量は少ない。



第244図 SI-1020 竪穴住居跡 (1)



第245図 SI-1020 穫穴住居跡（2）



第246図 SI-1020 出土遺物

第90表 SI-1020 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 12.0 高 4.2	(内) ヨコナデ (工具痕残る) (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 8/8	白色粒子・砂粒多・雲母少 良 5YR5/6 明赤褐	床直 No.6 + 10
2 土師器 壺	口 (11.2) 高 (3.9)	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 内面白縁部摩滅 (残) 1/8	赤色融解粒やや多・雲母少 良 7.5YR5/4 にぶい褐	ベルト
3 土師器 壺	口 13.0 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 口縁部内面に沈線 被熱によるあばた状の剥離 (残) 8/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 二次被熱 5YR2/1 黒褐	床直 No.3
4 土師器 壺	口 (13.0) 高 3.7	(内) ヨコナデ (外) ロヨコナデ胴中位まで摩滅、底部近くヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ 被熱によるあばた状の剥離 (残) 2/8	微細白色粒子多・雲母微 良 7.5YR4/3 褐	覆土 a + 確認トレンチ
5 土師器 甕	口 (15.6) 大 (17.6) 高 (9.3)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ 内面一部漆付着 (残) 2/8	砂礫多・白色粒子少 良 10YR4/2 灰黄褐	床上 + 10cm No.5 + 覆土 + ベルト
6 土師器 鉢	口 (11.2) 高 10.0	(内) ロヨコナデ胴ユビナデ (中位は摩滅) (外) ロヨコナデ胴弱いナデ、底部近くヘラナデ (残) 4/8	微細白色粒子多・砂礫多・ 雲母少 良 7.5YR3/2 黒褐	床直 No.2
7 須恵器 壺	高 (4.5)	内外面ともロクロナデ 底部近く手持ちヘラケズリ (一部ハケメ状) (残) 1/8 産地不明	白色粒子多・黒色融解粒 やや多・雲母少 良 N6/ 灰	覆土 b + N33 グリッド
8 土師器 甕	高 (9.2)	(内) ヘラナデつけ (外) ヘラケズリ 外面に粘土を薄く貼り付け (残) 6/8	白色粒子多・砂礫やや多・ 雲母微 やや良 5YR6/8 橙	床直 No.1 + 覆土 d
9 土師器 甕	口 (22.0) 高 (10.0)	(内) ロヨコナデ胴ヘラナデ (外) ロヨコナデ胴ヘラケズリ (残) 1/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 5YR6/8 橙	床上 + 10cm No.5 + 覆土
10 土師器 甕？	底 (6.0) 高 (4.0)	(内) ヘラナデ (外) ハケメ+ヘラケズリ 底部外縁に布目圧痕・中央ヘラケズリ 底部輪積痕残る (残) 底 8/8	砂粒・白色粒子多 良 10YR6/4 にぶい黄橙	床上 + 10cm No.5 + 覆土
11 土師器 甕？	底 (7.2) 高 (3.2)	(内) ヘラナデ (外) ヘラナデ、一部ミガキ 底部木葉痕 器面がかなり乾燥した段階で調整 (残) 4/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土 c
12 礫	長 14.0 幅 6.5 厚 3.1 重 412.3	扁平な楕円形 表面に弱い擦痕	5P5/1 紫灰	床直 No.4

SI-1023 (第247・248図・図版三〇・三一・五六)

位置・重複関係 J35 グリッドに位置する。H15 年度に東側約 1/3、H17 年度に西側約 2/3 を調査した。

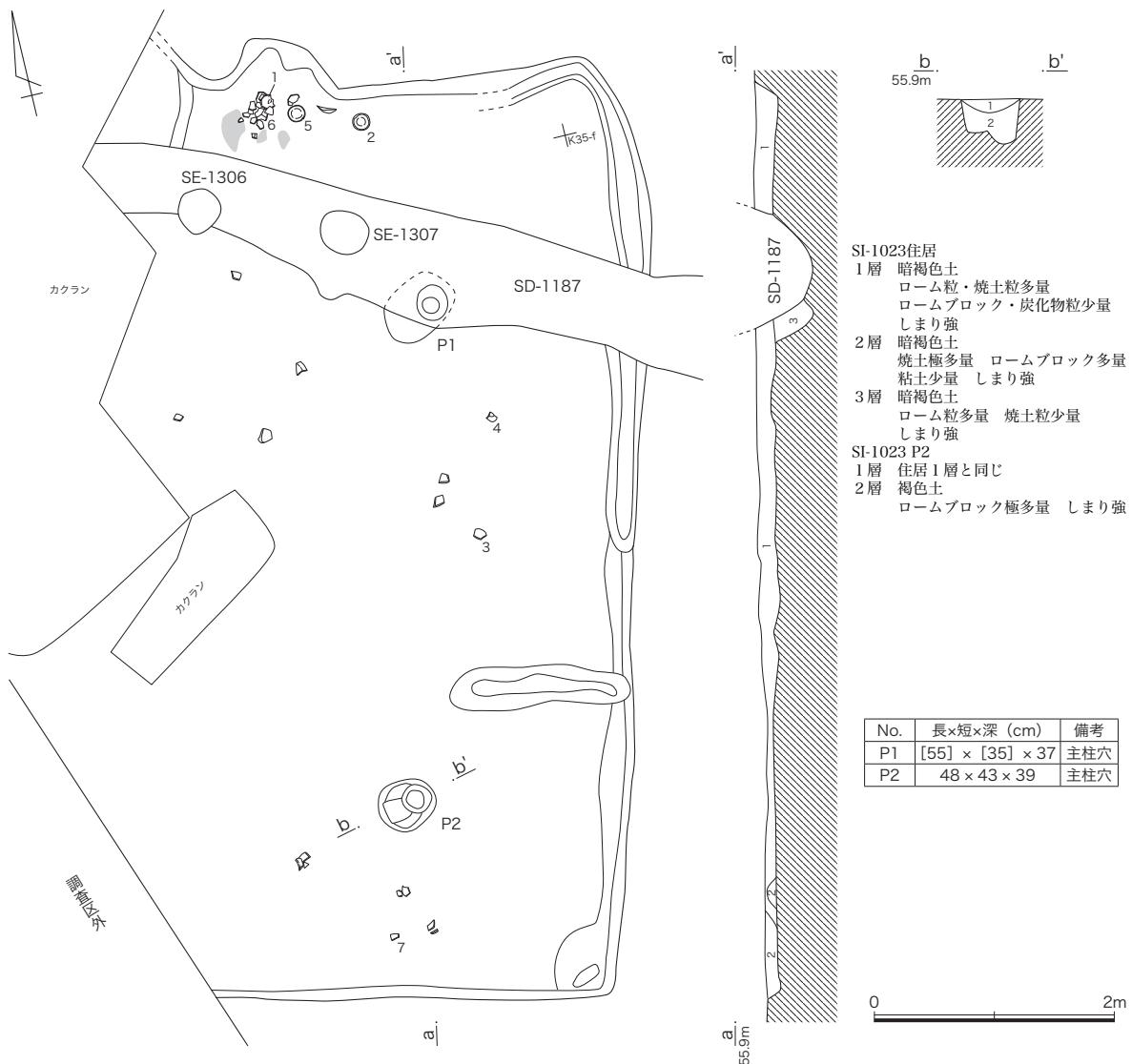
竪穴住居跡との重複はないが、SD-1187 に切られる。

規模・形状 住居西側が攪乱により大きく壊されているため、規模・形状等は不明である。主軸方向は推定で N - 12° - E である。

覆土 削平によりほとんど残っていないが、ローム粒・焼土粒を多く含む暗褐色土が主体と考えられる。

住居南側では、焼土がブロック状に堆積する部分が確認された (2 層)。

壁・壁溝 確認面から約 15cm の深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。壁溝は東壁と北壁の一部で確認された。南壁はわずかに凹みが見られたが、はっきりとした溝状ではなかった。



第247図 SI-1023 竪穴住居跡

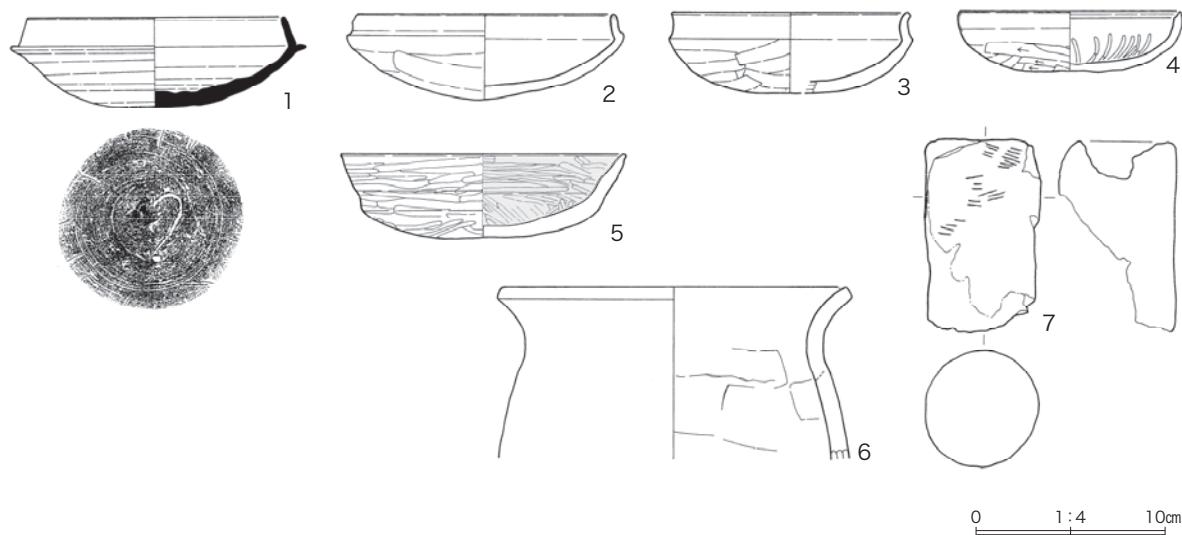
床面・貼床 地床で貼床は施されていない。床面はほぼ水平である。掘り方は特にない。

柱穴 調査区内では2本確認された (P1・P2)。おそらく4本主柱であったと考えられる。北側のP1はSD-1187溝状遺構によって大きく壊されている。2本とも底面に柱の当たりがあり、東西に長い楕円状の掘り方の東寄りに柱を立てていたようである。いずれも柱痕は確認できなかった。

間仕切り溝 東壁南寄りで1箇所確認された。壁溝から直角に伸びている。

火処 北壁中央にカマドの痕跡が残っていた。上面には攪乱が及んでいるため、残存状況は極めて悪い。燃焼部と考えられる中央部分からは、粘土ブロックと共に土師器壺が数個体まとまって出土している（第248図1・2・5・6）。掘り方はおそらく凸字形を呈していたものと考えられ、袖にあたる部分の地山は掘り残されていた。

遺物 カマド跡からまとめて出土しているが、出土量は少ない。



第248図 SI-1023出土遺物

第91表 SI-1023遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 13.6 大 15.6 高 4.8	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ（残）6/8 産地不明	白色粒子・黒色融解粒多・ 石英粒やや多 やや良 2.5YR6/2 灰黄	床上 +5cm No.14
2 土師器 壺	口 13.5 大 14.5 高 4.6	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口外面漆仕上げ（残）8/8	白色粒子少 良 7.5YR7/4 にぶい橙	床上 +5cm No.17
3 土師器 壺	口 (12.5) 大 (12.7) 高 (4.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ タール状の付着物（残）2/8	白色粒子極多・砂礫・赤 色粒子少 良 5YR4/4 にぶい赤褐	床上 +10cm No.26
4 土師器 壺	口 (11.7) 高 3.2	(内) ヨコナデ→（漆塗布）→ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面漆仕上げ タール状の付着物（残）2/8	白色粒子多 良 7.5YR5/3 にぶい褐	床上 +10cm No.23
5 土師器 壺	口 15.0 高 4.5	(内) 口横方向ミガキ体亀甲状ミガキ (外) 口横方向ミガキ体ヘラケズリ→横方向ミガキ 内面黒色処理（残）6/8	白色粒子多・砂礫・ 砂粒やや多 良 7.5YR6/4 にぶい橙	床上 +10cm No.15
6 土師器 甕	口 (18.5) 高 (9.1)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴不明 摩滅強（残）胴 4/8	砂礫・白色粒子極多 良 10YR5/3 にぶい黄橙	床上 +10cm No.10+11+ 12+18
7 土製品 支脚	長 (10.2) 径 6.1 重 263.51	粘土塊を接合し成形か? 表面に細かい条線状の調整あり 下端欠損 上部に凹みあり	白色粒子・砂粒・赤色融 解粒多 良（一部被熱） 7.5YR6/6 橙	床上 +5cm No.32

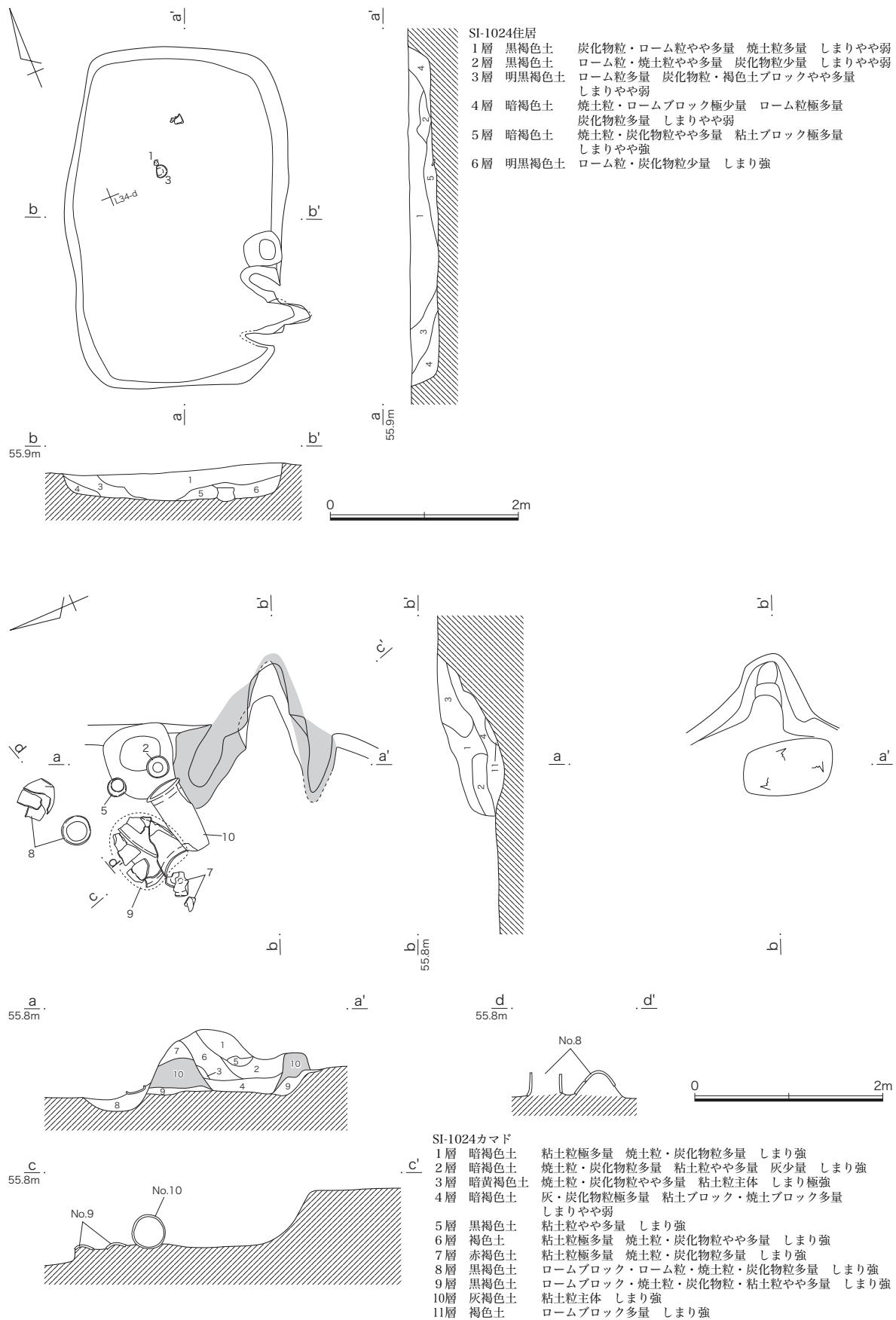
SI-1024 (第249・250図・図版三一・五七・五八)

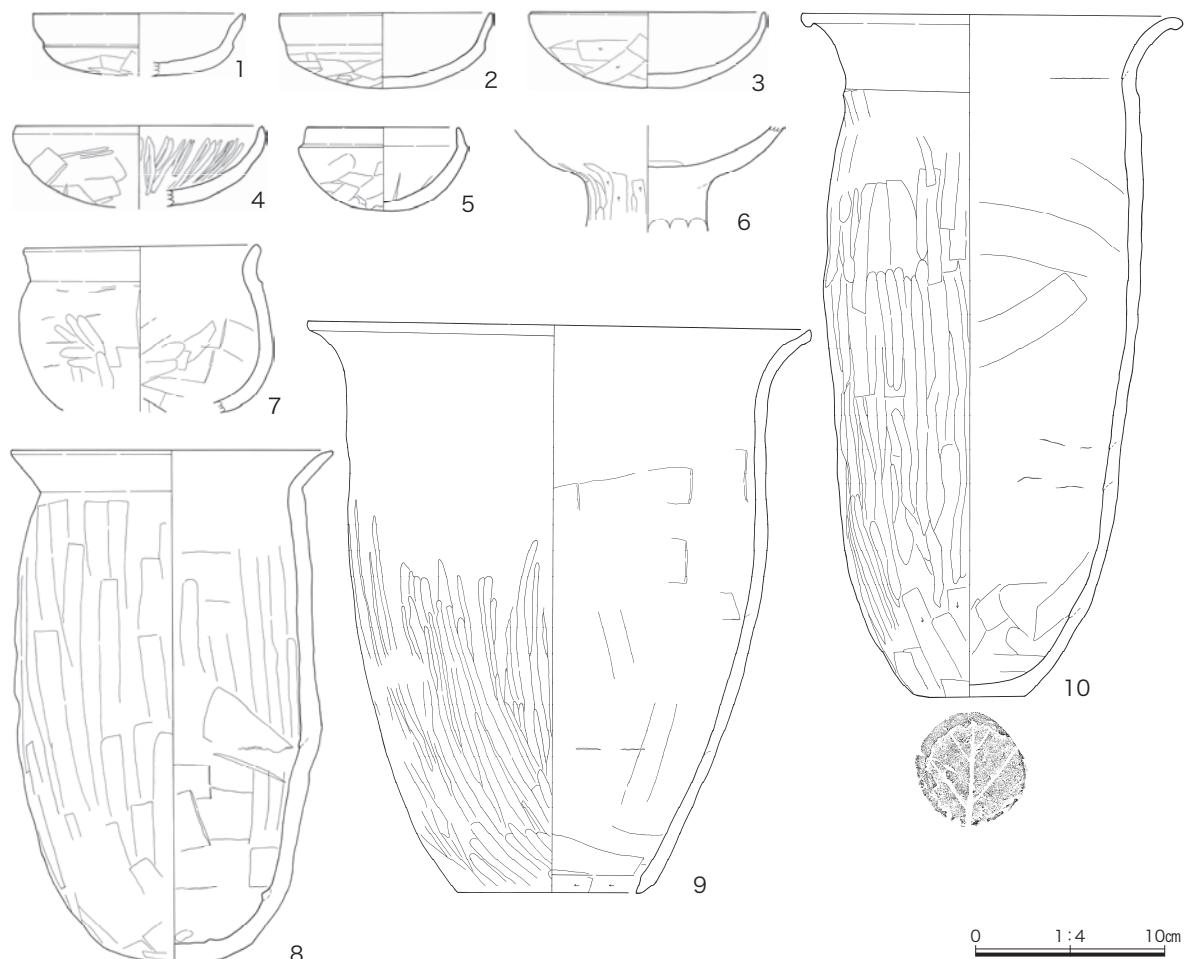
位置 M33 グリッドに位置する。

規模・形状 東西 2.3 m 南北 3.1 m の、南北に長い長方形を呈する。各隅は丸みをおびていて、やや歪んでいる。主軸方向は N - 112° - E である。今回調査された中で最も小さい住居跡である。

覆土 焼土粒・炭化物粒・ローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする。床面上に、焼土・炭化物を含む粘土ブロックが堆積していた（5層）。

壁 最も残りの良い部分で確認面から深さ 35cm で、壁はややゆるやかに立ち上がる。





第250図 SI-1024出土遺物

第92表 SI-1024遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 坏	口 (11.0) 高 (3.3)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナ「デ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ(残) 1/8	白色粒子多・砂礫少 良 10YR6/3 にぶい黄橙	床上 +15cm No.9
2 土師器 坏	口 11.5 高 4.1	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 完存	微細白色粒子・雲母多 良 10YR7/3 にぶい黄橙	床直 No.4
3 土師器 坏	口 12.6 高 4.0	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 全体的に赤化 内面わずかな黒色付着物(漆?) (残) 6/8	赤色融解粒極多・白色粒 子多・雲母微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	床上 +20cm No.8
4 土師器 坏	口 (13.0) 大 (13.8) 高 (4.5)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ→一部ミガキ (残) 2/8	微細白色粒子・砂礫少 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	ベルト
5 土師器 坏	口 8.0 大 8.8 高 4.5	(内) ヨコナデ 底部近くに工具の当たり痕残る (外) 口ヨコナデ体上半弱いナデ下半ヘラケズリ 内面漆仕上げ(残) 完形	微細白色粒子少・微細雲 母微 良 5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.5
6 土師器 高坏	高 (5.5)	(坏部内) ヨコナデ (坏部外) 丁寧なヘラナデ (脚部外) ヘラケズリ (残) 坏部 2/8	微細白色粒子多・雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	ベルト

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
7 土師器 鉢	口 (12.2) 高 (8.8)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴粗いナデ、一部ミガキ 全体的に斜めに歪む 外面輪積痕残る (残) 3/8	砂礫・砂粒・白色粒子多・ 雲母少 二次被熱 5YR4/6 赤褐	床上 +5cm No.11 + ベルト
8 土師器 甕	口 17.0 高 27.0	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデつけ+弱いナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 底部近くに粘土貼り付け (残) 完存	微細白色粒子多・砂礫少 良 10YR5/2 灰黄褐	床直 No.6 + 7
9 土師器 甕	口 27.5/26.5 底 10.0 高 30.0	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ底部近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴上半丁寧なナデ下半ミガキ 口縁部楕円状に歪む (残) 7/8	砂礫・白色粒子多・雲母微 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.2+3+ 覆土 a+ b
10 土師器 甕	口(20.0/18.4) 底 6.0 高 35.6	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ底部近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ+細いナデ 底部近くヘラケズリ 口縁部楕円状に歪む 外面に一部粘土なでつけ (残) 8/8	砂礫・白色粒子多 やや良 7.5YR3/2 黒褐	床上 +5cm No.1 + 覆土 b

床面・貼床 ロームブロックによる薄い貼床が施されている。掘方はない。

火処 住居東壁の南寄りにカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しており、残存状況は良好である。袖は黄褐色粘土を用いて構築している。カマド内部には粘土が厚く堆積しており、その下には炭、焼土、灰が薄い層状に堆積していた(4層)。燃焼部は極浅く掘りくぼめられている。煙道は短く、階段状に掘り込まれており、やや緩やかに立ち上がる。カマド左袖周辺からは、土師器甕(第250図9)、土師器長胴甕(第250図8・10)、土師器壺(第250図2・5)、土師器鉢(第250図7)などがまとまって出土した。いずれも遺存状態が良く、表面には多量に煤が付着していた。第250図8は体部中位で水平に打ち欠かれており、上半は床面上に据えられた状態で出土している(第249図)。

貯蔵穴 カマド北側に、深さ約10cmの隅丸方形を呈する土坑が確認された。内部には、焼土、炭を多く含む黒褐色土が堆積していた。

遺物 カマド周辺から出土した土器以外には、小破片も含め遺物はほとんど出土しなかった。第250図1・4はいずれも覆土中からの出土である。

SI-1025(第251・252図)

位置 O34グリッドに位置する。

重複関係 SI-1017豊穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-1017(旧)→SI-1025(新)である。

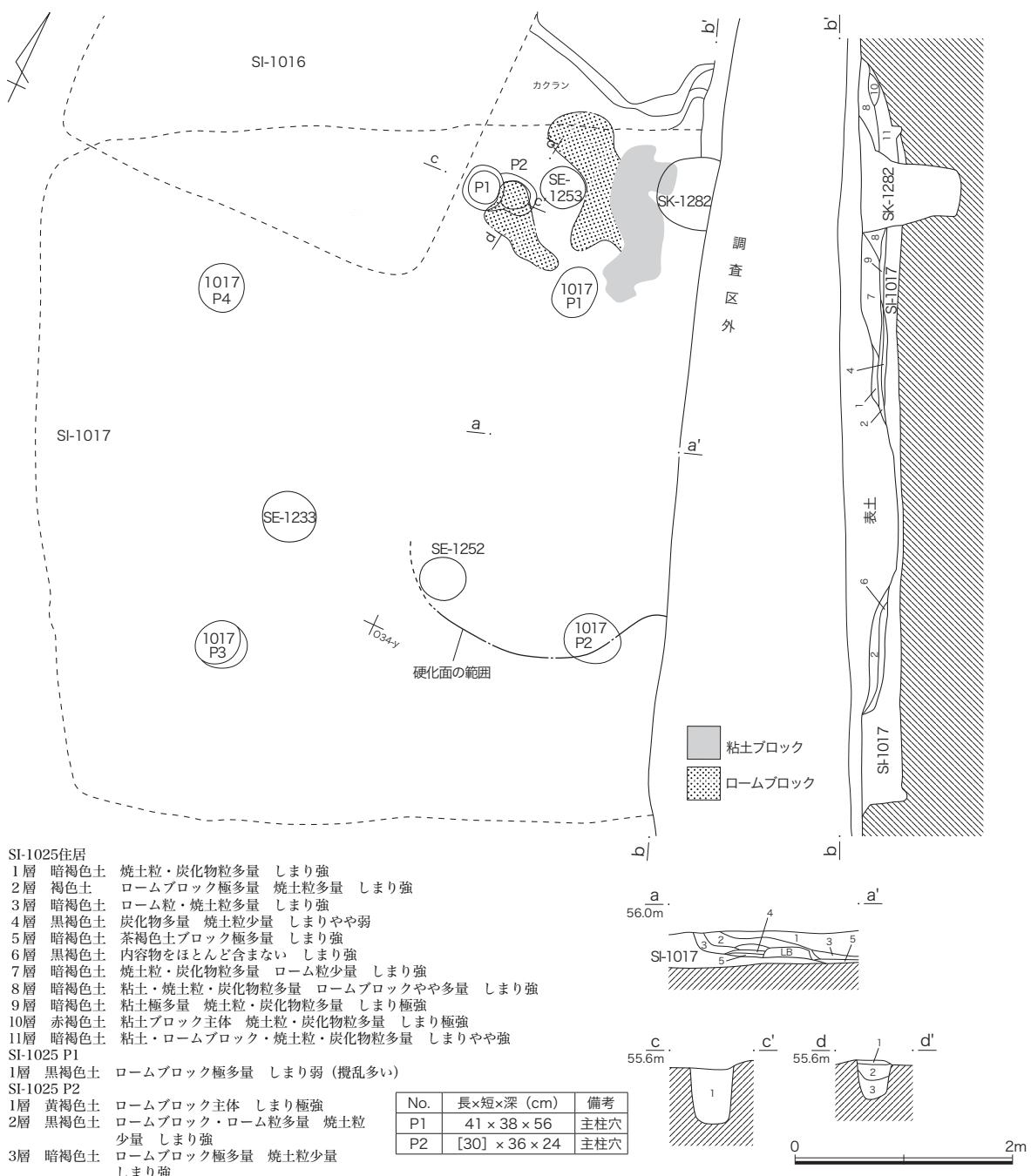
規模・形状 住居プランが不明のため、規模・形状・主軸方向は不明である。

覆土 炭化物・焼土粒を多く含む暗褐色土を主体とする。また、壁際にはロームブロックを多く含む褐色土とローム粒・焼土粒を多く含む暗褐色土が薄い層状に堆積している。

壁 壁がSI-1017の覆土中にあり、さらに攪乱を受けているので不明である。SI-1016・1017の調査中に西壁の一部がトレント内で、南壁の一部が調査区壁の断面で確認できているが、壁の方向などは不明である。

床面・貼床 SI-1017豊穴住居跡調査中に確認された暗褐色土中の硬化面が床面と考えられるが、トレント、調査区壁で確認された住居壁のラインよりも一部はみ出してしまうため、SI-1025に伴う床面かは確定できない。硬化面には茶褐色土ブロックによる貼床が確認された。

火処 カマドが北壁に構築されており、東側半分は調査区外となる。袖、天井はほとんど残っておらず、掘方のみが確認された。煙道は段状に掘り込まれており、その上に堆積した覆土内には、炭、焼土、粘土が



第251図 SI-1025 竪穴住居跡

多量に含まれていた（8・11層）。燃焼部はSK-1282により壊されている。

遺物 カマド付近から少量の土器片が出土しているのみで、器形全体が復元できるものは出土しなかつた。



第252図 SI-1025出土遺物

第93表 SI-1025遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 (11.6) 高 (2.7)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 内面にヘラ状工具による鋭いキズ 全体的に摩滅 (残) 1/8	白色粒子多 二次被熱 10YR4/6 褐	覆土
2 土師器 壺	破片	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 胎土がマーブル状に混ざる	微細白色粒子多 良 5YR5/6 明赤褐	S-1258 (SI-1025 柱穴)

SI-1301（第253～258図・図版三一・三二・五八）

位置 J36グリッドに位置する。床面の作り替えと壁の拡張を伴う建て替えが1回行われており、SI-1301a（新段階）、SI-1301b（旧段階）にわけられる。

SI-1301a（第253～255図）

規模・形状 調査区内での住居の規模は東西3.8m、南北3.8mで、やや歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-2°-Wで、ほぼ真北に向いている。

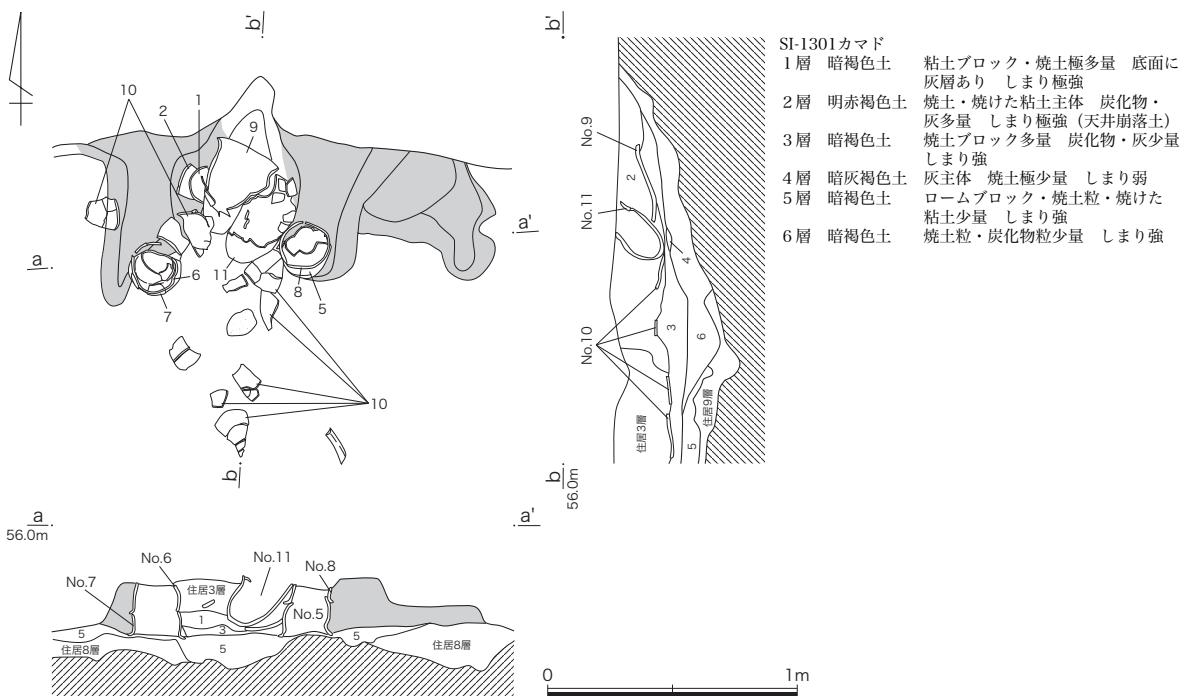
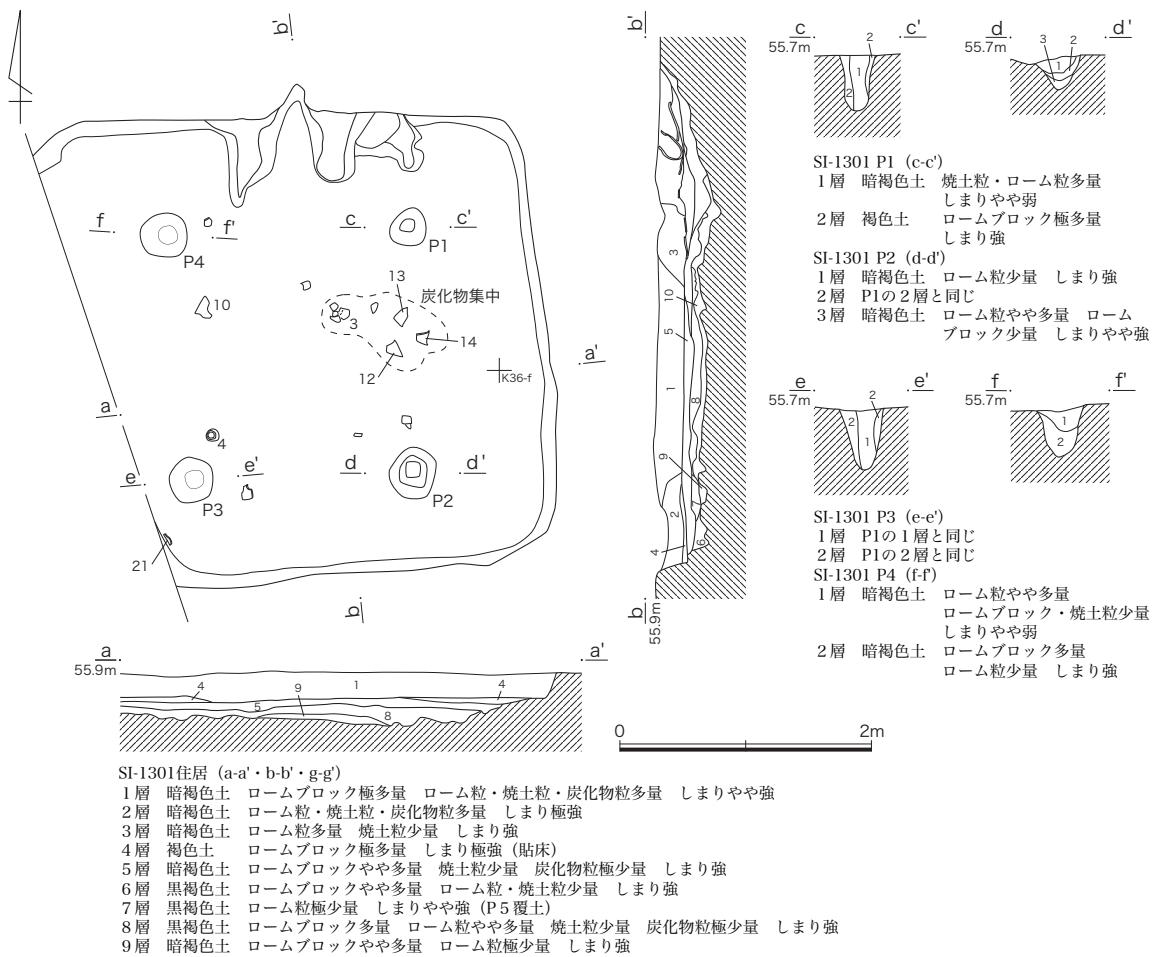
覆土 ロームブロックやローム粒、焼土粒、炭化物粒を多く含む暗褐色土が均一に堆積している（1層）。他の住居覆土に比べて、ロームブロックなどの内容物が多く含まれている。また、住居中央やや東よりの床面上に、炭化物が集中する部分が確認された（第253図）。

壁 確認面から深さ15cmで、ややなだらかに立ち上がる。また、調査区壁で住居断面を観察したところ、住居壁は確認面よりもさらに20cm以上高くなることが確認された。壁溝はない。

床面・貼床・掘方 ロームブロックをやや多く含む暗褐色土で貼床を施し（5層）、さらに床面中央を除く住居周縁にロームブロックによる貼床（4層）を施している。4層・5層を掘り下げたところ、住居中央にSI-1301bの床面（8層）が島状に確認された（第253図）。住居の四隅は貼床がなく、ロームブロックを多く含む黒褐色土（6層）が堆積している様子が確認された。以上のことから、6層の堆積範囲はSI-1301aの掘り方部分であると考えられる。また、SI-1301aの貼床である4層の堆積範囲は6層の堆積範囲とはほぼ一致することから、住居使用中に沈んでしまった部分を補修するために貼床を施したものと考えられる。

柱穴 柱穴は4本確認されており、P1およびP3には柱痕と考えられる土層が確認された（1層）。P2は底面が矩形の掘り方を呈するが、その他3本の柱穴はほぼ円形の掘り方である。

火処 北壁のほぼ中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しており、両袖の幅は100cmと広い。袖は地山（住居8層=SI-1301b床面）を掘り残した上に粘土を積み上げて構築しており、両袖の先端には土師器甕がそれぞれ2個体ずつ重ねて据えられていた（第254図5～8）。内部はよく焼けている。火床面よりも上位には焼けた粘土や焼土が多量に堆積しており、火床面には灰が薄い層状に堆積していた（4層）。また、内部からは遺物が多量に出土している。いずれも火床面よりもわずかに浮いた状態で、天井崩落土と考えられるカマド2層内に含まれていることから、カマド廃絶時に廃棄されたものと考えられる。復元で



第253図 SI-1301a 穫穴住跡

第255図 SI-1301a出土遺物（2）

第94表 SI-1301 遺物観察表

No. 種類 器種	法量 (cm : g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	口 16.1 高 3.6	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ ボタン状のツマミ (残) 5/8 三毳産	砂礫・白色粒子多 やや良 2.5Y7/2 灰黄	かド 内部 No.27
2 須恵器 蓋	口 17.1 高 4.3	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ ヘラ記号「///」(残) 8/8 益子産	砂礫・白色粒子多 やや良 2.5Y6/3 にぶい黄	かド 内 No.28 かド一括
3 須恵器 坏	口 14.3 底 8.6 高 3.5	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 器壁薄い (残) 7/8 三毳産	砂礫・白色粒子多 良 2.5Y7/2 灰黄	床直 No.18 覆土 a
4 須恵器 坏	底 4.0 高 (1.5)	(内) ロクロナデ (外) 底部回転ヘラケズリ 高台付 (残) 底 8/8 益子産?	砂礫・白色粒子多 良 5Y6/1 灰	床上 +20cm No.11
5 土師器 甕	口 16.5 大 19.2 高 (20.8)	(内) 口～胴上半ヨコナデ 胴下半ヘラナデ (外) ヨコナデ 胴ヘラケズリ 外面荒れ 外面に一部粘土付着 (残) 口縁～胴 8/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 2.5YR5/6 明赤褐	かド 袖芯 No.50
6 土師器 甕	口 17.4 高 (15.5)	(内) ヨコナデ 胴ヘラナデ (外) ヨコナデ 胴ヘラケズリ (粗い) 胴部に輪積痕 胴下半部に大きな接合痕あり (残) 口縁～胴 8/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 雲母微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	かド 袖芯 No.37+38 + かド一括
7 土師器 甕	口 20.8 高 (17.5)	(内) ヨコナデ 胴ヘラナデ (外) ヨコナデ 胴ヘラケズリ? 外面摩滅 内面あばた状剥離 (残) 口縁～胴 8/8	砂礫・砂粒多・白色粒子 やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	かド 袖芯 No.49 + 37
8 土師器 甕	口 18.6 高 (10.6)	(内) ヨコナデ 胴ヘラナデ (外) ヨコナデ 胴ヘラケズリ 外面胴部に粘土付着 摩滅 (残) 口縁～胴上 8/8	砂礫少・白色粒子・砂粒 やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	かド 袖芯 No.37 + 38 + 49
9 土師器 甕	口 (23.0) 底 5.4 高 35.8	(内) ヨコナデ 胴ヘラナデ 底ヘラケズリ (外) ヨコナデ 胴ヘラケズリ 外面胴部中央に粘土付着 底部木葉痕 (残) 口縁 1/8 胴～底 7/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド内 No.24+ かド 内 +
10 土師器 甕	口 (27.2) 底 (8.5) 高 35.6	(内) ヨコナデ 胴上ヘラナデ 胴下～底指ナデ (外) ヨコナデ 胴上ヘラナデ 胴下ヘラケズリ	砂礫多・砂粒・白色粒子 やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	かド + 周辺 +3+5+6+7 +20+26+29 +30+33+35

第3章 発見された遺構と遺物

No. 種類 器種	法量 (cm : g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
11 土師器 甕	口 (27.6) 底 6.4 高 34.0	(内) ロヨコナデ 脊ヘラナデ (外) ロヨコナデ 脊上ヘラナデ 脊下ヘラケズリ 外面上半スス付着 内面黒色化 (残) 口縁 2/8 脊下～底 8/8	砂礫・白色粒子・砂粒多 良 10YR5/3 にぶい黄褐	カド内 No.23
12 須恵器 甕	破片	(内) 指ナデ (外) 平行タタキ目 13・16 と同一個体 三毳産？	砂礫・白色粒子多・雲母微 やや良 7.5Y3/1 オリーブ黒	床上 +5cm No.14
13 須恵器 甕	破片	(内) 指ナデ? (外) 平行タタキ目→平行沈線 14 と同一個体 三毳産？	砂礫多・白色粒子やや多 やや良 10Y3/1 オリーブ黒	床上 +5cm No.15
14 須恵器 甕	破片	(内) 指ナデ (外) 平行タタキ目 13 と同一個体 三毳産？	砂礫・白色粒子多・雲母 微 やや良 7.5Y3/1 オリーブ黒	床直 No.16
15 焼成 粘土塊	長 4.0 幅 3.3 厚 2.4 重 19.02	塊状 全体的にちぎり取った状態 ヘラ状工具によるキズ、細い棒状工具による刺突あり	白色粒子・砂粒少・赤色 融解粒多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド
16 焼成 粘土塊	長 3.5 幅 4.3 厚 2.5 重 23.11	塊状 実測図表面にヘラ状工具によるキズ、草本植物の痕 跡あり 裏面と下端は断ち切った後軽く磨っている	白色粒子微・赤色融解粒少 良 7.5YR6/6 橙	覆土 d
17 焼成 粘土塊	長 3.6 幅 3.5 厚 1.5 重 10.82	塊状 全体的にちぎり取った状態 細い棒状工具による刺突あり	赤色融解粒極多・白色粒 子微 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土 a
18 焼成 粘土塊	長 4.1 幅 3.1 厚 2.2 重 15.81	塊状 全体的に調整なし 細い棒状工具による刺突あり	赤色融解粒多・白色粒子・ 砂粒少 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	カマド
19 焼成 粘土塊	長 3.6 幅 2.9 厚 1.3 重 10.42	扁平 表裏両面にヘラ状工具によるキズあり	赤色融解粒多・白色粒子 やや多 二次被熱 5YR5/6 明赤褐	覆土 d
20 礫	長 12.9 幅 7.1 厚 4.0 重 466.30	外面全体的に磨り面 表面熱によるハジケ	7.5YR5/3 にぶい褐	No.32
21 鉄製品 刀子?	長 4.3 幅 0.7 厚 0.6 重 2.53	刀子茎部の破片と考えられる。断面方形で、左右端とも欠損。上側は緩くカーブして いる。鋸ぐれが著しい。	床上 +10cm No.9	

きたものは、須恵器蓋 2 個体（第 254 図 1・2）、土師器長脛甕 3 個体（第 254 図 9・10・11）である。煙道は火床面から緩やかに立ち上がり、住居壁から 20cm ほど突出する。

遺物 遺物はカマド内を中心に出土している。カマド以外では、床面の炭化物集中内から須恵器壊（第 254 図 3）と須恵器甕の破片（第 255 図 12～14）が出土した。また、覆土内から刀子が出土している（第 255 図 21）。

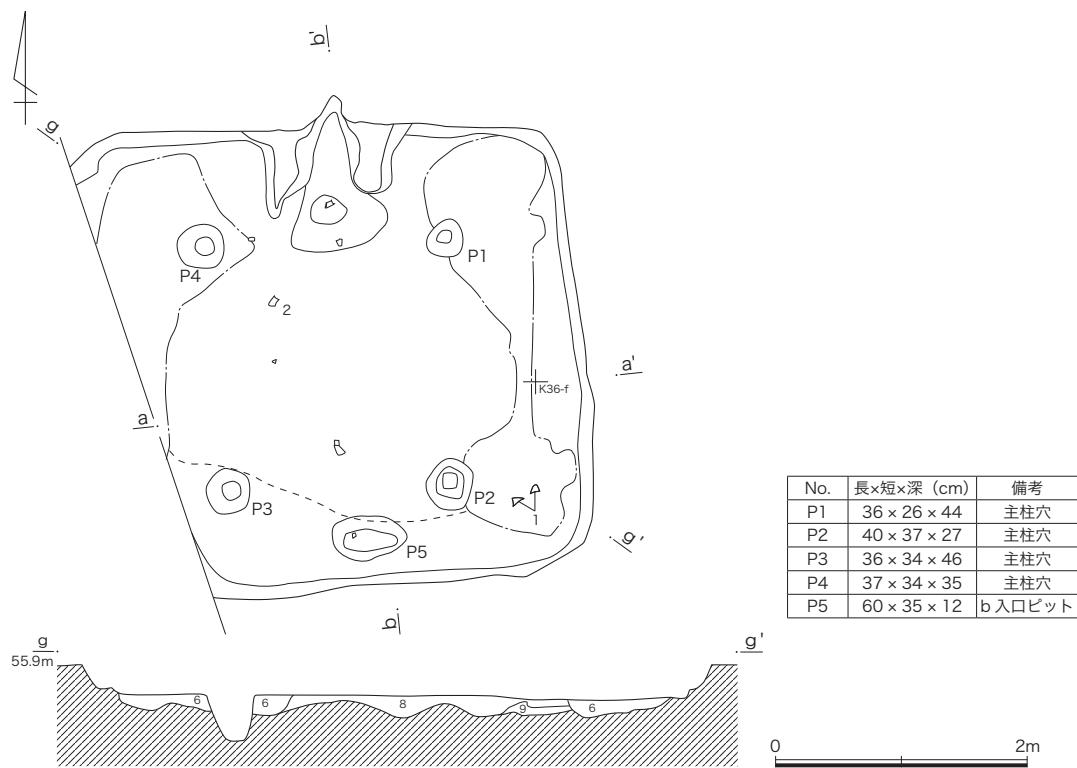
SI-1301b (第 256～258 図)

規模・形状 壁が残存していないため、規模や形状は不明である。貼床の範囲が SI-1301a よりも約 20cm 内側になることから、壁も SI-1301a に比べて 20cm ほど内側に構築されていたものと考えられる。

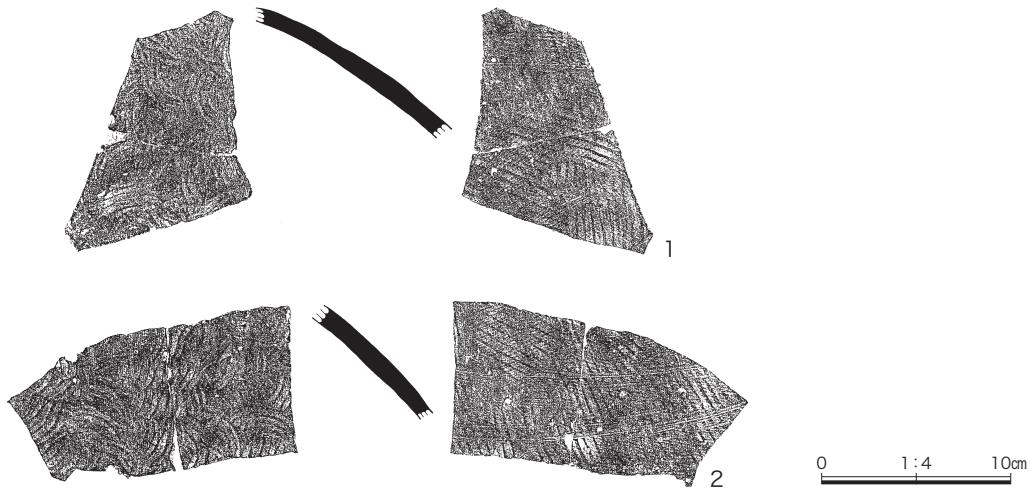
覆土 SI-1301a の貼床（4・5 層）と共に通である。

床面・貼床 ロームブロックを多く含む黒褐色土及び暗褐色土による貼床が施されている（SI-1301a 参照）。さらに旧床面を掘り下げると、住居四隅が掘り下げられた掘り方が確認された。SI-1301a の東壁は、SI-1301b 床面での東壁よりも 20cm ほど外側に構築されていることから、SI-1301a 床面を構築する際に住居を拡張したものと考えられる。

遺物 SI-1301b からは、須恵器甕の破片（第 257 図 1・2）が出土している。



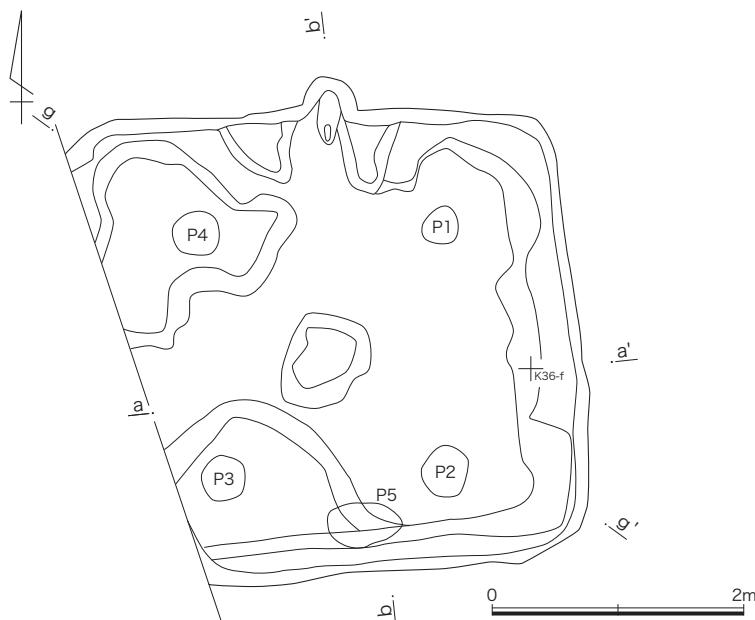
第256図 SI-1301b 穫穴住居跡 (1)



第257図 SI-1301b 穫穴住居跡出土遺物

第95表 SI-1301b 遺物観察表

No. 種類 器種	法量 (cm : g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状タタキ目 (外) 格子目状タタキ目→平行沈線 2 と同一個体 三毳産?	砂礫・白色粒子多・雲母少 やや良 N3/ 暗灰	旧床面
2 須恵器 甕	破片	(内) 同心円状タタキ目 (外) 格子目状タタキ目→平行沈線 1 と同一個体 三毳産?	砂礫・白色粒子多・雲母少 やや良 N3/ 暗灰	旧床面・P4



第258図 SI-1301b 穫穴住居跡（2）

SI-1302 (第259・260図・図版三二・五九)

位置 J34 グリッドに位置する。

規模・形状 東側1/3が調査区外となるため、東西の長さは不明である。南北は3.75m、東壁ラインの方向はN-10°-Eである。

覆土 ローム粒を多く含む暗褐色土を主体とし、南壁際にローム粒・焼土粒・炭化物粒を多く含む明黒褐色土が薄く堆積している（6層）。

壁・壁溝 確認面から20cmの深さで、壁はほぼ直に立ち上がる。壁溝は全周している。

床面・貼床 基本土層VII層上面を床面とし、貼床は施されていない。

入り口ピット 住居中央南壁寄りで1基確認された（P2）。上面は不整形で、極浅いピットである。

火処 調査区内では確認できなかったが、住居中央から北壁にかけて焼土や焼けた粘土がブロック状に堆積している点、調査区壁の断面に粘土粒を多量に含む土層（3層）が確認できる点から、調査区外の北壁にカマドが構築されていると考えられる。

その他の付帯施設 住居中央で小ピットが1基確認された（P1）。内部に焼けた粘土ブロックが堆積している。

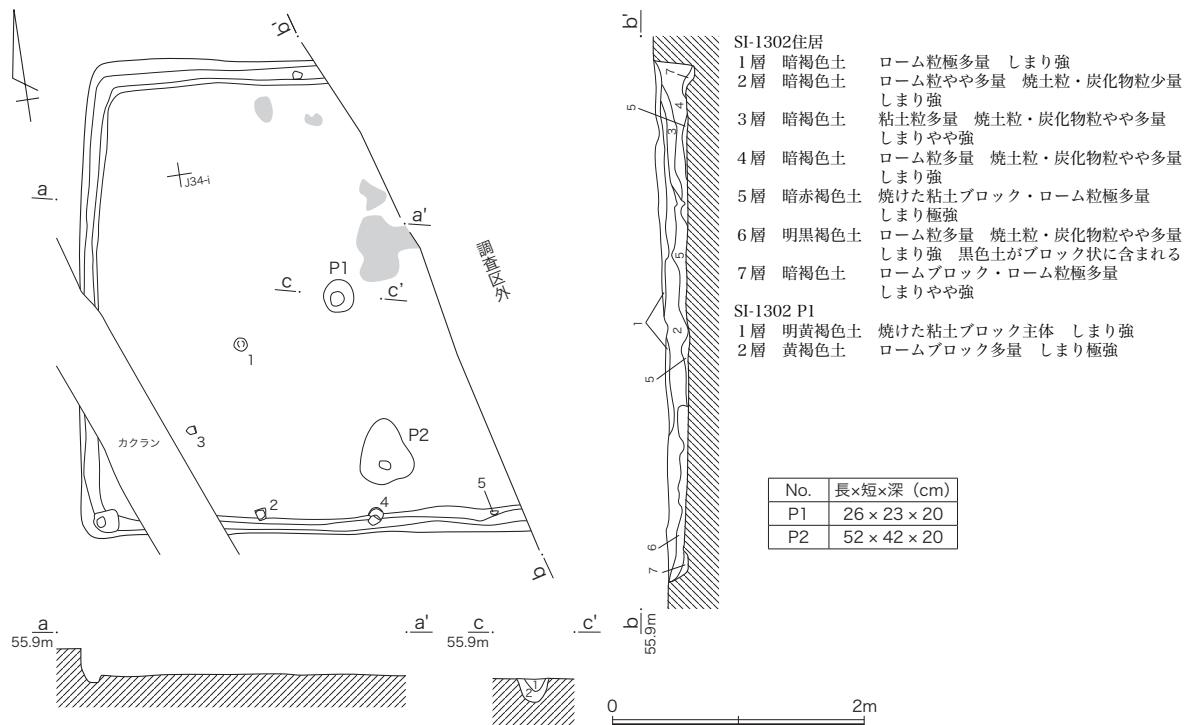
遺物 南壁壁溝内から出土した土師器壺と砥石（第260図4・5）は床面上から出土している。その他の遺物は、床面から10cm程度浮いた状態で出土している。

SI-1303 (第261・262図・図版三二・五九)

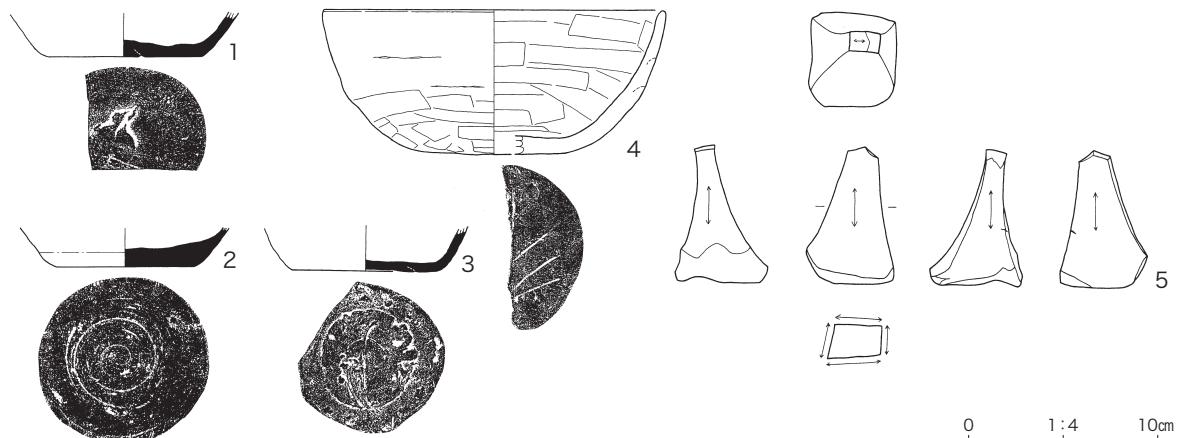
位置 J33 グリッドに位置する。

規模・形状 東西4.2m、南北3.2mの東西に長い方形を呈するが、北東隅が内側に入っているため歪んでいる。主軸方向はN-14°-Eである。

覆土 住居中央を切る攪乱を境として、東側はローム粒を極多く含む褐色土（3層）、西側は褐色土ブロックやローム粒を多く含む暗褐色土（4層・5層）を主体とする。また、床面上に粘土ブロックが点在してい



第259図 SI-1302 穫穴住居跡



第260図 SI-1302 出土遺物

第96表 SI-1302 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	底 (10.0) 高 (2.2)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後調整なし (残) 底 2/8 益子産?	砂礫・砂粒多 やや不良 7.5Y6/1 灰	床上 +10cm No.3
2 須恵器 壺	底 7.7 高 (2.2)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラ切り離し後調整なし (残) 底 6/8 益子産	砂礫・砂粒多 良 N4/ 灰	床直 No.4
3 須恵器 壺	底 7.2 高 (2.0)	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ (残) 底 8/8 益子産?	砂礫・砂粒多 やや良 5Y6/1 灰	床直 No.2

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
4 土師器 壺	口 (18.0) 高 (7.5)	(内) 口ヨコナデ胴弱いヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴下半ヘラケズリ 胴上半外面に輪積痕 底部木葉痕 (残) 3/8	砂礫・白色粒子少 やや良 10YR4/2 灰黄褐	床直 No.5
5 石製品 砥石	長 7.2 幅 4.9 厚 1.8 重 115.22	側面及び上面の5面使用。研ぎ減りが著しく、下端に向かって撥形に開く。底面に細かい刃潰し痕あり。表面にタール状の付着物が残る。	5Y7/2 灰白	床上 +5cm No.6

た（第261図網掛け部分）。

壁・壁溝 確認面から20cmの深さで、ややなだらかに立ち上がる。壁溝はカマド部分と住居北東隅以外で全周している。

床面・貼床 住居西側と北東隅にロームブロックによる貼床が確認された（8層）。基本土層VII層上面を床面とし、その上に薄い貼床を施している。

掘方 床下からピット2基（P1・P2）と縄文時代の陥し穴状遺構SK-1371が確認された。

入り口ピット 床下で確認されたP1が入り口ピットと考えられる。やや不整な橢円状を呈する。

火処 北壁中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁が残存しているが、上面の削平により遺存状況は悪い。袖は床面上に粘土ブロックを積み上げて構築し、内面はよく焼けている。内部には粘土ブロックが多く堆積し、その下に焼土・炭化物・灰が堆積していた（5層）。灰は焼土ブロックや炭化物の下に薄く堆積している。左袖奥の内側に円形の浅い掘り込みがあり、その内部には土師器小型甕の破片がまとまっていたが、復元はできなかった。また、内部中央には土師器小型甕（第262図5）と須恵器蓋（第262図1）が出土している。煙道はなだらかに立ち上がる。

遺物 住居西側中央部分で須恵器鉢（第262図4）、土師器甕の破片（第262図7）、砥石（第262図8）がまとまって出土しているが、出土量は少ない。

SI-1304（第263・264図・図版三二・五九）

位置 N42グリッドに位置する。

規模・形状 東西3.2m、南北2.6mの歪んだ方形を呈する。主軸方向はN-27°-Eである。

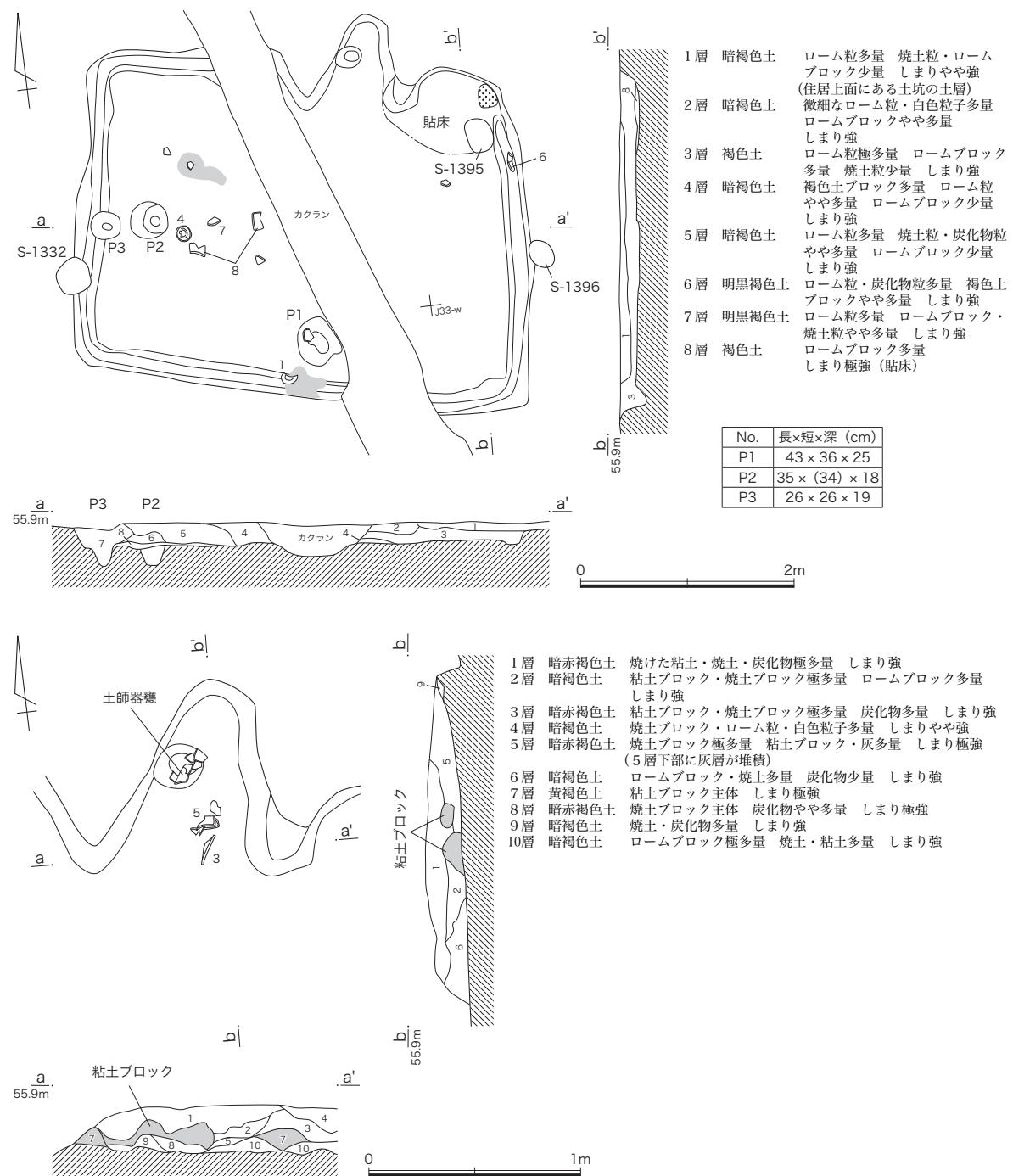
覆土 上層は焼土粒・炭化物粒を多く含む黒褐色土（1層）、下層はロームブロックを多量に含む褐色土（2層）を主体とする。また、カマド前の下層で粘性が強い黒褐色土（4層）、北東隅の壁際で焼土を多量に含む黒褐色土が確認された。下層は地山によく似ており、遺物も出土しないことから、床下覆土の可能性も高い。

壁 確認面から深さ20cmで、壁は全体的に崩れており、緩やかに立ち上がる。壁溝はない。

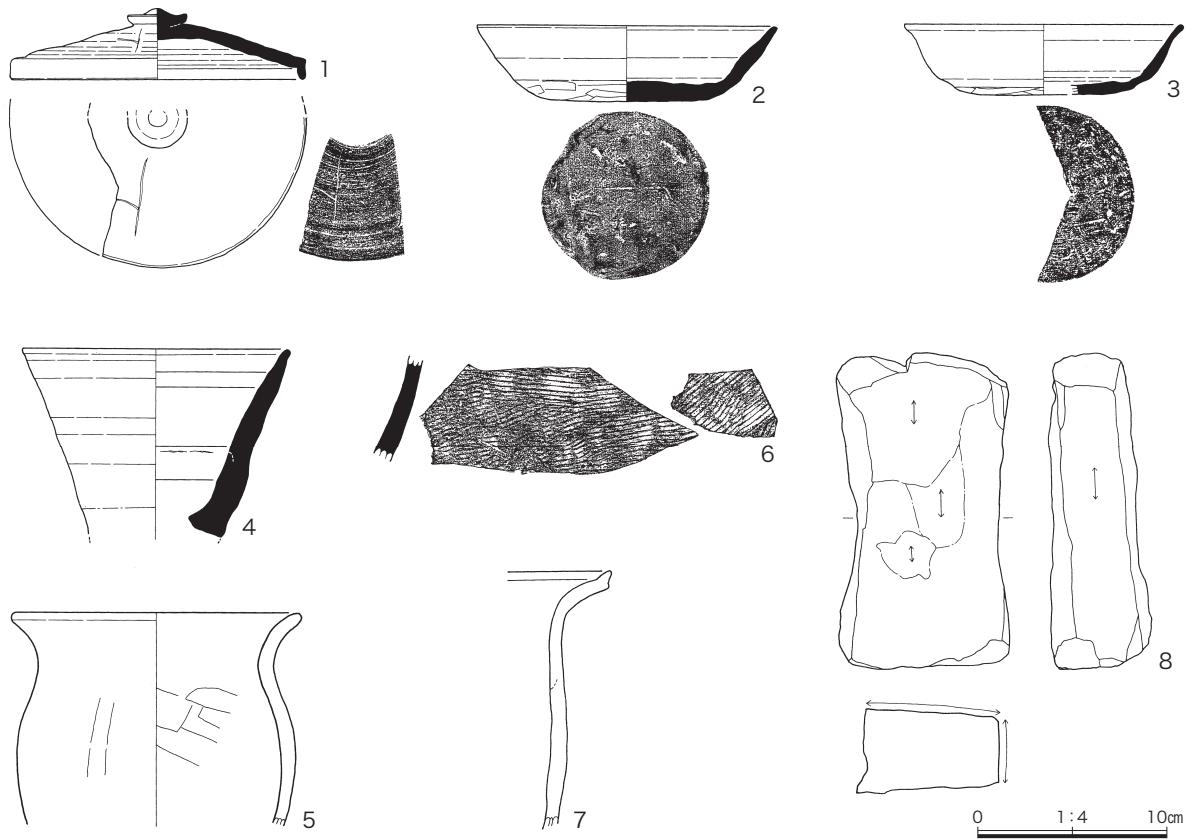
床面・床下 明確な硬化面は認められない。床下覆土（6層）と覆土下層（2層）も似ているため、床面の検出は困難であった。カマド袖とステップ状施設の底面が6層上面となっていることから、この面を床面と考えた。床下は中央が大きく凹んでいる。

ステップ状施設 北壁東側から南壁北側にかけて、L字形にステップ状施設が確認された。高さは5～10cm程度で、地山を掘り残して作られている。上面に特に硬化した部分は認められなかった。

火処 北壁中央にカマドを構築しているが、残存状況は極めて悪い。当初、左袖にあたる部分に残っていた粘土ブロックを断ち割ったところ、床面や壁からは離れて堆積している状況が確認されたため、このブロックは袖ではなく、構築材と覆土が混ざり合って堆積したものと考えた。続いて粘土ブロックを完全に取り除



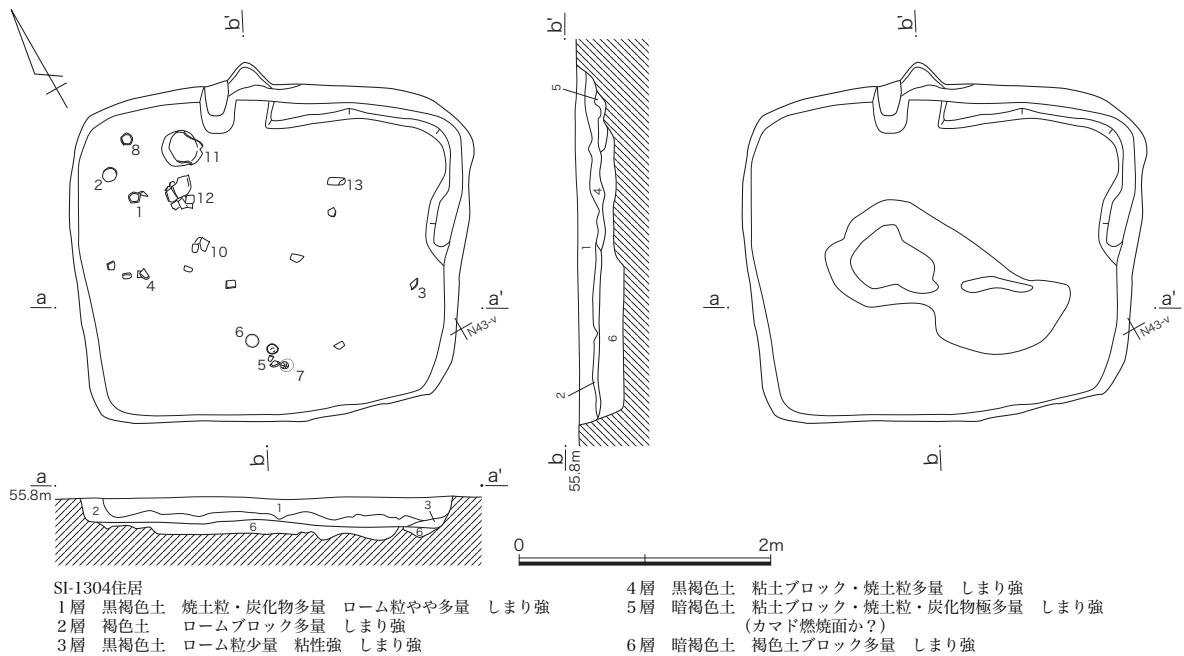
第261図 SI-1303 積穴住居跡



第262図 SI-1303出土遺物

第97表 SI-1303遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 蓋	端部径(15.6) 高(3.7) 撮部径(3.2)	内外面ともロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ 外面へラ記号有り(残) 3/8 益子産	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 2.5GY5/1 オリーブ灰	床直 No.3
2 須恵器 壺	底(14.9) 高 4.2	内外面ともロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ (残) 口 1/8 底 8/8 产地不明	砂礫多・黒色融解粒少 良 5Y5/1 灰	覆土 c
3 須恵器 壺	口(14.8) 底 7.2 高 3.8	内外面ともロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ→外周ロクロナデ (残) 底 3/8 新治産	砂礫多・砂粒少・雲母微 良 5P5/1 紫灰	床直 No.6
4 須恵器 甌?	口 14.2 高 (9.9)	内外面ともロクロナデ 底部近く回転ヘラケズリ 底部接合部分で欠損 (残) 7/8 益子産	白色粒子極多・砂礫多 良 5Y5/1 灰	床直 No.12
5 土師器 甌	口 (15.4) 高 (11.2)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ? 外面摩滅 (残) 2/8	白色粒子多・砂礫少 良 7.5YR4/4 褐	床上 +5cm No.1
6 須恵器 甌	破片	(内) 無文ナデ (外) 平行タタキ 益子産?	白色粒子多・砂礫少 やや良 N4/ 灰	床直 No.11
7 土師器 甌	破片	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ナデ? 内面に輪積痕残る	砂礫・砂粒多・雲母やや多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	床上 +5cm No.4
8 石製品 砥石	長 16.7 幅 9.1 厚 5.4 重 1118.44	2面使用 右側面強い使用痕 裏面は剥離して欠け	片岩 左側面に雲母付着	床直 No.9 + 10



第263図 SI-1304 竪穴住居跡

いたところ、地山が馬の背状に掘り残されている状況が確認できた。また、右袖はステップ状施設の先端部分と重なっており、地山の掘り残し等は確認できなかった。内部には粘土ブロック・焼土・炭化物が多く堆積していた（5層）。煙道は短く、緩やかに立ち上がる。

遺物 住居北西隅と中央南寄りでまとまって出土している。第264図11は床面上に直立した状態で、第264図12はつぶれた状態で出土した。また、第264図5～7は、床面上からまとめて出土している。

SI-1305（第265～267図・図版三二）

位置 N47グリッドに位置する。

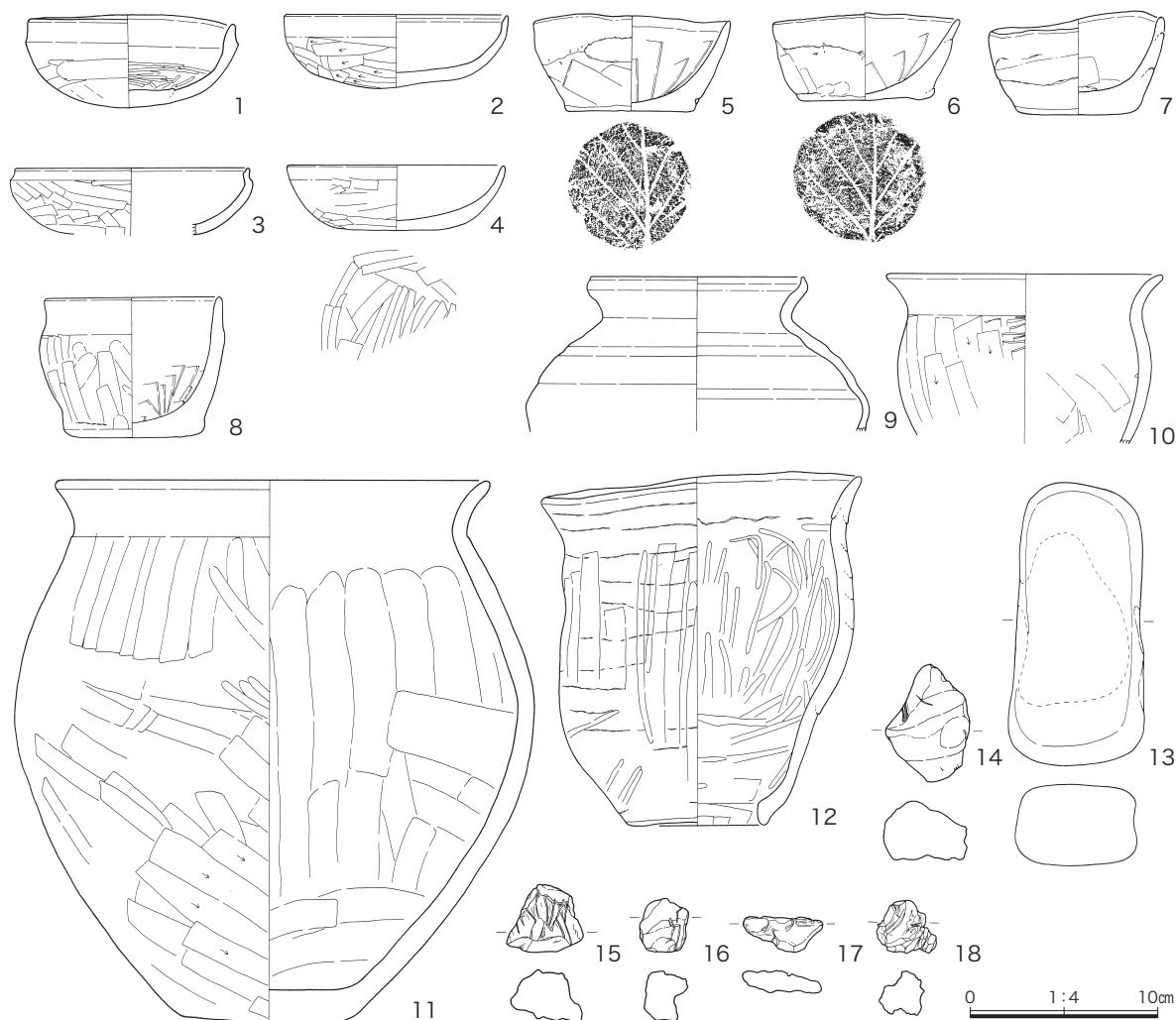
規模・形状 西側約1/2が調査区外となるため、全体のプランは不明であるが、おそらく住居中央がややふくらむ方形を呈するものと考えられる。調査区内での住居の規模は東西2.05m、南北2.85m、主軸の方向はN-65°-Eである。

覆土 覆土は黒褐色土と褐色土が互層をなしており、住居中央部部分がくぼむレンズ状に堆積する。確認面よりも上の地山は低地に堆積した黑色土であり、住居構築時には調査区南側の低地はほぼ埋没していたものと考えられる（第5節低地の調査参照）。

壁・壁溝 確認面から35cmの深さで、壁はややなだらかに立ち上がる。調査区壁で住居断面を観察したことろ、住居壁は確認面よりもさらに20cmほど高くなることが確認された。壁溝は南壁の一部のみ確認されている。この壁溝は、ステップ状施設を切って掘られている。

床面・貼床 ロームブロックによる貼床を施しており、全体的に硬化していた。

ステップ状施設 住居南壁にはステップ状の高まりが確認された（第266図d-d'断面図）。掘り方面の上に粘土、ロームブロック、炭化物、灰が70cm×25cmの範囲に5cmほどの高さに堆積しており、さらにその上に住居貼床と同じロームブロックを主体とする土層が堆積していた。ステップの上面は、周辺の床面と同じく硬化していた。



第264図 SI-1304出土遺物

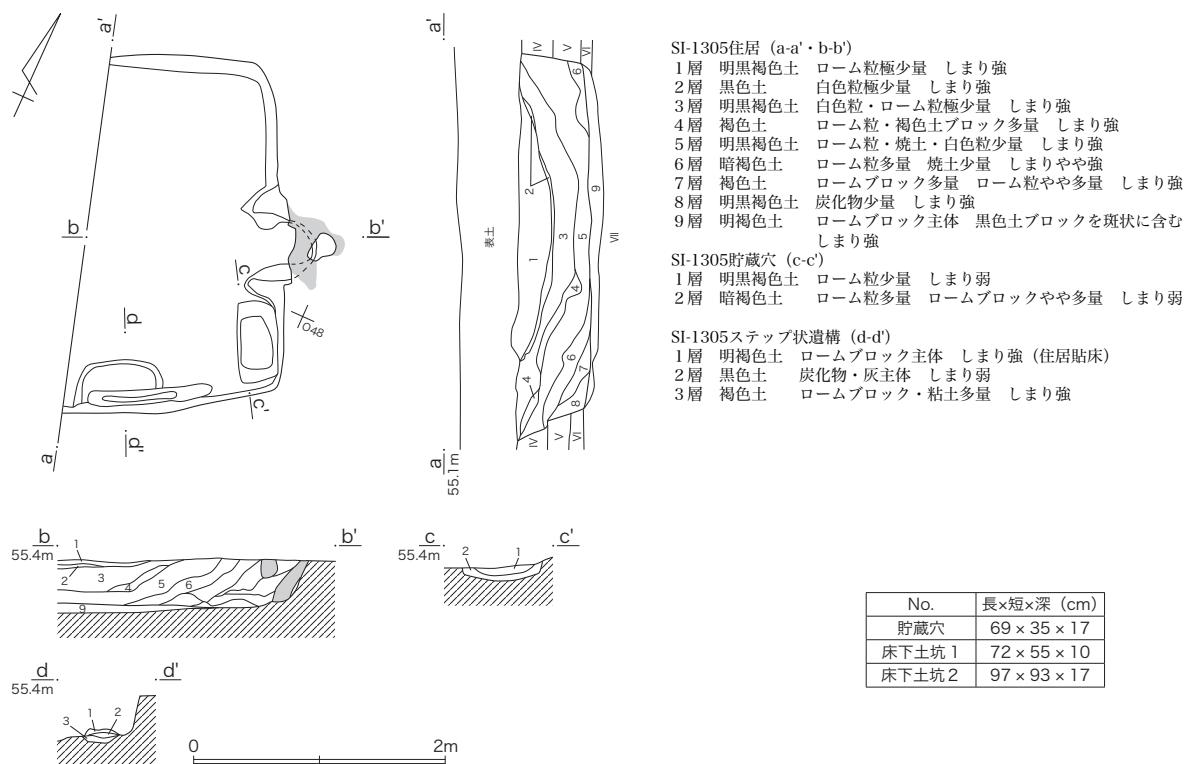
貯蔵穴 住居南東隅で、南北に長い長方形を呈する貯蔵穴が確認された。内部には、住居覆土と似る黒褐色土が堆積していた。

火処 東壁のほぼ中央にカマドが構築されている。両袖と奥壁、天井の一部が残っており、火床面から天井下部までの高さは約20cmである。焚き口の天井部分は失われているが、煙道に近い部分の天井がブリッジ状に残っている（第266図カマド断面図網かけ部分）。天井下部は被熱により著しく赤化、硬化していた。他にも、天井の崩落土と考えられる土層が焚き口にまとまって堆積していた（2層）。両袖は床面上に粘土を積み上げて構築しており、内側はよく焼けていた。内部には粘土・炭化物・焼土が多く堆積しており、焼けて硬化が著しい（4・5層）。底面には上から焼土層、灰層、炭化物層が薄く堆積していた（7層）。煙道は火床面から急角度で立ち上がり、住居壁から45cmほど突出する。煙道の奥壁には粘土が約30cmの厚さで貼り付けられており、表面約5cmほどが焼けて著しく硬化している。

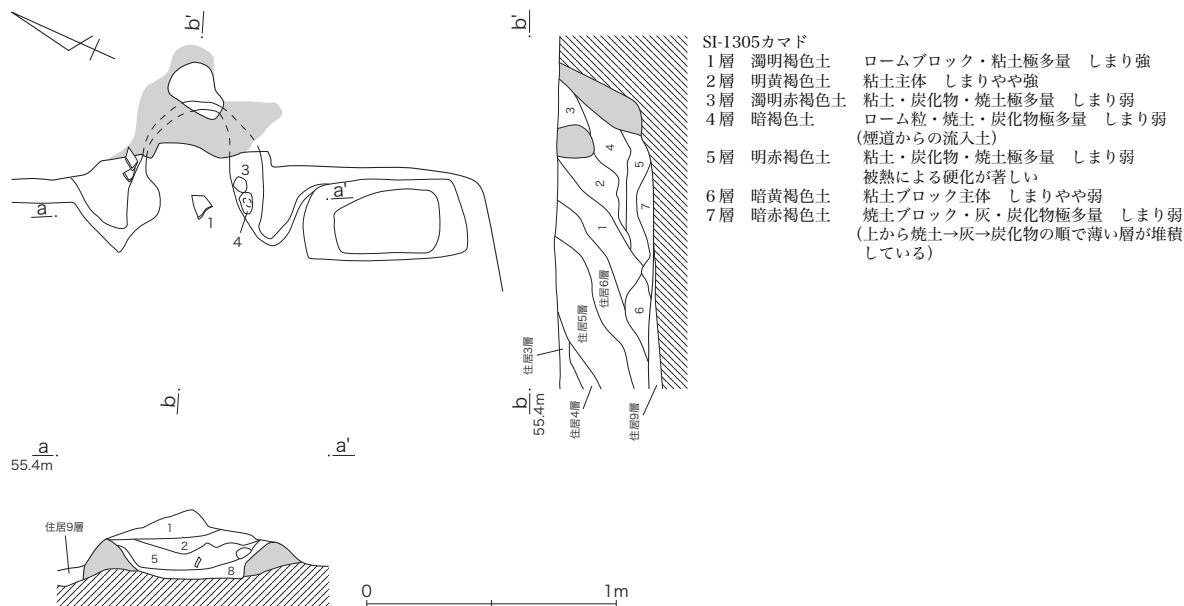
床下土坑 貯蔵穴周辺の貼床除去後、床下から土坑状の掘り込みが確認された（土坑1・第267図左）。東西に長い楕円状で、極浅い土坑である。焼土を主体とする覆土はよくしまっており、極めて硬い。さらに、その土坑の下から円形を呈する掘り込みが確認された（土坑2・第267図右）。土坑2の覆土はロームブロックが主体となっており、こちらもかなりしまっている。当初、土坑1は土坑2の覆土の一部と考えたが、層

第98表 SI-1304 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 壺	口 11.0 高 5.0	(内) ヨコナデ胴横方向ミガキ→雑な放射状ミガキ (外) ヨコナデ胴粗いヘラケズリ・ヘラナデ 内面漆仕上げ 調整粗い (残) 8/8	白色粒子多・砂礫やや多 良 7.5YR5/3 にぶい褐	床上 +15cm No.15
2 土師器 壺	口 11.9 高 3.9	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 内面漆仕上げ 底部歪みあり (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 7.5YR5/4 にぶい褐	床上 +5cm No.19
3 土師器 壺	口 (12.5) 高 (3.5)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 (残) 2/8	白色粒子少 良 10YR3/1 黒褐	床上 +15cm No.1
4 土師器 壺	口 (11.6) 高 3.5	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ底ヘラケズリ 内面漆仕上げ? (残) 3/8	白色粒子多 やや良 10YR4/1 褐灰	床上 +10cm No.11 + 12
5 土師器 壺	口 10.4 底 6.8 高 5.1	(内) ヨコナデ・ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴弱いヘラナデ 底部木葉痕 輪積痕残る (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.24
6 土師器 壺	口 10.0 底 7.4 高 4.6	(内) ヘラナデつけ (外) 粗いユビナデ 底部木葉痕 (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.20
7 土師器 壺	口 9.3 底 6.6 高 5.1	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ胴粗いユビナデ 輪積痕残る (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/4 にぶい赤褐	床上 +5cm No.21 + 22 + 23
8 土師器 壺	口 9.5 底 7.5 高 7.6	(内) ヨコナデ・底部近くヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴粗いヘラナデ 輪積痕残る (残) 8/8	白色粒子多・砂礫微 やや良 10YR3/1 黒褐	床上 +5cm No.18
9 須恵器 甕	口 (11.4) 大 (18.2) 高 8.4	内外面ともロクロナデ (残) 1/8 湖西産	黒色融解粒やや多・白色 粒子多 良 5YR6/1 灰	カマド
10 土師器 甕	口 (14.8) 高 (9.0)	(内) 口～胴上半ヨコナデ胴下半弱いヘラナデ (外) ヨコナデ胴弱いヘラケズリ (残) 1/8	雲母多・砂礫少 良 10YR4/2 灰黄褐	床上 +5cm No.7
11 土師器 甕	口 23.0 大 26.5 底 8.0 高 28.7	(内) ヨコナデ胴弱いヘラナデ (外) ヨコナデ胴弱いヘラケズリ 内外面ひび割れ強 底部やや丸みをおびる (残) 3/8	砂礫・砂粒・白色粒子多 良 7.5YR6/6 橙	床上 +5cm No.17
12 土師器 甕	口 17.1/18.1 底 7.6 高 18.6	(内) ヨコナデ胴縦方向ミガキ底部近くヘラナデ・ヘラ ケズリ (外) ヨコナデ胴弱いヘラケズリ 大きく歪む 内外面に輪積痕残る 外面にタール状の付着物 (残) 8/8	白色粒子多・砂礫少 良 5YR5/6 明赤褐	床上 +5cm No.16
13 焼成 粘土塊	長 5.6 幅 4.6 厚 3.0 重 47.90	塊状 実測図表面は握ったように指の痕が残る 裏面はちぎり取った状態 表面左上にヘラナデ	赤色融解粒・白色粒子多 良 5YR6/6 橙	覆土 a
14 礫	長 15.0 幅 7.2 厚 4.5 重 795.35	断面隅丸方形状 表面に煤・タール状の付着物 側面に凹みあり	7.5YR6/2 灰褐	床上 +10cm No.3
15 焼成 粘土塊	長 3.6 幅 4.1 厚 2.8 重 21.29	塊状 細かい粘土塊をまとめて握った状態 下端はちぎり取った状態 全体的に鋭いヘラ状工具によるキズあり	赤色融解粒・白色粒子多 良 7.5YR6/6 橙	覆土 a
16 焼成 粘土塊	長 3.0 幅 2.0 厚 2.6 重 11.82	塊状 表面は特に調整なし ヘラ状工具によるキズあり	赤色融解粒・白色粒子多 良 7.5YR6/6 橙	覆土 a
17 焼成 粘土塊	長 1.8 幅 4.1 厚 0.6 重 5.94	扁平 粘土紐状の塊をちぎり取った状態 ヘラ状工具によるキズあり	白色粒子微 漁 10YR7/6 明黃褐	覆土 a
18 焼成 粘土塊	長 2.8 幅 3.1 厚 2.1 重 9.07	塊状 表面に棒状工具によるキズ、刺突あり	白色粒子微 漁 10YR7/6 明黃褐	覆土 a



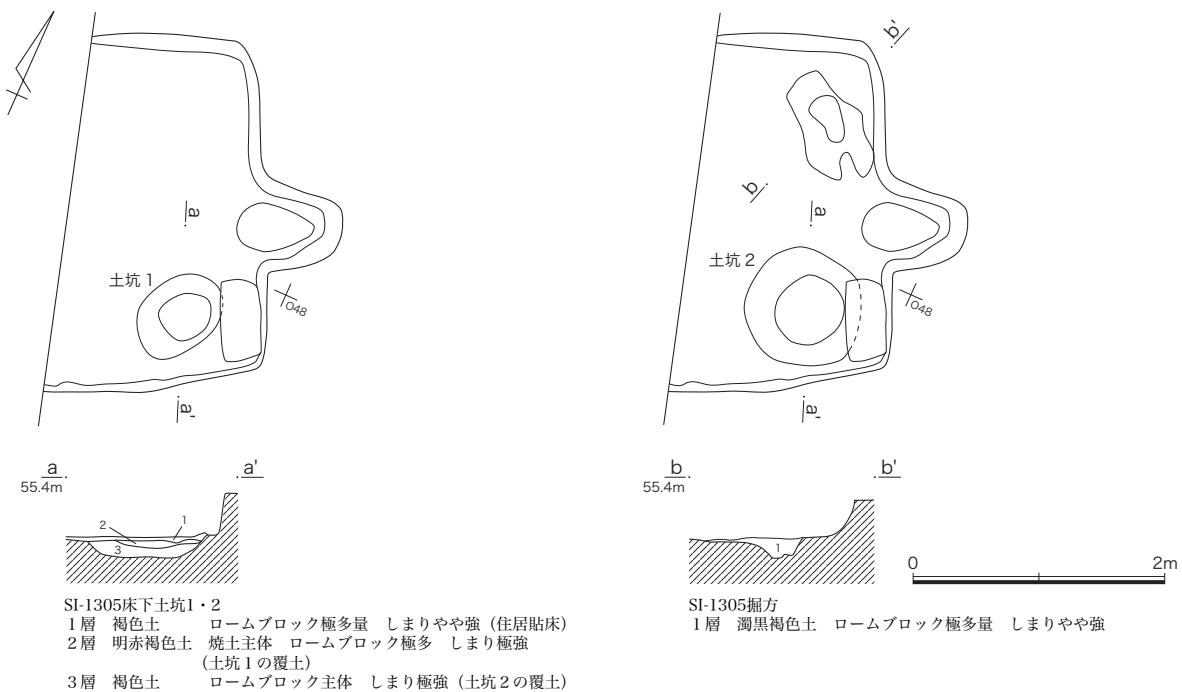
第265図 SI-1305 穫穴住居跡



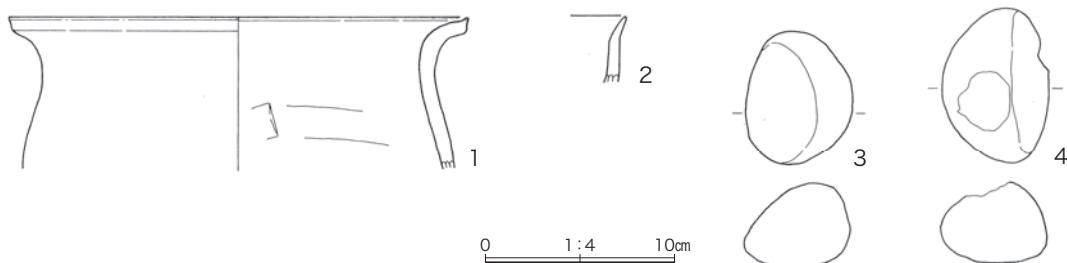
第266図 SI-1305 カマド

の境がはっきりしており、土坑2の底面が著しく硬くしまっていることから、別の土坑として扱った。また、北東隅の床下にも掘り込みが確認されたが、こちらの掘り方は不整形で、明確な土坑状にはなっていなかった。

遺物 出土遺物は少なく、カマド左袖に土器片（第268図2）、右袖に拳大の礫（第268図3・4）が貼り付いた状態で出土している。



第267図 SI-1305 床下土坑



第268図 SI-1305 出土遺物

第99表 SI-1305 遺物観察表

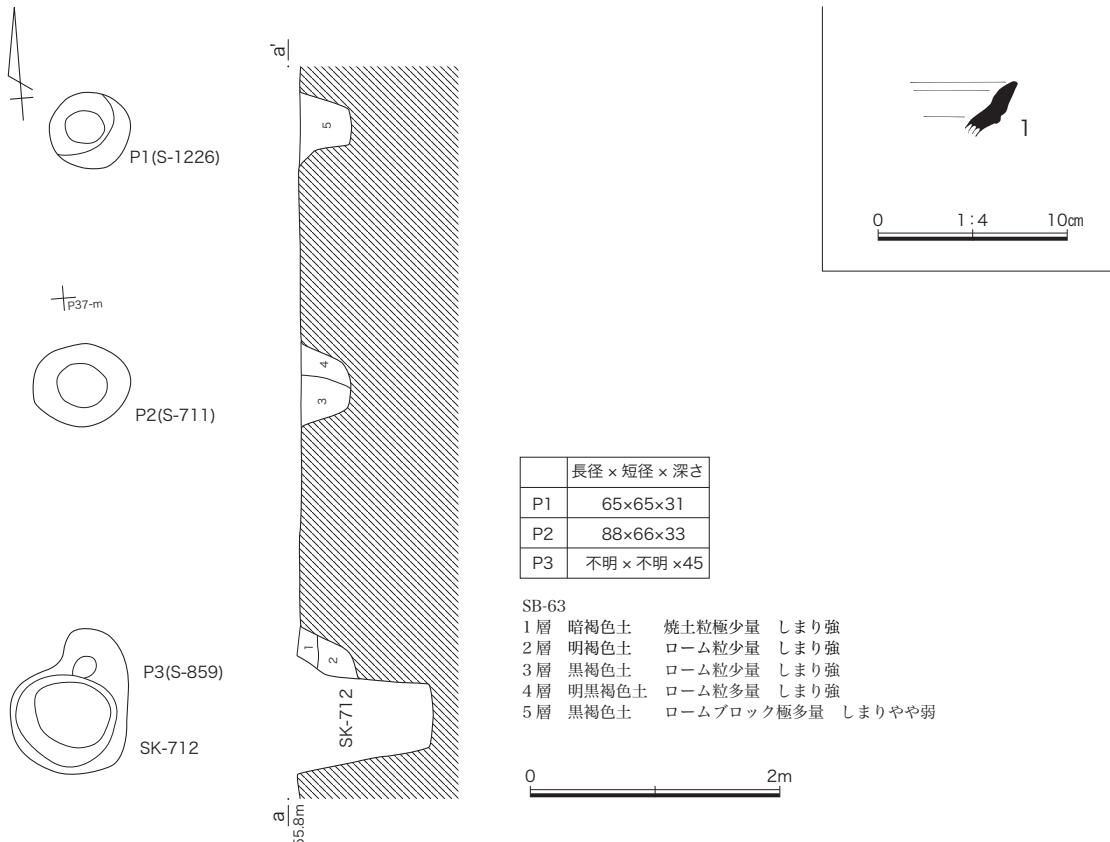
NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 土師器 甕	口 (24.0) 高 (8.0)	(内) 口ヨコナデ体ヘラナデ (外) 口ヨコナデ体丁寧なナデ (残) 口～体 1/8	砂粒多・雲母少 良 10YR5/4 にぶい黄褐	カマド内 No.1
2 土師器 甕？	(破片)	(内) 口～体ヨコナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ	砂礫多・白色粒少 良 10YR3/1 黒褐	覆土
3 礫	長 7.0 幅 1.6 厚 4.3 重 183.71	表面にタール状の付着物	5Y7/1 灰白	カマド右袖 No.4
4 礫	長 8.1 幅 5.7 厚 4.2 重 207.25	中央一部欠け 全体にスヌ状の付着物	5Y7/1 灰白	カマド右袖 No.5

(2) 堀立柱建物跡

古墳時代から平安時代にかけての堀立柱建物跡は16棟確認された。いずれも、低地A南側の遺構群に含まれている。堀立柱建物跡の時期比定は、まず遺物の有無および他遺構との重複関係から行った。出土遺物もなく、重複関係もない遺構については、(1) 柱穴の掘方や覆土が時期比定された他の堀立柱建物跡と類似しているか (2) 柱間の距離や柱列の軸方向が安定しているか (3) 住居群の主軸方向と柱列の軸方向が同じ方向に向いているか、という基準に基づいて判断した。時期比定の根拠については各遺構の説明の中に記述したが、調査者の恣意的な分類となってしまっている感も否めない。ここで時期を比定できなかったものについては第4節で扱っているので、あわせて参照されたい。なお、個々の柱穴に独立した遺構番号を付して調査しているため、図中の柱番号の横に調査時の遺構番号を合わせて記載した。

SB-63 (第269図)

位置 P37グリッドに位置する。重複関係 SK-712に切られる。規模・形状 東側が攪乱により失われているため、建物全体の規模、形状は不明である。柱間は、P1-P2間が200cm、P2-P3間が200cmである。柱穴の平面形は、P1・P2が径65cmの円形、P3はSK-712と重複するため不明である。深さはP3が深く45cm、その他の柱穴は約30cmである。覆土 暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。柱痕はいずれのピットでも確認できなかった。遺物 P3とSK-712の覆土一括遺物として、須恵器の口縁部破片が出土している(第269図1)が、どちらのピットから出土しているかは不明である。



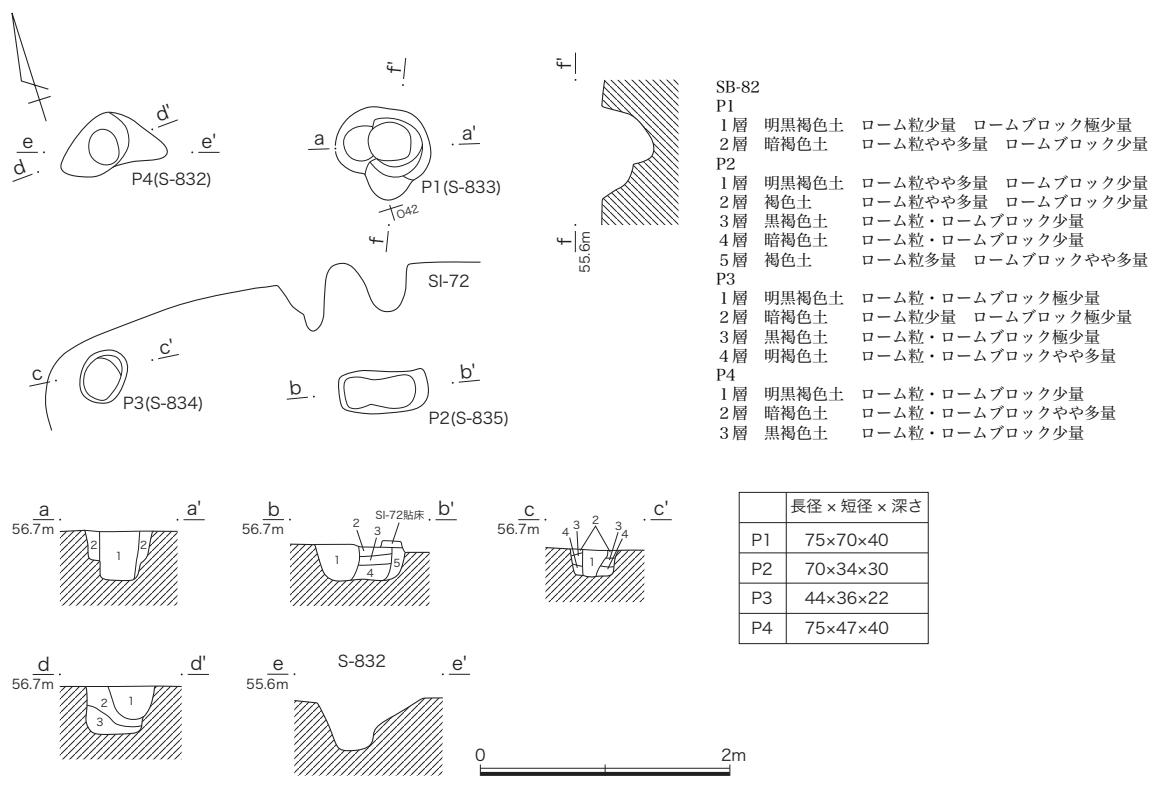
第269図 SB-63 堀立柱建物跡および出土遺物

SB-82 (第270図・図版三三)

位置 N41・42 グリッドに位置する。重複関係 P2・P3 が SI-72 穫穴住居跡と重複する。柱穴の上面に SI-72 の貼床が施されていることから、SB-82(旧)→SI-72(新)である。規模・形状 1間×1間の側柱式で、南北長 1.9 m、東西長 2.2 m である。北東・北西隅柱(P1・P4)の深さは 38cm、南東・南西隅柱(P1・P3)の深さは 20~28cm であるが、P1・P3 の上部は 穫穴住居跡に切られているため浅くなつておらず、元々は 4 本ともほぼ同じ深さであったと考えられる。北辺に直交する軸の傾きは N-17°-E である。覆土 全ての柱穴で柱痕状の土層が認められた。いずれも明黒褐色土を主体とする。柱痕の径は P3 のみ細く 10cm 程度、残りの 3 本は 30cm 程度である。P2・P3 では版築状の埋め方が確認された。遺物はない。

SB-83 (第271図・図版三三)

位置 N41 グリッドに位置する。重複関係はない。規模・形状 北側が農業用水路に切られて失われているため、建物全体の規模・形状は不明である。柱間は、南北柱列の P1-P2 間が 260cm、P2-P3 間が 215cm、東西柱列の P3-P4 間、P4-P5 間とも 180cm である。深さは P2 が 32cm と浅く、他の柱穴は 45~55cm である。柱穴の平面形はいずれもやや角張っており、特に P3・P5 が長軸 75cm、短軸 55~65cm とやや大きめの隅丸長方形を呈する。P1・P2 は長軸 60cm、短軸 40~50cm の長楕円形、P4 は径 35cm のやや歪んだ円形を呈する。P2・P3 は底面に柱の当たりが確認された。南辺に直交する軸の傾きは、N-31°-E である。覆土 暗褐色土を主体とするが、P2 のみロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。P4 には径 15cm 程度の柱痕状の土層が認められた。P3 も本来は柱痕状の土層があったものと考えられるが、調査記録の不備により確認できなかった。遺物は出土していないが、掘り方の形状と覆土の特徴

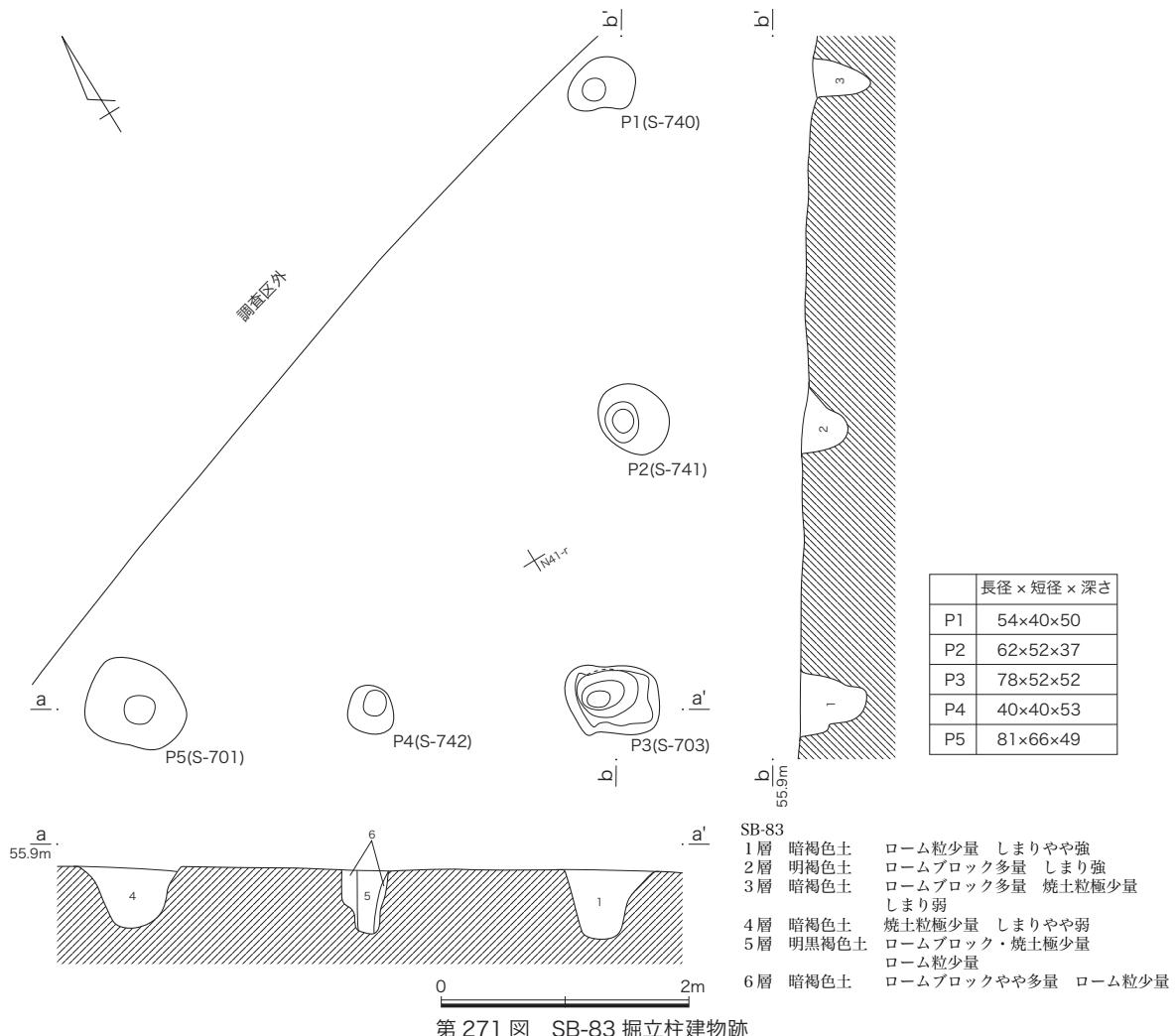


第270図 SB-82 掘立柱建物跡

が他の古墳時代から平安時代の掘立柱建物跡と似ている点から、当該時期の遺構として掲載した。

SB-84 (第 272 図・図版三三)

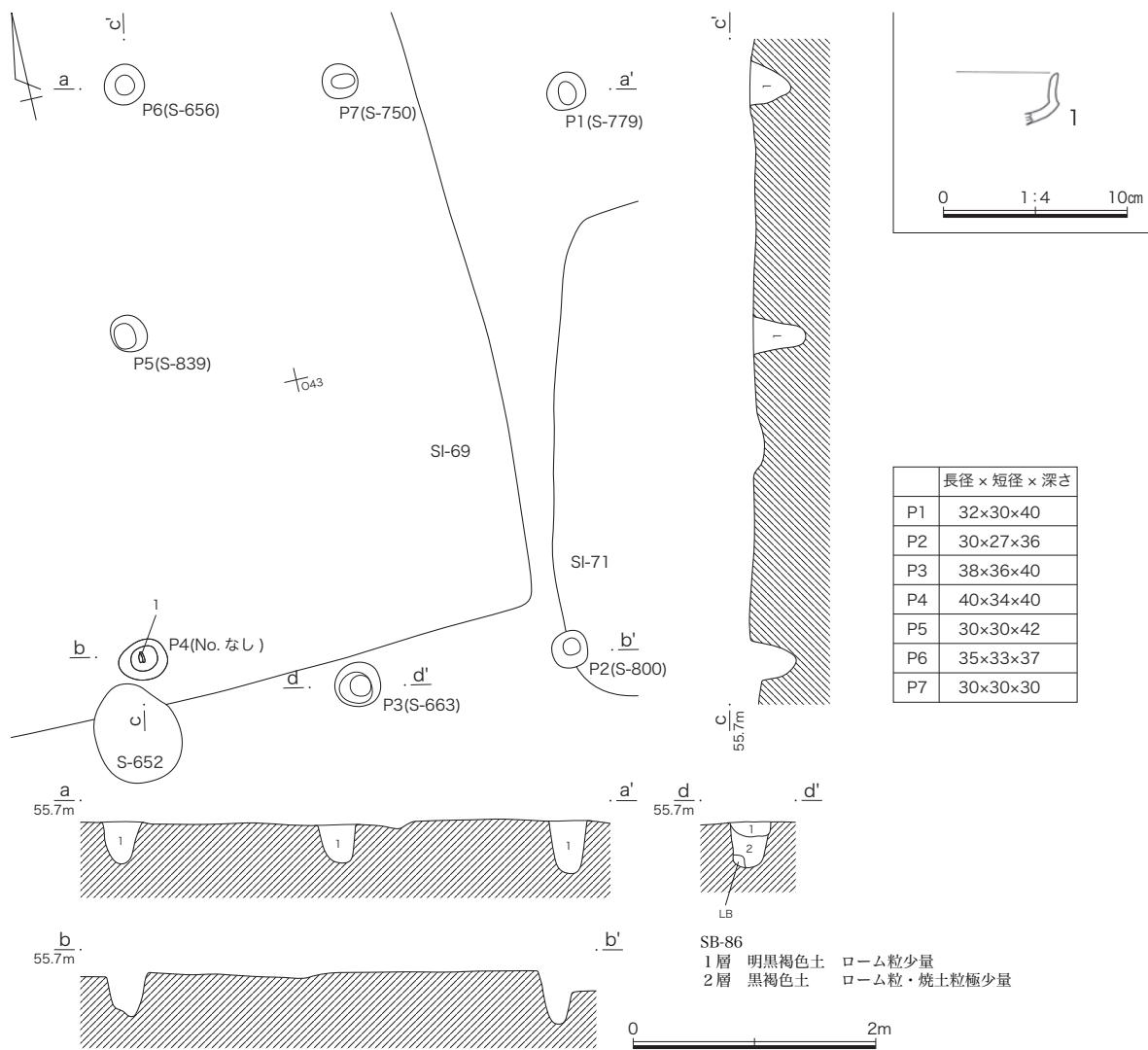
位置 N42 グリッドに位置する。重複関係はない。規模・形状 1 間×1 間の側柱式で、南北長 1.7 m、東西長 1.9 m である。東側柱列の 2 本 (P1・P2) は深さ 50cm、西側柱列の 2 本 (P3・P4) は深さ 32～40cm と東側柱列に比べて浅くなっている。覆土 暗褐色土を主体とし、ローム粒などの内容物は少ない。



また、しまりは弱い。P1・P2は調査時の記録漏れにより、覆土の状況は不明である。柱痕は確認されなかつた。遺物は出土していない。

SB-86 (第273図・図版三三)

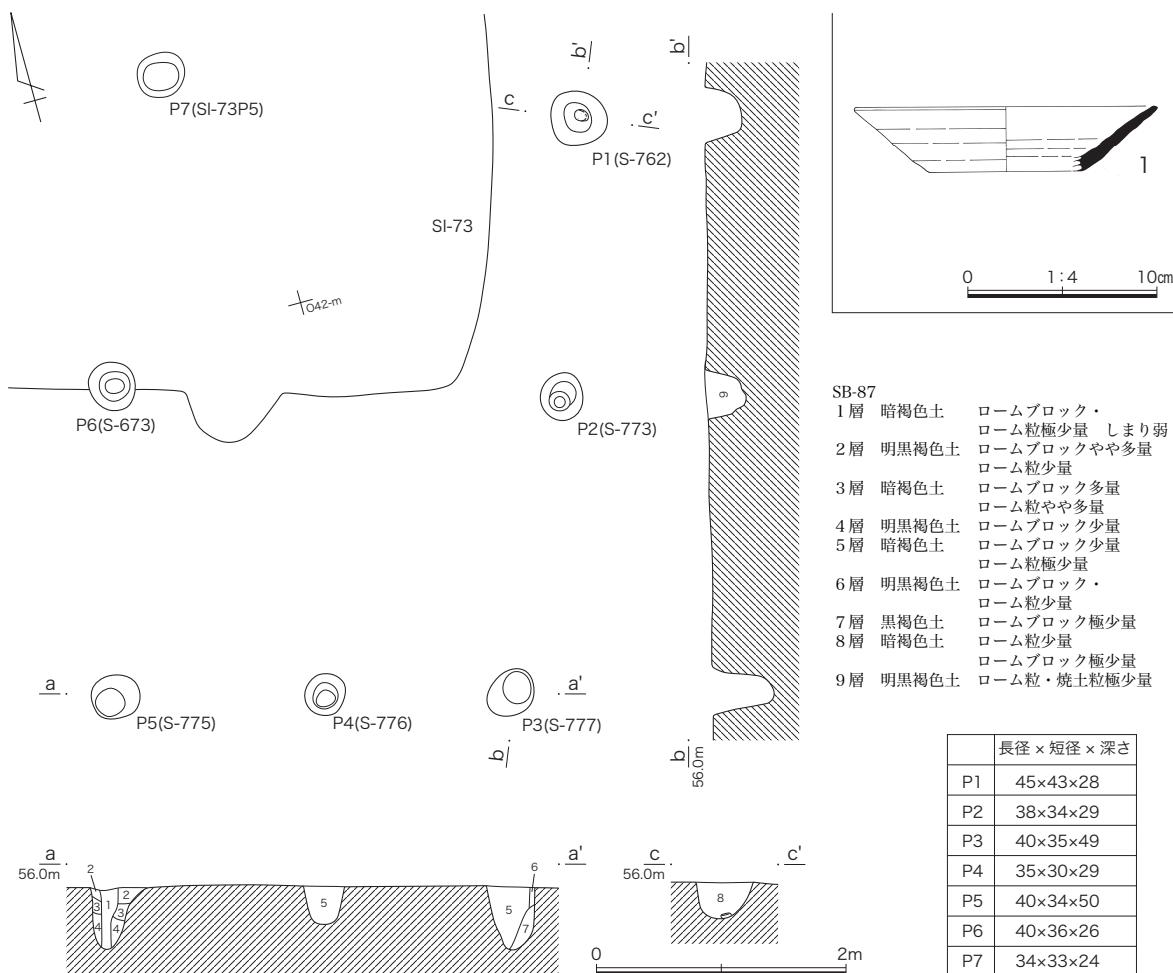
位置 O43グリッド杭を囲むように位置する。P2がSI-71竪穴住居跡と、P4～P7がSI-69竪穴住居跡と重複する。P4～P7はSI-69竪穴住居跡の貼床を切っているため、SI-69(旧)→SB-86(新)である。P2とSI-71竪穴住居跡の新旧関係は不明である。規模・形状 2間×2間の側柱式で、南北長4.7m、東西長3.5mである。南北柱列の柱間は、P4とP5の間が260cm、P5とP6の間が200cmで北側によっている。南北柱列の東側は、中間の柱がSI-71竪穴住居跡と重複して失われているため、柱間の長さは不明である。東西柱列の柱間は180～190cmである。柱穴の平面形は径28～30cmの円形である。深さは30～48cmで、P4・P6・P7がやや浅い。北辺に直交する軸の傾きはN-15°-Eである。覆土 黒褐色土を主体とし、ローム粒などの内容物は少ない。いずれの柱穴でも柱痕は確認されなかつた。P2・P4は調査時の記録漏れにより、覆土の状況は不明である。遺物 P4覆土中から土師器壺の口縁部破片が出土している(第273図1)。



第273図 SB-86掘立柱建物跡および出土遺物

SB-87 (第274図・図版三三)

位置 O42グリッドに位置する。P6・P7がSI-73竪穴住居跡と重複する。重複部分の土層図が記録されていないが、調査者の所見によれば、SB-87(旧)→SI-73(新)である。規模・形状 2間×2間の側柱式と考えられるが、東西柱列北側の中間柱はSI-73竪穴住居跡に切られ失われている。規模は南北長5.0m、東西長3.4mであるが、南東隅柱(P3)がやや北寄りにあるため、南北柱列の東側がやや短くなっている。柱間は南北柱列の西側が250cm、東側が230cm、東西柱列が150～170cmとなっている。柱穴の平面形は隅柱が長軸35～42cm、短軸30～40cmの橢円形、中間柱が径30～35cmの円形を呈する。深さは、隅柱のうちP1・P3・P5が45cm程度であるのに対し、P7が30cmとやや浅くなっている。中間柱は30～35cmである。柱穴のうち、P2・P4・P6には、底面に柱の当たりが確認された。また、P1の底面に接して円形の扁平な礫があり、柱の当たりと考えられる。北辺に直交する軸の傾きはN-22°Eである。覆土 暗褐色土及び明黒褐色土を主体とする。P5には径15cm程度の柱痕状の土層が認められた。P6・P7は調査時の記録漏れから、覆土の状況は不明である。遺物 P5の柱痕部分から、須恵器壺の破片が出土している(第274図1)。



第274図 SB-87 掘立柱建物跡および出土遺物

SB-97 (第275図・図版三四)

位置 O40・P40 グリッドに位置する。重複関係はない。規模・形状 南側が現代の水路に切られて失われているため、建物全体の規模、形状は不明である。柱間は、P1-P2 間が 220cm、P2-P3 間が 180cm、P1-P4 間が 260cm である。柱穴の平面形は、P1・P2・P4 が径 35～40cm の円形、P3 が長軸 75cm、短軸 45cm の橢円形を呈する。P3 の長軸は建物の中央に向かってやや斜めにずれている。深さは P2 が浅く 30cm、その他の柱穴は 45～55cm である。覆土 4 本とも黒褐色土を主体とする径 10～20cm の柱痕状の土層が認められた。遺物 P3 から土師器壺、P4 から刀の破片が出土している（第275図1・2）。

SB-98 (第276・277図・図版三三・六〇)

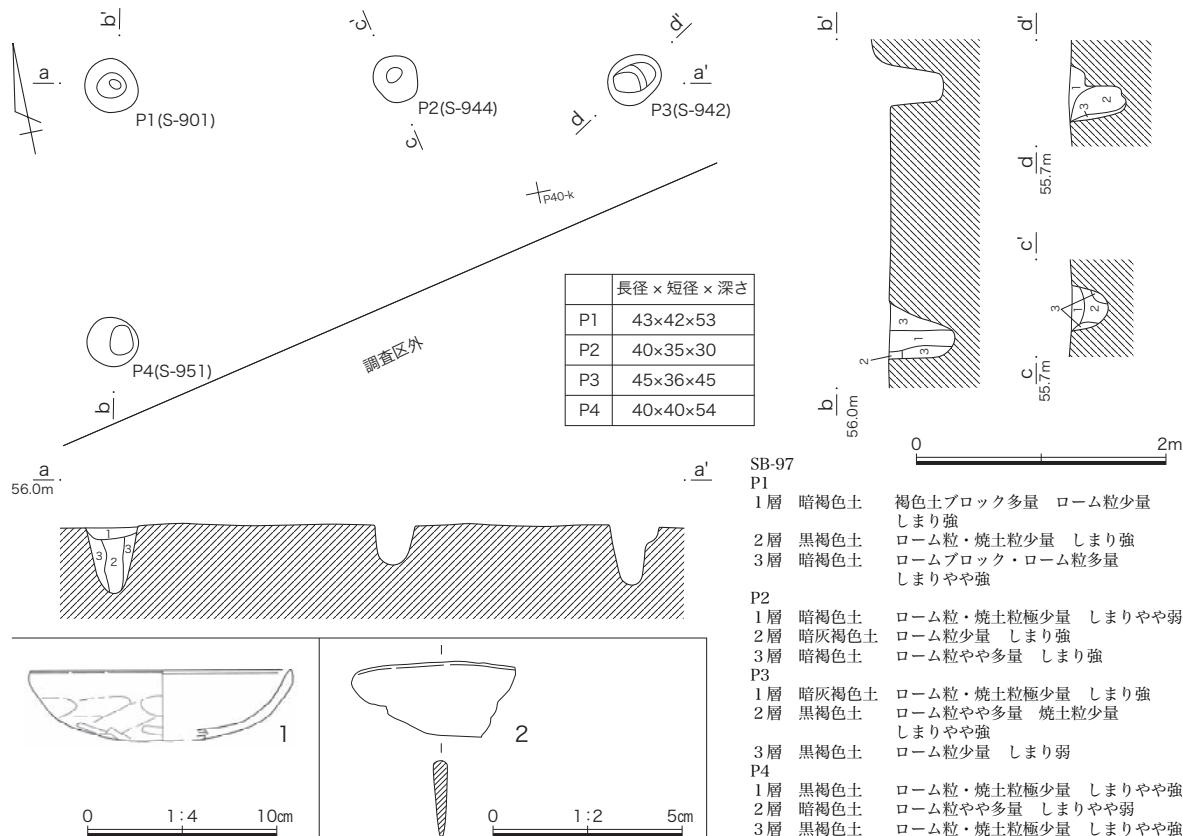
位置 P37・38 に位置する。重複関係はない。規模・形状 3間×2間の側柱式だが、北東隅のP1 が攪乱によって失われている。南北長が 7.7m、東西長が 5.3m である。柱間は、南北柱列が 230～310cm、東西柱列が 260～270cm である。柱穴の平面形は、上部が大きく削平されていることもあり、いずれも不整形を呈する。P2・P3・P8 は 2 基以上の土坑の切り合いが確認されており、一部柱を建て替えた可能性もある。柱穴の深さは、30～40cm である。南北柱列の南側、北側にも、柱筋にそって同規模の土坑 SK-718・859 が確認されており、SB-98 を構成する柱となる可能性もある。南辺に直交する軸の傾きは、N-17°-E である。覆土 暗褐色土および黒褐色土を主体とする。柱痕状の土層は P3 北側のみ確認されている。遺物 P2・P7・P9・P10 および SK-718 から遺物が出土しているが、器形が復元できたのは P10 から出土した須恵器壺 2 個体（第277図8・9）および SK-718 から出土した土師器甌（第277図7）である。7 の土師器甌は、他の出土遺物と比べて時期が古いものと考えられることから、SK-718 が SB-98 掘立柱建物跡を構成する柱穴とするには疑問も残る。

SB-1008 (第278・279図・図版三四)

位置 O37 グリッドに位置する。重複関係 南西隅で SB-1012 掘立柱建物跡と重複する。SB-1008P5 と SB-1012P2 の切り合い関係から、SB-1012（旧）→SB-1008（新）である。規模・形状 2間×2間の側柱式である。規模は南北長 3.8m、東西長 3.3m であるが、北東隅柱（P1）がやや東寄りにあるため、東西柱列の北側がやや長くなっている。柱間は南北柱列の西側が 150～200cm、東側が 180cm、東西柱列の北側が 150～200cm、南側が 170cm となっている。柱穴の平面形はほぼ円形を呈するが、P1 と P8 は他の遺構と重複するため、元の形状が失われている。柱穴の径は中間柱が 45cm、隅柱が 50cm である。隅柱が長軸 35～42cm、短軸 30～40cm の橢円形、中間柱が径 30～35cm の円形を呈する。北側の隅柱 P1・P7 はそれぞれ 25cm、40cm と他の柱穴と比べて浅く、逆に南側の隅柱 P3・P5 は 75cm、80cm と深くなっている。中間柱は 45～60cm である。各柱穴には、底面に柱の当たりが確認された。北辺に直交する軸の傾きは N-3°-E である。覆土 黒褐色土を主体とし、内容物をあまり含まない。P1 以外の柱穴では柱痕状の土層が確認されている。遺物 遺物は P1 と P8 の覆土中層から上層内で出土している（第279図1～4）が、いずれも小片である。

SB-1012 (第278図・図版三四)

位置 O37 グリッドに位置する。重複関係 北東隅で SB-1008 掘立柱建物跡と重複する。SB-1008P5 と

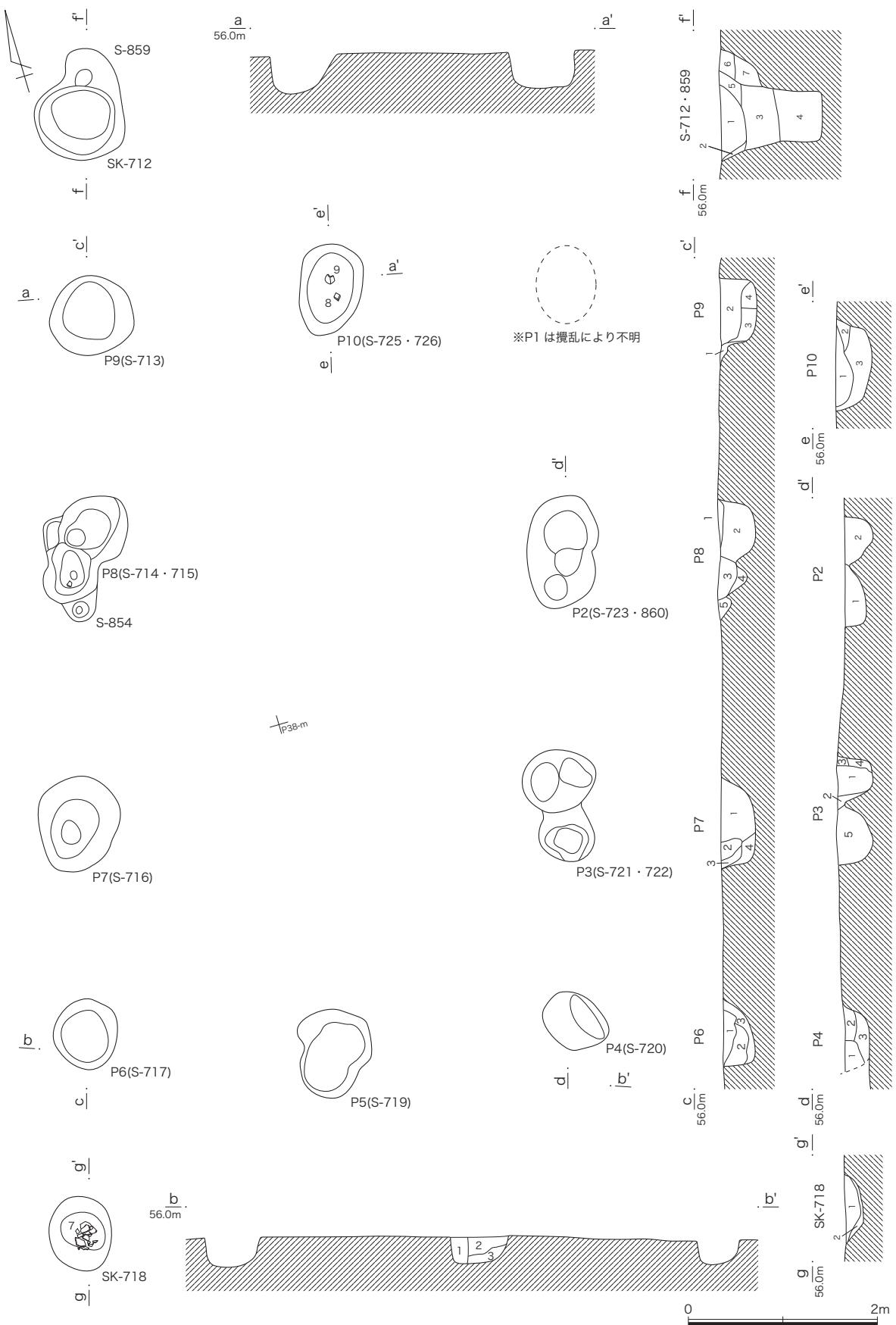


第275図 SB-97 掘立柱建物跡および出土遺物

第100表 SB-63・87・97 遺物観察表

NO. 種類 器種	出土遺構	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
269-1 須恵器 罐?	SB-63-P3・ SK-712	破片	内外面ともロクロナデ 産地不明	外面に突帯 内面に自然釉 白色粒子多 良 N4/灰	覆土
273-1 土師器 壺	SB86-P4	破片	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体横方向ヘラケズリ 口外～内漆仕上げ	微細白色粒子多・ 砂礫少 良 7.5YR4/2 灰褐	P4 No.1
274-1 須恵器 壺	SB87-P1	口 (16.0) 底 (8.2) 高 3.3	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ? (残) 1/8 益子産	白色粒子多 良 N4/1 灰	柱痕
275-1 土師器 壺	SB97-P3	口 (13.8) 高 (3.7)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体上半指ナデ・下半ヘラケズリ 口縁部下がナデにより凹む 内面漆仕上げ (残) 2/8	小砂礫・白色粒子多 ・雲母少 良 5YR5/8 明赤褐	覆土
275-2 鉄製品 刀	SB97-P4	長 4.4 幅 1.9 厚 0.35 重 8.77	刀の切先に近い破片。棟以外は欠損している。棟が丸みを帯びることから、 12世紀以降の所産か。		覆土

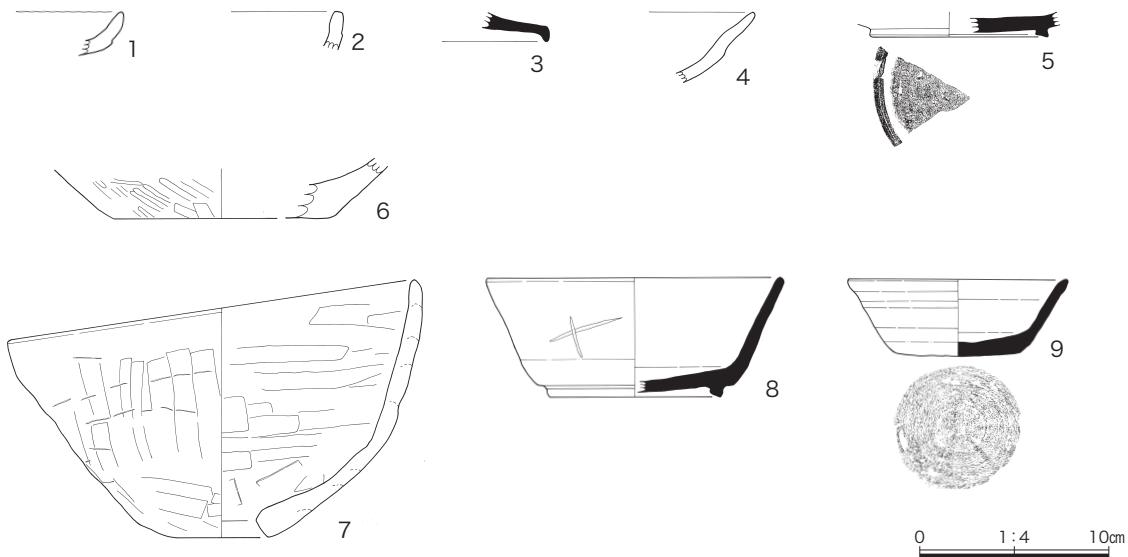
SB-1012P2 の切り合ひ関係から、SB-1012 (旧) → SB-1008 (新) である。規模・形状 1間×1間の側柱式で、規模は南北長 1.5 m、東西長 1.7 m である。柱穴の平面形はいずれもほぼ円形を呈するが、P2 は SI-1008P5 と重複するため、元の形状が失われている。柱穴の径はいずれも 30cm 程度である。北西隅の P4 が 75cm と深く、他の 3 本は 60cm 程度である。他の掘立柱建物跡と比べて柱の掘り方が著しく細い。



第276図 SB-98 掘立柱建物跡

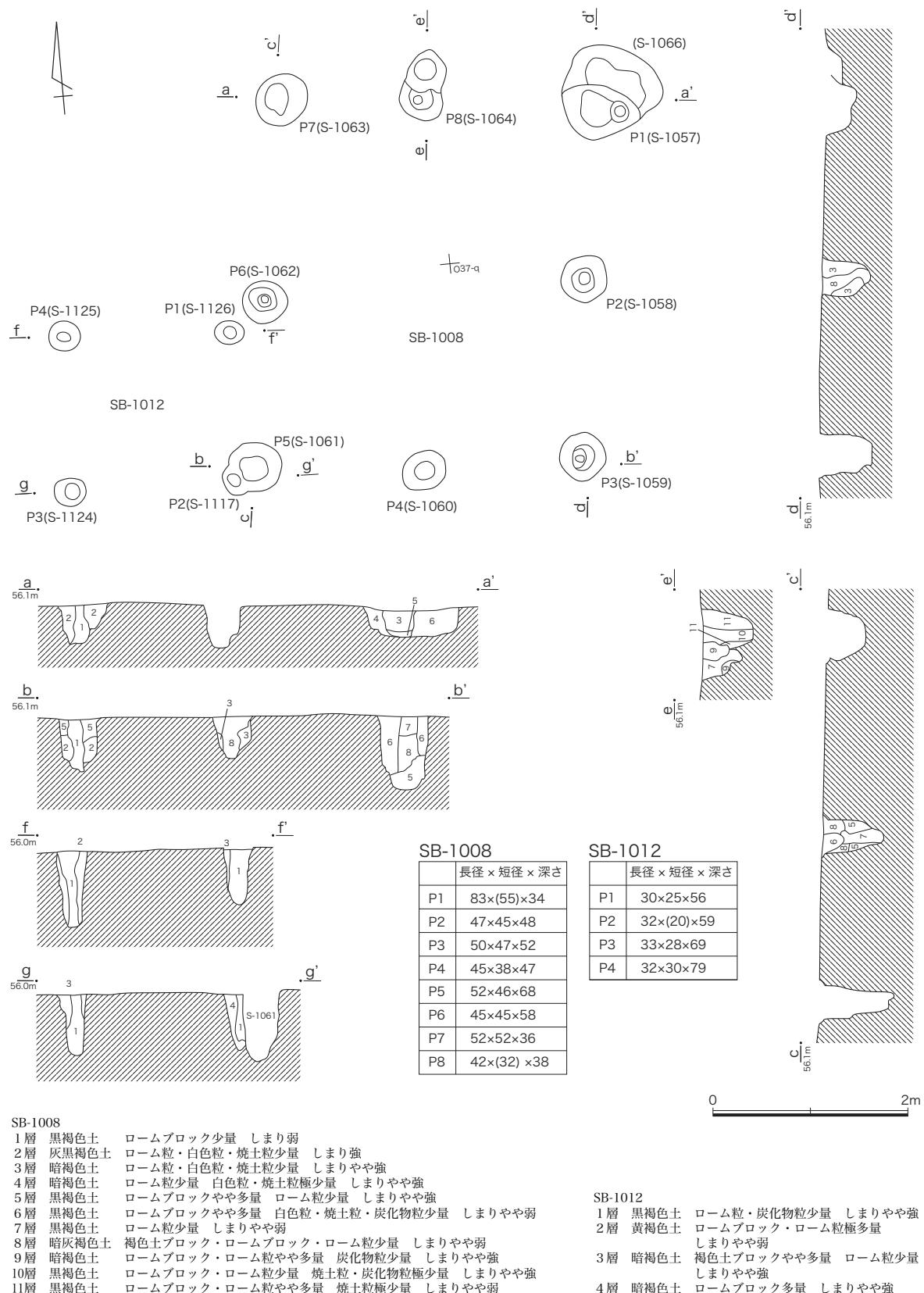
	長径 × 短径 × 深さ		長径 × 短径 × 深さ		長径 × 短径 × 深さ		長径 × 短径 × 深さ
P1	不明	P4	70×54×26	P7	101×85×36	P10	97×65×39
P2	120×70×40	P5	92×70×29	P8	123×50×36	SK-71B	78×68×23
P3	120×63×38	P6	74×67×30	P9	85×82×35	SK-712 -859	116×91×108

SB-98 P2	1層 暗褐色土	ローム粒多量 焼土粒極少量 しまり強	SB-98 P8	1層 暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒やや多量 しまり強
	2層 暗褐色土	ロームブロック多量 しまり強		2層 暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒多量 しまり強
SB-98 P3	1層 黒褐色土	ローム粒極少量 しまり強		3層 黄褐色土	ロームブロック極多量 しまり強
	2層 明黒褐色土	ローム粒少量 しまり強		4層 暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物粒やや多量 しまり強
	3層 明褐色土	ローム粒多量 しまり強		5層 暗褐色土	ローム粒多量 しまり強
	4層 暗褐色土	ローム粒少量 しまり強	SB-98 P9	1層 褐色土	しまり強
	5層 暗褐色土	しまり強		2層 暗褐色土	ローム粒少量 しまり強
SB-98 P4	1層 明黒褐色土	ロームブロック少量 焼土粒極少量 しまり強		3層 褐色土	ロームブロック多量 しまり強
	2層 暗褐色土	ローム粒多量 しまり強		4層 暗褐色土	ローム粒・焼土粒極少量 しまりやや強
	3層 暗褐色土	ロームブロック少量 しまり強		5層 明黒褐色土	ローム粒・焼土粒極少量 しまり強
SB-98 P5	1層 暗褐色土	ロームブロック多量 しまり強	SB-98 P10	1層 暗褐色土	ローム粒少量 しまり強
	2層 明褐色土	ローム粒多量 しまりやや強		2層 褐色土	ロームブロック多量 しまり強
	3層 明褐色土	ロームブロック多量 しまり強		3層 暗褐色土	ローム粒多量 しまり強
SB-98 P6	1層 暗褐色土	ロームブロック多量 ローム粒・焼土粒少量 しまり強	SK-718	1層 黑褐色土	ローム粒・焼土粒少量・炭化物粒極少量 しまり強
	2層 黒褐色土	ロームブロック・ローム粒・焼土粒少量 しまり強		2層 暗褐色土	ロームブロック多量 しまり強 (遺物包含層)
	3層 褐色土	ロームブロック極多量 ローム粒・炭化物粒少量 しまり強	SK-712・859	1層 暗黒褐色土	焼土粒極少量 しまりやや強
SB-98 P7	1層 暗褐色土	ロームブロック・ローム粒多量 焼土粒・炭化物粒やや多量 しまり強		2層 暗黒褐色土	ロームブロック多量 しまり強
	2層 暗褐色土	ロームブロック・焼土粒多量 しまり極強		3層 暗黒褐色土	ローム粒・焼土粒極少量 しまりやや弱
	3層 褐色土	ロームブロック・ローム粒極多量 しまり極強		4層 暗褐色土	ローム粒少量 しまり弱
	4層 褐色土	ロームブロック極多量 しまり極強		5層 暗褐色土	ローム粒多量 しまり強
				6層 暗褐色土	焼土粒極少量 しまり強
				7層 明褐色土	ローム粒少量 しまり強

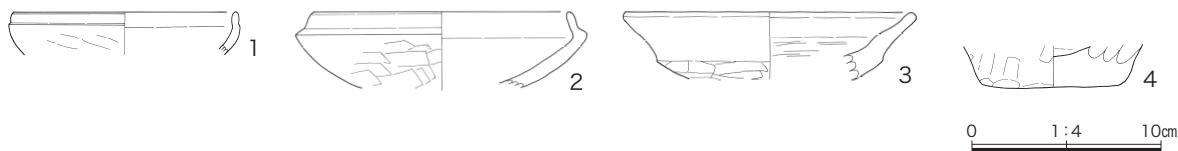


第277図 SB-98出土遺物

北辺に直交する軸は真北を向いている。覆土 いずれの柱穴も柱痕状の土層が確認された。黒褐色土の柱痕の周りに、ロームブロックや褐色土ブロックを多量に含む黄褐色土や暗褐色土が堆積している。遺物 遺物は出土していないが、SB-1008掘立柱建物跡との新旧関係から、当該時期の掘立柱建物跡と判断した。



第278図 SB-1008・1012掘立柱建物跡



第279図 SB-1008出土遺物

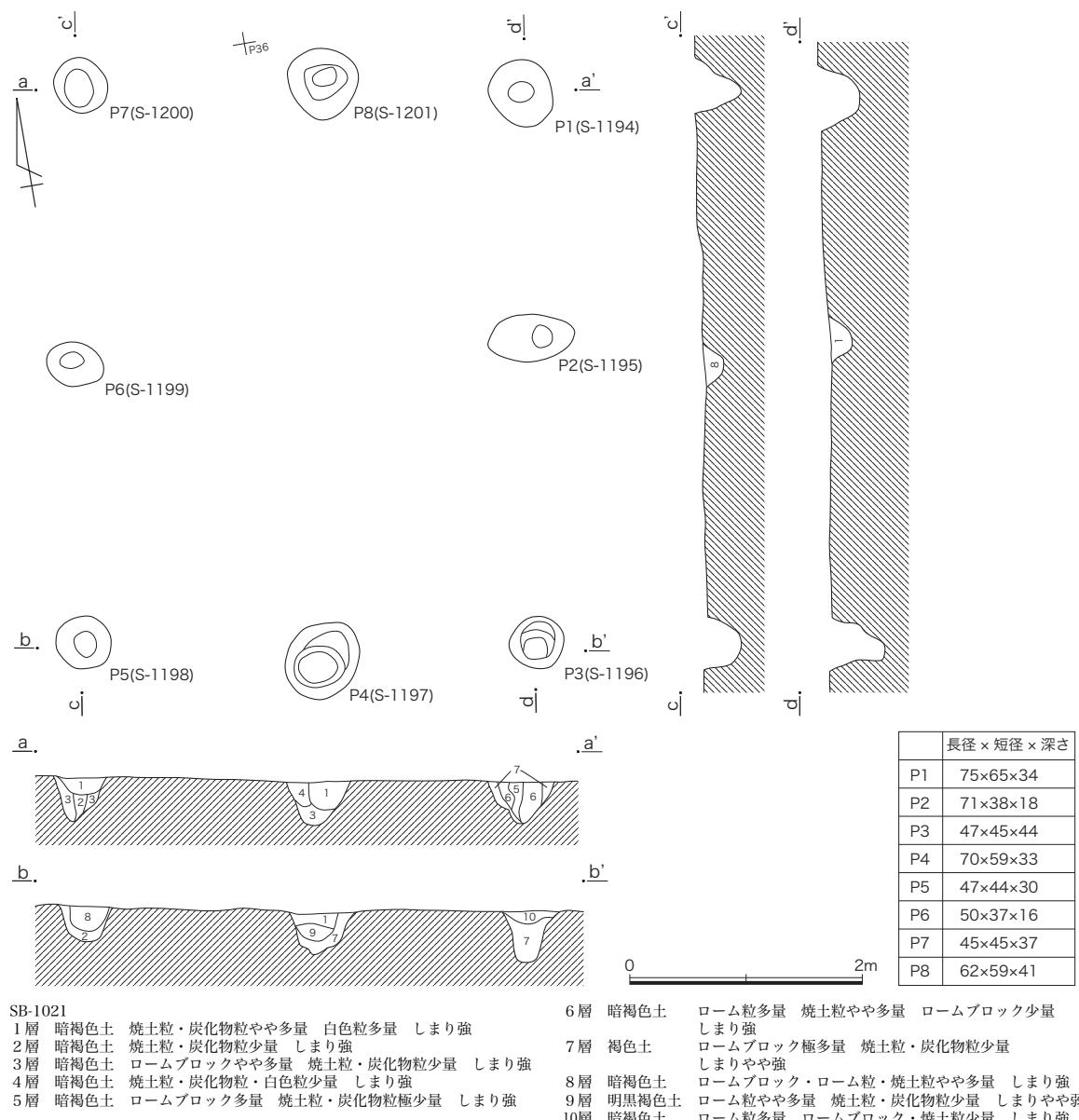
第101表 SB-98・1008遺物観察表

NO. 種類 器種	出土遺構	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
277-1 土師器 环	SB98-P2	破片	(内) 放射状ミガキ (外) 口ヨコナデ→横方向ミガキ 内面漆仕上げ	白色粒子・雲母少 やや良 10YR6/3にぶい黄橙	覆土
277-2 土師器 环	SB98-P2	破片	内外面口ヨコナデ	白色粒子少・雲母微 良 5YR5/8 明赤褐	覆土
277-3 須恵器 蓋	SB98-P2	破片	内外面ともロクロナデ 産地不明	白色粒子極多 良 N5/ 灰	覆土
277-4 土師器 环	SB98-P9	破片	(内) 横方向密なミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ→ミガキ 口縁部外面に輪積痕	砂粒多・雲母微 良 5YR4/8 赤褐	覆土
277-5 須恵器 环	SB98-P7	底 (9.3) 高 (1.3)	(内) ロクロナデ (外) 底部回転ヘラケズリ 高台付 (残) 1/8 益子産?	白色粒子・砂礫多 良 N5/ 灰	覆土
277-6 土師器 甕	SB98 ?	底 (11.6) 高 (2.7)	(内) 摩滅により不明 (外) 底部近くヘラミガキ (残) 1/8	白色粒子・砂礫極多・ 雲母少 良 5YR4/6 赤褐	覆土
277-7 土師器 甕	SB98 ?	口 (20.8) 底 4.7 高 13.5	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面に輪積痕 口縁部大きく歪む 作りが粗雑 (残) 7/8	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR6/6 橙	SK-718 No.1+2+3
277-8 須恵器 环	SB98-P10	口 (15.8) 底 (9.2) 高 6.3	内外面ともロクロナデ・底部回転ヘラケズリ 摩滅強 器壁薄い 体部にヘラ記号「×」 (残) 2/8 益子産?	白色粒子・砂礫多・ 雲母微 やや不良 2.5Y7/3 浅黄	No.1
277-9 須恵器 环	SB98-P10	口 (11.8) 底 6.0 高 4.1	内外面ともロクロナデ・底部回転ヘラケズリ 全体的に摩滅 (残) 底 8/8 体 1/8 産地不明	白色粒子・砂粒多・ 小砂礫少 やや不良 5Y6/1 灰	No.1
279-1 土師器 环	SB1008-P1	口 (12.0) 大 (12.2) 高 (2.2)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体指ナデ 口外～内漆仕上げ (残) 1/8	微細白色粒子多 良 7.5YR3/2 黒褐	覆土
279-2 土師器 环	SB1008-P8	口 (13.6) 大 (15.4) 高 (4.0)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ 摩滅強 (残) 1/8	砂粒少 良 10Y8/3 浅黄橙	覆土
279-3 土師器 环	SB1008-P1	口 (15.4) 高 (3.5)	(内) ヨコナデ体部に弱いミガキ (外) 口ヨコナデ体ケズリ 内面有段 (残) 1/8	微細白色粒多・赤色 融解粒やや多 良 5YR4/6 赤褐	覆土
279-4 土師器 甕	SB1008-P8	底 (7.6) 高 (2.2)	(内) ヘラナデ (外) 弱いヘラナデ 底部近く指頭圧痕 底部に浅い凹線 (残) 底 4/8	白色粒子多・砂礫少・ 雲母微 良 5YR5/8 明赤褐	覆土

SB-1021 (第280図・図版三四)

位置 O36・P36 グリッドに位置する。重複関係はない。規模・形状 2間×2間の側柱式で、南北長が4.7m、東西長が3.8mである。柱間は、南北柱列が210～265cm、東西柱列が170～200cmである。柱穴の平面形は、各隅柱と東西柱列の北中心柱が45～52cmの円形、東西柱列の南中間柱が長軸70cm・短軸60cmの橢円形を呈する。南北柱列の中間柱は東西に長い橢円形を呈する。深さは、各隅柱及び東西柱列の中心柱が30～45cm、南北柱列の中間柱が17cmである。北辺に直交する軸の傾きは、N-10°-Eである。

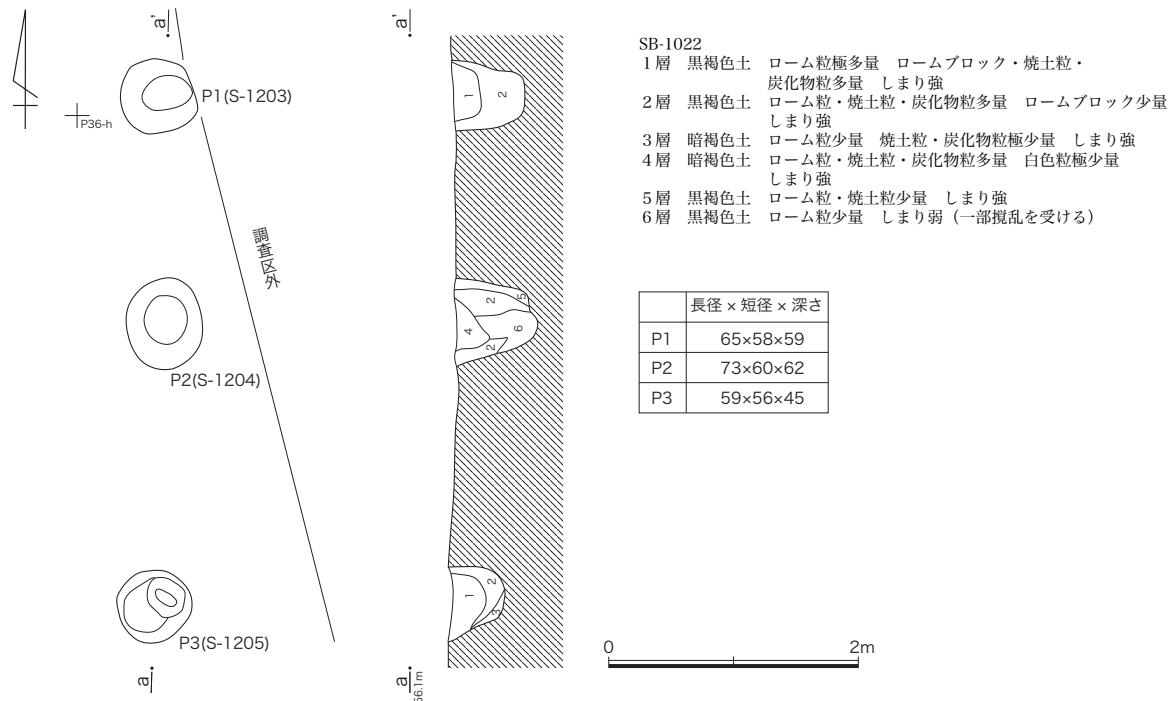
覆土 暗褐色土を主体とする。P1・P7には柱痕状の土層が堆積している。遺物 遺物は出土していないが、各隅の柱穴掘方が大きく中間柱が浅い点や、覆土の特徴が他の古墳時代から平安時代の遺構覆土と似ている点から、当該時期の遺構と判断した。



第280図 SB-1021 掘立柱建物跡

SB-1022 (第281図・図版三四)

位置 P36 グリッドに位置する。規模・形状 柱列の一部のみの調査のため、全体の規模や形状は不明である。柱穴はいずれも楕円形の掘り方を呈し、P3 のみ深さ 40cm でやや浅い。柱間の長さは、P1 から P2 が 180cm、P2 から P3 が 220cm である。覆土 P2 のみ柱痕状の土層が確認されている。ほかの 2 基は黒褐色土を主体とする。遺物 遺物は出土しなかつたが、覆土が他の古墳時代から平安時代の遺構覆土と似ていることから、当該時期の遺構と判断した。



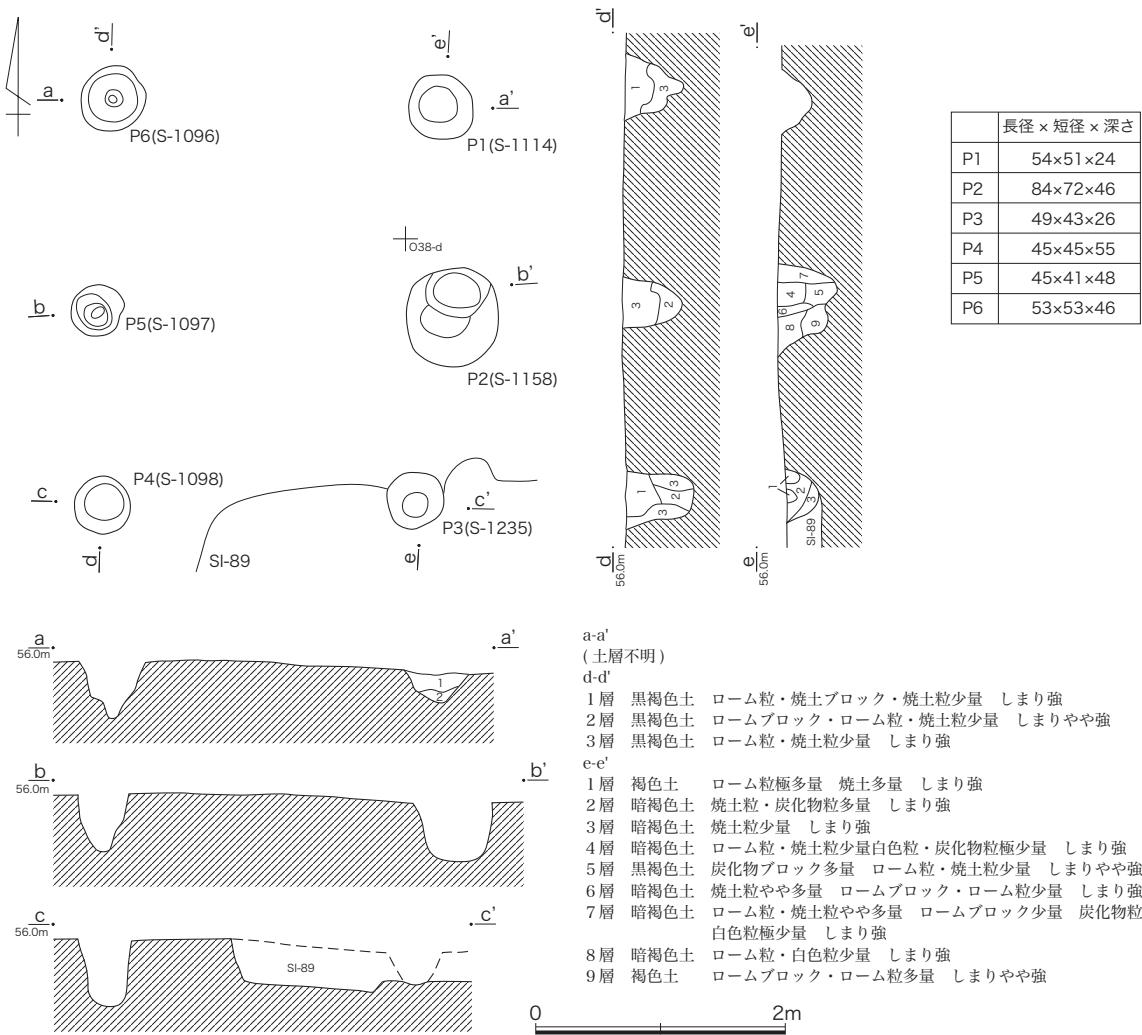
第281図 SB-1022 掘立柱建物跡

SB-1026 (第282図・図版三四)

位置 O38 グリッドに位置する。重複関係 P3 が SI-89 壇穴住居跡と重複している。新旧関係は、SI-89 (旧) → SB-1026 (新) である。規模・形状 2間×1間の側柱式で、規模は南北辺が 3.2 m、東西辺が 2.5 m である。南北柱列の柱間は、南側が 1.5 m、北側が 1.7 m である。P2 以外の柱穴の平面形は円形を呈する。P2 は 2 本の柱穴が切り合っているため、楕円形の掘り方を呈する。深さは P1・P3 が 25cm と浅く、他の 4 本が 45～50cm となっている。北辺に直交する軸の傾きは N-1°-E である。覆土 P2 北側と P4 で柱痕が確認されている。P2 の柱痕にあたる土層 (5 層) からは、炭化物ブロックが多く出土している。遺物 遺物は出土しなかつたが、覆土が他の古墳時代から平安時代の遺構覆土と似ており、軸の傾きが壇穴住居群の主軸方向とほぼ一致することから、当該時期の遺構と判断した。

SB-1027 (第283図・図版三四)

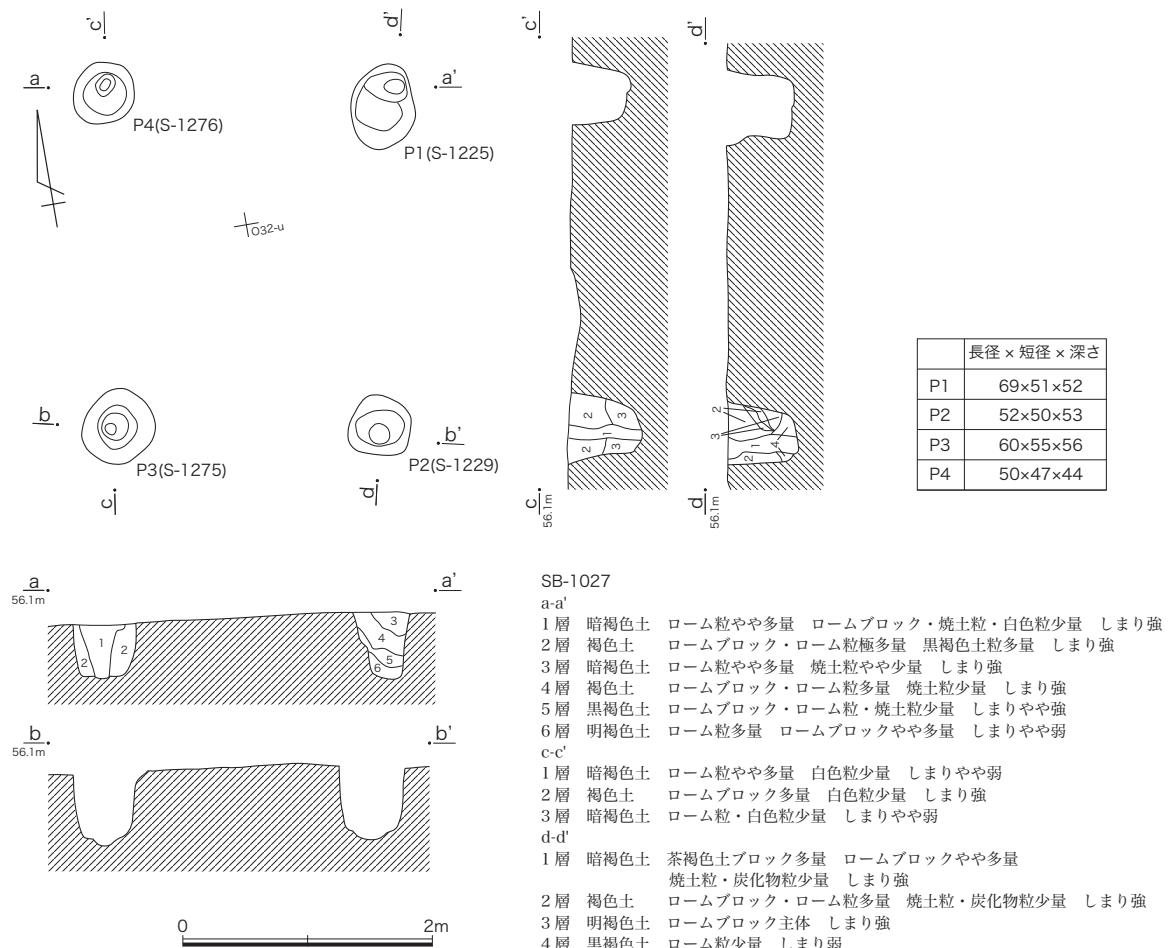
位置 N32 グリッドに位置する。規模・形状 1間×1間の側柱式で、規模は東西 2.3 m、南北 2.75 m である。柱穴の平面形は歪んだ円形を呈するが、南側の 2 本 (P2・P3) はやや矩形に近い。深さは P4 のみ 45cm で、他の 3 本は 55cm である。いずれも底面に柱の当たりが残っていた。北辺に直交する軸の傾きは、N-



10°-Eである。覆土 P1以外では柱痕状の土層が確認されているが、この土層はローム粒やロームブロック・茶褐色土ブロックを多く含み、炭化物は含まれないことから、柱除去後に埋まった後の凹みに覆土が流入したものと考えられる。P1はロームブロックを多く含む土層が流れ込んだような堆積状況が確認できたが、各層の色調が著しく異なっているのが特徴的である。遺物 遺物は出土していないが、覆土が他の古墳時代から平安時代の遺構覆土と似ており、軸の傾きが堅穴住居群の主軸方向とほぼ一致することから、当該時期の遺構と判断した。

SB-1028 (第284・285図・図版三四)

位置 N33グリッドに位置する。重複関係 P1・P6がSI-1020堅穴住居跡と重複している。新旧関係は、SI-1020(旧)→SB-1028(新)である。SB-1029掘立柱建物跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。規模・形状 2間×1間の南北棟で、南北長4.2m、東西長3.3mである。柱間は210~220cmである。各隅柱の平面形はやや矩形に近い楕円状を呈しており、南西隅柱のP4は底面がはつきりとした矩形となっている。また、南側のP3、P4では、底面から拳大のやや扁平な礫が出土しており(第285図2・3)、柱

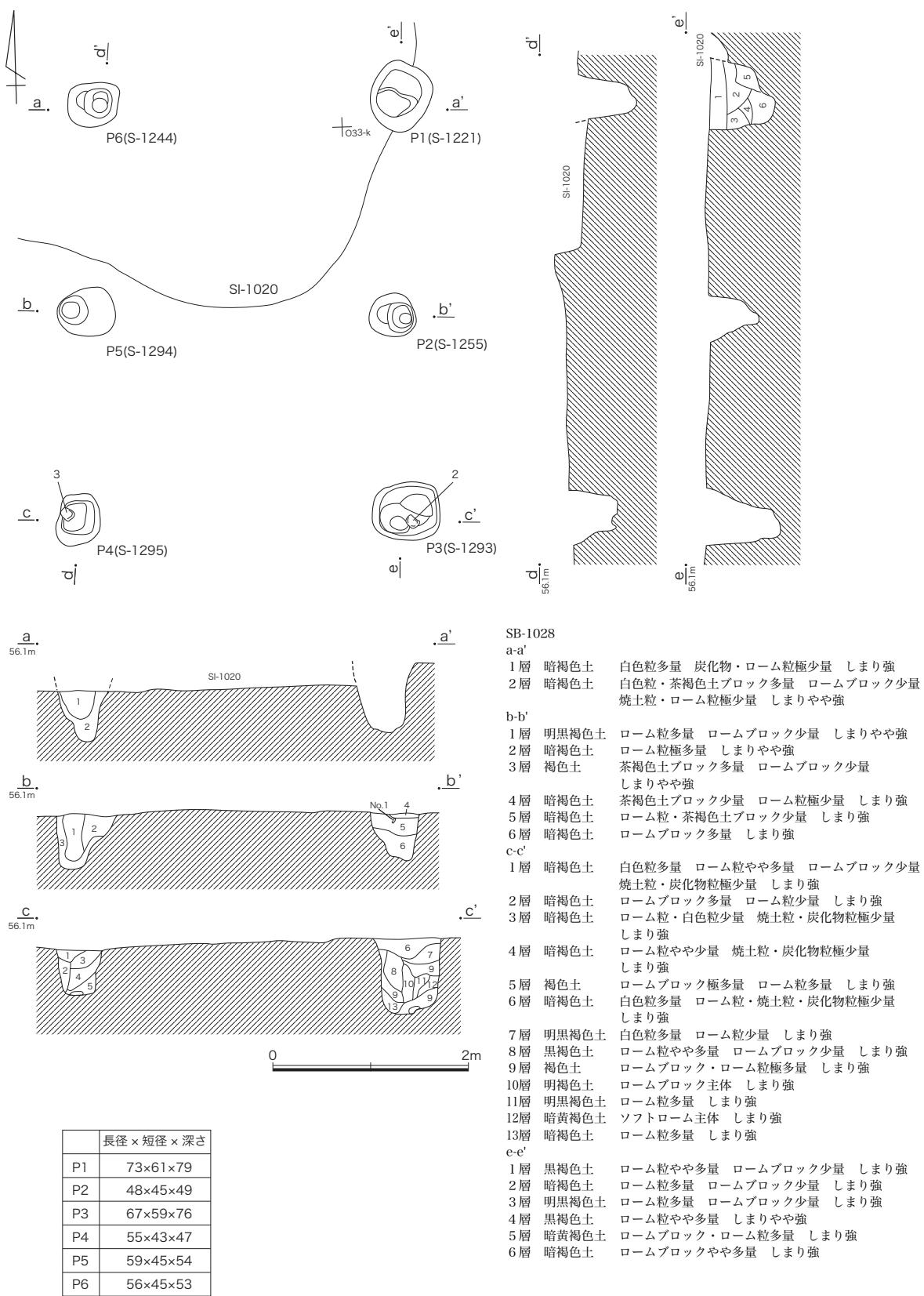


第283図 SB-1027掘立柱建物跡

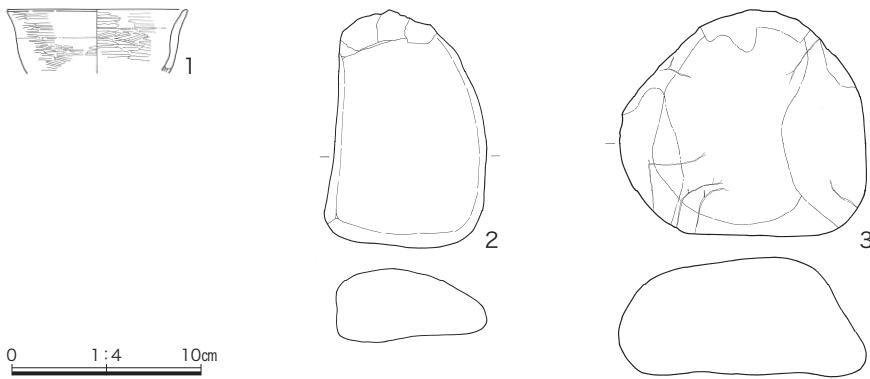
の根固めとして利用されていたものと考えられる。東側柱列の隅柱P1・P3は、西側柱列の隅柱P4・P6に比べて隅丸長方形の大きな掘り方となっている。東西の中間柱P2・P5は平面形が円状で、中央に向けて大きく傾いている。覆土 いずれもロームブロック・ローム粒を多く含む土層が堆積している。P5で柱痕状の土層が確認されているが、他の柱穴では確認できなかった。P3はおよびP4は、各層の色調や内容物が著しく異なっているのが特徴的である。遺物 P2の覆土上層から小型塊の破片が出土している(第285図1)が、この遺物から遺構の時期を比定するのは難しい。柱穴の掘り方や規模、覆土の特徴などが古墳時代から平安時代の掘立柱建物跡に似ているため、当該時期の遺構と判断した。

SB-1029 (第286図・図版三四)

位置 N33グリッドに位置する。重複関係 P1・P4がSI-1020竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、SI-1020(旧)→SB-1029(新)である。柱間の軸線はSB-1028掘立柱建物跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。規模・形状 1間×1間の側柱式で、南北長2.3m、東西長2.3mである。P3がやや南に飛び出しているため、南北柱列の西側が長くなっている。柱穴はいずれも傾いているが、傾く方向がランダムであることから、柱を抜き取ったものと考えられる。P3のみ深さ60cmとやや浅く、その他の柱穴は80~95cmである。平面形はいずれも梢円状を呈する。覆土 暗褐色土を主体とする。北側のP1・P4では、



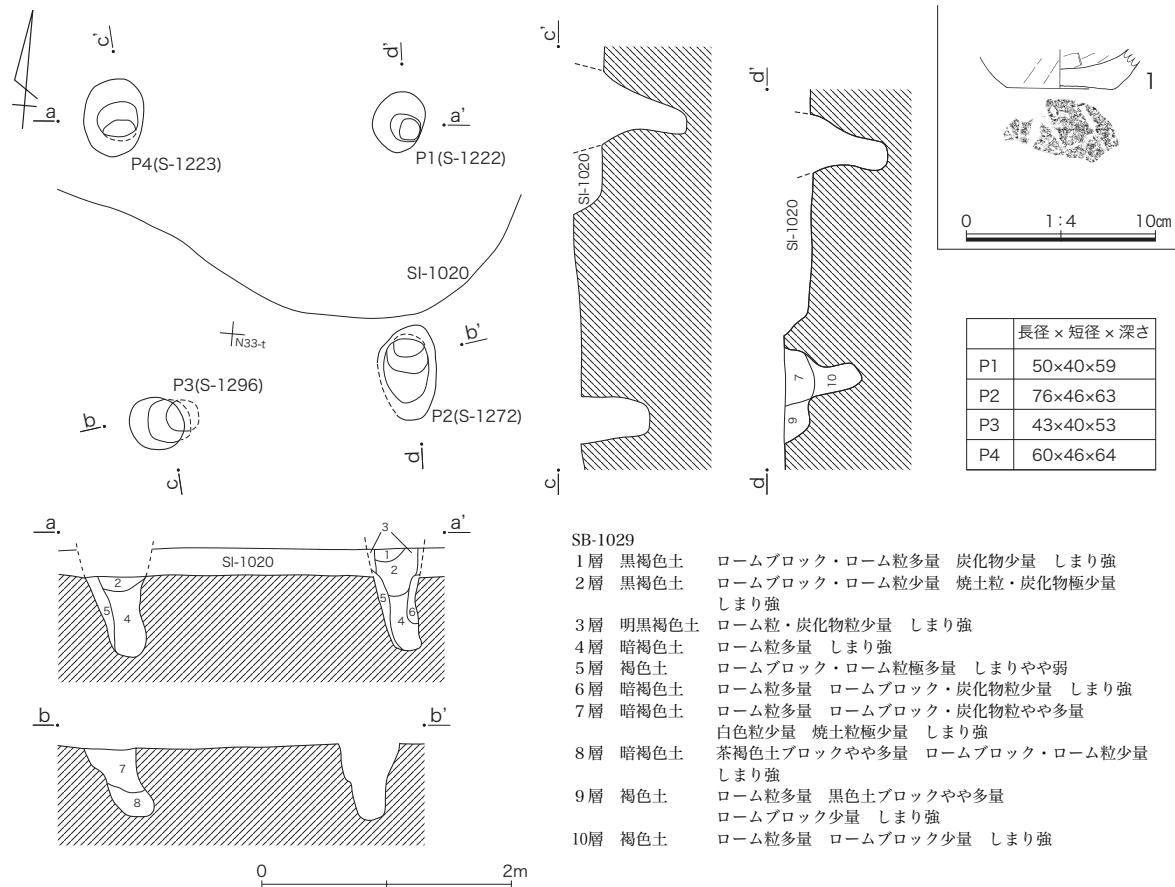
第284図 SB-1028掘立柱建物跡



第285図 SB-1028出土遺物

第102表 SB-1028遺物観察表

NO. 種類 器種	出土遺構	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
285-1 土師器 小型碗	SB-1028P2	口 (9.5) 高 (3.4)	内外面とも密なミガキ (横方向) 器厚非常に薄い 口縁部一部摩滅 (残) 1/8	砂粒やや多 良 7.5YR6/6 橙	覆土
285-2 礫	SB-1028P3	長 12.6 幅 8.2 厚 3.8 重 640.24	扁平な自然礫 上部一部欠け	7.5Y4/1 灰	底面
285-3 礫	SB-1028P4	長 11.9 幅 13. 厚 6.3 重 1226.54	扁平な自然礫 側面一部摩滅	5Y5/2 灰オリーブ	底面



第286図 SB-1029掘立柱建物跡および出土遺物

第103表 SB-1029 遺物観察表

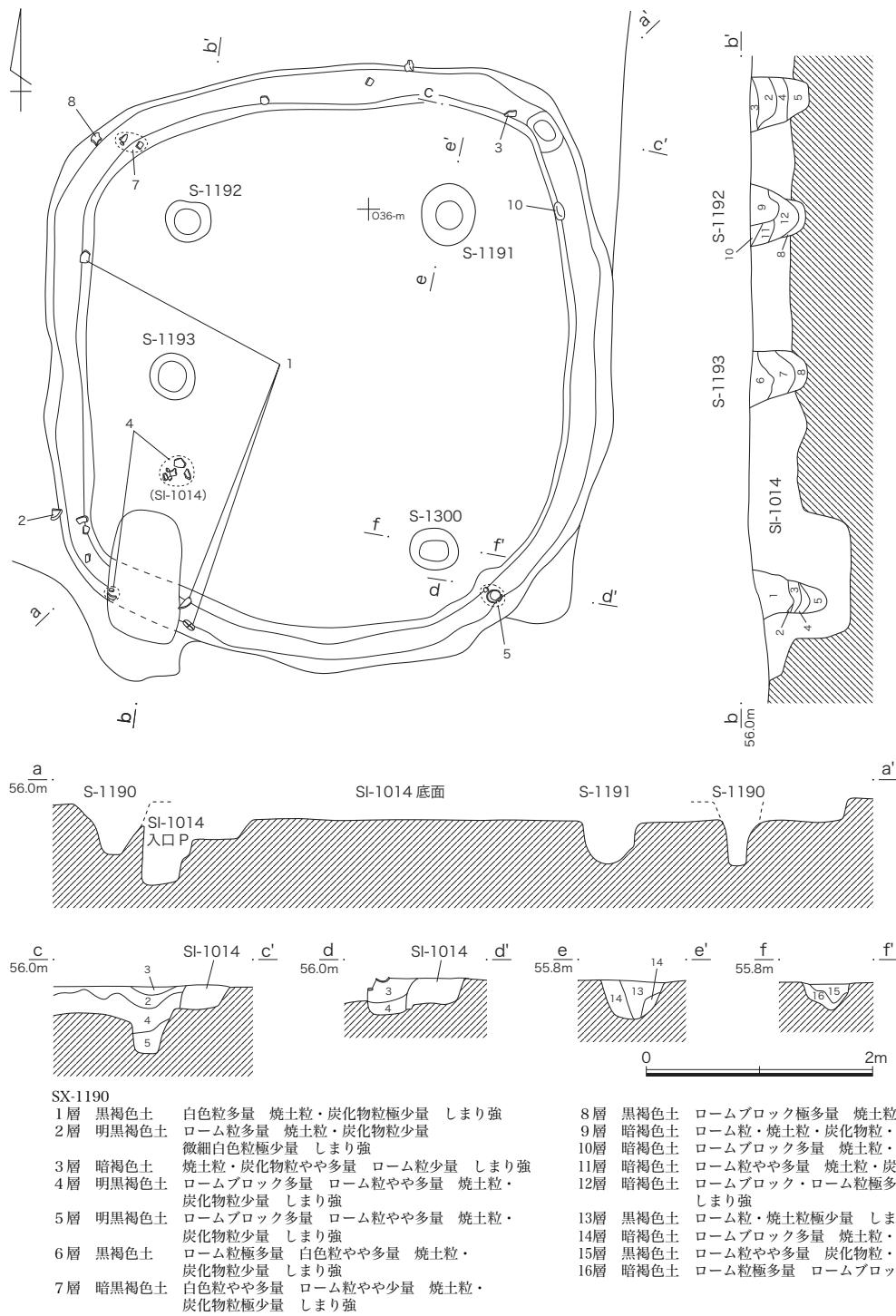
NO. 種類 器種	出土遺構	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
286-1 土師器 甕	SB1029-P1	底 5.6 高 1.9 重 55.83	(内) ヘラナデ (外) ヘラケズリ? 底部木葉痕 (残) 2/8	砂礫や多・砂粒多・ 雲母微 やや良 10YR5/4 にぶい黄褐色	覆土

柱痕状の土層が確認されている。P2には、覆土下部にローム粒を多量に含む褐色土が堆積していた。遺物P1から土師器甕の底部破片が出土しているが(第286図1)、この遺物から遺構の時期を比定するのは難しい。柱穴の掘り方や規模、覆土の特徴などが他の古墳時代から平安時代の掘立柱建物跡に似ているため、当該時期の遺構と判断した。

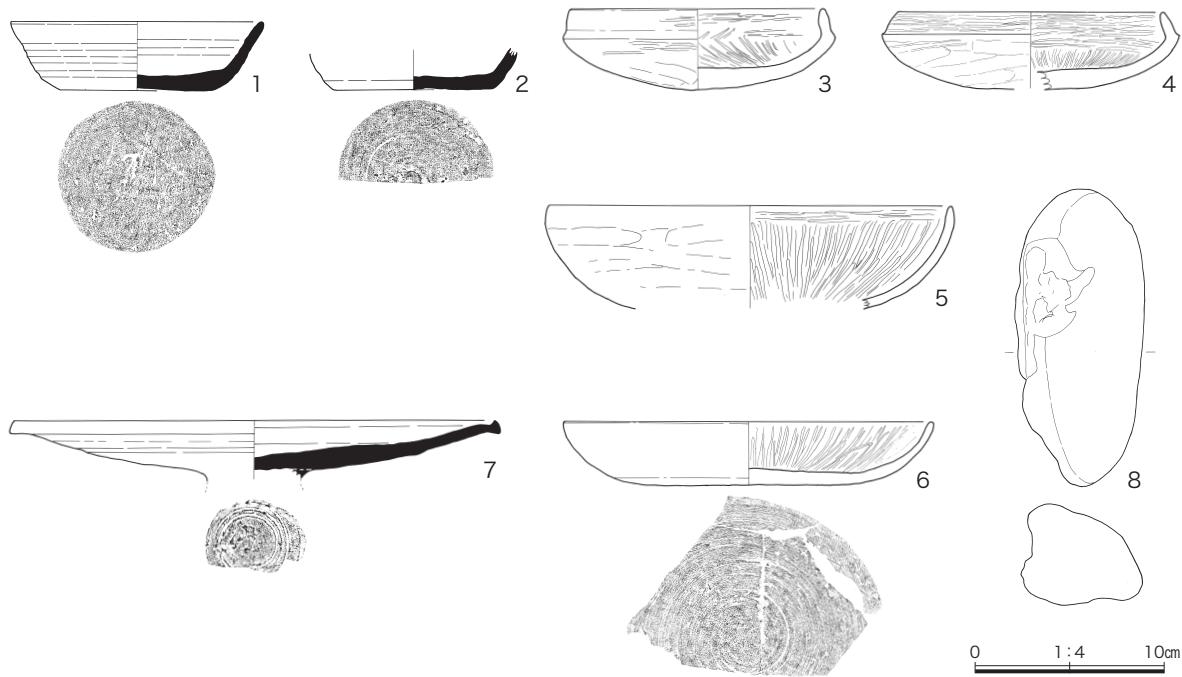
(3) 円形周溝遺構

SX-1190(第287・288図・図版二八・三五・六〇)

位置 O36グリッドに位置する。重複関係 遺構全体がSI-1014豊穴住居跡と重複する。新旧関係はSI-1014(旧)→SX-1190(新)である。規模・形状 平面形がドーナツ状の周溝だが、東側、北側はやや直線的で、南東部分以外はやや角度がついている。規模は南北長が5.3m、東西長が4.95mである。確認面からの深さは平均して約50cmである。北東角部分に、底面からの深さ10cmの土坑状の掘り込みがある。南西角部分は他の部分よりも15cm程度深くなっていることが断面図より確認できるが、SI-1014豊穴住居跡の入り口ピットと切り合っており、平面では形状が確認できなかった。おそらく、北東角と対応する掘り込みがあったものと考えられる。周溝の内側では、柱穴状のピットが4基確認されている(S-1191～1193・1300)。調査時は、SX-1190円形周溝遺構と重複する1間×2間の掘立柱建物跡としていたが、東側柱列の中間柱と西側柱列の南柱が確認できなかつたため、掘立柱建物跡ではないと考えた。これらのピット群がSX-1190に伴うものか否かは、上面が削平されていることにより不明である。ピットの形状は、S-1191が南北に長い楕円状、S-1192とS-1300は東西に長い楕円形、S-1193が円形を呈する。SI-1014豊穴住居跡の床面からの深さは、S-1192とS-1193が約50cm、S-1191とS-1300が25～30cmとやや浅くなっているが、実際はさらに30cmほど深いと考えられる。覆土 覆土は5層に分層される。色調がかなり異なる土層がレンズ状に堆積する。SI-1014豊穴住居跡の入り口ピットと切り合う部分(a-a'断面図)では、最上層に火山灰と考えられる白色粒子を多く含む黒褐色土が堆積している(1層)。また、ローム粒、ロームブロック・焼土粒を多量に含む土層(3層)とローム粒のみ多量に含む土層(2層)が部分的に逆転して堆積している点が特徴的である。ピット群の土層は黒褐色土を主体とするもの(S-1193・1191・1300)と暗褐色土を主体とするもの(S-1192)に分けられる。いずれも、上層には白色粒子が含まれる。S-1191では柱痕状の土層が確認できるが、その他の柱穴では確認できなかつた。遺物 覆土上層から遺物が出土している。SI-1014豊穴住居跡の調査中に遺構を確認したため、当遺構出土の遺物が一部SI-1014出土遺物として取り上げられている。第288図5はSI-1014出土遺物と接合しており、同住居跡からの混入の可能性がある。4および6はいずれも内面に赤彩が施されている。SI-1014豊穴住居跡との新旧関係や、同住居跡の遺物の時期から見て、古墳時代後期の遺物は混入した可能性が高いと考えられることから、SX-1190に伴う遺物は第288図1・2・5～7と判断される。



第287図 SX-1190円形周溝遺構



第288図 SX-1190出土遺物

第104表 SX-1190遺物観察表

No. 種類 器種	法量(cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
1 須恵器 壺	口 (13.5) 底 8.9	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→底部ヘラ切り離し後一部手持ちヘラ ケズリ ロクロ目強 (残) 口 6/8 底 8/8 益子産	砂粒少 良 5Y6/1 灰	6
2 須恵器 壺	底 (8.4)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→底部回転ヘラ切り離し (残) 底 4/8 益子産	白色粒子多 良 5Y5/1 灰	覆土
3 土師器 壺	口 (13.2) 大 (14.3) 高 (4.2)	(内) ロヨコナデ体ナデ→ミガキ (外) ロヨコナデ→一部ミガキ体ケズリ→ナデ・ミガキ 内～口外面漆仕上げ (残) 4/8	砂粒少 良 10YR8/3 浅黄橙	3+5+15
4 土師器 壺	口 (14.0) 大 15.7 高 (4.1)	(内) ロヨコナデ→横方向ミガキ体ナデ→放射状ミガキ (外) ロヨコナデ→横方向ミガキ体ケズリまたはナデ、 一部ミガキ状の光沢 内面漆仕上げ (外面にも一部残る) 体部上位に鋭い稜 (残) 2/8	砂粒少 良 7.5YR7.4 にぶい橙	1
5 土師器 壺	口 (21.2) 高 (5.4)	(内) ロヨコナデ→横方向ミガキ体縦方向ミガキ (外) ロヨコナデ体ナデにより平滑化 半球形 (残) 2/8	砂粒少 良 外面:10YR7/4 にぶい黄褐 内面:2.5YR5/6 明赤褐	4+SI-1014No.40+ 覆土 a・b+c 南 +トレンチ 43 (非接合の同一個体)
6 土師器 盤	口 (19.4) 底 (11.2) 高 3.3	(内) 赤彩→放射状ミガキ (外) ロクロナデ→回転ヘラケズリ 扁平な半球形 (残) 3/8	白色粒子少 良 外面:10YR8/3 浅黄橙 内面:2.5YR5/6 明赤褐	9+ 覆土 a
7 須恵器 高壺	口 (25.2) 高 (2.6)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ体下半回転ヘラケズ リ脚部接合後ロクロナデ 脚接合部にヘラによる渦巻 浅い壺部(蓋を逆位にした形状) (残) 壺部 3/8 三毳産?	砂粒多・砂礫少 不良 5Y8/2 灰白	13+ 覆土 +SI-1014No.25+ 覆土 b+ 覆土 c 北
8 礫	長 15.2 幅 6.8 厚 5.1 重 728.5	使用痕特になし	2.5Y6/2 灰	8

(4) 井戸状遺構

峰高前遺跡の井戸状遺構は遺物が出土したものが少なく、遺物の時期から構築された時代を比定することは難しい。よって、上三川町多功南原遺跡（山口 1999）、芳賀町高林遺跡（今平 2003）における形態分類を参考とし、断面が漏斗状で、径が比較的細くピット状を呈するものを古墳時代から平安時代の井戸として扱った。その結果、当該時期の井戸と比定したものは 55 基である。これらのうち、P39～O40 グリッド周辺を中心として、深さ 2 m 程度の深いピット状を呈するものが 18 基確認されている。これらは、漏斗状の形態を呈するものの上面が削られたものと判断して併せて掲載したが、井戸状遺構に比べやや浅い傾向があり、当該時期の井戸とすることに若干の不安も残る。断面が漏斗状のものについては可能な限り断ち割り調査を行い、基本土層と井戸の深さを把握するよう努めたが、著しい湧水や安全が確保できないといった理由から断ち割り調査を行わなかつたものもある。なお、ピット状を呈するものと断ち割り調査を行わなかつたものについては、主要な遺構のみ記述を行つた。記述あるいは断面図のないものについては、井戸状遺構・円筒形土坑計測表（第 136 表）を参照されたい。

SE-592（第 289 図・図版三六）

位置 O44 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈する。上面土坑部分が径 123cm、井筒部分が径 58cm で、深さは 180m である。土坑部分の底面は、黒色土とロームの漸移層上面にあたる。断ち割り調査を行つたが中心部を外してしまつたため、断面図を作成した部分ではやや不整となっている。覆土 上面土坑部分の覆土は暗褐色土を主体としており、褐色土ブロックが多く含まれる。井筒部分が土坑部分を切つてることから、井戸設置時の裏込め土と考えられる。井筒部分は内容物をあまり含まない暗褐色土及び黒褐色土を主体とし、しまりは弱い。遺物は出土しなかつた。

SE-801（第 289・293 図・図版三五）

位置 P42 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈する。上面土坑部分が径 152cm、井筒部分が径 45cm で、深さは 1.35m である。土坑部分の底面は、黒色土とロームの漸移層上面にあたる。井筒部分は粘土化した明灰橙色ローム層（IX 層）の上面まで掘り抜いているが、砂礫層までは到達していない。底面は径 20cm 程度の円形を呈する。覆土 上面土坑部分の覆土は暗褐色土を主体としており、ローム粒がやや多く含まれる。井筒部分が土坑部分を切つてることから、井戸設置時の裏込め土と考えられる。井筒部分の最下層はロームブロックを多く含む暗褐色土が厚く堆積しているが、それよりも上面は内容物をあまり含まない暗褐色土が堆積している。井筒部分の堆積土はしまりが弱い。遺物 井筒部分の上面から、土師器甕の破片がまとまって出土している（第 293 図 1・2）。

SE-802（第 289 図・図版三五）

位置 P42 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈する。上面土坑部分が径 95cm、井筒部分が径 30cm で、深さは 115cm である。土坑部分の底面は、黒色土とロームの漸移層上面にあたる。井筒部分は著しく硬い明灰橙色ローム層中（VIII b 層）まで掘り込んでいるが、近くにある SE-801 や 803 と比べ浅い。底面は径 10cm 程度の円形を呈する。覆土 上面土坑部分の覆土は暗褐色土を主体としており、ローム粒がやや多く含まれる。井筒部分が土坑部分を切つてることから、井戸設置時の裏込め土と考えられる。井

筒部分も暗褐色土を主体としており、しまりは弱い。遺物 覆土から土師器甕類の口縁部破片が出土しているが、図化はできなかった。

SE-803 (第289図・図版三五)

位置 O43 グリッドに位置する。規模・形状 上面が削平により失われているが、わずかに漏斗状を呈する。上面土坑部分が径90cm、井筒部分が径45cmで、深さは188cmである。井筒部分は粘土化した明灰橙色ローム層(IX層)を約80cm掘り抜いているが、砂礫層までは到達していない。底面は径20cm程度の円形を呈する。覆土 井筒部分の覆土は、上層が暗褐色土、下層が黒褐色土を主体とし、いずれもローム粒を多量に含んでいる。しまりは弱い。また、所々大きなロームブロックが含まれており、埋没時に地山が崩れたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

SE-804 (第289図・図版三五)

位置 O43 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈する。上面土坑部分が径100cm、井筒部分が径32cmで、深さは98mである。井筒部分は粘土化した明灰橙色ローム層(IX層)を約30cm掘り抜いているが、砂礫層までは到達していない。底面は径15cm程度の円形を呈する。確認面から約1mのところで径が細くなっている。覆土 上面土坑部分は焼土粒を多く含む暗褐色土を主体としている。井筒部分が土坑部分を切っていることから、井戸設置時の裏込め土と考えられる。井筒部分はローム粒と焼土粒を多量に含む暗褐色土が主体である。また、底面にはロームブロックが30cmほど堆積していた。遺物は出土しなかった。

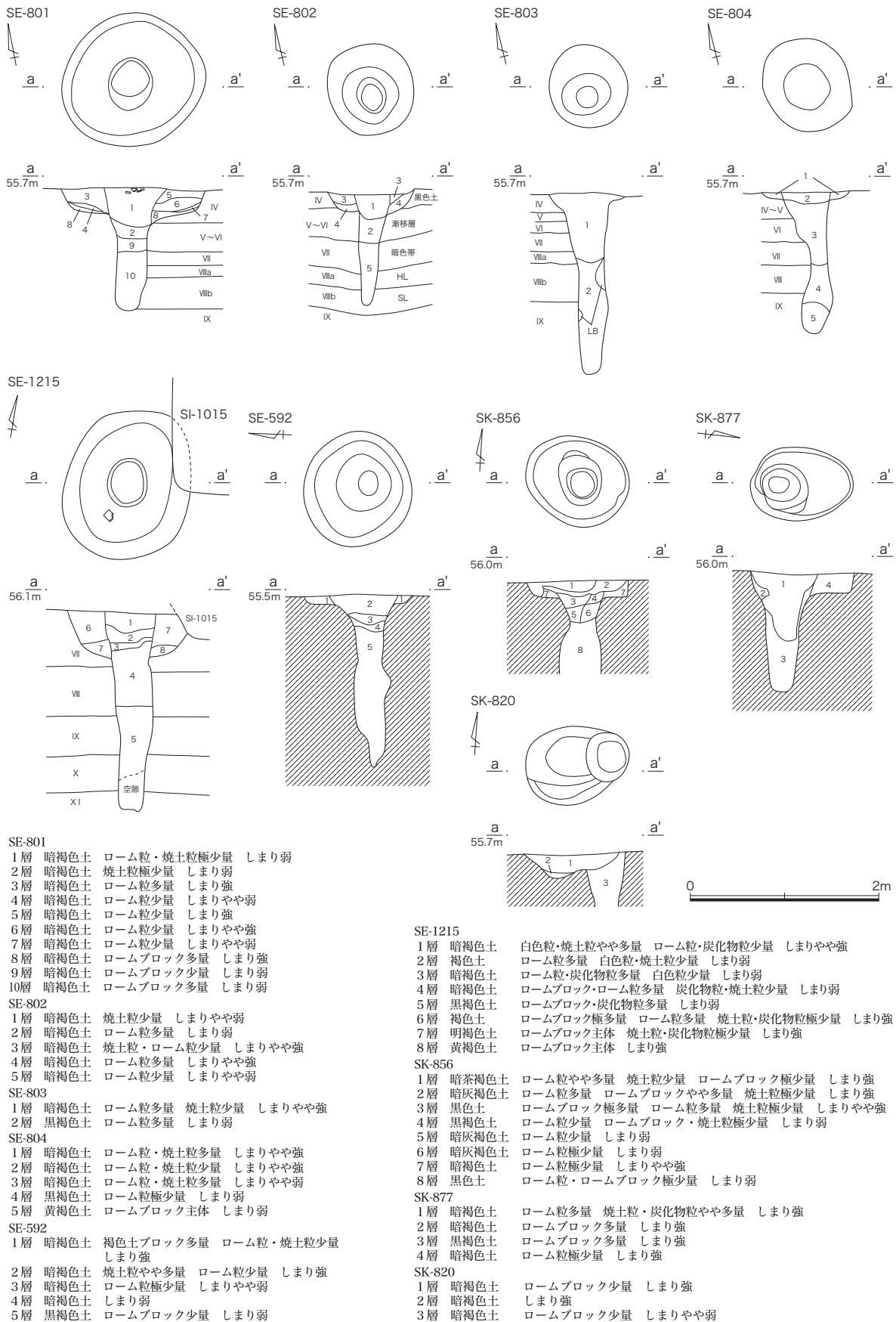
SE-820 (第289図・図版三七)

位置 P43 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈するが、井筒部分が東端に寄っている。上面土坑部分が長径111cm、短径81cm、井筒部分が径36cmである。断ち割り調査を行っていないため底面は不明だが、断面図の下端よりもさらに1m以上深い。覆土 上面土坑部分は内容物をあまり含まない暗褐色土が堆積している。井筒部分の上面を土坑部分の覆土が覆っていることから、井筒部分が埋没した後に土坑部分が埋没したと考えられる。井筒部分にも土坑部分と似た土層が堆積しているが、しまりは弱い。遺物 覆土中から土師器甕の底部破片が出土しているが、図化はできなかった。

SE-856 (第289・293図・図版三七)

位置 M40 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈する。上面土坑部分が長径109cm、短径94cm、井筒部分が径40cmである。断ち割り調査を行っていないため底面は不明だが、断面図の下端よりもさらに1m以上深い。覆土 土坑部分の下層(7層)を井筒部分の土層が切っているため、7層は井戸設置時の裏込め土と考えられる。土坑部分から井筒部分の上部にかけては、表土に近い土層が堆積していることから、SE-856は廃絶後長い期間埋没が完了しない状態で残っていた可能性が高い。井筒部分の下層には、しまりの弱い黒色土が堆積している。遺物 覆土中から須恵器壺、土師器甕の破片が出土している(第293図3・4)。

第3章 発見された遺構と遺物



第289図 井戸状遺構 (1)

SE-877 (第289図・図版三七)

位置 M40 グリッドに位置する。規模・形状 断面が漏斗状を呈するが、井筒部分が東端に寄っている。上面土坑部分が長径 108cm、短径 79cm、井筒部分が径 35cm で、深さは 123cm である。底面は 20cm 程度の円形を呈する。覆土 土坑部分（4層）を井筒部分の土層が切っているため、4層は井戸設置時の裏込め土と考えられる。井筒部分の上面にはローム粒、焼土粒、炭化物粒を多く含む暗褐色土が堆積している。下部にはロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積している。覆土はしまりが強い。遺物は出土しなかった。

SE-1215 (第289・293図・図版三六)

位置 O35 グリッドに位置し、SI-1015 を切る。規模・形状 断面が漏斗状を呈する。上面土坑部分が径 131cm、井筒部分が径 40cm で、深さは 205cm である。底面は 25cm 程度の円形を呈する。覆土 土坑部分（6～8層）を井筒部分の土層が切っているため、これらの覆土は井戸設置時の裏込め土と考えられる。井筒部分の上層は白色粒子が含まれており、薄い土層が水平に堆積している。下層はロームブロックが多量に含まれており、特に下部の5層には炭化物粒も多量に含まれている。また、底面は埋まりきっておらず、断ち割り調査中に崩落した。井筒部分の覆土は全体的にしまりが弱いが、上面のみしまりが強い。遺物 土坑部分 6層中から土師器壺の破片（第293図6・7）及び須恵器蓋（第293図5）が出土している。

SE-686 (第290図・図版三六)

位置 Q42 グリッドに位置する。規模・形状 上面がやや広がっているが、本来漏斗状ものか壁が崩れたものは不明である。井筒部分は粘土化した明橙色ローム層（VIII層）を約 35cm 堀り抜いているが、砂礫層までは到達していない。底面は径 20cm 程度の円形を呈する。確認面から 80cm で径が膨らんでいる。覆土 上層（1層）は黒褐色土、下層（2～6層）は暗褐色土を主体としている。2層以下は、ローム粒やロームブロックを多く含む土層と内容物をあまり含まない土層が交互に堆積している。全体的にしまりは弱い。遺物は出土しなかった。

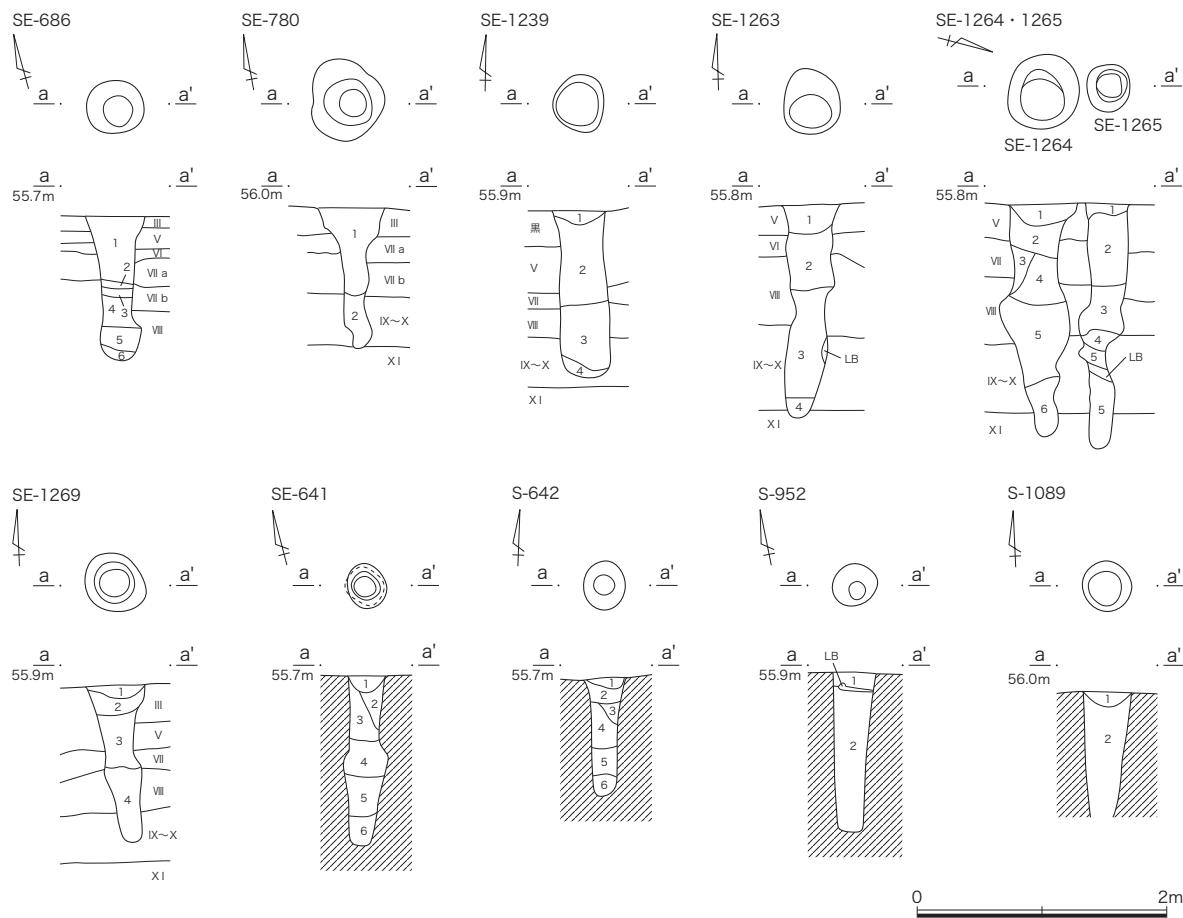
SE-780 (第290図・図版三五)

位置 O42 グリッドに位置する。規模・形状 上面がやや広がっているが、本来漏斗状ものか壁が崩れたものは不明である。井筒部分は粘土化した明灰橙色ローム層（IX層）上面まで堀り抜いている。底面は径 10cm 程度の円形を呈する。確認面から 90cm で壁が段状に屈曲している。覆土 上下 2 層に分けられる。上層（1層）は小礫をやや多く含む暗褐色土で、ややしまりが強い。下層（2層）はロームブロックを多量に含む黒褐色土で、しまりは弱い。遺物は出土しなかった。

SE-1239 (第290図・図版三六)

位置 N34 グリッドに位置する。規模・形状 細い円筒状を呈する。井筒部分は砂質の灰橙色ローム層（X層）を 30cm ほど堀り抜いているが、粘土化した明灰橙色ローム層（IX層）までは到達していない。底面は径 35cm 程度の円形を呈する。壁は下部がやや膨らんでいる。覆土 上面には焼土粒を多く含む土層が薄く堆積している（1層）。内部は黒褐色土が堆積しているが、下層にはロームブロックや炭化物粒が多く含まれている。底面にはローム粒多く含む暗褐色土が薄く堆積している。遺物は出土しなかった。

第3章 発見された遺構と遺物



SE-686

1層 黒褐色土 ローム粒少量 焼土粒極少量
2層 暗褐色土 ローム粒少量 しまり弱
3層 暗褐色土 ローム粒多量 しまり弱
4層 暗褐色土 ロームブロック少量 しまりやや弱
5層 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
6層 暗褐色土 ロームブロック少量

SE-780

1層 暗褐色土 小礫やや多量 ローム粒極少量 しまりやや強
2層 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

SE-1239

1層 暗褐色土 ローム粒やや多量 焼土多量
炭化物粒・白色粒少量 しまり強
2層 黒褐色土 ローム粒やや多量 ロームブロック・焼土粒やや少量
炭化物粒少量 しまり強
3層 黑褐色土 ロームブロック・炭化物粒多量 しまり弱
4層 暗褐色土 ローム粒多量 しまり弱

SE-1263

1層 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量 しまり強
2層 黒褐色土 ローム粒多量 しまり弱
3層 黑褐色土 ロームブロック・炭化物粒多量 しまり弱
4層 暗褐色土 白色粘土粒多量 しまり弱

SE-1264

1層 暗褐色土 ローム粒多量 烧土粒少量 しまりやや強
2層 暗褐色土 ローム粒やや多量 烧土粒極少量 しまりやや強
3層 黑褐色土 ロームブロック多量 しまりやや強
4層 黑褐色土 ロームブロック・炭化物粒多量 しまり弱
5層 暗褐色土 白色粘土粒多量 しまり弱

SE-1265

1層 暗褐色土 ローム粒多量 烧土粒少量 しまり強
2層 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり強
3層 灰褐色土 ロームブロック多量 しまりやや強
4層 黑褐色土 ロームブロック・炭化物粒多量 しまり弱
5層 暗褐色土 白色粘土粒多量 しまり弱

SE-1269

1層 褐色土 ロームブロック極多量 しまり強
2層 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量 ロームブロック少量
しまりやや弱
3層 黑褐色土 ローム粒少量 しまりやや強
4層 黑褐色土 ロームブロック・炭化物粒多量 しまり弱

SE-641

1層 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量 しまり強
2層 暗褐色土 しまりやや強
3層 暗褐色土 ロームブロック多量 しまりやや強
4層 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり強
5層 黄褐色土 ローム主体 しまり強
6層 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

S-642

1層 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量 しまりやや強
2層 暗褐色土 ローム粒・焼土粒やや少量 しまり強
3層 暗褐色土 ロームブロック少量 しまりやや強
4層 暗褐色土 ロームブロック多量 しまりやや強
5層 暗褐色土 ロームブロック少量 しまり強
6層 暗褐色土 ロームブロック極少量 しまり強

S-952

1層 暗褐色土 ローム粒多量 烧土粒少量 しまり強
2層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
烧土粒・炭化物粒やや多量 しまりやや強

S-1089

1層 黑褐色土 烧土粒・炭化物粒やや多量
ロームブロック少量 しまり強
2層 暗褐色土 ロームブロック多量 烧土粒・炭化物粒やや多量
ローム粒少量 しまりやや強

第290図 井戸状遺構（2）

SE-1263 (第290・293図・図版三六)

位置 N35 グリッドに位置する。規模・形状 上面がやや広がっているが、漏斗状ではない。井筒部分は明灰橙色ローム層(IX層)上面まで掘り抜いている。壁は確認面から約80cmで細くくびれている。底面は径15cm程度の円形を呈する。覆土 黒褐色土を主体とし、くびれ部分よりも下ではロームブロックや炭化物粒が多く含まれている。底面には、白色粘土を多く含む暗褐色土が堆積している。上面の1層以外はしまりが弱い。遺物 覆土中から土師器塊の破片(第293図8)が出土している。

SE-1264 (第290図・図版三六)

位置 N35 グリッドに位置する。SE-1265 と隣接しているが、重複関係はない。規模・形状 井筒部分は明灰橙色ローム層(IX層)を15cm程度掘り抜いているが、砂礫層までは達していない。壁は確認面から約90cmで膨らみ、底面にかけて細くなっている。底面は径10cm程度の円形を呈する。覆土 上面はローム粒やロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積している(1・2層)。それ以下の覆土は黒褐色土を主体とし、下部には炭化物粒が多量に含まれている(5層)。底面には、SE-1263と同じく白色粘土を多く含む暗褐色土が堆積している。遺物は出土しなかった。

SE-1265 (第290図・図版三六)

位置 N35 グリッドに位置する。SE-1264 と隣接しているが、重複関係はない。規模・形状 井筒部分は明灰橙色ローム層(IX層)を25cm程度掘り抜いているが、砂礫層までは達していない。壁は確認面から約90cmでクランク状に屈曲し、底面にかけて細くなる。底面は径10cm程度の円形を呈する。覆土 上面はSE-1265と同じ土層が堆積しているが、内部は炭化物粒を多く含む黒褐色土が堆積していた。また、底面から80cmほど厚さで、SE-1264の下部と同様に白色粘土を多く含む暗褐色土が堆積している。遺物は出土しなかった。

SE-1269 (第290図・図版三六)

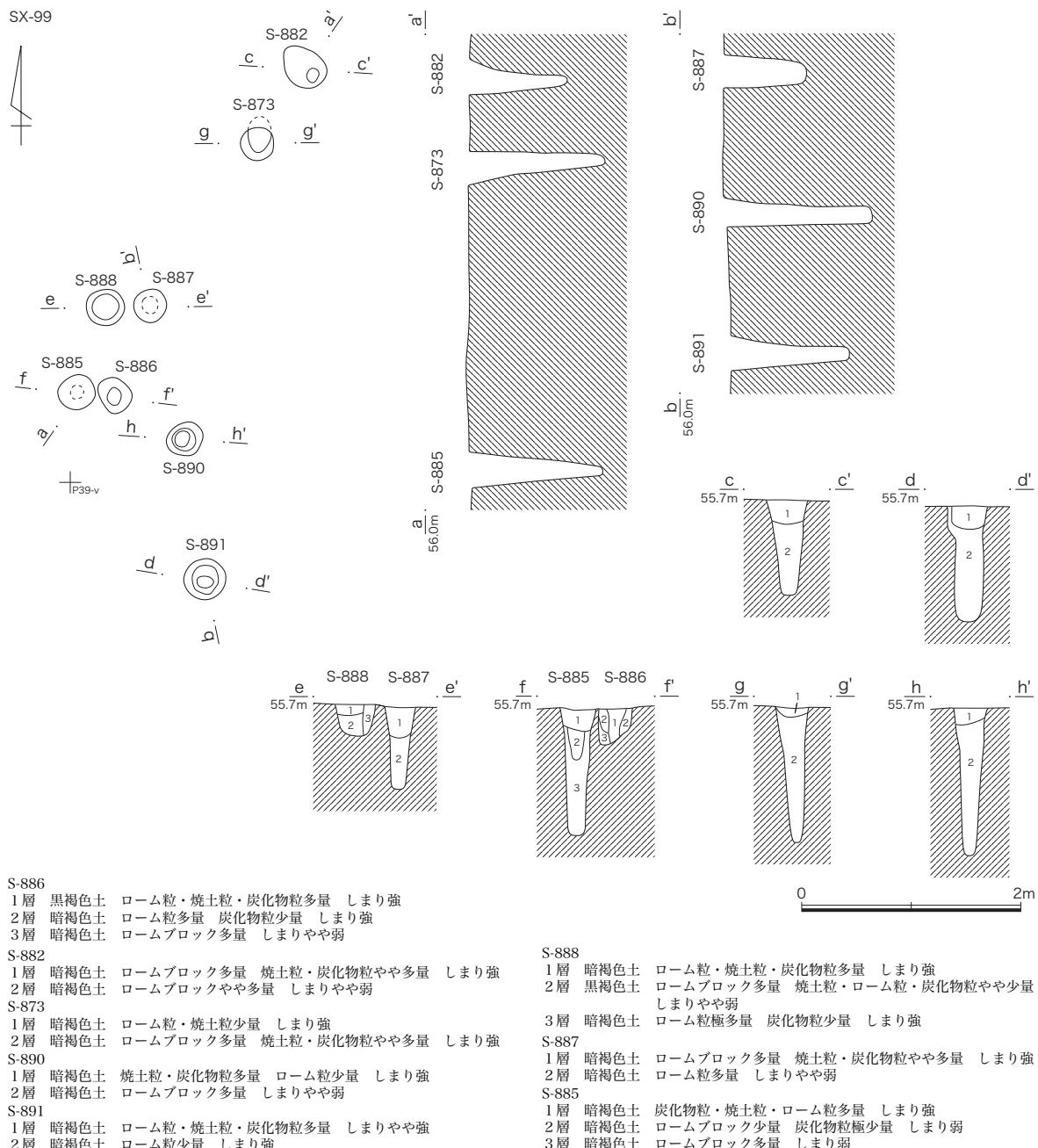
位置 N34 グリッドに位置する。規模・形状 井筒部分は明灰橙色ローム層(IX層)及び砂質の灰橙色ローム層を25cm程度掘り抜いている。壁は斜めに傾いており、底面は径約10cm程度の円形を呈する。覆土 上面はロームブロックを多量に含み、しまりが強い褐色土が薄く堆積している。最下層には、ロームブロック及び炭化物粒を多量に含むしまりの弱い黒褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SE-641 (第290図)

位置 H27 グリッドに位置する。規模・形状 確認面からの深さが約135cmで、深さ60cmのところで壁が膨らんでいる。底面は径約15cmの円形である。覆土 上層は内容物をあまり含まない暗褐色土(1・2層)、下層はロームブロックを多量に含む暗褐色土(3・4・6層)を主体とする。4層と6層の間には、厚さ30cmのロームブロック層(5層)が挟まれる。遺物は出土しなかった。

SX-99 ピット状遺構集中部 (第291図)

位置 P39 グリッドに位置する。5.5×3mの範囲に、ピット状遺構が6基集中している。規模・形状 S-882・887・891が比較的浅く85～100cm、それ以外の3基が110～130cmである。ピット中位の径



第291図 井戸状遺構（3）SX-99

は S-891 が 25cm とやや大きく、それ以外は 15cm から 20cm である。底面も S-891 のみ 20cm 程度、他は 10cm 程度である。S-885・887 は浅いピット状遺構が隣接しているが (S-886・888)、それぞれが伴うものか否かは判断できない。覆土 S-891 以外はロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。また、上面には焼土粒・炭化物粒を多く含む土層が堆積しているが、これは P39 グリッド付近の遺構上面に堆積しているもので、表土直下の基本土層に似ている。備考 ピットはエレベーション図作成のラインで直線的に並んでいることから、柵列の可能性も考えて調査を行ったが、規則性を見いだせなかつたためピット群として扱った。遺物は出土していない。

SX-100 ピット状遺構集中部 (第292図)

位置 O40 グリッドに位置する。3×2 m の範囲に、ピット状遺構が5基集中している。全てのピットが SI-92 竪穴住居跡と重複するが、S-961・962・963 は SI-92 よりも古い。S-927 は SI-92 調査時に確認されたが、記録の不備により新旧関係は不明である。また、S-965 は上面を現代の水路に切られているため、新旧関係は不明である。規模・形状 S-927・962 は確認面 (SI-92 上面) から 100cm で底面となる。S-961・963・965 は底面まで調査できなかった。S-927・962 の断面形は円筒状で、S-927 は底面近くでやや膨らんでいる。S-961・963・965 は、中位で一度膨らみ、底面に近づくにつれ急激に細くなる。覆土 S-927 以外は覆土に多量のロームブロックを含む。S-927・963 の覆土はよくしまっているが、その他はしまりが弱い。遺物は出土しなかったが、SI-92 竪穴住居跡との新旧関係から古墳時代以前の遺構と考えられる。

S-960 (第292・293図)

位置 N40 グリッドに位置する。規模・形状 確認面からの深さが約 100cm で、底面がやや膨らんでいる。また、東に向かってやや傾いている。覆土 黒褐色土を主体とし、下部にはロームブロックが多量に含まれる。遺物 覆土中から須恵器甕の破片が出土している (第293図9)。

S-1233 (第292図)

位置 O34 グリッドに位置する。規模・形状 図化はできなかつたが、確認面では1層が皿状に広がつてゐるとから、本来は断面漏斗状を呈していたものと考えられる。径 40cm 程度の円筒状で、底面は調査時の下端よりもさらに 1 m 以上下にあるものと考えられる。覆土 黒褐色土を主体とし、内容物はあまり含まれない。遺物は出土しなかつた。

S-1307 (第292図)

位置 J35 グリッドに位置する。上面が SD-1050 溝状遺構と重複しており、S-1307 の方が古い。規模・形状 径 30cm 程度の円筒状で、底面は調査時の下端よりもさらに 1 m 以上下にあるものと考えられる。覆土 内容物をあまり含まない暗褐色土を主体とし、しまりは強い。遺物は出土しなかつた。

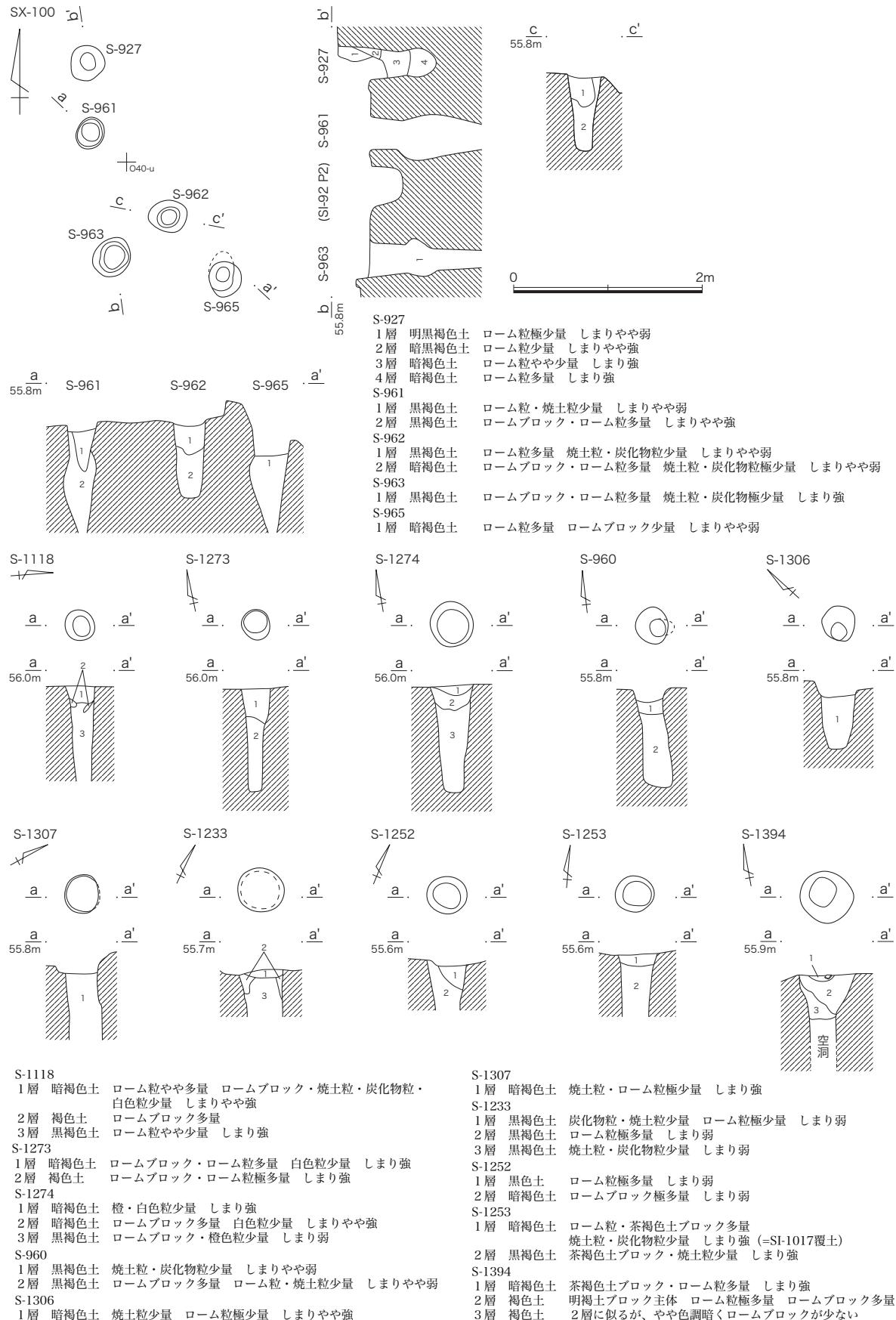
S-1252・1253 (第292図)

位置 O34 グリッドに位置する。2基とも SI-1017 竪穴住居跡と重複するが、上面に攪乱が入っているため、新旧関係は不明である。規模・形状 いずれも径 40cm 程度の円筒状で、底面は調査時の下端よりもさらに 1 m 以上下にあるものと考えられる。S-1252 は底面に向かってやや細くなっている。覆土 S-1252 はローム粒・ロームブロック、S-1253 は茶褐色土ブロックを多く含む。遺物は出土しなかつた。

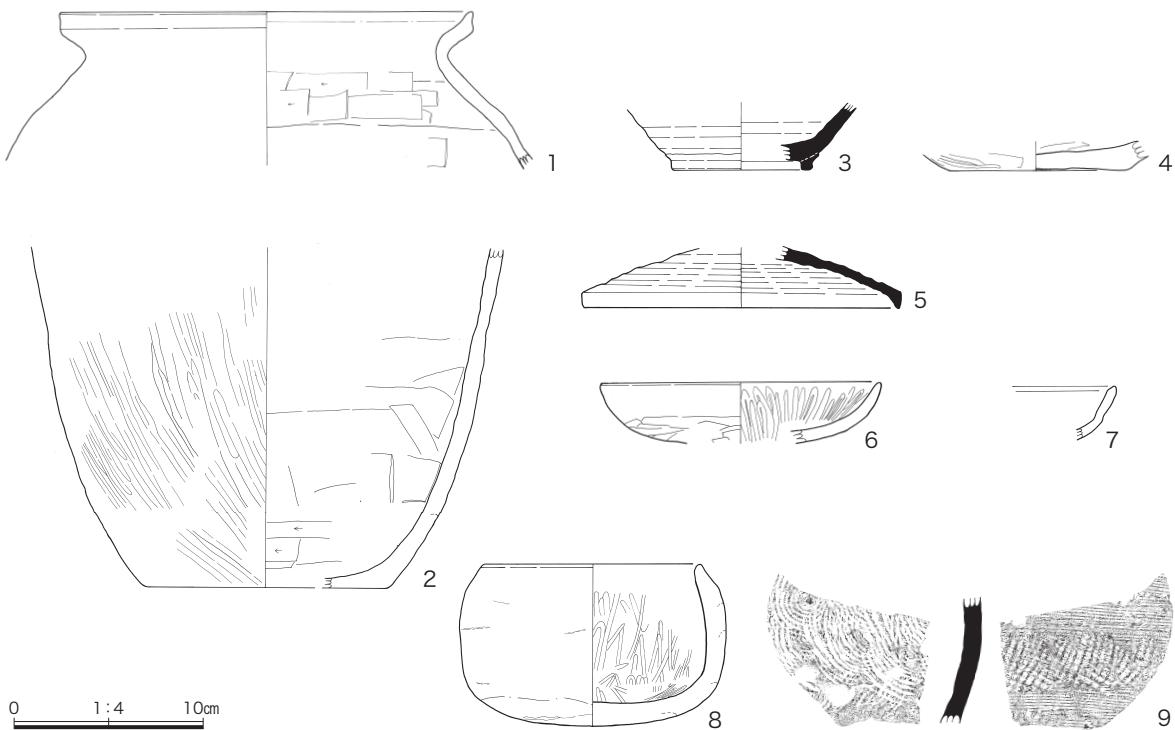
SE-1394 (第292図)

位置 O36 グリッドに位置する。SI-1014 竪穴住居跡と重複し、SE-1394 が古い。規模・形状 円筒状を呈するが、上面はやや広がつてゐる。井筒部分の径は約 30cm である。底面は調査時の下端よりもさらに深い。覆土 上面に SI-1014 竪穴住居跡の床下覆土と似る土層が薄く堆積しており、その下にロームブロックを主体とする褐色土が厚く堆積している。上面から遺物が数点出土しているが、SI-1014 に伴うものと考えられる (第225図3・15)。

第3章 発見された遺構と遺物



第292図 井戸状遺構(4)



第293図 井戸状遺構出土遺物

第105表 井戸状遺構遺物観察表

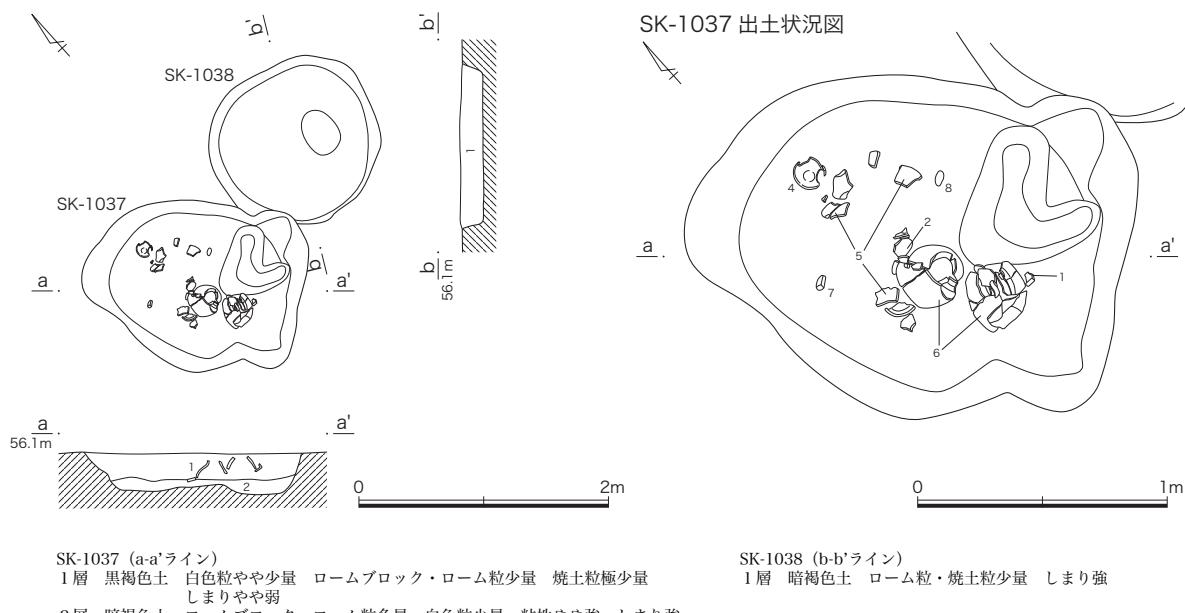
NO. 種類 器種	出土遺構	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
293-1 土師器 甕	SE-801	口 (21.8) 高 (8.0)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデつけ (外) ヨコナデ胴丁寧なナデ (単位不明) 口縁部強いヨコナデ (残) 2/8	砂礫・白色粒子多 雲母微 良 5YR4/6 赤褐	覆土 293-2と同一固体か?
293-2 土師器 甕	SE-801	底 (12.8) 高 (17.8)	(内) ヘラナデつけ 底部近くヘラケズリ (外) 縦位ヘラミガキ 外面底部近くに輪積痕	砂礫・白色粒子多 良 7.5YR3/3 暗褐	覆土 293-1と同一個体か?
293-3 須恵器 壺	SE-856	底 (7.6) 高 3.5	ロクロナデ 高台貼り付け後ナデ調整なし (残) 1/8 三毳産	砂粒・白色粒子多 不良 10YR7/3 にぶい黄褐	覆土
293-4 土師器 甕	SE-856	底 (9.6) 高 1.5	(内) ヘラケズリ? (外) 縦位ヘラミガキ 内面摩滅 (残) 1/8	砂礫・白色粒子極多 雲母多 やや不良 7.5YR3/4 暗褐	覆土
293-5 須恵器 蓋	SE-1215	端 (16.6) 高 (3.2)	内外面ともロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 内外面に自然釉 益子産	黒色融解粒極多 砂礫・白色粒子多 良 5Y4/1 灰	覆土
293-6 土師器 壺	SE-1215	口 (15.5) 高 (3.2)	(内) ヨコナデ→密なミガキ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ (一部残)	白色粒子多 良 7.5YR4/6 褐	覆土
293-7 土師器 壺	SE-1215	破片	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ	微細な白色粒子多 良 7.5YR3/2 黒褐	覆土
293-8 土師器 甕	S-1263	口 (11.4) 大 (14.0) 高 8.5	(内) ヨコナデ体ミガキ (外) ヨコナデ体ナデ (単位不明) 外面に輪積痕 更新部内面は剥落 (残) 3/8	微細白色粒子少 良 5YR5/6 明赤褐	覆土
293-9 須恵器 甕	S-960	破片	(内) 同心円状当て具痕 (外) 平行タタキ+カキメ 内面指頭圧痕あり 外面自然釉 产地不明	白色粒子・黒色融解 粒多・砂礫少 良 N3/ 暗灰	覆土下部

(5) 土坑

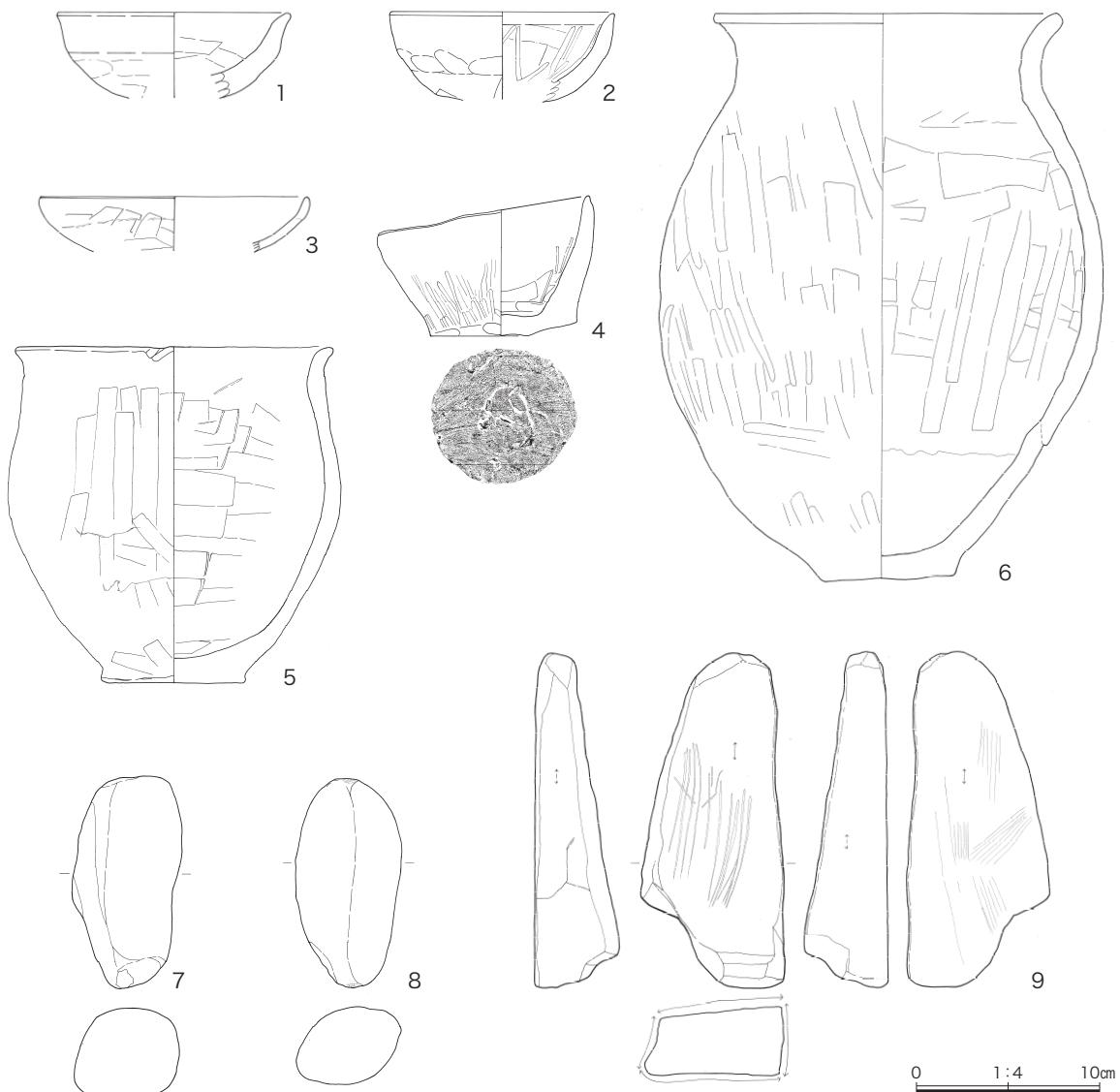
古墳時代から平安時代に該当する土坑は9基確認された。いずれの土坑からも当該時期の遺物が出土しているが、出土状況や他遺構との重複関係から確実に当該時期の遺構と考えられるものはSK-1037・1216・1224・1234・1246の5基で、完形に近い複数個体の遺物がまとめて出土したのはSK-1037のみである。他にも当該時期の遺物が出土している土坑が確認されているが、遺物がいずれも細片や微量であったり、遺構形態や覆土から明らかに後世の所産と考えられる場合には、第4節の時期不明の遺構で取り扱っているので、併せて参考されたい。

SK-1037（第294図・図版三七・六〇）

位置・重複関係 N38グリッドに位置する。東側がわずかにSK-1038と重複しており、SK-1037の方が古い。
規模・形状 長径174cm、短径134cmの不整な楕円形を呈し、深さは32cmである。西側の底面が不整形に凹む。覆土 上下2層に分層される。1層は黒褐色土を主体とし、遺物が含まれているためしまりが弱い。2層はロームブロック・ローム粒を多量に含む層で、粘性が強い。上下層とも、白色粒子が含まれている。遺物 ほぼ完形の土師器甕（第295図6）など、残存状況の良好な遺物が多く出土している。6は土坑中央で、上下に分かれた状態で出土している。割れ口がほぼ水平であることから、人為的に打ち欠かれたものと考えられる。第295図5の土師器甕は、6とは対照的に破片が土坑内にちらばっていた。また、覆土中から大型の砥石（第295図9）が出土している。



第294図 SK-1037



第295図 SK-1037出土遺物

第106表 SK-1037遺物観察表

No. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
295-1 土師器 壺	口 (12.7) 高 (4.7)	(内) 口ヨコナデ体弱いヘラナデ (外) 口ヨコナデ体上指ナデ体下粗いケズリ? 内外面荒れ 外面底部にタール状の付着物 (残) 1/8	赤色融解粒多・白色粒子やや多 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 No.1
295-2 土師器 壺	口 (12.2) 高 (4.8)	(内) 口ヨコナデ体丁寧なナデ+放射状のミガキ (外) 口ヨコナデ体上指ナデ (指頭圧痕状) 体下粗いヘラケズリ 内面ヘラ状工具端のあたりが弱く残る (残) 3/8	白色粒子多・赤色融解粒やや多 良 5YR4/6 赤褐	覆土 No.4
295-3 土師器 壺	口 (14.8) 高 (3.0)	(内) ヨコナデ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内外面光沢帶びる 口縁部下に輪積 痕 内面漆仕上げ (残) 1/8	白色粒子・砂礫多 良 10YR3/1 黒褐	覆土

No. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
295-4 土師器 壺	口 12.0 底 7.9 高 6.8	(内) 口～体ヨコナデ底強い指ナデ (外) 口ヨコナデ体弱いユビナデ→下細かいミガキ 全体的に大きく歪む 調整粗い (残) 4/8	砂粒・白色粒子多・ 砂礫少・雲母微 良 5YR5/6 明赤褐	覆土 No.16
295-5 土師器 甕	口 (17.2) 大 (18.1) 底 7.5 高 18.2	(内) 口ヨコナデ胴へラナデつけ (外) 口ヨコナデ胴へラケズリ 内面に輪積痕 (残) 底 8/8 口 1/8	微細白色粒子多・ 砂礫少・雲母微 良 7.5YR5/4 ぶい褐	覆土 No.5 + 10 + 13
295-6 土師器 甕	口 17.6 大 24.0 底 6.2 高 30.7	(内) 口ヨコナデ胴上横方向のヘラナデ胴下縦方向のヘ ラナデ (外) 口ヨコナデヘラケズリ+ナデ (一部ミガキ状) 胴部下位に輪積痕残る 全体的に被熱 一部剥落 (残) 8/8	砂礫・白色粒子多 二次被熱 5YR4/6 赤褐	覆土 No.1+2+4 +6+7+10+11+12 +13+14+15+16
295-7 礫	長 11.2 幅 5.6 厚 4.6 重 435.75	左側面から下にかけて被熱による赤化 使用痕特になし	10YR6/2 灰黄褐 安山岩	覆土 No.8
295-8 礫	長 11.6 幅 5.8 厚 4.4 重 353.19	上下端に弱い敲打痕	10YR4/1 褐灰 砂岩	覆土 No.9
295-9 石製品 砥石	長 18.3 幅 7.7 厚 3.7 重 754.83	左側面及び上面以外の4面を使用。左側面と裏面は弱 い赤化。表、裏、右側面に強い砥面がある。表面に刃 潰し痕と思われる薄い擦痕残る。裏面に縦方向の刃潰 し痕あり。	流紋岩 2.5Y6/2 灰黄	覆土

SK-1216 (第 296・297 図・図版三七・六〇)

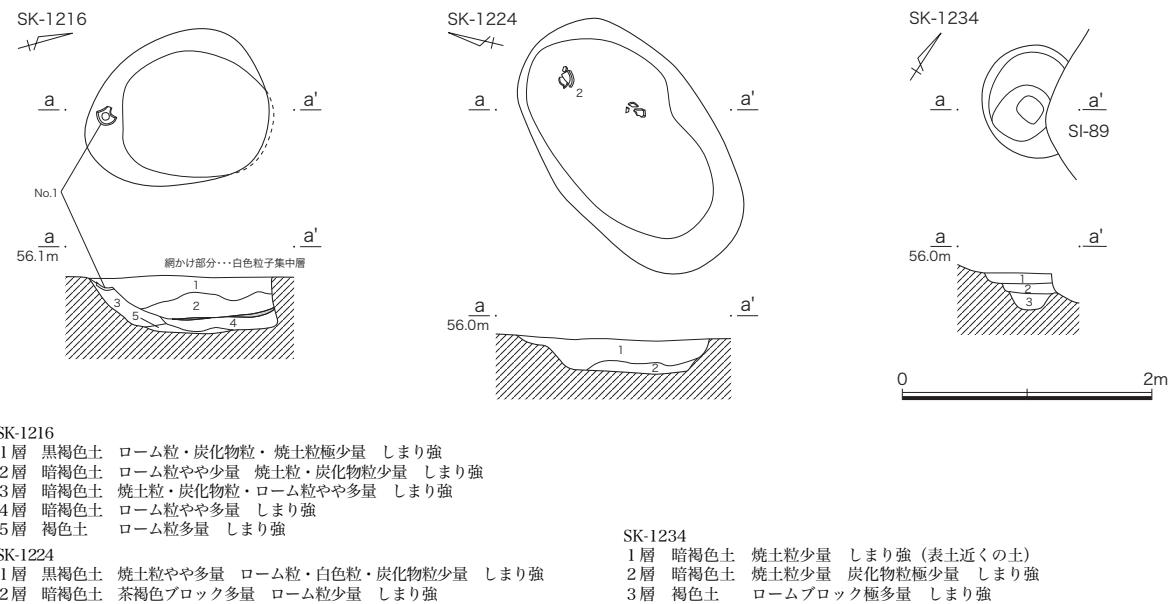
位置・重複関係 O35 グリッドに位置する。SI-1015 竪穴住居跡南壁に隣接するが、重複関係はない。規模・形状 長径 148cm、短径 118cm の南北に長い楕円形を呈する。北側の壁は一部オーバーハングしている。底面はほぼ平らである。覆土 内容物をあまり含まない上層（1・2層）とローム粒・焼土粒・炭化物粒を多く含む下層と二分けられ、その間には火山灰と考えられる白色粒子の極薄い層が堆積している。覆土はよくしまっており、硬い。遺物 下層上面から須恵器壺が出土している（第 297 図 1）。

SK-1224 (第 296・297 図・図版三七・六〇)

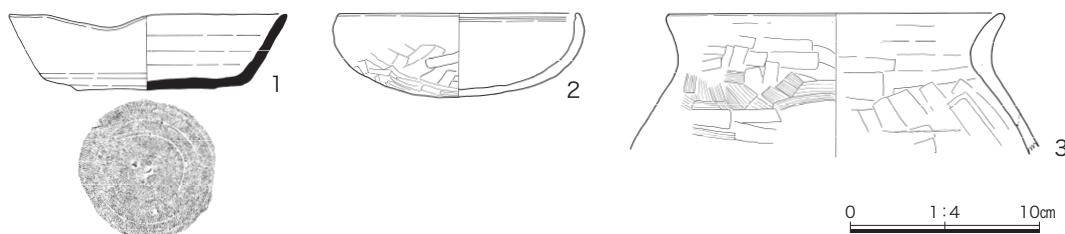
位置 N32 グリッドに位置する。低地 A と台地の境目に位置しており、重複関係はない。規模・形状 長径 222cm、短径 133cm の南北に長い楕円形を呈する。北側の壁はなだらかに立ち上がるが、西側はやや急な角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土 上層（1層）は焼土粒や白色粒を含む黒褐色土で、低地に堆積している土層（II～III層）に似る。下層（2層）は茶褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土である。遺物 覆土中から土師器壺の破片が出土している（第 297 図 2）。

SK-1234 (第 296・297 図)

位置・重複関係 O38 グリッドに位置する。SI-89 竪穴住居跡に切られる。規模・形状 直径約 90cm の円形を呈すると考えられるが、東側は SI-89 竪穴住居跡に切られているため不明である。中央にピット状の掘り込みがあり、断面が段状になっている。深さは 35cm である。覆土 各層が水平に堆積している。ピット状の掘り込みには、ロームブロックを主体とする褐色土が堆積し、その上部には内容物をあまり含まない暗褐色土が堆積している。遺物 土師器甕の破片が出土している（第 297 図 3）。



第296図 SK-1216・1224・1234



第297図 SK-1216・1224・1234出土遺物

第107表 SK-1216・1224・1234遺物観察表

No. 種類 器種	出土遺構	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
297-1 須恵器 壺	SK-1216 口 (14.7) 底 (7.3) 高 4.0	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ底ヘラ切り離し 後回転ヘラケズリ 二次底部面有り 口縁部大きく歪む (残) 4/8 益子産	砂粒・白色粒子多 良 7.5YR4/1 灰	No.1	
297-2 土師器 壺	SK-1224 口 12.4 大 13.1 高 4.4	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ (工具痕二種類あり) 内面漆仕上げ 内面あばた状の剥離 (残) 6/8	白色粒子やや多 良 7.5YR4/1 褐灰	No.2	
297-3 土師器 甕	SK-1234 口 (17.8) 高 7.1	(内) 口ヘラナデ胴ヘラナデ (外) 口ヘラナデ胴ハケメ + ヘラナデ 内面輪積痕 (残) 1/8	白色粒子多・砂 礫・雲母やや多 良 10YR4/2 灰黄褐	覆土	

SK-571 (第298・300図)

位置 J27 グリッドに位置する。規模・形状 長径 54cm、短径 47cm の東西にやや長い梢円形を呈する。

覆土 上層（1層）は焼土粒を多く含む暗褐色土、下層（2層）はローム粒を多く含む褐色土が堆積している。

遺物 土坑上面から4個体分の土師器壺の破片（第300図1～4）が出土しているが、覆土中の出土ではないことから、これらの遺物から土坑の時期を確定することはできない。

SK-789・790 (第298・299図)

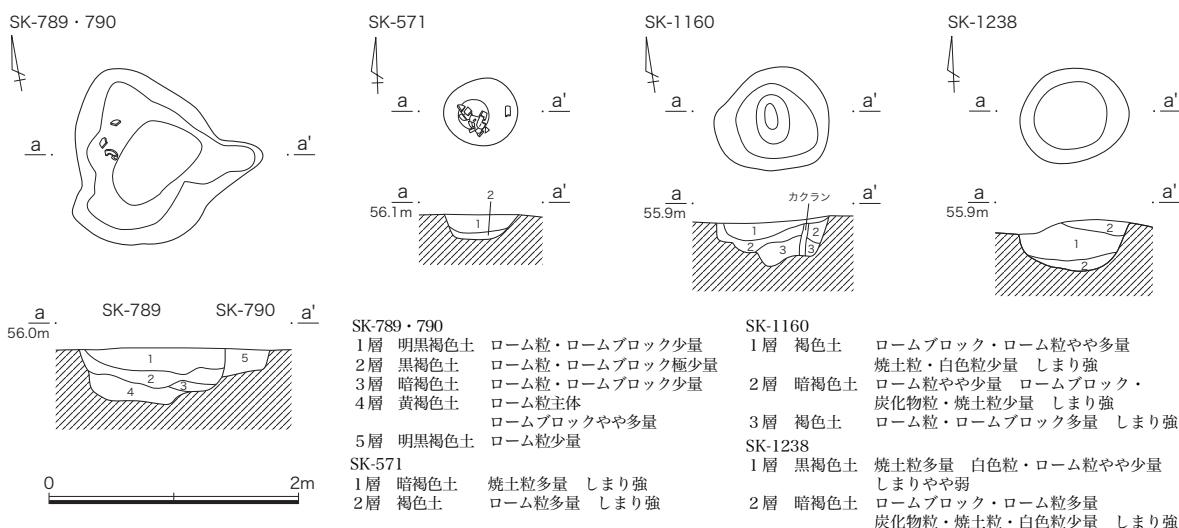
位置 O42 グリッドに位置する。SK-789 が SK-790 を切っている。規模・形状 SK-780 は長径 147cm、短径 143cm の不整形を呈する。SK-790 は小ピット状の遺構であったと考えられる。底面中央が一段掘り下がっており、壁はほぼ直に立ち上がる。覆土 内容物をあまり含まない黒褐色土を主体とする。遺物 西壁近くから土師器甕の破片 (第299図2)、覆土中から土師器坏・甕の破片 (第299図1・3) が出土している。

SK-1160 (第298・300図)

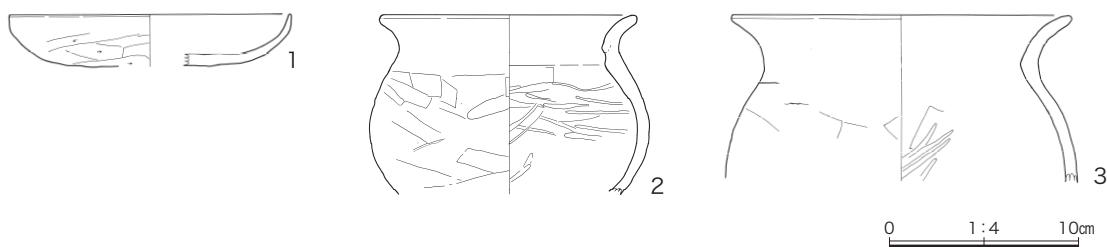
位置 M39 グリッドに位置する。規模・形状 長径 91cm、短径 80cm のやや不整な円形を呈する。底面中央部分がピット状に凹んでおり、SK-1234 の断面形と似ている。壁はほぼ直に立ち上がる。覆土 ロームブロックを多く含む褐色土の間に、内容物をあまり含まない暗褐色土が堆積している。いずれの層もしまりは強い。遺物 覆土中から土師器坏・須恵器坏の破片が出土している (第300図5・6)。

SK-1238 (第298・300図)

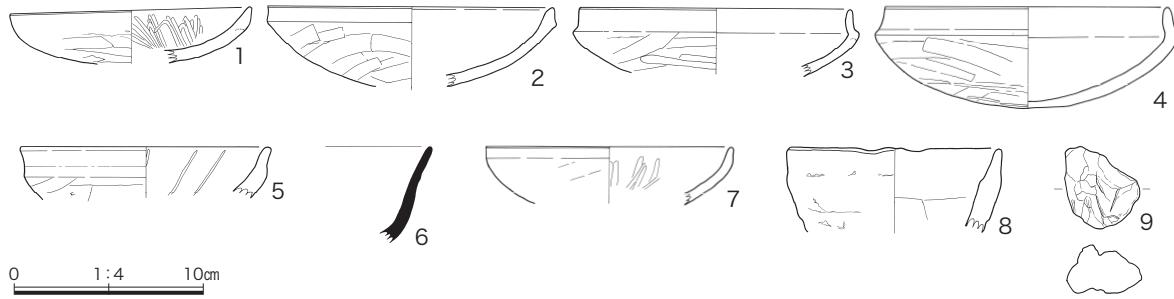
位置・重複関係 N34 グリッドに位置する。規模・形状 長径 86cm、短径 74cm の東西に長い楕円形を呈する。底面は皿状で、壁はややなだらかに立ち上がる。覆土 焼土粒が多量に含まれる黒褐色土を、ロームブロックが多量に含まれる暗褐色土が挟む形で堆積している。遺物 土師器坏の破片及び焼成粘土塊が出士している (第300図7~9)。



第298図 SK-571・789・790・1160・1238



第299図 SK-789 出土遺物



第300図 SK-571・1160・1238出土遺物

第108表 SK-571・789・1160・1238遺物観察表

No. 種類 器種	出土遺構	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
299-1 土師器 壺	SK-789	口 (14.8) 高 (2.7)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面底部が摩滅（残）1/8	砂礫・白色粒子多 やや良 10YR3/1 黒褐	覆土
299-2 土師器 甕	SK-789	口 (13.5) 大 (14.6) 高 (9.5)	(内) ヨコナデ胴密な横方向のミガキ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 口縁部にタール状の付着物 脊部下半摩滅（残）6/8	白色粒子・砂粒多・雲 母少 良 10YR3/2 黒褐	No.2
299-3 土師器 甕	SK-789	口 (17.9) 高 (8.6)	(内) ヨコナデ胴ヘラナデ・一部斜め方向のミガキ (外) ヨコナデ胴ヘラケズリ 外面にスス付着	砂礫多・白色粒子・雲 母少 良 10YR6/3 にぶい黄褐	覆土
300-1 土師器 壺	SK-571	口 (12.8) 高 (2.8)	(内) ヨコナデ→放射状のミガキ (外) ヨコナデ体ケズリ? 外面に輪積痕 内面あばた状の剥離（残）1/8	砂礫・砂粒多 断面二次被熱 10YR3/1 黒褐	No.1
300-2 土師器 壺	SK-571	口 (15.0) 高 (4.2)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ナデ 内面漆仕上げ（残）2/8	微細白色粒子・雲母多 良 5YR6/8 橙	No.1
300-3 土師器 壺	SK-571	口 (14.3) 大 (13.0) 高 (3.6)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ（残）1/8	白色粒子極多・雲母少 良 7.5YR3/2 黒褐	No.1
300-4 土師器 壺	SK-571	口 (15.0) 大 (16.2) 高 (5.4)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ体ヘラケズリ・底部一部ミガキ 内面漆仕上げ（残）5/8	白色粒子多 良 10YR3/1 黒褐	No.1
300-5 土師器 壺	SK-1160	口 (13.4) 高 (2.7)	(内) ヨコナデ+放射状の沈線（ミガキのような光沢 なし）(外) ヨコナデ体ヘラケズリ 内面漆仕上げ?（残）1/8	微細白色粒子多・ 砂礫少 良 7.5YR3/1 黒褐	覆土
300-6 須恵器 壺	SK-1160	破片	内外面ロクロナデ ロクロ目弱い 益子産	砂礫・白色粒子極多 良 N4/ 灰	覆土
300-7 土師器 壺	SK-1238	口 (13.0) 高 (3.0)	(内) ヨコナデ+放射状のミガキ (外) ヨコナデ体ケズリ? 内面漆仕上げ 外面摩滅（残）1/8	微細白色粒子・雲母微 やや良 7.5YR3/3 暗褐	覆土
300-8 土師器 壺	SK-1238	口 (11.2) 高 (4.5)	(内) ヨコナデ体ヘラナデ (外) ヨコナデ体調整なし 外面に輪積痕や成型時のひび割れが残る（残）1/8	微細白色粒子・雲母微 良 5YR6/6 橙	覆土
300-9 焼成 粘土塊	SK-1238	長 4.4 幅 3.9 厚 2.5	ちぎりとった状態 表面にヘラ状 工具による鋭いキズ有り ※この個体以外にも粘土塊・手捏ね土器の破片有り	微細白色粒子多 良 10YR5/4 にぶい黄褐	覆土

(6) ピット状遺構

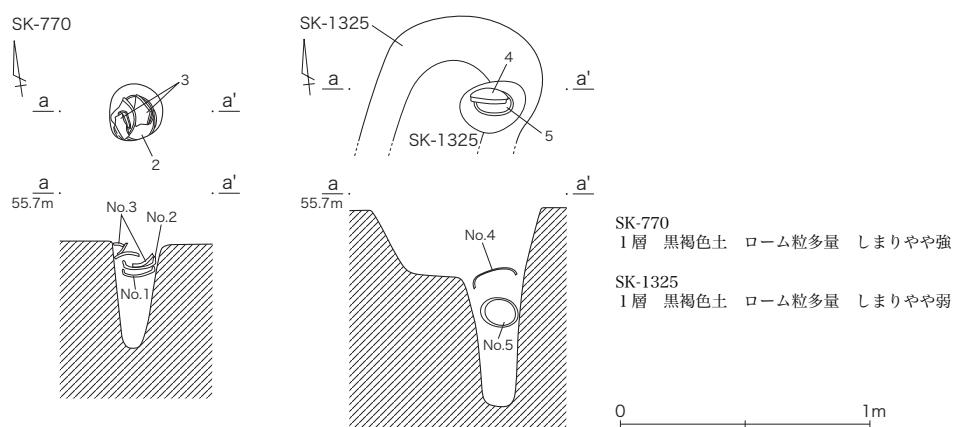
古墳時代のピット状遺構は2基確認された。S-770、S-1325とも完形の土師器壺が重なった状態で複数個体出土しており、出土状況、覆土ともよく似ている。井戸状遺構の項で扱った深いピット状の遺構とも似ているが、それらが集中する区域(P39・O40グリッド)からは離れた位置で単発的に確認されていること、深いピット状遺構の多くが奈良時代以降の所産と考えられることを鑑み、古墳時代の所産と考えられるS-770・1325はピット状遺構として扱った。他にも当該時期の遺物が出土したピット状遺構は確認されているが、遺物が細片かつ微量であり、覆土など他の要素からも明らかに後世の所産と考えられるものであったため、それらについては第4節時期不明の遺構あるいは第5節低地の調査の中で記載を行っている。

S-770(第301・302図・図版三七・六〇)

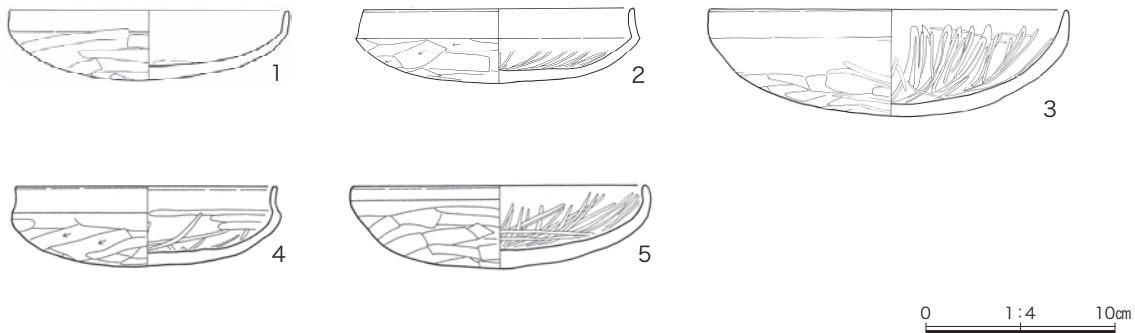
位置 P42グリッドに位置する。規模・形状 上面の径が約30cm、深さ約50cmのピット状で、底面に向かって細くなる。覆土 ローム粒を多量に含む黒褐色土が堆積しており、しまりは強い。遺物 確認面から15cmの間で、土師器壺が3個体重なって出土した(第302図1~3)。下から出土した1・2は正位、一番上から出土した3は破片が重なった状態であった。3は口縁部が約1/4欠けているが、1・2はほぼ完存である。いずれもほとんど摩滅していない。

S-1325(第301・302図・図版三七・六〇)

位置 Q44グリッドに位置する。上面はSK-1324に切られて失われている。規模・形状 残存部上面の長径が25cm、短径が20cmの東西に長い楕円形を呈し、深さは約80cmである。底面に向かってやや細くなる。覆土 ローム粒を多量に含む黒褐色土が堆積しており、しまりはやや弱い。遺物 残存部上面から20cmの間で、ほぼ完形の土師器壺が2個体出土している(第302図4・5)。いずれも縦に傾いた状態で、2個体の間には5cmほどの隙間があった。両個体ともほぼ完存だが、下から出土した5は底部が摩滅しており、やや遺存状態が悪い。



第301図 S-770・1325



第302図 S-770 · 1325 出土遺物

第109表 S-770 · 1325 遺物観察表

NO. 種類 器種	出土 遺構	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
302-1 土師器 坏	S-770	口 14.6 大 14.8 高 3.8 重 215.90	(内) ヨコナデ 底面近くヘラケズリ (外) 口ヨコナデ 体～底ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 8/8	砂粒多・小砂礫やや多 良 7.5YR4/3 褐	No.6
302-2 土師器 坏	S-770	口 14.3 大 15.0 高 3.9 重 256.53	(内) 口ヨコナデ 体ヨコナデ→放射状のミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 完存	白色粒子少・雲母微 良 7.5YR5/3 にぶい褐	No.5
302-3 土師器 坏	S-770	口 18.8 高 5.6	(内) 口ヨコナデ→横方向のミガキ 体ヨコナデ→放 射状ミガキ (一部往復) (外) 口ヨコナデ 体ケズリ、一部ミガキ 内面～体 部外面漆仕上げ (残) 口縁部 6/8 体部完存	砂粒多 白色粒子・雲 母微 良 7.5YR4/3 褐	No.1 + 2 + 3 + 4
302-4 土師器 坏	S-1325	口 13.7 大 14.1 高 4.2	(内) 口ヨコナデ体ヨコナデ→ミガキ (反時計回り) (外) 口ヨコナデ体ヘラナデ・ヘラケズリ 内面～口縁部外面漆仕上げ (残) 7/8	白色粒子・砂礫・赤色 融解粒多 良 10YR5/2 灰黄褐	No.1
302-5 土師器 坏	S-1325	口 15.4 高 4.4 重 340.44	(内) 口ヨコナデ体ミガキ (外) 口ヨコナデ体ヘラケズリ・ヘラナデ 内面～口縁部外面漆仕上げ 底部外面摩滅 (残) 完存	白色粒子・砂粒多・砂 礫少 良 7.5YR5/4 にぶい褐	No.2

(7) その他の遺構

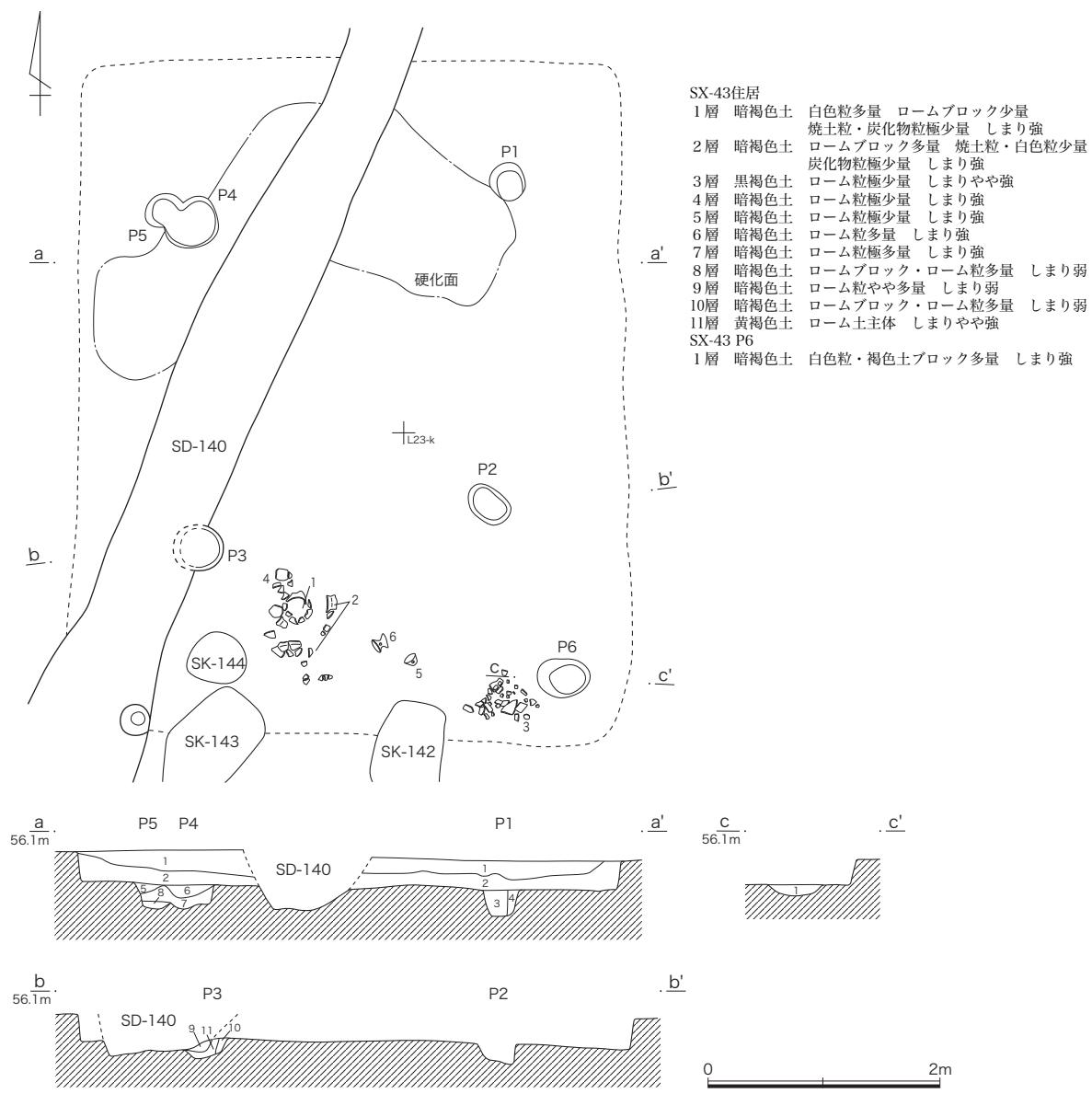
ここでは、前節までに取り上げた各種遺構に属さない堅穴遺構 SX-43 · SX-1246 について記載する。いずれも古墳時代の堅穴住居跡の可能性が高いが、判断材料に乏しいため不明遺構として扱った。

SX-43 (第303 · 304図 · 図版三八 · 五九)

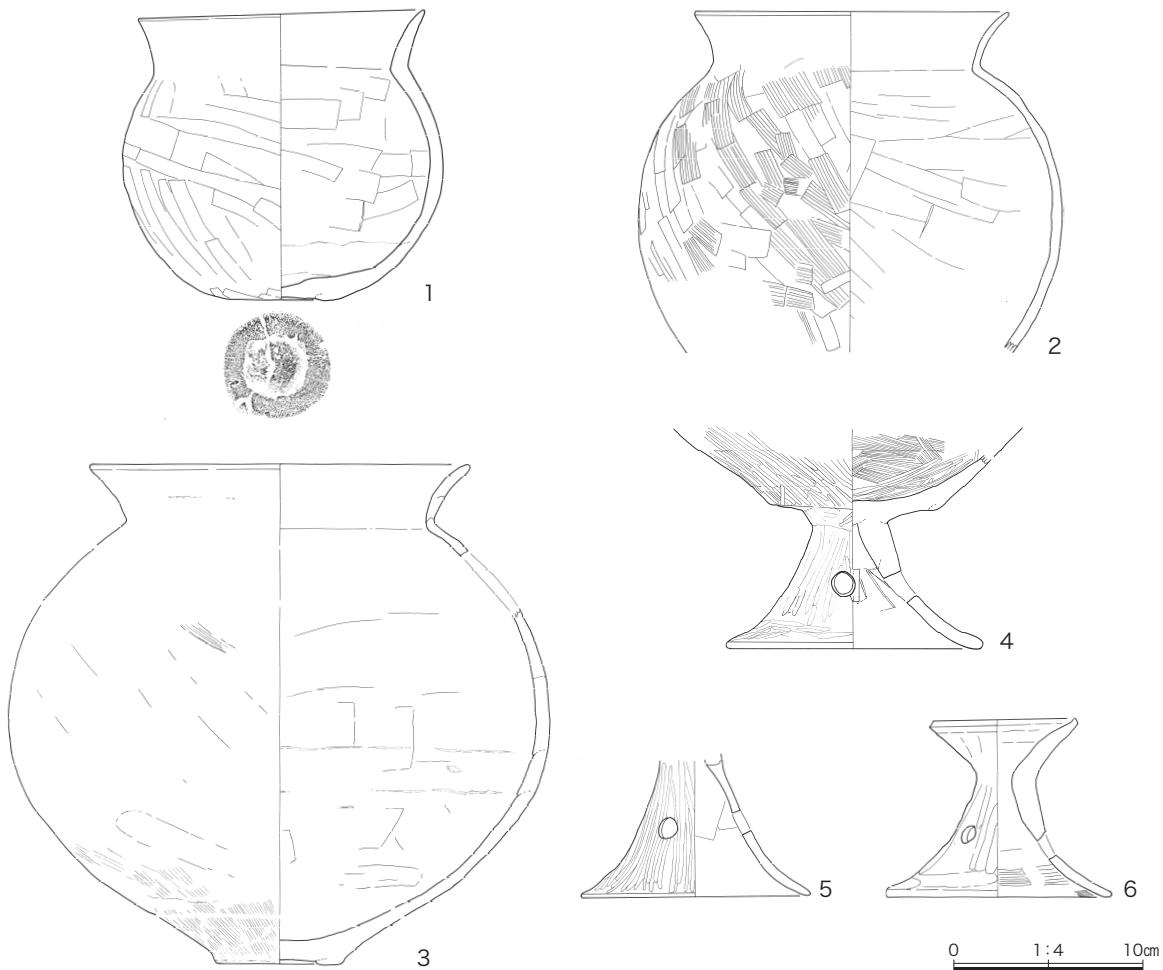
位置・重複関係 L23 グリッドに位置する。上面を SD-140 · SK-142 · 143 · 144 に切られる。規模・形状 壁の立ち上がりや平面プランは判然としない。覆土断面で確認した推定の規模は、長辺 5.9 m、短辺 4.7 m、深さ 25cm である。南北に長い長方形を呈し、長辺の傾きは真北を向いている。覆土 上下 2 層に分けられる。いずれも暗褐色土を主体とし、上層は白色粒子、下層はロームブロックが多く含まれる。硬化面 プラン北

側で硬化面が確認された（第303図破線部分）。ロームブロック等の貼床ではなく、地山の踏みしめによるものと考えられる。ピット いずれも浅く不整形であるため柱穴とは考えにくい。P1のみ柱痕状の土層が堆積しているが、しまりは強い。遺物 プラン南側で土師器甕（第304図1～3）および高坏（第304図4）、器台（第304図5・6）が集中して出土している。他の部分の覆土中からは、ほとんど遺物が出土していない。

備考 調査時には遺物が集中して出土したことから、SX-43を竪穴住居跡としていた。しかし、火焔が痕跡も含め確認できることや、遺跡内で確認された古墳時代前期の竪穴住居跡はいずれも明瞭なプランや柱穴を有していることを考え、報告書内では竪穴遺構として記載した。



第303図 SX-43 竪穴遺構



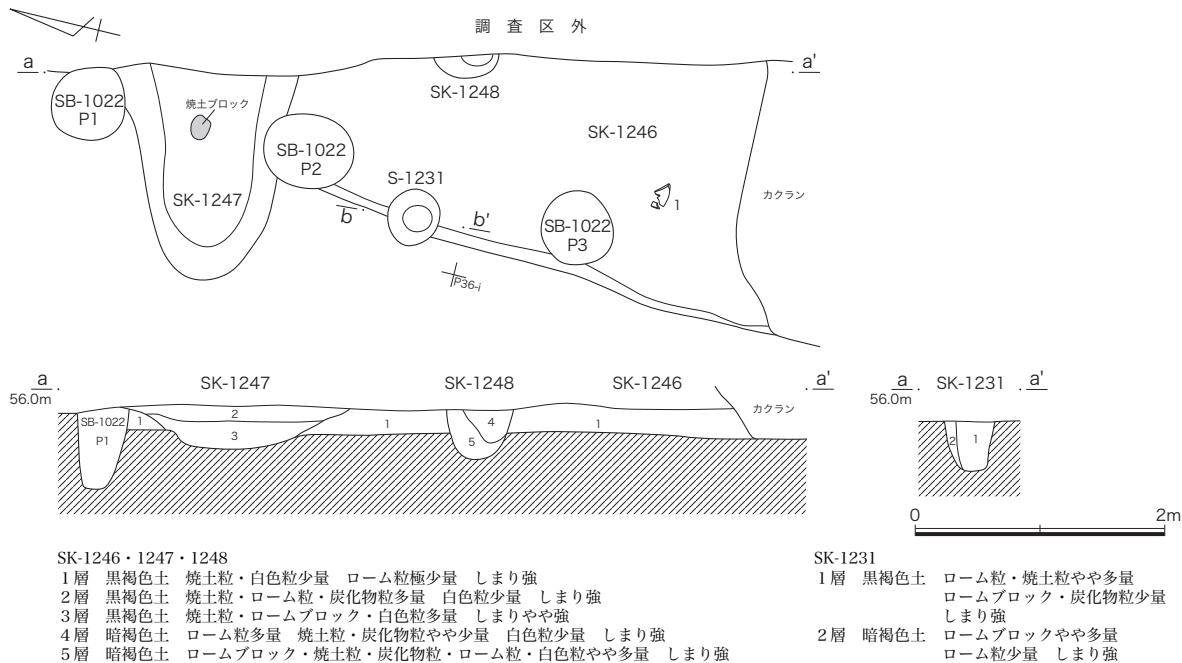
第304図 SX-43出土遺物

第110表 SX-43遺物観察表

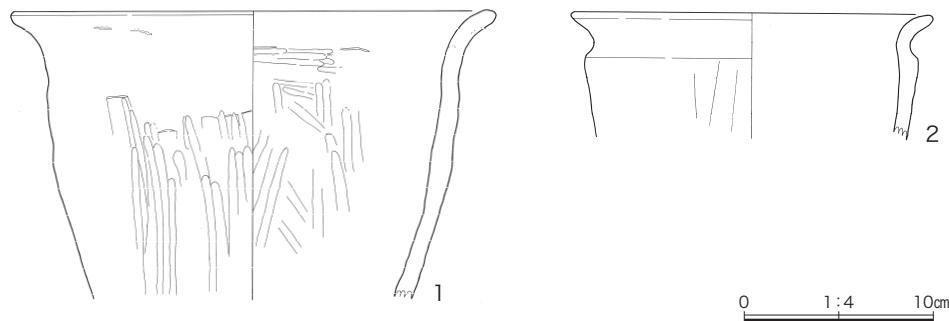
NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
304-1 土師器 甕	口 14.3 大 15.8 底 5.1 高 14.5	(内) 口ヨコナデ胴丁寧なナデ (外) 口ヨコナデ胴ヘラナデ 口縁部内面に強い稜 胴下半に輪積痕 底部にドーナツ 状の粘土貼り付け (残) 底 7/8	砂粒・白色粒子多・砂礫・ 雲母少 良 10YR6/4 にぶい黄橙	No.4 + 5 + 6 + 覆土
304-2 土師器 甕	口 (16.6) 大 (22.3) 高 (18.0)	(内) 口ヨコナデ胴ヘラナデ (外) 口ヨコナデ胴ハケメ 口縁部くの字に屈曲 ハケメ二種類 (残) 5/8	砂粒多・白色粒子やや多・ 雲母微 良 10YR7/2 にぶい黄橙	No.4 + 5 + 6 + 覆土
304-3 土師器 甕	口 (20.0) 大 (28.4) 底 5.8 高 (26.0)	(内) 口ヨコナデ胴ナデ (外) 口ヨコナデ胴ナデ底部近くハケメ 球形 (残) 破片より復元	砂粒・白色粒子少・雲母 微 良 7.5YR6/4 にぶい橙	No.1
304-4 土師器 高坏	脚部下端 13.4 高 (11.6)	(坏部内) ハケメ→ミガキ (坏部外) ミガキ (脚部内) 下半ヘラケズリ→ヨコナデ・上半ヘラケズリ (脚部外) ミガキ 坏部接合痕 坏部上半がやや膨らむ 外面一部漆付着 (残) 坏部 4/8 脚部 8/8	砂礫・砂粒・白色粒子多・ 雲母微 良 5YR4/6 赤褐	No.5 + 8 + 覆土
304-5 土師器 器台	脚部下端 (12.1) 高 (7.2)	(脚部内) 端部ヨコナデ・脚部ヘラケズリ (脚部外) 端部ヨコナデ・脚部縦方向ミガキ 脚孔 3 単位 端部内面に黒色付着物 (残) 脚部 8/8	砂粒・白色粒子多・砂礫 やや多・雲母少 良 7.5YR6/6 橙	No.2
304-6 土師器 器台	受部下端 7.4 脚部下端 11.9 高 9.4	(受部内) 丁寧な横方向のナデ (受部外) ヘラケズリ (脚部内) ヘラケズリ→端部ハケメ (脚部外) ヘラナデ→端部ナデ (一部ハケメ) 脚孔 3 単位 脚部下端に赤彩? (残) 7/8	砂礫・白色粒子多・雲母 微 良 10YR6/8 明黄褐	No.3

SX-1246 (第 305・306 図)

位置・重複関係 P36 グリッドに位置する。SB-1022 挖立柱建物跡、SK-1247・1248・1231 に切られる。南側の壁は攪乱によって失われている。規模・形状 大半が調査区外のため、規模・形状は不明である。ただし、東側壁が直線的なラインを呈することから、プランは方形かそれに近いものと考えられる。深さは 20cm である。覆土 内容物をあまり含まない黒褐色土が主体で、しまりは強い。覆土底面で硬化面は確認されなかった。遺物 南側底面上から土師器甕および甕の破片が出土している（第 306 図 1・2）。



第 305 図 SX-1246 穫穴遺構



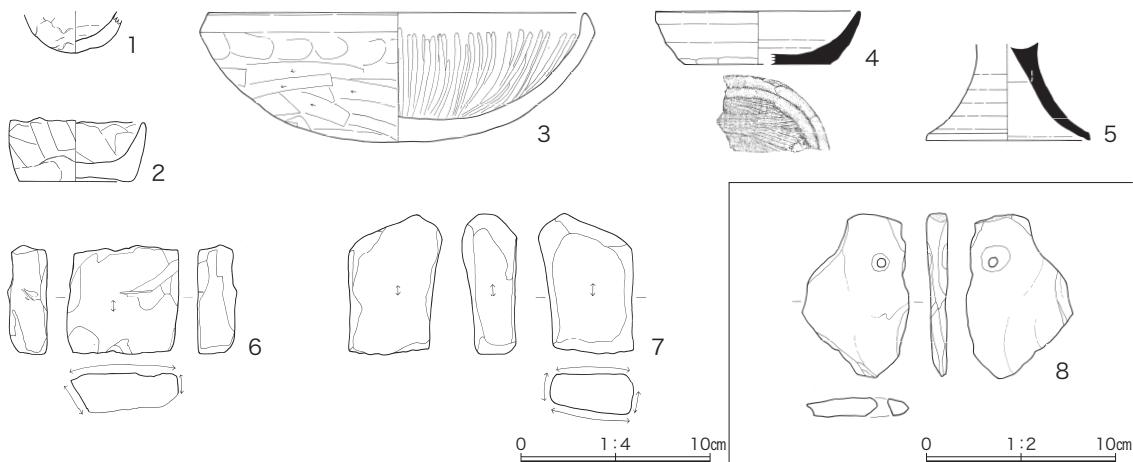
第 306 図 SX-1246 出土遺物

第 111 表 SX-1246 遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm · g)	成形・調整方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
306-1 土師器 甕？	口 (25.6) 高 (15.2)	(内) 口ヨコナデ胴縦方向ミガキ (外) 口ヨコナデ胴ヘラケズリ→ミガキ 内外面に輪積痕残る(残) 口～胴 1/8	砂粒・白色粒子多・砂礫・ 雲母少 良 7.5YR6/6 橙	No.1
306-2 土師器 甕	口 (19.0) 高 (6.6)	(内) 口ヨコナデ胴不明 (外) 口ヨコナデ胴縦方向ヘラケズリ 口縁部下に強い稜(残) 口 1/8	砂粒極多・白色粒子多・ 雲母少 良 7.5YR4/4 褐	南一括

(8) 遺構外出土の遺物

この項では、古墳時代から平安時代の遺構以外から出土した当該時期の遺物のうち、中世・近世の遺構内から出土した遺物（第3節）、低地部分の遺物（第5節）を除いたものについて扱う。遺構外出土遺物の破片数は、第113表に示した。なお、表土除去作業中に確認された遺物のうち、住居確認面から出土したものは、住居跡出土の遺物に含めている。遺構外出土遺物の多くは、周辺住居跡の覆土中にあったものが、後世の耕作に伴って遺構外へと移動したものと考えられる。特に多くの遺物が出土しているのは、K23・L30・O33・O34・O38グリッドである。L30を除くグリッドは竪穴住居跡の集中する部分、L30グリッドはSD-102・106溝状遺構が位置していることから、多くの遺物が遺構外でも確認されたものと考えられる。



第307図 遺構外出土遺物

第112表 遺構外出土遺物観察表

NO. 種類 器種	法量 (cm・g)	成形方法 特徴／残存状態	胎土／焼成／色調	出土位置 ／注記
307-1 土師器 ミニチュア土器	高 (2.2)	手捏ね成形 (内) 弱いユビナデ (外) 粗いナデ (残) 底 8/8	白色粒子やや多・雲母微 良 5YR5/4 にぶい赤褐	L33
307-2 土師器 手捏ね土器	口 7.0 底 6.0 高 3.2	手捏ね成形 (内) 強いユビナデ (外) 弱いナデ 完存	砂粒やや多 良 5YR4/6 褐	I29
307-3 土師器 壊	口 (20.0) 高 6.8	(内) 口ヨコナデ体放射状ミガキ (3本1組) (外) 口ヨコナデ体上半指オサエ下半ヘラケズリ 内面あばた状の剥離 (残) 4/8	白色粒子・砂粒多・雲母や や多 良 5YR4/6 赤褐	J28
307-4 須恵器 壊	口 (10.8) 底 (7.4)	内外面ともロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ 底部と体部の境目に段有り (残) 2/8	白色粒子多・砂礫少 良 N5/ 灰	K32
307-5 須恵器 高壊	脚部端 (8.6) 高 (5.1)	内外面ともロクロナデ 内面に輪積痕 (残) 7/8	白色粒子・雲母やや多 やや良 5Y4/1 灰	N40 確認面
307-6 石製品 砥石	長 5.8 幅 5.9 厚 2.1 重 104.05	実測図表面と両側面の三面を使用。裏面は剥離 している。表面に刃潰し痕あり。	10YR6/2 オリーブ灰 泥岩?	J28
307-7 石製品 砥石	長 7.4 幅 4.9 厚 2.1 重 124.33	実測図表・裏面、左側面と右側面の一部の4面 使用。全体的に摩滅している。	7.5YR6/4 にぶい橙 泥岩?	J27
307-8 石製品 有孔剥片	長 4.4 幅 2.8 厚 0.4 重 7.17	表・裏とも摺離に沿った剥離面 上端に礫表面残る 調整研磨無し 孔は両面穿孔で、回転させながら打ち込みか?	粘板岩? 7.5YR4/1 褐灰	J28

第3章 発見された遺構と遺物

第113表 遺構出土破片数一覧表

	土師器			須恵器				その他	備考
	甕	壺	その他	甕	壺	蓋	その他		
H26 確認面			小片 11						
I24	14			1					
I24 トレンチ	60	8							
I26・27	50	8	支脚 1	1	1			陶器 2	
I27	24	6			2				
I28	13	2						陶器 1	
I29	18	10		1				縄文 2	
I30	1		埴? 1						
J24	3								
J25	2								
J26	52	2	赤彩土器 1		3			砥石 1	
J28	30	1				小片 3	陶器 1・砥石 1・模造品 1		
J29	9				2				
J30	11	2		1					
J31	3								
J32	3								
J33	4								
K23	480	34	壺 15	16	6	9	壺 2		古墳前期多い
K24	55	6							
K25	50	8		3					
K26	75	5						陶器 1	
K27	30	5		1					
K28	31	6			3				
K29	11				2				
K30	20	2		3	1			陶器 1	
K31	8	1							
K32	7	1							
K33	27	1							
K34	2				1				
L23	10	3							
L24	45	8		2					
L30	250	8		10	3			砥石 1	
L31	95	5		7	1	1	壺 1		
L32	95	9		4	1	2	壺 1		
L33	50	5		2					大型破片多い
L34	10	3		1				常滑 1	
L35	4			1					
L36	30	7		4	1				
N39	3	1			1				
N40	12	1			1		高壺 1	陶器 1	
O33	500以上	19		5					
O34	500以上			2					
O35 確認面			2	1					
O37			2	4					
O38			5						
O38 確認面	500以上							陶器 1	
O40 確認面			8						
O41			小片 1						
P37	2	1						陶器 1	
P38	3								
P39		1							

図化可能な遺物は少なかったが（第307図）、J28 グリッドでは石製模造品の未製品と考えられる粘板岩の有孔剥片が出土している（第307図8）。